水上瀧太郎全集　十二巻

昭和十五年三月六日撮影

出張日記　その他

目次

出張日記

長岡行

清水トンネルを中心とする上越線全通記念博覧會が、八月二十一日から九月三十日迄長岡市で催される事になつたから、一度見に來ないかと同地の代理店六十九銀行から御招待を受けて、東北、北海道、北陸と督勵の旅を終へて歸京した藤田專務は留守中に山積した仕事と、財界變動に對し機宜の處置をとらねばならぬ責任とその他次から次と襲つて來る用事に縛られて、どうにも都合がつかなくなつたので、山下恒雄安東德男兩氏に隨つて私が推參する事になつた。私は擔任事務の關係で、久しく地方へ出張した事が無いから、旅珍しい心持で九月二十五日を待つた。

長岡には、數年前會社の野球部の連中が遠征を企てた時、彌次馬の一人としてついて行つた事がある。夜上野を發し、信濃路を經て翌朝長岡に着く十時間餘の旅であつた。しかも六十九銀行にひつぱたかれたばかりでなく、全長岡軍にも慘敗し、又長い夜汽車で退却した。負けて浮立た

ない心持の上から、殊更遠い旅のやうに思はれた。ところが、今度は僅か六時間弱で、朝九時に上野を立てば、午後三時前には到着する。おまけに沿道の風景頗るよく、窓から首を出して秋の氣配の既に深い溪川を見下してゐると、何時迄たつてもあきが來ないのであつた。

上越線は三千六百萬圓の巨費と十四年の歳月を費して完成したもので、トンネル工事の爲には六十餘人の犧牲者を出してゐる。トンネルの口に殉職碑を見た時は、氣樂な旅をしては濟まないやうな心持を感じたが、雄大なる自然と、それを征服した人工の力は忽ちそんな感傷癖を吹飛ばしてしまつた。

途中の風景の中で殊に面白いと思つたのは岡の上に町のある沼田で、はつきりした線と、立體感の強い展望は、近代風景畫家の喜ぶものであらう。奧利根の溪流に沿つて溫泉が澤山ある。つい近頃迄都人士の多く遊ばない原始的のものだつたに違ひないが、上越線の開通に多大の期待をかけて、あちらこちらに堂々たる旅館がたちかけてゐる。供給過剩に陷りはしないか、果して引合ふか他人事ながら心許なくおもはれた。

淸水峠の景色は、トンネルを境にして、こちら側の方が谷が深く水が豐かですぐれてゐるが、向ふ側には冬のスキイ客を迎へる爲の美事なスロオプが用意され、遠い異國の情趣を想はせるも

らいでゐた。

のがあつた。高い丘の半腹の草を刈取つた滑かな斜面にちひさい木小舍(きごや)がたち、白い旗が風にゆらいでゐた。

途中の驛迄、長岡駐在の同僚村越重次郎氏が出迎へてくれ、三時少し前に長岡へ着いた。

こゝには六十九銀行の長部、鷲尾、近藤の各重役が待受けて下さつた。自動車で銀行に行き、長部、鷲尾兩重役の御案内で博覽會を見物した。鷲尾氏は協贊會長として博覽會開催には一方ならぬ盡力をされ、現に寸閑も無い方であるが、特に吾々の爲に先導して場内の説明をされた。市中は隅(くま)なく裝飾され、多年希望の上越線開通を記念する市民の心持が濃厚にあらはれてゐた。博覽會場で直(たゞち)に眼についたのは、場の眞中につくられた大きな池の中にたつ、生命保險會社協會寄贈の噴水塔である。協會の出資額はあまり多くなかつたが、一番人目をひく所をえらんで建てられたのは、恐らく鷲尾氏の御力であらうと推察する。物産の多い新潟縣の事とて、縣下の出品は充實してゐた。工藝品の如きは、もつとゆつくり見て廻り度かつたが、時間がなくて殘念だつた。

夕刻旗亭(きてい)長岡館に伴はれ、叮重な御馳走を受けた。又主として近藤氏の指揮により長岡の民謠小唄の類を次から次と聽かせて貰つた。

何處の土地でも同じ事で、なにがしの詩人の新作よりも、作者不詳のむかしからのものゝ方が

面白い。

▽お前だかア　左近の土堤で背中ぼんこにして豆の草取りやる

▽今宵もまただまされた　さくら林にわしをばひとり

▽盆だてがんに茄子の皮の雑炊だ　あんまり盛りつけられて　鼻のてここを焼いたいや

酌人連は博覽會の演藝場に出演してゐるので、ひどく疲れてゐる樣子だつたが、大變な勉強ぶりで、妙にたかぶつてすましてゐる東京の藝者と比べて甚だ感謝すべきものがあつた。もうひとつもうひとつと珍しい唄をきかせてくれるのであつたが、あまり氣の毒なので、吾々の方から曲目をへらす事を提議した位だつた。

宿迄乘物で送つて下さるといふのを辭退し、夜の市中を散歩する方が勝手であると申出たところ、それなら自分が案內しようと近藤氏が先に立たれた。吾々の投宿した大野屋の主人大野甚松氏が二十四萬圓を投じて建設寄附した市の公會堂で御茶を頂き、夜更けて宿へ着いた。

越後長岡は、河井繼之助（かはゐつぐのすけ）の傳記によつて、幼時の私の頭に異常な感銘を與へた土地だ。こども心に、勇しくいさぎよく、しかも敗れた人々に對し、深い同情を寄せたものである。

殊に私は母が莊內（しやうない）酒井藩のもので、維新當時朝敵の汚名（をめい）をうけ、薩長に攻められ、おちぶれて

江戸へ出て來たといふ關係から、近親の者の口からその時代の悲話をきかされる事が多かつたので、河井繼之助の傳記は一層忘れ難いものとなつたのであらう。博文館出版の偉人傳記叢書の一巻で、主として小中學生に讀ませる程度のものであつたが、今でもその表紙や挿繪を記憶してゐる。寡を以て衆に抗し、屢々大軍を苦めた長岡人は、敗戰の苦い経驗から却つて力強くはね起きた。質實剛健、活動力にみちみちた此の市の氣概は、商工業方面に著しく發展を見せた。

翌日の朝の空は曇つてゐたが次第にあかるくなり、やがて青空となつた。銀行の片桐氏と會社の村越氏が誘ひに來て宿を出た。東京を立つ時は第一日に博覽會を見物し、二日目にはお別れして、山下安東兩氏は縣下の代理店訪問に向ひ、私は歸京する豫定だつたが、六十九銀行の方々の接待日程は吾々の想ひも及ばぬ御手厚いもので、こちらにとつては願つてもない幸ひであるから、遠慮無くお客顔をして御引廻しを願ふ事にした。西長岡驛を發し、關原で近藤氏が同乘され、多忙の一日を吾々の爲に完全に犧牲にして下さつた。近藤氏は專門の金融經濟方面の事ばかりでなく、多方面の知識を持つて居られるので、行く先々の説明が歴史、地理、詩歌に及び、吾々にとつて頗る有益な御話が多かつた。地藏堂で下車し、六十九銀行の寺泊地藏堂島崎三支店長を兼務される中島氏の御出迎をうけ、大河津分水工事の見學に赴いた。

この工事は信濃川の洪水氾濫による土砂流出を防ぎ、新潟港の水深維持を目的とし、分水路を開鑿して寺泊方面へ放流せしむるもので、二十一ヶ年繼續工費二千三百五十餘萬圓を支出して完成したが、百人近い犧牲者を出した難工事である。內務省土木出張所の方が案內して下さつて、事細かに說明を承つた。折惡く又曇りはじめ、兩岸の芒原に風の吹きつのる景色はすさまじいものであつた。

大河津分水を見終つた吾々は、二臺の自動車で寺泊に向ひ、銀行の支店に立寄り、冷泉爲兼卿佐渡配流の砌滯留中築造されたといふ庭の殘る聚感園を訪ひ、海岸の博覽會第二會場水族館を見物し、見晴らしのいゝ岡の上の溫泉旅館で中飯を頂き、遙かに島影を望みながら、哀切なる佐渡おけさを聽いた。

中島氏にお別れして、自動車は海岸を離れ、稻田の中を疾走しはじめた。私は見聞が狹く各地方の實景を知らないが、先年母が五十餘年前に立退いた鄕里鶴岡へ行つて見度いといふので同伴した時、夏も尙雪を頂く秀麗な山を背にし、海の氣配を感じる空の下に、廣くひらけた水田のうちつゞくのを見たが、今越後路の田野を比べて、規模の廣大なのに驚いた。莊內平野の美しい景色は之に比して著しく女性的であり、越後平野の景色は彼に比して甚しく男性的である。これは

美しいといふよりも、實質的の力を示す風景である。眼の前にみのつてゐる米はいふ迄もなく、織物、油、肥料、酒、紙、木材、薪炭、刄物類、魚類其他夥しい農產物工產物を包藏する一大平野は、單に詩的感懷を以て眺む可きものでは無いであらう。私は此の果てしの無い水田を見てゐるうちに、越後の國の實力に壓倒されるやうな氣持になつた。既に早稲は刈取られ、田の畔に植ゑてある樹々に丸太をかけ渡した稲架にづつしりとかけられ、中には早くも自宅へ運ばうと、馬の背に積み車に積み又田舟に積んでゐる者もあつた。この溝川に浮べた田舟に刈取つた稲を積んで曳いて行くのは、大層情趣の深い景色だつた。

しかし、それよりも私が深く感服したのは、かねて越後は美人の產地ときいてゐたが、田畑で働いてゐる男女とも目鼻立ちが整ひ、色白く髮黑く、關東地方の田圃で働く人々とは全く人種が違ふやうに思はれる事だつた。面長で、なか高で、きめが細かく、目がやさしい。それにつけておもひ出したのは、私共の本家には、昔から越後の娘達が入替り立替り奉公に來てゐて、私共も大變世話を燒かせたものだが、つひぞ美人らしいものにはぶつからなかつた。どうした譯でせうと質問したところ、それは頸城郡の人ではないか、南蒲原郡の三條が第一の美人の產地で、頸城郡はいけないといふのが定說ですと說明された。歸京後念の爲めきゝ合せて見たところ、果して

その娘達は頸城郡地方の産であつた。

彌彥の山容を目近く見る頃から、はら〳〵雨が降り出した。彌彥神社は先年燒失し、今のは伊東忠太博士の設計に成るものださうである。背後の樹木の多い山の姿が均齊美を發揮して、正面からのぞむ畫面がすぐれてゐた。

再び自動車は疾走しはじめた。西吉田を經て燕町に至り、六十九銀行支店を訪問し、東三條に出て、長時間世話になつた運轉手に別れ、汽車で新潟へ向つた。

新潟でも六十九銀行支店長大平氏副支配人風間氏及び會社の事務所主任葛城嘉平氏が待受け、小雨の中を直に新潟臨港會社に行き、社長中野四郎太氏の御案內で、會社經營の繫船岩壁、運輸交通土地開拓等の說明を伺ひ、港內を一巡した。新潟港は裏日本の關門として重要の地位を占め、北海道、沿海州、朝鮮を望み、水陸の便よく、此の河口にして更に多くの巨船を碇泊せしむる事が出來れば、一層の繁榮を期すべきで、殊に大河津分水工事完成後、港口の泥砂も少なく、三千噸級の船舶十隻を同時に繫留する事が出來るやうになつたさうだから、今後渠內の水深が豫定の通り深くなれば、市の繁榮は著しい事であらう。臨港會社の仕事も、此意味で頗る有意義であるが、素人眼にはたとへ分水工事竣工の今後と雖も、河口の泥砂を常に排除する努力と經費はすく

なくないやうに思はれた。

雨の日は早く暮れた。吾々は臨港會社を辭し、汽船で萬代橋の近く迄廻り、更に自動車で市中目貫の場所をめぐり、行形亭で晩餐を頂いた。この家と鍋茶屋の名は全國に知られてゐる。場所は市の端の方で、海岸の砂丘の内側の傾斜面を利用した松の多い庭に、あちこちに離室をしつらへた凝つたものであつたが、風雨がはげしくて、庭の景色は見るよしも無かつた。こゝでも私は酌人の顏に完全なる越後型を見た。おつとりしたおとなしづくりの顏だちと、ゆつたりと大きい姿體がよく揃つて、四五人一緒に踊つてゐると、どれがどれか區別がつかない程型にはまつてゐた。前夜の通り、手厚いおもてなしにあづかり、餘興もふんだんに拜見し、かねて噂に聞く新潟の樽たゝきも出た。

この夜は萬代橋畔のしのだといふのに宿をとつて下さつて、近藤氏も同宿された。近藤山下兩氏は烏鷺をたゝかはして居られたが、私は先に御免かうむつて寢てしまつたから勝負の結果は知らない。意地の惡い人は山下さんにおきゝなさい。

夜中烈しい風雨だつたが朝は雲が切れた。水と橋と柳の多い市中を乘廻し、新潟の六十九銀行支店の方や葛城氏に送られ、再び長岡に引返し、博覽會場内演藝館の餘興を見た。六十九銀行の

方々は、この夜打上る三尺玉の花火を見物して行けと御勸め下さつたが、天氣もあやしく、又既に豫定よりも長く御厄介になつたので、歸京する事に決した。午後二時四十五分、皆さんの御見送をうけ、御土産を頂戴して歸途に着いた。

――「社報」昭和六年十月號

伊東――京都

六月十日　埼玉明保會が伊豆伊東で開かれる事になり、營業主事同助役と共に私も御招きをうけて同行の事になつた。一行三十四人、東京を立ち熱海へ着く。亡父は此地が好きだつたと見えて、休息の日をこゝで過す事が多く、私も幼少の時から度々兩親に伴はれて來たものである。恐らく私が宿屋へ泊つたのは、こゝの鈴木といふ家が最初であらう。四歳か五歳の年の事だが、宿屋の庭の黄橙の實の日に光つてゐたのと、中庭の池に鯉や金魚の游いでゐた景色を、今でもはつきり覺えてゐる。それなのに、大正八年の二月、父は鈴木旅館の別館で入湯中、雪崩の爲に浴室の天井の厚硝子が碎け、大腿部を深く剔られてあやふく即死せんとし、爾來六年間病床を離れる事が出來ず、晩年を苦痛のうちに終つた。當時私は大阪支店詰だつたが、その晩大阪朝日新聞社から電話で災難の知らせをうけ、お暇を貰つて東上したが、私が宿へ着いた時は、醫師が前日の

繃帯を解き、大きな傷口に拳をつつ込んで、血の塊をつかみ出してゐるところだつた。小人の心だとは思ふが、その後私は熱海へ行く事を好まなくなつた。今日もその鈴木別館の前を過ぎて、こゝろよからざる感慨を止めかねた。

熱海の外觀は一變した。魚見崎の勝景も人力の爲に容赦なく破壞された。しかし、その破壞のおかげで、坦々たる道路を自動車は伊東迄疾驅した。熱海も十四五年目だが、伊東は二十四五年目だ。當時流行した水彩畫を描く爲に友人と二人で大島へ行き、いざ歸らうとなると連日の風雨に廻航船は來ず、乏しい旅費は殘り少なくなり、やむを得ず荒天を冒して和船に乘つた。勿論外に客は無く、たゞ一頭の小牛が同乘したが、こいつが船暈に苦んであばれ出し、船はその爲に傾斜して波浪は屢々舷側を越え、吾々は牛の糞尿と潮水とを滿身に浴び、辛うじて伊東へ着いた。風體が惡いので少しも歡迎されなかつたが、伊東館といふのに泊めて貰つた。これが後に明治生命の代理店を引受け、更にその後をうけて今日の大を成したのが現在の河野氏である。河野氏は一行の爲に行屆いた御世話をして下さつた。

旅宿東京館の裏山に横濱支店長飯村氏の別莊があるが、これも河野氏の御世話で地所を買ひ、家屋の設計迄も委任したのださうである。飯村氏はこの別莊の外にも地所を持つてゐて、それが

偶々鐵道の驛の附近といふ廻合せになつたので、幾十倍かの値上りだといふ話だつた。しかも愉快な事には、この地所買入の資金は、氏が外務に從事中この地で宣傳募集を行ひ、好成績を擧げた時の報酬だといふのである。吾々は此の心がけのよい同僚の福運にあやからうといふので、留守番の人に雨戸をあけて貰ひ、絕佳の眺望をほしいまゝにした。

一浴後一同廣間に着席、幹事の御挨拶の後で安東主事から六、七兩月に亙る十億達成促進期成會についての說明があり、私からも共々御盡力を御願ひした。

六月十一日　河野氏の御勸めで、三艘の船に分乘し、釣を試みた。ちひさい鯖の子がうようよ游いでゐるのが目に見えて、しかもなかなか針にはかゝらない。それでも生來氣短で、釣竿を手にした事の無い私にも三尾は釣れたのだから、この釣が如何なるものか御察しを願ひ度い。

明保會は午前中に解散し、あとは隨意名所見物をする事になつたが私共會社のものは御先に御免からむつて歸途についた。明保會は各地にあるが、私は東京に於けるものにたつた一回出席した丈で、東京を離れての會合はこれが最初だつた。無愛想で、辭令に乏しく、經驗の淺い身を顧みて、ひそかにびくびくしてゐたが、事實はまことに愉快だつた。他の會の事は知らないが埼玉明保會は、年一回の行樂を機として親睦をはかる事を主たる目的とするなごやかな會合であつた。

六月十五日　大阪支店管内泉州明保會の御招きをうけて、朝の特急で立ち夕刻梅田に着くと直ぐに自動車で、堺の一力樓へかけつけた。代理店の方々と受持の社員合せて二十餘人、朝のうちは船を出して投網を試み、午後は會議を開き、私は恰も夜の宴會のはじまらうといふところへ着いた。幹事の御挨拶に答へて、十億達成促進の事を御願ひしたが、埼玉明保會の時と同じくこゝでも代理店の方々は少しもうるさい顔をされず、欣然として援助を誓はれたのは力強く思ふ事だつた。私は大正六年から八年迄、足かけ三年大阪支店詰だつたが、當時の支店長奥村英夫氏は堺の濱を好み、この一力樓へ客を招いたり、支店の忘年會を開いたりしたので、私にも馴染の家だつた。その頃に比べて、堺市が著しく發展を遂げた事は、市街の外觀からも觀取する事が出來た。海を見晴らす大廣間の天井いつぱいに描いた群鴉の圖も見覺えがある。無器用で、端唄ひとつうたへない私は、宴會の興をそへるうでの無いのを氣にしながら、自分では十分御馳走を頂いた。投網の獲物の鯔も膳にのぼつた。堂ビル・ホテルに泊る。

六月十六日　朝九時に支店へ出向いたが、店長醫長はじめ既に忙しく事務を執つてゐた。昔私の机を据ゑてゐた事務室は、その後多少の改造を加へ、少しはあかるくなつたが、仕事が殖え人が殖えたので、一層狹く感じられた。しかし室内は整然としてゐて、私共の頃とは面目を一變し

た。今日は市内の外野の人達の研究會があるので、私も傍聽させて貰つた。山名氏の十億達成計畫に對する注意說明があり、私も一言々葉をそへたが、戰士はいづれも期するところあるもの丶如く、頗る緊張してゐた。この日集つたのが全部ではないだらうが、それにしても、この大都會に募集網を張るには、人數不足の感が強い。これは今にはじまつた事でなく、又大阪のみの事でも無く、明治生命多年の惱みであるから、共々に對策を考究しなければならない。

午後は神戸支店訪問の豫定だつたが、その前に特に希望して阪急電鐵經營のデパアトの大衆食堂に案內して貰つた。これは豫て小林一三氏の御自慢を拜聽し、大阪へ來たら是非一度ためして見ろと云はれてゐたのであつた。

七階に和食堂、八階に洋食堂があつて、見渡す限りの廣さだが、何れも完全に滿員だつた。私共は八階の方へ行き、ビフステーキ二十錢、米飯に福神漬をそへたのが五錢、冷珈琲五錢、合計三十錢で滿腹した。品書を見ると、一品二十錢が最高で、十五錢程度が一地多い。山名氏の談によれば、ライス・オンリイといふ註文をして、それにソオスをかけて喰ふのもゐるといふ。しかも此のライス・オンリイをいやがらず、さういふ客には飯も漬物もかへつて多く盛つて出すといふ話だ。いかにも小林式で感服した。この食堂に雲集する人は、和食堂の方には婦人が多く、洋

食堂の方には學生、勤人、商店員が多かつた。安くて、多量にあり、品數が揃つてゐるので、いづれも滿足愉快の面もちで食事をしてゐて、明朗極まりなき風景があつた。私も若し大阪につとめるならば、毎日の晝はこゝでしたゝめようと思つた。年若い女の子の、粗末ながらも清楚な姿で、混雜の中を巧妙迅速に行ふサアヴイスも滿點だつた。食堂には呼鈴が置いてあるが、それを鳴らされるのは恥辱と思へといふ上司の命令ださうである。何處迄も小林式で貫いてゐる。

神戸の店は室借で、西向の暑い事務室は能率にも影響がありさうだ。こゝでも山名氏から十億達成についての話があり、私も亦同じ事を繰返した。この店の人は年齢が若く、經驗に於ては多少不足かも知れないが、素養のある元氣のいゝ人がゐるから、將來の發達を期待する樂みは十分にある。

夜は山名氏の肝入で、私の舊友で且明治生命の後援をしてくれる二三の人と晩餐を共にした。

六月十七日　朝、山名氏がホテル迄來てくれて、いつしよに國民會館の建築を見に行つた。武藤山治氏が私財を投じて建てたもので、設計者は目下普請中の明治生命本店のと同じく、岡田信一郎、同捷五郎氏兄弟である。二三日前に開館式が行はれたばかりで、あとかたづけも濟んでゐなかつたが、講堂のあかるく氣持のよいのには何より感心した。何分明治のとは規模が違ふので、

直接參考となるべき事は少なかつたけれど、私としては新しい知識を得た事で滿足した。

　大阪には知人も多く、兄もゐるので、各方面に一々顏を出して置きたかつたが、時間が無いので山名氏に別れ、新京阪電鐵で京都へ行く。甚だ迂濶な話だが、私はこの晩都ホテルで催される會合を、支店主催のものとばかり思つてゐた。ところがさうではなくて、大津(おほつ)募集事務所が去四月の武市會長誕生月記念募集に優績を擧げ、會長杯を獲得した祝賀の宴で、同事務所主任十河三郎氏を主人とするものだつた。招かれたのは、支店長、醫員、內勤員、他の事務所主任、大津事務所員等で、非常なる盛會であつた。殘念なのは、取締役會の爲に上京した武市會長が未だ歸洛せず、出席出來なかつた事である。從來各種の催の度每に、本支店から寄附をする慣例があるやうだが、十河氏は一切之を謝絕し、どうか自分の喜びをその儘うけとつてくれといふのであつた。氏は入社後十年、その間募集に從事して優良なる成績を續け、殊に事務の才能に秀で、先年事務所主任となつてからも、部下の統率頗るよしと聞いてゐたが、この晩の會合の光景を見ても、所員との間は極めて溫(あたゝか)みあり、且規律を重(おもん)ずる風の著しいのを感じた。食後、私は汽車に乘る迄の時間を特にホテルの露臺で費させて貰ふ事にし、夕立の後の京都の山々が靜かに暮れてゆく中に、燈火のかがやくのを見ながら涼風に吹かれ飽く事を知らなかつた。會社に入社して以來、會社關

係の大小各種の會合に出席したが、今宵の會合程私を喜ばせたものは無かつた。大津事務所は、この月も、この次の月も優績をつゞけるであらう。

午後九時四十五分京都をたち、歸東。

——「社報」昭和八年六月號

岡山――中村

七月五日　午後八時二十五分東京發、直に寢る。私は平生極めて多忙なので、稀に汽車に乘ると休息を心がけ、神經をやすめる爲に出來る丈睡眠をとる事にしてゐる。又汽車の中程熟睡する事はない。自宅では、夜中でもどんな用事が起きるか、電話がかゝるか、電報が來るか、泥棒が入るか、火事が出るか、足手まとひがあり、何彼と心配だが、いつたん汽車に乘つてしまひ列車事故は天災とあきらめれば、あとは何ものにも煩はされないから、實に悠々と眠る事が出來る。車體の動搖も搖籠の心地がする。この晩も寢過る程眠つた。

七月六日　汽車が岡山近くへ入ると風景は一變する。なだらかな山々の間に花園のやうに美しい田畑があり、人家の白壁は目を射るばかり日光を反射し、靜かに柔かに豐かな景色だ。凡そ貧しい家が見えず、これでどうして保險が出來ないのか、不思議な位だ。

正午近く岡山着。驛の食堂で晝食を濟ませ、直に支店へ行く。六月の締切で且全員召集の日だから、最後の成績を持參する戰士と之を受附ける內勤社員と、雙方とも汗だらけで、多忙を極めて居た。副長はのべつにそろばんを彈いては、時々支店長に內報をもたらす。

最後に、七拾萬圓ですと喜悅に躍る聲で報告すると、忽ち本社へ電報が打たれた。多年不振をつゞけた此の店も、近來士氣大に振ひ、四月の會長誕生月には全國第一の優績を擧げ、はじめて七拾萬圓以上の記錄を止めたが、今又重ねて優績をあげたのだ。店長の喜びはいふ迄もなく、戰士一同の面上に、難事を成し遂げた滿足が光り輝いてゐた。締切が濟んだので、二階の廣間で研究會が開かれ、支店全員の顏が揃つた。坂本支店長の六月成績の報告及び七月の戰鬪計畫に闢する話の後で、私も少時所感を述べた。夕刻から公園の洋風料亭で晩餐會が催されるのであつたが、私にははじめての土地なので見物旁々會場迄步くことにし、店長醫長並に宮崎舞原兩氏に案內を求めた。舊城趾の裏門にあたるのが國寶に指定されてゐるが、その古び朽ちた門を入ると、とつつきが宮崎氏を主任とする市內事務所で、その隣が多年岡山で覇を唱へてゐる舞原氏の住宅である。そのあたりには昔の面影を偲ぶ奧床しい景色が殘存し、內堀には蓮が開花の近きを想はせ、水鳥は悠々と泳ぎ廻つてゐる。閑靜な一廓に兩雄門をつらねて仲よく住んで居られるのは羨しい

事である。公園には既に他の諸君が待つて居られたので、直に記念撮影をし、晩餐會に臨んだ。宴席で意外に思つたのは、坂本さんが杯を手にしないのである。氏は聞ゆる酒豪で、徹宵痛飲し、卒直にいへば些か始末の悪い呑兵衛だつた。それが仕事の上にもよくない影響を與へ、體の上にも毒だと悟り、先頃斷然禁酒を誓ひ、誓ひは完全に守られてゐるといふ。それかあらぬか氏の健康はすぐれ、又偶然の事であらうが、支店の成績は俄然向上した。席上各事務所主任の挨拶や氣焔を聞いたが、最後に一人矗と立上つたのは、つい數日前入社の確定した横山氏で、未だ白面の青年だが、美音をはり上げて安來節をうたひ出した。聲がいゝばかりでなく、節廻しも頗るうまい。成程、頼まれないでもうたひたがる筈だと思つてゐると、ひとくさりおしまひになつて更に又うたひ出した。すると同君の屬してゐる福山事務所の主任齋藤達吉氏が、もうよいもうよいと制止の聲をかけた。ところが此の新參の勇士は手を振つて曰く、先輩諸氏の御話によれば保險募集には押が必要だといふ事だから、一度ではやめません、どうしてももう一度うたはせて貰ひます。いひ終ると一段聲を張上げてうたひ出した。今度は安來節の中にどど逸、博多、追分、米山をとり入れ、滿場の耳を奪つてしまつた。この人は牛で名高い神石の産で、有力なる代理店候補者を引つれて入社志望を申出で、忽ち一萬數千圓の成績を擧げたさうである。坂本さんは、代理

店附の社員採用ははじめてだと頗る悦に入つてゐたが、申分なき押の強さ、態度の沈着に加へてあふるゝばかりの機智を藏してゐる若武者は、やがて指折の闘士となるであらう。この一文を讀む方は、横山賴美氏の名を記憶し、月々の成績表に特別の注意を拂はれ度い。

月のよい夜で、公園の木立の向ふに遠い山の姿が見え、美しい眺であつたが、この地方特有の夕凪で蒸暑く、東京以來の汗は遂に干く間も無かつた。連日の奮闘に疲れた諸君には早く歸宅して、家族と共に樂しく休息をやられ度いと別辭を殘してわかれた。

私は店長と共に市内特約店を訪問し、更に目拔の大通を散歩して、支店へ戻つた。締切殘務に忙殺されてゐる内勤員は全部居殘りで、十一時迄寸閑もなく働いて居た。

はじめての土地だから、一泊してゆつくり觀察し度かつたが、何分明日の名古屋の方が先口なので、どうしても出立しなければならない。ところが岡山は東京下關の便利を第一とする鐵道時間割の犧牲驛で頗る都合が惡く、急行は深更一時過である。他の人々にはお見送を辭退したが、店長副長醫長は最後迄居てくれ、又先方にしてみれば遙々やつて來たものを突放すわけにもゆかないであらうが、一時過迄おつきあひを願ふのは心苦しいから十一時二十七分の京都行普通列車に乘る事にきめた。この汽車には寢臺はなく、座席の上にまるくなり、鞄に足をのせて寢たが、

夜中蚊に攻められて熟睡出來なかつた。

七月七日　朝早く京都に着き、驛の待合室で二時間待ち、急行に乘つて名古屋へ向ふ。宿は萬平ホテルにきめ、汗と埃で腐つたやうなシャツを脱ぎ、入浴した時の氣持は素晴らしかつた。しばらく露臺に出て市街を眺めたが、支店では待兼ねてゐるに違ひないから、とり戻した元氣でかけつける。玄關つき當り正面の壁に壹百四拾貳萬圓と大書した紙が貼附けてあつた。やつたなと思つて事務室へ入ると、上原支店長はじめ一同滿悦の態で出迎へてくれた。直に二階の研究會場に案内され、全員と顔合せをした。上原さんは會の進行中愉快といふ言葉を幾度繰返したかわからない。私もその言葉を借りて所感の冒頭に用ひた。この會合の席上に本社からの成績概算電報が飛込み、又岡山支店から名古屋支店へ宛てゝ互に責任を突破した祝電が來た。式の終りに、支店長から優績者に記念賞を贈呈し、十萬圓以上の成績を擧げた加藤義雄氏が大カップを受領した。時間は正午を遙かに過ぎたが、公會堂で午餐會があり、之亦頗る愉快だつた。

會が終つて、上原支店長高岡醫長と圓タクに乘り、市中を走りはじめたが間もなく此處が中事務所だと指さゝれたので、それならついでに訪問しようと、大須ビル三階へ上つた。

このビルの階下は酒場で、晝間からジャズ・レコードが鳴響いてゐたが、上にあがつて見ると、

事務所は整然としてゐて、吾々より先に公會堂を引上げた所員は、名和所長を中心にして仕事をはじめてゐた。中には電話で見込客を勸說してゐる人もあつた。この事務所には丹青の技をよくする篠田萬次郎氏がゐるので、壁間には同氏の作品が掲げられその隣には所長の筆であらう、左の如き心得が書いてあつた。

優績ハ心意氣一ツ

一、責任觀念强キ者ハ必ズ成功ス
二、絕對安全有利ナ(損失ナキ)幸福投資ヲ推奬スルニ憚カルナ
三、飽クマデ人格的ニ且ツ理情ニ富ミ說破セヨ
四、自己ノ特長ヲ發揮シ獨創的募集ノ計劃ヲ樹テ努力邁進セヨ
五、思ヒタツタ訪問ハ今直グニ
六、一日十軒以上ヲ訪ヒ五人會見主義實行
七、力足ラザル時ハ主任又ハ先輩ニ或先方ノ緣故者ヲ發見シ援助ヲ受ケヨ
八、決シテ自己ノ募集能力ヲ限定スルナ(雨滴石ヲ穿ツ式デヤレ)
九、見込客ハ無限ナリ、足ヲ運ブ前ニ頭ヲ働カシメヨ近親知己友人既契約者等ノ紹介ヲ受ケ

無縁故ノ方面へ及ボセ

十、不成績ノ逆運時ニ處スルハ沈毅ヲ以テ悶エザルニ在リ

十一、勇氣ヲ出セ不景氣ナ顔スルナ

十二、時、所、事の識別ト應用ニ留意セヨ(臨機應變)

十三、多々益々辨ズル底ノ頭ヲ作レ

十四、一日ノ行動ニ對シ自問自答セヨ必ズ反省スベキ個所ヲ發見セン

この事務所は六月の優勝を獲得し、締切當日所員はお揃ひのネクタイで意氣揚々と支店へ乘込んで來たと上原さんが話す。成程、みんな黒い蝶型のネクタイを結んでゐる。これがダアスで無いと賣らないといふので無駄が出ましたと名和さんは笑つた。そんなら殘つてゐるのがありますか、あるなら一つ下さいと私は即座に申出て、美事に獲得した。東京を立つ前に蝶型のを買ひにゆくひまがなく、ほしいと思ひつゝ其儘になつてゐたのを、はからず此處で手に入れた。一寸募集のうでの冴えを見せた形だつた。

七月八日 朝早く上原さんといつしよに市内事務所を訪問した。今日は所員一同疲れを休め、下呂温泉で催される名古屋支店管内全代理店全社員の會合に出席の爲仕事は休みだが、東事務所

には主任池田信吉氏が、綺麗に掃除の行屆いた事務室に、給仕の少年と共にでばつてゐた。この家は獨立家屋で一寸仲買店の店構に似、昨日訪問した中事務所とは全く趣を異にしてゐる。池田氏はもと本社の內勤をして居られたので、私には馴染が深い。實は、氏が支店で外務に從事するときゝ、ひそかに前途をあやぶんだのであつたが、氏獨特のまけじ魂は遂に頑張通して、今日會社有數の事務所をあづかる身となつた。こゝの壁には外交の祕訣が書きつらねてある。

一、外交ノ秘訣ハ眞心ト熱心ニアリ其他ノ事ハ之ヲ現ハス方法ト知ルベシ
二、先ヅ取次ノ女中ヤ書生ノ好感ヲ得ヨ取次ノ心ヲ捉ヘル訪問者ハヨク主人ノ心ヲツカム
三、電話ハ聲ダケ聞エルモノト思フ可ラズ其聲ヲ通ジテ態度ナリ人柄ナリガヨク判ルモノダ
四、外交ハ相手ノ利益ヤ便宜ヲ考ヘ其中ニテ己ノ希望モ達スル樣工夫說得スベシ
五、豫メ相手ノ人トナリニツイテヨク調ベ其人ニ最モ適當ナ態度方法ヲ採ルベシ
六、健康サウナ笑顏感ジノイイ服裝落ツイタ態度ハ外交ノ成功ト知ルベシ
七、一度ノ失望二度ノ諦メ三度ノ絕望ハ止メ五度ヤ十度ノ捨石ハ必要
八、外交ノ經過結末ヲ記帳シ一寸ノ事モ放任スレバトンダ不利益不信用ヲ招ク
九、俺ガ行ケバ大丈夫必ズ成功シテ見セルト云フ自信ヲ以テ出掛ケヨ又豫メソレダケノ工夫

セヨ

十、外交ノ成否ハ平時ニアリイザト云フ時ニ書ク長文ノ手紙ヨリ旅行先カラサリ氣ナク送ツタ繪葉書ガ遙カニモノヲ云フ事ガアル

十一、理窟攻メヨリハ人情攻メ大手カラデハ落チナイ人ガ搦手カラダト案外ニモロク落チルコトアリ

十二、アノ人ハ何カシラ利益ヲ持ツテ來テクレル少クトモ明ルサヲ持ツテ來テ呉レルト思ハレル様デアリタイ

十三、朗カナ調子デ出掛ケヨ同一人ガ同一ノコトヲ持出シテモ其日ノ態度ヤ音聲デ成功不成功ガ岐レル

十四、手土産ニハ深甚ノ注意ガ肝要金ヲツカツテ却テ反感ヲ持タレルコト往々ニシテアリ

十五、相手ノ人ヲ尊敬セヨ先方カラ馬鹿ニサレテモ失敗ハ少イガ先方ヲ馬鹿ニシテカカルト飛ンダコトニナル

こゝを辭して西事務所へ行く。近藤ビルの階上にあつて、主任は人生經験の深い安藤源治氏で、所員と若い婦人と三人で出迎へられた。婦人は外交に從事するのではなく、電話の取次やお茶の

観念的な字句をつらねず、何處で手に入れたのか既成品のポスタアを掲げてゐた。

應接三則

一、風采デ區別ヲツケルナ

二、笑顔デ迎ヘ笑顔デ送レ

三、腰ハ低ク言葉ハ叮寧

三事務所夫々の特色風格があり、彼之おもひ比べて興味が深かつた。ひるは上原さんに所望して名物きしめんの御馳走になつた。

午後名岐鐵道柳橋驛から百數十人の一行が出立した。炎暑の市中を出離れると車窓から烈しい風が吹込んで、帽子を飛ばす程だつた。

犬山を過ぎ鵜沼から高山線に聯絡し、日本ラインの山姿水容を窓近く見てゆくのであるが、殘念な事には機關車の煤煙が甚しく、絕えず石つぶてを打つやうに降りかゝるので、折角の眺望と涼風を遮切つて窓をしめなければならなかつた。第一は經費の問題だが、觀光地帶は一日も早く電化しなければ駄目だ。もう一つ車中の不愉快は、名岐鐵道の所謂サアヴイスで、若い乘務員が給仕をする役目らしい。比較的若い名和池田兩主任とは違つて、世故に長じた年配の主任は、

客をあきさせまい爲に、沿道の名所を紹介するのだが、それがあくどく脱線し、屢々エロがかつた事を口にして得々たる事である。車が中山七里の絶勝にさしかゝる頃、思ひもかけない日照雨が來た。間もなくそれも止み、晴れわたつた空は山と山の間に高く、水は愈々碧く、二時間の後下呂に着いた。驛前で記念の撮影をし、向ふの山腹に見える湯之島館迄自動車で運ばれた。下呂は昔から此の地方では聞えた溫泉だつたさうだが、他國の者は殆んど知らなかつた。それが今日全國に名を賣つたのは湯之島館の出現以來で「日本に名所が又一つ」の宣傳標語をその儘に實現してしまつた。昭和六年十一月の開業だから未だ一年半にしかならないのだが、一切の計畫經營に任じてゐる支配人久保太四郎氏の頭腦が此の驚く可き仕事を短時日に完成したのである。事業は人にありといふ事をつくづく感じた。之が爲に下呂は俄に繁昌し、木の香新しい家が立並び、鉋の音はしきりに聞える。湯之島館の在るところは檜山で、蟲々と伸びた檜は室々の欄干に近く、その木立の間から、谷をへだてた向側の山が見え、飛彈川が見え、川添の下呂の町が見える。山にも河原にも岩つゝじが咲き、森には蜩がなき、川には河鹿がなきしきる。私は豫て噂にきゝ突然出現して天下を奪つた遣口から、又例の車中のサアヴイス子が聲を大にして、さあ皆さま愈々エロ溫泉に到着致しましたなどゝいふ位なので、湯之島館も風儀の惡い、低劣なものではないか

と惧れてゐたが、來て見ると全くさういふ風はなく、極めて質實な經營振であつた。湯はこの河中に湧くのを引上げ、人工的に熱度を加へたものださうだが、分量は豊富で、無色透明なのが氣持がよかつた。もとより大衆本位で風雅をねらつてはゐないから、氣取つた好みの客には向かないかもしれないが、同時に氣取の無い、くつろいだ氣分がゆたかで、山出しの女中の氣の利かないのも、いやみがなくてよかつた。數ある浴室の外に、舞踏室、食堂、酒場、音樂室、撞球場、讀書室などもあり、娯樂器具が澤山備へてあつた。一行は入浴後大廣間に集まり、幹事の挨拶の後で支店長と私も交々簡單な挨拶を述べ、直に宴會になつた。

七月九日　早曉起床。昨日宿に着く前から、若し時間が許すならば、折角こゝ迄來たのだから、飛彈の別天地高山を視察し度いと云つてゐたところ、明保會には同地の代理店川上辰彦氏も來て居られ、自分が案内するから是非來てくれといはれ、湯之島館の久保氏も、說明役に同行しようといはれるので、宴會の席上代理店の方々にも御斷りして、一足先に出立の事にした。會の方は朝食後名古屋高商の宮田教授の現下經濟問題に關する講演があり、それが濟むと任意解散の筈だつた。久保氏はこの地方の人ではないのだが、ここに骨を埋める覺悟で湯之島館の發展を策し、下呂溫泉を天下に紹介すると共に飛彈の國の研究に深く興味を寄せ、既に著書もあり、この地方

の地理歴史産物美術はいふ迄もなく、口碑傳說民謠方言にも精通して居られるので、沿道の史蹟名勝の說明は頗る面白く、その上地元の川上氏が趣味の人で、且お話上手なので、二時間の自動車も少しもあきなかつた。

　自動車が山腹を幾曲して分水嶺に達すると、眼下には高山の町が展開された。自分の無知識をさらけ出すやうであるが、私は飛彈の高山といふと山々に狹く圍まれた小盆地で、すり鉢のやうな傾斜面に段々を成してゐる町とばかり想像してゐたが、來て見ると山々に圍まれてはゐるものゝ素晴らしく廣い平野で、坦々たる道路を自動車が疾走するのであつた。川上氏の御宅でお茶を頂き、御宅のつくりを見せて頂き度いと所望して、お臺所迄も侵入し、殘る隈なく拜見した。折角の事だからゆつくりして行つてくれといふ御勸めではあつたが、時間が無いので辭退し、國分寺、物產館、民藝の工房山彦洞等を廻り、洲岬といふ料亭で晝食になつた。山奥の陰氣なわびしい町だと想つてゐたのが間違ひで京都の趣そのまゝの古雅な風趣にびつくりしたが、この料亭に來て私の驚は最高潮に達した。鴨川になぞらへてみたい川にかゝる橋の袂にあつて、家の前にも小流があり、京都と同じやうに木材の生地を出さず黑く塗つた家の入口に、水あさぎに白く家號を染抜いた暖簾のかゝつてゐるのをくぐると、向ふまでつきぬけるやうな土間で、左手には臺所

があり、右手の部屋には大きな爐が切つてあつて形の面白い自在鉤がかゝつてゐた。隨分古い家らしいが、吾々の通されたのは建增の新座敷で、瀟灑たる廣間だつた。こんな立派な料理屋が、どうしてこの山の上で立ちゆくのか不思議に思はれる位だ。春慶塗のお膳が運ばれ、川魚と野菜の數々の料理が出て、恐く感服した。その晩は名古屋で二三の舊友を招く約束だつたが、恐らく名古屋には之丈の料理はあるまいと、上原さんと共に感嘆した。この家の料理をもう一度味はふ爲にも、私は必ず再遊する事を誓つた。食事が終ると直に立たなければならなかつた。川上氏にお別れして、自動車は先刻來た道を、逆に疾走し、下呂驛で岐阜方面へ行く汽車をつかまへた。

名古屋はさぞかし暑いだらうと思つたが、歸路犬山近くで夕立があり、涼風がたつた爲か、市中も案外涼しかつた。ホテルで一浴し、得月樓へ行く。この家の主人寺田榮一君は私の年來の友人で、今晩も心を盡した獻立だつた。米穀取引所理事高橋正彥、東邦電力專務海東要造、東邦瓦斯取締役永瀧松之助の三氏を客とし、上原さんと私とが主人で歡談した。

七月十日　朝の特急で歸東。夕五時東京着。歸宅してみると、九州に住む姉夫婦が上京したのを機會に、きやうだい一同母の家に集まる事になつてゐるといふので、直にかけつけ、夕食を共にし、その場から上野へ向ひ、十時半青森行に乘る。例の如く、直に寢てしまふ。

七月十一日　朝早く目がさめたので、車内の誰よりも早く洗面をすませ、衣服を着かへ、はじめて見る常磐線の風光を窓から眺めた。青々と稲葉の風になびいてゐた岡山地方の花園のやうな田園とは違つて、土地の廣い爲もあるが耕作はあらけづりだし、水に惠まれない爲、宮城と福島の接する邊では植つけの出來ない所もあつた。

午前七時仙臺着。朝飯ぬきで支店へ赴く。晝食には近所の精養軒といふ家につれて行かれたが、食器は不潔、女の子の給仕は氣がきかずのろのろしてゐて駄目だつた。聞けば、ちつとも繁昌しないといふ。不勉強だから繁昌しないのか、繁昌しないから勉強心がなくなつたのか、いづれにしても惰性で動いてゐるばかりで少しも氣が籠つてゐない。何の仕事でもものぐさで新計畫がなくては繁昌するわけがない。他人事ではないと思ふ。

午後二時闗支店長と共に仙臺をたち、相馬中村へ赴く。今度の出張の目的の福島縣明保會の開催地である。恰も次の日は有名な野馬追が行はれるので鐵道省の團體も數百人到着し、町中お祭氣分だ。驛前の休茶屋で勢揃ひし、自動車に分乘し、中村代理店宗像孝三氏の案内で先づ縣社中村神社に參拜し、次に松川浦に行く。太平洋の濤は岸を打ち、川口から入江に潮のさかのぼるところ、松青く、草綠にして風景絶佳である。魚介の物産に富むも灣内の水淺く、船舶の出入不便

なので、工費三十四萬圓、四十年の歳月を費して修築を行ふ事になり、今正に工事の半途にある。そこから原釜海水浴場に行く。この頃しきりに宣傳してゐる濱邊で、砂白く水清く波靜に、まことに手頃の海水浴場であるが、海岸に立並ぶ宿屋はあまり清潔に見えなかつた。下呂の湯之島館のやうに思ひ切つた設備をしてみたら面白いかもしれない。この海岸で郡山事務所の若杉氏が私の爲に大きな蟹を一疋買つてくれた。代金十錢也。これがその晩の宴會の時大根おろしを添へてあらはれ、私丈がこの膳を控へる形となつた。

夕刻、新開樓に着く。相馬甚句で天下に知れわたつた家で、私も豫て本店營業部の三瓶さんが、酒間手拍子を叩いてうたふ

相馬中村の新開樓が燒けた　燒けた新開樓に花が咲く

で聞き知つてゐた。家は古び、荒れ果てゝゐたが、聞けばうち續く不況に借錢が嵩み、つい數日前膳椀寢具もろとも一切差押へられてしまひ、折角引受けた明保會の宴會もお宿も殘念ながらお斷の外ないと申出た。宗像さんは既に一切の準備も整つた今となつて、そんな事をいひ出されては地元の幹事として會員に申譯が無いから、是非とも今度の會丈は新開樓にやらせてやつてくれと債權者を說得し、やうやく承諾を得て今日の運びとなつたのださうで、この明保會を最後と

して、さしも名高い新開樓も戸を閉す運命となつたのださうである。うたに殘る新開樓の罹災が明治生命誕生の明治十四年で、昭和八年七月明保會を最後として看板を下すといふのだ。榮ゆるものと衰へるものゝ對照、まことに氣の毒の事であつた。一行は記念撮影をし、關さんと私とは別室に遠慮してゐる間に會議があり、やがて大廣間の舞臺で土地の藝者總出の餘興があり、更に幹事、私、支店長の挨拶があつて、一同盃をとりあげたのが九時だつた。何しろ一年中一番忙しい野馬追の前夜で、しかも約束は七時から九時迄といふのが、九時になつてやうやく開宴となつたのだから、總勢三十六人の藝者の迷惑は想像するに難くなく、全く悲鳴をあげたさうである。貰ひがかゝつても一切許さず、開宴迄一室に罐詰にして禁足したが、之が一番苦しかつたと宗像さんは歎息された。どうも時間がだらだらで、事毎に決行の長引いたのは一同の遺憾とする所だつた。

七月十二日　早曉起床。自分一人早起きをしたつもりで洗面所へ下りてゆくと、既に洗面を濟ませた代理店の方が多く、これから朝の町を散歩するといふのであつた。一同揃つて朝食を濟ませ、八時には又自動車に分乘して、原の町へ出かけた。みちみち今日の野馬追に參加するさむらひ達が、馬上物の具に身をかため、さし物をひるがへして行くのに逢ふ。昔は武家の行事だつた

のだらうが、今は農家の子弟が多いらしい。中には今日を晴れと薄化粧し、その白粉が汗で斑にはげてゐるのもあつた。かゝる若武者は、いづれも村芝居の敦盛卿の役を争ふ二枚目であらう。

原の町では目抜の場所の家の店頭を借りて緣臺を並べ、騎馬行列の過るのを見物した。最初のうちこそ一騎二騎と指を折つて勘定してゐる人もあつたが、しまひには數へ切れなくなつて止めてしまつた。先づざつと五六百騎だらうと話合つたが、宗像さんの御話では一千餘騎といふ事だつた。行列が終ると町を二十丁ばかりもはなれた雲雀が丘で野馬追が行はれるので、明保會はこゝで解散し、あとは任意行動となつた。私共は十數人の方々といつしよに群集にまじり、砂埃を浴びながら畑や林をぬけ、汗だくになつて競技場へかけつけた。野天の草いきれのはげしい丘の上から、眼下の平原で功名を爭ふのを眺めるのである。壯觀には違ひ無かつたが、見物するのもなかなか苦勞だつた。狼烟があがり、烟の中から一筋の布が出てひらひら落るのを、さむらひ共は馬を寄せ、鞭をあげて之を奪ひ合ふ。首尾よく奪ひとつた者は、群る騎馬武者の間をかけぬけ、更に一段高い山頂へかけ上り、神前で功名を賞する品を頂くのだ。私達は歸りの汽車の時間が氣になるので、三四番見物して町に引返し、私と關さんは皆さんに別れ、中村から一度仙臺へ引返した。何しろ汗と埃だらけなので、汽車の時間迄は時間があり過るから、何處か入浴の出來る所

で食事をしたいと希望し、關石岡兩氏につきあつて貰つて、青葉といふ大きな料理屋に案内された。晝間から飲まず喰はずで咽喉が乾くので、關さんも私も冷水をがぶ〳〵飲んだ。湯に入つてはじめて人心地がつき、仙臺は由來喰物のまづい所ときいてゐたが、空腹にまづい物無しで、私は無闇に喰つた。但し、つくづく飛彈の高山の洲岬の晝飯のうまかつた事を想ひ出した。會社をはなれた私の催なので無駄口を叩いて汽車の出るまでくつろいだ。十時半仙臺を立ち、翌朝歸京出社。

――「社報」昭和八年七月號

長岡――富山

七月二十四日　朝九時上野發、長岡へ向ふ。同行は安東營業主事と渡邊助役。長岡代理店は六十九銀行頭取鷲尾德之助氏に委囑し、現在契約高六百萬圓を超ゆる我社第一の大代理店である。六十九銀行と我社とは、多年特別の深い關係を有し、鷲尾頭取近藤常務には常に親しいおつきあひを願つてゐる。恰も銀行の半期決算が濟み、總會に續いて支店長會議が開かれ、今日がその最終日と承知したので、之を機會に各重役に御目にかゝり、平素の御厚誼を謝し、將來の御引立を願ひ、いろいろ御教示にあづからうといふので、打揃つて出向く事になつたのである。先年清水トンネル開通を記念する博覽會が長岡で催された時、私共は六十九銀行の御招をうけ、手厚いおもてなしにあづかつた。その時は前頭取長部松三郎氏が親しく會場の案内をして下さつたが、氏は昨冬永眠され、せつかく長岡に行つても溫容に接する事の出來ないのは甚だ遺憾である。長部

氏は上京の度毎に本社を訪はれ、社業に就て屢々有益なる御注意を下さつた。私には忘れられない數々の思出がある。長岡に着くと直に銀行へ顏を出し、旅館大野屋に鞄を下したゞけで、先づ長部家の御墓所に參拜した。

六九の方々を長岡館に御招待したが、御多用の中を繰合せ、鷲尾、近藤、遠藤、柄澤、高橋、佐藤、池田の諸氏が御出席下さつた。こちらは東京から出向いた三人の外に、新潟事務所の葛城主任、村越、梅津兩社員が顏を並べたが、土地不案内なので、近藤さんに一切御配慮を願ひ、おかげで手違ひなく取運ぶ事が出來た。この晩の長岡の暑さといふものはひととほりでなく、全くの無風だつた。

七月二十五日　朝、渡邊助役は柏崎へむかつて立ち、安東、村越二氏は十日町に赴き、私は一人歸京の事になつた。途中各驛に風雨強かるべしといふ警報が出て居たが、未だ風も雨も來ず、田畑の熱氣は車内にも籠つて、我慢のならぬ暑さだつた。しかし清水ドンネルを越え群馬縣に入ると次第に風が強くなり、埼玉縣にかゝる頃は、草木を薙倒すやうな強風が砂塵をまきあげ、日輪も光を失つたやうなすさまじさだつた。三時五十分上野着。

八月五日　夜十時半上野發、仙臺に向ふ。同列車に北海道樺太へ行く川原林さんも乘つてゐる

祭の當日をえらんで、締切を濟ませた全員を召集し、勞をねぎらふと同時に今後の打合せをしよ
うといふ支店の催に參加の爲である。仙臺の七夕は、市中目抜の町の戶每に笹をたて、色とりど
りの紙きれを結び、趣向を凝らした飾物を競ふのを、近郷近在から見物に來、臨時列車さへ出る
賑はひださうである。この晚家を出る時は、かすかに雨の氣ぶりがあるだけだつたが、上野方面
は同時刻にも降つたらしく、往來は濡れ、なほ車窓に雨滴が傳はつた。

八月六日　曉方窓をあけて見ると、小雨が降つてゐた。しかし雲の切目に薄日がさしてゐるの
で、はかない望をかけたが、宮城縣へ入ると雨は次第にはげしくなり、山の方も海の方も雲は低く、
見込の乏しい景色だつた。衣服を着かへ、窓外の稻田を見てゐると、川原林さんがやつて來られ、
暫く席を同うして話したが、間もなく汽車は仙臺に着いた。川原林さんを見送り、自分は針久本
店に宿をとる。この有名な宿屋の息五郎さんは私の同窓で、今は我社の東京市內特約店として活
躍してゐる。先年會社の連中が此地に庭球試合をやりに來た時、私も彌次馬の一人として同行し、
針久別館といふのに泊つた事がある。本店の方は家屋と共に頗る古風で、女中は浮薄でなく、男
衆は質朴で、家具調度も近代風に遠く、いかにも由緒ある家柄らしかつた。料理は分量ばかり澤

山で味はまづく、諸事氣の利かない點も多いが、ほんとの親切が底光（そこびかり）を見せて、大層居心地がよかつた。私は宿屋のうるさいサアヴィスには辟易する質（たち）だから、この家のやうな御世辭と飾氣の無いのが何より結構だ。

　ひとやすみして支店へ行くと、締切の功名手柄を持寄つた外野（ぐゎいや）の勇士で賑かである。關支店長は壹百參拾貳萬圓の成績に滿足して、平生よりも一層ににこにこして居る。午後二時、會議室に集り、私は會社の近狀と現時の精神並に將來の抱負を述べ、次に支店長から八月の募集計畫の發表があり、引つゞき各事務所から一人づゝえらばれた人が募集經驗談をやつた。雄辯の人もあり、訥辯の人もあつたが、いづれも話に味をもたせる事がうまく、非常に面白かつた。終つて、雨中屋上庭園で記念撮影をした。ほんとは此の屋上で麥酒を汲み、折詰を開いて市中の賑はひを見ようといふ趣向だつたが、折柄雨は降りまさるばかりなので、祭は翌日に延期され、吾々の祝宴も止むを得ず席を三階の廣間に移した。正面には紅白の幕を張り、舞臺をしつらへ、天井には岐阜提灯を蜘蛛手にかけ、それには一萬圓以上の成績を擧げた社員の氏名と契約高を書いた金の短册が結びつけてあつた。閉宴後その氏名の人が夫々貰つて歸る趣向で、誰の考案か甚だ氣の利いたものだつた。めいめいに折詰が渡り、盃をあげ、舞臺では餘興がはじまつた。

演目	出演	担当
七夕祭神言奏上	青森事務所	岩崎主任
舞踊「鉾を収めて」	秋田事務所	川村富太郎君
奇術	同	早川一郎君
安來節	郡山事務所	今宮主任
津輕岩木山御山參詣	弘前事務所	一同
奇術	米澤事務所	村上就知君
吹寄せ	盛岡事務所	菊地主任
物眞似ラッパ	横手事務所	田中辰三郎君
南洋踊	山形事務所	富岡吉助君
青森地方盆踊	青森事務所	一同
獨唱	仙臺市內事務所	伊藤通君
詩吟	八戸事務所	菊地主任
奇術	直屬園	末永清吉君
莊內おばこ	莊內事務所	本間善太君

からいふ番組だつたが、さかんに飛入が出て賑かな事だつた。しかも全員誰一人亂に及ぶものなく、秩序整然として、豫定の通り正八時に散會した。

八月七日　朝、支店から電話があり、岡山支店から私宛の電報が來てゐるといふ。讀んで貰ふと壹百五萬圓擧績の知らせだつた。多年不振をつゞけた此の支店が、最近めきめき向上し、四、六兩月に七拾萬圓の記録を作つたが、坂本支店長は之を一時のまぐれあたりとは見ず、全員の努力に信頼し、確信をもつて壹百萬突破の計畫をたて、誓つてやつて見せると云つてゐたが、遂に實現したのである。早速支店へ飛んで行くと、誰も彼も岡山の偉動に驚き、その奮勵をほめちぎつてゐる。この分ならば拾億突破は大丈夫だといひ合ふところへ、本社からの電報が來た。

シンケイヤク二三四〇マン十オクトツパ四〇〇マンナリ

その場に居合せた者は互に深い感動に打たれ、お目出度うお目出度うと繰返した。私は來る人來る人にこの電文を見せた。

今度の拾億達成の計畫案が提出された時、第一番に反對したのは私である。こけのひとつ覺えではあるまいし、年中拾億々々と念佛のやうに繰返してゐるのは寧ろ恥辱であり、萬一不達成の場合の打擊の怖ろしさも考へられるので、他の名目で同一の效果を擧げん事を主張した。しかし

總本部の山下さんの信念は堅く、藤田專務も敢行しようといふので、それならば自說は撤回し、全力をあげて鬪はうといふ事になつた。やるときまつた以上は、どうしてもやり遂げなければならないと思つた。しかし其の成否については、敢行論者と雖多大の疑惧をいだいてゐたから、此の二箇月の吾々の心配といふものは無かつた。それを全社員の努力と、代理店の熱烈なる後援によつて美事に遂行した。今になつて見ると、この擧績は拾億達成の目標あるが爲に成功したのであつて、若し私の案にしたがつたならば、斯く迄の效果はあがらなかつたであらう。私は自分の不明を羞かしく思ふと同時に、心配が強かつた丈に喜びも深いのであつた。

折柄雨もやみ、薄日が照り出したので、市中は忽ち賑かになり、戸毎に美しい色紙を結んだ笹をたて、家毎に趣向を凝らした飾物をはじめた。今夜のさかんな景況も想像されるのであつたが、本社に仕事が待つてゐるので、午後一時の汽車で仙臺を立つた。

八月十八日　午後八時五十分上野發。今度は石川福井富山地方を廻る豫定で、支店からは約一週間の日程を作つて來たが、本店の仕事も忙しく、且私の歸店を待つて吉村助役が支店の帳簿檢査に出かける順になつてゐるので、不眠不休でも構はないから、日數を少なくしてくれと註文して置いた。豫而先輩が多忙の中をやりくりしては地方へ出張するのを、さぞかし苦勞な事だらう

と氣の毒に想つてゐたが、先頃來自分も地方廻をする事になると、存外肉體上の勞苦は酷しくなく、本店で種々雜多の仕事に追はれてゐるよりも氣骨は折れず、心配はなく、寧ろもつたいないやうな氣がする位である。又先輩の言によれば、出張が重なると生活が不規則になり、時間外の飲食の爲にからだを損ふ惧れもあるといふ事だつたが、私の場合はその逆である。何故かといへば平素の生活が不規則で、夜は遲く、時には曉に及ぶ事もあり、諸種の會合に出ては一升酒も辭さないのが、出張先ではする事もないので、十時か十一時には床に就き、宴席も會社のつとめとあれば愼むし、その上急速に各地を廻るおかげで運動も十分とれるので、出張は健康增進の助となるのである。乍然他方には、社費で贅澤な旅行をしてゐる自分を顧みて、いかにすれば出張を意義あらしめ、效果あらしめる事が出來るか、微力菲才の者が漫然と地方へ出て行く事は無益ではないかといふ心配があり、惱みがある。いつたい此の十年來の明治生命程地方出張に勉勵する會社は外には無いといふ噂である。それは全く藤田專務のおかげで、精力絕倫の專務は、日常山積する仕事に對し曾て盲目判を押した事は一度も無いといふ事だし、朝は一般社員と共に出で、夜は一般社員の退出を見送つて歸るといふ超人的勉強の一方に、支店出張所から來てくれといへば、寒暑を問はず、時と所を論ぜず應諾し、みづから第一線の闘士と共に奮勵する事を主義とし

てゐるからである。且又專務は出張の效果を確信してゐるのであるが、私の如き未熟の者にはその信念が無い。學識經驗共に淺く、支店の社員の前で話をする時、自分を顧みると羞しさが先に立つて愈々言ふ事がなくなつてしまふ。おまけに私は社交下手なので、代理店訪問の時など、常に手持不沙汰に惱み、同時にさきさまにはそれ以上の手持不沙汰を感じさせ、失禮の事が多いに違ひ無い。甚だ心苦しく思ふが、鈍根如何ともしがたいのである。卽ち私の出張は、肉體勞働としては何等の苦痛もないが、その結果に對する疑には始終惱まされてゐるのである。

　八月十九日　早曉起床。見知らぬ土地の珍しさに、額を窓につけて山を眺め野を見渡した。富山で、想ひもかけなく事務所主任大橋儀政氏が乘車し、高岡では其處の主任毛利理作氏が飛込んだ。今度の出張は、金澤では市內在住の人達に逢ひ、各地事務所の人達には夫々の所在地で逢ふ豫定だつたが、聞けば各主任相談の結果全員金澤へ集合の事に變更され、斯くは兩氏と同乘の機を得たのであつた。

　富山縣は明治生命が金城鐵壁をきづいた土地で、有力なる代理店を以て陣を固め、事務所主任に人を得てゐるので、若し此上に鬪士の數を加へる事が出來れば、鬼に鐵棒で、永く他社の侵入を許さないであらう。車中六、七兩月の功名談、八月の見込を交々語られ、頗る心強かつた。

午前八時金澤着。犀川の流に臨む鍔甚で朝飯を頂いたのは些か贅澤過ぎたが、山を仰ぎ水に圍まれ、樹木の多い金澤市の美觀を一眸にをさめる事が出來たので、ほしいまゝに滯在を許されない旅の者には難有かつた。十時から支店で、各地から集まつて來た人々に對し、最近の本社の動向を話した。正午、仙寶閣といふ洋風料理店で全員と會食した。總勢七十人の中の紅一點は富山事務所の村元千代氏で、數人の子女を殘して夫君の死去された不幸にもめげず、亡夫の仕事を引繼いで少しも劣らず、逐月向上の一途を辿り、四月の會長誕生月記念寫眞帳にも登載されたけなげな婦人である。

宴會終了後少時々間があつたので、支店長醫長と共に市内事務所を訪ひ、兼六園と卯辰山を見物した。此の日遠く兵庫縣下甲子園に於て全國中等學校野球大會準決勝戰があり、事實上の優勝戰である中京對明石の試合が行はれてゐるので、市内大通の商店の前にはラヂオを聽く人が雲集し、吾々が市内見物の頃は六回にして互に得點なく、快打か美技か、數萬の觀衆のあげる歡呼がラヂオを通じて全市にあふるゝばかりであつた。折柄公園には玉錦武藏山の一行がかゝつてゐたが、此處でも廣場に据ゑられたラヂオを取圍む群集にまじつて、長身肥大の關取達が一心に戰況を聽いてゐるのを見た。

三時六分金澤發。支店長と能登事務所主任横越貞吉氏同行、七尾へ赴く。先づ代理店春木藤兵衛氏の御宅を訪問したところ、關係銀行の會議があつて御留守だつたが、夫人に御目にかゝり、直ぐ近所の事務所へ行つて待つ事にした。横越夫人並に令嬢の接待をうけ、主任から事務所の現狀を聽き、彼是してゐるところへ春木氏が見えた。座敷へ上ると直ぐに今二十三回目でまだ零對零ですと、何より先に中京明石の戰況を語られた。氏は名代の野球フアンで、今日も銀行の會議の後、同好者とラヂオを聽いてゐたといふお話だつた。春木家は能登隨一の呉服商で、その店構の廣大なのには驚いた。先代以來熱心に盡力せられ、先年壹百萬圓達成の際の如きは、盛大なる披露會を催されたが、その裏には先代の夫人の援助著しいものがあると聞いてゐる。能登事務所は開設日淺く、僅に七人の所員で能登四郡を受持つてゐるのであるから、まだ十分の活動は望めない。軍隊で鬼と呼ばれた横越氏の事だから何とか局面を打開するであらうが、差當つて人員の増加が肝要なので、支店長ともども春木氏の盡力を懇請した。御多用中御迷惑はわかり切つた事だが春木氏を煩はして町中を見物し、更に和倉迄同行を願つた。途中春木氏がつかまれたニュウスは、二十五回の延長戰を演じて遂に中京が凱歌をあげたといふのであつた。
和倉は七尾灣を擁する海岸の溫泉場で、上杉謙信の越山併得能州の景の詩は、この地の風景

を詠じたものだといふ。會社の代理店小林亭次氏經營の銀水閣に鞄を下した。庭先の石垣には絶えずさゞ波が寄せ、涼風簾を動かして暑さを知らない。週末の爲旅客は滿員で、その客を喜ばせる爲に燈籠流があつた。潮風に明滅する燈火は沖の方から次第に近づいて來たが、いつの間にか一つ消え二つ消え、やがて又闇夜の海となつた。この夜春木氏と横越氏は七尾へ歸り、水澤氏と私は一泊した。

八月二十日　午前七時半和倉發。十時四分金澤着。驛前の茶店で時間を待ち、十一時十二分發の汽車で福井に向ふ。汽車が石川縣から福井縣へ入ると綠野の風景の中に工場があらはれ、さかんに黑烟を吐く煙突が地方色を明かにした。一時六分福井着。主任中村和七氏の出迎を受け、事務所へ行く。能登の事務所は住宅風の家屋であつたが、こちらは近代商店風の造りで、土地の相違はこゝにもはつきりと現はれてゐた。中村夫人の立働かれる側に、五六歳の可愛らしい女の子がゐて、少しも人みしりをせず頗る御愛想がいゝので、當家の令嬢とばかり思つてゐたら、中村氏には子供がなく、よその子供がなついて其儘親子のやうに暮してゐるのだといふ事であつた。

こゝでは福井代理店安川平三郎氏、新福井代理店藤井濱次郎氏を訪問したが、親しく御話を伺ふ時間の無いのが殘念だつた。安川氏は市內屈指の生絲商で、契約高は貳百萬圓を越え、藤井氏

は久しく辯護士會長をつとめられた有力な人で、代理店を御願してから日は淺いのであるが、大層熱心にやつて下さつて、縣下有數の代理店である。

中村主任の案内で三國に行き、東尋坊の奇勝を訪ふ。海岸は海水浴で賑はつてゐた。照りつける砂濱の暑さと、休みなく動き廻つてゐるので咽喉が乾いてたまらなかつたが、我慢して音をあげずにゐると、同じおもひの支店長が中村氏に賴んで西瓜を買ひ、舟の中でむさぼり喰つた。東尋坊は噴火口の跡で、突出した岬の絶端に在り、柱狀の岩石聳立し、淵は藍碧を湛へ、物凄い景色である。傳說によれば、昔平泉寺數千僧徒の中に豪惡僧あり、一山此のものを憎み、海岸見物に事よせておびき出し、酒宴を張りて醉ひつぶし、岩壁の上より突落して殺したが、晴天忽ち變じ雷鳴はげしく、地鳴震動して人畜を害し、後々迄怨恨この地に止まり舊四月五日の頃、風烈しく雷雨西より起りて東へ行くを、鄕人東尋坊平泉寺へ上るといひ傳へたといふ。吾々は舟から見上げたものであるが、恐らくは陸上斷崖の端に立つて深淵を見下す方が奇觀であらうとおもふ。

元の汀に戻り、三國代理店加藤利作氏を訪問した。數年間に五拾萬を超ゆる成績を擧げた有力なる代理店である。何か御知合に取込のある御樣子だつたし、こちらも時間が無いので辭去したが、御宅の前の電柱を利用して明治生命の代理店の所在を明かにした趣向は十分效果あるものと

たのであるから、流石にこたへた。途中中村氏と別れ、山中溫泉吉野屋へ投宿した。極めて設備のよい宿で、こちらは空腹なものだから御飯を持つて來るの〻遲いのには閉口したが、給仕の女中もかねてきくシシとは思はれず、恰も羊の如く靜かに、牝牛の如く鈍重であつた。

八月二十一日　午前七時半山中發。十時四十二分高岡着。恐縮したのは驛に毛利主任だけでなく、高岡代理店室坂庄三氏、同保證人令息野村岩太郎氏、射水代理店浦島理八郎氏令息の御出迎をうけた事である。ればかりでなく室坂氏は吾々を料亭に招待して下さるといふ。ところが、こちらは事務所の人達と晝食をともにする段取だつたので、強ひて吾々の方へ來て頂く事にし後刻を約して先づ事務所に行つた。こ〻の事務所は群をぬいて立派だ。店の二室を改造して椅子卓子を置き、そこで事務を執るやうになつてゐるが、奧の立派な座敷の向ふに手の届いた中庭があり、その又向ふには土藏も見えた。しかも此處は主任の住宅は別にあつて、他の事務所では家人が働いてゐるのだが、こ〻には給仕役の少年がゐる。私は東京、大阪、名古屋等の近代風の事務所も見たが、金澤管内程の物々しい事務所は知らない。家賃も安いのであらうが、東京本店の人などの想像も出來ない豪勢なものである。

高岡には高岡銀行常務取締役正村六之助氏があつて、私が來たら逢ひ度いと事務所迄申入れられた。氏は同窓の先輩で、私が中學時代野球に夢中になつてゐた頃氏は大學部の第二選手の三壘手だつた。凡二十六七年も逢はないのであるが、近頃毛利氏も應援を頼み、私も事務所の爲に依頼狀を出したりした關係で、是非ともたづね度いと思つてゐたところだから、銀行へ寄つてみたが、運惡く不在で意を果さなかつた。自動車で市内を一巡し、今は公園になつてゐる城趾の蓮沼に面した木津樓といふのに行つた。室坂、野村兩氏を正客とし、事務所の人達も顏を揃へ、短時間ではあつたが愉快な食事をした。前日は驛辨と西瓜でかけ廻つたが、今日は何たる果報であらうと、水澤氏と相顧みて笑つた。高岡代理店は貳百萬の契約を有する大代理店で、これを受持つ寺尾吉次郎氏は我社きつてのうでき〻だから、事務所の優績を確實ならしめる大勢力である。室坂氏は、麥酒ならばいくら飲んでも醉はず、日本酒ならば三升といふ豪傑だから私は敬遠方針をとる事にした。

二時二十三分高岡發。二時五十分富山着。こ〻でも富山代理店天谷伊佐太郎氏の御出迎をうけ、大橋主任佐伯監督社員と共に先づ同店樓上で冷物（つめたいもの）の御馳走にあづかり、それから舊代理店藤井諭三郎氏宅を訪問した。藤井氏は有名な藥種商で、我社の爲には永年盡力され、此の地の代理店が

今日の大を成したのは偏に氏の賜であるが、老齢且病弱といふ理由で辭任し、天谷氏に讓られたのである。然し、御目にかゝつてみると御老體とは思はれぬ元氣で、姿勢の正しさなど、古典派の彫刻のやうであつた。次に事務所へ廻つたが、大橋夫人は先頃來入院中で、令嬢達がかはるがはるもてなしてくれた。市內一巡の後富山ホテルにおちつき、天谷氏を正座にして晩餐をとつた。天谷氏は人も知る金澤支店外野陣の總大將として功績のあつた人で、今は管內第一の代理店として勢威を張り、拾億達成募集戰には、全國中五指に入る優績をあげ、現在契約高三百餘萬といふ大物である。酒間賑かな話題盡きず、感興甚だ深かつたが、時間は容赦なく迫つて來て、午後八時卅分諸君に別れて一人歸京の事になつた。驛に藤井氏や天谷夫人迄御見送下さつたのには恐縮した。

八月二十二日　朝七時上野着。出社。

——「社報」昭和八年八月號

岡山——宮島

九月五日　午後八時二十五分東京發、岡山、福岡、長崎、廣島の順に巡廻するのであるが、その中の岡山は、豫而新契約壹百萬突破實現の曉には、特に武市會長の臨席を求めて祝賀會を開くといふ内約があり、美事に之を果したので會長も出馬の事になつた。

九月六日　朝七時七分、汽車は京都へ到着したが、そこで乘る筈の會長の姿が見えなく、京都支店の多胡副長が見送に來てゐたので、共々歩廊を探したけれど見當らない。僅に四五分停車するだけだから、刻々時計の針の進むのが氣になつて、或は寢坊して乘遲れるのではないかと疑つてゐたが、愈々發車時刻の迫つた時、架橋を下る白足袋が見え、袴が見え、やがて會長と押原支店長と佐原醫長とがあらはれた。正に發車前數秒で、會長が乘車すると同時にけたゝましい警鈴が鳴つて、車は動き出した。兎角焦心に驅られ易い自分に引比べ、おちつき拂つた態度とい

ふものは驚く外なく、年の功にはかなはないと思つた。會長は此の二三日腹工合が悪く、家人は旅行見合せを勸告されたさうだが、前からの約束だからと押して出て來られたのださうである。話材の豊富な會長と話をしてゐると、時の立つのが早い。十一時五十二分岡山着。支店長の案内で新錦園といふ旅舎におちつく。晝食後、會長のおともをして小林章二氏の遺族を弔問する。小林氏は岡山支店の醫員で、入社後一年半にしかならないのであるが、精勵恪勤、特殊の風格を備へた人で、内外の信望厚く、會社將來の爲に惜い人物であつたが、七月の大募集の締切當日、出張先で自動車が崖から墜落し、不慮の死を遂げたのである。氏の性格、氏の功績、氏を悼むおもひは、前號の社報に坂本支店長が涙をもつてつづつた一文に盡きてゐる。未亡人に御目にかゝり、御悔みを申上げ、靈前に冥福を祈つた。長女達子さんは、おもひもかけない不幸に遭遇し、學業を半途に廢して、今度岡山支店の事務員になつた。私共の弔問の翌日から出社の筈になつてゐた。

小林家を辭し、支店に赴く。この前來た時は六月の締切で、七拾萬の成績を持寄つた鬪士に圍まれ、支店長も副長と喜悅に醉つてゐたが、七月壹百萬の後を受け、八月の締切は乍残念(ざんねんながら)四拾萬にも滿たなかつた。どうも申譯ありませんと口々にいふのであるが、炎熱の折柄連月奮鬪の疲勞もあらうし、大募集の後の整理の爲にも時日をとられたので、ひとり此店ばかりが不振なのでは

なからうと思つた。人の和を得、向上の意氣に燃ゆる此店は、新秋九月神戸支店を向ふに廻して雌雄を決し、負けた方は勝つた店の勇士六人を自陣に招待する約束をし、是非とも敵陣へ乘込んで祝杯をあげて見せると誓つた。

後樂園で記念撮影の後、浩養軒で研究會を開き、終つて慰勞宴に移り、津山、水門、早島、井原、新市五代理店、尾谷、矢吹、小寺三特約店主を中心に、全員卓を圍んで着席し、正面には舞臺をしつらへ、支店長の挨拶につづいて武市會長起つて十億達成の喜びを述べ、代理店の熱烈なる援助と、全社員の獻身的努力に感謝し、最後に自分の經驗した極めて印象深い思出話をした。いつもは低聲で聽取り難い事もあるのに、今日は音調高く、面上喜悅の色を湛へ、いかに會長が近時の會社の業績向上に滿足してゐるかを感得する事が出來た。會長の思出話は頗る面白かつた。今から凡三十年前、友人二名と旅中列車食堂に食事をした時、友人二人は酒を飮み、自分は生來好まないので盃を手にしなかつたところ、傍に一外國婦人が在つて、いきなり自分に話かけ、あなたは酒を飮まないやうだが、ついでに煙草もやめてはどうですかといふ。酒はうまくないから飮まないが、この方はからだの爲には害があらうと思ふがやめようと思つてもやめられないと答へると、先方は熱心を面にあらはし、喫烟がいかに身體を害するかを說明し、今日限りどうだ禁

烟すると神に誓つてくれといふ。其處で名乘をあげた婦人はミス・フオレストといふ名古屋のキリスト教會に屬する人で、あまり熱心に攻め立てられ、會長も止むなく禁烟を誓ふと、婦人は直に手提から厚い帖面を取出し、會長に署名を求めた。二聯式の特別製のもので、一葉は署名者に渡し、原簿は帖面の儘に殘るしくみになつてゐた。爾後凡十年、右の婦人から禁烟記念の文字をしたゝめた年賀狀が來て、會長も一度名古屋に行つたらたづねて見度いと思つたが、先方が日本を去つたのか、天國へ行つてしまつたのか、いつしか消息も絕えて今日に及んだ。しかし、その時の外國婦人の熱心なる勸說は忘れ難い印象を殘し、これこそ生命保險募集の模範的態度であらうと思ふといふのであつた。話終つて席に着いた會長に、いつたい其禁烟の誓なるものは何時迄守られたのですかときくと、いや一日も守らなかつたといふので大笑になつた。

出席代理店を代表して津山の關當純氏の御挨拶があり、食事が始まると同時に餘興もはじまつた。寄席藝人らしい桂枝輔といふ東北訛の著しいのが、おきまりの束髮に紋附裾模樣の女を相手に所謂万才から、身振物眞似曲彈と數を盡して御機嫌をうかがつた後で、私が先頃の出張日記で紹介した福山事務所の新人橫山賴美氏が登場し、得意の安來節をうたつた。今回は少々固くなつた樣子で、唄は不出來だつたが、かくし藝は不出來でも本業の成績は美事なもので、七月大募集

の眞最中陸軍勤務演習に召集されて入營し、募集に力をそゝぐ事が出來なかつたが、召集解除となるや、忽ち馬力をかけ、締切迄の數日間に二萬圓の契約を締結して先輩を驚かした。私は此の新人を社報紙上で紹介した甲斐のあつた事を何よりも嬉しく思つた。つづいて舞原氏の尾道小唄、中島氏のあほだら經、宮崎氏の義太夫、誰彼と藝づくしがはじまつたが、中での壓卷は小寺特約店主の哥澤だつた。最後に尾谷特約店主の結びの御挨拶があり、會社、支店、代理店の萬歳を齊唱して散會した。

會長ははじめから一泊の豫定だつたが、私は午前一時三十一分の汽車で九州へ向ふので、宿へ引上げ、支店長や主任連中と會長を取圍んで深更迄會談した。

九月七日　汽車は非常に混んでゐたが、幸にたつたひとつ空いてゐた寢臺にありつき、目の覺めた時は既に本州の西の果に近かつた。數日前の嵐で一時涼しさを感じたが、又次第に盛返して來た。シャツは汗に濡れて乾く間もない。關門海峽を渡るのも十數年振りだ。北九州は長い間の不景氣から脱却して、炭坑も工場も旺盛なる活力を振ひはじめ、米作は近年無比の豐饒に收穫の秋を待つてゐる。その爲か、福岡支店は一般不振の八月も他店を尻目にかけて堂々八拾萬圓を擧げた。しかし、驛に出迎へてくれた久保澤支店長は、八拾萬圓を少しもほこらず、此の大九州の大

部分を包含する支店は大阪と成績を爭ふ實力を有すべきで、今頃八拾萬や百萬を喜ぶのは恥辱である。近來支店の成績が向上の一路を辿るのは、内部の組織が整頓し、各事務所の陣容漸く成つた爲で、此上に精兵の數を增せば、忽ち飛躍的數字をあげる確信十分であると語つた。緻密な頭腦をもつて得意の整理を行ひ、これから、大に積極策に出ようとする支店長はいかにも仕事を樂むものゝやうに、次々と計畫を話し、保險程面白い仕事は無いと云つた。驛には同窓の山口銀行支店長藤江元亨氏も出迎へてくれた。學窓を出て、二十有餘年を經過し、はじめてあひあふので、若し往來で擦れ違つたならば互に知らずに過ぎたであらう。又本店の內勤出で、今は募集に從事し、優績をつづけてゐる伊藤博之氏の令兄が、飯塚市からわざ〳〵出て來られた。伊藤氏は飯塚代理店藤井氏ともども、私を招いて宴を張り度いと申入れられたが、こちらは切つめた日程なので一應御斷した。しかし是非々々と再三の御勸說なので、休養の爲に取つて置いた十一日を飯塚市訪問にあてる事にし、豫定を變更した。恰も正午に近かつたので、伊藤氏を誘ひ、店長醫長と共に水だきで有名な新三浦へ行く。例の「博多小女郎浪枕」に出て來る海賊毛剃九右衛門が遊んだといふ家で、川添の眺望頗るよく、元寇の役に敵軍が寄せて來たといふ多々良濱の白砂青松を一眸にをさめる事が出來た。これ程の大きな市街で、これ程美しい濱を有するものは外にはあるま

い。新三浦の主人白井氏は私の中學時代の級友で凡三十年振の對面だつた。

食後、商工會議所樓上で開かれた支店全員集會に列し、店長醫長副長各事務所主任その他の人人の講話を聽き、私も一席辯じた。この夜は二日市の武藏溫泉で社員慰勞會があるので、自動車で會場へ行く。九月といつても九州はまだ暑かつたが、流石に野路の夕暮は心地よく、旅の疲勞を忘れさせた。宿へ着くと、恰も師團の幹部演習があつて宿は混雜し、女中がしきりにこぼしてゐた。二階の欄に近く天拜山を仰ぎ、夕風は涼しかつた。支店長醫長といつしよに入浴してゐると、三助が來て背中を流さうといふ。久保澤さんの證明するところによれば、この人は流しの名人で、殊に按摩が上手だといふ事だつたが、私は生れてこのかた他人に背中を流して貰つた事も、揉んで貰つた事もないので、人手は借りない主義だから御免かうむるといふと、三助君は頗る輕蔑の色を示し、人手を借りないやうな根性では出世しませんよ、人を上手に使ふ人が偉い人で、第一あなたのやうな人がゐるからルンペンが出來るのだ、自分などは此の商賣で六人の子供を養つてゐるのだと、完膚なくやつつけられてしまつた。天理教を信仰するといふ人物だつた。久保澤さんはいかにも心地よさゝうに此の三助君に肩を揉ませてゐた。

宴會場は廣い座敷だつたが、全員百を越る人數だから、四列に並んでなほ遠方の席は人いきれ

で霞むやうな有様だつた。宴席世話人の永田政助氏の挨拶があり、忽ち賑かな景色となつた。かくし藝の洪水で、いつ盡るともわからなかつた。私は殆ど初對面の人ばかりなので一巡近づきの盃を受けて廻つたが、その中の熊本事務所に屬する藤本仁一郎氏は日露戰役旅順口閉塞決死隊の勇士で、廣瀨中佐が死を共にする者を募つた時、第一番に手を擧げて應じた人である。天運に惠まれて萬死に一生を得、名譽の金鵄勳章を賜つたのであるが、募集方面に於ても終始熱心努力を以て貫く遣口だときいた。多人數の酒宴の席なので、沁々當時の話を聞く暇の無かつたのは殘念である。餘興はまだまだ種切れとならなかつたが、翌日の行程を思つて私は自室へ引取つて寢てしまつた。

九月八日　支店長と共に宿をとり、太宰府に詣で、いつたん福岡支店へ引上げ、午前十一時二十五分發で長崎へ向ふ。今日は、昨日よりも暑く、窓に迫る海山の風光も、西日を眞當面にうけては觀賞の餘裕もなかつた。それでも秋らしい風情はところどころに見られ、田圃の畔には彼岸花が咲いてゐた。岡山地方の川や流に盆の燈籠流の名殘の精靈船を見たのと共に、何でもない景色でありながら、心に殘るものがあつた。午後三時十七分長崎着。鞄だけを宿へ送り、出迎の高月支店長と共に直に支店樓上の全員集會に列席、支店長と共に喋る。支店の二階も夕日が射込み、

汗に泉の如く湧いて上着迄も濡れた。夜の慰勞會迄に少しばかり時間があるので、自動車で市中を見物させて貰ふ事にした。長兄が三菱造船所の技士をしてゐたので、長崎には學生時代に二度來た事がある。山の中腹には墓地があり、墓地の下には遊興の街があり、絃歌の聲を墓地できくやうな不思議な印象は今も忘れない。海があり山があり、石疊の坂道の多い市街の景色は、一寸日本離れしたものである。これ程特殊の趣を備へた市街は珍らしい。自動車の走る道々、昔の記憶が蘇つて來た。茂木へ行く峠の上から、更に一段高い山頂の唐八景と稱する見晴臺に立つた。天草熊本雲仙を見る眺望の雄大な事は無類だつた。夕かげの迫る秋草のしげみには虫が啼き、野萩や芒のなびく風情に、つい歩いて見度くなる、自動車には中腹で待つてゐて貰ふ事にし、よせばよいのに私が先頭に立つて、僅に先人の踏分けた道を下りはじめた。ところが、いつ迄行つても自動車の待たせてあるところへ出なく、少し怪しいとは思つたが、別にふたまたの道も無く、若し間違へたとすれば最初から間違へてゐたので、些か心細くなつたが、今更引返すのも大變なので、構はずどんどん下りて行つたが、遂に全く見當の違つた、豫定よりも遙かに遠い麓へ出てしまつた。既に宴會の時間も經過してしまつたので、互に顏を見合せたが、小副川さんは自動車の待たせてある處迄もう一度上つて見ようといひ、高月さんはそんなら自分が行つて來ると云ふ。

折よくそこに新聞配達人が通りかゝつたので、早速小副川さんが談判すると、どうせ其の方角へ行くのだから傳へようといつて、威勢よくかけて行つた。しばらくして警笛が聞え、待兼た自動車が疾走して來た。日輪はすつかり山の向ふに沈み、踏迷つた山の姿は暗く聳えてゐた。

會場の通天閣といふ支那料理屋では、みんなが待つてゐた。市街を見下す高臺で、廣い座敷に圓卓を並べ、ぐるりと取圍んで賑かな食事になつた。岡山でも福岡でも、かくし藝の競演で大變な景氣だつたと話すと、支店長も副長も、この店には藝人はゐませんと答へた。ところが、いつたん堤が切れると、あつちの卓からも、こつちの卓からも選手があらはれて、藝人がゐないどころでは無い。素人ばなれした人が後から後から出て來る。支店長も副長も些か認識不足の態であつた。この店は海外に廣大な天地を持つてゐるので古參の人達はいづれも見聞が廣く、話に味があつて面白かつた。又多年の努力の結果成功を收めた人達の立派な風格には感服した。非常に上品な感じのする店であつた。

散會後數氏と町を歩いてゐると、後から肩を叩く人がある。舊友增田廉吉氏で、今は長崎の圖書館司書として、切支丹研究者の間で有名な人だ。私の來る事を支店の人から聞き、先刻宿へもたづねてくれたといひ、大變なつかしがつて、暇があるなら一日を自分の爲に與へてくれ、切支

丹の遺跡を案内しようと云ふが、何分明朝早く立つからだなので、近くの酒場で小一時間話をして別れた。何處に行つても昔馴染が待つてゐてくれるのは嬉しい事だつた。宿は上野屋で、頗る上品な、私などには立派過る位だつた。庭には夜もすがら虫が啼いた。

九月九日　早朝支店長と共に自動車で雲仙嶽に向ふ。坦々たる道路なのでこのドライブは愉快だつた。恰も此の日は上海行の船の出る日なので、一夏を雲仙に避暑した外人連のひきあげて歸るものが多かつた。山路へかゝると、時々雲が飛來し、海の遠くは霞んで見えなかつた。時間が乏しいので、少しもとどまる事なく、急速度で上つて、急速度で島原へ下つた。此地の代理店は原源寅氏であるが、實は保險係の塚本多久馬氏が一切を引受けて居られ、近く百萬にも達しようといふ好績である。同氏を南風樓といふ海邊の家に招じ、受持の俵屋末一氏を加へて晝飯を共にした。海の幸は豐かに新しく、殊に大鯛の頭を薄味に煮たものが結構だつたが、慾をいへば、之を上方風の山椒燒にしたら一層美味であらうと思つた。食後、又も自動車で諫早に出て、そこから急行に乘つた。車中に佐賀事務所主任杢尾勝氏と佐世保事務所主任山口時太郎氏がゐた。高月さんは佐賀で催される代理店招待會に出席の爲、長崎へ歸らず、吾々といつしよに乘車した。途中、自分一人取殘され、夜七時過小倉に着くと、そこには姉が出迎へてくれた。姉は戸畑に嫁い

でゐるので、私は會社から休暇を貰つてその家に泊めて貰ふ約束になつてゐた。遠く離れて住んでゐるので、大層なつかしがり、八十六歳になる姉の舅も、耳も遠く、眼もうとくなつたが、私を相手に近時の世相を論じようと待構へてゐた。此夜は遲く迄話込んだ。

九月十日　本來ならば一日休息の筈だつたが、飯塚訪問の事になつたので、福岡から久保澤さんが誘ひに來てくれ、午前十時半自動車で戸畑を立ち、正午飯塚代理店藤井氏の御宅へ着く。御主人は御病中で御目にかゝれなかつたが、令息善次氏同令夫人の御接待で鄭重なおもてなしを受けた。藤井家は此土地きつての名家で、代理店御引受を願つてから未だ數年にしかならないのであるが、近來非常なる發展で、殊に此夏の大募集には炎暑の中を善次氏自身先頭に立つて活躍され、素晴らしい成績を擧げたのである。伊藤進氏とは先代以來親戚づきあひで、伊藤家の先代が死去し、未亡人が年少の遺兒を抱へて途方にくれてゐる時、藤井家は後見人のやうな位置にあつて萬事の相談にあづかつた仲だといふ。藤井氏は古書畫に深い趣味を持つて居られ、逸品を拜見したが、こちらに鑑賞眼が足りないので、陶醉感を味ふ以外に適當なるほめ言葉を知らないのは遺憾だつた。やがて藤井伊藤兩氏に立派な旗亭へ御案内をうけ、兩氏おたしなみの義太夫を、盲目の師匠の三味線で聽いた。藤井氏は保險募集の爲に稽古を怠り、伊藤氏は市會議員に當選して

忙しく之亦久しく怠けてゐるとの御斷があつたが、いづれ劣らぬ巧者で、たつぷり拜聽した。席には伊藤母堂も見え、我子の爲に募集應援をした話をされた。夕方迄御馳走になり、又自動車で久保澤さんに送られ、戸畑へ戻つた。姉の家では、あまり歸（かへり）が遲いので待（まちくたび）疲れてゐた。この日も夜更迄皆で語りあつた。

九月十一日　姉の家の人達に別れ、午前九時下關發の急行に乘り、午後一時三十九分廣島着。支店樓上で全員集會に列し、一同揃つて宮島に行く。この日我海軍の飛行機が不幸にも宮島の大鳥居附近で墜落し、乘組員三名の中二名死去したと聞いた。恰も引潮時だつたので、お宮の前の干潟で記念撮影をし、會場岩惣へ赴く。廣い宴會場で、こゝにも他店に劣らぬかくし藝の持主がゐて、何時迄も賑かだつたが、他の店では指揮をする人があつて順序よく運んだのに反し、こゝでは各々勝手にうたひ踊り、自由放任の形式をとつた。席上下關事務所の岩崎金之助氏は卽興の謠曲をものし、自ら音吐朗々とうたつた。玆に紹介する。

明治生命十億達成を祝して

五十路を越えてふたとせの、五十路を越えてふたとせの

長きためしはいやましに、榮ゆる御代のしるしなれ（中略）

さても明治の古へに、ゆかりも深き旗じるし、たぐひ稀なるこのわざを、鄙も都も津々浦々も、浪路はるけき外國々も、くまなくちからうるほひて、十億四百八萬(とほくよもやま)のみのりの秋のかたり草、祝ふ今日こそ目立度けれ

又祝歌一首を頂いた。

日月(明)の光に十億四百八萬のみのりを祝ふ今日ぞ嬉しき

この晩は支店長と私と遠方の事務所の人達は宮島に泊つた。

九月十二日　早曉起床、紅葉谷(もみぢだに)を散歩し、朝食をすませて廣島へ引揚げ、午後一時四十六分の汽車で歸京の途についた。長崎邊で引込んだ風邪の爲に氣分が重く汽車の暑さが珍しく身にこたへた。尾道驛では募集に出張した岡山支店の松井副長と、同店の優績者山下忠弘氏に逢ひ、今月はきつとやつて見せますといふ確信にみちた言葉をきゝ、福山驛では同地事務所主任齋藤達吉氏の出迎をうけた。氏は元氣いつぱいの人だから、叩けば鳴るやうな強い言葉で自信を語つた。驛の直ぐ上には福山城が近々と聳え、雄壯な氣持で胸を打つのを感じ、發車の後ではあつたが、その高い城壁を私が指さすと、齋藤氏は私の心持を感得したといふ形で、幅の廣い胸を打つてうなづいた。

九月十三日　朝八時東京着。一度歸宅して、出社し、會長專務、川原林山下兩取締役に、出張中の見聞感想を報告して、日常擔當の事務を執つた。

――「社報」昭和八年九月號

修善寺

十月八日　横濱支店管内靜岡明保會（めいほくわい）の御招をうけて、午前十時十五分東京發の汽車で立つ。會場にえらばれた修善寺溫泉は、二十五六年前行つたゞけだから、さぞかし變つてゐるだらう。山にも野にも秋色の漲る頃だから、芒のなびく岡に上り、柿の實の紅玉の如く輝く野道を歩く事などを樂みに數へてゐたが、運惡く雨で、先づ行樂（かうらく）の出鼻を挫（くじ）かれてしまつた。

横濱驛から支店長副長醫長が乘り、車中横濱管内の近頃の募集狀況の頗る好轉して來た事を審（つぶ）さに聽く。乘替驛の三島で、沼津事務所の面々と落合ひ俄に賑かさを增した。伊豆地方は目下金山熱に浮かされてゐて、あちらでもこちらでも金鑛の發掘に熱中し、既に有望なる鑛脈にぶつかつたのもあり、權利の轉賣だけを目的とする山師もあり、たゞ見ては平和な山懷（やまふところ）にも、喜劇悲劇が交々（こもごも）上演されてゐるさうである。誰の心も同じで、かはりばんこに窓の外をのぞいては、天

氣を氣にし、この分なら晴れるだらうと云つてゐたが結局晴れるけしきもなく、修善寺に着いた。旅館新井では、先着の幹事靜岡代理店小林鐘次郎氏が萬事手際よく準備を整へ、行屆いた號令で指導される。靜岡は三百萬に垂んとする大代理店だが、店主小林氏は海軍主計大佐といふいかめしい經歴の方だから、江戸子のさらりとした風格の中にもおのづから規律を重んずる節々があらはれ、何から何迄順序よく運んだ。夫々の室割がきめてあつて、ひとおちつきおちつくと、直に大廣間に召集され、四十人に近い會員の會議があつた。私共御招をうけた者は別室で待つてゐたがやがてその席に列する事を許され、私と支店長と副長とが、いづれも二十分づゝの時間を頂いて所感を述べた。夜の宴會は六時から八時迄ときめてあり、それ迄は隨意行動となつてゐるので、一同入浴した。新井の家は古びて汚ないが、庭にはさびがつき、大きな鯉の泳ぎ廻る池の面に秋雨の落るのが、眺めあかない風情であつた。正六時に開宴、靜岡事務所の增井君(海軍出身)と沼津事務所の杉山君(陸軍出身)が餘興進行係で、伊東代理店の河野氏を筆頭に、社員側からは杉江君などといふ小憎らしい程くろつぽいのが現れ、かくし藝は二時間では出し切れない位だつたが、あくまでも規律の正しい此の會は、ひけ際もいさぎよく、さつぱりと宴を閉ぢた。私は自分にあてがはれた室に引取り、支店長副長靜岡事務所主任と雜談してゐると、其處に小林氏が加はられ、

いろいろ面白い御話をうかゞつた。私がこの數年間始終机を並べてゐる人事係の窪田重次君の父君が、海軍時代の小林氏の御仲間で、窪田君の媒酌人室田氏が靜岡代理店の保證人だといふ事もはじめて承つた。あの人の息子ならいゝ頭腦を持つてゐるでせうと、小林氏はしきりに舊友の子息の事にもおもひ及ばれる樣子だつた。小林氏の話ぶりは、洒落と皮肉とが間拍子よく織込まれた純粹の江戸辯で、近頃は稀にしか聞かれぬ響のいゝものだつた。この夜は、雨が降つてゐるのか止んだのか、庭を貫いて流れる水の音に消されてわからなかつた。

十月九日　雨は時々降つたが、雲は次第に切れて、日の光のもれる事がある。朝食の後、旅館の玄關前で記念寫眞をうつし、隨意解散の事になつた。私は沼津方面の代理店の方や、その地方受持の社員、支店長副長事務所主任といつしよに乘合自動車で、古奈長岡兩溫泉場を過ぎ三津海岸を通つて沼津へ出る道をとつた。長岡から三津へ出るトンネルを通過すると、櫻並木のつゞく傾斜面にかゝり、眼下に駿河灣が見える。これが晴天なら富士が見えて素晴しい景色なのだと誰かゞいふと、馬越さんは言下に、富士山は駿河で見るよりも甲斐で見る方がよいと言つた。同車の客は駿河方だから、いづれも承認しない色が見え、明かに馬越さんの失言だつた。此の場合蜀山人の狂歌を持出して優劣を斷ずるのが最も適切と思はれたけれど、良風にそむく惧があるので

見合せた。

三津の濱邊の美しさには、甲州贔負の馬越さんも異存も無く、かういふ風景に接すると、必ず亡き親に見せ度いと切におもふと云ふ感傷さへもらした。乘合の女車掌は道々名所の説明をしたが、車が靜浦にかゝると、こゝは靜浦で御座います、靜浦と申しますと、昨年オリンピックで優勝した小池禮三さんの出生地で御座います、と一段聲を張上げた。どうです、甲州から小池は出ないでせうと、未だ執念深く逆襲する人もあつた。

沼津で皆さんと別れ、店長と副長と私は東京行の汽車に乘つた。兎角多人數の會合は、豫定通りの時間では行はれず、だらだらする例が多いが、今回の靜岡明保會は始から終迄規律正しく、氣持よく散會した。之偏(これひとへ)に幹事の御力による事で、吾々にとつて何よりの御もてなしであつた。

——「社報」昭和八年十月號

函館――札幌

十二月四日　午後十時半上野を立つて北海道へ向ふ。淺學菲才の身を顧みて出張の效果を疑ふのは何時もの事だが、今度は殊に氣が進まなかつた。年末に際し來年度の新計畫、陽春の候の新館落成についての準備、いろいろ爲すべき事が多く、永く出張するわけには行かないので、何も此の忙しい體で滯在僅かに三日に過ぎない出張はあまりに釣合ひがとれないやうな氣がして、許されるものならば辭退し度いと思つた。おまけに、愈々出立ときまつたところへ、三日の夕方父方の叔母が腦溢血で人事不省に陷つた。この叔母には幼少の時から大變可愛がられた。私より三歳上のと一歳上のと二人の從兄があつたが、兄の方は數年前年始の廻禮に出た途上自動車に轢殺され、弟の方は昨年腎臟病で死に、兩方とも幼少の子供が多く、一家に男の大人がゐなくなつたので、私が叔母の相談相手になつてゐた。さういふ關係だから、萬一の場合には葬儀の世話もし

なければならないので、みすみす瀕死の病人を見捨てゝ旅立つのは心が咎めた。主治醫は絶對に回復の見込が無いといふので、私は思案にあまつて山下さんに電話をかけ、誰か代理の人を北海道へ差向けて頂き度いと願つて置いたが、翌日會社に行つて見ると、適當の代理者が無いから見合せてよいといふ同情のある言葉を頂いた。しかし私の机の上には札幌支店長が支店の外野陣へ發した手紙の寫が載つてゐた。それを見ると、向寒の今日此頃、北海道の平野で働いてゐる人々の姿がはつきりと想像され、その人々が私を待つて居てくれるときくと、俄に中止する心持にはなれなくなつた。私は運を天に任せるといふやうな氣持で、出立の決心をした。今度の出張は殊に氣が進まないといふのには、斯ういふ理由があるのである。いつも熟睡するのが、どうもうまく寢つかれなかつた。

十二月五日　朝七時仙臺を通過する。驛には支店長と副長がわざわざ出て來てくれた。今月は成績がよいといふ話だつた。

珍しい快晴で、山にも野にも風が無く、窓をあけても寒くなかつた。私は元來熱がりで、その上肉體を甘やかさない風習をつけ、この十數年毛織物のシャツを身につけた事がなく、家に在ては火鉢を用ひず、足袋もはかない生活をしてゐるので、先づ北海道行には身なりを整へる必要が

あつた。手袋を買ひ、靴下も厚いのを求め、シャツは二十年前に亞米利加で買つたやつを探し出して一着に及んだ。ところが汽車の中は無闇に人工熱を加へて熱く、たゞさへ氣持のよくない毛のシャツが汗ばんで頗る不愉快だ。私はのべつに窓をあけ、停車場に着く度に車外を散歩して息をついた。岩手縣に入ると風景は愈々荒寥として、折柄空も曇り、思ひもかけない霙が降りはじめた。遠く栗駒か岩手山か、雪を頂く山の姿がはつきりと冬を描き出した。

午後四時十分青森着。驛の歩廊で同窓の野村祐一氏に逢ふ。互に氣がつかなかつたが、同じ汽車に乘つてゐたのだ。氏は千島漁業及日本漁業會社員として北海の浪にもまれた經驗を持つてゐるので、四時間半の聯絡船の中でも、蟹工船の實驗談を聽いて少しも退屈しなかつた。津輕海峽はこの夜風波無く、汽車に在るよりも一層動搖を感じなかつた。出帆の時は、ちらちら雪が降つたが、途中雲が切れて月が出た。外套も着ずに甲板を散歩したが、少しも寒さを感じなかつた。

函館の船着場には野老支店長、函館事務所の人々、代理店渡邊家の御子息が御出迎へ下さつた。店長と事務所主任村田幸吉君につれられて、湯の川溫泉の福井館といふ宿屋に泊る。室内に二箇の煖爐があり、火鉢には炭を山盛りにし、溫室のやうなあつさで、私は又閉口してしまつた。入浴して來ると、直ぐにお膳が出て、烏賊のさしみと烏賊の粕漬で一銚子ついた。恰も十一月の締

切で二十萬圓突破の優績を擧げた若い主任は、締切の晩の酒程うまい物は無いと云つて、頗る盃を愛する風だつた。
就寢前に、煖爐を消してくれと頼んでみたが、女中は笑つてゐて相手にしなかつた。
十二月六日　この日は私の誕生日である。今年は老母を中心に、私が世話になつた人々の未亡人を招待して一夕を過し度いと計畫してゐたが、突然の出張で果さなかつた。朝早く、函館事務所を訪問する。事務所は我社の函館代理店渡邊熊四郎氏の御店の一部を拜借してゐるので、絶好の場所に在る。渡邊氏は百貨店を經營して居られ、その大ビルデイングは事務所の筋向ふに聳立し、朝から客の出入が夥しい。保險の方は三男源三郎氏が擔當し、今年一月以來八十萬の新契約を獲得し、年内壹百萬の記録を作らうと努力して居られ、總契約高五百萬に垂んとする大代理店である。同氏の御案内で、百貨店の方へ出向き、港内を見晴らす應接室で渡邊氏並に長男熊藏氏次男音次郎氏にも御目にかゝり、將來一層御後援あらん事を御願した。一應辭去して直ぐ近所の丸和代理店を訪問したが、皆さん御不在だつたので、受附に名刺を殘して引取る。
十時半から、五島軒ホテルで事務所全員と會合、支店長から十二月の募集計畫の話があり、私も簡單な挨拶をしたが、挨拶中に早くも御客様が見えたので中途で切上げ、渡邊氏父子及丸和の

上野耕作氏を圍んで、事務所員と晝飯を共にした。食事が終ると、あわたゞしく出立しなければならなかつた。零時半、支店長と村田主任と私とは、小樽へ向つて走る車中に在つた。函館を出はなれると、忽ち廣い山野となり、細かい雪が横なぐりに降りはじめ、見る見るうちに窓外は雪景色となつた。右手に聳ゆる駒ヶ嶽の雄姿も、正に凍らんとする大沼も、次第に雪の底にかくれんとし、人氣（ひとけ）のない北海道は暮色に包まれて來た。

六時二十四分小樽着。代理店の方や、事務所の人々の外に札幌帝大の經濟學教授早川三代治氏と同窓の山口雄二氏の出迎をうけた。山口氏とは二十餘年目の對面であつたが、同氏は此夜吾々がお客をする越中屋ホテルの經營に任じてゐるのであつた。まことに不思議な御緣である。村田主任は札幌に先行した。

ホテルには、小樽代理店廣谷敏藏氏、室代理店室晴次郎氏、三ツ野代理店保險係、三菱商事支店長小本五郎氏、三菱鑛業田村行夫氏、旭硝子出張所長渡邊英孝氏を御招きし、主人側は支店長と私の外に小樽事務所主任遠山鶴彦氏と同事務所員秋野雄次郎氏が加はつた。遠山主任は往年飯村準一氏を向ふに廻して第一位を爭ひ、東に飯村、西に遠山（地理上の東西でなく、角技の東西と同じものと考へて下さい）とうたはれた勇士であるが、此の人の募集に關する逸話は山の如くあ

る。その中で最も機智に富み、愉快極まりないのは、曾て北海道帝大の總長佐藤昌介氏が教會で「求めよ、さらば與へられん」といふ演題で講話されたのを聽き、翌日直に帝大の總長室に募集に赴いたといふ話である。佐藤先生は氏の機智と其のひとゝなりを愛し、爾來遠山氏の有力なる後援者となつた。この晩も食卓の話題の中心は遠山氏で、明朗快活なる話振で談笑の泉を供給した。

九時小樽發、十時札幌着。

店長副長に導かれ山形屋といふ旅館に鞄を下したが、兩氏が十一月締切の模樣を見に店へ行くといふので、自分も同行する事にした。雪は既に深く積り、尚霏々として面を打つた。支店の事務室では、若い社員が忙しく事務をとつてゐた。札幌支店の成績は壹百參萬圓、昨年同月に比し三十四萬圓の增加であつた。支店長副長の喜びはいふ迄もないが、山積する仕事にわき目をふる暇も無い內勤諸氏も、我身の事のやうに緊張し、欣然として夜業をつゞけてゐた。

汽車が上野をはなれた時から、絕えず私を不安に置いた叔母の病狀は變化がないと見えて、ひそかに惧れてゐた悲電には接せず、大阪が二百二十四萬、神戶が八十二萬、大連が七十二萬の優績を擧げたといふ吉報に接した。宿に歸つて寢床に入ると間もなく、女中がかけて來て、只今支店から電話がありました。名古屋支店からあなた宛の電報が入りました。電文は「ヤウヤクニテ

一九〇マンセイリツス」といふのですと知らせてくれた。

十二月七日　雪は止んで、朝日がかゞやかしく、窓をあけても少しも寒くなかつた。それよりも室内の煖爐の熱さには引つゞき悩まされた。不思議な事には湯の川でも札幌でも、室内を飛ぶ蚊を發見した。野老さんの話では、北海道では冬になつて蚤が出て來るといふ事だつた。いかに煖爐のあつさがはげしく、蚤や蚊も私同様閉口してゐるかゞわかり、人を刺す力もなく飛び迷つてゐる姿に同情した。

宿にゐても全國の締切が氣にかゝるので、出勤の途中立寄つてくれた店長と同道で店に行く。內勤の人の中には昨夜徹宵執務し、今曉六時に及んだ人もあつたさうである。しかし別段へたばつた様子もなく、各地から歸店した外野の人々に元氣よく應接してゐた。この店の內勤程年齢の若いのは他に例がなく、したがつて威勢のいゝ事も第一である。

まだ本店からの電報は來ないが、各地の情報は頗る有望らしい。月初めに私は獨斷で各外野鬪士に書面を出し、是非共二千萬達成を期し度いと申送つてゐるので、勝つか負るか、自分が勝敗を爭つてゐるやうな氣持である。少しの時間を利用し、大坪さんの案內で市中をドライブした。北海道帝大、札幌神社、中島公園いづれも雪景色で、市內の廣い街路を馬橇が鈴を鳴らして通る

のも趣が深かつた。

午後、事務所主任の會議に列し、終つて一息ついたところへ、電報が來た。

二〇〇〇マントツパジツゲンス　ドウケイニタヘズ　ヤマシタ

やつたなと思ふと同時に、不覺にも眼の中が熱くなつた。電報を受取る度に叔母が死んだのではないかと想ひ想ひ開くと、それが各支店の優績の知らせで、最後に此の吉報が到來したのだから、思はずしらず感激が高まつたのであらう。支店長と互に祝辭を取交した。

二時半から開かれた社員會では、私も自分の抱負を語る機會を與へられた。夜は西の宮といふ料亭で社員慰勞會があり、料理はすべて道產物を用ひ、生鱈（なまたら）の昆布締め、帆立貝のフライなどゝいふ珍しい物が出た。酌人も道產ですかときいたら、大部分さうだといふ事だつた。宜（むべ）なるかな「北州」をうたふのが「霞の衣いもん坂」と甚しい訛をきかせた。各事務所勇士のかくし藝がさかんに出て、函館事務所の工藤さんのやうなくろつぽいのがあらはれるかと思ふと、村田主任を先頭に、寒さを忘れた裸踊の行列が座敷中を練步く。

席上で本社からの各店別成績電報が朗讀され、大阪二百二十四萬、名古屋百九十萬と披露されると、期せずして拍手が起り、札幌自店の成績には感極まつて、わあつと歡聲があがつた。最後

に十二月壹百二十萬の達成を誓ひ、萬歳を齊唱した。乍然汽車の時間が迫つて來たので、私は皆に別れを告げ、小樽へ歸る遠山氏、函館へ歸る村田氏と共に、九時四十分の急行で歸途に着いた。

停車場へ見送りに來た大坪さんは、若し十二月に美事百二十萬を突破したら、新年の社員會に菰かぶり一樽を寄贈せよといふので、私は快諾した。汽車が小樽に着き、遠山主任が下車する迄、吾々は談笑をつゞけた。

十二月八日　朝六時二十二分函館着。再び渡邊源三郎氏の御見送を受け、事務所の人々を岸壁に殘して、一人聯絡船上の客となつた。今度も海峽の波は靜に、無風快晴で、私は四時間半の大半を甲板の散歩で費した。十二時、青森に着くと、仙臺支店青森事務所主任岩崎與八郎氏が待受けてゐて、驛の食堂で辨當を食べながら、一時間半を退屈知らずで過した。岩崎氏は前日仙臺支店の主任會議に赴き、私の旅程を知り、たつた今歸着すると直ぐにかけつけてくれたのであつた。仙臺支店は、十二月には昨年の百七十萬の記錄を破る事を目標に、各主任も必死の奮闘を誓つたといふ話だつた。岩崎主任は元海軍にゐた人であるが、親しく談話をしてゐるうちに頗る味の深い話を聞かせてくれた。氏は結婚記念に保險契約をし、五人の子供の出生毎に契約し、更に結婚十年を祝ふ心で契約するといふ風に、事ある毎に契約して今は二萬圓近い契約を持つて居るとい

ふ。父子供を喜ばせる爲に家には果樹を多く植ゑてゐるといふのも、奥床しい心がけである。我家の庭に梨があり、林檎がなるといふのは子供にとつて深い喜びに違ひ無い。かゝる遠き慮を持つ人を父とする子等は、多幸といはねばならぬ。私は浪費癖の強い自分の平生を顧みて恥入つた。

一時半青森發。途中盛岡驛で恰も仙臺から戻つて來た同地事務所主任菊池傳治氏にあつた。元氣のいゝ話を土産にして、一路東京へ向つた。

十二月九日　午前六時五十分上野着。直に叔母の家にかけつけると、夙に醫師に見放されたといふのに、奇蹟的にも人事不省の儘私の歸りを待つてゐてくれた。せめては自分の歸つて來る迄息のあるやうにと念じてゐたので、人の一念といふものは不思議な力をあらはすのではないかと思つた。

——「社報」昭和八年十二月號

臺灣

六月十日　午後九時二十五分東京驛發。恰も副長會議に上京してゐた臺北出張所副長阿部威氏と同行なので、汽車汽船一切の面倒を御願ひした。車中には大阪の小野蠣崎兩副長も在つて、今回突然發表された東西對抗募集について協議をし、互に勝利を誓つた。從來東西對抗といへば、東の山下さんに對し西は川原林さんときまつてゐたのだが、川原林さんは契約決定の仕事を擔當して居られるので、公平を期する意味から辭退され、俄に私が西軍總司令官に任ぜられた。まことに名譽の事であるが、既に臺灣行がきまつてゐたので、この重責に對し申譯無い氣持がする。西軍の副長諸君も、この際南端の島へ行つてしまふのは全軍の士氣に關するから旅行を延期してくれといふのであつた。さりとて臺灣の方も急いで決定しなければならない事柄があるので、こゝに來て又延期といふ譯には行かない。私は西軍各店長副長に信賴し、大阪支店に情報部を依賴して、

豫定の通り出立したのである。なあに、勝つて見せますよと、副長連は確信あるものゝ如くいふのであるが、從來西軍の勝利は稀有の事で、今年も今迄の成績を比較すると、些か歩が悪いのである。内輪同志の爭を、單なる内輪爭とは考へず、業界制覇の一段階を進める爲の鬪爭と見てゐる私は、是非ともたゝかひ勝つて初陣の功名をしたいと願つた。車中で鳩首協議した所以である。

十一日　大阪で兩副長に別れ、九時四十分神戸に着くと直に瑞穗丸に乘船した。そこへ神戸支店の小林副長が來、副長が歸ると山名支店長が見えた。萬事引受るから安心して行つていらつしやいといふ山名さんに見送られ、船は正午に岩壁を離れた。私は過去の經驗上、隨分ひどいしけにも出會したが未だ一度も船暈に苦しんだ事がなく、船の旅なら幾日でも結構だと思つてゐるので、さかんに甲板を歩き廻つて、新鮮な海氣を吸つた。この日愉快だつたのは同船の客で、同じ食卓に着いた人達と名刺を交換したところ、八人の中五人迄が我社の大口契約者だつた事だ。もつともその中の一人からは、あなたの會社は勉強が足りません。自分は三十年前に契約したが其後一度も訪問をうけないので、家族の者は皆他社に入れてしまひましたといふ手痛い言葉を聞かされた。何とも辯解の辭が無いので、今後は精々しつつこく參上しますから、澤山御契約を願ひ度いといつて頭を下げた。同卓の人々はいづれも臺灣馴れた人で、二十年三十年と住みついた人もあ

つた。私が初渡臺と知つて、いろいろ注意を與へてくれるのであるが、各人各説で、いづれに從ふ可きか迷はざるを得ない。たとへば甲氏は、臺灣では先づ飲食物に注意し、萬全を期するならば果物を喰べないのが一番よいといふ。乙氏は、それは昔の臺灣の事で、今では何も恐るべきものは無い。マラリヤなんか罹りたくても罹れないといふ。一人が臺灣は濕度が高く、早曉から夜中迄一定の溫度でとても堪へられないと敎へてくれると、他の人は臺灣は暑い事は暑いが空氣が乾燥してゐる上に、夕立が多く、朝晩の風が涼しいから內地よりも樂だといふ。右と左の極端な意見の雙方に眞實があり、同時に雙方に噓が含まれてゐるのであらうと推測した。

十二日　朝早く門司に着く。正午の出帆迄に時間があるので、上陸する人もあつたが、私は甲板の籐椅子に寢て潮風に吹かれ、日頃の忙しく煩はしい生活を忘れて、贅澤な休息をとつた。船にゐれば、不意にたづねて來る人もなく、電話に呼出される事も無い。尤も電報は頻々と來た。どれもこれも西軍支店出張所事務所からのもので、どれもこれも必勝を誓ふものであつた。殊に勇氣凜々たるは、一番最初に受取つた基隆事務所主任永田氏と高雄事務所主任岩崎氏のものであつた。私の出張を歡迎してくれるのは難有いが、お祭月にしてくれるなと前以て希望して置いたのに對し、兩方とも三十萬以上の擧績を誓ふ意味のものであつた。

十三日　終日たゞ海を見る。暑熱の臺灣の、殊に六月は最も暑さきびしいときくが、その途中の海上は涼しく、もつたいない位だつた。おまけに波浪はたゝず、微風にさゞ波が光るだけで、どんな船嫌ひでも船暈に惱む事はあるまいと思はれた。ところが、私の船室の隣で、しきりに嘔吐の氣配がする。それが佐世保の海軍技師なのである。この人の話では、多年海軍の建築技師をしてゐるが、生來船に弱くて閉口するといふ事だつた。私は先頃雜誌で讀んだ知識で、船暈は腦貧血ださうだから逆立ちをすれば癒るさうですと勸め、ひそかにその效驗をためしてみたいと思つたが、不幸にして此の學說に信を置かない樣子で、船暈は胃腸病の爲だともいふし、精神的のものだともいふから逆立ちでは駄目でせうといふ答であつた。ついでに、阿部副長も船には弱いと聞いてゐるので、何とかして逆立ちさせて見度いと願つたが、あまりに海上平穩で、少しも醉つた風は無く、元氣いつぱいなので、遂に新知識も立證の機會を與へられなかつた。

十四日　午後一時半基隆着。港口を入ると忽ち蒸されるやうな暑氣につゝまれ、全身汗になつた。自然の港を成す岬が大海の風をさへぎり、岩壁の反射は強烈に目を刺戟する。その岩壁に集まる出迎人の中に、元の同僚で、今は××××に居る齋藤弘介氏の禿頭が一番早く目についた。梅田出張所長、具島、永田主任その他社員の出迎をうけ、連絡の汽車で臺北へ向ふ。忽ち車窓にう

つる風景は一變した。港には支那風のヂヤンクやサンパンが右往左往し、山にも野にも珍奇な草木がしげり、水田には水牛が耕作を助けてゐる。しかも日光は強烈で、土の色は赤く、緑は深い。榕樹、相思樹、鳳凰木、マンゴオ、龍眼等のつくり出す風景は、十分異國趣味を滿足させてくれる。私は窓から首を出して新發見の植物の名を問ひ、そんな事に興味を持たない諸君を惱ました。

臺北へ着くと、同業會社の方々の御出迎をうけた。これは臺灣生命保險協會の慣習だといふ事であつた。自動車に乘ると、直ぐ目の前のホテルには行かず先づ第一に臺灣神社へ參拜した。凡そ臺灣へ足を踏入れた者は、何よりも先にこゝにおまゐりしなければならないと、梅田さんは說いた。靑巒を負ひ、碧潭に臨むといひ度いのだが、川の水は稍濁つてゐた。しかし臺北平野を一眸に收める風景は正に絕佳である。參拜し終つてホテルへ行く筈であつたが、未だ營業時間内なので、出張所へ行くのを先にした。

臺北出張所は二十年前開設せられ、當時十數人の所員で全島の開拓に當つた頃の建物で、夙に狹隘を告るばかりでなく、白蟻の害を受けて危險な狀態に陷つてゐるので、新築の必要を感じ、先年臺北驛に近く、鐵道ホテルの前面の角地面約三百坪を購つたが、今日迄實行に移らず、その爲に現在七十餘名の大所帶となり、月々七八十萬圓の契約を獲得する店としては、全く使用に堪

へなくなつてゐる。その實狀を見、建築の時期を定める事も私の特に命ぜられた任務だつた。一階の事務室は什器と人で寸尺の餘裕もなく、お客と外野の人が同時に落合ふと、カウンタアの前丈では收容の餘地がないから、往來か裏の小使部屋の方かにはみ出さなければならない有樣だ。若し二階三階に全所員が上つたら、ぐらぐらと來さうな屋臺骨で、試みに柱を叩いてみると、白蟻の被害の爲に空洞のやうな音がする。居合せた人達と挨拶を交し、暫時休息した上で、建築敷地を見に行つた。

この日は夕立があつて涼しく、こんなに涼しいところなら來年は避暑に來ると冗談をいふ程だつた。

十五日　この日も少し雨があつて、想像した程の暑さでは無かつた。正午、同業會社の方々をホテルへ御招して臺灣談を伺つた。

臺北の市街は、道路は廣く、並樹は美しく、極めて清潔である。これで暑さがきびしくなければ、散歩にはもつて來いだと思はれるが、流石に一歩戸外に出ると忽ちシャツは汗になつた。市内事務所を訪問したが、鬪士はいづれも寸刻を惜んで活躍してゐるので、誰一人ゐなかつた。

十六日　出張所の帳簿檢査を行ふ。さかんなる夕立が幾度かやつて來て、道路を洗ひ、涼風を

送つた。私が臺灣は涼しい涼しいといふので、こんなに涼しい日のつゞくのは稀有の事で、萬一この儘歸京して臺灣は涼しい處だと報告されては困ると、店長はじめ皆が不平さうにいふのだつた。市内各代理店を訪問し、總務長官々邸にも刺を通じた。平塚長官は來客中だつたが、私の日程を聞き、各地方に電話をかけて便利をはかつて下さつた。

夜、蓬萊閣といふ臺灣料理屋で、市内及基隆事務所員並に内勤員一堂に會し、店長の挨拶の後私も立ち、會社最近の動向を語つて明治生命の再認識を求め、更に私の初渡臺をお祭に終らせず、新記録を作つて土産に持歸らせて頂きたいと述べたところ、永田主任一同を代表して百萬必成を宣言して拍手を浴びた。宴席には笛、胡弓、鉦鼓を合奏する男の樂師があらはれ、その交響樂に和して藝妲が歌つた。歌詞は元より解し兼るが、悲氣の感情は推測する事が出來て大變面白かつた。料理は元々支那料理に違ひ無いが、暑氣のはげしい影響であらう、味は稍淡白で、汁氣のものが多いやうに思つた。その後の旅行中の經驗によつてもこの觀察は間違つてゐないやうだつた。

十七日　日曜なので、梅田店長阿部副長と角坂山に上る。桃園迄汽車、大溪迄自動車、その先は臺灣特有の臺車だ。臺車は卽ちトロッコで、上等のものは籐椅子がとりつけてあるが、普通のは麥酒箱位のものに三人四人腰かけ、それを人夫が後から押すのである。私が幼少の頃、伊豆の

熱海に行くには小田原から人車といふものに乗つたが、臺車はそれよりも遙かに原始的のものだ。しかし、これが臺灣開拓に盡した功績は非常なもので、今尙山地や農村では、その便利を享受してゐるのである。吾々はその上等の籐椅子の方で、しかも肥満體のおかげで二人乘を一人で占めたから、最も贅澤な客となつた。驚く可きは人夫の體力で、約三時間の山路を、僅に三四回休息するばかりで、千二百尺の山頂迄押上つてしまふ。たまたま下坂にかゝると後部の踏臺に乘つて力を用ひずに快走するが、傾斜のゆるい上坂位は、かけ足で通してしまふのである。それが跣足で、石塊や石炭殼の上を平氣でふんでゆく。恐らく彼等の足の裏は、吾々の靴底の如く堅いのであらう。悠然と椅子に倚つて四圍の風景を樂しみながら、汗を流して押してゐる人夫の呼吸をきくと、流石にいゝ氣持はしなかつた。近頃大溪の橋梁工事が完成し、開通式の行はれた直後なので、近在から押出す見物人が多く、中には角坂山の蕃社から下りて來る者もすくなくなかつた。女でも老人でも幼童でも、實に輕妙迅速に坂道を上下する。頂上近くなつて俄に曇つて雨となつた。貴賓館といふので休息し、旅館薰風館から運んで來た晝食を認め、薰風館主で元巡査として永く蕃地に駐在した人の、討伐時代の話をきいた。一時の夕立かと思つたのが何時迄も晴れず、かへつて量を増すばかりなので、思ひ切つて下山ときめ、幌をかけた臺車の中に、窮屈に納まつ

た。途中私の乘つた車は一寸脫線したが、顚覆する程の事ではなく、直に滑かに走り出した。今日も雨のおかげで涼しく、ホテルの庭の池には蛙が馬鹿に大仰な聲で鳴きつゞけた。

十八日　朝八時半臺北發、臺中へ赴く。車中醫員重松英雄氏といつしよになる。すこしからだに故障があるが、診査請求が殺到して休んではゐられないといふ話だつた。二十貫もあらうといふ體格で、どんな山地僻村をも厭はず、明治の重松さん程よく働く人は無いと、他社の人達も驚嘆してゐるさうである。

車窓から見る農村の風景は珍しかつた。六月といふのに稻はみのり、旣にとり入れが濟んで、二期米の植つけにかゝるところもある。聞けば南部では、年に三度米のとれるところもあるさうである。水田の在るところには必ず水牛がゐる。耕作に從つてゐるもの、水中に身を沈めて休息してゐるもの、中には背中に白頭鵠(ぺたこ)や白鷺をのせて、平然として雜草を喰べてゐるのもある。背中の鳥はうるさい小虫をついばんでくれるので、水牛も之を歡迎するものらしい。但し必ず一羽限りで、恰も嚴然たる繩張があるやうである。

臺北を出る時は晴れてゐたが、途中から降出し、臺中へ着いた時は沛然たる大雨となつた。此地は芭蕉實の主産地だから、附近の家の庭にも、いつぱい實をつけたのが繁つてゐる。宿の庭に

は、マンゴオもあつた。

一休して雨の晴れるのを待ち、具島種三郎氏を主任とする事務所へ行き、所員一同とつれ立つて公園内の臺中神社に參拜し、記念撮影をした。雨後の涼しさに、うちつれて水道水源地を見に行く。この水源地は掘井戸で地下水をとり、電力應用の喞筒(ポンプ)で貯水塔に引上げるしかけになつてゐて、一寸類の無いものだつた。

夕方から日之本といふ料亭で事務所全員の會合を催し、私は又會社の近時の指導精神を述べ、且臺北出張所百萬達成の努力を願つた。臺中事務所は十二人の鬪士の中、內地人は僅に四人に過ぎないといふ特色がある。この傾向がどう發展するかは頗る興味のある問題で、店長の深く留意すべきところと思ふのである。この晚の會合は十數人に過ぎなかつたけれど、會社の將來について互の覺悟を定めようとする熱情が一致し、非常に愉快だつた。日之本では和洋混合の料理が出たが、それよりも私が好物だと語つた爲社員張庚城氏がわざわざ車を走(は)せて自宅の庭からもいで來てくれた茘子(らいちい)の味がよく、私は具島さんが心配する程むさぼり喰つた。宴會が濟んで歸らうとすると、本島人諸君の發起で臺灣料理屋へ私を招待したいといふ申出に接した。一應御斷したけれど、既に先方にも申入れ、自動車も來て居るといふので、全員揃つて醉月樓といふ

のに行く。臺北の蓬萊閣の時と同じく樂人が來、藝姐がうたつた。梅田さんは平常深く酒をたしなまず、極めて謹嚴な人であるが、この日は愉快だといつて盃を重ね、宿へ歸る道では足許がふらついた。店長がこんなに飲んだのははじめてですと、具島さんは繰返して云つた。

夜は涼しく、壁間のやもりがよもすがら啼きかはした。その聲は蛙に似て、旅愁をそゝるものがある。留守宅の子供病氣の報に接す。

十九日　朝早くから市内三代理店を訪問する。彰化銀行の坂本素魯哉氏は御留守だつたが、間もなく宿の方へおたづね下さつた。臺中代理店安土氏には御玄關で御目にかゝり、邸後に住むその保險係の井上さんに刺を通じた。井上さんは代理店會に度々出席された舊知で、私の訪問を喜ばれ、近年成績振はず申譯無いが、今年は大に活躍して、來春は本店の新館を見物に行きますと誓はれた。正午臺中發、嘉義に赴く。駐在社員竹中十次郎氏の出迎をうけ、宿に休息の暇もなく代理店訪問に出かけたが、いづれも御留守なので、その足で營林所嘉義製材所を見物した。時間外ではあつたけれど、平塚長官の御聲がゝりで、叮重に案内された。こゝは日本一の規模を有する製材所で、阿里山（ありさん）から搬出される木材を貯水池から引上げ、截斷機にかけて角材とする迄の工程を見せてくれた。その上阿里山登山の便利をはかつて戴き、山頂の宿の事や、檜伐採の實況見物

などの打合せ迄して貰つた。次に有名な吳鳳廟に參拜する。吳鳳は今から二百餘年前の阿里山蕃の通事で、蕃人の心服する人物だつた。何とかして首狩の弊風を矯正しようと努めたがその甲斐なく、遂に一身を犧牲として目的を達せんと決し、變裝して蕃人の兇手に倒れた。蕃人は誤つて自分達の尊敬する人を殺した罪に心を攻められてゐる折柄、惡疫大に流行し死者夥しく、爲に全社震駭して吳鳳を殺した天譴なりとし、その靈をまつると共に、爾後全く馘首の風を絕つに至つたと傳へられる。

夜、代理店森藤三氏特約店林朴根氏が來訪され、臺灣島內の事情をいろいろ伺つた。林氏は阿里山を國立公園にしようとする運動の指導者の一人で、その目的貫徹の爲に創刊された「新高阿里山」といふ雜誌を持參された。

二十日　朝八時半阿里山登山鐵道に乘る。又しても雨に降られたが、強行する事にきめた。同車には陸軍將校、明大自動車部學生などがゐて滿員だつた。阿里山は獨立した山の姿ではなく、新高の西方に連なる山々の總稱である。約七十のトンネルをくゞり、五時間餘を費して上るのであるが、山中の都ともいふ可き阿里山驛のあるところが、海拔七千尺で、臺灣に在りながら暑さを知らぬ所である。吾々は大雨の中を、檜伐採の實況見物に行つた。これも平塚長官の威勢によ

るものか、樹齢五百年と稱さるゝ大樹を、簑笠を着た老いたる樵夫が、たつた一人で鋸を引いて、谷間に伐落した。見上るばかりの大木がゆらゆらゆらぎ、はげしい音を立てゝ倒れる時、何ともいへぬ芳香が四邊に散つた。三十三間堂棟木の由來といふやうな文學に養はれてゐる吾々の感情は、この老木の最後に對して寂寞と哀愁を覺えた。誰も彼も相顧みて、あまりいゝ氣持はしませんねとさゝやきあつた。次には遙かに向ふの山で伐つた木を、こちらの山へ引上げる作業と、一本の繩で自在に梢へ上るはなれわざを見せてくれた。

阿里山には先年大山火事があつて、原始林を燒き、大損害をうけた事があり、又屢々盗伐の被害があるので、到る所に防火、戒盗、殖林奬勵の建札がある。たとへば「盗伐一枝則是終世之恥」「一人造林則是全衆之保險」の如きもので、之を手帖に控へて梅田さんに見せたところ、流石に商賣柄いゝ文句を見つけましたねえと笑はれた。

雨で全身濡れてしまつたが、阿里山倶樂部に着くと風呂が沸いてゐて、しかも煖爐には薪を燃し、火鉢を運んで溫めてくれた。晩の御馳走も鳥鍋で、あついどてらを着て之を圍んだ時は、臺灣風景を全く離れてゐた。いつたい臺灣には、魚類も野菜も豐富にあるが、遺憾ながら味は頗るまづい。どんな上手な料理人でも、この材料では方法があるまいと思ふ位だ。ところが阿里山頂

は溫帶だから、ふろ吹の大根はきめがこまかくて內地のものにまさるとも劣らず、その外、筍(たけのこ)、生椎茸(なましひたけ)、わらびなど、いづれもよい風味を持つてゐた。梅田さんも私も、その後の旅行の先々迄、阿里山の野菜は結構でしたねえと思ひ出しては語合つた。明朝天氣ならば、早曉四時に起きて祝山といふのに登り、新高の峰の彼方にあがる日の出を見ようといふので、割合に早く就床したが、綿の厚い夜具と毛布では汗ばみ、これをぬぐと寒く、なかなか寢つかれなかつた。

二十一日　約束の四時に目を覺まし、窓をあけて見ると細雨が煙のやうに降つてゐるので、登山は駄目と一人できめて又眠つた。六時頃、もう一度窓をあけてみると、雨は止んで、雲切れがして來た。他の室の人の聲も聞えるので、その儘床を離れ、顏を洗つてゐると、女中がかけて來て、これから祝山へ登るから直ぐに支度をしてくれとせき立てる。あわてゝ身支度をして出て行くと、昨日同車の客達はもう玄關の外に出てゐる。案內人の說明をきゝながら雨後の山路を辿る事十八丁、海拔八千二百尺の高峰に立つと、目の前に新高の雄姿があらはれた。殘念ながら雲が深く、朝日の光は望めなかつた。時間が無いので廻道はせず、急いで宿へ戾つて朝飯にありついた。

嘉義の宿へ歸へると電報が來てゐて、一昨日訪問した臺中代理店の保險係井上さんが急死した

といふ知らせだ。來年の四月東京で逢はうと約束して來たが、まるで夢のやうな話だ。早速弔電を送る。

午後四時四十六分嘉義發。臺南へ赴く。社員岩谷隆智、末吉勇造二氏の出迎をうけ、宿で食事を共にしながら、當地方の話をきく。

二十二日　代理店角谷力男氏、特約店黃國棟氏を訪問し、市内の名所を一巡した。臺南神社は北白川宮を奉祀する。宮は此の神社の境内で薨去されたのである。孔子廟、開山神社、糖業試驗所、赤崁樓、五妃廟などとりどりに面白く、流石に歴史の古い市街の事とて、見るところは澤山ある。中で、赤崁樓は西歴千六百二十四年蘭人の建設にかゝり、一名紅毛樓と稱される。芝居でお馴染の鄭成功が政務を見た所だ。五妃廟は明の寧靜王戰破れて死を決した時、節を守つて王の自刎に先んじて縊死した五人の妃をまつつたものである。臺灣の女學校の讀本にも載つてゐるさうであるが、當今の女學生は、一人の王が五人の妃をもつてゐたといふ事に道德的嫌惡を感じて、あまり同情しないさうである。市中をはなれて安平港にゆく。安平城趾にはルンペン風の人間が、日かげを求めて群つてゐた。清佛戰爭後基隆淡水高雄と共に四大港と稱され、外國貿易の盛に行はれた土地も、年々港口が閉塞して大船の碇泊困難となり、繁榮は高雄に奪はれてしまつた。附

近には鹽田があり、養魚池があつて、風景は面白い。降りつづいた雨も昨日からあがつて、暑氣は俄にきびしくなつた。

晝食は特約店黄國棟氏の御馳走になつた。黄氏は醫を業とし、門前市をなす御多忙の中で、保險の使命を痛感され、親切熱心に後援されるのである。非常なるおもてなしにあづかつたが、時間がなくなつたので、あわてゝ辭去し、十二時二十分臺南を出發した。

高雄では代理店及事務所の人達の出迎をうけ、一應宿に荷を下したが、直に各代理店を訪問し、事務所にも立寄り、又平塚長官の厚志による市廳の小蒸氣で港内港外を見物し、更に自動車を驅つて壽山に登つた。からつと晴れた山頂から、廣い入江をつくる紺碧の海を望む風景は雄大で、又市街を俯瞰すれば物資の集散地としても工業地としても近時斷然他を壓してゐる若々しい活氣が立昇り、他地方とは別種の趣を觀取する事が出來る。古都臺南を京都に、政治機關の中心たる臺北を東京に比すれば、さしづめ高雄は商工業都大阪であらう。セメント工場の烟は、明朗なる景色に一抹の灰色をなすつて、壽山の裾迄流れて來る。

夕刻から、海岸の千鳥といふ家で事務所全員の會合があり、西日の強くさしこむ室で、私の長談義を聞いて貰つた。この事務所は臺中と違つて内地人が多く、岩崎主任の行屆いた統率で頗る

緊張してゐる。宴會には特に代理店船橋武雄葉鴻猷兩氏にも御出を願ひ、御馳走は手薄だつたが、賑やかな事であつた。その上私は、兩氏の御案內で高雄樓で臺灣料理を御馳走になつた。葉氏は臺南の黃氏と同じく頗る繁昌する醫家だから、電話で度々迎が來、宴席を立つて患者を見に行かれては又戾る事數度に及んだ。まことに御手厚い接待だつた。

臺灣は涼しいと宣言してゐた私も、この晚は寢苦しく、枕も敷布も汗でびつしよりになつた。梅田さんも眠れないと見えて、しきりに團扇を動かす音が聞えた。

二十三日　前日にまさる暑氣となつた。今に思ひ知るだらうといつた人々の言葉通りになつて來た。この日は岩崎氏も加つて、日本の最南端と稱さるゝ鵝鑾鼻(がらんぴん)に行く事になつた。私としては追々〆切近くなる時に、主任が旅に出ては數字に關係しやあしないかといふ心配があるので、やめて貰はうとつとめたが、岩崎氏は旣に今月三十萬は確實の見込が立つたから、御心配には及ばないといふのだつた。基隆は三十五萬だといふし、臺中は私の面前で三十萬を約束されたので、一番氣勢のあがらないといふ市內が最後迄好轉しないとしても、出張所壹百萬は夢ではなくなつたやうである。しかし臺北の今迄の最高記錄は八十四萬で、百萬には開きが大き過るから、梅田さんは俄に信用せず、先づ概算九十萬と睨んでゐた。私は強氣で、各主任全所員の意

氣と誓言を信じ、西部友軍にも臺北百萬確實の電報を打つた。

溪州迄汽車、それから二十四里を自動車で飛ばすのだが、道路は廣く、並木は美しく、海岸の原始林も珍しく、少しもたいくつしずに燈臺迄到着した。鵞鑾鼻は臺灣八景の一に數へられてゐるが、景色としては左程のものではなく、ただ我國の南の果に來たといふ快感に陶醉し得るだけである。はげしい熱帶の日光を浴び、色彩の強烈な海景を前にして晝食を認め、歸途種畜所を見物し、四重溪溫泉に宿を求めた。附近には明治七年陸軍中將西鄉從道を都督とする討蕃隊が兇蕃牡丹社と激戰した石門の古跡がある。溫泉は噴出量多く、透明で、稍熱いのも氣持がよかつた。月明の夜で谷間のくさむらに虫が啼きしきり、窓をあけると寒い位だつた。

二十四日　朝七時出立。溪州迄自動車、溪州から屛東迄鐵路による。屛東驛で下車すると、後から追かけて來た男が、私を阿部だと確めてから、田島ですと名告つた。七年前に學校を卒業すると直ぐに臺灣製糖會社に入社渡臺した、私の弟の亡妻の親戚にあたる人である。この人ならば同じ溪州の驛で汽車を待合せてゐたのだが、彼は私の年をとつたのと、高雄方面から來るものとのみ思つてゐたゝめ認定をあやまり、私は彼が臺灣色になり且製糖會社の灰色の粗服に同色のヘルメツトの制服を承知してゐなかつたので、本島人だとばかり思つてゐたのだ。勤務地は東港で

あるが、私が今日製糖會社を訪問する事を會社から聞込み、案内役を買つて出て來たのである。會社は製糖期でなく、おまけに日曜なので、ひつそりしてゐたが、庶務主任の鶴作次氏の説明で一巡した。先づ第一番につれて行かれるのが、この會社自慢の瑞竹である。今上陛下がまだ東宮におはしました頃、大正十二年臺灣に行啓あらせられた時、製糖會社も御見學になられた。當時御休所として臺灣物産の麻竹を柱として小亭を作つたが、行啓數日前、伐採後四十日を經た柱の節々から芽を吹き出した。まことに異例の事であるから、この瑞祥を永久に傳へ度いといふので、社員はあらん限の丹精を盡し、根のない竹を培つて、遂に立派な竹林となつたといふ。説明役の鶴氏は、姿勢を正し、言語を愼み、炎天下約四十分を辯舌爽かに語られた。つゞいて當時の記念品の納めてある所を拜し、工場を見物させて貰つた。辭去するに先だつて頂戴した椰子の果汁は頗る美味で、一同おかはりして賞味した。田島氏を誘つて晝食をしたゝめ、別れて吾々は代理店坂井清次氏を訪問した。廣い庭内には果樹が多く、バナヽもパパイヤももぎたての新鮮なのを勸められ、更に時計草といふ芳香を持つ珍果を御馳走になつた。夫人も保險の仕事を積極的に援助される方なので、今後の事をくれぐれも御願ひした。次に保安代理店施宜氏をたづねた。手廣く藥種業を營んで居られ、店頭で對談中もお客が絶えなかつた。

夕刻高雄に引返し、私は同窓の人達に招れて高雄樓に行つた。梅田さんにも同行を勸めたが、腹工合が惡いから宿で粥を煮て貰ふといつて斷られた。この晩の御馳走の中で、豚の兩耳と兩前脚、尻尾、鼻頭をからあげにした一皿に盛つたのが出た。私は前脚を貰ひ、他の部分は夫々好む人が分けて喰つた。會社の人もさうであるが、この晩逢つた人達も、臺灣は實に住心地がよく、內地への轉勤は希望しないと云つて居た。恰も城隍爺祭の夜で、町では花火をあげ、假裝行列があつて賑かだつた。お祭について感心したのは、市民がみんな樂しさうで、內地のそれの如く醉漢や、喧嘩買の皆無な事であつた。

二十五日　代理店船橋葉兩氏に御別れに伺ひ、ついでに前代理店竹中氏の御店もたづね、正午出帆の昌福丸で臺東に向ふ。恰も用務を帶びて高雄へ來て居られた臺東代理店中村末吉氏は、わざわざ波止場迄見送に來て下さつた。事務所の人や同窓の人に見送られ、熱暑の岩壁をはなれたが、船の中は陸よりも一層暑いのには閉口した。殊に吾々の不注意は、明朝臺東着ときめ込んで居たところ、出帆後五分にしてこの船は月一回紅頭嶼、火燒島にゐる駐在所員に食糧を運ぶ義務があつて、今回も兩島に寄港する爲明後日でなくては臺東に到着しないといふ事がわかつた。宿屋でも氣がつかず、見送つてくれた土地馴れた人も氣がつかず、とんだ間違をしたものだと思つ

たが、今更どうにもならないので、あまり人の行かない島々を見るのも面白いではないかと卽座にあきらめてしまつた。推定七八百噸の貨物船で、一等船室といつても狹いところに四人詰だし、甲板も散歩する程の餘地は無い。焦るやうな日輪は頭の眞上にあつて、室內にゐれば蒸され、甲板に出れば燒かれ、汗みどろになつて嘆息してゐると、事務長がやつて來て、上層のボオト・デツキに日蔭があるから御出でなさいと親切に誘つてくれ、わざわざ椅子を運ばせた。其處は船長の室の橫手で、風通しはよく、僅かながらも日光を避ける場所があつた。梅田さんと私は深く感謝し、籐椅子に身を任せて讀書し、又晝寢した。船長の室では麻雀がさかんで、のべつに哄笑の聲が聞えた。夕食後も私は同じ場所で涼んで居たが、梅田さんは手紙でも書いてゐると見えて上つて來なかつた。突然籐椅子がひとつ、凄じい勢でころがつた。ふりかへつて見ると、爪楊子をくはへ、板草履をはいた船長が、散歩の邪魔になるとでもいふのであらう、梅田さんにあてがはれた椅子を蹴倒して、私の方を睨みつけながら、濶步してゐるのであつた。

日が沈み、遠くに鵞鑾鼻の燈臺の火がきらめきはじめたが、やがてその鼻も廻つて、眞暗な海となつた。波は靜だけれども風が無く、非常に蒸暑い夜で、床についても全身汗になつて眠れなかつた。何の虫か、絕えず手足の上を這ふ感觸が朝迄續いた。

二十六日　どうもえらい暑さで、ちよつとも眠られませんでしたと、これが梅田さんの朝の挨拶だつた。連日の旅で、充分休息の時間の無いところへ、殆ど一睡もしなかつたので、梅田さんの顔には深い疲勞があらはれてゐた。しかも今日も亦朝から照りつけて、動かないでも汗の乾く間が無い。たゞひとつ頼む日蔭は船長室の横手だけなので、梯子を登つて行かうとすると、そこには眞新しい板に墨黒々と「船員以外上る事嚴禁」と書いたのが貼出してあつた。梅田さんと私は顔を見合せて一言も無かつた。涼風の吹く頭の上では、痲雀戰今やたけなはである。止むを得ず食堂に席を求めたが、こゝは風通しが惡く、長く坐つては居られなかつた。實にひどい、こんな客扱ひの船があるものでせうか、ひとつ投書してやらうと思ひますが如何でせう――と梅田さんは持前の早口を一層早くして、さかんに憤慨しはじめた。貨物船だから爲方が無いでせうとなだめても、梅田さんとしては自分が日程をつくり、案内役となつてゐる關係上、私に對しても濟まないと思ふ心持が強く、なかなか機嫌が直らない。その様子をさとつたのか、まるまる肥つた溫顔の事務長が話に來て、どうも此の船は商船會社の持船でなく、自分と賄方、ボオイなど數人の外は、すべて船と共に川崎汽船に屬してゐるので、客の思惑などは少しも意に介せず、自分などども年中弱らされてゐる。これがチヤアタア船の缺點ですとしきりに氣の毒がつてくれた。

船は紅頭嶼の島かげに碇泊した。蕃人ばかりの住む、マラリヤの危險の多いところと聞かされてゐたが、たまに着く船が珍しいのか、裸形の人間が四方から馳けて來て、濱邊に密集してゐる。梅田さんは甲板を通りかゝつた機關士だか運轉士に、望遠鏡はありませんかとたづねたが、ありませんと一言ではねつけられた。しかし、數分後には事務長が、無い筈の望遠鏡を借りて來てくれた。レンズに映るのは、今や二三の艀船が汀に押出され、數人の白服の人を中心に裸體の蕃人がしきりに動いて居る。たゞ一人、紅い帶をしめた婦人がゐた。その帶の色は、全く美しく、素晴しい魅力だつた。銀座や新宿では、いくらお洒落をしても、派手と派手とが殺しあつて、よい效果をあげにくいが、原始的な山と海を背景とし、素裸の蕃人に取圍まれてゐると、極めて平凡な一筋の帶が、何にもまさる色彩となる。やがてその帶の人は艀船に乘つて、昌福丸に近づいて來た。二十歳前後の健康さうな娘だつたが、本船に乘移ると忽ちアツパツパに着換て太い脚を露出してしまつた。この娘は、叔父にあたる紅頭嶼駐在巡査が、駐在所建築の際ダイナマイトで手首を吹き飛ばされたばかりでなく、眼をやられたので看護の爲、丹波篠山からかけつけたので、その叔父さんが臺北病院に入院するのに附添つてゐるのであつた。叔父さんは紅頭嶼の田中さんで通る人で、蕃人に神の如くうやまはれ、濱邊に集つた裸形の人達は別離を惜む一團だつたので

ある。その濱邊には、この島の犧牲となつた田中夫人の墓も見えた。田中さんは手首を失つた右手を首から釣り、黑い眼鏡をかけて悄然たる姿であつたが、醫藥を離れるやうになつたら又此の島へ歸つて來ると言明して居られるさうだ。

もう一人新しい船客が、吾々の群に加つた。北海道帝國大學動物學の講師伊藤秀五郎氏で、眉目秀麗なる青年だ。名刺を交換すると直に、彼が私の從兄で同大學に多年教鞭をとつてゐるものゝ教子である事がわかつた。伊藤氏は約一週間この島で、ばつたの採集をしてゐたのださうだ。しかもそれは生殖細胞の研究で、雄のばつたに限るのださうだが、雌雄の區別を知らない蕃人は、からだが大きくて動作の鈍い雌ばかりつかまへて來て困つたといふ。しかし、この島だけでも、今迄自分の知らなかつた數種を捉へたといつて滿足してゐた。

紅頭嶼は周圍九里、人口千五百、昔から首狩の習慣を持たぬ溫良な種族ださうで、甚だ人なつこく、愛すべき性質で、伊藤氏も田中さんの姪も、この島の居心地のいゝ事をしきりに語つた。常食は水薯と飛魚を海水で煮たスウプで、白米の飯を與へるとその甘さに狂喜するさうであるが、自分で耕作する勞を厭ひ、先祖傳來の常食で滿足してゐるさうである。

船は島を離れて、次の火燒島にむかつた。こゝは本島人の住む者が多く、紅頭嶼とは比較にな

らない程開けてゐる。周圍五里。伊藤氏や田中孃といつしよに上陸し、村落を歩き廻つた。船は一晩こゝに碇泊し、明未明出帆の豫定なのである。素晴しい月夜で、船員は尺八やハアモニカを吹いて旅情を慰め、濱邊には月光の下に踊り狂ふ炬火が明滅した。但し船内の暑氣はきびしく、私は遂にベツドに入らず、食堂の椅子で眠つた。

二十七日　朝六時臺東着。東海岸の臺東と花蓮港は、船つきの悪いので有名で、艀船に乘ると直に客の頭から防水布をかぶせ、潮の打込むのを防ぐのが普通で、時には上陸出來ずに次の港迄持つて行かれる憂目に逢ふと聞いてゐたが、私はあく迄も運勢強く、滑かに波頭に乘つて岸に着いた。社員若林彌一郎氏が出迎へてくれ、宿におちついて先づ食事をした。伊藤氏も上陸した。食後、代理店の御留守宅を訪問して夫人に御目にかゝり、更に囑託醫南氏をおたづねした。それから、有名な臺東開導所を見る。全島のルンペンの收容所で、大工建具屋等の職を敎へ、正業に導く事を目的としてゐる。街を距る約一里、大正三年新潟地方から移住した旭村がある。各戸相當の生計をたてゝゐるやうであるが、人口二百に足らざる現狀では、大した發展は望まれまい。臺東には一泊の豫定だつたが、昌福丸で一日損をしたので、正午發の汽車で花蓮港に向ふ。伊藤氏と同車だつた。この汽車の九時間も、かなり辛いものだつた。暑氣ははげしく、煤烟は夥しく、

飛び降りて又飛び乘れさうな遲々たる歩みは齒がゆかつた。途中の驛から花蓮港駐在の松居留治郎氏が乘り、東海岸の募集の容易でない事情をきく。車中本島の中年の貴婦人あり、從者らしい老いたる男女と共に二等に乘り、更に二人の下僕らしいのが三等に乘つてゐた。道中が長いので、この一行はしきりに間食をしてゐたが、どこかの驛で稻荷壽司を買ひ、さもうまさうに喰べてゐた。ところが、携帶の四合瓶の御茶が何時の間にか底を見せてゐて、逆さにしても一滴も出て來ない。夫人も從者も當惑した顏をしてゐるので、私は宿で吾々に一本宛呉れた瓶詰の茶を、從者の前に突出し、みんなで飲んでくれといふ心持を手眞似で傳へた。先方は、言葉はわからないけれども頗る感謝の意を表し、早速一同で飲廻したが、飲み終ると額（ひたひ）を集めて何事か相談してゐた。と思ふと、從者の一人が、たつた今買つた稻荷壽司を持つて來て私に喰へといふのである。こつちは、不要だといふ手振をして見せるが、再三すゝめてくれる。私の方も、これを喰はされては堪らないと思ふので、あく迄も手を横に振つた。すると、今迄默つてゐた夫人が、はつきりわかる内地語で、「喰べなさい。喰べなさい」といつた。なんだ言葉は通じるのかと思つたが、今更口をきくのも煩はしいと思つて、私は強情に手を振通した。これは車中の一笑話に過ぎないのであるが、あとで梅田さんが、自分はあの人々があのやうに禮儀正しく且親しみを見せる場面に遭遇

した事がない。實に意外だつたと云ふ。私は又梅田さんのその言葉の方が意外で、そんならあゝいふ場合、あなた方はありあまつてゐるお茶でも勸めないのではないでせうかと反問した。この互に意思の通じない者が理解し合ふ事に努力しないふしあはせは、今囘の私の臺灣所見のひとつであるが、玆に記述する事は種々の意味で差控へ度い。

代理店鈴木耕太氏の御出迎をうけ、花蓮港に着く。梅田さんは風邪氣と見えて、しきりに鼻を鳴らし、嚔をしてゐるので心配したが、この風邪は今年々頭からの持越で、慢性だといふ。私も昨年末から約三月間萬年風邪にかゝつた經驗があるので、同情はしたが、大した事はないと思つた。臺灣の宿は何處も設備がよく、客あつかひも叮嚀で、殊に洗濯の迅速なのには敬服したが、花蓮港の宿だけは別だつた。女中はいづれも眞白に塗り立て、行儀は惡く、どう見ても酌婦だつた。ワンピイスを着用して座敷へ來るのもあたりまへのやうだつた。

二十八日　松居氏を案内役としてタロコ峽谷に行く。六里餘を自動車で行き、それからバタカン迄三里弱を登る。足をとゞむれば涼風を感じるが、夕刻からの宴會を控へてゐるので時間が氣になり、つい早足になるので、汗は全身からしたゝり、就中多汗性の私は、頭から雨滴の如く止度なく落るので、何事にも尋常な梅田さんを驚かせた。出立前に買つた安物のネクタイは汗の爲

に藍を流し、シャツは眞靑に變色した。何しろ阿里山を向ふに廻して國立公園候補の名告をあげてゐるのだから、奇巖絶壁溪谷に屏立し、溪流は巖に激して曲折し、山容水姿頗る豪磊、阿里山と共に東西の横綱たるに恥ぢない。幾つかの鐵線橋に膽を冷し、へとへとに疲れてバタカン倶樂部に辿りつき、持參の辨當を喰べたが、梅田さんはあまり疲れて食慾がないといひ、案内役の松居氏もかなり參り、轉んで洋袴の膝を破いてゐた。まだ上の方に絶景があるとの事だつたが、時間が無いので歸路についた。

この晩、花蓮港代理店特約店鈴木耕太許聰敏小林喜三三氏を招待し、小林氏は突然御差支が出來て御見えにならなかつたが、他の二氏とは親しく御懇談を願ひ、種々參考になる話を伺つた。

二十九日　代理店特約店並に囑託醫羽鳥博士を訪問し、別辭を述べた。花蓮港は臺東と共に船つきの惡さで有名なので、先年來築港の大工事を起し、遠からず竣工の運びとなつてゐる。東海岸には他に良港が無いので、之が完成の曉は、花蓮港は面目を一新するだらうと云はれてゐる。その工事場と、臺東の旭村よりも規模の大きい移民地吉野村を見物し、陸路蘇澳へ向ふ事になつた。花蓮港蘇澳間の臨海道路は近年漸く出來上つたもので、土質脆弱の爲かなり危險な通路と目されてゐる。海に臨む斷崖の腹を走るのであるから、風景は頗るよく、寧ろタロコ峡に勝るもの

があるが、一雨降ると崖は崩れ、運轉手が一寸ハンドルを間違へれば、車も人も粉微塵(こなみぢん)になる惧はある。幸にして未だ自動車の墜落事故は無いさうであるが、崖崩の爲に乘合自動車の女車掌が頭部を粉碎されて卽死した事件は、最近にもあつたさうである。あの道路は危險ですと多くの人から注意をうけたが、快晴の海面を眺め、風を切つて疾走するのが氣持よく、何時の間にか安心して晝寢を享樂した。晝飯ぬきで五時間ぶつ通しで搖られ、かなり疲れて蘇澳へ着いた。驛前の宿屋に基隆事務所主任永田氏と、社員安部善人氏が待つてゐてくれた。一休して、永田氏も同行で宜蘭へ行く。代理店林人和李決亮兩氏をはじめ、同地方駐在の社員及社員候補の人達の出迎をうけ、李林兩家では冷物(つめたいもの)の御馳走にあづかり、礁溪溫泉の旅館におちつく。田圃の中の古風な宿屋で、蓮池があり、野川が流れ、內地の田舍の旅を偲ばせた。夜食後林人和氏は臺北帝大に在學中の令息と令嬢の許婚の人とを同行訪問された。林氏は宜蘭で有名な開業醫であるが、令息達は文學を好み、東西の文學について種々質問され、近頃さつぱりその道の勉強をしてゐない私は、適切なる回答が出來なかつた。親子相和のなごやかな場面は、第三者の吾々にも愉快であつた。

三十日　永田氏が案內役で、瑞芳に行く。待受けてくれた定方醫長及社員呂良恭氏と共々臺車に乘つて、瑞芳山に赴く。同金山の重役翁山英氏が四月以來代理店を引受けられ、頗る熱心に後

援されるので、その挨拶と見學を兼ての訪問である。翁氏はウヰスキイ麥酒などを用意して歡待され、その上東西對抗戰の義勇軍として、大口契約を申込み、定方醫長の診査を受けられた。加之座に在つた金山新山部の陳義芬氏にも同時に申込むやう勸說して下さつた。

醫長及呂氏と別れ、吾々は翁氏の御配慮にあづかつた臺車で、金瓜石鑛山見學に行く。誰も知る本邦屈指の金山で、殊に最近の活況は素晴しく、どしどし擴張計畫を遂行してゐる。翁氏の御紹介があつたので隈なく案內して貰ふ事が出來た。その上會社から臺車を頂き、基隆迄直行した。基隆では市內各代理店及事務所を訪問し、主任及社員秋澤稻美氏と食事を共にし、夜に入つてから自動車で臺北へ戾つた。これで臺灣全島を、廣く淺く、ぐるりと一巡したのである。十八日以來起居を共にした梅田さんとは互に無事を祝しあひ、梅田さんは自宅へ、私はホテルへ別れた。

七月一日　日曜ではあるが、多くの所員は出勤してゐるので、私も出かけて行き、各地の戰況を聞いた。愈々壹百萬達成は確實らしく、一同頗る緊張してゐる。旅行中各地で御蔭をかうむつた平塚長官に御禮に伺つたが、高雄へ出向いて居られて御目にかゝれなかつた。今日は最後の御別れに休息日とし、御馳走してくれるといふ梅田さんにつれられ、植物園、物產館、中央硏究所等を見物し、草山を經て北投溫泉に行く。副長醫長及市內基隆兩主任も參加し、絕對無風の蒸暑

い晩であつたが、非常に愉快に夜を更かした。

二日　八時過出張所の諸君に見送られて臺北を立つ。梅田さんをはじめ基隆迄送つて下さつた方も多かつた。往航と同じ瑞穂丸で、定刻十時名殘惜い臺灣を離れた。同船の客は防空演習にやつて來た陸軍々人が多かつた。今度も航海運がよく、船は少しも動揺せず、滑るやうに波を分けた。

臺灣の旅は非常に愉快だつた。臺灣といへば蛇とマラリヤを想起するのが內地にゐる者の通念で、或本の卷頭には、臺灣旅行注意十箇條といふものが揭げてある。

一、食事の場合電燈下に膳部を据ゑざる事（やもり虫）

二、刺身は年中氷保管なるを知れ（腹痛）

三、山野を問はず惡水、濕氣地に止まる勿れ（恙虫）

四、山野抜渉にステッキを要す（毒蛇）

五、蕃地山道の旅行中雜草に手を觸るゝ勿れ（毒草）

六、片田舍の買物釣錢の紙幣に注意を要す（南京虫）

七、うたゝ寢絶對に爲すべからず（マラリヤ病）

八、氷及生水は絶對に呑む可らず（下痢）
九、臺車の乘客となれば進行動搖に中心をとれ（墜落）
十、東部臺灣に差向る郵便にインキを用ふる勿れ（海潮浸水）
實に親切な注意であるが、果してこれ程の用心が必要かどうか。私はこの戒を守らず、電燈の下で刺身を喰ひ、水を呑み、到る處でうたゝ寢をし、臺車にも幾度か乘つたが、別段異狀は無かつた。梅田さんも先年來の臺灣住居なので、そんな十戒は昔の事で、今はマラリヤなんか罹らうと思つても罹れませんと云つた。さうして見ると、暑い事だけは致方無いが、山水の景勝に富み、森林を有し、溫泉在り、鑛產、水產いづれも豐かに、砂糖、甘藷、茶、落花生、黃麻、胡麻、煙草、果物、野菜なんでもあり、米の如きは穫れ過ぎて困るといふ樂土である。最初勤務の關係で渡臺する多くの人が、心進まず出かけ、一年二年たつうちにすつかり馴染んで、內地のやうなせせつこましいところへは歸り度くないといふのも無理は無い。私が臺灣で逢つた人で、臺灣を謳歌しない人は一人も無かつた。私は旅行日數の關係で、本當の山間僻地は知らないが、自分の見聞の限に於ては、二度も三度も來たい土地である。私は船中でも、臺灣禮讃を繰返した。
三日　快晴、終日甲板の籐椅子に寢て海氣を吸ふ。

四日　午後一時半門司着。廣島支店長安藤敬治氏、下關事務所主任山田繁藏氏が船迄迎ひに來てくれ、直に下關發の汽車に乘る。東西對抗の戰況は伯仲と聞くが、營業部が素晴しい勢なので、多少西軍不利との觀測が行はれてゐる樣子だつた。八時二十分廣島着。宿で食事をし、私は曾て臺北出張所長だつた安藤氏を捉へて、又しても臺灣禮讚に終始した。

五日　支店に行き、景況をきゝ、午後一時四十五分發で岡山に向ふ。

尾道から坂本支店長が同車し、同君一流の新計畫を聽く。夜は昔家老の屋敷だつたといふ茶寮で、松井副長、宮崎舞原兩氏を加へて食事を共にし、支店の近狀をきく。廣島岡山も暑氣は激しいが、臺灣歸の體にはあまり堪へない。之も臺灣の御かげと、何に彼につけて禮讚する。

六日　支店に赴く。締切日なので各地から社員が集つて來る。百萬突破の期待をかけたが、一歩手前の處で實現しなかつた。明日は全代理店全社員の集會があるから、是非もう一日滯在しろと勸誘されたが、本社に用事を控へてゐるので、心ならずも引上げる事にした。午後五時二十五分岡山發。

七日　朝八時半東京着。出社して出張中の見聞を報告する。誰も彼も、臺灣色に變色した私の顏色を笑ふ。各支店からの電報が入り、發表の結果は第三者の豫想を裏切つて西軍の勝利確實と

判明した。直に各店へ打電する。殊に臺北が約の如く壹百萬を突破したのは、今回の旅行に伴ふ最大の愉快だつた。

——「社報」昭和九年七月號

名古屋──岐阜

八月六日　午前九時の燕で名古屋に向ふ。車中は蒸暑く、五時間半の間に三枚の半巾は汗で絞るやうになつた。七月成績〆切日なので支店には各事務所の闘士が雲集してゐる。上原さんは、今月は全く不出來で申譯が無いといふが、概算壹百六十五萬四千圓である。恰度昨年七月七日、岡山の歸りに此の支店を訪問した時、支店開設以來のレコオドを作つて全員の意氣大にあがり、玄關正面の壁には壹百四拾貳萬圓と大書して貼出してあつたが、今度はそれを遙に超越する成績をあげながら、どうも不出來で申譯無いといふ。これによつて見ても、會社最近の向上發展の著しい事がわかるではないか。

樓上廣間で研究會が開かれ、上原さんの話の後で、私も一席喋つた。この店では、一箇月十萬圓以上の擧績者の寫眞額を廣間の壁間に掲げて表彰する事になつてゐて、磯邊足立笹岡田村の諸

豪が既に此の名譽を獲得し、今日の締切の結果更に谷口芳次郎氏が加はる事になつた。三度優勝をつゞけた中事務所に對する優勝旗授與式があり、最後に勤續二十五年に及ぶ高山事務所主任宮田明男氏に記念銀盃が寄贈された。

夜は私の宿萬平ホテルで、各事務所主任並に優績者を中心とするさゝやかな晩餐會を催した。

名古屋の宿は志那忠がよく、會社の人々の馴染であるが、私は馬鹿叮嚀なサアヴイスを惧れ、上原さんの勸説を斷つてホテルに泊つたのである。ところが、ベツドに蚊帳が吊つてないので、夜中蚊群の襲來をうけ、顏手足ところ嫌はず刺され、殆んど一睡も出來なかつた。曉方になつて、室の一隅に蚊遣線香の用意してあるのに氣がついたが、これ丈で防ぎをつけようといふのは少し無理ではないかと思ふ。サアヴイス嫌を宣言した罰かもしれない。

七日　朝九時五十二分名古屋發で、店長醫長と共に伊勢山田に向ふ。驛前宇仁館食堂で勢揃ひし、大神宮に參拜する。名古屋市内東事務所主任池田信吉氏の令兄が、御宮に奉仕して居られ、わざわざ驛迄御出迎を忝くし、叮重なる接待をうけた。參拜後、自動車で二見浦に赴く。宿の前は海だから、涼しい風を期待したが、伊勢灣の夕凪は水も空氣も動かず、靜かに室内に坐つてゐても汗が流れた。夜は廣間で宴會があり、主客相半する三十餘人が、愉快に賑に歡を盡した。從

來各地の明保會は、支店を中心とするか、又は代理店の方々を幹事に御願ひする慣行だつたが、今度は津事務所員が主人となり、代理店の方々を招待し、吾々もその陪賓として列席を許されたのである。旅館、朝日館の百疊敷の大廣間は宴席として申分なく、又事務所の人々が各自受持をきめ、夫々の役目を責任を持つて分擔し、うちとけた中にも禮儀を失はずに接持に努めたのは、內輪の事ながら感服した。事は宴席の座持に過ぎないが、各自平素の心懸と、事務所の統率の正しく行はれてゐる證據と見ても間違ひあるまい。

八日　前夜の大廣間で朝食を共にし、隨意散會の事になつた。私と店長醫長は、同じ趣向の岐阜事務所主催の代理店招待會に列席する爲、八時五十二分二見浦を發し、龜山桑名を經て、目的地に向ふ。途中四日市事務所主任南出氏が醫長と打合の爲乘車したのを誘惑し、養老で下車して晝食をする事にした。養老公園には楓櫻が多く、春秋はさこそと思はれた。食後南出氏と別れ吾々は岐阜に急ぐ。この日も亦蒸暑く、コツプの水をいくら飲んでも飲み足りなかつた。宴會場水琴亭には既に主客揃つて居られ、時間都合よく開宴となつた。岐阜代理店佐藤宗六氏はいつもながら萬事に心を配られ、自ら起つて酒間を斡旋され、又洗練洒脱のかくし藝を披露された。そればかりでなく、八九十月に行はれる全國外野リイグ戰に名古屋を優勝させようと滿座を說き、支

店幹部を促して謀議に參する事さへ申出られた。かゝる有力なる後援を有する事は、岐阜事務所絶大の強味といはなければならない。此の地の招待會もお客側の出席率頗るよく、近藤主任をはじめ全員の喜悦は非常なものだつた。

九日　出立前に佐藤氏の御門口迄伺はうと、上原さんと時間を打合せてゐるところへ、あちらから宿屋へ御出下さつたのには恐縮した。スロオ・モオションに過ぎたのである。その結果かへつて驛迄御見送をうける事になり、恐縮を重ねてしまつた。十時名古屋着。直に西事務所、中事務所、熱田事務所、東事務所の順に歴訪した。晝頃猛烈な驟雨があつて、俄に涼氣が漲つた。夕刻から、向陽館に於ける西事務所主催の代理店招待會に列席する。中京安田の安田定次郎氏がお客側を代表して力強い挨拶をされ、岐阜の佐藤氏同樣會の中心となつて心を配られた。私は十時十二分の汽車で歸東の豫定なので一巡盃を頂戴して中座した。

今度の名古屋管內三事務所の代理店招待會は、いづれも非常なる成功だつた。募集事務所の設置は我社近年の試であるが、早くも陣容整ひ、社業の發展に多大の貢獻をしてゐるのは眞に嬉しい事であつて、今回の催の如きも、事務所の實力を示すひとつの證據であると思ふ。學ぶ所頗る多かつた。

十日　朝六時半東京着。歸宅し、衣服を改めて出社、日常の事務机に向ふ。

――「社報」昭和九年八月號

龜崎——四日市

九月七日　午前九時東京發。先月のつゞきで、名古屋支店管內事務所主催の代理店招待會の席末に列する爲に出向くのである。午後二時半名古屋着。東事務所池田主任、上原支店長、高岡醫長が待受けてゐて、三時發武豐行のガソリン車に同乘する。東京は二三日小雨勝で、寒い位涼しかつたが、此の地方は蒸暑く、執念深い汗がじつとりと湧いて來る。小一時間の後龜崎着。直ぐに町の突端の入江に臨む岡の中腹にある縣社に參拜し、その後の丘上に登つて知多半島の海景を見晴らす。靜かな入江の海を懷にする兩岸の低く長い岡、その岡の麓に群る漁村、近海を航行する小蒸氣や、浦々を漁る小舟が松の梢を透して見え、古風で平和な風景である。この地は神武天皇が御上陸になつたところと傳へられるが、さういふ古代の歷史にふさはしい面影は、多分に殘つてゐる。薄曇の空に、夕潮の盛上つた海も動かず、僅かに動くものは對岸に人を渡す小舟だけ

で、聞えるものはその機關の音ばかりだ。

會場望洲樓は幾代か續く旅館で、後に小丘を控へ、その丘の樹間に幾棟も座敷を有し、いちばん高い頂には、今年新築の大宴會場を持つ。お客様がお揃になつたので記念寫眞をうつし、薄暮の空と海の軒に迫る大廣間で一同着席した。先づ第一に池田主任が挨拶をし、つゞいて上原さんと私も一席辯じ、お客側の代表としては蟹江代理店河瀨佐太郎氏が鄭重な謝辭の終に、お互に大にやらうといふ意味の言葉を以て結ばれ、一座さかんなる興奮のうちに宴會がはじまつた。大廣間には舞臺があるので、お客側からも隱藝が出ていつ迄も賑かだつた。

八日　昨日と變らぬ薄曇で、遠くの沖は煙幕に包まれたやうに煙つてゐる。再び大廣間に集つて朝食を共にし、隨意散會となつた。私は上原高垣兩氏と名古屋へ戻り、內勤山田禮三君を先達として、直に市內柳橋驛から電車に乘り木曾川沿岸今渡から近代稱する所のライン下りを試る事にした。今渡に着いた時は恰も晝飯時だつたので、川原に臨む淸水亭といふ小料理屋で腹をこしらへる手筈になつてゐた。元より田舍の事で、座敷も調度も粗末だが、新鮮なる川魚は結構だつた。しかしこの淸水亭はその料理よりも、座敷から見る風景よりも、女中おてるさんによつて印象を深くした。おてるさんは此の家に於るたつた一人の女中で、年齢の推測のつきにくい、大人

のやうにも子供のやうにも見える婦人だ。美事なおでこで、さがり眼で、なすび齒で、顏は割合に大きいが、からだは發育不良である。かしこまつて坐つてゐるところは、土燒の福助かおかめのやうに愛嬌がある。決して美人では無いのだが、才智おのづからほとばしつて一種げてものの美を發揮し、二時間の間吾々を樂しませ、敬服させ、降參させた。年の若い山田君は別として、他の三人はいづれも戰場往來の古強者である。それを左右に迎へての言葉だゝかひに、一歩も負色を見せず、愛嬌よく斬捨てる冴えは頗る美事だつた。又非常に主家の爲をはかり、宣傳につとめ、更に大にしては今渡附近の風土地理にあかるく、吾々旅人の質問に對し流暢明快に答へた。食事を終り、舟の用意が出來たので、別れを惜んで立つたが、玄關を出るうしろから、保險の宣傳も致して置きますわと最後の聲をかけた。偉いものですねえ、敬服しましたねえと吾々は舟に乘つてからも繰返して稱讃し、あゝいふのを祕書役にして衛の紳士の追拂ひ役を一任したらいゝだらうとか、事務所主任としても十分の手腕を振ふだらうとか、平生口の惡い連中が、言葉を盡してほめた。

木曾川下りは中學時代に齋藤拙堂先生の文章で讀んだ程の感興は無かつた。思つたよりも水勢がゆるく、自然に流してゆくのでなくて、絶えず二人の船頭が櫓を漕いでゐるのも想像を裏切つ

た。しかし、犬山城のあるあたりの清朗な景色は素晴しいと思つた。舟が犬山に着く迄は、時々雨が來て日覆を濡らしたが、陸に上る頃は晴れて、傾く日ざしをうけた對岸の夕暮富士が、女性的な優姿を薄紫の空に描き出した。

會場彩雲閣の玄關には、名古屋支店管內事務所對抗募集に三度優勝して中事務所が獲得した眞紅の旗が飾つてあつた。お客樣の顏も大分御揃ひのやうだつたが、吾々は犬山城を見物し、又町の外貌を知る爲に自動車で一廻した。運轉手は、犬山町の戶數も人口も知らなかつたが、藝者は二百人ゐると明瞭に答へた。

犬山城を背景として記念撮影をし、幾室かぶち拔いた二階で五十餘人の大宴會が開かれた。名和主任及上原支店長と私との挨拶の後で、來賓總代として彌富代理店內藤守正氏が起たれた。多年縣會で鳴らして居られる方であるから、時と場合とにぴつたりはまる御挨拶で一同深く感激した。お客側からも事務所側からも隱藝が出て、いつ迄も興は盡きなかつた。

九日　夜中から猛烈な風雨になり、朝迄荒れ狂つたが、幸ひにも次第に穩かになつて、朝食後解散する頃は、名殘の風が吹くばかりとなつた。吾々は名古屋を經て伊勢菰野の湯の山溫泉で催される四日市事務所の代理店招待會に赴く順になつてゐた。名古屋で近頃有名な八重垣といふ座

敷天ぷらは、昔明治生命にゐた人の經營だといふので、中食をそこで認める事にした。東京にして見れば濱町の花長といつた氣取方で、中京の紳士階級に大受けだといふ事だつたが、玉子の味の強い金ぷら風の衣で感服しなかつた。四日市驛には南出主任が出迎へてくれて、三時過湯の山に着き、壽亭におちつく。

湯の山は鈴鹿の峰々に圍まれ、杉櫻楓が多く、花崗岩の間を流れる溪流は水清く豫想外の山紫水明境であつた。折惡く雨もよひで遠望はきかなかつたが、晴天の日には伊勢灣を俯瞰し、名古屋の城の金の鯱をも望見する事が出來るといふ。ばらばら降りかゝる雨の中で記念撮影をし、宴席に着いてから、南出主任上原支店長及私の挨拶を受けて、室山代理店伊藤榮太郎氏の熱烈眞劍な御挨拶を頂いた。四日市事務所は管內が狹く、受持代理店數が少ないので、人數は多くなかつたが、接待役の所員の氣が揃ひ、極めて親しみの深い會合だつた。次第書に堂々と書いてある程あつて、所員の隱藝には甚だ玄つぽいものがあり、殊に日柴鬼千太郎氏のちよぼで、前田榮吹氏の太閤記十段目の振事は大喝采を博した。

十日　溪流の音で眠れないだらうなどといひ合つたが、私は十分熟睡した。他の人の起きないうちに上流の方を散步し、偶々室山の伊藤氏と出あひ、此の地方の御話を伺ふ事が出來た。この

地で一番奇異に感じたのは湯の山にたつた一軒あるカフェ及湯女の置屋が坊さんの經營だといふ事だつた。大悟徹底したものと見るべきかもしれない。

歸途、四日市代理店山中傳四郎氏を訪問する事にした。氏は御都合が惡くて招待會には出席されなかつたが、我社の最も古い代理店として社史の上になつかしい記錄が記され、又現在迄引つゞいて最も有力なる代理店として活躍されてゐるので、特に敬意を表し度いと思つたのである。ところが、山中家の新築家屋が出來上り、移轉取込中との事で、松茂といふ旗亭に來てくれといふ御言傳があり、その方へ推參した。山中氏は早大に勉學中の令息と共に吾々を迎へて下さつた。松茂については、豫而南出氏から噂をきいてゐたが、非常に結構で、見聞の狹い癖に自惚勝の吾々は、鰻は東京以外は駄目ときめこんでゐたが、この家のは大變すぐれてゐた。遠慮なく頂戴した。

扨てこゝでもう一度今渡のおてるさんの名前を持出し度い。吾々はその日以後、犬山でも湯の山でもおてるさんの聰明について逢ふ人毎に絕讚の辭を盡したが、遂に四日市では、山中氏を煩はして今渡迄出張を乞ひ、彼女と舌戰を闘はして頂き度いと申入れるに至つた。いかに吾々がおてるさんの才智に感服したか御想像を願ひ度い。

二時四十一分四日市發。三時五十一分名古屋發の特急で東京へ歸る。

――「社報」昭和九年九月號

北支――滿洲

十月二日　午後九時二十五分東京發。今度の出張は歸路の中途迄高田醫長と同行で、心強い。私は滿支方面ははじめてゞあるが、高田さんは明治四十五年に、大連奉天附近を視察された事かあるさうである。本社に於て直接契約決定の事に參與して居る醫長が、特殊事情の多い滿支方面を知る事は極めて必要で、今回の出張は將來の會社の發展上有意義の事である。元來旅に出て枕が變ると安眠出來ないといふ醫長が、奮發して向寒の奧地迄も出かけようといふのは、近來の會社の意氣を示すひとつのあらはれである。吾々は申合せて荷物を少なくし、一切の無駄を省く事にした。

三日　關西風水害の中心は見るよしも無かつたが、沿道の田野は荒れ、屋根や壁の傾き崩れた家々も多かつた。大阪から山名さんが同乘し、神戸岩壁の亞米利加丸迄送つてくれた。船は正午

に出帆した。海は靜で、甲板の椅子で雜誌を讀み、散歩をし、瀨戸內海の景色を眺め、平素の勞苦に疲れた身心を休養させた。

四日　朝早く門司に着いた。正午迄上陸する時間はあつたが、船にゐる方が氣が樂なので、矢張甲板の椅子を離れず、鞄の中に入れた雜誌は忽ち讀み盡してしまつた。止むを得ず、船內圖書室から明治時代の文人の作品集を借り出して讀む。時代は經ても、すぐれたものは何時迄も光を放ち、廣津柳浪の「今戶心中」や樋口一葉の「たけくらべ」は、當代の諸作に比べて決して古さを感じさせない。

五日　朝鮮群島が左右に見えはじめた。白茶けた土質の樹木の少ない瘦地に畑も見え、島々の間を往來する船の白帆も見える。みづから耕し、みづからすなどり、自給自足を本則として生活してゐる島人の乏しい一生と、近代の爛熟したる文明の渦卷の中で、無暗に忙しく働いてゐる吾々の生活と對比して、どつちがしあはせなのかわからないやうな氣持が起る。それ程群島の秋の海面には、柔かい日光が漲り、平和に長閑に見えたのである。

六日　朝八時半大連着。埠頭に出迎へてくれた出張所の人達と記念撮影をとり、遼東ホテルに案內される。吾々兩人は、大連着と同時に一切を樋口さんに托し、何から何迄その敎導に從つた。

先づ市内の代理店特約店を歴訪したが、山を背にして海に臨む大連市街は家並も整ひ、無計畫に出來上つた貧弱亂雜なる内地の諸市街よりも近代市街の態容を備へて美しい。自動車はあまり多くないけれども、之を補つてあまりある馬車と人力車が、巧みに人ごみを縫つて行く。市の道路建築は大體洋風であるが、それを背景として、純日本風の丸髷の婦人が通る。花街の人々であらう、湯道具を胸に抱へ、素足に駒下駄でからころ敷石を踏んでゆくのもある。露西亞人、亞米利加人、歐洲人、滿洲人各國各樣の風俗の混交した、東洋の海港風景は面白く、市街廻りの興味は深かつた。忽ち自動車は特色ある市街を拔けて好晴の秋の空に輕塵をあげつゝ郊外の道を疾走し出した。山や野は黄葉にいろどられ、小丘の間々に紺碧の海が見える。間もなく星が浦に着き、星の家といふ家の見晴しのいゝ座敷で晝食を供された。給仕に出た年增の女中は昔東京の紅葉館にゐた事があるさうで、向ふでは私を知つてゐると見え、今夏私の姉の子供が見學旅行に來て海水浴をして行つたなどゝ話した。甥は澤山ゐるので誰の事かわからないが、その婦人のいふ所では、私共一族である事は眼つきで知れたと云つてゐた。食後直に大連市に戻り、再び代理店訪問をつゞけ、その間碧山莊と三泰油房を見物した。碧山莊は福昌華工株式會社の經營するもので、華工とは苦力（くうりい）の華名である。元は我社の代理店福昌公司の先代相生由太郎氏の創案によつて設置

經營されたものださうで、一口にいへば苦力部屋である。碧山莊といひ、華工といひ、何ぞその名の美しく、その實(じつ)の伴はざる。山莊三萬八千餘坪に煉瓦と土を以て建てられた長屋が並び、一萬五千餘人の苦力が收容され、低率の賃銀を受けつゝ毎日十時間乃至十二時間大連埠頭の荷役(にやく)に從事して、比類なき能率をあげてゐるのである。吾々が碧山莊を訪問した時は夕方近かつたから、今日の仕事を終へた者や、今日の仕事にありつかなかつた者が、炊事の支度にかゝる頃で、蒜(にんにく)か韮(にら)か豚の脂肪か人間の汗か、むうつと鼻を襲ふ臭氣が漂ひ、藍色綿布の華工達は、戸外で飲食をはじめた者もあり、煙草に陶然たる者もあり、二三の者は笛を吹いてみづからを慰めてゐた。苦力といへば、希望も樂みもなく陰慘な生活に泣いてゐるものと想像したが、意外に呑氣(のんき)な、のんびりした顏つきなのを見て、支那民族の不可思議な魂の一面に觸れたやうな氣がした。三泰油房は目下其の時期でないのか、時間が遲かつた爲か、作業の全體を見る事は出來なかつたが、大豆から豆油と豆粕を製出する大略の概念を得た。此處で働く苦力は素裸を本則とするが、婦人の見學團の來た時、空前の能率低下を示したと云ふ。

この晩はホテルの高田さんの部屋で食事をし、その儘自室に戻つて休息した。

七日　朝早く、特約店稻葉庄太郎氏の訪問をうけた。稻葉氏は三十餘年間滿洲に於て活躍せら

れ、今日の日本の滿洲發展に多大の功績ある方で、豐富なる經驗と高邁なる精神を以て、日本を談じ滿洲を說き、吾々後輩の爲すべき道を指示された。尙今回の私共の旅行日數の少ない事を指摘し、此の廣大な滿支を一地一泊の豫定で巡廻したとて何もわかりはしないのだから、そんな事でわかつたやうな顏をし滿洲を論じてはいけない、沈默は金であるといふ教訓を與へられた。稻葉氏の御話は各方面に亙り非常に有益で、難有く拜聽したがこゝにその全部を記す事の出來ないのは殘念である。稻葉氏の御話は何時迄も盡きないが、所員が待つてゐるので失禮し、若狹町の出張所に行く。市内並に遠からぬ地方受持の人達が集つてゐて、そこで私と高田さんとが話をし皆の意見も聽取した。晝食には市内囑託醫近藤山領岩島三氏を御招待して歡談した。

夕方五時、吾々は樋口さんといつしよに、天津丸に乘船し、大連埠頭を離れた。薄暮の海は風もなく波もなく、大連旅順の燈火をのぞみながら船は動くともなく進んだ。

八日　快晴つゞきで、今日も亦あたゝかく、甲板で日向ぼつこをしてゐると、下の甲板ではデツキ・パツセンヂヤアの支那人の一人が、南京鼠の曲藝をはじめ、終ると帽子を廻して金を集めた。海水は次第に赤黑く濁つた色に變り、白河の入口にかゝる頃は、全く泥の中を行く有樣となつた。幸に潮の都合がよく、河を溯つて塘沽に着いたのが二時四十分で、出迎てくれた社員塚本

文之氏とホテルの人の働きで税關も手間取らず、汽車に間に合つたが、萬一その汽車に遲れると今夜の代理店百萬達成祝賀會にも遲參しなければならないので、大變氣を採んだ。三時半天津着、常磐ホテルにおちつくと、代理店富成一二氏が見えて、これから天津日本高等女學校で講演をしてくれといふ。それは二十餘年前に私の書いた文章の一節が、中、女學校の國語讀本に採用されてゐるので、筆者はどんな人間か顏つきだけでも見度いといふのである。用意もしてゐないので閉口し、御斷したが、これも會社の御役に立つのだと思へといふ四圍の勸說に從ひ、それでは簡單な挨拶だけで許して貰ふといふ約束で出かけた。校庭に整列した百數十人の女學生を前にして、約三十分お喋をしたが、支離滅裂で、何を物語つたのかさつぱりわからなかつた。國語讀本に載つてゐる文章は二十代の私の筆であるから、多少妙齡の子女の心にも響くものがあるかもしれないが、五十に垂んとする實物を彼等の眼前に曝したのは、先方にも興ざめの事であり、當方にも損な事であつた。それから富成氏の御案內で市中を見物したが、各國租界には夫々の國民性かあらはれ、それを綜合した天津には天津らしい味がある。歐米諸國の影響か、市街の建築物は洋風のものが多く、堂々たるものであつた。

夜、六時から公會堂で、富成氏の百萬達成祝賀會が開かれ、契約者約百五十人が參會し、非常

たる盛宴であつた。先づ富成氏の挨拶につゞいて、同氏の指名をうけた私が起ち、來賓の方の答辭があり、祝歌を唱ふ人も出て賑かだつた。在留邦人六千人に過ぎず、しかも出がはりの多い契約者を相手に壹百萬圓の契約を保有する事は、店主の信望と熱心によるもので、深く感謝の意を表し度い。大連の稻葉氏同樣、富成氏は北清事變以來天津に本據を置き、自ら成功されたばかりでなく、常に同胞の爲に盡力指導された方で、今夜の盛會も故あるかなと思つた。この晩はじめて私は本式の支那料理を味ひ、純良なる老酒に醉つた。

散會後、宴に列した同窓の人々に招かれ、神戸館といふ日本料理屋で饗應を受け、深更迄談笑した。

九日　早朝富成氏の御店に御禮に出向き、その儘見送られて天津を立つた。吾々三人の外に塚本氏を加へ、廣々として果て知らぬ平原の偉大平凡な風景に驚きながら、十一時五十分北平に着く。我社と緣故の深い××××××××の公平萬氏が出迎へて下さつて、直に旅舍扶桑館に赴いたが、「世界の不思議」と稱さるゝ此の舊都を僅かに半日で見なければならないのだから、食事の時間も惜く、吾々は晝飯拔きと決して自動車上の客となつた。大連のやうな近代的市街でなく、天津のやうな外國風の市街でない北平の街々は、支那式の汚なさと、無頓着を見せてゐるが、市

内にも樹木が多く、楊柳アカシア槐ポプラが秋風に葉裏をかへし、柔かい色調をもつて古き都を圍んでゐる。吾々は先づ紫禁城を見物して廻つたが、荒廢するに任せた宮殿の屋根にも、内苑にも雑草そよぎ、途方も無く規模の大きいのがかへつて廢殘の趣を深くして、うたゝ凄惨なる光景である。昔の榮華を想ひ描いて王者の偉業を偲ぶ者もあらう。民の膏血を絞つた權力者の惡の結晶として呪ふ者もあるであらう。あらゆる觀點から之を批判する事が出來るが、人類文化の發展衰亡の歴史の中の最も大なる遺跡たる事は疑もない。この紫禁城の見物丈でも、少なくとも一週間位の完全なる暇を貰はなければ駄目だ。しかし吾々は僅かに一二時間の餘裕しかないので、あわたゞしく去つて萬壽山に向つた。西太后が海軍擴張費を削つて大工事を起し、簾中に在つて政務を執り、又逸樂に耽つたと傳へられる所である。山と水と、併せ得たる勝地であるが、その豪奢は寧ろ惡趣味と評する外はない。我が歴代の皇室の御質素とおもひ比べて、感慨頗る深かつた。日は漸く傾きかけ、自動車は急速力で市内に引返し、更に天壇に向つて走つた。こゝは毎年冬至の日の未明に、皇帝が五穀豐穰を祈つた所である。大理石の圓形の露臺に立つて、夕映の消えてゆくのを仰ぎ見るのも惡くなかつたが、それよりも祈年殿と呼ばれる高き圓堂の東洋風の建築美に驚嘆した。これ丈で時間は盡きてしまつて、夥しい名所舊蹟の一部は僅かに自動車の窓から遠

望したに過ぎないが、土と煉瓦の灰色を基調とする舊都の、綠紫黄の瑠璃瓦の底深い光は、長く印象を止むるであらう。

この晩は公平氏に招かれて豐澤園といふ家で手厚い饗應をうけた。その家の一室に導かれた時、清艶な香が鼻をついたので、たづねて見ると卓上の花瓶の白い花晩香玉が放つものであると說明された。吾々一行の外に囑託醫今村佼廉氏と××××の人々が卓を圍み、心の籠つた數々の御馳走を滿喫した。天津と北平の僅か二度の經驗であるが、吾々が日本で喰べてゐる支那料理とは趣を異にし、汁氣が多く淡白で、非常に結構である。恐らく日本では、支那料理といへばあぶらつこい、味の濃厚なものときめてゐるので、本式の物を出しても本式と認めず、次第に惣菜料理に墮したのではないだらうか。

十日　朝、公平氏を訪問し昨夜の御禮を述べ、同氏に送られて八時四十五分の汽車で立つ。塚本氏は二三の契約見込があるので、北平に殘つた。汽車が天津を過る時、富成氏外數氏がわざわざ驛迄來て下さつたのには恐縮した。終日平野を走る汽車の窓に額をくつつけて、變化の乏しい大陸風景を眺めくらしたが、薄暮山海關に一時間停車したので、東洋車を走らせて萬里の長城天下第一關を見物する。いかに夷狄の侵略が激しかつたからといつて、長さ二千里にあまる城壁を

築いた計畫の大きさは到底吾々の考へ及ばない事で、その一端に佇立して、微力の自分が大なる力の前に威伏させられるやうな感じがあつた。

十一日　朝六時二十分奉天着。代理店の方々、社員堀込福井兩氏の出迎をうけ、大和ホテルに宿をとる。早速代理店囑託醫を訪問し、更に忠靈塔、北大營戰跡、法輪寺、北陵等を見物した。宮殿には有名なる四庫全書六千七百五十二函が藏されてあるが、滿洲事變以來參觀を許さない。法輪寺は喇嘛寺で、奇怪なる天地佛を存置してゐる。北陵は清朝の陵墓で、周圍二里內壁の高さ二丈餘、松樹古り、石獸苔蒸す靜寂のところ、拜殿牌樓の巧緻なる彫刻と極彩色は眼を奪ふばかりである。外苑の雜木林は黃葉につゝまれ、何の鳥かしきりに飛びかひ、啼きかはした。北大營の戰鬪は吾々の耳に新しい事であるが、この戰鬪に於ける我軍の死者は僅かに二人で、敵は三百二十餘の死屍を殘して敗走したといふ。兵舍は煉瓦造の平屋で、彼等は何も知らずに其處に眠つてゐたので、いざ戰鬪となつても燈火を消すことさへ忘れてゐたさうである。我が死傷者が少なく、彼の死傷者の多いのも故ある事といはねばならぬ。この晝、奉天及奉天新市街代理店の御案內で粹山といふ日本料理屋で御饗應をうけた。純日本風の家屋で、庭にも石を多く入れ、植込をしつらへてあつたが、この附近には同樣の家が外にもあるらしく、異鄉のおもひを暫時忘れた。

奉天には正金銀行に勤務する私の弟がゐて、粗末ではあるが皆さんに晩餐を差上度いと申出たので、代理店の方々にも御出を願ひ、合記飯店と稱する支那料理屋で卓を圍んだ。天津北平の料理には遙かに及ばず、老酒の味も劣つてゐた。酒の味の純ならざるをまぎらす爲か、こゝでは日本の支那料理店のやうに、氷砂糖を添へて來た。かゝるごまかしは天津北平では行はれないと聞いた。

夜の町を散歩して見たが、日本人の多く住む町筋には夜店が並び、和裝で下駄ばきの男女が「銀ブラ」の如く漫歩してゐた。

十二日　午前九時發一時間十分の後撫順（ぶじゆん）に着く。代理店の方々や社員菱沼氏の外に、藤田專務の親戚に當る勝沼海三氏が待受けてゐて下さつた。勝沼氏は撫順炭鑛に勤務さるゝ方なので、夫人が御病中であり且仕事も御多忙なのにも拘らず、吾々の爲に案內役を引受けて下さつた。先づ大山採炭所を見物し、次に有名なる露天掘の偉觀を見た。古城子露天掘は炭田の西端に在り東西五粁（キロ）に及び、深度三百五十米（メエトル）、石炭採掘量一億三十萬噸、今後三十年の將來を持つといふ。たゞ見る石炭の溪谷で、剝離する土砂岩石を坑外に搬出する汽車が、虫のやうにちひさく見える。その土砂は炭鑛を取卷く平野に捨てられて岡を築いてゐるが、到る所で自然に火を發して、ぷすぷ

す燃え、雨が降つても水をかけても、又いぶり出すさうである。つづいて、製油工場を見學し、ホテルで中食をして奉天に戻つた。

この夜は囑託醫松岡平松兩氏をつるやといふ小料理屋に御招して粗飯を呈し、弟も席末に列なる事を許して頂いた。つるやは大阪式のうまいものやでこの日が開業當日といふ縁起のよさだつた。

十一時四十分の汽車で新京に向ふ。

十三日　午前五時頃か、私は早く目覺めて着物も着換へ、窓の外の次第に白んでゆくのを見てゐたが、汽車が公主嶺につくと、この汽車に阿部さんはゐませんかと叫び、代理店主高取惠市氏の偉軀が、車室のカアテンをまくつてあらはれた。言葉をかはすひまも無く汽車は發車し、氏はあわただしく下車されたが、今晩はゆつくり逢ひますといふ事だつた。

七時新京につき、代理店の方々や事務所の人に迎へられて、驛前の大和ホテルに入る。元本店に勤めてゐた、安倍七郎氏が、當時此地で義兄と共に印刷所を經營成功してゐて、多忙の中を逢ひに來てくれたのは嬉しかつた。出立以來晴天續きで、滿支は旣に寒いから冬支度で來いと注意され、冬服の着のみ着のまゝで來たのが、外套は荷厄介になり、歩くと汗をかき、暑がりの私の

如きは素肌にホワイト・シャツで通して來たが、今日はじめて雨にあひ、風も稍つめたく、外套が役に立つた。一巡代理店を訪問し、事務所に行く。恰も陸軍の演習があつて、皇帝も御巡視になるといふ事で、警戒嚴重だつた。事務所では私と高田さんと交々話をし、所員の希望も聽いた。終つて市中見物に出かけようとしてゐる折柄、事務所の前を皇帝は自動車で御通過になつた。

雨と風の中を南山嶺の戰跡に向ひ、戰死者の墓所を拜したが、たしか倉本少佐は我社の契約者であつた。次に藤田專務の愛婿鶴見氏を訪問したが、大演習の爲に出向いて居られて、面會の機を得なかつた。新京は奉天と違つて新しい都だから、市街も整頓せず、田舍めいてゐるが、同時に新發展の著しさを示して、到る所に近代的建築物が工を進めてゐる。俄に人口が增加したので、家に對する需要が多く、いくら建てゝも足りないといふ有樣だ。これは大體に於て滿洲一體共通の事だから、滿洲の景氣は先づ旅館料理屋についで建築關係の仕事にあらはれてゐる。會社の事務所の大家さんで且我社の特約店として活動して下さる菊地佐市氏の如きは、素晴らしい發展をされた建築業者で、いくら材料を取寄せても足りないと云つて居られた。

この晩は附近の代理店特約店囑託醫の方々を八千代といふ家に御招待し、事務所の人達も參加して賑かな事だつたが、特に公主嶺の高取氏と四平街(しへいがい)の植木茂助氏が雨中遠路を厭はず御出で下

さつたのは難有かつた。社員堀之内君の雄壯活潑なる振事に對して、植木氏の圓熟洗練された端唄都々逸が出て人氣をさらはれてしまつた。

宴後御客側の御返しをうけ、私共は更に開花といふ家で御饗應にあづかつた。

十四日　昨日とはうつて變つた快晴で、朝早くから飛行機が空を飛び廻り演習氣分が漲つた。きけば今春我社が獻納した明治生命號も、今新京に來てゐるといふ事だつた。

八時半、代理店の方や事務所の人に見送られて出立する。露西亞の列車で乘務員も露滿半々である。新京を後にすると俄に沿道の風景が露西亞に變つた。驛の建物にも、村落の家々にも、野道をかけてゆく犬の姿にも露西亞を觀取する事が出來た。ところどころに、ポプラ林に圍まれて敎會の塔の見えるのも、ツルゲネフやトルストイの風景であつた。哈爾賓近くなると、野の向ふに沖横川兩氏の碑が見えた。

午後二時半哈爾賓につき、代理店辻光氏の御案内で北興ホテルに入る。直に代理店保險係佐藤氏を煩はして市内見物に出る。今朝の快晴かいつの間にか強い風に變り、時々大粒の雨が落ち、松花江は浪高く、船を浮べる術も無かつた。極樂寺では多數の僧侶が聲を張上げて讀經の最中であつた。露西亞墓地の敎會では、折柄赤坊の葬式があり、祭壇の前には美しく化粧した赤坊の死

體を置き、父母と三人の幼い姉と、一人の叔父が祈願してゐた。美服を着せられ、白布で頭を包まれ、白粉と紅で顏をいろどられた幼きものは、人形と同じだつた。墓地のそこかしこに棗の樹が並び紅い實がつぶらになつてゐた。

この晩辻氏に招かれてホテル・モデルンで露西亞料理を御馳走になり、そこで囑託醫野口氏にも御目にかゝる機會を與へられた。露西亞料理の前菜とスウプは非常にうまく、遠慮なくウオツカの杯をあげた。東京あたりで飲まされるウオツカは無闇に強いばかりで何の魅力も感じなかつたが、本場のは柔かい味と香を有し、ウヰスキイやブランデイの比では無かつた。天津北平の支那料理老酒と共に、本場物と場違ひの相違の甚しさに驚いた。

十五日　朝の町中を散歩がてら停車場迄歩き、辻氏野口氏その他の方々に見送られ、九時半の汽車で立つ。各國人の雜居地たる哈爾賓の異色は、後期印象派の繪であつた。昨日の雨の名殘の水溜には薄氷が張り、野にはひとしきり粉雪が降つた。途中新京では醫員豐田氏及事務所の人々が驛に來てゐて約一時間談笑し、汽車を乘換て奉天に向ふ。夕方、空は眞靑に晴れ、やがて燃るやうな夕映を見、夜に入つては宵月の冴えた光が平野に散つた。

十時半奉天着、再び大和ホテルに泊る。

十六日　高田さんは歸路京城支店管內を廻る事になつてゐたので、こゝで別れて、一人早朝の汽車で出立した。私と樋口さんは十二時二十五分小型二人乘の飛行機で、福昌公司の小松氏及堀込福井兩氏に見送られて空路大連に向つた。向風ではあつたが少しも動搖せず、快晴の日の機上は春の如く、思はず居眠をする位だつた。飛行機は時間の節約ばかりでなく、生きた地圖を鳥瞰的に見る爲、土地と土地との距離、關係が明確につかめて有益である。二時四十分無事着陸、再び遼東ホテルに泊る。

十七日　旅順代理店を訪問し、店主西本勝衞氏が多忙の時間をさいて社員三ケ尻氏と共に案內役を引うけられ、戰跡を見物する。戰利品記念館、白玉山納骨堂、東鷄冠山北堡壘、二〇三高地等を廻り、追懷に耽つた。旅順は風光頗る明媚、彼の閉塞隊が船を沈めた袋の口の如き港口の內は、岡に圍まれた波靜なる入江で、ヨツトを浮べるのに適してゐる。最後に、乃木ステツセル兩將軍會見の地水師營を訪ひ、其處で西本氏に御別れして大連に歸る。夜食後稻葉氏を訪問し、旅中氏の訓戒を守つた事を報告し、御祕藏の書畫陶磁器を拜見した。

十八日　會社の帳簿檢査をする。稻葉庄太郎氏は私にむかひ、樋口さんが支配してゐる限りは帳簿檢査の必要は無い、安心して然るべしといはれたが、まことに其の通りで、萬事整然たるも

のだつた。この夜は代理店特約店の方々を湖月といふ家に御招し、所員も多勢席に列して、歡談に費した。

十九日　午前十時大連出帆の亞米利加丸に乘る。

二十日　快晴、夜は月明かなり。

二十一日　午前七時二十分門司着。九時の急行に乘る。

二十二日　午前八時三十分東京着。出社。

今回の旅につき、特に滿支方面の政治經濟事情については、いろいろ見聞する所多く、殊に我社の代理店特約店の方々は二十年三十年現地に於て活躍された人が多いので、我手で育てた愛兒の如く滿洲の發展を見て居られ、その現在將來についての御意見は頗る傾聽すべきものがあり、私も聞き學問を綜合して多少の考は纒めた積りであるが、何分二週間の旅に過ぎないので、大先輩稻葉氏の教訓を嚴守し、お喋りを愼んで筆をおく。

――「社報」昭和九年十月號

札幌——旭川

十二月六日　八、九、十の三箇月に亙る全國外野リーグ戰の覇者札幌支店の獲得した、光榮の黑鷲旗を捧持して、北海道へ赴く事になつた。折惡く先月の二十六日から惡性の感冒に罹つて會社も休み、絕對安靜を守つてゐたのが、親戚の不幸に遭ひ、その告別式に列したりして寒風にさらされた爲か、なほりかけに又ぶりかへし、五日の晚迄微熱がとれなかつた。會社の方でも誰か代理の人に行つて貰つてはどうかと勸めてくれたが、幸ひ六日の朝は平熱に復したので、一寸會社にも顏を出し、どうしても自分で行く事にきめてしまつた。

この日は私の誕生日なので、母のところからえとに因んで猪肉を屆けて來た。ところが、箸をとつてみると、獸肉の味が強過ぎて咽喉を通らない。酒を飮んでも吐きさうな豫感がして少しもうまくない。これは又發熱したのだなと思つたが、うつかりした事を口にすると出立の邪魔をさ

れるから、我慢して平氣を裝つてゐると、家の者は何の氣もつかず、おかはりの燗をつけて來る。物を喰べる辛さを沁々味つた。

七時上野發の列車に乘ると直ぐに寢臺にもぐり込んだが、惡寒がし、やがて發汗して寢衣を濡らした。

七日　目の覺めた時は岩手青森の境で、山野には眞白の雪が積つてゐた。熱は無いやうだがからだが疲れ、洗面所に行つて見ると、鏡にうつる顏色が蒼黑い。七時四十五分青森に着くと、出迎へてくれた主任岩崎與八郎氏に、大變顏色が惡いではありませんかと云はれた。津輕海峽は靜穩で、雪も止み青空になつた。ふだんならば好んで甲板を散歩するのだが、その元氣はなく他の客と枕を並べてごろ寢をした。橫になると、いくらでも眠れた。

函館代理店渡邊合名の秋濱氏や事務所の諸君の送迎をうけ、主任村田幸吉氏と同車、札幌に向ふ。數日前に降つた雪は、汽車の進行につれて深く、札幌から先はこの儘春迄融けないだらうといふ事だつた。しかし、雪はあつても風が無く、氣溫も割合に高く、明朗なる空は夕照にいろどられ、山と海と曠野の描き出す大自然の雄大さは、ビルディングとビルディングに挾まれて生活してゐる都會人を恍惚たらしむるものがある。これが二度目の北海道で、去年の恰度今頃、しか

も同時刻に大沼を過ぎ、駒ヶ嶽を仰ぎ見たのであるが、私は再び新鮮なる感じを全身に浴びて、窓硝子に額をつけて景色に見とれた。しかしその風景も、やがて蒼茫と暮れてしまつた。

小樽驛には主任遠山鶴彦氏が出てゐてくれ、氏の豪快なる爆笑は雪のプラットフォームに響き渡つた。外にもう一人旭川の闘將阿部權之丞氏がゐて、札幌迄同行した。阿部氏は遙々小樽迄遠征し、多大の收穫のあつた樣子だつた。七時四十五分札幌着、夜分の事でもあり、御出迎は御斷りして置いたが、各位の歡迎に恐縮した。尤もこれは私の爲ではなく、黑鷲の爲の御出迎だつたかもしれない。雪の積つた町を、旗亭鴨川に案内された。風邪の爲約十日間食慾を失ひ、今朝も連絡船の中でパンと珈琲をとつた丈で晝食も拔いた位だつたが、役目の緊張が元氣を囘復せしめたのか、支店の諸君と共にあげた前祝の杯には、豐醇なる味を感じ、久しぶりで肴を荒らした。

野老支店長をはじめ黑鷲獲得に氣をよくした連中は、數ヶ月に亙る盟友の苦鬪を語り、愉快を禁じ得ざる面持だつた。野老さんは明日の祝勝會の獻立と餘興の番組を示されたが、店長自身の考案になるといふ黑鷲壽司といふ御馳走があり、阿部權之丞氏の黑鷲踊といふのがあり、お祭氣分濃厚で、御趣向の程も想像された。

鴨川は旅館ではなく、料理屋だが、野老さんの御配慮で、離の一室に泊めて貰ふ事になつた。

皆が辭去せられる時、明日は九時に迎ひに來ると野老さんがいふと、女中の一人が頗る不平さうに、手前共では九時頃でないと起きませんといふ。そんなら私も九時迄寢てゐてあげるから心配には及ばない、門口をしめた儘にして置いて、野老さんが叩いても起きなければいゝではないかと慰撫した。しかし此の婦人は餘程その事が氣になるらしく、皆を見送つて、馬鹿々々しく長い廊下を離へゆく後からついて來て、九時の御出立ですと朝の御飯を召上るのでせうが、どうしませうといふ。朝飯は喰べないから安心してくれと答へて、やうやく諒解して貰つた。

室には瓦斯煖爐が赤々と燃え、寢具が四枚もかけてあり、おまけに湯たんぽ迄入つてゐる。薄着で馴らした私の體には、この溫氣には適さないので、先づ煖爐を消し、湯たんぽをのぞいて床に入つた。人里離れた靜けさで、熟睡したが、不幸にして朝六時頃目が覺めてしまつた。

八日　障子をあけて庭の雪を眺めたり、雜誌を讀んだりして時間の經つのを待つたが、かういふ時の時計の針といふものは、なかなか進まないものである。せめて顏丈でも洗つて置かうと思つて、廊下へ出て見たが、洗面所は母屋の方にあるので、足音を忍んで行つてみると、水道口が壞れて落ちて、水栓を捻る手がかりが無い。洗面器もなし、コップも無い。止むを得ず離へ戻る後から、こいつも朝早く目が覺めて困つてゐるらしい大きな猫が、なつかしさうに踵にくつつい

て來る。甚だ意氣地の無い話だが、私の神經は此の陰險鄙猥なる妖獸をひどく怖がるので、叱々としかりながら室に逃戻つて又蒲團をかぶつた。九時半頃やうやく人聲が聞えはじめたので、再び洗面所へ行き、洗面器にたつたいつぱいの水を貰つて、含嗽をし、顔を洗つた。十時には野老さんが見え、連立つて支店へ行き、そこで、十一月概算二千二百萬突破の概算電報に接した。

午後、市内今井記念館で黑鷲優勝旗授與式が行はれた。各地代理店の方々も、多忙の中をわざ／＼來札され、各事務所の鬪士と共に、優勝旗優勝杯の獲得を祝福された。私の挨拶につゞいて、支店長の答辭、主任代表社員代表の挨拶の後で、函館代理店渡邊熊藏氏が京城金澤京都を連破した札幌支店を豐臣秀吉の氣概と戰上手に比較して、興味の深い講演をされた。今日の盛儀を是非拜觀させて頂き度いと申出られた野老夫人は、會場の暗い一隅に在つて壇上の夫君と共に感激の涙に堪へられぬ風情に見えた。野老さんも人々にむかつて、自分の半生に今日のやうな感激ははじめてだと繰返された。

式後郊外定山溪に赴き、鹿の湯倶樂部で祝宴が催された。私は昨晩床についてから、野老さんの考案の黑鷲壽司について想像をたくましくし、黑は海苔で、それを輪のやうに卷いた壽司が四つ出るのであらうと推量し、前以て野老さんに之を傳へたが、當らずと雖も遠からずで、打拔の

壽司四つが海苔まぶしで眞黒に見える趣向だつた。百人に近い主客が、膳につくと、正面の舞臺の緞帳がまき上り、黒鷲優勝旗と並んでつくり物の岩組の上に鷲を描き、支店長と副長が、うやうやしく一禮し、その岩組の中にしくんだ日本盛の樽のかゞみを支店長が拔いて、優勝杯に冷酒をみたし、先づ一座が飲み廻した。破れるばかりの歡呼が湧上つた。小樽代理店の廣谷敏藏氏の力強い御挨拶があり、年中新計畫と努力に寸閑も持たなかつた闘士も、今日ばかりは一切を忘れて祝酒に醉ひ、かくし藝が續出する。函館の渡邊氏のスキイ踊といふ感傷的なのがあるかと思ふと、阿部權之丞氏自作自演の黒鷲踊の皮肉なのが出る。歌詞を記し度いが、少々刺戟が強過るので差控へる。要するに黒鷲を奪はれた側の感懷をうたつたもので、文句入りのさのさだ。彼は今春三十萬倶樂部大會の席上で支店を代表し、北海道ひぐま健兒の意氣を高らかに宣揚したが、黒鷲旗を奪取して其の眞實を裏書した。感激の渦卷にまき込まれて、私は風邪に疲れてゐたにもかゝはらず、滿座の杯をうけて廻つた。かういふ目出度い、緊張した場合は、何をしても體には障らないものである。代理店の方々が各自の御室に引とられて後、各事務所主任を中心として、圓陣をつくり、十二月壹百五拾萬達成の誓が結ばれた。甲が乙にむかつて、君の方は是非二十五萬やれといふと、乙はいやだ、俺の方は三十萬だと頑張る、遠山閣下（氏は私の事を先生と呼んで

いやがらせるので、私は爾後彼を閣下と呼ぶ事にした）の如きは、我が事務所は四十萬だと叫んだ。その宣言をその儘加算すると、どうも百六七拾萬になるらしいが、私は先づ内輪に、百五拾萬の宣誓式に列したと記して置く。

折角の溫泉場に來たが、發熱を惧れて湯にも入らず、雪崩の音を聽きながら眠る。

九日　緣側の日あたりの椅子に腰かけて、朝日を浴びて居ると、溫室にゐるやうだ。戶外の雪景色を見ながら流れる汗を拭く位、北海道の室內は人工熱が高い。其處へ野老さんが全身雪だらけになつて飛込んで來た。早く起きて裏の山でスキイをやつて來たと云ふ元氣だ。

廣間で朝食を共にし、隨意散會の事になつた。裏山で、支店の若い連中が滑つてゐるから見に行かないかと誘はれたが、風邪の用心で斷つた。しかし野老さんはあく迄も自分の滑つた場所を、又スキイの壯快を見せ度いらしく先に立つて裏手の方へ步いてゆく。この強氣が黑鶯を獲得したのだなと感心して、私も後に從つた。雪に覆はれた傾斜面を、渡邊氏や內勤諸氏が滑つて來る。みんな汗を流し、面白さうだ。かういふ場面に接しると、どうも自分の年齡をとつた事がはつきりしていけない。

同じ電車に乘つた人々も多くは豐平で下車したが、野老さんと私は阿部樌之丞氏を先導にして

旭川迄直行する。途中迄同車だつた服部醫長と別れ、瀧川では次の驛迄往診に行かれる囑託醫寒河江巧氏といつしよになつた。阿部氏は我社に入社する前は、殖林の仕事をやつてゐたのださうで、神居古潭の溪流に添ふ山を指差し、あれは私が植ゑたのですと感慨深さうに薄暮の空を見てゐた。夕方旭川につき、北海ホテルに宿をとつたが、直ぐに事務所と代理店を訪問した。此の夜は事務所主催の祝賀會に列席し、歡談した。

十日　朝七時旭川發、岩見澤、苫小牧、室蘭を經て函館に向ふ。途中で本社からの電報を受取る。豫而チブスで入院中の京城支店長佐藤直吉氏、九日午後一時十五分死去といふしらせだつた。車内の溫度に負けて上着を脫いでゐた野老さんは、直ぐに服裝をたゞし、西の方の車窓をあけて、しばらく默禱された。私は十一月初旬朝鮮へ出張の豫定だつたのが、佐藤氏入院の爲延期となつたので、今此の訃報に接し一層強く胸を打たれた。

夕刻函館につき、事務所を訪問し、更に代理店渡邊熊四郎氏に御挨拶に伺ふつもりだつたが、今朝東京から歸られたばかりで、且風邪の氣味と承り、遠慮する事にした。函館は今春の大火で燒拂はれたが、今やバラツクながら家並は揃ひ、冬支度の商店の燈火は輝き、知らない者には大慘害の後とは見えない位だ。

この晩は根崎溫泉ニコニコ旅館といふので、事務所主催の祝賀會が催され、有力なる代理店の方々を賓客に迎へ、頗るうちとけた宴會だつた。何處の事務所にも夫々特徴はあるが、此の事務所は全員融和、協力一致して事に當る意氣が殊に強いやうに見受られた。

十一日　午前七時三十分、諸君と別れて北海道を去る。これで任務を果したのだと思ふと、風邪の疲れが一時に出て、連絡船では眠りとほし、風波の強い津輕海峽も、何も知らずに過ぎてしまつた。

青森には仙臺の關支店長、岩崎主任、青森代理店中村氏令息が待受けて居られ、驛の食堂で一時間歡談した。中村氏令息準助氏は、つい先頃迄三菱銀行本店に勤務されたのであるが、今後は家事を扶けながら、保險に力を盡すといはれ、先日はわざわざ函館迄赴き、評判のいゝ同地事務所を見學されたさうである。

一時發車と同時に、私は久居眠をはじめ、日がくれると直ぐに寢所をつくつて貰つて寢た。眠つても眠つても眠り足りないやうに眠つた。

十二日　もしもし、もう直き上野で御座いますと、乘務員に起された時はもう大東京の一端にさしかゝつてゐた。十分寢た爲に氣分はすつかり平常通りになり、完全に風邪を追拂つたやうで

ある。六時四十七分上野着。

——「社報」昭和九年十二月號

岡山——福岡

三月六日　午後九時東京發。車中第一番に就床。

七日　午前十時五十六分岡山着。新錦園を宿と定む。私の淺い經驗の範圍内では、この宿程居心地のいゝ宿屋は無い。會社の先輩の間では、長崎の上野屋、福岡の榮屋、名古屋の志那忠が一番評判がいゝが、私は上野屋以外は知らない。その上野屋は座敷調度女中の訓練、すべて群を拔いてゐて、成程立派なものだと感心はするが、あまりに御大層で私の柄には不似合だし、もつたいないと云ふ感じが先に立つて、恰も緞帳役者が檜舞臺を踏んだやうな身の置所なさに惱むのである。恐らく日本一の宿屋たる事に間違ひは無いのであらうが、こつちにそれ丈の貫祿が無いので、窮屈で爲方が無い。新錦園は昔家老の下屋敷だつたといふ泉石豐かなる廣い庭を持ち、閑寂な趣のある宿で、しかも馬鹿々々しく大袈裟な御殿風のサアヴィスなどはしない。親みのある待

遇が客を十分おちつかせる。御世辭や無駄話が少なく、無理強ひをせず、且多少呑氣な家風が私の好みにかなふ。たゞ遺憾な事は、最近老女將が死んで、今後誰が經營の任に當るかわからないといふ事であつた。仕事は人格を反映する。脣の薄い後任女將でも任命されると、此の風格に富む宿も趣を一變するのではないかと心配である。

午後から支店の社員大會が開かれた。支店開設卅七周年祝賀兼第二回全國外野リーグ戰制覇宣誓といふやうな目出度く勇ましい肩書の並んだ大會で、坂本支店長の雄大なる抱負と各事務所主任及び優績者の力強い覺悟が、火花を散らす言葉で語られた。最も私が面白く思ひ、叉深く感心したのは、重松副長の閉會の辭の中の插話である。或る日曜日に、副長が仕事の整理の爲め會社の事務室でこつこつ働いてゐると、市內事務所主任宮崎氏と岡山支店の飛將軍舞原氏が連立つて來た。雜談の最中、副長は最近一社員が手に入れて來た××××の××なるものを机の抽出から取出して兩雄に示した處、仕事熱心の兩雄はつぶさに××を研究し、遂には一人が××持參の社員となり、一人が其の見込客となつて、模擬募集を行ひ、一問一答微に入り細に亙り、日の暮れる迄討論し、結局××は××に過ぎざる事を明白にした。その研究心の深いのには副長も敬服に堪へなかつたといふ。私も平素から此の兩雄を深く尊敬してゐるが、岡山支店今日の躍進の目

覺しさも、斯かる先輩を有するが爲で、兩雄並び立てる事は、支店にとつても會社全體にとつても、又となきしあはせと云はねばならぬ。

夜は廣珍軒といふ支那料理屋で三十餘人會食したが、席上坂本支店長は筆硯を求め、半紙十數枚を綴ぢて、先づ奉加帳と大書し「血戰死鬪黑獅子旗獲得を誓ふ」と記せば、舞原氏は直に金拾萬圓也と初筆をつけた。以下各事務所の鬪士交々立つて、今月の誓約額を列記し、之を締切日渡の手形として私に呉れた。試みに通算して見ると、三十人で九十一萬二千圓である。これは決して不渡ではないといふ事だつたが、此の席にゐない鬪士が別に四十人以上控へてゐるのだから、黑獅子を手取りにする事も至難では無いであらう。何といつても此の支店は、店長の發言に對し、全員揃つて打てば響くの意氣を示し、今度こそは優勝旗を獲得しようといふ熱情に燃えてゐる。頂戴した手形を懐にして、俄大盡の氣分で歸宿した。

八日　快晴の曉から、宿の庭にはいろいろの小鳥が來て囀り、大空には鳶が輪を描き、灌木のしげみには藪鶯がさゝ鳴いた。坂本支店長と同行、朝の汽車で倉敷に赴き、事務所を訪問する。此の事務所は先頃迄兒島郡兒島町にあつたのが當地へ移轉し、未だ電話も架設されないが、兒島地方で他社を壓倒した原田主任以下、いづれも今度の移轉に更に氣分を新しくし、希望に輝いて

ゐる。二三日中に引かれる電話が四四一番で、所員は之を「募集はショイ」「ヨシイチバン」と讀んで腕を叩いてゐた。

汽車の時間迄に少し餘裕があるので、大原美術館の泰西繪畫蒐集及岡山縣出身の故兒島虎次郎氏遺作を見た。先に見た兒島氏の色彩豐かな作品も捨て難いものであるが、歐洲巨匠の作品を見るに及んで、到底比較にならない事を痛感した。我國の洋畫は、色と情緒に趣を托す傾向が強く、力と骨格に於て頗る貧弱である。文學に於ても、音樂に於ても同樣の恨が深い。會社の仕事にもその感無しといひ難い。

事務所の人々に別れを告げ、次の福山へ行く。福山事務所は堂々たる邸宅で、その事務室には神棚をかざり、非常時氣分の漲る宣言標語が壁に貼られ、精悍無比なる齊藤主任の發する電波が卽座に感じられる。十七人の所員を龍班、虎班に分けてゐるのも、向意氣の強い齋藤氏の表現として微笑される。

正午、福山公園葦陽館で、事務所開設二周年記念會が催された。國寶福山城を背景として寫眞を撮影し、御來會の代理店二十餘氏と共に、事務所のおもてなしにあづかつた。全市を見晴らす高臺には春光あふれ、早くも花見時の爲に裝飾電燈の用意が整へられる有樣で、緣の障子をあけ

放つても、少しも寒さを感じなかつた。來賓總代として福山の村上氏の御挨拶が濟むと、所員勇士の面々は競つてかくし藝を披露した。尾道の山下主任は元當地事務所に屬してゐた關係もあり、又私の次の訪問先でもあり、招かれて同席したが、席上起つて自分の事務所の爲に氣焔をあげた。宴席の興はなかなか盡きないのであるが、豫定の時間が切迫したので、各位に御詑して中座した。

三時四十分尾道着。驛前の洋風ビルディングの二階に在る事務所に行き、尾道、三原兩代理店主の臨席を得て、所員一同と會した。會後、自動車をつらねて千光寺山に登り、其處で記念撮影の順になつてゐたが、私が事務所でおしやべりをし過ぎた爲め時間を費し、絕好の風景に取圍まれながら、光線が足りなくて如何とも出來なくなつた。折角山上迄來てくれた寫眞師にも迷惑をかけ、申譯の無い事だつた。なごやかな春宵の山頂から、瀨戶內の水と島を脚下に俯瞰する氣持は又とないものであつた。關東から東北へかけて住む者と、此の地方に住む人との幸不幸の著しさを考へた。山を下つて、西山旅館といふのに案內された。狹い地面に次々と建增をした、急な梯子段の多い家で、吾々は三階に通されたが、いつたん上つてしまふと、先刻登つた山を近々と仰いで見晴らしがよかつた。間もなく、兩代理店主を主賓とする事務所主催の酒宴が開かれた。

其處に、福山の會を終つてかけつけた齋藤氏が加はつて一層賑かになつた。事務所には園部君といふ新參ながら參拾萬倶樂部に名をつらねる勇士があつて、元より本業も拔群であるが、かくし藝の方も頗る達者で、寧ろ憎らしい位だつた。之に對し正客の尾道代理店田坂泰平氏が、多年の蘊蓄を傾け、脱俗した踊を次々と見せて下さつた。無藝大食の私は、山陽の美酒瀨戶內の佳饌に滿腹して箸を置いたが、田坂氏の餘興は終宴の時迄續いて尙御藏(おくら)には澤山のとつて置きがあるやうに見受けられた。しかも此の田坂氏が、昔は大にたしなんだ酒を、大患後全廢して居られるので、いはゞ素面素籠手(すめんすこて)なのだから、藝道一流の達人と稱する外はない。聞くところによると、常に事務所員と行動を共にして督勵鞭撻せられ、所員は慈父に對する親しさを抱いてゐる。宴席解散の後も引つゞき田坂氏の御話を伺つたが、話材豐富で何時迄も盡きなかつた。

九日　宴會の催された室で寢るので、煙草の烟を追拂ふ爲め、緣の硝子戶をあけ放して床に就いたが、寒さを感じなかつた。今日も亦快晴で旅行運滿點である。朝食後坂本さんと雜談に耽つてゐると、突然坂本さんは立上つて、汽車の時間がなくなつたといふ。私は坂本さんに一身を托し、出立の時間は最初から念頭になかつたが、乘遲れては大變だから、あわてゝ立上り、鞄を引さげて幾曲りもする狹い梯子段をかけ下り、靴をはくと、それは宿の間違ひで、だぶだぶの他人

の物だ。違ふ違ふといふとあらためて持つて來たのが又違ふ。三度目にやうやく自分のにめぐりあひ、つつかけた儘自動車に乘つた。幸な事は隣家が自動車屋だつた事だ。驛の近く迄行くと、後から來た汽車が追越して行つた。しまつた、乘遲れたと思つたが、やうやく間に合つて、ほつと一息した。珍しい事で、汽車が三分早く着いてゐたさうである。田坂氏の御見送をうけ、三原迄行く支店長と主任と一緒に立つ。

尾道の旅館はよくないと聞いて來たところ、ちつとも氣の置けない居心地のいゝ宿だつた。殊に茶代に對してお土産と稱する物品をくれないのが、さつぱりしてゐて贊成である。名物の菓子折だの、タヲルなどを出され、いつたん鍵をかけた鞄にあわたゞしく、つめ込む面倒は、かねて煩はしく思つてゐたが、賢明なる西山旅館の女將が率先して之を廢止したのは偉い。各地で此事を話したら、同感の人も少なくなかつたが、中には口の悪いのもゐて、茶代が少なかつたのでせうとからかはれた。

途中で一人取殘され、十一時廣島に着き、直に支店に行つて、各事務所主任と會談晝食を共にす。久々で下河邊氏の朗なる毒舌に接した。新店長下河邊、新副長藤原の兩氏は、【十八字略】此の店の更新に全力を盡す覺悟で赴任したが、幸に各主任とも新店長の指導精神に共鳴して、支店の

面目を一變しようと誓約し、或る古參の主任の如きは、生き返つた氣でやつて居ますと云つてゐた。お隣の岡山がいゝ手本だ。地の利に於て決して劣らない廣島が、人の和を得れば忽ち躍進する事は疑もない。今吾々は、廣島支店の前途に對し、一番深い興味を持つてゐる。

少しく時間を節約して、先般長崎支店に轉任間も無く、出張先島原で急死した安藤敬治氏の遺族を訪問した。未亡人は私に逢つて賴み度い用事があるとかで、行違ひに支店の方へ行かれたといふ事で、令嬢に御目にかゝつた。令嬢は父上逝去の日が婚姻見合の日だつたさうだが、良緣まとまつて近く結婚される事になつた。弔辭の後で祝辭を述べて辭去した。支店に戻つて待つてゐると、やがて未亡人も見えた。令嬢の結婚式を濟ませたら、東京へ移住し度いといふ御話だつた。

午後五時、下河邊支店長、今本醫長及下關事務所の山田主任と共に立つ。下河邊氏は下關から山陰道に廻る旅程、今本氏は下關に大口契約の診査があつて行くのである。車中談笑賑かに、時間の經つのを知らなかつた。此の汽車は連絡が惡く、下關着が九時で、門司發が十一時である。一時間半を驛の待合室で空費した。

十日　午前七時二十五分長崎着。支店の諸君總出の御出迎には恐縮した。今後は成るべく略す

事にし度い。陸軍記念日で市中は賑かだつた。その代り三菱造船所を訪問しても、誰にも面會出來なかつた。例の上野屋は上等過るから、出來る事ならホテルに泊らせて貰ひ度いと前以つて頼んで置いたが、ホテルはあまりに貧弱過るといふ支店の意見で、上野屋のしかも最上等の新座敷に連込まれた。書生流儀で押通してゐる平生の簡易生活とは雲泥の相違なので、板につかない事夥しく、間違つて品評會に出された野犬の如きものであつた。

午後は、市内島原五島三事務所及直屬の人々の會合に列したが、そこへ長崎圖書館の增田廉吉氏が三菱造船所の會計課長江浪時雄氏と同行來社せられ、一時間でも二時間でも閑があるなら、港內史跡を案內し度いといふ。兩氏とも史談會々員で、切支丹遺跡の研究が深いのである。大坪支店長に相談すると、晚の宴會迄に約二時間あるから自分もいつしよに行かうといふので兩氏の誘引を快諾した。日本郵船支店長鈴木恭藏氏の厚意で、小蒸汽船を出して貰ひ、鈴木氏とその令息も加はり、長崎灣口伊王島の切支丹村を訪問する事になつた。小蒸汽の名も伊王丸である。增田氏の談によれば、此の地方では俊寛僧都の流されたのは此の島だといひ傳へてゐるさうであるが、附近に島の數も多く、且あまりに風光明媚で、哀れ深い物語と結びつけるのは不似合に思はれる。三月の初めながら長崎は暖く、桃は紅に、菜の花は黃に、麥は青々と丈延び、海に浮んで

も外套なしで平氣だつた。四五十分を費して、目的の島に着いた。僅に百戸位の村だが、信者の手で建てられた會堂が、平和の象徴のやうに山腹に立つてゐる。此の會堂は資金ばかりでなく、土臺石からコンクリートの固め方から、大工、左官一切の仕事が信徒の勞働で成つたのださうである。その建設の爲に頭髮が白くなつたといはれる神父松岡孫四郎氏は、此の島の生神様として、冠婚葬祭は勿論の事、村民間の爭議の裁き、兒童の教育迄司つてゐる。增田氏は親交があるので、吾々も神父に面會の機を得た。佛蘭西から送つて來るといふ葡萄酒を振舞はれ、此の島に殘る昔の切支丹の遺品を見せて頂き、會堂の後にある修道女の女部屋にも案内された。女部屋も外觀はコンクリート二階建の近代式であるが、內部は疊の敷いてある質素なもので、壁には修道女達の俗名と聖名とを列記した紙が貼つてあつた。約十人の名があつたが、吾々の前にあらはれたのは極めて清楚な感じの一人で、他の人達は何處にかくれたのか姿をあらはさなかつた。神に仕へる女達は、牛乳をしぼり、田畑を耕し、自給自足の生活をしてゐるものゝやうに見えた。吾々に、島の御馳走をしようかと云つてくれたが、時間が無いので其の好意を受ける事が出來なかつた。此の島の他の端にも別に切支丹部落があり、兩者の中間に佛教徒の部落がある。それは長崎縣廳の政策的移民であるが、結局切支丹部落とは融合する事が出來ないで、互に孤立してゐるのであ

る。吾々は船に乘り、神父は汀迄見送つてから、山腹の會堂へかけ上つて行つた。既に集會の時間が近づいて來たので、信仰深い老女達は、會堂の附近の小徑に集つて來てゐた。船のエンヂンが動き出すと同時に、薄靄のかゝり初めた會堂から、鐘の音が聞えて來た。吾々は思はず帽子をとつて禮拜した。

棧橋に着くと、諸氏に別れてあわたゞしく宴會場にかけつけなければならなかつた。會場は文化元年創業と稱する迎陽亭であるが、恰もその筋向に小副川副長の新邸があるので、敬意を表する事にした。洋風の應接間も和風の二階の座敷も堂々たるもので、殊に氏が海外で集めた支那の器物に立派なものが多かつた。庭には大きな池を掘り、緋鯉が群り泳いでゐた。高臺の見晴しがよく、直接山容に對する心地よさは羨望に堪へなかつた。御夫婦きりで子供の無い家庭には廣過ぎる感があるが、氏が此の建築をする眞意は、單に住家を壯麗なものにして樂むといふのでは無く、多年募集戰線に於て刻苦勉勵した結晶を後進に見せ度いのであると語られた。驚くべきは、此の邸宅の外に、尙貸家約十軒を持つて居られるのである。長崎には上海南洋といふやうな特殊地域があるにはあるが、身を修める事の堅い人でなければ、斯かる眞似は出來難い。

迎陽亭は由緒のある家だけあつて、おちついたいゝ座敷だつた。醫員西田昌秋氏が最初からし

まひ迄音頭をとり、賑かな事だつたが、お諏訪様のお祭に出る蛇をかつぎ出して、座敷を練歩き、黑獅子獲得の意氣を示したのは愉快だつた。

十一日　八時三十七分大坪支店長松本友一俵屋末一川上六太郎の諸氏と同車する。途中俵屋川上二氏と別れ、正午近く佐世保に着く。驛の改札口を出ると、事務所の人々が二列に並んで待つて居られた。軍港氣分だなと感じたが、山口主任の話では、海軍出身の人も少なくないのである。池月といふ大きな旅館に案内された。【百六十五字略】

宿で晝食を濟ませ、事務所へ行くと、又しても事務所の前に全所員が整列して居るので、すつかり閉口してしまつた。事務所の會合を濟ませ、松本友一氏の新築家屋を拜見に行く。松本氏も小副川氏同様長崎支店の成功者で、先年郷里壹岐に建築した家は近郷の評判となり、辨當持參で遙々見物に來る者もあつたと噂されたが、今又佐世保軍港を見下す岡の上に普請をし、寸閑があつたら是非見に來てくれといはれたので、若し今夜の宴會後時間があつたら伺ふと約束したところ、幸ひ晝の時間があまつたので、事務所の人に案内して貰ひ、車を走らせた、松本氏の方では夜分來るものと思つて居られたので、折惡く御留守だつたが、奥さんに願つて上げて頂いた。港內を一目に見晴らす斷崖の上で、眼下に碇を下してゐるのが日露戰爭當時の花形敷島艦だと聞い

た。此の住居ならば、夏の夜はさぞかしいゝだらうと想像する。二階とつゝきの部屋には二令嬢が勉強して居られ、その奥の座敷では令息が五高突破と大書した貼紙の下で、間近に迫つた高等學校の受驗準備中だつた。三千萬突破とか、十二億達成とか、いろいろの祈念文字を掲げて奮闘してゐる會社の事を思ひ合せ、何とかして滯無く入學されるやうに祈つた。

今日は事務所管内の明保會なので、宴會場いろはに行くと、既に代理店の方々の御顏も見えた。記念撮影をし、伊萬里代理店大串誠三郎氏の御挨拶を頂き、私も大坪氏も御禮を述べて盃をあげた。參會の代理店十四店で、御多忙の折柄難有い事であつた。事務所の人々も頗る元氣で、幾度も將來の擧績を誓つては萬歳を唱へ合つた。

十二日　前夜大坪さんと約束し、六時に起きれば丁度いゝといふので、その時間に目を覺ますやうに心掛けた。時計を見ると未だ少し早いので、再び電燈を消して枕に頭をつけたところへ、廊下から女中が聲をかけた。起しに來たのだと思つて、もう起きてゐる、大丈夫だと答へると、折返して臨檢で御座いますと云つた。同時に二人の無禮なる侵入者が、外套のポケツトに手を突込んだまゝ、私の枕頭に立つて電燈をひねつた。何處から來たか、いつ着いたか、何の目的か、職業は何か、幾日滯在するか、何處へ向つて行くかと訊問し、失敬しましたといつて引上げた。

今度は廊下を距てた大坪さんの部屋で、同樣の事を繰返してゐるのが聞えた。私はそれをきつかけに離床し、雨戸をあけた。どうも相濟みませんと女中があやまりに來たが、宿屋があやまる筋はない。やあ、臨檢は初めてですと、大坪さんは面白さうに笑ひながらやつて來た。何か事件が起つたのかもしれないといひ合つたが、いづれにしても軍港風景に違ひなかつた。【五十五字略】

早岐迄山口主任に送られ、佐賀に向ふ。事務所は杢尾主任の家に在つて、之亦近代風の明るい立派な邸宅だつた。會合の後、主任の案内で代理店南里重次郎氏を訪問し、楊柳亭の會に臨む。私は岡山で貰つた奉加帳を見せ、その意氣の當る可らざる事を話した處、此の事務所の元老立川政雄氏は、吾々はそんな空手形を發行しない。佐賀の葉がくれ武士は不言實行だと叱咤した。岡山では、これは決して空手形では無いといつてゐたが、果して岡山が空手形を出したかどうかは、支拂日卽ち〆切日迄の興味として待つ事にしよう。

午後五時七分佐賀發。車中一人靜に思ふに、長崎支店は昔から品格すぐれた人物に惠まれ、事務の整理も申分なく、模範となる店であつたが、強ひて缺點を擧れば、老成に過ぎて銳氣に乏しい恨みがあつた。しかし、一昨年及今年の私の得たる印象及び昨今の實績についてみれば、今や底深く燃ゆる火が炎をあげんとする狀態を迎へつゝあるのでは無いだらうか。新興岡山が花咲く

樹とすれば、常に變らぬ長崎は常磐木に比すべきである。

六時三十四分博多着。大に儉約して共進亭ホテルに泊る。呑氣でよし。

十三日　十時から支店で主任及附近受持の社員會を催すから、その時刻に來てくれ、あまり早く來ない方がよいといふ前夜の支店長の注意通り、ゆつくり休息して定刻に出向く。店長の訓示の後で、最近の會社の動向について話す。正午主任を清流莊に招待して食事を共にし、今回巡回した各地の印象を語る。席上、福岡支店は決して無理をしない、今月非常にいゝかと思ふと翌月はがた落するといふやうな薄つぺらな遣方はしない。手堅く一歩々々向上して行く方針だと聞いた。まことに近來の福岡支店は其の通りの發展を示して狂ひが無い。しかし大福岡としては未だ物足りない。私は堅實なる支店の方針に贊意を表すると同時に、試みに多少の無理をやつてみるのも、ひとつの戰法だと確信する。

時間が無いので中座し、二時十四分博多をたつ。途中戸畑にゐる姉夫婦に病後見舞に立寄り、十時下關發櫻に乘る。

十四日　午後四時四十分東京着。

――「社報」昭和十年三月號

金澤——富山

四月十九日　石川縣小松代理店契約百萬達成祝賀會に參列の爲め、午後八時五十五分上野發。

二十日　午前八時十分金澤着。出立前の東京が天候不順だつたので、北國はさぞかし寒い事だらうと推察してゐたところ、うらゝかに晴れわたつた山野には春光漲り、外套は終始邪魔物となつて、額に汗をかく事が多かつた。支店で小憩の後、市内の有力なる代理店中宮氏と中島氏を訪問する。中宮氏は全國に知れわたる菓子司森八の御主人、中島氏は紙商中島商事の社長で、商工會議所會頭其他の世話役を澤山引受けて居られる當市切つての實業家で、斯ういふ後援者を得たのだから、市内事務所が最近の飛躍振は、故あるかなと思はれるのである。支店樓上で市内事務所の人々に會社最近の狀況を話し、晝は事務所主催の午餐會に招かれた。地形の美しい金澤市の春を味ふ時間も無く、店長、副長、醫長、氏家主任及び受持の赤土氏と同行、小松に向ふ。沿道

には未だ咲き殘る櫻の外に、杏か李か咲き亂れ、山々の雜樹の若芽も淺緑に萠え、畑は菜の花の盛りである。先月初旬長崎に行つた時、恰度その地方は菜種のさかりだつたが、一月遅れの春に再び廻り逢つたのである。野山の景色にしても、一方は男性的で、緑も先を爭つて萠え、色彩も強烈だつたが、此方は色も柔かに、羞らひ、ためらひながら春を迎へる女性的の趣である。はじめて見る北國の春の優婉なる風情は、紫派の油繪のやうに弱々しく、都會生活で疲れた神經をなごやかにしてくれる。しかし、その美しい景色の中にも、昨年の水害の慘狀は未だその儘に殘つてゐる所もあつて、土砂に埋もれた田畑が、手のつけやうもなく放棄されてゐる。車中、小松代理店の親戚にあたる金澤市で有名な書籍店宇都宮與四郎氏とおちあつた。同氏も百萬達成祝賀會に赴かれるところだつた。又七尾代理店春木藤兵衞氏も銀行業者の懇親會で、山中溫泉に行くところで、同じ車中の人であつた。

小松驛には店主の令息太一氏が出迎へて下さつて、先づ御宅に案内され、店主麥谷太兵衞氏はじめ家族の方々に御目にかゝつた。小松町は毎々火災に見舞はれ、殊に先年の大火で町の大半は灰になつたので、家々は新しく、木の香のしさうな町である。麥谷家は酒類販賣を家業とせられ、一門繁榮の御家であるが、昭和三年代理店御引受當時は四十萬圓に過ぎなかつた契約を、爾來著

實に增加して壹百萬とされたのである。元より店主の熱心によるのであるが、商工會議所議員たる令息の活動も並々ならぬものと聞いてゐる。夜の宴會には間があり、遙々來た私に珍しい物を見せてやらうといふ御考で、多太神社に案内され、國寶齋藤實盛の兜、鎧の大袖、臑當、その他芭蕉の「あなむざん甲の下のきりぎりす」の短冊などを見せて下さつた。境内で記念撮影をし、次は安宅關址に案内された。川口の砂山の上に建つ住吉神社の背後にこゝが關址だといふ石がたつてゐる。一說には、年々陸地が海に呑まれる裏日本の事とて、昔の關所は現在の海の中だといふ說が流布されてゐて、私共は之を定說と信じてゐたが、當今此の說を抹消せんとする努力が拂はれてゐるらしく、關址海中說は誤りであると明記した建札が立つてゐる。尙面白く聞いたのは、先年安宅關址に人を引く爲め、僞物の寶物を作り往時より傳はるもの丶如く見せかけようと建議した智惠者があつたといふ話で、それは否決されたさうだけれど、或は將來に於て、義經の草鞋や、辨慶が主君を打ち据ゑた金剛杖が、うやうやしく飾られないとも限らないのである。兎に角、松林の中に、散り遲れた櫻の咲くこのあたりの景色は、落人となつた武將の哀れ深い物語を偲ぶにふさはしいものであつた。

町に引返し、祝賀會場丸屋樓で休息する。五時半の御案内だつたが、三十餘人の御客樣の揃つ

たのは七時過ぎだつた。いづれも町の有力者で、且我社の高額契約者である。先づ店主の御挨拶があつたが、百萬はやうやく基礎をきづいたに過ぎないので、今後が本當の發展であるといふ御言葉は意味深く承つた。小松は數度の火事で火災保險の效果を全的に認めた土地である。災害後道路の擴張も行はれ、建築にも考慮がはらはれてゐるし、各人も注意深くなつてゐるであらうから、悲慘なる大火は再び起らないかも知れない。しかし生命の危險は免れない事だから、先づ火災保險に目覺めた人々は當然生命保險をも深く理解されるに違ひ無い。今日迄の百萬には相當の時日を要したけれども、今後の百萬は意外に早く達成せられるのでは無いだらうか。土地の實力から考へて、麥谷氏の御奮發次第で、決して至難の事とは思はれない。御主人の次に水澤支店長と私も簡單に御挨拶を申述べ、來賓總代として、代理店の保證人忠谷直二氏が祝辭を述べ、賑かた宴會となつた。酒間小婢が薄紫の紙片を膳の上に配つて廻るので、近頃流行の音頭か小唄の印刷だらうと思つて取上げて見ると、

お召上りものについて

今晩の日本酒はムギヤ自慢の銘酒天晴で御座います

外に次の通り丸屋樓に準備して御座いますからどうぞ御酌人に仰せ下され御隨意にそれぞれ

御試飲の程お願ひ致します。

アサヒビール　サツポロ黒ビール　平野水

シトロン　ビタミンビール　三矢サイダー

酒むぎや

昭和十年四月二十日

といふ氣の利いたものであつた。祝賀會の案內狀も、その後の挨拶狀でも、すべて獨特の活字を用ひてある點から見て、恐らく自宅でお刷りになるのでは無いかと想像するが、父上か御子息か、商賣熱心に趣味を加へた、頗る氣轉の利いた御趣向だつた。尙宴席に於ても、老齡の父上に令息が引添つて、始終心をつかはれる御樣子は御親子の間の情愛の深さが溢れるばかりで、一昔前に父を見送つた私は、羨望に堪へなかつた。宴會終了後、立派な記念品を頂戴したが、聞けば今日の來賓以外の契約者全部にも、記念としてそろばんを贈られたさうである。尙御鄭重にも、吾々の宿の御世話迄して下さるといふ事であつたが、それは御辭退して、片山津迄の自動車を頂いた。

二十一日　潟にのぞむ旅館矢田屋の曉は早く白んだ。今日も亦快晴で、靜かな水面に時々小魚が白い腹を光らせて飛上つた。水澤さんと私は他の諸君と別れて、動橋から武生へ向ふ。金澤支

店近代の優績者寺尾吉次郎氏を主任として最近開設された事務所は、まだ人手不足の感があるが、若くて元氣のよい主任は少しもめげずに活動してゐる。事務所員に會社の業態を説明し、後刻を約束して代理店三田村家を訪ふ。當主は九州帝大の教授で、當地には居られず、先代甚三郎氏の未亡人が店務一切を切廻して居られる。未亡人は先頃本店で行はれた優績代理店招待會に列席され、引つゞき東京に滯在し、歸宅間もない御多忙の中だつたが、親しく御歡待下さつたばかりでなく、事務所の連中と會食の席に御出でを願つたところ、こゝろよく御承知下さつて、種々御話を伺ふ事が出來たのは幸だつた。それにもかゝはらず、食事なかばに福井事務所主任中村和七氏が用談を持つて私を追かけて來たゝめ、中座する失禮を敢てしたのは、まことに申譯ない次第だつた。武生で一番印象の深かつたのは、三田村家の前の大通で、まん中に松の並木があり、それに挾まれて小川の流れてゐる町の風情だつた。

午後二時四分發で山中溫泉に行く。こゝでは支店二十萬倶樂部員會が催され、今朝片山津で別れた丸井氏家兩氏も參加した。宮岡氏の清元、水野氏の踊の如き年季を入れたかくし藝が出て、小人數ながら盛會だつた。

二十二日　午前九時四十六分大聖寺(だいしやうじ)發高岡へ赴く。途中石動驛(いするぎ)に代理店倉谷喜右衛門氏がわざ

わざ出て來られたには恐縮した。富山縣は我社の金城鐵壁を誇る地盤で、他社の侵入を許さないところだが、殊に石動の如きは、正に貳百萬に垂んとする契約高を有し、全町明治の契約者ならざるは無しといふ現狀で、偏に倉谷氏の熱心の賜である。

正午高岡着。一寸事務所に立寄り、直に公園で催される所員の觀櫻會に加はる。舊城址の塀を圍む櫻は既に遲かつたが、ただ一箇所八重櫻の咲揃つたところがあつて、その傍の空屋の二階が花見の宴席にあてられた。此の日は折惡く風が強く、輕塵をあげたが、滿山の櫻吹雪が渦を卷きつゝ空に舞ひ上り、やがて舞下りて池水を埋める景色は壯觀であつた。一同の前には壜詰の酒が配られ、間もなく折詰が來るといふ事だつたが、それ迄の時間を利用して、私は此處でも繰返して社業を物語つた。恰も公園から見晴らす町の一角に火事が起り、半鐘が打鳴らされ、黑烟が立昇つた。話を濟ませても折詰は來ない。電話で催促すると、既に出たには出たのだが、火事騷ぎを見物してゐて遲れたのだらうといふ返事ださうだ。あひにく私は、或る問題で、高岡出町兩代理店の方と面談の約束があるので、毛利主任自慢の折詰には遂にめぐりあはず、諸君と別れてしまつた。

兩代理店の方も長時間御待たせしたが、約二時間社業に關する御話を承り、四時十四分富山へ

向ふ。

富山代理店天谷伊佐太郎氏の御出迎をうけ、同家で御接待にあづかり、同行、事務所に赴き、所員に社況について話す。此地の事務所は一昨年來た時とは違つて、堂々たるものとなり、仕事の成績も外容と共に發達した。天谷氏大橋主任その他所員と晩餐を共にし、八時三十五分の急行に乘る。

二十三日　午前七時上野着。今回の旅行中訪問した各事務所で、夫々四月の誓約額を記しておいた土産にくれた。お祭月の舊慣を破つて大に奮闘しようといふ賴母しい意氣組に接したが、二十日過の大切な時間を私の出張の爲に徒費する事になつたので、果して諸君の期するが如き數字が擧るかどうか、甚だ心配である。旬日の後に迫る〆切に誓約の實現せらるゝ事を切に祈るのみである。

――「社報」昭和十年四月號

日光

六月十七日朝。八時四十八分上野發、日光へ向ふ。栃木縣明保會に出席の爲である。實をいふと、私は明保會から招待をうけた本人では無い。本人は安東德男氏なのだが、氏は十五日の土曜日の朝から氣分が勝れないので、突然私が代理を命ぜられたのだ。その日は藤田專務の先夫人の十三回忌で私共は御招を受けた。席上安東夫人に御目にかゝり、はじめて御主人の病臥を知り、同時に私が代理をつとめる事にきまつた。翌日が日曜なので、會社で机を並べてゐる人には葉書で通知し、何の打合せも準備も無く出かける事になつてしまつた。

日光は中學の下級生時代に、軍事演習で鐵砲をかついで來た以來だから、凡そ三十四五年目である。朧(おぼろ)になつた記憶の中には、杉の並木と、町中を清冽な水の流れてゐた事と、けばけばしい彫刻で寸分の隙なく飾られた日光廟、眠猫、見ざる聞かざる云はざるの三猿、羊かんの砂糖の白

く固まつたのなどが、いりまじつて浮んでゐる。汽車が宇都宮を過ぎ、雜木の綠の中に黑い杉木立を見ると、それらの記憶には次第に連絡が出來て、曾て見た山の姿を車窓に發見する喜びも味はつた。正午日光驛に着くと、一足先に東京を立つた中島助役と、宇都宮事務所の水谷主任と、地元の代理店相馬繁三郎氏が待つてゐて下さつて、會の集合所東武食堂へ案內された。皆さんに挨拶するのを後廻しにして、私は中食を頂いた。

東京を出る時から天氣はあやしく、どうせ降られるものと覺悟をして來たが、相馬氏は天氣は引受けた、御安心なさいと頗る強氣で、次第に薄日のさして來る山を指して確說される。一行四十餘人はその言葉に信賴して、數臺の自動車に分乘し、今宵の宿泊地湯本へ向つて出發した。馬返からケーブル・カアに乘り、明智平に着き、更に空中ケーブルで展望臺に登れば、正面に中禪寺湖を見下し華嚴、白雲二條の瀧を一眸に收め、東には關東の平野を遙かに見はるかす壯大な景色に接し、人工美と自然美と共に樂む中島助役は、平生陶器を鑑賞する時と同じやうに目を細くして、何ともいへないいゝ味だと繰返す。展望臺を下り、乘合自動車で華嚴の瀧に赴けば、附近の雜木の林には散遲れた八汐の花もあり、山躑躅も盛を過ぎず、春蟬の鳴きかはす聲は新綠の梢を震はせ、山々に反響するばかりしげく、久しく都塵にまみれてゐた者には殊更結構な恍惚境

である。此處も今ではエレベーターで瀧壺迄降りるしかけになつてゐて、何の苦もなく瀧しぶきに濡れながら、岩燕の飛翔するのを見る事が出來る。馬返のケーブル・カアの所で別れた自動車は吾々とは別の途を此處迄上つて來てゐて、再びその御厄介になる。中禪寺立木觀音、二荒山神社に參拜し、湖畔林間の道を縫つて鱒の養魚場を見、龍頭の瀧に着く。幾百尺を一氣に落下する華嚴は男性的ではあるが、岩壁の斜面を細かく碎けて溪流の如く下り、途中二つ分れて玉簾のやうに落ちる龍頭の方が水の美しさは深い。戰場ヶ原を突切つて、湯瀧にも廻つたが、結局龍頭の瀧が最も美しい景觀であつた。先年代理店招待會を此地で催した時、武市會長は此の瀧を仰ぎ見て感嘆久しく、再び腰をあげるのを惜んだと中島助役が話したが、尤も千萬である。

湯ノ湖に近づくと、硫黄泉特有の匂が、自動車の中迄も風に乘つて來る。湖畔の南間ホテルが、明保會御宿で、招かれざる客の私も、特別上等の室をあてがはれ、ゐながらにして白根山を仰ぎ、湖水を見下し、のんびりと休息した。机の上には、早くも明日の土産が載つてゐるといふ幹事さんの手廻しのよさ、何から何迄行屆いた御接待を受けた。

入浴後百二十疊敷の大廣間で會が開かれ、相馬氏の御挨拶に次いで水谷主任が座長となり、會務の報告、幹事の改選が行はれ、飛入の私にも御挨拶をしろといふので、臆面もなく縕袍の儘の

姿で立上り、會社の近狀と將來の希望を述べさせて頂いた。

直に宴會となり、酒間各位から激勵の言葉を頂き、いろいろ餘興もあつて頗る盛會だつた。私も近頃は各地方へ出張するが、お膝元の本店管內には御馴染が薄く、近縣の事情には暗いので、今回の出張はまことに難有い機會だつた。

十八日　曉方、硝子障子の外に雨を聽いたが、間も無く晴れた。相馬氏は今日の天氣も受合ふと言はれたが、果して一刻々々霧は晴れて、山の姿は鮮かになつた。朝食後自動車で一氣に山を下り、日光の植物園を見る。含滿ケ淵に臨む景勝の地で、高山植物が澤山ある。此處で明保會は解散し、私は二三の會員の方と共々、相馬氏に御先導を願つて日光廟に參拜し、ゆるゆる中食を認め、午後四時の準急行に乘つた。宇都宮迄は同地代理店村山金平氏眞岡代理店小菅彥四郎氏と同車、後は中島助役と二人、二日の淸遊のいゝ氣持で、半分居睡しながら歸京する。

——「社報」昭和十年六月號

長崎――京都

七月十日　我社春季リーグ戰の覇者長崎支店の獲得した優勝旗を捧持して、午後三時の特急富士に乘る。昨年の黑鷲は寒冷の頃北海道に渉り、今年の黑獅子は炎暑の候西の果に走る。暑さの折柄九州行はつらいでせう、御苦勞ですと人々にいたはられたが、そんな贅澤はいへた義理で無い。制覇は容易に出來たのではない。汗を流し埃にまみれ、精根を盡して成就したのだ。それればかりでは無く、今病臥中の藤田專務の如きは、寒暑を問はず、全國を不斷に巡回する事數十年に及び、しかも其の間持病を祕して努めた。汽車で寢て行かれる旅に、つらいも苦しいもある筈が無い。

藤田專務の病氣は脫腸で、去る七日の日曜の夜、近所に住んで居られる令息の宅を見舞はれた時、永年脫した事の無かつた脫腸帶を用ゐなかつた爲に、途上甚しい苦痛に襲はれ、その晩は入

院手術を要するのでは無いかと家人も心配されたか、翌朝私共が御見舞に出向いた時は、早くも痛みは去つて、床上に飲まず食はずの體を横へた專務は、いつものやうな元氣を示して、七月九日の會社創立記念日の事や、その日の午後開かれる重役會についての注意を與へられ、社務を見る事の出來無いのを殘念がられたが、私共はその時はじめて、專務に脫腸の持病のある事を聞かされたのである。專務の談によれば二十代から此の病に苦しみ、曾て脫腸帶を離した事が無いといふ。さうすると多年津々浦々迄巡回した出張にも、疾患を脫腸帶で押へて旅から旅と努力されたのだ。しかもさういふ不安と不快を色にあらはさず、誰にも語らず、忍びこらへて通して來た我慢強さは、人間業とは思はれない。專務の持病については、川原林さんも山下さんも知らなかつた。年中旅行に同伴する祕書役も知らなかつた。九日の創立記念日に、營業部の諸君の會合に臨み、此の事を話した處、一同專務の一生を貫く勉強振に舌を捲いた。どうも皆の勤務振が十分でないといふ注意は屢々受けたが、專務から見れば私の如きは度す可らざる怠け者と見えるであらう。三省々々と自分にいひきかせる。

窓をあけても寢臺は蒸暑く、寢衣も枕も汗に濡れた。

十一日　九州地方の水害では、炭坑方面が非常の打擊をうけた樣子で、農村は比較的に輕く濟

んだらしい。しかし、折角植つけた稻を泥土にひたし、植替の止むなきに至つた處も少なくないさうだ。天候に支配される事の大きい農業に對しても、保險制度を普及させる必要がある。

佐賀から、同地事務所主任の杢尾氏が乘込み、長崎の優勝を祝し合ふ。恰も佐賀縣と長崎縣のさかひを通過する頃、車窓に顏をくつつけて田野の景色を見てゐた私は、田を廻つて流れる二間幅位の小川を大きな緋鯉のさかのぼるのを見た。杢尾さんは、先日の雨で何處かの池から流れ出たのでせうと云はれたが、私には何かの吉兆のやうに思はれた。

まる二十四時間乘詰の汽車を下りると、覇權旗出迎の長崎支店の諸君が、晴れやかな顏を並べてゐる。たゝかひ勝つた人々の面上には、勇氣と確信と微笑が浮び、憂鬱の影は微塵も無い。

此の夜は新任長崎圖書館長增田廉吉氏を主賓とし、日本郵船支店長鈴木氏、大每支局長山田氏、三菱造船所江浪氏を迎陽亭に招待し、山に近く海を見下す三階の座敷で歡會を催した。迎陽亭はこの春からの馴染で、此の家のごごさまが途中の驛迄出迎へてくれたのには恐縮した。

十二日　宿の上野屋はサアヴィス滿點と稱される程あつて、客の眠入つた事も、目覺めた事も、ちやんと知つてゐて、昨晩は直ぐにおやすみでしたねと云はれると、こいつ何處からのぞいてゐたのかと疑ひたくなる。朝も早くから襖の外の廊下に來てゐて、室內の氣配で察し、呼鈴を鳴ら

す暇を與へず、その昔の殿様のまゝならぬ生活を偲ばせる。

愈々祝賀式の當日なので朝から支店へ出向き、主任諸氏と會談、各地から歸つて來た社員諸君と挨拶を取交す。支店開設以來の豪遊を極めようといふ祝賀式には、全代理店特約店に對し御案内を差出したので、天草五島の島々から、遙々海を越えて來たお客様もある。殊に五島の山田民藏氏の如きは、明日村會に於て重要なる築港問題につき報告演説をせらるゝ事になつてゐて、本來ならばお斷の筈だつたが、折角支店全員の努力によつて獲得した優勝旗を一目なりとも見度く、又支店に出向いて祝辭も述べ度いので、前日乘船し今朝上陸したが、祝賀式に出席しては村會に間に合はなくなるから、どうか優勝旗だけでも見せて貰ひ度いと申出られた。未だ授與式も濟まないのであるが、あまりの御熱心に感激して、店長室の一隅に黑獅子旗を飾つて御目にかけたところ、氏は旗の一端を兩手で押頂き、うやうやしく一禮して、それでは失禮しますと歸つて行かれるのである。私はあわてゝ後から呼止め、強て御引留するわけにも行かないが、せめて此の旗の前でいつしよに記念撮影をし度いから暫時御待下さいと願つて、直に寫眞師を呼び、撮影を濟ませてお別れした。山田氏はその儘五島へ急ぎ歸られたのであるが、吾々一同は、氏の熱誠に對し感謝の意を十分に表白する事の出來ないのを嘆じた。

晝は店長を中心に主任諸氏と簡單なる食事をしたが、その時割箸の間から出た辻占が「朝日の登る如し運勢大吉」といふのであつた。恰も長崎支店の現況そのまゝなので、又祝辭が取交はされた。

午後一時から支店樓上で優勝旗授與式が行はれた。挨拶答辭、感狀賞品授與の後大坪隊長から黑獅子覇權隊解散の宣言があつて會を閉ぢ、諏訪神社々殿の下で記念撮影をした。リーグ戰開始當時、支店の諸君は優勝を祈願し、おまもりを受けたので、今日は御禮詣なのである。

迎陽亭の大廣間は、僅かに酌人の通路がある丈で、いつぱいだ。百二三十人の大一座だから、純日本風のお膳が出ては到底收容しきれないのだが、長崎一流のしつぽくは、支那風にいくつもの圓陣を形づくつて坐れるので、ていさいよくをさまつた。酒が廻る、餘興がはじまる、代理店主のかくし藝も出る、內勤連の蛇踊、何處で賴んで來たのか長崎流の獅子舞といふやうな地方色の濃いものも出る。勿論黑獅子にきかせた覇權隊策士のおもひつきに違ひ無い。氣焰、談笑は締切日の申込書のやうに後から後から湧いて、いりまじり、かさなりあふ。今年三月九州出張の際、長崎支店は決して空手形を發行しないと叱咤した大久保彥左衞門事立川政雄氏は、どうです長崎は空手形は出さんでせうがといひながら握手した。上海三勇士の一人高洲潮溢氏は、吾等に九州

全土を與へよ、忽ちにして契約高を倍加するであらうと絶叫する。席上各代理店主の御意見を綜合してみると、長崎支店最近の優績は、店長副長主任社員の一致協力の外に、代理店の方々も社員同様最前線の活躍に時間と勞力を惜まれなかつた事に起因するやうである。社員諸君の談を綜合してみると、從來とても決して怠けてゐた積りはなかつたが、此の數ヶ月の勉強によつて鍛へあげた自分に比べると、昔の自分達は十分の力を出し切つてゐなかつたと思ふ、やれば出來るといふ確信が優績の最大原因だといふのである。氣鋭の店長と練達の副長のコンビネーションも勿論物を言つたに違ひ無いが、主任に人を有する事此支店の如きは少なく、又志格の高い古參社員が多く、その人々の立派な態度は後進の模範となり、人心の和は一致團結の力を生み全員の熱誠は代理店主をも動かして、活火山の自然の爆發のやうな凄い力が破裂したのであらう。しかも「やれば出來る」の確信をつかんだ闘士は、七月百拾萬、八月再び百拾萬を重ねて、今年度支店責任額を完了しようといふ申合せをなした。既往に於て年度責任額突破の記録は、數年前長崎支店が九月末完了を遂げた時の儘であるが、今度は自分の記録を自分で破らうといふ運動となつたのである。大坪さんは感激と感慨で胸がいつぱいらしく、何故山下さんは來てくれなかつたのでせう、私は入社當時から山下さんに敎へ育てられ、山下さんに學んだ所を實行してゐるのですと、繰返

し繰返し、なつかしがり殘念がつた。

餘興は最初から最後迄つゞき、百數十人の客に對し、一人五本當の德利が出たといふのだから、その盛況は素晴らしいものであるが、一絲亂れず、萬歲を齊唱して散會した。まことに驚く可き規律で、勝て兜の緒を締めた心境をうかゞひ知る事が出來る。

本來大一座の宴會の御馳走は大量生產の弊で、形ばかり整つてゐて味の伴はないのが通例であるが、迎陽亭も亦長崎支店と一致協力して勉強したのであらう、頗る氣の利いた御料理で、私の如き遠地の者には目新らしく、舌新しかつた。私にとつては二日つゞきであつたが、大宴會と小宴會の違ひばかりでなく、特に趣を變へた心づくしも十分味つた。

蒸暑いのをあたりまへとする長崎が、今宵は風涼しく、しのぎよかつたのも、支店の運勢大吉を示すものであらう。

十三日　午前九時二十五分長崎發、途中博多から久保澤支店長同行門司に赴く。小倉、直方兩事務所の會合で、代理店の方々も多數來會せられた。會場は山腹の倶樂部で、海峽の夜景が美しい。福岡支店は七月貳百萬の目標で、社員の水色のリボンに貳百萬必成と書いた徽章を上衣の裏につけ、代理店主も色こそ違へ同じものを佩用される御熱心で、かういふ意氣込になつて來れば

北九州の大地盤を有する福岡支店も、大阪、名古屋と頡頏するに至る事疑なく、甚だ心強く思つた。

散會の頃、廣島の下河邊支店長と下關の山田主任が迎ひに來てくれた。京都支店から歸途立寄るならば社員會を催すといふ電報が來てゐるがどうするかといふので、外野戰線大多忙の二十日前後に社員會を催しては、活動の邪魔になりはしまいかと懸念されたが、結局行く事にきめて返電を打つ。海峽を越えて下關の山陽ホテルに泊る。

十四日 午前八時の汽車で下河邊、山田二氏と共に萩に向ふ。全くはじめての土地である。維新の際所謂勤王黨の策源地の一だつた此の城下町は、山水明媚の地で、昔の士族屋敷のその儘に殘る町中にも綠が多く、風情が深い。何處の家にも夏蜜柑がしげり、年額數十萬圓を産するとく。又 今上陛下がそのかみ御巡遊の節、恰もその花時だつたので、此の町には香水が撒いてあるやうだと仰せられたさうである。川の邊りの富田屋旅館といふのは、會社の定宿で、女中頭のざつくばらんなのが、先の支店長安藤敬治氏の事や、支店の醫員の噂話をたつぷりきかせてくれた。一休して、市内見物に出た。代理店中村善次郎氏八木馬太氏を訪問したが、八木氏は御留守だつた。吉田松陰幽囚宅、松下村塾、松陰神社、藩公廟十一烈士の墓のある東光寺、海水の侵入

する爲に黑鯛、鱸などの群棲する明神池などを廻る間に、木戸孝允、高杉晋作、久阪玄瑞、伊藤博文、山縣有朋、玉木文之進、三浦梧樓、前原一誠、桂太郎、品川彌二郎等の舊宅が、史蹟として數へられる。それが明治維新と切つても切れない因緣の深い此の地の特徵を語るものである。新しいところでは久原房之助舊宅などもあり、今後名士を出す每に殖えて、しまひにはその煩はしさに閉口するかもしれない。田中義一大將の銅像もあつたが、下河邊氏は夏蜜柑を植ゑる事を奬勵した功勞者の銅像を建つべきであらうと主張した。

夕刻から高大亭に、中村氏、仙崎代理店藤井氏、長門古市代理店大永氏を御招きし、此の地方受持の諸君も列席して、さゝやかなる酒宴を催した。中村氏は約三十年代理店として活躍され、壹百萬を擁する現況であるが、それより先、明治二十九年俣野景藏氏がはじめて募集にやつて來た頃、前代理店に勤められて、應援募集をした事があると話された。萩では、保險といへば中村さんと人々がきめてゐて、他社に契約した者が間違へて保險料を拂込に來るといふ事だ。大永氏は卽興詩人で、明治生命に關する歌詞を澤山つくり、受持社員と共にうたつて宣傳の一助として居られるさうで、本店の社屋をうたつたもの、養老有限等各種の特徵を俗歌の中にうたひこんだものなど、いくらでも用意して居られ、その當意卽妙には驚嘆した。

十五日　下河邊氏と二人、午前八時五十一分萩發で松江に向ふ。松江は十七八年前、大阪在勤の頃、二度出張を命ぜられて來た事がある。一度は今の桑原羊次郎氏に代理店の御引受を願ふ爲であつた。氏は非常に趣味の廣く深い方で、ロンドンの大英博物館所藏の浮世繪の鑑別整理をされた事があつて、私は夙にお名前を承知してゐたし、その令孃は東京にある英吉利風の女學校で、私の妹と同級生だつた關係から、拙宅へ遊びに見えた事もあり、最初からお知合のやうな氣持で御目にかゝつたが、久しぶりで此の水鄕を再び訪ふ事になつて、昔の事を思ひ出し、なつかしかつた。宍道湖畔の旅舍臨水の二階から湖水の景色を樂んでゐると、間もなく岡山支店長坂本氏の巨軀があらはれた。明日から下河邊氏の手をはなれ、坂本氏の手に引繼がれる私なのである。恰も玉造溫泉場で島根縣明保會が開かれる事になつてゐて、兩支店長と共に招かれる。幹事の方の御指圖通り、入浴後浴衣のまゝで皆さんに御目にかゝる。桑原氏は少しも變らぬ御元氣で、半白となつた私を迎へて下さつた。席上種々の御話を伺つたが、會の決議として、社員數を增加せよといふ一項は、豫而會社の希望するところで、代理店側から斯ういふ要求に接したのは何より力強かつた。下河邊氏共々その實現を期する旨を申述べると、それなら自分達の方で更に協議して、具體案を練らうといふ御話で、吾々は深く感謝した。

此の日は松江の水都祭で、湖上に提灯をともした小舟がゆきかひ、花火が上り、深更迄賑かだつた。しかし、風が死んで蒸暑く、寢苦しい晩だつた。

十六日　出立前に桑原邸へ顏を出さうといひ合つてゐるところへ、先方から御訪問下さつた。前日の社員增加の御話を繰返し御願ひし、八時二十九分下河邊氏と分れて米子に向ふ。驛には皆生代理店主平野憲二氏が山中主任といつしよに御待受下さつて、用意の自動車で伯耆大山に案內して下さる。大山寺の由來は古く、法燈高く輝き、高僧碩德相踵いであらはれ、後には僧兵劍を手にして武威をかゞやかすに至り、南北朝時代から明治維新に亙る歷史の幾頁かに興味深き史實を殘してゐる。山頂迄登る事は出來ないので、中腹の洞明院を訪ひ、住職大館禪操師に御目にかゝり、御話を承り、お茶の御接待を受け、有名な丈六の阿彌陀像の拜觀を許される。御住職は我社の契約者で、深き學識と進步的な思想を持つ方だと聞いた。短時間であつたが、強く銳く鮮明な印象を受けた。山中屢々雷鳴をきゝ、白雨の過るに遭ふ。

山を下つて海岸の皆生溫泉に至る。晝は平野氏の外に、米子代理店今井兼文氏、根雨代理店近藤馨一郎氏、市勢特約店倉光康利氏に御足勞を煩はし、宿で粗餐を呈し、夜は社員諸君と會食した。夜中物凄い雷雨を聽く。

十七日　坂本田中兩氏と共に鳥取に行く。事務所で社員諸君に會社の近狀を報告し、將來の抱負を語る。山中夫人が何彼と心を配つて一同の御世話をなさるのをみて、平素もさぞかし御手數をかける事だらうと推測する。鳥取は久しく振はなかつたが近時大に氣勢をあげ、今後一層發展を見るは明かである。

代理店石谷良造氏を訪問、夜は倉吉代理店涌島幾藏氏、若櫻代理店中尾氏を鳥取ホテルに御招きし、事務所の諸君と共に會食する。雨中御差繰御出で下さつたのに、時間も乏しく、全くの粗飯で、申譯の無い事であつた。

十八日　朝、海岸の有名な砂丘を見に行く。小砂漠の觀があつて、日本離れの風景である。

石谷氏祕藏の揚谷筆虎の畫と、宿の主人の知人所藏稻嶺筆七賢人左右花鳥三幅對を山中主任が拜借して來て見せてくれる。虎の圖は素晴しいもので、しばらく床の間にかけていゝ氣持になつた。

十一時五十七分諸君と別れ、一人京都行の汽車に乘る。途中福知山から小松副長が乘込んで來た。同地方で行はれてゐる宣傳募集の應援に行つてゐたのださうである。今月は貳百萬必成ですと元氣がいゝ。夕六時京都に着き押原支店長佐原醫長北尾勝三氏佐藤眞治氏と共に丸山の料亭で

私的の食事をする。都ホテルに泊る。

十九日　押原氏といつしよに市内の北白川、小泉新、醍醐、柳池、岩崎、堀、伏見の各代理店特約店を訪問する。伏見の山本家は神聖の醸造元なので、近代的冷却設備の整つてゐる酒倉を見せて頂いた。京都市内は此間の水害でいたましく荒れ、三條五條の橋の流失した名殘を見るのは殘念だつた。

午後、會社の樓上で社員諸君を前にお喋りする。少しく時間があつたので武市會長邸を訪問し、夕刻から鴨川べりの矢尾政で支店の諸君と會食する。八時四十五分京都發。

二十日　朝七時十分東京着。東京に歸つて驚いたのは、出立前お見舞し、醫者もしばらく靜養を要するやうに云つてゐた藤田專務が、いつもの通り出社執務し、あく迄も勉強し、倒れて後止むといふ專務平素の覺悟を實行して居られた事である。

――「社報」昭和十年七月號

高松——德島

十月八日　午後九時東京發。

九日　岡山驛に坂本さんが出迎へてくれ、いつしよに高松迄行くといふ。瀨戸內海四店躍進同盟の盟主として、敵情視察の目的らしい。今はさういふ事はあるまいと思ふが、昔は支店同志が互に祕密主義で、他の支店から內情をうかゞはれるのを、いやがる向もすくなくなかつた。先年亡くなつた或店長の如きは、他店長から電話で其月の成績見込をきいて來るのを甚しく立腹し、そんな問合せに答へる必要は無いといつてゐた。私は隣接支店同志、或は互格の力を有する支店同志がお互に明朗なる心境を披瀝し、最善を盡して競爭するのは、業績向上の爲に頗る有意義だと考へる。その點で、瀨戶內海四店躍進同盟の成立を歡迎したが、近來何故か同盟の成績は不振勝ちだ。瀨戶內海逆進同盟ですと、坂本さんは自嘲した。

風景絶佳の宇野高松間連絡船で、坂本さん持參の辨當にありついた。私は辨當の用意をせず、缺食の肚(はら)をきめてゐたが、思ひもかけないお土產を貰つて、景色を眺めながらの中食は有難かつた。少し曇つてはゐたが、靜かな海峽を橫切るのは快適だつた。

高松に着いて、高木さんの第一聲は、どうして四國が出來ないか其の理由がわかりませんといふのであつた。土地は肥沃だし、所員の數も殖えたし、交通も次第によくなつてゐるし、これで出來ないわけは無いと思ふが、實績は擧らない、不思議ですといふ。私は四國をよく知らないが、察するに明治生命の地盤開拓の手遲れと、出張所開設後日の淺い爲、全員の意氣が合致し、底力を爆發させる機會がまだ到來しないのであらう。然るに今月は百萬必成の運動を起し、全員固き誓約を結んで目的貫徹に突進するといふ。成否を別にして、斯かる意氣と熱が、現在の四國にとつて一番必要な事は疑ない。

玉藻(たまも)ホテルに鞄を置き、出張所に行く。醫員內勤の人々に逢ひ、直に代理店訪問に出向いたが、いづれも御不在で本意を果さなかつた。市內事務所に立寄り、公會堂の事務所員召集會に臨み、會社の近狀と將來の抱負を述べる。高木さんは百萬必成運動に就て熱辯を振ひ、各員の奮起を促した。晚餐會迄に時間があるので、屋島にドライブした。風光の明媚に、平家沒落哀史を添へて、

折柄の秋風は、自然と人生を觀るものゝ胸中に融合させる。薄暮公會堂に引返し、國旗に百萬必成の四文字を加へ、天井に張廻した食堂で、一同會食した。散會後店長副長醫長の案内で、栗林公園の夜景を見た。山を背景とし池を中心とする庭園に蟲の音がしげく、人かげは少しも見當らなかつた。

玉藻ホテルは立派な設備で、使用人の行儀もよく、行屆いたサアヴイスだつたがお客は頗る行儀が惡く、醉拂つたのが他人の室へ侵入するし、他所で飲んで深更歸宿したのが、階段を踏鳴らし、廊下で騷ぎ、大に安眠を妨害した。土佐と讃岐の代表人物の交驩會に出席した國體の人達ださうで、ホテルの人々はひどく閉口してゐた。尙此のホテルが靴の儘上にあがる事を許さないのは時代錯誤で不便だつた。

十日 朝七時五十八分發の汽車で松山に向ふ。肥田の中に椀を伏せたやうなまるくなだらかな山のある四國風景は、優雅なものであつた。崇德天皇の御遺跡を、車窓から遠望し、高木さんの四國觀に傾聽しながら、午後一時十二分松山に着く。道後溫泉の鮒屋に宿る。早速事務所に出向いたが、此處は高松事務所の商店風なのと違つて、二三百石取の武家屋敷で、十五疊の座敷の床に猪の一軸をかけ、「しゝの十六萬とる迄はわき目ふらずに一筋に」と筆勢美事に書いた紙片が貼

つてあつた。寂びた庭にはふたかゝへもある櫻の老木があり、昔なつかしい邸宅だつた。私と高木さんと交々話をし、地方では珍しく支那料理の圓卓を圍んで、談笑した。朝のうちは快晴だつたのに、いつか曇つて雨となつた。宿に歸り、高木さんは戸外の溫泉浴場に出かけたが私は無精をきめこんで、早寢にした。枕に近く、水聲が聞える。

十一日　雨の中を、豫而御後援を願つてゐる名家仲田傳之鬆氏の玄關迄挨拶に赴く。一寸でも上れと、いはれたが、時間が無いので失禮し、驛に向ふ。松山宇和島間の鐵道は未だ完成してゐないので、途中から乘合自動車で、山を越え又山を越えて行く。幸に日本晴となつたので、山頂の眺望もよく、峠を下ると必ず立派な村があり、農家の家屋もとゝのひ、貧しい家を見ないのには感服した。これで出來ない筈は無い、どうして出來ないか不思議ですといふ高木さんの言葉を思ひ出した。上つては下り上つては下る嶮しい山路にゆられて、私の隣に乘合せた老婆は吐瀉しはじめた。後にゐる盲目の娘はすつかり參つて、うなつてゐる。武市會長や山下さんから、四國の旅は乘物がつらいぞと聞かされてゐたが、成程乘物に弱い人には、こたへるのだなと思つた。私はさういふ點甚だ頑健無神經なので、芒や萩の眞盛の山路の美しさに滿足し、これが社用出張でなく休暇の旅ならばどんなにいゝだらうなどゝ空想した。

宇和島の宿蔦屋に着くと、既に事務所の人達は集つてゐた。その人達には御氣の毒だつたが、尙暫く待つて貰つて、吾々は代理店豫州銀行に挨拶に行き、支店長代理城戶庄作氏に御目にかゝつた。次に事務所に立寄り、宿に歸ると直に事務所の人達に對し、近時の經濟狀態が保險事業に及ぼした影響を主として話した。宇和島事務所は若い人が多く、元氣いつぱいに見えた。その儘其處で晚餐を共にし、散會後同窓會の招待をうけ、之亦同じ宿の一室で御馳走になつた。

私は大正六七八年と大阪支店に勤務し、當時同支店の管轄だつた高知縣には二度出張した事がある。二度目の時は目的地が宿毛中村方面だつたので、瀨戶內海を經て豐後海峽にかゝつたが、風波はげしく船の進行が危險になり、遂に宇和島に碇泊して天候の回復を待つ事になつた。止むを得ず上陸し、宿引のすゝめる儘に一夜を過した事がある。大きな家だつたが、あまり上等の宿ではなく、殊に湯殿が汚なくて、流し場にはなめくじが這つてゐた。團體客のいそがしさに、こちらはすつかり閑却され、窓に倚つて雨空を見てゐると、隣が藝者屋で、老妓が若い妓に端唄の稽古をしてゐた。その時の宿はどの邊だらうか、きいつてみたけれど、當今は花街は移轉してしまつたさうだ。誰にも見當がつき兼る樣子だつた。

十二日　今日も亦日本晴だ。早朝舊藩主の庭園拜見に行き、市內を一巡したが、宇和島の婦人

の容姿の美しいのに感心した。これは高木さんも同感だつた。宿の若い女中達も、商家のおかみさんや娘さん達も、色白で面長で、首がしなやかに長く、撫肩で、やさしく上品な顔が多い。近代的の理智的な表情には乏しいやうだが、京都風の優美を本家以上に傳へてゐるやうに思はれる。曾て高知の婦人の男性的なのに驚いたが、四國も裏と表では、全く人種が違ふのであらう。氣性も骨格も正反對らしい。

十時、事務所の人々に別れ、自動車で出立する。途中山間の村に仕事に行く二宮重宮兩君も同乘した。市を離れると忽ち山懷の美田となり、農家も多くは瓦屋根で、豐かに平和な風景である。小學校へ通ふ生徒の服裝なども奇麗で、東京以北の農村とは全く別天地のやうに見える。晴れわたる空に柿の實の赤々と輝くのも美しい。やがて兩君と別れ、愈々山路は深く、いつか高知縣を走つてゐる。四萬十川流域は、先頃の風水害の慘狀を未だに殘してゐるが、山は高く水は清く、鮎漁の人も多かつた。今度は中村を通らなかつたが、その町の紺熊といふ宿に三四日滯在した事があり、珍しく腹をこはして宿の人達に心配をかけた事を私も思出した。その頃は宿屋々々に憲政會御宿とか、政友會御定宿といふ看板を出してゐて、紺熊はたしか憲政會側だつた。一毛も殘さない、禿頭の、おやぢが「土佐の鰹をうちの醤油で喰つてみろ、たまるか」と自慢した。隣村に

やつた娘が子供迄あるのに姑に虐待されて戻つてゐて、それが、ぢいさんの癪の種だつた。そのぢいさんは恐らくもう生きてはゐまい。娘さんは復縁したかどうか、日に日に白髪の加はる自分を顧みて、夢のやうに思はれる。

窪川の宿屋で晝食をしたゝめ、又直に先を急ぐ。或は山路を辿り、或は海岸にあらはれ、自動車の旅はめまぐるしく、時々沿道の代理店に御挨拶に立寄る外は、まつしぐらに高知へ走つた。宇和島を發して七時間半、記憶に殘る仁淀川を渡ると、高知の町に入つた。城西館に着くと、代理店中山猿膽氏が御待受下さつて、諸事御指導を仰ぐ事になる。宇和島の蔦屋の素人家のやうな居心地のよさを感じたが、こゝは萬事行屆いて日本國中有數の旅館だらうと思ふ。事務所の主任森田氏社員鍵山八田町田の諸氏の訪問をうけ、中山氏を圍んで會食した。

十三日　朝、中山氏の御案内でお城跡の公園に上り、又舊藩公をまつる山内（やまのうち）神社に參詣し、その足で事務所にゆく。事務所は、往年中山氏が民政黨高知支部を牛耳（ぎうじ）つて居られた頃の同支部の建物で、全國の事務所中最も事務所らしい事務所である。木造洋館で、明治十四年の明治生命は、こんな形では無かつたかと想像される。電車に近く、郵便局に近く、便利は頗るいゝ。しかも、その一室には高知代理店の事務所もあつて、中山氏が日常出勤される。朝は未明に起き、夜は深

更迄眠らない中山氏が身を以て範を示されるので、社員と雖も怠けてはゐられない。よく地方駐在の社員が、どうも代理店が活動してくれないで困ると泣言をいふが、高知では之が逆で、中山氏は常に社員の活動の不足を攻撃される。今日三百五十萬に達せんとする高知代理店の契約は、全く中山氏の超人的努力の賜である。おもへば、明治生命も變つたもので、先年私が大阪支店から出張を命ぜられて高知へ來た頃は、高知縣にたつた一人の社員しか居なかつた。他社は十人十五人とゐるのに、我社は一縣一人主義を守る積りだつたのか、他の地方にもさういふ手薄の狀況を見た。全高知縣一箇月の契約が僅かに三千、五千といふやうなはかないものだつた。私は事務所の樓上で話をする時に、往時を追懷して感慨無量だつた。

何處の事務所へ行つても百萬必成の旗が天井を蜘蛛手に張廻してゐる。向意氣の強い高知魂は、必ず目的貫徹に全力を盡すであらう。中山氏は高木さんの希望に應じて、一諾十二萬圓を引受けられた。一同晝食の後、私は中山氏の御案內で、高木、森田兩氏と共に室戸崎見物に行く途中安藝町を過る時、長崎の大坪さんの姉さんの御家があると聞いて、立寄つた。海岸の町々は暴風の爲にいためられ、家屋の流失したものも多く、死傷者すくなくなかつたさうである。百年の綠を誇る老松の眞二つに折れたのや、根こそぎ倒れたのも夥しかつた。

室戸崎は、先年新聞社の催しで、全國各種の八景を投票で決定した時、海岸美の第一位を占めた名勝であるが、此處も嵐の慘害は免れず、後に聳ゆる山腹の樹林は、立枯れになり、開業間もないホテルは潮をかぶつて廢業し、觀光客の爲の休息所も半分はけし飛んでしまつた。元來室戸の美しさは、岩礁を嚙む波濤にあるので、波の高い時を最もよしとするさうであるが、此の日は少しも風無く、春の海のやうに長閑だつた。室戸崎が海岸美にすぐれてゐる事は勿論疑ふ餘地が無い。しかし三百萬に近い投票を集めた高知縣人の熱心がなければ、第一位になつたかどうかは疑問である。高知縣下にも、これにまさる景色はありさうに想はれる。その投票の大半は、中山氏の努力によつて獲得されたものと豫てきゝ及ぶが、氏の募集力の偉大さから推測すれば、それは決して根據なき噂ではないであらう。卽ち私は室戸崎を呼ぶに、中山氏作の絶景を以てする所以である。

歸路はとつぷり暮れてしまつた。十六夜の月が凄艶な光を漲らした。

十四日　朝、宿を立つ前に、本店にゐる門田政章君の母堂と、大坪夫人の嚴父の訪問をうけた。門田母堂は、遠方に手放してある政章君の事が心配で堪らないと眞情をもらされた。

九時、中山邸に參上夫人に御挨拶を述べ、その儘、高木さんと二人、自動車で阿波池田に向つ

て出立する。途中土佐神社と、杉村の大杉を見る爲に下車した丈で、三時間半の山道を疾驅する。高知德島間の汽車も、十一月中には完成するさうだから、再び四國へ來る事はあつても、此道を通る事は二度とあるまいと思はれる。吉野川に沿ふ溪谷の美しさを嘆稱した。

池田から汽車に乘り、德島に着いたのは午後三時十八分だつた。すみやといふ宿に案內され、直ぐに事務所に行き、次に敎育會館に赴き、例の百萬必成の旗の下で、所員諸君に逢ひ、夜は公園內の太陽軒といふ家で晚餐を共にした。

此の事務所の兒島直吉氏は、會社に入つたのはそれ程古くないが、明治二十二年故物集女淸久氏が、はじめて德島開拓に來られた時、募集の手傳をして以來、明治生命の爲に働く事四十年に及ぶといふ。六十六歲の高齡であるが、今尙矍鑠たるもので、德島市內に「明治の兒島さん」を知らざる者なく、氏の手で一家三代契約した家もあるといふ事である。

十五日　午前七時三十分德島發、小松島から船に乘る。高木さんは百萬必成を誓ひ、中瀨主任も特別責任額突破を約し、船の上と岩壁とで、互に健康を祈つて別れた。海上頗る平穩和歌浦に着くと、山名さんが矢野主任と共にはしけでやつて來た。山名さんはその儘乘船、神戶迄の三時間を社業に關する會談に過した。

山名さんは神戸支店迄同行されたが、直に大阪へ歸れば店務を見る事が出來るといふので、別れた。支店の狹い樓上で、おもはず長話をし、市内及び附近受持の人達の貴重な時間を奪つた。晩餐はミツワに招かれ、支店の人々と會食したが、九時二十分の汽車に時間が無く、自分丈中座して驛にかけつける。

十六日　午前八時半東京着。

――「社報」昭和十年十月號

甲府

十一月二十七日　朝八時半新宿發の汽車で、飯村支店長と共に立つ。山梨縣は明治生命が斷然トップを切つて他社の追從を許さず、現在高も新契約高も引續いて第一位を確く守つてゆるがないが、縣下現在契約高の約半分は甲府代理店の保有高で、その他の契約の又半分は谷村代理店の努力の堆積である。今年も亦甲府代理店は十月迄に七拾萬圓の成績を以て全國優績店の第六位を占め、谷村は五十萬圓で第十二位を占めてゐる。之を以て見れば、我社が山梨縣に於ける絕對優勢を示してゐるのは主として兩代理店のおかげだと云つてもいゝ。それで、會社は兩代理店に敬意を表する爲め、私を使者として差遣する事になつたのである。此の使者は甲府ははじめてゞ、甲州といへば、子供の頃に讀んだ甲越軍談と、講釋師が虛實とりまぜて讀む黑駒の勝藏、武井の吃安、紬の文吉などゝいふ親分の事蹟以外には多くを知らない。尤も現代に於ても根津嘉一郎、

小林一三といふやうな凄い親分を輩出する土地で、その小林親分の口から、屢々お國自慢は聞かされた。小林親分曰く。甲州は天嶮の地だから徳川幕府は此處に大名を置く事を恐れ、城代をして政務を見させた。從而甲州人は大名に頭をおさへつけられた事が無く、我が家が一國一城を成してゐるのだから、獨立心が強く、一騎打を辭さない云々。まことに根津小林の親分衆の行動を見ても、一騎打の雄たる事は爭はれない。山嶽けはしく寒氣きびしくして人強し、甲府にはうつかり乘込めないぞと思つた。

又思ひ出すのは、明治十三年亡父泰藏が、關西へ赴く際第一に訪れたのは甲府であつた。亡父の簡單なる手記は、此の旅行の眞の目的が何であつたかを記述してゐないが、故鎌田榮吉先生の御話では、明治生命設立の議定まつたゝめ、先づ各地の知人有力者に面會贊成を求むるつもりで、甲州から中仙道を經て、岐阜名古屋に出で、京阪神を歴遊したのださうである。父は明治十一年の末官を辭し、專心保險事業に盡さんと決心したものゝ如く、約一年間を書齋で過した模樣である。從而十三年五月の旅は、久々の事とてかなり愉快なものだつたらしい。九日午前九時十五分麻布飯倉の宅を出て、人力車で新宿から下高井戸を經て八王子に至り、宿に着いたのが午後六時である。甲州街道はその翌月　陛下大和御巡幸の通路の爲め、道路修繕中で、人力車の運轉頗る

困難を極め、途中から下車して間道を歩いた。第二日目は雨で、朝六時半人力車で旅宿を出で、小佛峠の麓で下車し、人足に行李を負はせて峠を越し、小原より上野原迄は駕籠を雇つた。第三日目も道路修繕の爲め人力車の通行困難の箇所多く、大半は徒歩し勝沼に至つて宿泊する。第四日目の午前八時半漸く甲府に達し、「道路砥の如く東海道も三舍を避く。柳町米倉方に投宿し午後市中を徘徊す。」云々と記してゐる。元より先を急がず、悠々と歩いたのであらうが、まる三日を費してゐる。然るに今日の汽車の旅は、僅かに三時間餘を要するばかりで、樂に日歸で用を足す事が出來るやうになつた。亡父の存生中、明治生命が數十年を費して獲得した保險契約を、今は一年か二年で擧る事が出來るのである。時勢の變遷の恐ろしさは、何につけても思ひ當る。

十一時五十八分甲府着。旅館談露館で、代理店側の須田氏、青山主任其他事務所の數氏と晝食を共にし、食後青山氏の案内で、御嶽昇仙峡見物に赴く。峡の入口長潭橋で自動車をかへし、外套を茶屋に預け、溪流に沿つて溯る。甲州といへば寒さを想像するのがあたりまへだが、私は平常通り下着無しでホワイト・シャツを着けたばかりで、少しも寒さを感じず、少し歩く中に汗が流れて來た。紅葉には遲く、松にまじる雜木の黃葉が殘るばかりだが、空は晴れて風無く、絕妙の遠足日和だつた。時間が無いので頂上迄は行けなかつたが、約四十丁登つて仙娥瀧に至る。山

登には季節はづれなので、山中人を見る事稀であつたが、此處で珍しく近代風の洋裝の若い婦人二人を見かけた。一人は踵の低いドタ靴をはいてゐたが、他の一人は銀座を歩くのにふさはしいハイ・ヒイルで、いくらなだらかな登りにしてもかなり歩き惱んだらしく、連のドタ靴孃の足並についてゆくのが苦しさうだつた。二人の樣子は、申合せて會社づとめをサボつて來たといふ風だつた。

昇仙峽は四時ともによいのであらうが、勝手に想像すれば新綠と紅葉の頃が一般的によく、雪のあしたこそは絶景であらう。但し雪の日に登山する者は先づあるまいから、山家の人達の外は、その絶景に接してゐないかもしれない。峽の規模のちひさいのと、川原の石が花崗岩で肌が白過ぎ、風景に寂のないのが遺憾であるが、山中の日は早く暮れて、谷間にうすく靄のかゝる頃、花崗岩のみ愈々白く滑かに光るのを見ると、その石は人肌のあたゝかさを持つものゝやうに、妖艶の美を發揮しはじめた。私は雪景の外に、月夜の昇仙峽を空想して、一層まさるものがあるやうに思つた。山を長潭橋迄下り迎ひの自動車に乘つて市内へ戻り、八百竹といふ料亭に行つて、當夜の御客樣を待つ。夕方の甲府盆地は山の彼方に日が沈み、晩秋の輕雲に夕映がして、美しくたそがれた。

第十銀行頭取細田武雄氏取締役牛山榮太郎氏支配人相吉長造氏保險係須田正義氏、有信銀行專務取締役上原庄治郎氏支配人原定治氏渡邊嘉平氏いづれも定刻に御見えになり、私共から平素の御禮と今後の御協力を願ひ、細田氏から鄭重なる答辭を頂いた。御客側の方々は皆さん酒を嗜まれるので、私も大に勉勵し、一滴もいけない飯村さんの責任額迄も引受けた。酒間面白い御話を數々承つたが、就中細田頭取は明治二十一年亡父が明治生命の用務を帶びて甲府へ出張して以來、鈴木百瀨羽柴今福の諸先輩が順次駐在募集に努力した時代を知悉して居られるので、古くして耳新しい御話を承る事が出來た。近くあらためて參上、速記をとり度いと思ふ位である。亡父の日記には僅に下の如き記述があるばかりだ。「八月二十七日明治生命保險會社の用を帶び山梨縣甲府へ出張する爲め午前五時半東京を發し日暮甲州上野原に投宿し、二十八日午後九時甲府に着す。三十一日醫學士柳琢藏幷に會社員菅友輔甲府に着す。九月九日甲府を發し、(柳、菅の二氏同伴)鰍澤より舟にて富士川を下り午後八時沼津に投宿し十日日暮東京に歸る。」

御客側が御歸になつたので、吾々も宿に引あげ、明日の日程をきめ、青山さんは自宅に、吾々は夫々の部屋に眠つたが、夜中に不圖眼の覺めた時、素晴らしくいゝ匂がする。人工香水のやうに強く鼻を刺戟するのでなく、ほのかに甘く漂ふ奥床しい香だ。宿の主人の心入れか、床の間に

置いてある二個の花櫚の果が、室内に吐く香氣であつた。

二十八日　朝、起きて戸をあけると、冷い風といつしよに、昨夜の匂よりも濃いのが、靜に流れ込んで來た。庭前のたつた二本の花櫚が、宿の部屋〳〵へ香を送つてゐるのである。大きい、薄黄色の果實は、梢の枝の撓むやうになつてゐる。眼に美しく、鼻に快い此の果樹を、私は珍しく、あきずに眺めた。

食後、細田上原牛山三氏の邸宅へ夫々御挨拶に伺ひ、尙時間があつたので、武田神社に參拜した。宿へ歸つて一休してゐると、細田頭取が態々御足勞で、今日の晝上原氏と共に吾々を御招待下さるといふのであつた。折角の事であるから遠慮なく御受けした。後刻を約し、吾々は事務所に行つて所員諸君と會合、會社の現況と抱負を述べ、主任は今月の見込の優勢なる事を報告した。時間が迫つたので、諸君と別れ、公園內望仙閣に赴く。細田上原兩氏は御待受け下さつて、早速御膳が運ばれ、吾々は無遠慮に時間いつぱい頂戴した。その上二時二十八分發の汽車迄御見送をうけ、今度來たら身延山に案內してやらうといふ御約束を頂いた。私は宿の主婦にねだつて貰つて來た花櫚を取出しては鼻にあて、甲州の香を懷にして歸京した。

——「社報」昭和十年十二月號

福岡――佐世保

三月四日 【七百四十五字略】 豫定通り特急富士號に乘つた。

五日 下關驛に小倉事務所主任小柳榮次郎氏が出迎へてくれた。小柳さんは大變顏色が冴えず、平素の元氣が無い。惡性の風邪にかゝつたが、事務所の成績向上の爲めに靜養の暇が無く、無理をしてゐるといふ事だつた。責任感のつらさだ。十分用心されるやう御注意したが、その實自分も昨年十二月中旬から持越しの咳が未だとれないのだ。

此の日一日、私は休暇を貰つた。戸畑に住む親戚の者が先頃急死し、當時かけつけて葬儀に列すべきだつたが、恰も會社の總會を控へて、志を果さなかつたので、今回の出張を機會に我儘な御願ひをした。故人には拾萬圓の保險契約があつた。大正六年我社が最高保險金額を五萬圓から拾萬圓に引上げた時、遙々九州に遠征し、保險は既に參萬圓ある、これで澤山だといつて拒むの

を說きふせ、無理やり增額させたのが私だ。日本最初の拾萬圓契約だといふので、大に得意になり、大手柄をした氣持で、ついでにもう一口五千圓の契約者を見出し、東京に凱旋したが、五千圓口の被保人は間もなく病死し會社に損失をかけてしまつた。爾來、拾萬圓の方が死んでは大變だとびくびくしてゐたが約二十年經過したので、そんな氣持も忘れ、現に二月十一、十二の兩日は東京で對面長話をしたのに、數日の後心臟痲痺で倒れた。一時に拾萬圓の支拂をする會社に對し、矢張申譯の無いやうな心持がする。

なき人のめでつときけば戸畑野の草の緑を踏むが悲しき

六日　朝戸畑を發し、福岡に行く。支店長も副長も變つたので、店内の模樣も一新した。坂本さんは店長室と營業室との境の擦硝子を素透しの硝子に變へ、平素の執務机は營業室に移し、尙進んで營業室カウンタアの金網を撤廢し度いと云つてゐる。二月壹百三十四萬の月別新記錄を作つた勢で、三月新舊會長送迎記念募集には貳百萬必成を誓ひ、全社員お揃のネクタイを結び婦人社員は帶留を新しくして內外協力の精神をあらはし、前景氣は素晴らしい。漸進主義の久保澤さんの後に、飛躍主義の坂本さんの出現は頗る面白い。坂本さんは、肅正整理の行屆いた久保澤さんの後に來た事を、非常な幸ひだと感謝してゐた。

午後、支店樓上で各事務所主任に對し、帝都騷擾裡に於る會社の模樣、全社員の執りたる態度、先般の總會を機として行はれた人事異動の意義及び將來の計畫につき所見を述べた。

これから行かうとする長崎では、貳拾萬倶樂部の大會が催されるが、福岡は坂本式の標語「第二流人となる勿れ」に則つて、貳拾萬倶樂部の存在を認めず、そのかはりに參拾萬倶樂部後援會を組織して、多數の大選手を光榮の殿堂に送らん事を期してゐる。その內規の一端を示す。

獎勵の一方法として三ケ月每に部員候補を福岡支店へ參集せしめ研究會及び晩餐會を開く。

第一期候補。三月より五月に至る三箇月七萬五千圓以上の擧績者

第二期候補。三月より八月に至る六箇月十五萬以上の擧績者

第三期候補。三月より十一月に至る九箇月二十二萬五千圓以上の擧績者

右候補者に對し歸店旅費と宿泊料並に手當を支給す

これは一年の計であるが、今三月の新舊會長送迎募集に對しても全員非常な緊張を示してゐる。たまたま好機に出張して、私もお揃のネクタイを貰ひ早速着用した。ネクタイには添書がついてゐる。曰く、

會社の紋章を織込み支店銘を縫付けたのも此際お互に會社を表徵するものを身につけて一倍

の緊張を保たうとの心からです。期間中は毎朝必ずこのネクタイを鏡に向つて正しく結んで出て下さい。このネクタイは單に我々の胸元の飾りではなく我々の心をひき締める神聖な綱です。心して必死に働きませう。

夜は支店幹部の人々と會食し、更に支店に戻つて〆切日の執務狀態を見たが、毛塚副長はいふ迄もなく、高松、藤原兩先達を中心として、二三日前に入社したといふ中學の制服の人も、三人の婦人も甲斐々々しく、何時おしまひになるのか氣づかはれる程忙しいので、邪魔になるばかりの私は、十一時頃ホテルに引上げた。

七日　再び支店に行く。昨日の締切は午前二時に及んださうである。此の朝毛塚さんは死亡調査の爲め、沖繩まで飛行機で飛んで行つた。

本店にゐても旅に出ても、締切直後に各店の成績如何を待つ心はいふにいはれぬ緊張とおそれを伴ふものである。それは樂みでもあり、苦痛でもある。まだかまだかと待つたが、午前十一時四十七分博多を出立する迄、遂に電報に接しなかつた。

佐賀驛で、杢尾主任が同乘し、九州制覇の爲めには鹿兒島、熊本、宮崎の三縣を支配する出張所を設置する必要があると力說する。此の說は、昨日福岡で坂本さんからも聞かされたので、大

に考慮する價値があると思ふ。李尾さんは何事につけても一家の見(けん)を有し、その所説は常に確信に滿ち、力強い。

九州は稀なる寒さで、三月といへば麥靑み、菜の花咲くのが普通なのに、山々の積雪の輝くを見、田に薄氷の張るを見る。殆んど雪を知らない長崎さへ、月末締切に際して未曾有の降雪に惱まされた。子供等ははじめて氷柱(つらゝ)を見て驚いたといふ話だつた。

三時五分到着と同時に支店長から渡されたのは本店からの電報だつた。概算二千拾萬、名古屋、福岡、長崎、京城、臺北の五店新記錄云々とあつて、先づ安心した。【九十五字略】今回の出張先、福岡、長崎が好成績だつたのも、私の心を晴やかにしてくれた。

鞄だけ宿に送り、直に支店樓上の貳拾萬倶樂部大會に列す。會長高野清文氏その他勇士の挨拶や感想があり、私は此處でも福岡で述べたと同じ趣旨で話をする。終つて記念撮影をし、宴會場迎陽亭に赴く。此の家の座敷から見る早春薄暮の夜景は又と無い美しさだ。

八日　早朝から來客で、あやふく朝飯を食べそこなふ位だつた。豫而(かねて)當市圖書館長增田廉吉氏から、史蹟廻りの勸誘を受けながら、會社の出張は常に時間に餘裕が無いので御免かうむり、話せない男とされてゐたが、此の朝もわざわざ迎ひに來られ、短時間ながら浦上(うらがみ)の天主敎會、シイ

ボルトの舊跡、支那寺などを案内してくれた。天主教會では、昨年出張の際伊王島で御目にかゝつた松岡神父に再會し、鳴瀧のシイボルト居宅跡では、醫學博士藤浪剛一氏と出會した。博士は正午出帆の船で上海に赴き、支那滿洲の大學で講演をするのだと云つてゐた。晝は增田氏、郵船會社の鈴木支店長、大阪每日の山口支局長の御招をうけ、迎陽亭で御馳走になつたが、この晝飯は同亭の心入れの深いもので、その味は忘れる事が出來ない。私の如き舌の粗末な人間にも、此の家の料理は日本有數の物とうなづけた。

乍遺憾時間がなくなり、狼狽して驛にかけつけ、大坪さんと共に佐世保に向ふ。佐世保明保會の御招待をうけ、岡の上の萬松樓に赴く。開會に先立ち事務所の人達と別室で面會、會社の近狀を報告する。當地方明保會はこれが二回目で、私は二度とも席に列する光榮に浴した。お顏馴染の方が多く、十分懇談の時間を惠まれた。

佐世保事務所は品格の高い山口主任の訓育の下に、次第に大を成し、昨年に比して著しく底力を增した。殊に所員諸君が主任を敬愛し、事務所中心主義を強く意識してゐる事が明瞭に感じられた。昨年死去された藤野石松氏の未亡人が、奮起して亡夫の仕事を引繼ぎ、努力して居られるのは悲壯である。金澤支店の村元千代子さんが同じ不幸に遭遇されながら、今は連年三十萬俱樂

部員として輝かしい成績を記録して居る事など御話する。

大坪さんは明日島原へ赴く用事があるので中座して長崎へ戻り、私は小副川、山口兩氏と宿に引上げた。いつか叉雪となり、窓外の灯は濡れてゐる。市內の特約店主甲田、佛坂兩氏も立寄られ、種々高說を拜聽した。佛坂氏は多年我社の醫員として勤務された佛坂繁三氏の御子息で、齒科醫を業とされるのであるが、昨年來特約店として活動し、大に優績を擧げて居られる。お客様方の辭去された後で、叉小副川さんと暫時談話を交換した。

九日　早朝佐世保を立つ。小副川さんは事務所の諸君と共に伊萬里へ赴き、久振りで宣傳募集を行ふと勇躍して居られた。今朝も亦雪で、野山は見る間に白くなつた。一路東へ歸る。

十日　午前九時半東京着。

——「社報」昭和十一年三月號

大阪

六月六日　京阪神三店聯合参拾萬倶樂部員候補者推薦大會に列席の爲め、午後八時半東京發の汽車に乘る。

七日　汽車の寢臺は熟睡出來るけれども、朝の床あげには塵埃が舞ひ立ち、氣持がよくないばかりで無く、衞生上も面白くないし、その上洗面所も淸潔とはいひ兼るので、いつそ大阪へ着く十分前位迄寢てゐてやらうと思つたが、生憎京都といふ關所があるので、止むを得ず衣服だけは改める。果して驛には押原さんが出て居られ、數秒間挨拶を取かはす。不幸にして京都は五月の成績豫期程には行かなかつたといふ。

七時四分大阪着。上原さん蠣崎さん景山さん、いづれも喜色滿面で、一見して素晴しい成績を擧げた事がわかる。概算二百六拾萬で、長い間いぢめられてゐた名古屋を、凡四十萬のひらきで

打破つた筈だといふ。旅館若菜で、私が食事をしてゐる間も、上原さんの苦心談は休みなくつゞく。一體大阪が名古屋に劣る筈は無いのだが、先年來兎角下風に立つ事が多く、今年もなほ其の餘勢は續いて、年初以來四月迄連月敗北の悲運に在つた。殊に上原さんの立場は頗る妙なもので、昨年は名古屋で自分の畫策大に當り、單に大阪に勝つといふばかりでなく、名古屋支店そのものゝ向上發展に偉勳を立て、溜飲を下げたところ、今年一月俄に大阪へ轉任となり、昨日迄一致協力した名古屋の諸豪を向ふに廻し、馴染の薄い味方に不安を感じながら、惡戰苦鬪をつゞけなければならなかつたのだ。しかし次第に計畫をたて、大阪支店の地力は名古屋以上だとの見極めがついたところで、大阪支店とは最も馴染の深い川原林取締役の專務就任祝といふ題目を捉へ、一擧に氣勢を煽つて全員の士氣を燃え立たせた。支店長も十萬圓の責任を持つ、醫長も副長も內勤員も小使も集金人も夫々責任額を分擔し、第一線の人々は今度程働甲斐を感じた事は無かつたといふ。【六十字略】

午前十時から、支店樓上で京阪神三店聯合參拾萬倶樂部員候補者推薦大會が催されるので、定刻に出社したが、昔ながらの大阪時間で、開會は約一時間の後だつた。しかし、京都からは候補者二十六名、神戸からは二十二名、地元の大阪は七十一名の勇士を集め、會場にあふれる盛況を

呈した。先づ上原さんの開會の辭に次いで、押原松井兩氏の挨拶があり、何れも參拾萬倶樂部の意義とその部員の名譽を高唱し、候補者の自重自覺を促した。私も共々之に和し、又會社の近況と内外の情勢につき報告し、候補者側からは大阪支店を代表して藤井藤原桑田の三氏、京都支店代表として、内藤金山松本の三氏、神戸支店代表として辻來住守山の三氏が答辭を述べ、蠣崎さんの閉會の辭で會を終り、直に第二會場野村ビル内有恆倶樂部で午餐會があつた。食事なかばに東京から電報が來て、總計二千四百六萬優績同慶に堪へずとあつた。早速席上に報告し、共に盃をあげて萬歳を唱へた。

散會後、押原さんは急用があつて京都へ引上げたが、私は上原松井兩氏と共に、面目一新した大阪市内を見物し、更に阪神間の繁昌を見て置けといふ兩氏の勸說に從ひ、神戸迄自動車を走らせた。二十年前大阪支店に勤務した頃とは風景一變し、私が長く世話になつた高等御下宿や、馴染のおでんやなども代がかはつたさうだ。運轉臺の鏡にうつる我が白髮も目出度しとしなければならない。この夜は友人を招き上原松井兩氏にも出席して貰つて談笑に夜を更かした。

八日　午前十時開會の大阪支店社員大會に出席。今日も亦大阪時間で、開會は十一時となつた。上原さんと私の挨拶に對し、主任矢野村田前河半那の諸氏並に社員平川林兵頭黑田山田三津川諸

氏の挨拶があり、殊に社員諸氏の僅かに數分に限られた話の中に、十分深い確信と希望を認める事が出來た。或人は先頃來名古屋に壓倒されてゐたが、名古屋に行つて見て、あの店の內外昬全員一丸（いちぐわん）となつて働く氣持に打たれ、これでは負けるのがあたりまへだと思つたが、今度はこつちも一致協力の氣持が強くなつたから、今後はもう大丈夫だといひ、又他の人は昨年名古屋に負けつゞけの際、支店の幹部が大阪は四國を他店に譲り、今では地の利に於て名古屋に及ばないのだと主張し、自分達もこれをいゝ口實にしてゐたが、實はさうでは無いのだと述べ、各自自己反省の過程を經て、今や積極的に働かうといふ氣運になつて來た事を示したのは、頗る心強かつた。多年、大阪は暗いと評判されたのが、今や明るい感じが漲り、誰も彼も非常に強氣になつてゐる事を感得した。

正午、藤田組理事宮原清氏に招かれ、上原さんと共に堂島（だうじま）の坂口といふ家に行つたが、社員大會の開會時間の遲れたのが祟つて、相客の鐘紡取締役平賀恒次郎氏や同社淀川工場の井上氏など、何れも多忙の人々を、一時間餘も無駄に待たせ、甚だ申譯の無い結果になつた。大阪時間の弊風を脫し、規律正しい明治生命時間に改まる日の速かに來らん事を祈る。

再び支店に戻り、締切後の繁忙の事務室をのぞき、夕刻から同級會に列した。集まる者二十人、

多くは學校を出てから一度も逢つた事の無い人だつた。薄くなつたのも禿げたのも、大に若がへり、うたつたり、踊つたり大騷ぎだつたが、その間にも上原さんを後援する事を誓ふ人もあり、遂には明治生命の萬歳を三唱してくれる景氣だつた。乍遺憾私は中座し、九時半の汽車にかけつけた。

九日　朝七時四十五分東京着。

——「社報」昭和十一年六月號

福岡

七月五日　午後三時富士號で立つ。福岡支店創立第三十八回記念大會に出席するのが使命で、往復とも途中下車無しの豫定である。不精をして、まだ夏帽子を買つてゐなかつたが、梅雨があがらず、涼しくて幸ひであつた。

出立前、名古屋から、用事あり驛まで出向くといふ電報に接してゐたが、關さんは岐阜迄同車された。二三社用につき諒解を求められた。名古屋の六月成績は良好だと聞いた。

六日　地震だ。素晴らしく長い地震――いつ迄も搖れてゐる。私は赤坊を抱いてゐる家内といつしよに庭先へ飛び下りたが、子供々々と家内が泣き聲で叫ぶので、直ぐに家の中へ引かへした。果してパヂヤマ姿の男の子が、逃げ迷つてゐた。それを引抱へて再び庭へ飛び出すと、家内は私の母がゐる筈だといふ。私は又家の中へ引返す。老齡の母は激震の爲め立上る事も出來ないで、

長火鉢のへりにしがみついてゐた。抱きあげて救ひ出すと、今度は父を捜して來いと家内がいふ。十數年前に死んだ父がゐる筈が無いといつても、たしかに奥にゐるといふ。私は又家の中へかけ込んだ。果して父は、逃げ遲れて障子につかまつて喘いでゐた。骨と皮ばかりのやうな父は、片脇に樂々と抱へる事が出來た。愈々激しくなつた震動に抵抗し、やうやく緣側から大地へ飛下りたとたんに、家屋は物凄い音響を立てて倒潰した。目が覺めると、夢の中の地震の震動と同じ程度で、汽車は左右に搖れてゐた。大正十二年の震災の時、危く家屋の下敷にならうとした記憶が再現したのと、出立前亡父の寫眞の前に頭を下げて來たのがからみついて、珍しくもはつきりした夢を見たのである。今朝も亦雨で、しかも西へ行く程雨量は增すばかりだ。

九州へ渡り、墓參に博多迄ゆく姉が同車し、又途中の驛では、直方事務所主任石田盛太郎氏が乘込んだ。十一時四十三分博多驛に着き、坂本さんから聞かされた第一聲は、概算壹百七拾五萬といふ快報であつた。

支店には締切を終つた各地の主任諸君が歸店してゐて、いづれも優績を擧げた後のかゞやかしい顏つきだ。支店創立第三十八回記念募集は極めて有意義だつた。斯ういふ時は大にメートルをあげるかよい――卽ち私が主人役になり、醫員主任諸君と祝盃をあげる事にした。料亭の名も天

下取にふさはしい太閤園である。戸外は降つゞく雨に陰鬱であるが、座敷は功名談と將來の計畫で頗る賑かだ。その談笑に引込まれ、座中を一巡して自席に戻ると、卓上の御馳走に異變があり、しかもこれはこそ泥でなく、失敬したのは僕ですと名告をあげたのは久留米の赤司氏だ。平素の強力なる募集手腕が鳴をしづめず、他人の領域迄伸びて、掠奪をほしいまゝにしたのであらう。

七日　六階のホテルの部屋は明け易く、朝の町の上には雨か霧か、靄のやうに漂つてゐる。扉の外にボオイの置いて行つた新聞を持込むと、號外がついてゐる。二月二十六日事件の判決が下つたのだ。感慨深く讀む。

幸ひ雨は止んだので、支店へ出向く。本店から概算電報が來る。福岡支店は新記錄突破、達成率第一位。坂本さんは笑で崩れさうになる顏を無理に澁くして、殘念ながら貳百萬達成は失敗しましたなどと言ふ、いゝ景色だ。やがて今日の催に招かれたお客として、長崎の大坪さんもやつて來た。

午後一時、筥崎宮に參集し、敵國降伏樓門下に記念撮影をし、次いで支店樓上で大會が開かれた。店長の挨拶と七月の募集計畫發表、私の挨拶、迷惑がる大坪さんも引出され、つゞいて小柳主任立ち、更に酒井、辻、植山、堀、小田原、阿南、赤司の諸氏が功名を語り抱負を述べ、躍進

福岡の意氣を示した。外野第一戰で拔群の成績を擧る程の勇士は、いづれも機智に富み、與へられたる短時間に深い印象を殘す魅力を持つてゐる。會が終ると、期せずして坂本さんと大坪さんと私は「うまいものだなあ」と感嘆の聲を發した。

第三會場は那珂河畔清流莊で、醫員堀江勇氏を餘興指揮者として大宴會が開かれた。「よく働きよく遊べ」「大會は嚴肅に宴會はなごやかに」「よく働くものよく踊る」――無藝の私は、諸君のかくし藝を見ながら、今日の大會にふさはしい標語を考へてゐた。

八日　大會當日だけ不思議に止んだ雨は、又夜半から土砂降となつた。同宿の大坪さんが長崎支店主任諸君から托されて來た必誓壹百三十七萬圓の目錄を頂戴し、福山事務所へお土産の仁輪加煎餅の大包を坂本さんから受取り、午前十時二十八分發の汽車に乘る。往復とも直行で、福岡支店丈に出張するのは甚だ贅澤だと思つたが、來るだけの甲斐はあつた。吾々本店にゐる者は常に支店の現狀を正しく認識してゐなければならない。その意味で出張は單なる巡廻訪問であつてはならない。三月福岡出張の時、私は支店飛躍の芽生を感得した。それが今度は根を張り、枝を伸ばし、若葉には爽かに風の渡るのを感じる迄に成長した。店長副長醫員外野內勤全員こぞつての丹誠が生んだ結果だ。達成率第一位は決して一時的現象とは思はれない。私は此の一店の爲め

に出張した事を悔いない。十分意義があつたと思ふ。

雨は益々はげしく車窓を打つ。途中小柳主任と植山健吾氏が乘込む。この雨の中を對岸下ノ關に募集に行くといふ。小柳さんは三月逢つた時、ひどく不元氣で、顏色も冴えなかつたが、今度は餘程健康を取戻してゐて、十分自信を持つてゐるのは何より結構だつた。

德山で、思ひがけない下河邊さんが乘つて來た。久芳武一氏受持の新設代理店訪問に來たといふ事で、プラツトフオームには久芳さんも來てゐた。下河邊さんによつて、東京の品川事務所が五拾萬やつたといふ愉快なニユースに接した。廣島驛で藤原副長にあふと、品川優勝祝賀の酒樽を送つたといふ。井上兒島藤原三氏が殊勳三銃士だとも聞いた。斯ういふ吉報は車中の無聊を一掃する。

廣島を發して、一人になると、私にはひとつの迷ひが出來た。下らない事だといへば下らないのだが、迷ひの種は仁輪加煎餅である。恰も出立の前々日か、福山事務所の福岡氏が東京に募集に來て、私の九州出張の歸路を齋藤主任と共に福山驛で迎へるといつてゐたので、それなら博多土産を持つて行かうと思ひつき、坂本さんに一任したところ、安くて分量の多い煎餅を選定してくれた。ところが、福山より先に尾道がある。平生驛の送迎はお斷してゐるから、多分そんな事

はあるまいが、萬一尾道の諸君が出て來てゐたらどうしよう。此の方にも分けるのが當然だらう。煎餅の分量は多く、二分しても少しも差支ないのだ。ところが私は不器用で、包裝をいつたん解くと、再び整然と荷造する事は出來ない。多寡が煎餅だ、どつちに贈つてもいゝではないかと考へるそばから、しかし志はこゝろざしだ、厚薄があつてはならないと思ふ。こんな下らない題目を捉へても、分解して考へると、幾樣にも考へられる。あゝでもない、かうでもないと迷つてゐるうちに、尾道近くなつてしまつた。結局、不精が問題を解決した。二つに分けるのは面倒だから、最初出迎の豫告をした方に進呈しよう。

果して尾道驛には事務所の諸君が來てゐた。中に中島さんもまじつてゐて岡山迄私と同行するといふ。尾道は、六月の成績豫想外に振はなかつたさうで、平生陽性の山下主任も今日の天候の如く濕つぽい。武田園部兩氏を筆頭に、元氣のいゝのが揃つてゐる筈で、どうした事かといひ度かつたが、その暇もなく汽車は出てしまつた。車中中島さんに仁輪加煎餅の話をすると、福山では齋藤福岡兩氏とも差支があつて、驛には來られない筈だといふ。そんなら尾道に進上してくればよかつたと悔み、不精の罰だと反省したが、いざ福山に來て見ると、齋藤さんのにこにこ顏がお城を背景にして立つてゐる。たしかに優績に違ひ無い。どうぞ事務所の諸君の御茶うけにして

下さいと、博多土産を贈呈する。
岡山では支店の諸君にまじつて、四國の高木さんもゐた。大に人員増加をはかり、既に百五十人の外野陣を固める事が出來たから、今後は愈々數字をあげますよと、先の樂みにはりきつてゐる。
遂に又一人になり、食事を濟ませると直ぐに寢臺にもぐつて眠つた。流石に疲れてゐて、夢も見ず、ぐつすり眠つたところで、ボオイが起しに來た。面會の方が見えてゐますといふ。狼狽てゝ寢衣の儘出て見ると、姫路で、神戸の松井さんと事務所の諸君がゐた。三十萬突破の祝賀會をやつてゐるところだといふので、みんな御機嫌である。そんな御祝があると知つてゐれば、一汽車早くして參加するのだつたと殘念に思ふ。求められるまゝに、一人々々握手して別れた。松井さんや岸本さんの嬉しさうな顏がいつ迄も眼に殘つた。
九日　朝、隣席の人の貸してくれた新聞に會社の廣告が出てゐる。創立記念日だ。出社すると、藤田川原林山下三先輩は、今日の吉日をえらんで催される橫濱支店新築落成披露式に列席の爲めに出向かれ、私は留守居役を承る。營業部改組の結果、第一回近縣營業部社員大會が本店講堂で催されるので、早速顏を出し、稻田部長の發聲に和して會社の萬歲を齊唱する。萬歲々々々々。

——「社報」昭和十一年七月號

札幌——青森

八月七日　北海道樺太全事務所聯合明保會の開催を機として、久振で北海道へ行く事となつた。前二回は、いづれも十二月で、雪の北海道の大風景は、極めて表面的ではあるが承知してゐる。今度はじめて夏も涼しい北海道を見る事になつた。東京の今年の暑さの骨身にこたへてゐる折柄、涼しい方へ向つて旅立つのは難有かつた。午後七時上野を出ると直ぐに寝臺へもぐり込み、平素の積る疲勞をとりかへさうとつとめた。

八日　目を覺ました時は、汽車は既に青森縣に入つてゐた。窓から吹込む風も、昨日迄の東京の風とは違つて、涼氣を含み、清々しい。七時四十五分青森に着き、連絡船に乗る。海峽は極めて波靜かだ。後尾甲板に据つけの椅子に席を占めて、海面を見てゐると、一等室の方から出て來たのが改造社長山本實彦氏で、互に奇遇に驚く。氏は激務に疲れたから休暇をとつて、北海道の

何處かの湖畔で月を見るのだと、ひどく風流なことをいふ。今晩の汽車で、妻子もあとを追つて來るなどと身の上話迄關聯させて話し出した折柄、直ぐ目の前の水面を破つて海豚が猛烈な跳躍を見せた。水に濡れた栗色の背中も、雪白の腹部も油を塗つて磨きあげたやうな光澤を帶び、その游泳跳躍の度毎に描く曲線と、力と速度の美しさは素晴らしいスリルだつた。感激家の山本氏は、素敵だなあ、痛快だなあ、壯觀だなあとたてつゞけに讃嘆し、この景觀は是非子供達にも見せてやり度いと繰返して云ふのであつた。海豚の群は船を追ひかけ、波頭に乘り、空中に躍り上り、亂舞して飛沫をあげた。話好きの山本氏は、政界財界軍部文壇滿洲露西亞北支上海等の話材をさらけ出し、青森出帆から函館入港迄約四時間完全に一人で喋りつゞけた。

函館に着くと、代理店の方や、事務所の諸君が岸壁に出迎へてくれ、村田主任は私と同行して札幌へ向ふ。夏の北海道は各地からの客で賑ふらしく、汽車は滿員だ。おかげで食堂も立錐の餘地なく、やがて時間も過ぎたので、晝食は拔いてしまふ。

海と山と大平原の風景は頗る大陸的だ。しかし晝間の汽車で、しかも日光のさし込む側に席を占めたので、なかなか暑い。流れる汗は乾かない。だが山の向ふに日が沈むと、俄に涼しい風が吹いて、草のそよぎも初秋のやうだ。

薄暮、小樽を過ぎ、事務所の諸君と歩廊で挨拶をとりかはしたが、遠山閣下は腰部神經痛で臥床中との事で、獨特の放談高笑に接する事の出來なかつたのは殘念である。

七時四十分札幌着。直に店長副長醫長主任諸氏と同行、料亭鴨川に行く。一昨年の十二月黒鷲優勝旗を捧持して行つた時一泊した家だ。池に落る水の音を聽く座敷には涼氣滿ち、流石に北海道は違ふと感じる。實は當地の控訴院長三宅正太郎氏が私の渡道を聞き込み、支店に電話をかけて、到着當夜丈は身柄を引取り度いとの申入れがあつたさうで、こちらも時間の乏しい日程だから、逆に同氏を招待し、支店幹部と同席で食事をする事にきめたのである。ところが三宅氏の方にも突然客があつて、別の旗亭で酒宴中だから、少々遅れるといふ言傳が來たので、空腹の私は世話役にせがんで、正客を待たずにお膳を出して貰ふ。間もなく三宅氏がかけつけての話によると、三宅氏の方の客は郡山の橋本萬右衞門氏で、氏の戻つて來るのを一人旗亭で待つてゐるといふ。橋本氏ならば私も面識があるし、先代萬右衞門氏は曾て會社の代理店をして居られた事もあるので、先方に電話をかけて、橋本氏にも來て貰ひ、雙方合流の酒宴となつた。散會後グランド・ホテルに投宿、相宿の村田氏阿部權之丞氏と夜半迄話込む。

九日　朝、三宅氏の官宅を訪問し、久しぶりで夫人や子供さん達に逢ふ。子供達は元來弱い方

だつたのが、北海道に來てから大變丈夫になつたといふ。東京では近所に住んでゐたので、拙宅の事など何彼と話したり、訊ねられたりしてゐるうちに、社員會の時間となつたので、辭して支店に赴く。先づ最古參の高垣氏が元氣のよい挨拶をされ、店長の次に私が主として目下認可申請中の新種保險に就ての話をし、村田主任は赤字克服運動を起さんとするに際し事務所主任一同の誓約書を受けてくれといひ、山内主任が之を朗讀して私に手交された。

札幌支店は本年七月迄の責任額累計五百九十四萬圓に對し實績五百餘萬圓を數ふるに過ず約九十萬圓の赤字を背負ふ現狀にありこは外野第一線にありて開發督勵の重任を帶ぶる我等事務所主任一同の共同責任にして衷心遺憾に堪へざる處なり九十萬圓必ずしも過重と言ふに非れ共本年も既に期間の過半を經過したり此時に當り速に此の赤字を征服するに非れば支店業績の上に千載の恨を貽すや必せり今や此の重大時局に直面して責任を痛感する我等豈本店所定月額のみを達して能事終れりとなすを得んや仍て本日相諮りて毎月責任額の外に赤字克服額を加へ左記の額を分擔し當八月より向ふ三ヶ月間卽ち來る十月締切迄に全赤字を絕對放逐して黑鷲覇者札幌の眞價を發揚せん事を神かけて盟ふ此誓盟をして萬が一にも空文に終らしむるが如き者あらんか何の顏せあつて僚友に見えんや幸ひに遠路大暑を冒して阿部常務取締

從來道せらる本誓約書を捧ぐるは吾等が貴職に對する絕大の贈物と自負する次第なり乞ふお受けあらん事を

赤字克服分擔額　七萬圓（直屬團）　十六萬圓（小樽）　二十二萬圓（札幌）　二十五萬圓（函館）　十三萬圓（豐原）　十二萬圓（帶廣）　二十二萬圓（旭川）　八萬圓（釧路）

夫々代表者の署名捺印したのを忝く頂戴した。

最後に竹內副長が八月の募集計畫の說明をし、閉會となつた。直ぐに豐平館で晝食を共にし、三時十五分豐平發、定山溪に向ふ。七事務所聯合明保會の爲に、道會議員選擧が明日に迫つてゐるといふのに、多數の代理店主が同行され、遠きは樺太からも參加される熱意は、甚だ心強いことである。定山溪着。川原で記念撮影をし、鹿の湯俱樂部大廣間に於て大會が開かれる。會社側の者の挨拶につゞいて函館代理店渡邊熊藏氏小樽代理店廣谷敏藏氏釧路代理店渡部三吉氏の所感を拜聽し、夕刻から總勢八十人の宴會となる。旭川代理店井內謹二氏餘興委員長に就任され、きびきびした指揮振を示して、順序よく進行する。代理店の方々、社員諸君の出演いづれも大喝采であつた。

舞臺では餘興がつぎつぎと披露されてゐるが、一方御膳を前にし、盃をやつたりとつたりして

ゐる勇士の中には、早くも八月の募集計畫について、氣焔をあげてゐる人も尠くない。偶々旭川の阿部權之亟氏と函館の村田幸吉氏とが口角泡を飛ばして、兩事務所どつちが強いか、凡そ謙讓とは正反對の態度でいひ合つてゐる。無敵をほこる函館が七月の記念募集戰に於て、旭川に惜敗し、優勝旗を奪取されたので、八月は必ず取戻すといひ、一方は連續制覇だといひつのつて、結局其場にゐあはせた私を審判員として實績を爭ふ事となつた。募集の數字は正確にわかるのだから、審判員なんか不必要ではないかと一應拒んでみたが、阿部氏の言を以てすれば、審判員に任命してやるから審判料を出せといふのだ。これを傳へ聞いた函館代理店の渡邊氏と中央旭川代理店の渡部氏も子供の喧嘩に親が出る形で應援にかけつけ、遂に此の爭は大事となつた。即ち當八月の實績に於て若し函館が負けた時は、渡邊氏は村田主任及び事務所の筆頭優績者小西淸一郎氏と同道旭川迄出向き、同地事務所に伺候して降服の意を示し、且席を設けて先方を招待する。反對に旭川が萬一負けた場合には、中央旭川の渡部氏が小西主任及阿部權之亟氏と同道函館に赴き、同地事務所に於て低頭し、且一夕の宴を張るといふのだ。兩軍の意氣頗る旺盛、かくの如く熱心なる代理店の協力を仰ぎ得る心強さに審判員も感激し、自腹を切つて審判料なるものを贈呈する事に決した。函館と旭川は急行列車で九時間以上かゝる遠隔の地で、勝者の愉快は想像されるが、

敗者の氣の毒もお察しする。氣の強い北海道魂に壓迫されて、名譽ある審判員は引うけたものゝ、雙方土附かずの成績にしたいと、早くも氣の弱い事を念じはじめた。

何時も感じる事だが、札幌支店の宴會は頗る豪快明朗である。主力代理店の方々が、會社側のものと全く同じ氣分で各々一役を引受けられるので、ものゝ纏まりが早い。人と人とのつきあひも些事に拘泥せず、大陸的解放的であるやうに想はれる。十分歡を盡し、溫泉に浴して熟睡する。

十日　朝食の時、旭川の阿部氏は突如起立して、前夜の對函館との約束につき、絶對勝利の確信ありと宣言して滿座の目をみはらせたが、氏が自席に戻るか戻らないうちに、函館の小西氏二十餘貫の巨軀を起して、偶々七月の募集戰に於て勝を旭川に讓つたのは武士のなさけである、それを知らずに圖に乘るのはあさはかで、然らば容赦なく眞向から撃滅してしまふばかりだと叫び、愈々一同を驚かした。

明保會は無事解散し、午前十時半定山溪を發し、一度札幌支店に引上げ、零時五十四分店長小西主任阿部氏と共に旭川に向ふ。四時三十八分着。中央旭川渡部氏の御案内で、アイヌ部落を訪問し、事務所を視察し、渡部氏經營の北海ホテルの御世話になる。夜は井內渡部兩氏を中心に、

事務所の諸君と共にホテルで會食する。定山溪の酒席で、玉蜀黍が大好物だと口走つたので山盛の大皿が運ばれ、遠慮なく頂戴する。

十一日　朝八時十分旭川發。十時五十七分札幌着。市內事務所を訪問し、二時十三分札幌にお別れする。小樽では、病體の遠山閣下が無理をして驛迄出迎へてくれたが、強ひて事務所に歸つて貰ひ、山田良一氏に案內を賴んで、市內各代理店を歷訪し、最後に事務所に赴き、所員に對し挨拶に代へて會社及び保險業界の近狀を話す。五時四十分小樽發、十一時三十七分函館着。湯の川ニコニコ旅館に投宿する。飯村氏も私も機を逸して食事を拔く。

十二日　朝、函館事務所覇權倶樂部臨時大會に列席する。覇權倶樂部は每月二十日所員の最優績者が會長となつて司會するもので、今回は特に私の來道を機として繰上げ、臨時大會を開いたのである。函館代理店渡邊氏父子、丸和代理店上野氏も臨席され、連續六回の會長小西氏開會を宣し、村田主任覇權倶樂部の意義と存在理由を說明し、私も飯村氏も挨拶を述べ、次に八月紅白戰の兩軍主將副將參謀の元氣のいゝ所感があり、最後に渡邊熊藏氏激勵の辭を述べられ、更に私の知識を廣めてやらうといふ親切から、倶樂部會長の特別講演「北洋漁業に就て」があつて、閉會した。

雨と風が俄に強くなつたが、車をつらねて湯の川の宿に到り、事務所主催の宴會となつた。渡邊熊四郎翁は御多忙の折柄にも拘らず、若い者に負けない元氣で一座を賑やかにし、西洋文化北海道渡來當時の面白い話を披露される。此の席でも渡邊熊藏氏の厚意で玉蜀黍にありつく。短い時間を惜みながら十分御馳走になり、午後五時函館發の連絡船迄皆さんの御見送を受けた。風も稍々しづまり、雨も止んだので、甲板の長椅子に横たはつて醉顏を冷してゐるうちにぐつすり眠つてしまつた。おかげで船の動搖も知らず、旅疲れも振ひ落し、九時半青森に上陸した。其處には仙臺の久保澤氏と、青森事務所の岩崎主任が待つてゐて、自動車で淺虫に向ふ。

十三日　淺虫は海岸の溫泉場で、東北では有名であるが、あまりすぐれた風景でもなく、宿も奇麗とはいへない。蚊帳の中に忍び込んでゐた蚊の爲に夜中悩まされ、朝は廊下に引擦る上草履の音に悩まされた。朝食後直に青森事務所を訪問する。岩崎主任が將來青森市の中心となるに違ひ無いといふ豫想をもつて、土地を購ひ、建築したもので、青田の中に赤地に白く會社のマアクを抜いた旗をひるがへし、汽車の窓からも見える大看板が建てゝある。主任は敬神家だから、二階の座敷には立派な祭壇があり、又海軍出身なので、日露戰役當時の名將の寫眞や、筆蹟が揭げてある。子福者で、家庭のあたゝかさが感得される。暫時御接待をうけてから、青森代理店中村

與助氏を訪問すると、意外にも弘前代理店長谷川與助氏、同地事務所主任内山淸吉氏が來て居られた。弘前事務所の諸君はわざわざ打揃つて來られたのださうだ。中村家の保險部は、先年三菱商事に勤務された令息が擔當され、頗る御熱心だ。仙臺管內第一位を目標として、盛岡代理店と常に競ひ合つて居るのであるが、それよりも一般に紹介したいのは、十幾つかの副代理店を設置された事で、その統制指導は大に學ぶ可き所がある。今日はその副代理店の方々十數氏と、靑森弘前兩事務所員が公會堂に會して午餐を共にした。

午後一時靑森發。十時四十四分仙臺着。針久別館に泊る。

十四日　午前九時支店に赴き、市內在住の人々に會社の動向に就て話す。久保澤氏が、新進久保田副長と手を携へて、理想を實現しようとして居るのに、大に共鳴するといふ多數の意見を聞き、意を強くする。零時四十五分仙臺發。七時五分上野着。

歸京以來多忙を極め、旅中御目にかゝりました代理店各位、社員諸君に一々御挨拶申上る暇が御座いません。各位の御厚意に對し深く感謝することを玆に申述べ、非禮御勘辨を願ひます。

——「社報」昭和十一年八月號

高松――釜山

十月四日　午後九時東京發。

五日　午後一時二十五分高松着。棧橋迄出て來てくれた高木さんの第一聲は、出來ますよ、七十六萬は確實ですといふのだつた。昭和九年一月一日四國に出張所を開設し、初代店長として重責を託されて以來の辛苦が酬ゐられ、代理店の増設、社員の増員に努力成功した結果が、めきめき實績となつてあらはれはじめたのだ。外野戰士の増員は近年の社是であるが、扨て實行は難しく、多く集めればそれ丈苦勞も多いので、兎角澁り勝になり易いのに、高木さんは小粒の體軀に似合はぬ強氣で、飽迄も積極主義に出て、今や二百名の戰士を整へ、先輩格の他支店を脅してゐる。出張所では、今日を締切とし、内勤は殺到する書類の受附に一生懸命だ。夕方迄解放しますから何處かで遊んで來て下さいと高木さんがいふので、栗林公園と屋島に行く事にし、保野夫人

と子供二人が案内役になつてくれたが、結局高木さんも同行の事になつた。栗林公園は元藩公の隱居所であるが、總坪數二十三萬餘、翠綠滴る紫雲山を背景とし、豐富なる泉を利用して池水の效果を十分に發揮した庭園である。

屋島はケーブルカアで頂上に達し、斷崖の緣を廻る遊覽道路を一周した。屋島寺で源平時代の遺物を拜觀し、談古嶺では休茶屋の姐さんが指さして敎へる古戰場に感慨を深くした。壇の浦は眼下にある。那須與一の扇の的、義經の弓流し、佐藤繼信の討死、私が幼少の頃繪草紙で見たり、祖母や母から聞かされた勇しく亦悲しき物語は、霞を拂つて現はれて來る。

夜は、同窓會の招きを受けた。私は從來出張先で此の種の催のある時、固く辭退してゐたが、地方の有力者と面會の機會を逸するのは會社の仕事の上にも面白くないといふ意見に從ひ、高木俣野兩氏と共に出席した。會する者凡そ三十人、頗る盛會だつた。散會後、十二時近く再び支店に立寄つたが、內勤の締切事務は愈々多忙を極め、何時終るか見當のつかない有樣だつた。

六日　玉藻ホテルの湯は水である。昨夜も今朝も水風呂に入つた爲か、しきりに嚏が出る。すると隣の室から、若い女中の聲で、風邪を引いちやつたねと、親しみのある見舞の言葉をくれた。湯が出ないので水に入つたからさと答へると、氣の毒しちやつたね、と輕く受けたが、それつき

りで、遂に此の聲の主がどんな人物か知る術も無かつた。

各地事務所の主任連中も昨夜此のホテルに泊つたさうで、高木さんの來るのを待つて朝食を共にする。それに加へて觀音寺からわざわざ私に逢ひに來てくれた請川卓氏も同じ卓子に着いた。請川氏は十二三年前、會社の本店に勤務された事があつて、私としては別段の御世話をした事も無いのだが、常に忘れずに消息を寄越す人である。今は地方の名望家として、各種の事業に關係して居る。

食後、請川氏と別れ、公會堂に於る主任社員招集會に列席、高木さんの百萬突破計畫發表の後で、近時の世相と保險業界の模樣並に我社の新種保險の意義と價値に就いて話す。尙會は終らないのであつたが、十月百萬必成の誓を貰つて、私は棧橋に急いだ。十一時五分高松發、午後九時下關着。十時三十分下關發。

七日　關釜連絡船は滿員だつたが、海は平隱で安眠した。午前六時半釜山着。高月さん角園主任の外に、代理店大池源二氏三宅琢造氏並に大池氏の妹婿忽那操氏の出迎をうけ、高月さんの宿で朝食にありつく。今夏赤痢に罹つた高月さんは、意外に元氣だつたが、腹具合が惡いといつて粥を食べてゐるので、これからの急行の旅を氣づかつたが、高月さん自身は、今夜あたりからそ

ろそろ酒も飲みますと張切つてゐる。食後、大池三宅兩氏の御宅に御挨拶に行き、市中を見物し、事務所に赴き、所員と顔合せをする。

午後は郊外といふ可き地位にある東萊(とうらい)溫泉で、釜山大邱(たいきう)兩事務所員に對し、一時間餘お喋をする。夜は釜山、釜山藤田、釜山皿田各代理店の方々を中心に賑かな宴會が催されたが、私共は八時の汽車に乘らなければならない豫定なので、あとは一切大池さんに主人役を引受けて貰ひ、完全に主客顚倒して出立する。

八日　午前七時四十五分京城着。支店は全國中最もみすぼらしいもの丶ひとつである。元は寫眞館だつたさうだが、その後二萬圓を費して建増した部分も甚だお粗末だ。當時京城の建築材料や手間賃は非常に高かつたのかもしれないが、一見その半値段にも踏めない。もうひとつ私が不可解に思つたのは、黃金町は商業地域で、土地の値段は相當と思はれるのに、凡そ二百坪の空地を表通りの角地面に有してゐる事だ。將來の爲には、京城の丸の內ともいふ可き太平町に七百餘坪の敷地を別に持つてゐるので、黃金町の空地は何の意味かわからない。その外に支店長の社宅が六百坪からあるといふので、或は將來の土地の値上りをあてにする方針だつたのかとも想像される。つい先頃、總督府から、京城の丸の內第一の場所に多年板圍(いたがこひ)の空地を存するは面白くない

から、一日も早く建築に取かゝれといふ注意を受けたので、念の爲敷地を見に行つたが、府廳前の廣場にのぞむ絶好の地面である。板圍に近づくと、一種いふ可らざる臭氣がする。案内に立つた人の話では、此の地面を買ふ時口をきいた某が、胃腸の藥だといふ草を栽培し、魚のはらわたをその肥料とする爲、かゝる臭氣を發散するのであるが、周圍の家々から年中苦情が出て閉口して居るといふ事だつた。いつからさういふ因緣になつたのかわからないが、迷惑千萬な話である。尙此の敷地は京城の美觀の爲にも、建築を急げといふ注意をうけてゐる事前記の通りだが、一方街路取ひろげ案もあつて、相當の坪數を切取られるといふ事がたしからしいので、いくら總督府から建てろ建てろといはれても、それは無理といふもので、先づ市區改正が確定しなくては、手のつけやうも無いのである。

午後支店樓上で、市内事務所の人々に對し社況を話し、夜の宴會迄の時間を利用して、京城神社、春畝山博文寺、南大門、パゴダ公園を巡る。宴會は大人數で、さかんにかくし藝が出た。

九日　李王職課長天井章三氏から、私が來鮮したら知らせてくれ、平生一般には觀覽を許さない所でも案内してやると、支店の方へ申入があつたといふ。ところが私は天井といふ人を知らない、いくら考へても思ひ出せない。人違ひではないかと思ふのだが、支店でたしかめて貰ふと、

私の母に大變世話になつたといふ事である。兎に角先方は待つて居るのだから、一度は訪問しようといふ高月さんの言葉に從ひ、昌德宮に行つて刺を通じた。逢つて話を聞いてみると、天井氏の親戚の方が私の弟と上海で深く交り、それが縁となつて天井氏の令息が東京遊學の際私共の本家にも屢々赴かれ、母のもてなしを受けたといふのであつた。おかげで私は天井氏の御案内で、苑内隈なく拜觀する事を許された。昌德宮は、今李王太妃殿下の御殿で、李王殿下も御歸鮮の際は此處に御滯在になるのである。昔王座のあつた仁政殿も、洋風を加へて改造され、割合に御質素なものと拜したが、これにつゞく祕苑には驚嘆した。世界中に、斯くの如く幽美な庭苑は他にあるまいと思つた。これにつゞく昌慶苑には動物園植物園博物館があり、一般に公開されてゐる。天井氏はなほ見度いところがあれば自身案内してやらうといはれるが、時間が無いので辭去した。晝は京城市内の代理店の方々を招待し、竹井三郞山脇五三郞筒井憲次郞紀伊國陶一高垣末吉足立泰祐諸氏に御目にかゝつた。午後は紀伊國氏の御案内で總督府、昌福宮、慶會樓を見た。夜十一時京城發。

十日　午前八時外金剛着。元山事務所の林主任及所員林秀生、川井田泰煥二氏と共に金剛山萬物相に登る。高月さんは前に登つた事があるので棄權し、山麓溫井里の宿に殘つた。何しろ平生

運動もせず、身體鍛練をおろそかにしてゐるので、無駄な脂肪と贅肉がふえ、山登といふ恰好ではなくなつた。第一、遠足といへば草鞋脚絆ときまつてゐたのだから、卷ゲートルといふやうな近來の發生にかゝる物は、どういふ風に身につけるのかわからない。先づ宿を出る時から、人手を借りなければならないのだ。山路にかゝると、紅葉は楓や蔦を一色にして、五葉の松の緑と反映する。清冽な水は谷底を貫き、鵲の聲は兩側の山の肌に響いてこだまする。規模の雄大は想像以上で、日光も塩原も箕面も此の山のかけらに等しい。林川井田兩君は血氣の士、その健脚をほこる者であるが、林主任は蒲柳の質、しかも私と同年輩だから、最初その呼吸づかひの亂れはじめたのを知つて、仲間のあるのに安心してゐたが、柳に雪折なしのたとへの通り、參りさうでなかなか參らない。風景は絕佳だが、道は惡い。石を削り、岩を碎いて作つた段々が多く、私の太股は次第に張つて來る。汗は衣服を透し、咽喉は乾き、行手は遠い。それでも第一の目的地舊萬物相には左程の困難もなく辿りついた。其處で記念撮影をし、更に嶮しい新萬物相に登るのだが、幾度も休んで呼吸をつき、岩角に手をかけ、鎖にすがる度に、自分の年齢と肉體の衰へを痛感した。それでも漸く頑張つて頂上の天仙臺の岩に腰かけた時は、一瞬間天下を取つたやうな氣がし、下から登つて來る人を見下して優越感を味つた。辨當を開き、平生は口にしない梨やサイ

ダアもうまく、扨て下り坂となると、俄に元氣がよくなつた。しかし、一寸でも足を休めて佇むと、兩脚とも輕く震へてゐるのを感じた。

宿に歸り、入浴したが、この溫泉は日向水の如く、高松のホテルの湯よりはましだが、風邪を引きさうで溫つてゐられない。既に元山清津兩事務所の諸君が到着したので、例によつて社況につき話す。夜の宴會は不相變盛會で遂に二次會となり、就寢午前一時過。

十一日　今日は全員で九龍淵に登る事になつてゐて、高月さんも勇氣を振つて參加する。恰も日曜で、紅葉は今が見頃といふのだから、登山者は多い。支店の內勤の連中も昨夜の汽車で來て、萬物相と九龍淵雙方一日で踏破するといふ。その外奧さん連中も登るといふ事で、京城支店の半數が山上に在るやうな景況だ。今日のコースは前日よりも坦々として樂だつた。途中、宇田川政太郎氏を先導とし、高月夫人、醫員內田夫人同元村夫人その他奧さん令孃達の絢爛たる一行に出會つたが、奧さん達は不覺にもデパアトに買物に行く時のやうな姿で、これではさぞかし難儀だらうと思はれた。暫時步調を合せたが、こちらは時間が乏しいので、次第に追越してしまつた。九龍淵は落下する瀧の眺望を誇るものであるが、私には峻嶮なる萬物相の方が、浮世離れしてゐてよかつた。こゝでも記念撮影をし、小憩の後下山の途についたが、途中大分へこたれ弱氣にな

つた奥さん連中に逢ふ。もう此の邊でやめにし度いなどと、音をあげてゐる奥さんもあつた。それに引かへ内勤連中は、吾々をさつさと追越して行つてしまつた。吾々が山麓についた時、內勤團最後の一組として、安野主任夫妻、タイピスト中山さんが、これから仲間を追かけて九龍淵迄ゆくといふのにあつた。かへりみると山頂には雲がかゝり、上の方は雨になつたのではないかと思はれたが、頓着せず登つて行つた。私共は溫井里の宿に歸り、一浴の後、忙しく出立、元山に向ふ。三時間の後元山着。代理店杉野多市、奥村次郎、北谷德一諸氏並に囑託醫牟田口佳六氏と會食、山登の疲勞も忘れて大にメートルをあげんとしたが、乍遺憾時間が切れて、十一時二十分の汽車にかけつけ、各位の御見送をうけて立つ。

十二日　早朝京城を過ぎ、午後二時過平壤着。旅人が必ず見學するといふ妓生學校を訪れたが、今日は溫習會があつて休みたといふ事で、かんじんの生徒はゐなかつた。學校は至極御粗末なものだが、目下平壤に於て營業中の卒業生四百名、在校勉學中の生徒二百名で、近く校舍も改築されるといふ事であつた。次に日清役でおなじみの牡丹臺に登り、原田重吉で名高い玄武門のちひさいのに驚いたが、臺上から大同江を見下す風景は頗るよろしく、これが社用でなければ暫く滯在し度いと思つた。高濱虛子が命名したといふお牧の茶屋で、平壤安東兩事務所員に社況を語り、

夜は代理店菊名仙吉、山口芳三、車淳鳳、李英信、李正鉉諸氏の御列席を乞ひ、一同無禮講で盛會を極めた。妓生金蓮月は帝蓄專屬の歌手だといふ事で、非常に美聲だつた。菊名山口兩氏に二次會の御招をうけ、そこでは所望して朝鮮蕎麥の御馳走になる。「ちやんばん」といふのは大きな鐵鍋に春雨のやうな蕎麥と肉片と豆もやしの入つてゐるもので、鍋の中央に別に酢醤油があり、これをつけて食べるのであるが實にうまかつた。もう一つのは「こくす」といふので、これには白菜の漬物が入つてゐて、又別種の味があつた。席上妓生李花仙が色紙に四君子を描いてくれた。其の間車淳鳳氏から再三電話で、別に席を設けて待つてゐるから是非來いといふ御誘なので、菊名山口兩氏の御諒解を得て、指定された家に赴く。其處には高月さん、鹽澤主任その他事務所の諸君もゐて、年若く元氣のいゝ車さんのおもてなしで、深更一時半迄おちついてしまつた。

十三日　午前十時二十三分菊名山口兩氏の御見送をうけ出發。午後五時五十五分大田着。大田全南全北三事務所聯合の會で、代理店沼田虎次郎氏柳直養氏及び忠州から偶々來て居られた中川龍藏氏を園んで、今回の出張の最終の宴を張る。

十四日　午前六時大田發。同十時五十分釜山着。大池さんが待受けてゐて下さつて、先づ先代忠助翁の銅像のたつ公園に案内された。忠助翁は對州から渡鮮し、釜山を中心として朝鮮開發に

功績のあつた人物で、釜山市民の感謝が此の銅像となつてあらはれたのである。公園は大池家が釜山に寄附されたものださうだ。長い間、多くは汽車で寢る旅の疲をやすめてはどうかといふ大池さんの親切で、海岸の白雲臺溫泉に行き、入浴晝食後、私は晝寢させて貰つた。晩は大池さんと忽那さんに誘はれ、市内で河豚(ふぐ)を頂き、すつかり溫(あつ)たまつて、十一時三十分釜山發の連絡船に乘る。

十五日　午前七時三十分下關着。九時十五分の急行に乘る。車中「朝鮮晴」と題する左の一文を綴り、時事新報に寄せた。【「朝鮮晴」は十月十七日時事新報所載、全集第十一卷「貝殼追放三」に收錄】

――「社報」昭和十一年十一月號

京都——大阪

十二月四日　午後十時東京發。十月の全店優勝旗爭奪戰に美事優勝した四國出張所に、名譽の昇龍旗を授與する爲、出張を命ぜられたのであるが、途中京都に武市前會長を御見舞することにした。武市さんは會長引退後も、常に吾々の爲に御心配下され、こちらも御厚志に甘えて、何彼と相談に乘つて頂いてゐるのだが、近頃多少お體に違和を感じられるとの事で、月々の取締役會にも出席されず、引籠つて居られるので、會社の近狀報告を兼て參上する事になつたのである。例によつて、汽車に乘ると直ぐ寢てしまふ。

五日　朝八時十五分、京都に着くと、押原さん小松さん佐原さん佐藤さんの御出迎をうける。武市邸に伺ふのは九時の御約束だから、それ迄驛の食堂で朝食をした〻めようと思つてゐたのだが、斯う顏を揃へられては勝手も出來ず、止むを得ず支店に赴く。押原さんは非常な精力家で、

且責任感の強い人だから、支店の仕事は如何なる些事と雖も、事細かに承知して居て、それに關し本店と文書の往復のあつたものだ、あれこれと質問し、又意見を述べるのであるが、私の方は一向承知してゐない事ばかりで、たゞ當惑するばかりだ。いぜん藤田さんが各地へ出張された頃は、行く先々で大概の事務は決裁されたものだが、吾々はつとめて旅先では何事をも決定せず、本店の機關を働かして、仕事をさせる事にきめてゐる。次から次と押原さんの話される件々を、覺えて歸るだけでも大仕事だつた。

會社出入の自動車を雇つて貰つて、武市邸へ向つたが、途中運轉手が、武市さんの御宅はわかりにくい所で、いつも往生しますわとこぼすので、そんなら加茂の御社の境内で下してくれと命じ、昔の心覺えにまかせ、落葉を踏み、小川にかゝる石橋を渡り、晩秋初冬の小鳥の聲をきゝ、久々で京都の閑寂な趣に心を澄ませ、かういふ所に居を定められた武市さんの心境を想像したりしながら歩くうちに、間違なくお庭の垣根の外に出た。生垣の上に鋏の音がし、植木屋の姿が見えた。武市さんは、どうも年齢にはかなはんといはれるのであるが、奧さんと御揃で、御元氣であつた。今度は取締役會にも必ず出る積りで、實は今夜立つて上京するといはれ、私も大いに安心した。

何彼と長話を申上げ、歸路も亦加茂の境内を歩き、わざと市電に乘つて、東京と京都の相違をつくづく感じた。

支店では又いろいろの話を、たゞ聞くばかりで、再び晝食の時間を失し、大阪へ行く汽車の中で、やうやく驛辨にありついた。

大阪には時間も知らせて無かつたので、出迎へられる面倒がなく、至極氣樂に便利に身の處置をつける事が出來た。支店へ行つてみると締切前日の事で、みんな忙しく働いてゐる。今月は稍々よさゝうだと、連月の不振に惱んでゐる上原さんも、些か愁眉を開いたかたちだ。

絹笠町の旅館若茶に泊り、二三知人の訪問をうけ、この夜は先づ休息の事にした。

六日　朝八時一分大阪發。宿のおかみさんにも略して貰ひ、見送人なし。大によし。見送の人があると、寒いプラット・フオームに出てゐなければならないので、迷惑なのだ。岡山の乘替の時も、折角第一番に座席を占めたのだが、中島さん重松さん宮崎さんその他の人達が見えたので、車外に出てゐるうちに滿員になり、結局腰かける事は出來なくなつた。送迎廢止論を年中唱へてゐるのは、かういふ實驗も手傳つてゐるのだから、各地の諸君充分御同情を願ひ度い。

内海は稍風強く、浪もあつたが、宇野高松間の聯絡船は輕快瀟洒、いつもながら氣持がいゝ。

一時二十分高松棧橋につく。昇龍旗出迎の爲に店長醫長各主任總出だ。車をつらねて讃岐會館に行き、直に昇龍旗授與式を行ふ。旗は毎月優績事務所が奉戴保管する事になつてゐて、先づ第一に十一月の優績を得た德島事務所々屬撫養駐在の米積隆正君が旗手となり、一同拍手して祝つた。四國出張所は開設と同時に從來の契約高を倍加したが、その後の發展些か遲々として停滯の色なしとせず、どうしたものかと心配もし、氣の早い大向は、高木さんの手腕を疑ふやうな有様だつたが、高木さんは各地主任と心をあはせ、會社近來の指針通り、增員計畫に邁進し、副事務所を設け、代理店網を密にし、陣容を整へる事に専念した。その結果、今や人員二百三十餘を數へ、大支店に劣らざる實力を備へ、近來鰻上りに成績向上し、遂に十月にはかねての念願壹百萬を突破し、大阪京都その他の強豪を後に瞠若たらしめた。これ偏に增員の成果であつて、店長は本店の方針に共鳴勇敢に實行し、主任亦之に贊成して大に援助した賜である。私はその意味の事を骨子として祝辭を述べた。次に高木さんの挨拶があり、一同揃つて記念撮影をし、更に各主任並に事務所代表の挨拶があり、最後に十二月壹百五拾萬必成を誓つて會は終つた。

つゞいて新常盤に於て祝宴が催され、中瀨長老の司會の下に、愉快な一夕であつた。高木さんは席上挨拶して曰く、自分が生れてからこの方、最も大きい喜びが三度あつた。第一は明治生命

に入社の確定した時、第二は長男の生れた時、第三は今回の百萬突破昇龍旗獲得である云々。

七日　午前九時五十分高松發。八幡濱事務所主任二宮泰三氏は、令弟の結婚式に參列の爲臺灣に赴くとて、岡山迄同行する。船中、車中、同君から聞いた話で、會社事務上の事に付大に參考になる事があり、歸京の上は直に實行したいと思ふ意見もあつた。同君とは岡山で東西にわかれ、私は重松さんの買つてくれた驛辨を抱へて東に向ふ。神戸で松井さんが同車し、午後三時四十分大阪着。豫而京阪神三店振興策に付、三店長の下協議（したけふぎ）があり、その提案は文書として吾々の手にも入つてゐたが、今回の出張を機會に親しく意見の交換をする事になつた。押原上原兩店長は梅田に待受けてゐて、直に阪急線に乘替へ、郊外に近頃開店した、東京の星ヶ岡茶寮の支店につれて行かれる。大阪の紳商の邸宅だつたといふ家は、用水堀に臨む宏大なもので、吾々は最も水に近い茶室づくりの室に通された。三店長交々改善意見を開陳し、約五時間懇談した。十時大阪發の汽車に乘り京都迄同乘の押原さんから、又一時間御說を承つた。

八日　朝八時半東京着。

——「社報」昭和十一年十二月號

福岡――門司

三月三日　午後三時東京發特急富士に乘る。晝の汽車で東京を立つのは珍しい。燈火のつく迄に雜誌一册讀み上げようと計畫してゐたが、平生市中に住んでゐて、田野の風景に緣遠くなつてゐるので、車外の景色がなつかしく、ぼんやり眺めてゐるうちに、夕暮となり、夜となつてしまつた。

四日　朝食を濟ませ、新聞を讀んでゐると、やあしばらくと聲をかけられた。福岡縣三潴代理店主富安重行氏だ。昨晩名古屋から乘車したといふ。博多迄同行、九州地方の經濟事情を聽く。十一時三十八分博多着。晝食後坂本さんの案內で市內を巡り、雁の巢飛行場を見物する。最新式の旅客機の設備の行屆いたのを見て、忽ち誘惑され、今度臺灣へ行く時は、飛行機にしようと思ふ。夕刻、銀行集會所で催される同窓會に招かれ、約一時間列席、夜は富安氏、九州水力取締役

内本浩亮氏、内外編物支店長高橋吉彦氏、東邦電力竹岡茂氏を中心にして晩餐を共にする。

五日　定宿共進亭ホテルは、片倉生命ビルの内に在る極めてお粗末なものだが、日本式旅館のやうな煩はしさが無くて居心地がいゝ。最上階の、裝飾も無い食堂で、四方を見晴しながら、手輕な朝飯を食べてゐると、伊藤さんから電話がかゝつた。直方事務所が二十八萬といふ新記錄を作り、昨夜は徹宵締切事務に忙殺されたが、その中で早く仕事を濟ませた有志七名は、未明自動車で來福、先づ伊藤さんの家に乘つけ、祝盃をあげ、更に支店長宅へ押寄せて今乾盃した、これから一同揃つて筥崎神宮に御禮參りに行くから一緒に行つてくれといふ。伊藤さんは餘程感激興奮してゐる樣子で、聲が高くはずんでゐる。支度してビルの入口に出て待つてゐると、二臺の自動車で一行はやつて來た。角樽をさげ、一升壜を持ち、青々とした笹竹を添へ、七勇士は夜のめも寢なかつた疲勞の色もなく、欣々として私を迎へてくれた。筥崎神宮に着くと、素晴しく太く長い竹竿を探して來て、祝坂本神太郎誕生月記念募集完成と大書した幟をかゝげ、敵國降伏の額のかゝつてゐる樓門の前で銘酒男山を酌みかはし、記念撮影をした。聞けば、夜中俄に思ひ立ち、酒屋を叩き起し、呉服屋文房具屋を呼び起し、支度の整ふや否や、遙々自動車を走らせて來たので、伊藤さんの奧さんは先づ火を起し、飯を炊き、握飯をつくつてもてなしたが、炊きたての熱

い飯を握つたので、手の平を火傷されたさうである。東京のやうな大世帶ではこんな感激は無い、一人殘らず知合つてゐる支店の愉快さはこゝにあるのだと、轉任間も無い伊藤さんは、しきりに支店勤務を禮讃する。支店に歸り、社宅附屬の茶室をあけ、ひと休みしてはどうかと勸めたが、七勇士は支店長室に整列し、再び吾々と共に乾盃し、明治生命の萬歲を唱へると、待たせて置いた自動車で、直方へ引きあげて行つた。支店から金一封を贈り、私も同額を贈つて祝意を表した。この勇士達は自分達の思ふ存分働き、各人平均して優績をあげ、大記錄を完成した嬉しさに、終始にこにこ微笑してゐたが、その間少しも自慢の色なく、功名をほこる事もなく、芝居がゝりの身ぶりもせず、極めて無邪氣に喜びを表示して、さつさと歸つて行つたひき際の美事さ、心憎いばかりであつた。坂本さんは、こんな嬉しい事ははじめてだと繰返してゐた。

午後は支店樓上で社員大會が催された。坂本さんの誕生月記念募集は、乍遺憾目標に達する事は出來なかつたが、約九拾萬の成績で、先づ目出度しとしなければならない。大會は型の如く行はれたが、店長は自力前進を、私は實行第一主義を說き、これが今年の明治生命の指導精神であると高唱した。夜は、近所の竹葉といふ料亭で、盛んな宴會が開かれた。

六日　朝から客が絕えず、戶畑に住む姉も私の來福を新聞で知つてたづねて來たが、客來中だ

つたので、直ぐに歸つてしまつた。十一時四十五分、坂本さんと共に博多を立つ。坂本さんは、今日催される長崎支店二十萬倶樂部に招かれてもゐるのだが、それよりも十日の鹿兒島出張所開設披露には、前店長として別辭も述べ度い、又私の旅程が、福岡管内にはじまり、長崎鹿兒島を經て、再び福岡管内に戻るので、いつそ最後迄同行した方が便利だらうといふ事になり、留守は氣鋭の伊藤さんに一任して來たのである。今年の暖氣は世界的ださうで、東京も氣味の悪いやうな氣候だつたが、九州路は殊更暖く、西へ行けば行く程麥は伸び、菜の花は咲き、櫻もちらほらほころびてゐる。途中佐賀から杢尾さんが乘車し、諫早迄は例によつて迎陽亭の娘さんが出迎に來てくれた。三時五分長崎着。支店樓上で開かれた二十萬倶樂部に臨む。明治生命外野の名譽の殿堂は三十萬倶樂部で、それ以下のものでは無い。私は確く信じてゐるのだが、それは理論であつて、實際は受持地區の狀況により、都會地と同等の條件で成績を競ふ事は無理だと見られる場合もあるので、地方的には二十萬倶樂部の存在も意義無しとしないのである。會場には、例の黑獅子旗が飾られ、全國制覇の名譽を誇つてゐる。大坪さんの挨拶の後で私も、坂本さんも起ち、倶樂部の面々も各自の抱負と覺悟を述べたが、就中私共の感激したのは、松岡喜一郎氏の祝辭朗讀であつた。眞摯な態度で讀上げるのを聽くうちに、胸を打たれ、感涙を覺えるのであつた。

本日ハ長崎支店第二回二十萬倶樂部大會並ニ當支店開設三十五周年記念、此目出度席ニ本店ヨリ阿部常務殿ヲ迎ヘマシタル光榮アル席上ニ招カレマシタル不肖私ノ身ニトリマシテ誠ニ難有シアハセニ存ジマス。私ハ佐賀縣東松浦郡相知町字相知極ク田舍ノ者デ知識モナシ學力モナシ昭和八年六月十五日ヨリ佐賀事務所神代社員殿ノ推薦ニ依リマシテ大明治生命保險會社ニ入社致シマシテ長崎支店長殿並ニ佐賀事務所長杢尾主任殿ノ御熱援御指導ニ依リマシテ今日迄一生懸命ニ奮闘致シ又各代理店様ノ應援ニアヅカリ熱心コメテ働キマシタ處皆様ノ御蔭ヲ以テ昭和十年度三十萬倶樂部員トナリ其ノ翌年又々三十萬倶樂部員トナリマシテ目出度大明治生命本店ニ上京致シ誠ニ本店ノ背景並ニ事務ノ取扱方感謝致シマシタ。我身ニアマル光榮デ御座イマシテ篤ク謝意ヲ表スル譯デ御座イマス。私保險募集ノ事ニ付マシテ一言皆様ニ御挨拶致シマス。私ノ所ハ極ク田舍デ大口ハメツタニ有リマセズ只小口バカリデ成績モアガラスソレハソレハ從ツテ手數モ少々カヽリマスガ如何ナル雨ガ降ラウトモ風ガ吹キマシテモタトヘ雪ガ降ツテモイトハズ田舍ノスミズミ迄知ラヌ所ニ初對面デ行キマシテ我ガ大明治生命ノ堅實ノ事並ニ保險料ノ安イ事詳シク說明ヲ聞キ成程保險ト言フモノハ一家ノ寶デ有難イ貯金デアルト思ハレ初メテ本申込ヲ取リマシテ契約致シテ居リマス。私ハ昭和十二年度又

又三十萬俱樂部員トシテ、我ガ大明治生命本店ニ參リタイト思フテ一生懸命ニ奮鬪致シマシタケレドモ殘念ナガラ成績不良ノ爲メ上京致ス事出來ズ誠ニ申譯アリマセン。イツモ長崎支店長殿ヨリ覇權ガ參リ壹千圓ノ契約ヲ大切ニ守レト御通知受ケ此ノ長崎支店全社員壹百四拾名デ壹千圓デモ働キマセバ十四萬ノ增額致シマスカラ皆樣一同力ヲ合セテ我ガ大明治生命會社ガ他社ニ劣ラヌヤウ奮鬪努力致シマシテ働キマショ。之ヲ以テ光榮アル席上ニテ私ノ覺悟ヲ申上マシタル事ハ繰返シ簡單ナガラ皆樣一言祝辭ニテ御挨拶申上マス。

席をつらねる坂本さん大坪さんの眼底にも、感動のしるしが漂ひ、朗讀が終るとはげしい拍手が湧起つた。松岡さんは自身言はれる通り、片田舍に生れ育ち、學校教育も十分受けた方では無い。會社に入られる前は、はげしい肉體勞働に從事して居られたさうであるが、その人柄と精神の立派さは、それ丈でも人を打つ力がある。祝辭の文章は學校の先生から滿點を貰ふものでは無いが、松岡さんの一生懸命な心魂が一語々々に籠つてゐて、形式を超越した名文である。坂本さんは、實に大文章ですねえと感嘆してゐた。

この夜は迎陽亭で祝宴があり、それが終つてから主任諸君の小集、醫員諸君の小集と、あちらこちらに招かれ、結局第四次會迄つとめた。

七日　長崎では、いつも早朝茂木代理店濱崎節男氏の訪問をうけ、寢坊の私は狼狽して失禮の事が多いので、今度こそは支度を整へて待機する積りだつたが、又しても食事中に來訪され、長く御待たせして失敗を重ねた。坂本さんは長崎は初めての土地なので、見物に出かけ、私は大坪さん小副川さんといつしよに、長崎圖書館長増田廉吉氏の案内で支那寺に行き、寺中の襖繪を拜見し、市街の眺望を樂み、やがて坂本さんもいつしよになつて、精進料理の御馳走を受けた。今日は薄曇で、山は雨かと懸念されたが、事務所主任の慰勞會を兼て、雲仙嶽に登る事になり、一行十二人自動車を走らせる。運よく雲は晴れ、山路にかゝると日本晴になつた。山上の茶屋で晝食をしたゝめ、徒歩で普賢嶽に登つたが、島原天草熊本を見はるかす雄大な風光は、比類少なきものであつた。一行は島原に下り、一寸事務所に立寄つた後、南風樓に投宿した。事務所は廣い庭があり、清水の湧く池があり、家も廣く、立派なものだつた。南風樓は、先年安藤敬治氏が發病死去された所で、當時席に侍つた女中もゐて、かへらぬ事ながら逐一話を聞いた。夜は代理店塚本多久馬氏、松永岩壽氏を中心に、晩餐會を催した。

八日　他地方の主任諸君は未明に出立して、夫々歸所し、坂本さんと私は天草の川上主任と共に汽船で熊本縣三角に渡り、そこで川上さんにも別れ、熊本に行く。光永主任、宮本藤本兩氏の

出迎を受け、熊本城と水前寺を見物する。二十六七年振で、往時を追想して非常になつかしかつた。水前寺の茶屋の川魚料理も珍しく、諸君の語る地方の事情も十分聽いた。

熊本の諸君と別れ、鹿兒島に向ふ。汽車が鹿兒島縣に入ると、自然の風物は一變し、南國の特徴が著しくなる。曾て見た臺灣の東海岸の景色をまざまざと思ひ出す。西鹿兒島驛に着くと重松さんが待つてゐて、今日は指宿泊にきめてあるといふので、支線に乘替へる。東京から九州に渡つて、春の早いのに驚いたが、鹿兒島では一際此の感が深く、山には櫻が咲き、菜の花は既に遲く、麥の穗の出たものも見うける。途中の小驛で、二三十人妙齡の婦人が乘込み、みんな面白さうに話合ひ、さかんに笑聲を立てるのだが、いくら耳を傾けても、話の內容はきゝとれない。全く言葉が違ふのだ。約十五分間も熱心に傾聽したが、結局私にわかつたのは「自動車」といふ言葉と「二時間」といふのだけだつた。この風景、此の言葉、殊に屢々見かける色のどす黑く、眉毛の太く濃い相貌の人に逢ふと、全く異國へ來た感じだ。

イブスキ郡イブスキは揖宿郡指宿と書く。海岸の溫泉場で、土地の案內書の冒頭には「全國に溫泉は多いが指宿溫泉は天然の大風景を占め其湧出量の豐富なことは日本一である。新鮮な魚類は多いし米はおいしいし女は美しいし名勝舊跡は至る所に轉がつてゐるし何も彼も不自由なき眞

に天下の歡樂郷であるにとうたつてゐる。尤も、その次には、旅館の女中のサアヴイスに言及し、薩摩は昔から武の國だから、婦人と雖も武張つてゐて、客あしらひは上手で無いといふ意味の事が書いてある。

折惡く小雨となつたが、代理店吉元定治氏一家の方々及駐在社員俣江善藏氏夫妻が驛迄出てゐて下さつた。承ると、吉元氏は椿油其他化粧品の製造販賣で非常に多忙な方なのだが、代理店御引受以來熱心に募集され、夫人も令息も一家をあげて協力されるばかりでなく、活動好の俣江氏を見込んで、親戚の娘さんをめあはせ、此の俣江夫人が良人を援けて仕事の能率をあげ、最も美しい一致協力が今や花開き實を結びつゝあるのだといふ。俣江氏は人も知る鹿兒島事務所の代表的鬪將だが、御本人のいふのを聞くと、以前は相當あばれたが、結婚後は一切家庭本位で、月の半以上も出張募集するが、その間の收入支出は一錢一厘と雖も明細書とし、歸宅後夫人に見せる事にしてゐるといふ。坂本さんの話では、俣江氏が出張の留守中でも、夫人が代つて事務を處理されるので、何の停滯も無いといふ。それもこれも、氣持のいゝ話だつた。

濱田といふ大きな旅館に案内され、吉元氏と俣江氏を引留て、食事を共にした。

九日　今年の九州は雨が多く、殆ど隔日に降るといふ事で、今日も頗る氣づかはれたが、まだ

幸運に見離されず、空は美しく晴れた。途中名勝舊跡を探りながら、鹿兒島市迄自動車で行く事にし、俣江氏の奔走で、土地の遊覽バスの案內嬢の中で、最も說明の上手とうたはれる古小田嬢を煩はす事になつた。出立前俣江夫人は愛兒千古嶺(チコネ)君を抱いて宿迄來られた。

先づ吉元家に御挨拶に行くと、令息を案內役として同行させようと云つて下さつたが、吾々は鹿兒島へ直行するので辭退し、次には前代理店原口氏を訪問したが、折惡く病中で、御目にかゝる事は出來なかつた。町を離れると忽ち古小田嬢は七五調の美文の語尾に「ございまあす」とつけた說明をうたひ出した。全くこれはうたふので、指宿自慢の嬢の事だから、たしかに美音に違ひ無いが、昔流行つた作文の手本、美文錦粹にでもありさうな粉飾の多い文句、しかも無理に七五調にしたのを、技巧を凝らしてうたはれると、私の如き心臟の所有者は、恥しさに冷汗を覺えるのであつた。文句はバス會社取締役の作、うたひ方はわざ〳〵先輩格の別府から師匠を招いて稽古したものださうだが、私はもつと平易に、氣取らない說明の方がよくはないかと思つた。長崎鼻は一名龍宮城鼻といひ、彥火火出見尊(ひこほゝでみのみこと)や浦島太郎が、海底の宮居に遊行の場所といはれ、海岸風景としては、土佐の室戸岬に劣らぬものである。池田湖は景行天皇の御代(みよ)師走の一夜、忽然出現した大湖で、周圍四里二十九丁、水深百五十尋(ひろ)といふ。その他數々の古跡を經廻り、遊覽地域

の終點で古小田嬢と別れ、吾々は眞直に鹿兒島に向つた。海岸に添ふ大道は廣く、氣持のいゝドライブだつた。

今年一月開店の鹿兒島出張所は、十五銀行の建物の中にあつて、僅か二室に過ぎないが、最上階にある爲、事務室から直に陸屋根に出られるしあはせがあり、新店にふさはしく、明い事務室だ。お馴染の藤原藤男氏が福岡から轉じ、濱崎七之助氏は本店から轉任し、いづれも元氣いつぱいに働いてゐる。各地事務所から全員集合し、商工會議所で開設祝賀の式が行はれた。重松さんの挨拶にはじまり、私は祝辭を兼て會社の近狀を語り、坂本さんは別辭を述べた。元來鹿兒島出張所の開設は、坂本さんの意見に基づいて斷行したので、從來支店長は自分の管轄區域の縮少を喜ばない傾向があるのだが、會社の大局から考へて、鹿兒島獨立說を提唱したものである。主任、社員、醫員も交々演壇に立ち、時間は長かつたけれども緊張を失はず、滯り無く式を終つた。記念撮影の後、鶴鳴館で晩餐會があり、元氣のいゝ連中が座興を添へた。

恰も鹿兒島には第二艦隊入港中で、市中は海軍さんで賑はひ、花火の音がしきりに聞えた。岩崎谷莊に宿泊。

十日　朝の中に、代理店湯地定敏氏池畑德藏氏を訪問し、殊に多年當地開拓に力を盡された湯

地氏には、今夜の披露宴の御指圖を御願し、僅かな時間を利用して照國神社、城山、西郷隆盛之墓所、東郷元帥誕生地等を訪れた。晝は、山形屋百貨店の社交室で同窓會があり、藤原氏と共に出席する。午後から雨となつたが、湯地氏の御勸で、海岸の島津公別墅及尙古集成館を見る。別莊の建物は存外質素であるが、庭は非常に美しかつた。前は海、後は山、その山の中腹の孟宗籔が雨に煙り、暖國の事とて樹々の若芽も萌え、櫻も桃も滿開で、梅の梢にちひさい實さへ結んでゐる。一般には見せない別邸內部も、湯地氏の御聲がゝりで拜見した。集成館は薩藩の歷史を物語るもので、こゝはもう少し時間が欲しかつた。

夕刻から鶴鳴館で、有力者を招待し、出張所開設披露宴を催したが、海軍さんの上陸の外に、本願寺の大谷光暢師が裏方といつしよに入市されるといふので何か催事があり、官所方面の方々の缺席は止むを得なかつたが、多數知名の士が繁務の中を御出席下さつたのは深く感謝する所である。鶴鳴館の人達も、これ程の御顏揃ひは珍しい事ですと云つてゐた。何分私ははじめての鹿兒島入りだし、重松さんも新米の事とて、何から何迄湯地氏の御配慮を煩はす有樣で、まことに汗顏の至だつた。私共の挨拶に答へて、縣會議長坂口壯介氏の御挨拶があり、更に湯地氏から保險の本質について時宜に適した有益な御話があつた。

終宴後、私は數氏に伴はれて他の料亭に赴き、本場のおはら節や、はんや節など、地方色の濃いのを紹介して貰つた。

十一日　夜中、豪雨に眼を覺ます事數度に及ぶ。曉方から稍雨量を減じたが、豫定の霧島神宮參拜は見合せの事にし、都城（みやこのじやう）や宮崎の事務所に時間變更を知らせる。午前八時五十五分、前夜の御客様の御見送を受け、重松さんを加へて出立する。途中、雲が切れ、薄日もさしたが霧島は姿を見せなかつた。都城驛では岡元主任にあひ、宮崎では代理店大崎敬方氏同田代春次氏及馬渡主任に迎へられ、大淀河畔の旅館廣瀬に着く。食事を濟ませ、各代理店へ御挨拶に出向き、宮崎神宮に詣で、神武天皇宮居の靈跡をたづね、惡七兵衞景清の廟を見る。夜は、大崎田代兩氏の外に代理店西岡雄一郎氏を御招して晩餐を共にしたが、偶々當地方同窓の人々が私を待つてゐて、既に會場も定め、十數里の遠方から集つて來た人もあるといふので、斷り切れず、お客様には甚だ失禮であるが特に御許しを願つて中座し、同窓會の方にも顏を出した。會する者十數人、豪酒家揃ひで、私は十一時に辭去したが、他の人々は午前二時に解散したさうである。宿に戻ると、未だ田代西岡兩氏は坂本重松馬渡三氏を相手に保險談をたゝかはして居られた。

十二日　宿の老婢お靜さんなるもの、頗る頓狂で、宮崎の自慢をする事しきりであるが、私の

旅行の忙しさを嘲り、旦那のやうに首の痛くなる程おじぎをして廻つてゐては、面白い事も何もないだらうねえ、今度は會社の用でなく來てごらん、宮崎はいゝところだからと勸めてくれた。
宮崎に來た以上は、鵜戸神宮と青島には是非とも行かなければならないと、地元の方達に勸められ、こゝでも遊覽バスの案內役須賀原嬢を煩はし、沿道の地理歷史を聽く。別府指宿系統のうたふ說明でなく、お話をする態度で、いやみがなくて大變よかつた。鵜戸神宮は太平洋にのぞむ突端の奇岩怪石に大浪の碎ける豪快な景觀を有し、神武天皇の御父鸕鷀草葺不合尊を祀る。神社は洞窟の內に在り、その屋根は岩に接して殆んど間隙もなく、如何にして之を建立したかを疑はせる。參道の樹立の奧には鶯の聲長閑に聞え、重松さんはさかんに精銳なる寫眞機をさしむける。青島は、棧橋をつたつて渡る事の出來る周圍六丁の小島だが、熱帶植物が密生してゐる。その植物園の出入口で、重松さんは私を蒲葵樹(びらうじゆ)下に立たせ撮影するといふ。樹下には建札があり、樹齡推定五十年とあるので、殆んど同年齡の人間と植物を並べて見ようといふ惡洒落である。あまり進まない坂本さんにも參加して貰ひ、且脫帽を願つたのは、常磐木と、落葉樹を比較しようといふ私の駄洒落である。
午後一時五十分宮崎發で、私と坂本さんは立ち、重松さんは鹿兒島へ引返す。別府では、大分

事務所の上田主任、折柄診査の爲出張された醫員堀江氏、扱社員宮本氏と、旅館玉の井で食事を共にする。
十三日　大分事務所の打合會に出席、自分も會社の動向を話す。殆んど初對面の人ばかりなので、近所の支那料理店で晝餐を供し、しばらく歡談したが、時間が迫つたので中座し、別府に引上げる。夜は大分代理店平松折次氏、大分府内代理店櫻井鱗次郎氏、別府代理店平尾謙平氏、玖珠代理店の武石揆一郎氏を宿に御招きし、上田氏も參加して種々のお話を承つた。
十四日　午前九時三分別府發、上田主任も同行中津に赴く。代理店嶋澤六朗氏はわざわざ御出迎下さつたばかりでなく、福澤先生舊宅、小幡先生記念圖書館等市中の案内をして下さつた。中津市内特約店三宅政治郎氏、安心院代理店重松秀五氏も列席せられ、當地方受持の人を加へていそがしい晝食を終ると、門司へ向つて立つ。
門司では、最近代理店を引受られた有力者中野眞吾氏井神吹松氏三菱商事の奥谷喬蔚氏其他三菱及日本郵船の方達を御招待したが、折惡く他に用事の方が多く、中野井神奥谷三氏の外は缺席だつた。尤も私の弟で、大日本製糖の大里工場に勤務するのが、平素社業に多少の援助をするといふので席末に列してゐた。支店からは伊藤氏と、受持の植山松尾兩氏が接待役に出た。中野氏

は多藝多能長唄あり常磐津あり小唄あり、能がゝりの磯節といふ珍しい表藝もある。之に對し、植山氏が負ぬ氣になつて珍藝を披露し、伊藤さんは東京仕込の蟇の油のいひたてゞ喝釆を博す。汽車の時間が迫つたので、私だけ御許を願つて中座し、八時半下關發の特急富士に乘る。

十五日　名古屋で關さんが乘車し、豊橋迄同行。午後三時二十五分東京に着く。

――「社報」昭和十二年三月號

長岡

八月四日　越後長岡の花火は日本一と聞く。その花火を見に來いと、六十九銀行から御招をうけた。先年同地に博覽會の催された時も、山下安東二氏と共に出向き、手厚いおもてなしにあづかつたが、折惡く花火大會の當日は風雨はげしく、その翌日は東京にのつぴきならぬ用事があり、好機を逸してしまつた。

今度は稻田信越部長も同行の筈だつたが、一昨日から發熱臥床中といふので、祕書の原一衞氏が代理で出向く事になつた。稻田さんは、いくら働いても疲れを感じない二十餘貫の偉軀の持主で、病氣には緣の薄い方だから、彼氏病むと聞いた山下さんは「それは珍しい、鬼の霍亂ですな」と云はれたが、今朝本人から電話の際も「鬼の霍亂です」と自稱する位、それ程豫期しない事であつた。

午前九時十分上野發。車中熱氣甚しく、汗は流れて止まない。山々の上には、雨を含む雲も見えたが、降る迄には至らないで白雲となり、やがて消えた。清水トンネルにかゝると俄に涼しく、氷室に入つたおもひだつたが、その出口から吐出されると、却つて前にも增して暑氣を感じる。今年の豐作を豫約する靑田は炎天下にゆらぎもせず、滿地箱詰のやうに丈伸び、旣に稻穗の頭を垂れてゐるのもある。その靑田の中に立つ驛々では、北支事變に召集された軍人を見送る人達が、手に手に日の丸の小旗を持ち、聲をからして萬歲を叫ぶ。殊に長岡驛は送迎で身動も出來ない有樣だつた。銀行の支配人の方々や保險係の方々の御出迎を受け、稻田さん急病不參の申譯をすると、社員村越氏は、こちらでも六十九銀行の近藤專務の愛孫が疫痢で御心配の最中だといふ。近藤さんは二三年前にもちひさい方を失はれたので、その御心配は一層深い事と御察しする。先づ銀行に御挨拶に出向き、頭取その他幹部の方に御目にかゝり、旅館大野屋に鞄を下し、取急ぎ關原の近藤家に御見舞に行く。御令孫の病狀は、今夜あたりが峠であらうといふ御話で、私共は御見舞の言葉も少なく、たゞ全快を祈つて辭去した。近藤邸の入口には、空高く聳え、枝低く垂るゝ老松が、街道を斜に切つて行人の目をひく。これには極めて興趣深い物語が傳へられる。主人の筆をかりて皆さんに御話しませう。

物見の松

それは明治元年の五月の或日であつた。恰度此頃官軍は長岡城を攻める爲め、參謀山縣狂介以下薩長其の他諸藩の兵衆を率へて、關原の村に滯陣してゐた。其の日一人の男があつて、松の樹に登つて頻りに其枝を伐つてゐる。松は祖先以來我家の愛護何物にも代へ難いものであつた。そして我が祖父の時代になつてからは、松が生育るに連れてます〳〵愛惜を加へて來たのである。私は今も覺えてゐる。祖父がまだ頑丈でゐられ私共のまだ小供であつた時分、松の小枝が風で一本折れても、ほんに自分の指を截られる思ひだと云つてゐられた事を。これ程までに愛護してゐた松なのである。それには又、傳說さへ添うてゐた。此の松は生きてゐる、樹として生きてゐると云ふのではなく、それは實に人間や他の動物の樣に、赤い血潮を持つて生きてゐるのである。幹の鱗が一枚とれても、そこからは生物と同じに血が流れるのであると云ふのである。祖父や祖母は左樣信じ切つてゐられた。そして又里の人達も之を信じ合つてゐた。又松には生きた靈がある。それは每年一度必ず京都に上つて、本願寺に參詣し、名所舊蹟、神社佛閣を巡拜する、所謂「上方參り」をする。そして其の間は松の靈が

失はれてゐるので、葉にも枝にも衰への色が横はつてゐる、靈が「上方參り」から歸つて來ると、鬱蒼とした枝梢に生色が現はれて來ると云ひ傳へられ、里人は亦皆之を信じてゐた。斯うした事から、一面には、又我が家に憂ある時は、松に憂色あり、松の樹勢の榮へると否は、我が家運の消長を物語るものであるとまで私の祖父祖母などは信じ切つてゐられたのである。

今故なく此の松の枝を切つてゐるので、之を見た私の父は激怒して樹の下から詰り罵つた。「何奴だ、うちの松に登る奴は、その上無暗に枝を伐るなんて、たんだ今降りて來い」けれども彼は平氣でゐた「官軍の御用だ」「ナンダ官軍の御用もあるものか、譯もなく人の大切のものを伐り散らして官軍の威光を肩に着たつて駄目だぞ」けれども彼は尙平氣で手もゆるめず降りて來やうともしなかつた。「野郎降りなければ階子を引かうか乃至は貴樣を引きずりおろすぞ」これには彼も弱つたのであらう。それは幾十丈の樹の背に階子をつなぎ合せて、之に攀ぢ登つたのであるから、此階子を取られては彼は降りる事が出來なくなるのである。臂を張り眼を怒らした彼は「覺えて居れ」の一語を殘して行つた。父がこれを咎めたのは、あながち官軍に抗拒しやうと云ふのではないが、かほどまでに我家愛惜のもの、無斷に之に登攀し剩さへ頻りに其枝梢を伐るの行爲を惡んだのである。官軍にしてこれを利用する必要ある

ものなら豫め之を納得せしむ可きではないか、此點を主張せんとしたのであつた。官威嚴として秋霜烈日の如き際、敢然として此擧に出たことは少壯氣鋭とは云へ、父の負けじ魂の現はれではあるが、當時としては常人の敢てしなかつた處であつた。それから暫くすると庄屋のうちから迎の者が來た。何も知らぬ小心の祖父と、さすがに胸騷ぎに悄然たる十九の青年である父とは、里正の一室に伺候した。山縣參謀の屯所なのである。參謀の前に膝行して出た二人は里正と共に平身低頭してゐた、然るに、參謀は案外にも聲を和げて問ふた。「お前が勘太郎と申すのか、そして又悴と云ふのはお前か」二人は最う答さへ聲に出なかつた。やがて事の次第を殘らず聞き盡した參謀は、里正と、祖父と父との三人が、口を揃へて非禮を詫び助命を乞ふのを制して、更に意外にも、溫顏に之を慰めて「イヤ決して心配するには及ばぬもともと手落ちはこちらに在る。お前達には何の罪も落度も無い、實はアノ松は恰度物見によいのであるが、お前達の知つてゐる通り、今日は官軍と敵とが信濃川を挾んで對陣してゐる。上は小千谷から下は與板まで夜と晝との戰爭に注進は櫛の齒を引くやうである。彈藥、兵粮、援兵皆此の注進によつてゐる。寸刻も爭ふ戰場の驅け引き、それで物見の必要があるのである。煙りの盛んに擧がる處、玉の音の頻りに聞える處、援兵を繰り出さねばならぬ―

參謀は懇ろに物見の要を說示し改めて「若しお前達に異存が無くば此松を官軍の御用に立てゝは吳れまいか」と云ふのである。參謀の知言に、異存のあらう筈もなく、三人は言下に快諾したのであつた。參謀は更に「次に小者小櫻の事であるが、お前達が許さぬと云へば已むを得ず彼は軍規に問はねばならぬ……」參謀は實に父の抗爭を咎めずして、却つて官兵の無斷登攀と、その民物損傷との二つを軍規によつて正さんとしてゐるのであつた。「イヤそれどころでは御座いませぬ。實は忰が不所存者ゆへ官軍樣に口答(抗爭)致しました不調法の數々は何卒御宥免下さいませ」老の祖父の嘆顏は却つて參謀の好感を以て迎ふる所となつた。「イヤそれは詫びるに及ばぬ、お前達さへ許して吳れるなら彼は幸ひに命を免るゝであらふ。若し不承知とあれば氣の毒ながら小櫻は法によつて處分せねばならなかつた。さりとは命冥加の奴ではある……」そして參謀は卽座に、他人の猥りに登ることを禁ずるため、「官軍物見の松無用の者登る可らず」と大書して之に與へて愛護の念を完うせしめられたのであつた。五月から十月まで千軍萬馬往來のうち、關原の里の高見に居然として大軀を橫へてゐた「物見松」は斯うして官軍晝夜の御用を勤めたのであつた。參謀の筆になつた禁札は雨の爲め紙が流れてしまひ、改め建てられた制標は里正の代筆であつた。その後或る日の夕暮に吾家の

門を訪れた一人の六部姿があつた。やつれ衰へてはゐるが、まがふ方無き小櫻卯之助ではないか、彼はあれから會津に、仙臺に、參謀の小者として轉戰したが、人類相剋の慘禍に直面して、その呪ひの妄執から遁世の悲願に赴いたのであつた、そして佛像を背に敵味方の冥福を祈りながら、廻國して來たのである。父祖に圍まれた彼は燈をかゝげて夜と共に過ぎ來し行く末を語り明した後、一粒の米佛をかたみに、痩せた後ろ姿は行く雲の名殘も無く消え去つたのであつたが何處の空に果てた事やら。人の世の離合集散の運命こそ、思へば、奇しくも果敢いものであると、父はいつも思ひ出しては云つてゐられた。戰平定の後、仁和寺宮殿下兵馬鎭定、民情慰撫のため下越あらせられた時には、日月を駢べ懸けた、錦の御旗を奉ぜられたが、樹下を過ぎ給ふには竿を傾けて、御旗を從兵の手に受け支へられ、再び之を建てゝ去り給ふたのであつた。

松は榮えに榮えた明治十一年　天皇北巡の時が來た。是より先聖駕を迎へる越後の山野には道路の修繕が行はれたのである。父は選ばれて道路用掛となつてゐた。監督には縣吏の土田某、ある日土田が制札を犯して修理中の道に車を乘り入れた。之を拒んだ父との間に交された激しい爭ひ、理非に破れた彼は、憤然として車を捨て去つた。後難はすぐにその明くる

日に酬はれて來た。それは松が道の空に繁つて龍車を妨げる虞があると云ふのである。免れ難い伐除の命令では無いか、父と祖父との驚きは云ふまでもない。百方之を乞ふても彼は頑として許さなかつた。而も彼の顏には、誇らしの色さへ漂ふてゐる。縣の大書記官白神某氏の臨檢に當つて是を哀願して許されず、土田の誅求は日毎に加はる、術計全く盡きんとしたのであつた。此時救ひの光は天の一方から注がれた。內務少輔の巡視を待つた父は、幾夜か心血を注いだ一書を懷にしてゐた。いよ〳〵其日御巡路下檢分の爲め內務少輔林友幸卿が下つて來られた田舍には空前の輕車幾十輛、その先驅を里正の館の前に要した父はさらに第七車白髯の人にすがつた。卿は取り上げた一書を見輕くうなづきながら「何の樹であるか」を問ふた。顧みて翠蓋天に接してゐる物見松を仰いだ時卿の目にはうるはしい慈愛の光が輝いてゐたではないか「以ての外である地方の小役人が何を知つてゐる、かやうな美しい景色や古いもの、特に官軍に功勞のあつたものはお上のお退屈を慰め奉るのみではなく、陛下には却て其功を御嘉賞あらせらるゝであらう。人民の困ることを強ひると云ふは以ての外である。決して伐るに及ばぬ」父は期して期さなかつた今の聲に幾度か我が耳をさへ疑つたと云ふ。けれども明日にも土田は來り逼るのである一札を乞ふた父は「イヤ今多忙の際である林が切

るに及ばぬと云つたと答へるがよい、若し夫でなほ疑はしくば他日陛下に扈從し來る林に問へと云ふが良い」との聲を神の詞とも聞いた。九拜地に伏して呆然自失してゐた父が吾に返つた時は輕車既に西に走つて父は唯その後塵を拜して熱涙に咽ぶのみであつた。斯うして辛うじて厄を免れた老松はこの年秋の初めその涼しい蔭に鳳輦を迎へ奉つたのである。それから四十年春暖かい大磯の小淘庵に相語る主客二人主なる眉雪の翁こそは誰あらう元帥有朋公、客なる半白の翁これこそは父であつた。當年の狂介參謀は卅一才の壯夫父は紅顔僅かに十九の少年であつたのである、時移つてこゝに四十星霜、盡きぬ憶出に酒を置いて語つた元帥の筆はいま碑面に刻む「物見松」の三大篆字のそれである。二百年の雪霜に傲る老松はゆかりの人皆逝いて今に猛虎の風に嘯くが如く、老龍の天に昇る勢ひ斜に空際に臥してゐる、そしてその緑り葉の色も濃やかに。（昭和十、十、廿九）

物見松碑

元帥陸軍大將正二位大勳位功一級公爵　山縣有朋篆額

越後關原近藤君寄書曰余宅有一古松亘幹出牆橫道上枝葉扶踈盖四隣盖數百年物戊辰之役官軍來營邨中將攻長岡城一兵士來不告而攀松伐繁枝將架木材其上余時弱齡大聲咎其橫暴兵士

按刀大怒而去既而隊長召余營中人皆恐遭誅戮隊長卽今元帥山縣公也溫顏問余所咎之叱兵士橫暴改端曰吾將構物於松上望敵動靜請暫借之盖邦言謂望樓曰物見余乃諾公手書官軍物見松禁他人登攀數字標示樹下遂陷長岡城距今四十年也頃余遊東京謁公於大磯別墅公喜曰我舊相識也置酒笑談當時且書物見松三大篆字以賜余因欲建碑彫之額先生幸記其由嗚乎非君豪膽不能咎之非公雅量不能赦之可謂一佳話宜與松俱傳千古也君稱勘太郎今年五十有八有子有孫家道隆盛云銘曰

鬱鬱老松樹　鳳翔又龍驤　曾爲望樓用
皇武乃發揚　上與國運盛　下與家道昌

明治四十年天長節

東宮侍講正四位勳三等文學博士　三島　毅撰
正五位　日下部東作書

幾歲か風雪をしのいで來た松樹は、既に平均樹齢を遙かに超えてゐるであらう。松よ果して靈あらば、新しき世に生きんとする幼き人の爲に身替（みがはり）となれ。

此の夜は、平素の御高誼に對し些か感謝の意を表し度、六十九銀行重役支配人支店長各位を御招待申上た處、御繁忙の中を差繰り、二十餘名の方々が御出席下さつた。鷲尾頭取は、市の有力者として、汽車の發着毎に應召兵の送迎に赴かれ、咽喉をつぶしてしまつたといふ忙しさの中にもかゝはらず、最後迄おつきあひ下され、近藤專務は御病人の看護の隙に、車を走らせて來られ、土地不馴の吾々に何彼と御心添下さつた。

五日　八時二十九分長岡發で、原氏と二人新潟に行く。川村所長に迎へられて事務所に赴き、少憩の後、伊太利軒で所員諸君と晝食を共にする。恰も診査の爲に出張中の醫員樋田本村兩氏も同席、僅の時間ではあつたが、第一線活躍の諸君と會談する事を得たのは幸であつた。食後直に長岡に引返し、事務所訪問、折柄來合せた諸君と、約一時間、村越さんの天才藝術家的募集談を中心にして談笑する。いつも地方出張の際感じるのは、事務所長の奥さん方の御苦勞で、ちひさいお子さんのある川村さんや、やがて生れる齋藤さんの若い奥さんが、多數の人の世話に心を碎いて居られるのは、本店にゐる內勤の人達の、思ひも及ばない事である。

夕刻から六十九銀行の御招待にあづかり、御馳走になり、引つゞき信濃川長生橋下流の中洲で打上る花火見物に赴く。鷲尾さんは花火協會の會長を引受て居られるので、花火には頗る熱心だ。

川岸の家の屋根の上に設けられた棧敷に、事務所の人達も共々、川風に吹かれながらの見物だ。銀行では、吾々の外にも幾組か御客があるので、幹部の方々は夫々手分をし、吾々の組は頭取の外に片桐川上兩支配人が受持たれ、川上氏は終始賑かに説明して下さつた。

長岡の花火の歴史は舊藩の狼烟方にはじまるさうであるが、今日の如き大會の催されるやうになつたのは、明治十二年以來の事で、曾て一度も中絶する事なく今日に及び、技術は次第に進歩發達し、日本一を稱するに至つたのださうである。製作者としては十二人の名をあげてあるが、別に審査員を定めて採點し、優秀者には多額の賞金を贈與する事になつてゐる。今宵はまことに花火空で、僅に星が遠慮深くきらめくばかり、眞黒の大空に、おもひおもひの色と形を展開する花火は、破口物(わりもの)引物(ひきもの)釣物(つりもの)曲玉(きよくだま)形物(かたもの)小割物(こわりもの)に大別されるが、これがわかれわかれて數限りなく、柳櫻はいふ迄もなく、牡丹、菊花、藤の花、昇龍玉を吐いて空を横切り、白銀の飛雪川波に散る。いづれも一瞬間の光を命として消える。昔は長く空中に輝くのをよしとしたが、今はぱつと開いて速かに消えるのをよしとするさうである。

今日の番組凡二百の大部分は、市内の銀行會社商店の寄贈によるものであるが、明治生命長岡

事務所の奮發したのは番外大スタア・マインで、まさに呼物のひとつであつた。最初、明治生命の四文字が、突如川原の闇に出現する。とたんに紅綠紫白の玉が、先を爭ふやうに高くあがつた。それが消えるか消えぬ瞬間に、轟然大地をつんざいて幅二十間もあらうかと見える火の瀧が逆さまに上り、その火の瀧の中から更に鋭い音を立てつゝ、一千尺の空に八方開（はつぽうひらき）の星が飛散つた。棧敷から旺んな拍手が起つた。火の瀧も星屑も、やがて消えたと思ふと、一發二發再び高く紅紫の玉があがつた。數々の花火の中でも、これこそは吾等の物と思ふ爲か、一層壯快だつた。今、三十萬倶樂部會長候補として、無敵木下氏を脅してゐる村越氏が、若し此の儘先頭を讓らず、宿望を達したならば、來年の大會には此の川原に於て、私も一發祝賀の花火をあげようと約束した。

大會の呼物中の呼物、これ丈は絕對に他所に無いといふ三尺玉は、重量百貫高さ二千尺開き二千五百尺と稱する大物で、開いてからの美しさも元よりであるが、未だ開かず、眞直に高くあがつてゆく時の、もう開くかもう開くかと待つ緊張は、比類ない氣持だつた。此の一發が終ると、川岸を埋めた見物人は見る間に數を減じてしまつたが、趣向に趣向を凝らした花火の夫々に面白さがあつて、私は他の人の思惑にも頓着せず、最後迄棧敷を離れなかつた。鷲尾頭取が忙しい中を、何から何迄接待して下さつたのには、御禮の言葉の下手な私として、恐縮の外無かつた。

花火といへば東京兩國の外は知らないのだが、川幅の狹い隅田川で、船の上であげる花火は自然仕掛物が多く、長岡の豪快なるものには遠く及ばない。もう一つ私の感心したのは、幾千人か或は萬餘か、川岸に集まる見物人の靜肅な事で、大聲を發する者もなく、ひとつひとつの花火の技巧を、靜に樂み批判してゐる態度であつた。ましてや、醉漢が他人(ひと)の邪魔をするやうな不快な光景もなく、そこに越後地方の底力ある個性が、あらはれてゐるやうに思つた。

六日　こちらから御禮に伺はうと思つてゐるうちに、鷲尾さんが宿へ來られた。近藤さんの令孫は稍小康を得られたらしいといふ御話で、吾々もほつとする。午前十一時三十三分、締切の爲に上京する齋藤さんもいつしよに、新潟から先乘(さきのり)の川村さんと四人、賑かに汽車に乘る。又しても頭取と遠藤取締役の御見送をうけた。

往路よりも歸路は涼しく、又平素親しく談話の機を得ない人と、いろいろ話を交すのは愉快だつた。小千谷(をぢや)から事務所の下村氏が同車し、小出までの僅かの間ではあつたが、洒脫な話ぶりで、又輕い味のある漫談を聽かせて貰つた。獨特の話法で、これは勸誘上有效であらうと思つたが、又一面には、あまりに味があり過て、面白がつて話だけ聞かれてしまふ惧れはないかなどゝ商賣根性で想像して見る。

午後六時四分上野着。三君は締切事務の爲に本店へ急ぐといふ。私は、先年拙宅の臺所の世話をしてくれた老婦が、出張前に入院病篤しと聞いてゐたので、見舞に行く事にし、馬場先門角で別れる。江戸子で、氣性の爽かな、私共の放漫な家計を引しめてくれた荒野德女は僅に三日間の出張中、既に佛になつてゐた。誰が寫したのか、素人らしい手際の寫眞の前で、生前の親切に感謝し燒香した。

――「社報」昭和十二年八月號

秋田――仙臺

八月十九日　午後十時上野發。日支事變の爲に市中は軍國風景を呈し、驛の歩廊も日の丸の小旗を手にした應召兵見送人で充滿し、萬歳の聲は汽笛と共に湧起る。

二十日　今年は所謂百日々照（ひやくにちひでり）で、眞夏に入つてから、雨らしい雨に逢はないが、ひとり東京のみならず、全國的の炎暑で、私の如き多汗性の者は、晝夜ともに衣服の乾く暇も無い。乍然日照續きに不作無しで、何十年振とかの豐年である。東北の田野の稻のみのりは申分無く、汽車の過る所、窓外には金波を湛へてゐる。

午前十一時五十分秋田着。久保澤平賀兩氏に迎へられ、舊城址の公園を見物し、小林旅館で晝食を認（したゝ）め、直に自動車で代理店訪問に出かける。こゝでは今朝夕立が降つたさうだが、沈鬱な水蒸氣が立ちこめて、暑氣は東京に劣らない。土崎港町の代理店柴田堅治氏は醬油釀造を業とせら

れる名望家で、會社との御緣はあまり古くないが、熱心に協力せられ、又忌憚なく社業を批評される方で、初對面の私を快く引見されて、諧謔をまじへつゝ、時には手きびしい非難も浴せられる。柴田家の長方形の庭園は綠芝を以て埋め、松を主とする樹木の間に石燈籠を配置し、奥行の深い、美しいものであつた。先代は今尚長壽を保たれ、御子息は釀造を專攻され、三代共に家業に精勵せらるゝ目出度い御家である。數々の御歡待をうけ、後刻を約して男鹿半島へ向ふ。

男鹿半島の風景については、幸田露伴の有名な文章があり、その一部は中學の國文教科書にも入れられてゐて、多くの人の知るところであるが、私は亡友澤木四方吉氏の誕生地として、その人の口から屢々鄕里の美しさを聞かされた。澤木氏は船川港町の舊家の出で、慶應義塾に學び、西洋美術史の教授として幾多の著書があり、又繪畫彫刻建築物の批評家として聞え、私學の出身にもかゝはらず、東京帝國大學にも招かれて講座を擔當してゐたが、不幸にも肺を病んで死んだ。

船川代理店鈴木德治氏は精米業を營まれ、忙しい方であるが、特に吾々の爲に半島の突端迄案內して下さつた。男鹿の風景を鑑賞するには、小舟に乘つて浦々島々を廻らなければならないといふ事だが、吾々は時間を多分に持つてゐないので、その樂みを味はふ事は出來なかつた。あわたゞしく市內に戻り、秋田倶樂部に市內並に附近の代理店の方々を御招して御高見を拜聽する。

終宴後柴田氏の御誘をうけて、土崎と秋田の間にある將軍野で盆踊を見物した。踊は古風な、簡單なものだが、踊手はいづれも假裝を競ひ、男裝の女もあれば、女裝の男もある。周圍に棧敷をめぐらし、圓陣をつくつてゆるゆると踊は移行し、夜は更けた。

二十一日　夜中大雨を聽いたが、朝は晴れて今日も蒸す。八時二十分、久保澤平賀兩氏と共に出立。大曲代理店高坂耕治郎氏を訪問する。呉服店を經營して居られるので、舊盆の此の頃は極めて御多忙に見受られる。暫く御邪魔して、久保澤さんと私は田澤へ行き、平賀さんは今晩から明日へかけて開かれる明保會の準備の爲に、横手へ先行する事になつた。田澤迄は自動車で一時間三四十分かゝる。途中の村々は、お祭と事變風景とを同時に展開し、他所行の衣裳の人や揃の浴衣の人達が群つてゐる。道は次第に傾斜度を加へ、忽ち眼下に紺碧の湖水が現はれた。世界一の水深を以て聞える田澤湖だ。恰も晝食の時なので、たつた一軒の蓬萊館に申入れたが、縣下青年團指導者の講習會が催され、宿泊者百餘名の爲にてんてこまひをしてゐる折柄で、容赦なく斷られた。せめて飯だけ食べさせて貰へまいかと重ねて願出て、やうやく戸外の大地に蓆を敷き、お膳を並べてくれた。再び大曲に戻り、滿員の汽車で、午後四時横手に着く。この夜横手川原で打上られる東北第一の花火見物の爲に、附近の町村から繰込んで來るのである。代理店下田弘藏

氏は、明保會當番幹事として、宿のお世話から會場の準備、何から何迄行屆いたお骨折で、大變な事だつた。旅館平源の座敷は、横手川に接し、彼岸の山姿を仰見る景勝を占め、夜分は河鹿が啼きしきるといふ。私は縁の寢椅子に伸び、微風に吹かれながら、若し時間が許すなら、此地の中學に教鞭を執る石坂洋次郎氏を訪問し度いと願つてゐたが、間もなく花火の床に出向く豫定ときかされ、あきらめた。石坂氏は此の一二年來、非常な人氣を湧上らせた小説作家だが、未だ有名にならぬ前からの馴染である。こんな土地に留めて置くのはもつたいない事ですと、下田氏は我土地を卑下されたが、中學教諭としても、彼は手腕を振ひ、尊敬されてゐる樣子である。不圖向ふ岸を、白い夏服の上着を脱ぎ、下駄をはき、小學程度の女の子と、白犬を連れて散歩するのが、石坂氏らしく目に映つた。川幅が廣いので、確かにそれとは見わけ兼ね、大聲で呼んで見ようかとも思つたが、隣室の人達に遠慮してしまつた。

秋田明保會は、全國明保會に魁けて創設された歴史的存在であるが、今回も三十餘名の會員集合せられ、會社側の者を加へると、六十餘人の大人數である。此の人數が、川を横切つて設けられた棧敷に、宿の浴衣で並んだのは壯觀であり、その席の後には明治生命社名入の幕をはつて一層人目を引いた。

月始に長岡へ出張した時、同地の花火大會こそ日本一のものだと紹介され、同時に横手の方からも、日本一の花火を見せるから出て來いといふ御案内をうけ、日本一がふたつあるのはをかしいと思つたが、雙方現場に臨んでみて、日本一は二つあつても三つあつても差支無いと考へるやうになつた。恰もそれは、契約高で日本一を誇る保險會社があり、內容堅實を以て日本一を誇る會社もあり、高配當で日本一を稱へるものもあり、低率保險料で日本一と稱するものがあるのに等しい。實際長岡の花火と横手の花火を比べて見ると、花火その物が違ふばかりでなく、環境が違ひ、觀衆の觀念が違ひ、態度が違ふ。長岡の花火は獨立した催であるが、横手のは送盆祭の景物で、各町々では藁で屋形船を作り、その上に澤山の裸蠟燭を灯し、鉦太鼓笛で囃し立て、船を取卷く若衆は、手拍子足拍子面白く踊りながら、町々を練歩き、愈々花火の打揚場に來ると、橋上に勢揃ひし、屋形船の上から思ひ思ひに花火を打揚げ、最後には川原に下りて、早打の競演をやる。元より此種の町內花火の外に、花火協會の打揚る逸物もあり、會社商店等の寄贈のものも多いが、兎に角專門家の打揚る花火を殆んど嚴肅ともいふ可き態度で批判して見る長岡のと違つて、横手では全市民が祭氣分で賑かに騷がうといふのだから、屋形船の連中が絕間なくあげる小型の花火などは、故意か未熟か、兩岸の人家の屋根に飛んで行つたり、吾々の棧敷の方へも流れ

て來るやうな次第で、いはゞ町中が花火と共に燃え上らうといふのである。一方が客觀主義たらば、他方は主觀主義である。したがつて、長岡方が直經二尺三尺といふ大物を誇るのに對し、横手方は早打を得意とする。長岡がひとつひとつの花火の色と形と變化を樂むものとすれば、横手はさまざまの花火を同時に打揚げて、空中に於る紛亂を樂む傾向がある。此の好みの相違の結果、長岡花火は大輪菊花のやうな雄大なものに、洗練されたる色彩をあらはし、横手花火は色も形も變化するものが多く、その色彩は稍々毒々しい。當夜呼物のひとつとして、長岡の煙火師中川利夫を招いて、番外三十發を打揚げさせ、擴聲機を利用して說明者は「長岡花火はなんと雅致ある花火ではありませんか」と繰返したが、まことにその通りだつた。想ふに長岡の花火鑑賞眼は非常に發達し、煙火師も亦只一色の大空を背景にして、個々の花火の色彩と形式が、いかなる印象を與へるか、その效果を深く考へ、獨立したる藝術品として制作に從事し、横手の花火師は、それ程の考慮を拂はずに、いかにすれば賑かな花火が作れるかに思考を止めてゐるのではあるまいか。私は此の夜の花火を見て、長岡の中川といふ人は、心憎き迄空の背景を生かし切る、すぐれたる色彩感覺の持主だと思つた。

數々の花火の中には、秋田明保會寄贈の大スタア・マインもあり、明治生命の四文字は、高く

空中に懸つた。吾々の棧敷を中心として、歡呼の聲のあがつたのは、いふ迄も無い。幹事心盡しの折詰と二合瓶を前にして、夜の更ける迄見物した。

二十二日　昨夜は枕に頭をつけると直に熟睡して、河鹿を聽く風流は持合せなかつた。食後秋田事務所の諸君に集まつて貰つて、會社の近狀を話す。そこへ下田氏が見えて、後三年役の古跡へ案内しようと云はれるので、久保澤平賀二氏も同道急行する。土地の歴史研究家大山順造氏を煩はし說明をして頂く事になつたが、此の大山氏は石坂氏の友人でもあり、又私の知る此地出身の人々をもよく承知して居られ、一見舊知の如き感があつた。清原一族の據つた金澤城址から、八幡太郎義家が雁の亂るゝを見て伏兵を豫知したといはれる沼のあたりを遙かに望み、感慨深きものがあつた。殘念な事には時間が無いので、大山氏の研究を十分に伺ふ暇もなく、横手に引返し、下田氏の御宅で夫人にも御目にかゝり、夫人迄も熱心に社業に盡力される事を知つて深く感謝した。

會員一同記念撮影をし、旗亭山田屋の大廣間で會議が開かれ、平賀さん久保澤さん私の順に挨拶をした。又有力なる會員の一人の方は、本店の內勤事務の不精怠慢を指摘して改善を促された。全員熱烈なる拍手を送られた處から考へると、他の代理店の方々も同樣の苦情を持つて居られる

に違ひ無いから、これをいゝ機會として自戒し、又內勤諸君の反省を求め度い。

一、一事項に付二度三度手紙を出しても返事が無い。止むを得ず取締役個人宛でその事を訴へると、やうやく返事が來る。

回答は速かなれ。

二、本店事務員の方に間違ひのあつた時、必ずうやむやのうちにごまかしてはつきりとあやまらない。

間違は止むを得ないが、間違つた時は間違へましたと正直であれ。

やがて宴會となり、囑託醫高橋山崎兩氏も列席、餘興も數々あり、御土産も頂戴し、萬歲を齊唱して散會した。

酒宴中に、石坂氏から使者が來て、大山氏から來横の事を知り、是非逢ひ度い、後刻宿の方へ行くと認めた名刺を屆けて來たので、宿へ引上るのを一寸廻道して訪問、僅に數分間對談したが、昨夕宿の對岸を、女の子と白犬をつれて步いてゐたのは、果して石坂氏であり、先方も遙かに私に似た人間がゐると思ひながら、遂に疑の儘で濟んでしまつたと云ふのだつた。

平源旅館の若旦那平田豐治氏は、凡十年前明治生命本店に勤務した事があるので、是非逢ひ度

いと思ひ、給仕の人にたづねてみたら、若旦那もあなたが御出になることを承知して居ましたと

いふので、心待にしたが、花火の客の忙しさの爲か、驛前の支店の方を支配してゐる關係か、遂

に顔を見る事も出來なかつた。皆さんに別れ、久保澤さんと二人花巻（はなまき）に向つて出立する。

薄暮温泉宿松雲閣に着く。此の地は温泉場とはいふものゝ、温泉が湧くのでは無く、もう少し

深く入つた山の方から引いてゐるのださうである。先年大阪毎日と東京日々新聞が、投票によつ

て日本の名勝を決した時、温泉地として第一位を獲得して以來有名になつたのだが、これは此地

方の電車會社の努力の結果ださうで、四軒の旅館も、その會社の經營である。温泉場としては、

何といつてもこしらへもので、自然の趣は深くないが、宿の設備はよく、靜で清潔である。前會

長藤田讓氏は、大層此地を好まれたときく。

二十三日　午前十時四分花巻發、零時三十四分仙臺着。支店に赴き、市內及附近事務所の諸君

に面會、會社の近狀、非常時局に於る業界の動向等に付所見を述べる。夜は市內有力代理店の方

々を精養軒に御招し、懇談する。

二十四日　午前八時三十五分仙臺發。車中頗る熱し。午後四時十五分上野着。

――「社報」昭和十二年九月號

横濱——前橋

一月二十四日　横濱支店優績社員會に參列の爲め、午後一時東京發。横濱支店は昨年度一千五百萬圓の責任を果した優績店であるが、その數字の大半を擧げた殊勳者の集りで、飛躍の氣勢は濃厚である。店長室に入つて行くと、直ぐに馬越副長から、會社は何故今年度の各店責任額を、もつと重くしなかつたのかといふ詰問が出た。十分の確信を持たなければ云へない言葉である。傍で聽いてゐる野老支店長も頗る御機嫌だ。二階の集會室で、私の外野擔當第一年の挨拶をし、新記錄記念塔の授與式を行ひ、屋上で撮影し、私は中座して歸京した。先日來の風邪で、微熱があり、大聲で挨拶をしたので咳が止度なく出て來た。

一月二十六日　近縣營業部の事務所の中でも、最も元氣よく、統制正しく、實績亦優良なる兩毛事務所が、新年宴會を開くから來いといふので、稻田部長といつしよに、午前十時五分上野を

立つ。兩毛事務所は昨年度參百參拾萬の成績を擧げ、給料倍數二百倍、一人平均一ヶ月成績七千五百圓といふ頑張方だ。三十餘人の所員全部が、中島所長の取立てゞ、直接訓育をうけた人ばかりだから、意氣の合ふといふのを特徴とする。好晴で、山々の頂もくつきりと美しい線を描いてゐるが、嬶天下と空ッ風といふ名物は昔から變りが無いと見え、雜木や枯草は荒々しく吹かれてゐる。零時四十分前橋着。もとは絲屋の住居だつたといふ事務所兼所長宅は、土藏が三ッあるといふ豪勢なもので、中島所長の風格を表徴するものである。廣い二階で所員諸君と共に晝食の後、會社の現狀から昭和十三年度の飛躍計畫に付共鳴を求め、所員諸君は何れも今月の誓約額を名刺に認めて本店への土産にくれた。事務所の前で記念撮影をし、宴會場岡源に赴く。途中當地の代理店高橋駒次郎氏の御宅を訪問した。高橋さんは代理店御引受以來二十五年といふ、會社とは切つても切れない仲で、會社の經營方針に就ても屢々貴重なる御意見を提出され、又多年の間入れ替り立ち替る社員の面倒を見られ、更に新しい代理店の方々に對しては明治生命の本質、代理店の責務を說き、常に此の地方の長老代理店として指導役を引受けて居られるのである。殊に先年掠奪募集の總本山ともいふ可き××××が、各地に於て同業道德を踏躙り、惡業を重ねた時、群馬地方各社代理店を代表して上京、商工省並に生命保險會社協會(時の協會理事長は矢野恒太氏)

を歴訪、正義の爲にたゝかはれた事もあつた。

會場岡源では、先づ中島所長の挨拶に次で、私が會社近年の動向と、本年度は全社員に對し愛社精神總動員を以て呼びかけ、躍進を期する旨を述べ、稲田部長更に之を裏書し、來賓總代として桐生の書上氏祝辭を述べられ、直に盛んなる宴會となつた。二十餘の代理店主、三十餘人の會社側、一齊に乾杯し、舞臺ではかくし藝續出し、福引が行はれた。私の引當てたのは「生命保險の廣告」といふので鱈一尾、こゝろは「勸誘(肝油)がきく」であつた。中島所長はやる時は立派にやるといふ主義で、この宴會はまことに堂々たるものであつた。席上總社代理店都丸誠太郎氏は自作の唱歌を發表された。

一

取つて來るぞと勇ましく
誓つて家を出たからは
契約取らずに歸られよか
友の成績聞くたびに
まぶたに浮ぶ我がかひな

二

土も草木も火ともゆる
あてなき家を訪ねつゝ
勸める保險は大明治
うまく行かない其時は
あゝ此の苦勞誰か知る

三

たまに身體を休めんと
しばし假寢のひぢ枕
夢にうかびし部長さん
しつかりやれよと勵まされ
醒めて嬉しや豫定あり

四

想へば今日の勸誘に

家内揃つてにつこりと
笑つて加入つたあの人に
御苦勞樣と送られた
あの一聲が忘られよか

五

保險勸誘かねてより
至難は覺悟で居るものを
泣いて呉れるな山鳥
保險報國の爲めならば
何の苦勞と思ふべき

盛んに、賑かに、しかも遂に亂に及ばず、目出度散會し、稻田さんは所員諸君がつかまへて放さないらしいので、私だけ、歸京。歸宅したのは十二時近かつた。

——「社報」昭和十三年二月號

福岡——伊豆山

一

三月五日　午後三時東京發。濱松驛で、福岡支店からの電報を受取る。「歡迎氣運高潮シ一〇〇マンニトドクミコミ」

六日　下關には小柳榮次郎氏が出てゐてくれた。全國に知られた此の鬪將も、長い間健康勝れず、不運を歎いてゐたが、今年は所長を辭し、靜養旁々單獨の活躍を計畫してゐる。元氣囘復と共に、往年の優績を再び示す事であらう。

小倉驛から大分の上田所長が乘車した。締切成績は如何でしたと聞くと、どうも殘念でした、責任額の倍やらうと思ひましたが、二十萬で止りましたと、寡言の英雄は無表情に答へた。責任額十一萬のところで、二十萬やつたといふのだから驚く可き成績だ。それを何の感動も現はさず、冷然と答へたところに、上田氏の誇はある。まさに音無しの構へで、お面をとられた形である。

午前十一時四十三分博多着。直に一方亭に赴き、市内並に附近の有力なる代理店の方々數氏と會食する。席上横大路善四郎氏の輕妙なる卽興保險仁輪加があつた。

支店に行くと、各地から所長が集つて來てゐて、概算壹百五萬だといふ。今年こそは、常時壹百萬を缺かすまいと一同誓言する。樓上集會室に集まり、店長その他の挨拶あり、私も今年から外野擔當を命ぜられた挨拶と、鬪爭の目標を提示して協力を賴んだ。大九州の大半を有する福岡支店が、多年不振の狀態を脫せず、參拾萬倶樂部入部者として、僅かに辻猪太郞氏を出したばかりとは、まことになさけない。幸に一二月共氣勢大にあがり、實績も亦躍進したのだから、昭和十三年明治生命飛躍の年にこそ、面目を一新すべきであらう。

博多ホテルの晚餐會には、優績社員の顏が揃つたが、その中に婦人鬪士數氏を見たのは一新傾向である。殊に先年來次第に成績向上を示して來た村上夫人は、今年こそ參拾萬倶樂部に入つて加藤渡邊石原の三花形に對面しようと努力し、旣に成算ありとの噂で、大坪支店長は、若し此の席に在る勇士にして、村上夫人に先んじて第十回參拾萬倶樂部に入部するならば、金壹封を呈上すると宣言した。それ程夫人の實力は高く評價されてゐるのである。しかし大坪さんの宣言はあまりに一方的だから、私は口をはさんで、萬一誰も破る者の無かつた場合、村上夫人に對しては

何を以て酬ゐるのかとたづねたところ、それはあなたから金壹封を呈上して下さいと、支店長はこちらに負擔させてしまつた。かくなる上は、私も否とはいへないが、乞ふ福岡支店の諸勇士、奮起して男兒の意氣を示せ。

宴終つてから、今回勇退される石田盛太郎氏の爲に、有志十數氏と共に席を改めて送別會を催した。石田氏は二十八年間福岡支店の外野第一線に活躍し、最近は直方事務所長として、新人の育成に努力された功勞者である。何時迄も興盡きず、更に所長諸君が私を案内して、三度席をあらためる事になつた。

七日　支店長副長醫長所長諸氏と共に筥崎神宮に參拜し、おはらひをうけ、神酒を頂戴して、支店に引上ると、金澤支店の坂本さんから電話で、今月も第一位確實です、壹百六拾六萬ですと、威勢のいゝ聲で報告が來た。締切事務に忙殺されてゐる諸君も前支店長の喜びを傳へ聞いて、共に悅ぶ。子女の學校の關係で未だ福岡に居られる坂本夫人にも、此喜びを傳へる事にする。間もなく電報が來た。「概算一六六マンワレニカンゲキノ涙アリ坂本。」つゞいて本店から、總計二千四百七十九萬九千圓也といふ知らせが來た。今月も亦いゝぞと、一同大に祝福し合ふ。

各店からの電報にまじつて、本店の三木英二氏からのもあつた。「オカゲサマデ一センマンエン

達成イタシマシタゴベンタツヲカンシヤイタシマス。」入社以來の成績壹千萬圓に及んだといふ知らせである。「一千萬達成の偉業敬服千萬」と祝辭を送つた。

零時三十七分發の列車で、店長副長所長諸氏と共に熊本に向ふ。車中大坪さんと伊藤さんから、行く先々で酒を呑み過るな、夜更しをするなと意見されて、甚だくすぐつたく思ひ、あなた達と別れゝば呑み過る事もないし、夜更しもしないと答へる。

熊本事務所は先頃所長交迭し、堀新所長は明るい事務所で、輝く將來の企畫に緊張してゐる。今日は此の事務所だけでなく、大牟田大分の優績者も合同し、夫々感想を述べ、飛躍の誓をなし、會社の萬歳を齊唱した。夜は當地方の有力なる代理店の方々を繒津華壇に御招して、お客側からも内輪からもかくし藝の持主があらはれ、恰も競演の態であつた。此の料亭は細川家の下屋敷だつたといふ事で、水前寺から繒津湖へ流れる水のほとりにあつて、その水を利用した庭は、極めて美しいものであつた。殊に池の向ふの庭の盡きるあたりは、一面の芭蕉で、その根がたを廻つて、ひたひたの水の漂ふ風情は、造園藝術としても大膽で、深き野趣に富むものだと思つた。お客様の中の河島西村兩氏は、本店の岩下茂數氏の親友で、私とも同窓の關係から、二次會の御招をうけ、手厚いおもてなしにあづかつた。

旅館研屋(ときや)本店には、今晩同席の諸所長も同宿で、私は大坪さんの忠告を守つて十二時前に床に就いたが、枕の眞下で議論か喧嘩かと思はれるやうな話聲と、時々起る笑聲が爆發し、なかなか寢つかれない。我が親切なる忠告者を中心にして、元氣のいゝ所長諸氏が、午前三時頃迄氣焔をあげつゞけたのである。

八日　諸君と別れ、零時五十一分鹿兒島行に乘る。薄曇の窓の外は存外寒むさうに見え、沿道には出征者を標示する國旗を高く掲げた家が多い。神社の緣に男女の年寄が集り、膝まづいてゐるのも見受けたが、戰勝祈願と家族の無事を倂せて希ふものと思はれた。四時五十五分驛に着くと、出迎へてくれた重松さんは、豫定を變更して、今日は霧島溫泉で休息して貰ふ事にしたといひ、藤原池添兩氏と共に自動車で、山の上の目的地へ案内してくれた。十里餘の谷間の道を走る兩側には、梅が咲き山櫻が咲き、所々に瀑布を見る。新設滿一年の支部は、五十七萬二千圓の成績を擧げて、支店の新記錄を更新したといふので、風景を稱するよりも、募集向上策を談ずる方が忙しい。薄暮溫泉場に着き、浴後食膳にむかつても、話は勢づくばかりであつた。

九日　曉の山上は稍寒かつたが、遙かに櫻島を眺め、湯煙(ゆけむり)のみなぎる谷に鶯を聽き、國立公園の僅かなる一部にも、春のおとづれを觸感する。霧島神宮に參拜し、神宮驛で鹿兒島から宮崎へ

向ふ汽車を迎へ、優績代理店並優績社員大會の一行と合流する。零時二十五分大淀着、宮崎方面の人達を加へ、遊覽バスで宮崎神宮、鵜戸神宮、青島を廻る。去年來た時のバスの案内人須賀原嬢も出迎へてくれ、今日自分は差支があつて同行出來ないが、妹利子が代つて案内するといひ、紹介する。妹さんも姉さんに劣らぬシャンなので、車中の人氣は素晴しい。折惡く春雨が降出したが、神の國美の國とうたはれ、神話とお伽噺を生みはぐゝんだ山と海の眺は見飽きない。

鵜戸神宮の社前は、太平洋の怒濤が、白く碎ける岩壁であるが、その波しぶきに濡れて立つ大岩の上に、ちひさな凹みがあり、それに物を投げて入れゝば、目的を達する事が出來るといひ傳へる。小石を投げ、小錢を投げる人もあつたが、相當の距離があるので、なかなか入らない。ところが薩南最初の參拾萬倶樂部員俣江善藏氏は、たつた一度で、美事に小錢を投込んだ。人の意氣最も旺なる時は、神もこゝろよく御力を添へられるのであらう。俣江君は、今や爲さんとして成らざる事なしといふ運勢を背負つてゐるやうだ。

青島の廣瀨別館に宿泊の事となつたが、昨年宮崎市の本店に泊つた時世話になつた老婢おしづさんも手傳ひに來てゐて、相變らずがらがらした調子で、惡口を連發する。何處に行つてもいはれる事だが、私の白髮の激増には驚いてゐた。

宴會は賑かなもので、藝づくしがはじまり、しまひには御主人の代りに令嬢を伴つて同行された三股（みまた）代理店高橋直知氏夫人も、美聲を張上げて追分をうたはれた。

十日　宿の前の砂濱で、靑島を背景に記念撮影をし、宮崎から迎ひに來た昨日のバスに乘り、再び須賀原利子孃の案內で、復路を走る。發車迄に少々時間があつたので、私と支部長は、宮崎代理店大崎敬方氏及鹿兒島代理店湯地定敏氏主宰の第百四十七銀行支店に御挨拶に行く。宮崎バスのサアヴイスは何處迄も行屆き、須賀原孃は驛の步廊迄見送りに來て、車中のいたづら者を悅喜させる。名刺をねだる者もある。サインを求める者もある。手を振り、手巾（ハンケチ）を振つて別れた。

二時、鹿兒島着。湯地氏を訪問し、引つゞき山形屋百貨店樓上で行はれる社員會にて外野擔當の挨拶をし、別室で食事を共にし、各員の意見を聽く。更に二月の優績所長並に社員諸君と席をあらためて歡談を盡くす。岩崎谷莊に宿泊。

十一日　麑城代理店池畑德藏氏を訪問し、八時十分鹿兒島に別れる。鳥栖（とす）で大坪鷹野兩氏とおち合ふ。大坪さんは前任地の貳拾萬倶樂部大會に招かれて行くのだ。はじめて支店生活をする鷹野さんは、成績もあがる爲か、非常に愉快らしい。赴任以來市內の名所見物もせず、直に代理店訪問につとめ、既に九分九厘迄出張を濟ませたといふ勉強ぶりだ。二月概算成績百六萬で、勿論

月別記新錄に相違無い。午後八時二分長崎着。上野屋に投宿。

十二日ノ朝、茂木代理店濱崎節男氏の來訪を受く。晝、特約店澤山市松氏と縣立圖書館長增田廉吉氏を迎陽亭に招く。會社支店に行くと鹿兒島から電報が來てゐた。「決議、本月六〇マンゼツタイ完成ヲ期ス、斷ジテ御期待ニソムカズ、鹿兒島支部所長主任會議」

今度長崎に來て甚だ心寂しく感じたのは、昨年末當支店きつての優績者陣内豐一氏を失ひ、近くは支店の大久保彦左衞門と稱された硬骨立川政雄氏を失つた事である。立川氏が重態だと聞いたのは、三月三日の事で、私は直に御見舞の電報を打つた。「春來リ花咲カントス、御キゲンイカガ御見舞申ス。」すると四日の朝「輸血二回頑張ツテ勝ツ」といふ返電があつた。ところが、私の東京を立つた五日には、既に頑固極まりなき魂も、此の世を去つてしまつたのである。東京の留守から鹿兒島支部へ廻送して來た電報で、その事を知つたのは昨日であつた。五厘刈といふのか一厘刈といふのか、剃つたやうな凸凹の頭、固く結んだ口を開くと、勵聲叱咤した姿は、貳拾萬倶樂部には無くてならないものであつたが、今は無いのである。

大會は松岡會長の指揮の下に、嚴肅に行はれた。松岡さんの偉さは、年每に加はり、氏の風格は次第に大きく、深くなつて行くやうである。大坪さんは松岡會長を福岡支店に招待して、支店

の外野人に接觸させ度い、必ずや精神的影響を感得するであらうと云つてゐたが、同感だ。新舊店長の挨拶、私の挨拶、貳拾萬倶樂部諸君の感想談があり、勇氣と思慮と機智に滿ちたこの感想談は、全く傾聽に値するものであつた。

會後、別室で座談會を開き、募集經驗の豐富な小副川副長の巧妙なる誘導の下に、各人の經驗談が語られ、非常に面白かつた。

富貴樓の宴會は六十人といふ大一座で、長崎支店の特色である、精練されたかくし藝が、賑かにしかし行儀のよい酒席を、あかるく、朗かにする。お醫者さん達は憎らしい程の藝人揃ひ、内勤の總踊、倶樂部員諸君ももとよりひけはとらない。その一座の眞中で、全くの無藝と思はれてゐた鷹野さんがいつ果てるともしれないダンスをやつてゐる。五尺八寸の長身、首をふり腰をふり、本人は正に無我の境に入つてゐるらしいが、その下手さ加減は筆舌のつくす所でない。

十三日　鷹野大坪兩氏と共に佐賀へ赴く。大坪さんは汽車が佐賀驛へ着く迄、下車する氣はなく、私共もさよならを云つて下車したが、出迎の杢尾所長に勸誘され、俄に氣が變り、あわてゝ鞄をかゝへて飛出して來た。事務所の二階で全所員と對面、昭和十三年度躍進精神總動員に共鳴を求め、料亭に於て食事を共にし、五時七分發、鷹野さん大坪さんに送られ、八時半下關を出る

と直ぐに寢臺に入る。流石に疲れた。

十四日　午後三時二十五分東京着。出迎へた子供達は、又明日の朝立つて暫く歸宅しないと聞き、泣出しさうな顏をして、つまんないの、つまんないのと繰返してゐた。

十五日　九時十分上野發。近縣營業部貳拾萬倶樂部大會が、水上温泉で催されるので、事務擔當の人達や、倶樂部員諸君と同行だ。稻田部長は出張先前橋から先行した筈だといふ。途中の驛から乘る人もあり、段々賑かになる。零時二十四分着。自動車は雪の中を走る。しかし天氣は晴朗だ。つい二三日前、九州路では櫻が咲いてゐたのに、こゝは積雪が消えず、附近の斜面で滑つてゐるスキイ客もある。長い旅行をつゞけてゐると、日曜も祭日も忘れ、氣候も滅茶々々に寒暖入りまじり、春だか冬だかわからない感じだ。

神峽樓といふ宿の座敷には火燵があり、窓をあけると四方の山々は眞白だ。火燵にあたりながら、部長所長と雜談する。近縣は概算百四十萬で、二月の新記錄だ。若くて元氣のいゝ貳拾萬倶樂部諸君の活躍がものを言ふのである。

廣い宴會場にお膳が並び、一同着席すると、稻田部長は、先づ元氣よく飲み唄ひ、儀式は一切明日の事だといふ挨拶をし、萬歲を三唱し、乾盃した。兎角種々の集會が、固苦しい形式に捉は

れ勝で、且だらだらと時間を浪費する傾向のあるのに氣附き、先づ愉快に明朗にうたはふといふのは、稲田さんの味である。貳拾萬にちなむ大小二重の盃を、右から左から夫々一巡させ、大は會長石井保善氏の手に、小は副會長島村祐太郎氏の手に、納められた。何しろ萬能部長を頂く近縣勇士の面々だから、黑澤格爾氏の新內のくろつぽいのから、今宮所長の東北辯の切られ與三、民謠小唄は申すに及ばず、から手の型迄あらはれたが、所員こぞつての大趣向は、派手好みの中島所長率ゐる所の兩毛事務所で、前橋から引率して來た國防婦人を加へ、一同揃ひの明治生命のマアクを白抜きにした赤前垂、手には日の丸の國旗と日の丸の扇を持ち、二月號社報で御紹介した總社代理店都丸誠太郎氏作詞「取つて來るぞと勇しく」の總踊で、又しても遺憾なく中島式戰法を發揮した。

十六日　朝食後、俱樂部大會は開かれた。部長と私との挨拶、石井會長以下諸君の力強い宣言、募集祕法の公開等、短時間に效果をあげ、高村群太郎氏の發言で、三月特別責任額百九十萬の內百萬は、貳拾萬俱樂部員が引受けようと決議し、各人誓約書を認めて、私に手交された。これを事務所別にすると、兩毛七人で三十萬、浦和五人で二十二萬、熊谷五人で二十萬、千葉四人で十七萬、宇都宮二人で八萬、茨城一人で三萬、合計二十四人で壹百萬圓といふ張切りかたである。

續いて、近く勇退せられる佐久間於菟彦氏の多年の功勞に對し、一同感謝と稱讚の言葉を呈し、拍手を以て散會した。

稻田さんと私は、零時半出立新潟に向ふ。水上驛を發して間もなく、神峽樓の見える所に來ると、樓上に倶樂部員諸君が小旗を振つてゐるのが望まれた。清水トンネルを過ると、雪は愈々深く、快晴の日光を反射して眼が痛む。途中、木村四郎氏が乘込み、たつた今此の雪の中で、二件診査を濟ませて來たと、元氣がよい。長岡驛には齋藤所長と村越氏と新に外野に轉じた鷲尾英治氏が出て來て、鷲尾さんは先づ第一ヶ月に十三萬位はゆく見込だといふ。

新潟近くなると雪はなく、割合に暖い。四時十分着。直に伊太利軒に赴き、事務所の諸君と會食する。席に、出征負傷の爲め仙臺の病院で療養中の鈴木春二氏が、傷兵服で居られた。共に出征した武内武次氏は不幸にして戰死し、鈴木氏は脚部に貫通銃瘡をうけたが、命を全くした。此の社員會の爲に、特に許可を得て歸郷されたので、私共は氏の無事を祝し、實戰談を聽く。

社員會が終つてから、附近有力代理店の方々を鍋茶屋に御招して御高話を拜聽した。鍋茶屋に來て、ゆくりなくも思ひ出したのは故安東德男氏で、氏は此の家の若い女将を日本一の美人だと激稱して居られた。乍遺憾(おかんながら)その美人を、しみじみ拜む幸運に惠まれなかつた。

十七日　午前九時新潟發。信越貳拾萬倶樂部大會出席の諸君と共に柏崎へゆく。柏崎代理店吉田正太郎氏は中學時代からの知合ひで、私としては會社以外のつきあひと云つていゝのである。出迎をうけ、その儘氏の御宅へ伺ひ、書齋に通される。黒船趣味の面白いものが澤山ある。それよりも私は、地方色の強い家屋の構造に興味を持つた。お座敷や臺所を拝見させて貰ひ度かつたが、遠慮してしまつた。吉田さんを誘ひ、今日の大會の會場で、且吾々の宿である天京莊で晝食する。それから、吉田さんに案内を賴み、明治大帝北越御巡遊の際の御野立所や、番神岬を見物する。裏日本の色彩の鈍い海、はげしい自然に壓迫された樹や草の姿を見てゐると、侘しい忍從の外には心が働かなくなりさうに思はれるが、しかも越後人の底力は、屈せず倦まず、働きつゞける。東海道や山陽道の海山は、そこに住む者を懷に抱くやうな柔い姿だが、こちらの風景は、自然と人との永久の鬪爭を象徵するものゝやうである。三階節の歌詞にも節にも、浮世を投捨てたやうな心持のあらはれてゐるのも故なき事ではない。

大會は、近縣同樣縕袍の慰勞宴にはじまつた。二重盃はこゝでも飲み廻され、大は村越會長に、小は佐藤副會長の手に納まつた。私の直感したところによると、宴會にも土地の氣風は濃厚にあらはれるもので、上州の氣の早い連中は最初から沸騰し、信越は俄に發する事なく、じつくりと

脂が乘つて來て、次第々々に高潮に達するやうである。

各人夫々かくし藝の外に、稻田部長直傳の祕藝競演は、全員かはりがはり持味を出して、いつ迄つゞくかわからない。恐らく曉に及ぶのではないかと疑はれるので、十二時頃、ひそかに席を逃れて眠る。

十八日　朝食後型の如く大會は開かれた。部員諸氏交々研究談を發表した。突然村越會長の發議で、三月は部員の一騎打をやらうといふ事になり、私と部長から賞を懸る事になつた。村越君對木村君、佐藤君對今井君、梅津君對下川君、金澤君對森山君、柳澤君對相良君、小川君對遠藤君の勝負だ。選手は互に握手してフエア・プレイを誓ひ、興奮の最高頂で散會した。零時三十九分、私は高田松本方面の諸君と共に出立し、途中別れて金澤支店管內に入る。途中迄出迎の坂本支店長大橋所長いづれも連月制覇の鼻息荒く、理想は高く、希望は大きい。四時四十一分富山着。代理店天谷伊佐太郎氏社員村元千代子さんその他の出迎をうけたが、村元さんは人も知る參拾萬倶樂部の常連だつたのに、近年健康を害し、靜養につとめて居られ、大會席上その姿を見ないのは寂しい。だが、次第に元氣になり、今に働きますといふ賴母しさだから、やがて又此の名花を迎へる日も來るであらう。自愛を祈つて別れた。事務所で所員諸君に一場の挨拶をし、新設の電

氣ビル・ホテルの食堂で會食する。席上、高岡事務所を破り、高岡古城公園で花見をしようといふ物凄い決議が行はれた。

富山事務所は昭和七年三月開設され、當時の人員は主任を加へて七名、代理店數十四に過ぎなかつたが、今や三十三人の鬪士を蓄へ、五十一の代理店網を張り、共間一千五百四十七萬の成績を擧げ、大橋所長の努力は美事に實を結んだ。全國に誇る有力なる事務所である。會が終つてから、店長と私とで、大橋所長が今日迄の苦心の述懷を聽いた。

十九日　わざわざ毛利所長が來てくれて、共々自動車で高岡へ行く。正午高岡ホテルに於て事務所新記錄樹立祝賀會が開かれ、代理店の方々も多く出席された。席上、富山事務所の昨夜の決議を披露したところ、高岡勢もいきりたち、然らば此の三月も亦打勝つて、富山に於て花見をしようといひ出した。いづれが勝つか、二大事務所の對抗は、三度金澤支店の優勝をもたらすのではあるまいか。

つゞいて射水代理店百萬達成祝賀會が、木津樓に於て催された。同店扱大口契約者を主賓とし、吾々も手厚い御馳走にあづかり、お土産まで頂戴した。店主浦島理八郎氏は令息と共に接待につとめ、今日に至る迄の苦心を語り、私共も十分歡を盡して辭去し、金澤に向ふ。この日は新副長

早川郁三郎氏も同席したが、赴任と同時に支店制覇の喜びにあつたので、たゞさへ元氣のいゝのが、愈々勢を加へ、毛利大橋氏家の巨頭連と共に氣焰萬丈である。

二十日　古今亭の眺望は絕佳だ。市の中央に位する公園の森を眞正面に見、手近には川原の石を嚙む犀川の急流があり、遠くは雪を頂く連山を望む。大都市として、京都以外には比較すべきものを知らない。

店長、氏家所長、山岸常太郎氏と同行、紙中島森八兩代理店を訪問する。午後三時、支店樓上に於て貳拾萬倶樂部大會が開かれ、會長上關勝氏副會長山岸常太郎氏以下夫々挨拶あり、終つて鍔甚の大懇親會に臨む。總勢五十餘人、會社のマアク入の小旗を天井にかけ渡し、正面の舞臺には勇士が入りかはり立ちかはり現はれて、思ふ存分踊りまくり、うたひまくる。氏家所長作詞「明生外野行進曲」を御披露しよう。

一

やつて來るぞと勇ましく
誓つて家を出たからは
手柄たてずに歸られよか

やれよの聲をきく度に
瞼に浮ぶ倶樂部員

二

君僕共に火と燃ゆる
果てなき地盤を踏みわけて
進む吾等の鐵ごゝろ
所長の心汲み取りて
明日の成績誰か知る

三

ペンや鞄を持つ手には
きつとやるぞの誓約を
夢にも忘れぬ店長に
やつてこいよと勵まされ
さめて睨むは見込客

四

思へば今日の奮闘に
成績とつてにつこりと
笑つて戻る代理店
明治生命萬歳と
叫ぶ凱歌が忘られよか

五

外野する身はかねてから
人類愛の使徒として
日夜いそしむわがつとめ
社會平和の爲めならば
何んのこの身が惜しからう

この晩も亦所長諸君におよばれして、別宴に顏を出す。

二十一日　山中(やまなか)溫泉で催される優績代理店招待會に出席の爲め、店長所長及參拾萬倶樂部の諸

氏と共に立つ。二十二店の方々を上座に、會社側も凡同人數で、旅館よしのやの廣間いつぱいに並ぶ。店長と私とが挨拶を述べ、お客側は富山代理店天谷氏が代表して答辭を述べられ、高岡代理店室坂庄三氏が萬歳の音頭をとつて一同乾盃した。代理店の方々もかくし藝を披露され、會社側もこれに劣らじと熱演した。

二十二日　朝食後隨意散會し、私は店長副長醫長氏家所長と、動橋代理店百萬達成祝賀會に招かれてゆく。店主蔦江玉吉氏の御案內で、實盛塚や首洗池を見物し、會場片山津よしのやにつく。潟に臨む溫泉場で、小雨に煙る水面に何の小魚かしきりに群り泳ぐ。山中の山と溪流も美しいが、此の地の風景も變つた趣で非常によい。最初蔦江氏の御考では、夜宴の筈であつたが、私の時間の勝手で晝間にして頂いたのは、お客さまにも迷惑を及ぼし、諸事勝手違ひで申譯無い事であつた。動橋代理店三十年の辛苦は、今日の喜びに到達したのであるが、店主の人格の自然の結果か、契約の質はよく、解約少なく、早期死亡も亦少ない。まことに手堅い壹百萬圓である。大口契約者三十人に店主の一族の方々並に吾々の加つた一座で、極めて叮重な御接待であつた。殘念な事には時間乏しく、吾々は中座の非禮を敢てしなければならなかつた。

金澤で急行を待つ時間があり、金茶寮といふ家で食事をしたが、これでつとめを果したと思

ふと、俄に疲勞を感じて來た。三月五日から今日迄、忙しい日程で西に北に廻り歩き、晝も夜も酒席で多數の方々に逢ひ、かなり無理をして來たが、緊張してゐればこそ堪へ得るので、これは決して健全な生活では無い。外野擔當を命ぜられ、恐らく今年は此の調子で一年中押通すのだらうが、若し此のやり口を數年つゞけるならば、私は殘り少ない壽命を、更に縮める事になるであらう。それにつけても、速かに明治生命躍進の實をあげ、吾々の目的と使命を果たし度いものである。

七時十五分金澤發。高岡、富山の驛では夫々事務所の人達が來て居て、いづれも奮勵を誓つてくれた。寢臺は上段だつたが、下段に三歲か四歲位の子を抱いた婦人が居て、この子供が何かに脅えたやうに泣き、流石圖太く熟睡する私も、終夜惱まされてしまつた。

二十三日　午前七時上野着。

二

二十六日　午後二時十分東京發。週末列車は滿員だ。

橫濱支店主催の優績代理店招待會の接待御手傳に出向くのである。五日から二十三日迄旅行をしつゞけ、歸つて來ると連夜宴會があり、病母の見舞にも行けず、休息も十分で無い。甚だ不甲

斐無い話だが、この土曜と日曜は樂々と手足を延ばし度かつた。しかし、今や大躍進を實現せんとする會社にとつて、最も力強い四十五店の方々に御目にかゝり、今年の計畫に協力を求める機會が與へられるのだから、奮發せざるを得ない。首筋を自分で揉んだり、兩腕に力瘤を入れてみたり、肉體の凝をのぞき、ウヰスキイを傾けて出かけて來たのだ。自分は悲壯な出張のつもりだが、窓外は長閑な春だ。沿線の草の緑は萌え、野川や水溜には釣をしてゐる人が並んでゐる。海も靜に、伊豆の山々には櫻が咲いてゐる。

伊豆山は正に三十年ぶりだ。海岸は護岸工事が完成して廣くなり、立派な宿屋が並んでゐる。道路がよく、急坂を自動車が下る。千人風呂の相模屋が會場で、先着の支店の人達が待つてゐた。間もなく御客樣も揃はれたので、宴會場に集合、支店長開會の挨拶を述べ、私も本年度の會社の目標を揭げて協力を乞ひ、來賓を代表して沼津代理店の杉山氏の答辭あり、記念撮影の後、隨意入浴休息といふ事で、割當てられた室に戻つたが、旅の疲は愈々深く、背骨の痛むやうな感じもするので、その儘横になると、平生晝寢をしないのが、忽ち睡に落ちてしまつた。約束時間、起されて湯に入り、直に宴席につらなる。店長副長醫長所長優績社員諸君を加へて總計六十餘人、餘興は義勇兵もあれば徴兵もある。思ひ出すのは、つい先日、宮崎縣青島で行はれた鹿兒島支部

の會の時、鹿兒島代理店の事務を擔當される迫田釜次郎氏が、明治生命の宴會は實に徹底的にやりますねえといはれたので、吾々の仕事は辛く、平生非常な努力をしてゐるので、慰勞の宴には、亂に及ばざる限り大に飲み、大にうたふ事にしてゐますと答へたところ、それは非常によい、それに限ると、大にほめて下さつた。今晩も會社の勇士は、大に飲み大にうたつた。代理店の方々も之を咎めず、共に愉快におすごし下さつたのは有難い。

二十七日　朝食後隨意散會。私は汽車の時間迄海を眺めてゐようと思ひ、自室に戻ると、平塚事務所の本田恒亮氏笹尾彦三氏伊藤清一氏があらたまつた樣子で來られ、書面を差出すので、これは何か面白くない事でも起つたのでは無いかと、不安に思ひながら開いて見ると、招待狀だ。

我等の總帥阿部さんを迎へ、我が平塚の同志は益々勇躍聖戰に從事してゐます我々は此の上半期を總帥の歡迎募集期として阿部賞必受を期し更に輝く戰績を樹立し以て來る七月その披露自祝の集を我等の戰場を貫流する相模河上に催し半歲の戰塵を洗ひ更に新なる聖戰への英氣を養ひ度い考でありますに阿部さんの御臨席を得れば欣び之に過ぎるものがないと信じ茲に今より御招待申上る次第であります。

伊藤さんは山狩川狩、いづれも腕に覺えがあるのださうだ。大層難有い御招だから喜んで御受

した。

十時五分、支店長副長醫長といつしよに出立、諸君は橫濱で下車し、一人になると、不覺にも居眠を追拂ふ事が出來なかつた。

——「社報」昭和十三年四月號

名古屋——佐渡

一

四月十二日　八日九日の兩日催された卅萬倶樂部大會の面々が夫々受持地區へ引揚て行くと、又私の出張旅行ははじまつた。一時三十分東京發、麥は青々と伸び、菜の花は光りかゞやき、散り遅れた櫻は新綠の中に寂しく白けてゐる。しばらく雑誌を讀んでみたが、疲れてゐて、氣力が續かない。ぼんやりと窓外の景色を見る。

七時、名古屋着。新築完成した驛は今正に日本一だ。店長副長その他の諸氏に迎へられ、芳蘭亭に赴く。契約の激增で多忙を極める醫長內勤の諸氏を招待し、會食する。內勤山田君はアコオデイオンの名手で、同君を中心に餘興競演があつた。觀光ホテルに泊る。

十三日　今日は優績代理店會で、店長副長醫長並に世話役彥坂君と共に、八時出立、宇治山田

へ向ふ。二三代理店の方も同車された。四日市から代理店山中傳四郎氏が乘込まれ、車中大に賑はふ。關店長は、今晩の宿屋の世話迄山中さんにお賴みしたといふので、吾々はいゝ氣になり、宴會の不行屆もすべて山中さんの責任といふ事にしようと申合せる。宇治山田驛前宇仁館が集合場所で、各地の代理店の方々が次第に到着され、總勢凡五十人、大神宮に參詣する。外宮參道で、私が大阪支店在勤當時の馴染の女性に出會、二十年振の對面なのでなつかしく、立話しがつい長くなり、大に人目を引き、物議を釀し、密偵が對話を立聽きするといふ場面を展開した。遺憾ながら相手は私より年上のお婆さんで、梅田の驛近くの飲屋のおかみさんだ。

內宮に參拜、皇軍武運長久祈願特別太々神樂を奉納し、宇治橋で記念撮影、自動車で朝熊山に登り、遙かに伊勢の海を見る。山々の杉木立にまじる雜木の新芽の美しさ、又その山々の曲線の柔かさは、流石に神代ながらの伊勢の國で、東國の荒々しい景色とは趣が違ふ。

山中さん御聲がかりの二見館は、明治三十四五年頃、大阪に博覽會のあつた時、中學下級生の私が從兄と共に一泊した宿だ。最近立派に改築し、今では中學生の宿には不向らしく見えるが、女學生や小學生の團體も泊つてゐた。降るかと氣づかはれた雨も降らず、海は靜に波を打寄せ、打寄せてゐる。

宴會の前に支店長と私とが挨拶を述べ、岡崎代理店早川久右衛門氏答辭を述べられた。餘興として近在の青年達の羯鼓踊(かつこと發音せず、かんこと稱してゐる)があつた。踊る者十人、うた六人、法螺貝を吹く者二人。踊る者は白と紺の縞の上着、白い洋袴、白足袋、腰簑をつけ、麻絲の一箇所を紅巾で結んだしやぐまと稱するものをかぶつて面をかくし、腰につけた長鼓を兩手の撥で叩き、環を描いて踊る。うたは別段意味のある文句では無いらしく、ヨーイヤサといふはやしことばの外は聽取れなかつた。木遣のひなびたものと思へば、大した間違ひは無い。いづれ南洋から渡來したものだらうといふ說もあるさうだ。代理店の方々のかくし藝に、會社側も負けじと競ひ立ち、夜の更ける迄歡を盡した。吾々の推薦せる宴會責任者山中さんは、宴會の好評に安心し、翌日は先考の二十三回忌に相當するといふ事で、四日市へ歸られた。

十四日　朝五時半に日出を拜むから早起しろといふ支店長のいひつけ通り、五時に目をさまし、緣の雨戶をあけ、椅子にかけて待つてゐたが、かんじんの店長は未だ起きない。やがて店長副長醫長の顏が揃つた時は、太陽は稍高く昇つてゐた。夫婦岩迄ゆく途中、完全に日出を拜んで歸つて來る方達に行きあふ。雷音を以て他人を惱まし、自分は十分熟睡した小池副長は負惜み強く、恰度いゝところだと嘯く。

八時五十二分二見發、鳥羽で志摩電鐵に乘替へ、御木本の眞珠で名高い賢島に行く。半島の風景頗る明媚、薄紫紅色の山躑躅の眞盛で、鶯がしきりに啼く。多德島は明治二十三年初めて眞珠養殖事業を開始したといふ記念の場所で、島の附近には筏を浮かべ、その下に鐵網の函を吊し、中に母貝が入れてある。吾々一行は御木本眞珠養殖場の大矢圓三郎氏の厚意で、島內を見物し、海女の作業を見せて頂いた。春とはいへ未だ寒い水中に、數人の海女が飛び込むのを、いたいたしく感じたが、本人達は存外平氣らしく、互に甲高い聲で呼び合ひ、嬉々として泳ぎ廻る。白い作業服、白布で頭髮を包み、顏面の大部分を覆ふ潛水眼鏡をかけ、採取物を入れる大きな桶と自分の體を綱で引き合ひ、もぐつて出て來ると呼吸を調節する爲に口笛を吹く。物の本には、海女の身の上を哀れにしるし、寄邊なき奴隷のやうに想像させるものもあるが、實は甲斐性のある女達のよい稼ぎで、男の方が養はれてゐる有樣ださうである。體格は壓倒されるばかりで、歌麿の繪のやうな艶めかしい風情はなく、極めて健康な美しさを見せてゐる。意外にも、あまり日燒けせず、色白のものが多い。妙齡から五十四五歲迄働き、丈夫で、朗かで、妊娠六七ケ月の身でも平氣で勞務に服し、安産此の上も無しとの事であつた。

晝食を認め、灣內を航行し、御座村に着き、金比羅山に登る。太平洋を望む雄大な展望で、汗

を流した甲斐はあつた。歸路、再び海女の潛水を見、獲物の蠑螺を皆さんの御土産にし、鳥羽に引返す。志摩遊覽については、磯部代理店作田久一氏父子に一方ならぬ御世話になつた。途中解散、夫々の方向に別れ、私共は名古屋に戻る。此の晩は寸樂といふ家で、所長諸氏と會食、いろいろ意見を聽く。席上津の小川所長起つて、先日大阪へ遠征し、上原さんにあつたが、その時の話では、四月は花見月でもあり、從來の成績も擧らないのだから、先づ二百十七萬の目標でやらうと思つてゐたところ、所長主任いづれも大反對で、極力奮闘するから、再び三百萬の目標で進撃し度いと云つてきかず、上原さんを引擦つて、大目標をうち建て、努力中である、我が名古屋も大阪と對抗して、打倒大阪三百萬必成で行かうではないかと提議し、滿場拍手を以て迎へた。

十五日　昨夜の大雨はおさまり、薄日がさしてゐる。七時五十四分發、湊町行に乘る。此の線で大阪へ行くのははじめてなので、つとめて沿道の樣子を見る。四日市から鈴木所長が乘車し、伊賀方面に仕事に行くといふ。これ幸ひと地方の狀況を聽く。鈴鹿近くは雨だつたが、河内に入ると又晴れた。上野あたりの白壁づくりの家々の風情は珍しく、此處にはきつと昔ながらの習俗習慣も殘つてゐるだらうと想像され、下車する鈴木さんを羨しく思つた。

十一時廿二分湊町着。京町堀事務所を訪問し、同じ建物の中にゐる友人で且特約店を引受てゐ

る岡田氏をたづね、商賣物の人絹の話を聽き、所謂ス・フの水に脆い事を實證して見せて貰ふ。

會社支店に立寄り、上原さんが今日の半日は休息の意味で隨意に行動してくれといふので、昨年娘の緣組の世話をしてあげた舊友の深江の家を訪問し、東京の新夫婦の睦ましさを報告し、第二第三の娘さん達の手料理で御馳走になる。旅館若栄に投宿。

十六日　午前十時支店樓上に社員大會を開く。多年不振の大阪支店が、今年こそは飛躍しようといふので、一齊に緊張し、殊に先日卅萬倶樂部大會に上京した人達は、大會の刺戟をその儘持歸つて、同志の奮起を促してゐる。三月の優績をまぐれあたりといはれないやうに、今月こそ頑張らうでは無いかと、期せずして全員の心は一致し、名古屋の小川所長の報告通り、その意氣は上原さんを驚かしたやうである。上原さんの挨拶、私の事變下に於る保險の再認識と我社今年の飛躍精神總動員に就ての感想、所長數氏社員十數氏のスピイチがあつて、いづれも內容豐富、確信に滿ち、他人に刺戟を與へる效果十分だつた。最後に戶田忠周氏が、東京に於る卅萬倶樂部大會の實況を、美文調で紹介したのは大喝采だつた。大會終了後私の發意で、百餘名いつしよに辨當を食べ、解散。

午後五時半南(みなみ)の吉兆といふ料亭で、所長幹部社員と會食。席に北の新地(しんち)松糸の女將あり、二十

年前私が大阪支店にゐた時、或る宴會の席上で、あなたのやうな態度では世の中は渡れません、藤田組の宮原さんをお見習ひなさい、あの方こそ處世の神様ですと意見してくれた人だ。宮原清氏は同窓の先輩で、頭腦極めて密、萬事行届く人で、確かに手本とすべきであるが、私は遂に自分流儀で今日に及び、未だに不行届な振舞の多いのは汗顔の至である。かういふ昔話も出て、座は賑はひ、かくし藝の競演には、地方も驚いてゐた。

十七日　神戸に赴く。十時、支店にて社員大會後、魚庄樓にて一同會食。高木店長赴任以來大改革を施し、一時は深甚の衝戟を與へたらしいが、着々效果を擧げ、最早百萬級の店にならんとしてゐる。所長諸君も既に高木さんの方針を飲み込み、その強力なる實行力に信頼し、底力を發揮して來た。四國とは地盤が違ひますよと、計畫好の高木さんは自信たつぷりだ。今年度に目覺ましい飛躍を見せる店の一つであらう。

二時三十九分發、京都に赴く。三月末退職された押原さんが、わざわざ驛迄來られ、叮嚀な御挨拶があり、尙京都ホテル迄同行された。祇園中村樓で所長招待會を催し、懇談する。京都支店は新店長を迎へ、氣分一新し、大支店の面目上、今年は飛躍精神を振ひ立たせようと申合つてゐる。酒宴最中春雨となり、戸外は京都らしい靜かに柔かい情趣に夜は更けてゆくが、吾々の座敷

は氣焔の渦巻で活氣充溢止まる所を知らなかつた。

十八日　午前中、支店で社員大會がある。つい先頃退職された北尾勝三氏が店に來て居られ、御目にかゝる。大會々場には各事務所の闘争精神が簡潔に表現されてゐる。

一齊蹶起捨身で力戰斷乎必勝を期す　第一
河原町の興敗無爲劣績を絶對嚴禁す　河原町
一致團結個人と事務所の壓倒的勝利を誓ふ　京和
男子の意氣地闘魂に拍車し最後迄頑張る　中央
敵陣撃滅堂々我軍の貫祿を示さん　四條橋
眞劍必死一人洩らさず個人相手を屠れ　大津
敢然奮闘各自の本分を完全に盡せ　兩丹
勇躍邁進新興彦根の地力發揮　彦根

演壇に起つた私は、背後の之等スロオガン以上に何も云ふ事は殘されてゐないやうな氣持がしたが、會社の實狀と私の所懷を述べ、所長優績社員の挨拶を受け、會終了後近所のレストラントで晝餐を共にし、こゝでも種々社業についての話を取かはす。曇日ではあつたが、東山を望み、

鴨川を前に見下す風趣は、いつもながらの美しさだつた。

諸君に別れ、店長と共に滋賀縣明保會に出席の爲め、草津に行く。副長は事務を片づけて、後からかけつけた。招待をうけたのは吾々と、地元の囑託醫井上三良助氏守山町の囑託醫西藤至誠氏で、二十五の代理店主を中心に、縣下の所長主任社員を合せ、總勢六十人に及ぶ盛會であつた。當番幹事守山代理店南井龍太郎氏の御挨拶、十河所長の挨拶に對し、水澤さんと私も答辭を述べ、宴會となる。舞臺では餘興が引つゞき、又座敷の眞中で、江州音頭をやる。これは地方色豊かで、大變面白かつた。殘念な事に、私は今夜の汽車で歸らなければならないので、中座し、大津迄自動車で戻り急行列車に乘る。

十九日　早朝歸宅。取締役會當日なので、休息の暇なく出社する。

二

四月二十日　東京近縣營業部管內各事務所は、名譽の優勝旗を廻(めぐ)つて成績を競ひあつてゐるが、年頭所長會議の席上で、三度連續優勝の事務所が現はれたら、私が出張して全所員招待の一席を設けようと約束した。大口の契約にでもぶつかつて、素晴しい成績を擧(あげ)る事は、屢々見るところであるが、三度連續優勝は、容易の業で無い。先づ約束はしても、實現は困難であらう、たとへ

實現するにしても、今日明日の事ではあるまいと、多寡をくゝつてゐたところ、浦和事務所が一二三の三月で忽ち三連覇を成し遂げた。そこで稲田部長を煩はして萬端の準備をし、埼玉縣大宮の神風荘といふ家で、約束の宴を張る事になつた。

會社の事務を終へ、部長の外に關、林、二宮三祕書と同道大宮へ赴く。大宮は東京附近の日歸遠足地として、吾々幼少の頃から聞えた土地だが、縁が無くて私ははじめてだ。驛には、今日のお客様の金井所長が出迎へ、大宮公園の傍の會場に案内してくれる。公園の松林の丘を望む立派な料理屋で、金井さんの話によれば猫入らず本舗の別荘だつたものを、改築して、營業してゐるのださうである。いふ迄もなく金井さんの繩張內の事だから、カーサンカーサンと下へは置かない。綺麗な水を自由に使つた庭も廣く、新綠に櫻がまじり、楓の若芽が燃えてゐる。記念撮影をし、簡單な挨拶の後直に酒宴となり、前所長佐久間於菟彦氏を上席に据ゑ、例によつて藝盡しがはじまり、盛會だつた。しかし金井さんのいふには、あなたがゐると皆が窮屈がつて十分はしやぎませんから、どうぞいゝ加減に歸つて下さい、車は申つけてありますと極めて明瞭率直なので、命のまゝに退席、稲田さんといつしよに東京へ引上げた。終宴に際し萬歳を唱へるならはしだが、右の次第で之を果たさなかつたから、紙上を以て祝福しよう。浦和事務所萬歳、々々、々々。

三

四月二十四日　仙臺支店管内優績代理店招待會接待應援の爲の出張で、午後十時二十分上野發。例によつて直ぐさま寢るつもりでゐたところ、東北帝大の小宮教授と同車し、食堂に伴はれ、麥酒を飲みながら長話をする。仙臺に立寄るなら一會催さうと勸められたが、自分の旅行は時間が切詰めてあつて、自由はきかないのだと説明し、斷る。しめ切つた車室は蒸暑く、寢苦しかつた。

二十五日　昨夜は雨だつたらしく、山も田畑も濡れてゐる。仙臺で小宮氏は下車し、久保澤支店長が乘車する。外に支店の方々が驛迄來てくれた。出張の際、驛の送迎は成る可くやめて貰ひ度いといふ私の希望が漸くいれられ、近頃は途中通過の驛に氣を配り、神經を惱ます事も少なくなつたが、未だに昔通り堅いのは、長崎と仙臺らしい。斯ういふ鄭重な禮儀に對し、心中非常に負擔を感じる性質で、恐縮し、閉口し、身の置きどころが無いやうな氣がし、甚だてれる。

次の車室に、福島代理店油井德藏氏が乘つて居られた。福島通過は五時少し前だから、私は未だ熟睡中だつた。お誘ひして、朝食を認めながら、旅行談に花が咲く。御齢に似ず、いつも元氣の油井氏は、先年貴族院の南洋視察團に加はり赴かれた時の事や、去年十一月上海訪問の事など、次々と話される。窓外の山や岡の櫻は、今が眞盛だ。此の地方には枝垂櫻が多く、一際美事であ

る。

十時三十五分花巻着。自動車で松雲閣に向ふ。昨年八月秋田横手を經て、此地に來たから、これが二度目である。宿の前面の並木はすべて櫻だが、意外にも未だ咲いてゐない。三月中旬鹿兒島で花を見、東京も今は葉櫻となり、仙臺附近が滿開の峠を越し、此處ではもう四五日たゝないと開かない。旅をする身は、幾度も春に逢ふ事が出來る。既に到着された代理店の方々もあり、竹内副長菊地若杉兩所長内勤松尾氏も先發隊として、準備と接待に努めてゐる。湯に入り、食事をし、しばらく自由の時間を與へられ、緣側の椅子にかけて、廣大なる此の地の傾斜面の霞む景色を眺めてゐるうちに、此の頃の重なり重なる旅の疲れで、つひ睡つてしまふのであつた。

各地方から參集された十九店の方々に、吾々を加へて、先づ久保澤支店長挨拶を述べ、更に從來各地に在つた明保會を解散し、現在契約高壹百萬圓以上の代理店を中心とする百萬倶樂部創設を提議し、贊成を得、油井氏を倶樂部會長に戴き、幹事は靑森の中村與助氏と支店長之に當り、今日出席せられない百萬保有代理店に對しては、直に贊成入會を求める事になつた。つゞいて私も御挨拶を述べ、油井氏代表して答辭を述べられ、引つゞき宴會となつた。福引があり、かくし藝が競ひ出で、一刻千金の春宵を、長時間樂んだ。

二十六日　天氣は一段と晴れ、櫻並木も昨日より赤らんで、山野の眺望は一層春を増した。朝食後隨意散會となり、吾々は十時六分の汽車で仙臺に向ふ。零時四十五分着。又多數の御出迎に接し、支店に行く。四月は從來出來の惡い月といはれてゐたが、今年は此の惡例打破につとめ、各地とも奮闘中だが、仙臺支店は今迄のところ、先月よりもいゝ狀態で、まことに心強い。招魂社大祭で、全國の銀行會社休業の筈のところ、此の店は内勤總出で忙しく働いてゐる。三階廣間で市内の所長社員四十餘名集合、私は事變下に於る生命保險の使命と我社今年度の計畫を中心として話をした。社員會終了後、つい先頃隱退された平賀文太郎氏に案内役を賴み、躑躅岡の櫻、政岡の墓、八木山等を見物し、夕刻料亭松竹に市内代理店招待會を開く。松竹の御主人本田氏も我社の特約店として協力して居られるので、自身宴席に着かれると同時に、酌人から餘興迄心を配り、自身手を使つて興を添へられた。お客様は十二人、所長連中が接待役をつとめ、出立の時間迄賑かに過した。十時五十分の汽車には、マルカン代理店渡邊勘七氏が、私の辭退にも拘らず、代表見送だからと同行されたが、途中自動車の中で、自分は二百圓の資本で菓子商をはじめ、之を一千倍にしたが、その間辛苦を共にした妻の働による事多大であるから、資産の半分は妻の物と考へてゐるといふ眞實の籠つた述懷をされた。奥さんは御主人の代理で花卷の會に出席され、

私も面識を得たので、御店が驛前なのを幸に、敬意を表しに出向いた。

二十七日　朝六時四十七分上野着。川原林山下兩先輩に、仙臺は今月非常に景氣がよく、恐らく前月以上でせうと報告する。

四

五月六日　午後九時東京發。

七日　京都驛で、廣島支店長の電報をうけとる「概算一〇五萬、シテンシンキロクニテオムカヘ出來ザルヲオワビ申ス下河邊。」私の唇邊には自ら微笑が浮んだ。壹百五萬は支店新記録ではないにしても、四月の新記録たる事は疑ない。多年の不振を挽回する使命を帶びて下河邊氏が赴任して以來、辛苦焦燥三年の後、やうやく中堅支店の列に伍し、壹百萬の擧績を見るに到つたのは、同慶至極で支店長の喜びは想像するに難く無い。誰しも此の電文の「御詫び申す」を、その儘うけとる程野暮ではあるまい。私は電文を意譯して、下の通り讀んだ。「概算壹百五萬ダゾ、廣島支店ノ意氣ヲ見ヨ。」

岡山に着くと、中島支店長は、どうもいけませんでしたと羞しさうにいふ。前月は支店長入社滿二十五年記念募集で、全員努力を盡し、壹百四十五萬で第一位を占めた反動か、今月は八十三

萬に過ぎないのださうだ。由來岡山は成績にむらのある店で、素晴らしい成績を擧げた翌月は、ひどく不振をかこつ事がある。所長は顔揃ひで他店の羨むところ、前線の精鋭に人無しとせず、一度心を合せて奮起する時、屢々全國を壓して王座を占めながら、兎角成績が波を描くのは何故であらうか。私は玆に精兵主義の缺陷が潛んで居るのでは無いかと思ふ。之を全國の事務所に例にとつてみても、甲事務所は一人の天才型闘士を中心として形成されてゐて、時々拔群の數字を示しながら、その英雄が病氣にかゝるか、氣乘の薄い場合には、事務所の成績は急轉する。之に反し、英雄はゐないでも、大兵を擁する乙事務所は、一人や二人故障があつても、元々個人の成績に期する所が少ないので、事務所全體の成績は、平生と變らない。こゝに精兵主義の危險があり、大兵主義の平凡無事がある。若し岡山支店が、現在の精鋭に加へて、廣く人數を集める策をとるならば、大兵にして精鋭の理想を實現する事も不可能では無いであらう。

いつもの宿は新錦園だつたが、今度は吉原屋といふのに案內された。會社に近いのが便利だ。

午後から、支店の二階で社員大會が催され、私は一時間半喋つた。今月は國策に從ふ愛國公債獲得募集が行はれるので、たゞさへ躍進精神の燃え上つてゐる全外野は、劃期的成果をおさめんと誓ひ合つて居るが、岡山支店に於ても各所長は各自責任額の五割增必成の誓約をなし、對抗戰

の相手方京都支店を撃破して、敵地に於て祝盃を擧げる手筈と聽く。
支店氣附で各地から電報が來る。やがて本店から各店概算を報じて來た。總計二千六百四十三萬。完全にお祭月を克服した。遙かに川原林さんや山下さんの喜んで居られる姿を想像し、萬歳を叫ばないではゐられなくなつた。
大會が終つてから、夜の宴會迄に少しく時間があるので、市内の二事務所を訪問する。宮崎さんの事務所は、此の前來た時は舊城門内にあつたが、今度は繁華な町に移つて、如何にも近代的な事務所らしいものになつた。之に反し舞原さんの事務所は、金持の別荘だつたといふ事で、旭川の三角洲の頂點に位し、左右に清流を見下し、遠く川上の山姿を望む絶佳の眺望、家のつくりも極めて凝つたもので、茶室があり、庭には噴水あり、金庫室迄備はつてゐる豪勢なもので、目下借家追ひ立てをくつてゐる私は、かういふ家に住む舞原さんの幸福を大に羨んだ。もう一つ舞原さんのしあはせは、當年十一歳の可愛らしいお嬢さんが書道の天才で、始終受賞の名譽に浴してゐる事だ。無類の惡筆の私は、その清書を見て悉く恥入つてしまつた。
川添の料理屋備前家で、大宴會が開かれた。
八日　天候不順で、宇野高松間の汽船は、つい數日前にも缺航したといふ噂で、心配したが、

曇つてはゐても降りもしないので、會社の成績が向上すると、天氣運迄よくなるのでは無いかと思ふ。午前十時七分岡山發。宇野には久保田さんが迎ひに來てゐて、聯絡船の甲板で、月別成績第一位、累計成績第一位の手柄話を聽く。前支部長高木さんの蒔いた種、これを扶けて育てた久保田さんの苦辛は、完全に丈伸びて、收穫の時期は到來した。何しろ五百の大兵を有し副事務所網を完備したので、その一人當の契約は少なくとも、常時壹百萬の域に達する事は近き將來の事になつた。人數に於ては全支店中第一で、此の店が全國第一位の成績を擧げた事から考へても、増員が如何に著しい發展をなすかは明白である。

零時十分高松着。棧橋に出迎へてくれた人達の中に、神戸支店長高木さんもまじつてゐた。今日の祝賀會に、特に前支部長を招待したのだ。輕い晝飯を濟ませ、支部に行くと、今日の會の爲にわざ／＼來高された高知代理店中山猿膽氏が居られ、四國出張所創立當時と、今日の支部の發展とを回顧對比して、互に感慨に堪へなかつた。

讃岐會館で大會が催され、久保田さん高木さん私の順で交々挨拶を述べ、中山氏からも祝辭と體驗談を拜聽し、所長主任その他有志の挨拶あり、當月は「壹百參拾萬新記錄樹立を全うして保險報國の誠を致さん」と誓約し、重ねて年度壹千貳百萬必成の決議が行はれ、更に對神戸支店と

の對抗宣戰には、私も賞を懸ける約束をし、萬歳を齊唱して會を閉ぢた。夜は村井樓といふ大きな家で祝賀會があり、中山氏の外に玉藻代理店中村清太郎氏、琴平代理店中條孝行氏、西條代理店高橋重治氏、囑託醫三好駿次郎氏を主賓とし、盛會だつた。

九日　玉藻ホテルには、各所長も宿泊し、中山氏も同宿だつた。高木さんは早朝の聯絡船で出立し、寢坊した私は逢へなかつた。此のホテルの福ちやんと呼ばれる婦人は、頗る人みしりをしない娘で、此處に泊る會社の人達は皆友達扱ひだ。明治の人はいゝ人ばかりだねえ、それでも某さんとは喧嘩して泣かされちやつたよ、矢張中瀨のをぢさんが一等いゝねえと、遠慮會釋なく批評し、私も忽ち友人の一人に加へられてしまつた。福ちやんの念願は東京見物である。東京に行けば知つてる人が澤山ゐるといふ。それが同業各社の高松支部長だつた人達なのだから面白い。

午前九時五十分高松發、三時四十九分廣島着。直に支店に赴き、優績社員會に臨む。此の會は英雄大會と稱され、各事務所の代表的鬪士約六十名にむかひ、躍進精神總動員に參加する事を求めた。こゝでは當月壹百五十萬必成の決議が成つた。廣島は四國と共に人員增加に努力し、社報子の所謂「靑年廣島」が、正に「成年廣島」にならうとしてゐるのだ。四月最優績の吳事務所は、河村所長病臥中にも拘らず、全所員は所長病氣見舞の精神を以て、平素に百倍する努力を傾け、遂

に事務所創設以來の記錄を樹立したといふ。この意氣こそは、吾々が明治全外野に求めて止まないものなのだ。

羽田別莊に於て大宴會が開かれ、大に飲み、大にうたひ、扨て明日から大に働かうといふ支店長の挨拶に、一同強い拍手を以てこたへた。

十日　愈々快晴、しかも無風、川添の吉川旅館は夜あけが早い。今日は優績所長及三十萬倶樂部員慰勞旁々私にも休息の時間を與へてくれて、嚴島一周の舟遊びが催された。岩惣で晝飯を喰べ、午後四時四分宮島發で、歸途につく。

十一日　午前九時三十分東京着。

五

五月十三日　信越營業部優績代理店招待會の接待役として佐渡へ行く事になり、午後十時三十五分、稲田部長と共に上野を立つ。意外にも步廊に、先頃病氣で退社した渡部次郎氏がゐて、自分の鄕里佐渡へ行くと聞き、豫備知識を與へる爲に些か書き記して置いたから、車中讀んで貰ひ度いと云つて、二十行二十字詰の原稿紙八枚に及ぶものをくれた。立話をしてゐる折柄、數人の巡査を先頭に、靴音高く練込んで來た一行がある。巡査は物も言はずにその邊の人を荒々しく押

のけ、何事かと目をみはらせたが、それは多勢の隨行員と見送人を從へた吉野商工大臣の一行だつた。何といふ物々しい有樣だらう。つい先頃役人をやめて或る會社の取締役に天下つた人の述懷に、役人をやめると實に寂しく、あの味は忘れ兼るとあつたが、此の仰々しい威勢こそ卽ち役人の味なのであらう。平民は寢てゐるのが無事と考へ、直に寢臺にもぐり込む。

十四日　氣遣つた天氣はいゝ方に變つて、風が少し寒いばかり、海上の無事は豫約された。新潟驛には先着の所長諸君と、世話役の西谷君が待つてゐた。商工大臣は此の地の工業大會に臨むので、驛前で花火があがる。頗る古風な感じだ。

ゑのだ旅館で朝飯をたべ、十時十五分發のおけさ丸に乘る。昨年度優績代理店として信越營業部が御招待申上げたのは、長岡、地藏堂、松本、高田、加茂、下越阿部、十日町、三條、西吉田、加治、新潟、新潟大島、內山、寺泊、葛塚の十五店で、不參五店主の外は賑かに參加され、會社側九名を加へ十九人の一行である。五百噸の船は、觀光の各團體でいつぱいだ。濁流の河口に別れ、築港の外に出ると、忽ち水の色は紺碧となり、遙か向ふに佐渡が霞んで見える。少し寒いが、甲板で海風に吹かれ、いゝ氣持で居睡をし、松本代理店藤森氏に、船の上で船を漕いでゐると冷かされた。船は少しの動搖も無く、次第に目的地へ近づいてゆく。佐渡の山々には未だ雪が殘つ

てゐるが、麓は新緑に包まれ、その緑は鮮明に輝く。三時間弱で兩津灣に入り、擴聲機が傳へるおけさ節に迎へられ、遊覽バスで島內旅行の第一歩を踏み出す。運轉手は中平直一君、說明者は市橋みよ子孃である。本間旅館で晝の支度をし金北山加茂湖を右に見て、國中平野を過ぎてゆくと、吾々が想像してゐたやうな荒寥たる孤島ではなく、何處に海があるのかと思はれる廣大なものだ。藤、椿、躑躅、蓮華草の花盛で、越後路よりも暖く、麥の穗も伸びてゐる。市橋孃の說明は、聲も美しく、愛嬌があり、その上特に說明を要さない野路にかゝると「しばらくは御說明申上る場所も御座いませんから、賑かにおけさで參りませう」といふや否や、「アー佐渡へ」とうたひ出す。中平君もつゞいてうたふ。此の遊覽バスの、これがサアビスのひとつなのである。

文永八年佐渡に流された日蓮上人が、最初にゐついた根本寺、順德天皇に奉侍した武士遠藤爲盛事日得上人と妻千日尼の開基になる阿佛坊、國分寺、眞野御陵と巡回し、河原田町を過ぎ、相川町を通り拔け、光閣灣に船を浮べて奇岩の千態萬容を見る。獅子岩、虎岩、麒麟岩、屛風岩などは何處にもある名稱であるが、チン・カン・ドボンと名づけられた岩のあるのは面白い。これは聳え立つ二つの岩の上から石を落すと、右の壁面に當つてチンと鳴り左の壁面にはねかへつてカンと鳴り、海水に落下してドボンといふので、此の名かあるのださうである。夕日は今海に落

ちんとして靜かな水面は光り輝き次第に色褪せて黄昏が迫つて來た。吾々は相川町の宿いづも屋に着く。宿は滿員で、私と稻田さんは若主人の居室に入れられた。此の若旦那は餘程法律好と見えて、本箱の本の大半が法律に關するものだつた。

一行十九人に、相川代理店三國氏と三菱鑛業佐渡鑛山の蒔田氏を迎へ、すしかといふ料理屋で宴會が催された。放送で馴染の立浪會村田文三おけさ連中の餘興があつたが、會員は皆土地の旦那衆で、おけさ節や相川音頭の保存宣傳の爲に努力してゐるのださうである。終宴後、濱に出て見た。月の夜で淺瀨の水は底迄透いて見えた。

佐渡には泥棒はゐないさうで、宿屋は雨戸もしめず、玄關もあけ放しのまゝだ。

十五日　昨日にまさる快晴だ。食後、鑛山見學に行く。昨晩の宴席の酌人四人が、朝の給仕の手傳に來たが、いづれも鑛山見學について來る。難有迷惑だ。鑛山長、副長、庶務課の人々、日曜日にも拘らず出所され、吾々の爲に接待してくれた。佐渡の金山この世の地獄とうたはれ、昔は罪人が採掘に從事させられたのであるが、最盛時には相川町の人口十萬と言はれたといふ。今は八千人位だといふが、果して昔はそんなに繁昌したものか、一寸想像もつかない。近頃金の値上で、鑛山は活況を呈してゐる事いふ迄もないが、その筋の監督嚴重で、坑内を見る事は許され

す。又見學した事も記述は差控へなければならない。鑛山副長石川常夫氏と蒔田氏は、終始吾々を案内され、又茶菓の饗應を受けた。

鑛山を下ると昨日の遊覽バスが待つてゐて、再び中平君と市橋孃に生命を托す。七浦の勝景、河原田町、本光寺を經て黑木御所跡に到る。順德天皇行在所で、黑木とは丸木の意である。附近に、觀世元淸の墓所もあり、配流の憂を慰めつゝ、定家、三輪、三井寺、檜垣、熊野、東北、井筒の七番を完成したと傳へられ、さういふ關係の爲か佐渡では、田畑に働く農夫も謠曲を口吟むさうである。

歌の國、詩の國、傳說の國と自ら名告る佐渡は、畏くも上御一人さへ配流二十二年の月日を送られ、遂に「思ひきや雲のはてまで流れ來て眞野の入江に朽ちはてんとは」と辭世をのこされたやうな歷史を持つてゐるので、到る處悲劇哀詩を以て埋められてゐる。日蓮上人はいふ迄もなく、文覺上人、冷泉爲兼、日野資朝、觀世元淸、小倉大納言父子、世話にくだけては江戶時代遊俠の徒が、島流しとなつた數々の物語、阿新丸や安壽厨司王の傳說など、今もなほ人の心をいたましめる史蹟ばかりだ。さういふ哀切なる回顧の情が伴ふ爲か、佐渡の景色には深き侘びしさがひそんでゐるやうに感じられる。然りとて、それは「來いといふたとて行かれよか佐渡へ、佐渡は四

十九里波の上」だの「荒海や佐渡によこたふ天の河」などから想像する寄邊なき離島の荒々しいいたましさではなく、土にも草木にもしみじみと哀れを籠めた靜けさである。歷史と風土がしんみりと融合したこまやかに深い哀感だ。たつた二日の旅路ながら、私は一生忘れない印象を心に刻みつけられたやうに思ふ。

昨日は右に見た加茂湖を、今日は左に眺め、中平君と市橋孃がうたふ別れの歌を名殘惜く聽きながら、再び兩津町の本間旅館に着き、晝食、午後二時出帆のおけさ丸に乘船、佐渡に別れる。佐渡は今や觀光客の招致に全島こぞつて精神を一にしてゐるものゝ如く、殊に遊覽バスのサアビスは滿點である。中平君と市橋孃は出帆間際に吾々を見送に來て、五色のテープに最後の別れをいろどつた。

海は昨日よりも更に平かで、此上もない航海である。皆さんは船室に下りて旅の疲れを癒さうと横になられたが、海好きの私は甲板で居睡をしてゐた。偶々海豚が波上に跳躍し、船の後から追かけて來るのを發見した。數は五六頭で、勇ましく波頭に乘つて突進して來る。壯觀たつた。

四時四十五分新潟着、鍋茶屋で宴會があり、故安東德男氏が日本一の折紙をつけた、おかみさんにも拜顏の榮を得、故人の話をする。餘興數番のうちには、稻田春童氏が尺八を受持つ素踊

「都鳥」もあつた。隨時解散、私は九時半の汽車に乘る。
十六日　午前六時三十八分上野着、出社すると社內同人から佐渡はどうだつたと訊かれ、絕讚の辭を盡す。あまりほめるので、何か感心しない所は無いかと疊かけて質問するものもある。答へて曰く、宿屋の設備サアビスの至らぬ事、食味のまづい事、藝者の美しからぬ事以上。

――「社報」昭和十三年五月號

臺北——相模川

一

七月三日　降續く大雨に各地方出水、殊に茨城埼玉千葉栃木方面は交通困難の爲め、募集上に大打擊をうけたといふ報告を先づ第一に聽き、つゞいて横濱管内受難の報に接し、遂に東海道線不通となるに及んで、私の臺灣出張は果して決行出來るや否や頗る心細くなつて來た。おまけに、今年は激烈な水虫に惱まされ、未だに步行不自由なので、途中で交通事故でも起ると、一身の處置にも難澁しなければならない。困つた事だと思つたが、念の爲め東京驛へ電話で問合せると、東海道の崖崩れもやうやく土砂が取除かれ、今日午後から復舊したといふので、鞄を整へる。水虫についてはあまり經驗がなく、あれは雲助(くもすけ)の病氣だと無責任な放言をし、たまに足部の指の股などにたゞれを見ても、賣藥を二三日塗ると忽ち全治するので、自然輕視してゐたのである。と

ところが、今年五月、豫而中風症で病臥してゐた母が危篤に陥つたので、病牀にかけつけ、文字通り衣帶を解かず、足袋も穿いたまゝ病室附近にごろ寢し、幾日か風呂にも入らず、自分でも足部の蒸れてゐる事に氣づきながら大事になるとは思はなかつたが、葬式の日に久しぶりで靴をはき、告別式場火葬場墓地とかけ廻るうちに惡化したと見え、その晩俄に三十八度五分の熱を出した。葬式の後始末をし、びつこを引きながら出社したが、氣分が惡く、一時は三十九度迄昇つた。一箇月たつても未ださつぱりせず、炎暑の臺灣では困るとは思ふが、靴をはく事は出來ないので、和服で行くほかはなく、繃帶の足に草履を結びつけ、いつもは鞄一箇ときめてゐるのが、別に藥品繃帶脱脂綿等をいつぱい詰めた小鞄を持つて行かなければならなかつた。

夕刊の新聞は、どれもこれも東海道線不通を報じてゐるので、それを信じて旅行を中止した人も多いであらう。なほ降つゞく雨に、此の上の災難を怖れて出立を見合せた人もすくなくないであらう。午後十時發の急行はがらあきだ。私は運命を任せて、寢る。夜半、目が覺めると、汽車の騷音を壓して降る豪雨が、沿道の崖を打ち、急流の落下する光景が彷彿としてあらはれた。或は土砂の崩壞でやられるかも知れないと思つたが、今更どうにも方法はないので、萬一の場合の爲に繃帶をしめ直し、再び枕につく。

四日　割合に熟睡した。氣になる雨も小降なので、西の方は晴れてゐるのでは無いかと想像したが、これは當らなかつた。食堂に行かうと思ひ、次の車室迄行くと、名古屋の小池副長がゐた。今朝早く乘込み、神戸迄契約上の用務を帯びて行くといふ。食事を放棄して話合ふ。

大阪では、上原さんと藤原副長が驛迄來てくれ、歩廊に下りて今月の成績豫想に付互に意見を吐いてゐたが、汽車はなかなか動き出さない。應召兵見送の人達は、咽喉をからしてうたひ、幾度も萬歳を唱へたが、汽車は動かないので、手持無沙汰にさへ見えて來た。どうしたのだらうと、吾々も不思議がつてゐると、突然擴聲機から傳へられたのは、昨夜の雨で電柱が倒れ、阪神間の汽車は一時不通となつたから、西へ行く人は此處で下車して、電車で行つてくれといふのであつた。止むを得ず、命の儘に電車に乘替へ、豫定よりも遅れて三宮へ着く。高木さんはじめ、支店の人々に出迎へられ、直に高砂丸に乘船する。雨は執拗に降つゞける。神戸支店は今月最低百五十萬確實目下二百萬に猛進中といふ事で、高木さんは張切つてゐる。殘念ながら、關東方面は出水の爲め豫定が狂つたから、是非關西方に奮起して貰ひ度いと申述べ、正午出帆の銅羅の鳴る迄六月成績の豫想について語合つた。

海上は極めて靜穏、殆んど動揺を感じない。足が不自由なので、椅子にかけた儘少しも動かず、

持つて行つた本を讀む。

五日　涼しい寢床に寢過して、目の覺めた時は、關門海峽に碇泊してゐた。薄日がさし、海は稍夏らしい色になつた。用達に上陸する人もあつたが、私は本を讀みつゞけ、忽ち持參の二冊は讀切つてしまつた。

大坪さんが面會に來てくれ、年初以來の陣容整備も一段落となり、逐月實力を増して來たから、やがて二百萬級の支店となる日も近いだらうといふ感想を、地理と人事の實際を示して語る。誰にあつても、先づ互に喜ぶのは會社近來の大飛躍だ。歸途飛行機で福岡へ行く事を約し、別れる。

船は外洋に出ても、なほ靜かな航海をつゞけ、私は社交室の雜誌類を次から次と讀みつゞけ、甚だ非社交的な一日を送つた。

六日　朝の食卓で、吾々の食卓の主人機關長が、阪神間の水害につき報告した。機關長の留守宅は出水と同時に浸水し、家族は危く二階に逃れて生命の無事を守つたが、附近には多數の倒壞流失家屋あり、死傷者も少なくないといふ無線電信に接したのださうだ。食卓の人々は俄に信じ兼る顏つきで聞いた。神戶出帆の時も雨は降つてはゐたけれど、それ程のものとも思はず、海上は烟霧に閉されてはゐたが大雨には遭はなかつたので、さういふ大慘事がどうして起つたのか、

現實性の乏しい話をきくやうな感じだつた。最低百五十萬を確言し、小軀いつぱいに鬪志と希望を湛へてゐた高木さんはどうしたらう。あの邊に多く住む支店の諸君は無事かしらと心配しはじめたのは稍時間がたつてからだ。それ程夢のやうに思はれたのである。

船が進むに從つて暑くなるやうに感じて來た。風が戀しくなり、時々跛を引いて甲板に出て見ると、船に驚いて飛ぶ飛魚が、銀箭のやうに波頭を切つて光る。海も動く、船も動く、すべてが動いて止まない景色の中で、足部の疾患に惱み、靜かに動かず、本ばかり讀んでゐるのもひとつの修業か。此の儘二三日續いたら、私は備付の本の全部を讀切つてしまひさうだ。

午後、電報をうけた。臺北支部第一位の事務所で、全國に於ても屈指の基隆永田所長からだ。「御安航ヲ祈ル、本月モミゴトナル成果ヲアゲ御安着オマチ申ス。」十分自信のある電文だ。寧ろ瘦軀といふ方だが、眼光鋭く、鬪志はげしく、常に地面にしつかりと足の着いてゐる永田氏の、底力のある聲を直接聞くやうだ。續いて高雄岩崎所長からも、航海無事を祈るといふ電信があり、更に臺北支部からは「概算一一五マン明日ノ安着ヲマツ」と報じて來た。

夜に入つては蒸暑く、寢苦しく、愈々臺灣の近い事を感じた。

七日　曉方から次第に晴朗な空となり、愈々暑さを加へて來た。大坪さんから電報が來る。「農

村地ヲ持ツ事務所皆崩レ、一二七マン申譯ナシ。」昔の申譯無しはほんとに面を覆ふべき申譯無さであつたが、近頃の申譯無しは決して面目ないものでは無い。たゞ自ら掲げた目標に達しなかつた遺憾の表明である。それだけ會社は躍進途上を急速に進みつゝあるのである。

私の渡臺は昭和九年六月以來二度目であるが、強烈な色彩と單純な描線で出來てゐる此の島の印象は少しも薄れず、行手の島の姿には、はつきりと見覺えがある。藥を塗布し、繃帶をしめ直し、草履を結びつけ、すつかり支度をして甲板に出たが、既に汗は衣を透して滲み出し、熱氣は息詰るやうに迫つて來る。此の熱氣は基隆港内に入ると一際強くなつた。岸壁に出迎の人の中に支部長副長達の顔も見え、互に帽子を振つて挨拶する。

汽車の沿道の岡に咲く臺灣朝顔の花の色は、此の前見たものが今日迄咲きつゞけてゐたやうな錯覺さへ起させた。なつかしくも、その時その儘の單純にして、色彩強烈なる風景である。水田は今や第一回の收穫に忙しく、水牛は耕作にいそしみ、白鷺は群れ飛び、自然と人生との、豐かにして素朴な結合が、心地よく眺められる。臺北驛には帝國生命齋藤支店長千代田生命江森支部長その他が待つてゐてくれて、一席設け度いといふ申入に接したが、短い日程なので時間が無く、斷る外なかつた。鐵道ホテルにおちつき、支部の人々と食事を共にした。今日は日支事變一周年

といふので、日の丸辨當一式であつたが、下手な西洋料理よりは結構だつた。

ホテルの目の前に昨年竣工の明治生命館が在る。先年梅田眞太郎氏が念願にしてゐた新築なので、今は亡き人と臺灣を一周した時の事をしみじみ思ひ出した。その樓上で、外野戰士を前に約一時間會社の近狀と、殊に今年の躍進の原因、その重大意義につき所感を述べた。こゝでは優績社員諸君の五分間演說があり、舊知の人の顏を見出し、愉快だつた。終つて、基隆市內兩事務所を訪問し、夜は公會堂で兩事務所員を中心とする宴會が催された。今日の事變一周年には、各飮食店は一齊に休業し、酒類の使用は許されず、僅かに公會堂丈が、宴會を開き得る場所なのだといふ。ホテルの窓はあけ放してあるので、蝙蝠が飛込んで來て、蚊帳にぶつかり壁に突當り、內地では見られぬ夜景を描き出す。何といつても暑く、枕につけた後頭部から、じつとりと汗が流れ出る。

八日　午前十時五分小林さんと共に臺北をたち、零時三十四分新竹着。代理店桑原佐一郎氏も事務所の諸君と共に御出迎へ下さつたが、今回の旅行は日數少なく、且又私の疾患は、坐る事が出來ないので、代理店各位への御挨拶は勝手ながら略させて頂く事にし、桑原氏とも本意なく驛頭で御別れしてしまつた。まことに殘念でもあり、非禮の次第で氣が咎めた。

所長陳天賜氏、別格外務員木村政敏氏に伴はれ新設間も無い事務所を訪問した。陳氏は、昭和九年渡臺の際深き印象を受けた人の一人で、その時參拾萬倶樂部入の約束をしたが、約を果して入部し、僚友數氏と共に本店へ乘込んで來た時の光景は、私の忘れ難い記憶である。熱心誠實に智略を加へた名所長として、多數の信望を一身に集めてゐるのは當前である。木村氏は多年山間部落を隈なく募集した勇士であるが、今は別格として陳氏を援け、先輩として指導の任を果して居られる。兩氏の結合が、此の事務所の力強さである。事務所は新しい建築で、明るく、奇麗である。恐らく臺北支部管下の事務所中一番立派なものであらう。

町中のカフヱの樓上で、所員諸君と會食し、自分も意見を述べ、各員の所感も聽いた。臺灣のカフヱにはなかなか大きなものがあり、宴會結婚披露なども行はれる。東京でいへば中央亭とか丸の内會館のやうな所に、女給を置きカフヱ味を加へた組織である。今日の會場もその一つであつた。會終了後、僅の時間を利用して新竹の市内市外を一巡見物した。臺灣に來て驚いたのは、臺灣の地方官吏の保險に關する無理解である。今國策として政府が鳴物入で宣傳してゐる貯蓄報國に熱中し、些か壓制的にも見える程貯金を勸說命令しながら、生命保險は貯蓄に非ずといふ誤つた解釋を下し、殊に新竹方面は此の誤解が深く、某生命保險會社員の如きは、貯蓄の妨害を爲

すものとして拘引された事實もあるといふのだ。何といふ馬鹿々々しい事であらう。貯蓄といへば現金を積む事以外には無いと考へてゐるのであらう。これこそ國策に反する所爲で、許し難い暴虐である。此の爲めに、折角申込んだ人もおまはりさんに叱られるのでは無いかと躊躇し、診査を拒む者もすくなくなかつたといふ。斯くては此の先も業務の妨げとなる事甚大であるから、同業支社は總督府に陳情書を提出する事になつたと聽いたが、まことに恐入つた次第で、殆んど信じ難い事實である。

新竹の諸君に別れ、臺中に向ふ、臺中は具島種三郎氏退職後、若手の川上恒男氏が所長になり、生一本の熱情で着々數字を擧げてゐる。七時着、直に會場ひのもとに赴き、所員諸君と會食、互に所感を述べ、飛躍を誓ふ。この家は前回來た時も會場にえらばれた所で、公園の中の靜かな環境に立つ。壯快な雨が降つて涼しい。

今日受取つた電報によると、六月成績概算三千四十九萬、水害の神戸は壹百三十八萬で第一位を獲得した。恐らく關東關西の水害が無かつたら、總成績三千五百萬は下らなかつたであらうし、神戸は高砂丸船上に於て高木さんが豪語した通りの偉勳を建てたに違ひ無い。

家屋の壁や天井にはやもりが澤山へばりついてゐて徹宵悲しげに啼いてゐた。

九日　午前八時臺中發、十時二十八分嘉義着。事務所を訪問し、會場のカフェに赴き、直に社員會を開く。こゝは、竹中十次郎氏がよく人を集め、よく面倒を見て、有力なる事務所に仕立てあげた。各地の副事務所にも元氣のいゝ主任を得て、すつかり充實してゐる。交々起つて語る人の言葉にも熱があり、氣持がよかつた。

午後三時三十四分嘉義發、五時二十七分高雄着。旅館あづまは此の前泊つた家で、女將が出て來て梅田さんの思ひ出話をする。事務所に立寄り、社員會に臨む。矢張カフェの樓上である。高雄事務所は基隆と覇を爭つたものであつたが、近來人手不足の爲めか振はず、後進事務所に壓迫されてゐるのは遺憾である。岩崎所長の談によれば、此の地は近時工業盛（さかん）となり、工賃高く收入よき爲め工場勞働を志望する者多く、保險會社に來る者極めて少ないため、增員計畫は常に徒勞に終り勝だといふ。特殊の事情があれば止むを得ないが、それにしても此の練達の所長を頂く事務所として、現在の狀況では甚だ物足り無い。しかし此の夜は所員諸君いづれも意氣があがり、今月の優績を誓つて散會した。

十日　朝八時半高雄發、三時五十六分臺北着。基隆事務所主催の社員會に招かれ、蓬萊閣で臺灣料理の御馳走になる。開宴前の音樂も面白く、御料理はまことに結構だつた。五拾萬必成を誓

ふと大書したのを壁間に掲げ、永田所長の力強い宣言に滿堂醉へるが如く、萬歳を絶叫して宴を閉ぢた。

十一日　支部の諸君に見送られ、臺北郊外の飛行場を、朝六時五十分、爆音高く舞ひ上る。座席十六を有する大型のもので、離陸の際も氣の附かない位滑かに、空中の客となつた。朝霧は次第に晴れ、緑濃き飛行場で、手を振り半巾を振る人の姿がくつきりと見えたが、間もなく視野の外に消えた。快晴無風、絶好の飛行日和である。忽ち海上に出れば、あとはたゞ雲と水を見るばかり、最初こそ珍らしがつてはしやいでゐた乘客もおちついて、航空會社からあてがはれたサンドウヰツチと紅茶の朝飯をはじめる。私は、心配した足部疾患も惡化せず、不滿足ながら任務を果した安心と疲勞に、食慾よりも睡眠慾が強く、暫時熟睡した。歩行困難には勿論弱つたが、炎暑の臺灣の和服旅行はつらかつた。それに比べて、この飛行機上は全く天國だ。汽車自動車のやうな動搖もなく、上空を飛ぶ爲めか涼しい。どれがそれかはわからないが、與那國の上を飛び、八重山列島宮古列島を下瞰し、九時半沖繩に着いた。山田事務所長、大嶺、比嘉、福島の諸氏が待つてゐてくれた。沖繩は、私の母方の祖父が、明治維新の際賊軍の汚名を着て落魄し、警吏となつて單身赴任したところで、豫て一度は來て見度いと思つてゐたが、飛行場は首里には遠く、

殘念ながらたゞ沖繩の土を踏むに過ぎず、特殊の風物人情に觸れる暇は無かつた。三十分後飛行機は再び上空に浮び、奄美群島薩南諸島を下界に見ながら刻々九州に近づいて行つた。晝飯には五目壽司と、琉球古陶に模した一輪ざしに茶を入れたのを貰つた。鹿兒島天草有明海を過ぎ、久留米の上を飛ぶ頃は、稍上下動を感じたが、この邊は氣流が惡く、いつも多少の動搖を免れないといふ話だ。

午後一時半、福岡雁の巣飛行場に着陸し、大坪さんや代理店の宅島さんに迎へられ、今迄は樂々と飛んでゐたのが、傷つける鳥の如く、跛を引いて歩かなければならなくなつた。馴染の深い共進亭ホテルに鞄を下し、支店樓上の優績社員會に出る。私は水虫の惱み以來元氣不足だが、諸君は潑剌たる意氣を示し、熊本の堀所長緊急動議を提出し、小倉の永島所長の賛成演說があつた。

支那事變一周年、會社創立第五十七周年記念日ニ當リ吾等ハ深ク其ノ意義ヲ洞察シテ更ニ蹶起奮勵、自己ノ分ヲ堅持シツツ福岡支店實力倍加運動ニ向ツテ挺身努力シ時代ノ要望タル常時二百萬時代ノ造成ニ貢獻センコトヲ誓フ

更に前店長坂本氏の率ゆる金澤軍に相互練磨の精神を以て挑戰しようといふ動議が出て、忽ち

電報は北陸へ飛んだ。

此の夜は清流莊に盛宴が張られた。

十二日　朝早く鹿兒島支部長重松さんの訪問をうけた。重松さんは夜前(やぜん)遲く到着、博多ホテルに宿泊し、今日は午前中の汽車で歸店するといふ。朝食を共にし、支店に赴き、僅かな時間を歡談に盡す。一時は鹿兒島支部創設は失敗であつたといふ非難を浴び、その促進に努力した私の如きは、頗る悪い立場に置かれたが、由來意氣を重んずる薩南健兒は俄に振ひ立ち、連月記錄を破つて今や全國第一位にのぼつた。愈々今月は百萬決行だときく。愉快な事だ。大坪さんともども引とめたが、重松さんは豫定通り歸つてしまつた。

晝、市内外の代理店の方々を共進亭に御招して全くの粗飯を差上げ、懇談會を催す。私の水虫に對し、關氏は卽座に妙藥を下さるし、德丸氏は十年の疾患を根治した水藥を送つてやるといはれた。この難症は多くの人が經驗してゐて、旅中いろいろの注意を受け、同情を得た。六時十四分博多(はかた)發。

十三日　先日の水害以來、最初の富士號だといふ事で、途中でおろされるかもしれないとの注意があつたが、幸に何の滯もなく行けさうだ。阪神間は線路不完全の爲め徐行するので、沿道の

被害狀況を見る事が出來た。崖崩れの土砂が家を埋め、二階が一階になつてしまつた所も多く、倒壞半倒壞の家も多く見た。事變の關係で新聞記事が制限をうけてゐるので、珍らしくも記事より實際の方が凄いらしい。此の慘狀の中で、自分の家も被害をうけながら、奮闘よく百三十八萬の締切を敢行した神戸支店の諸君の仕事は神業といふ可きであらう。

大阪では藤原副長にあつたが、氏も被害者の一人だ。京都名古屋何處でも今月こそはやりますと、自信たつぷりだつた。

約一時間延着したが、夕方無事東京着。亡母の四十九日忌なので、直に本家にかけつけ燒香する。

二

七月十八日　橫濱支店優績社員大會に出席。筆頭宮川清三郎氏座長席につき、最初に私が挨拶を述べ、店長副長醫長、更に所長並に各事務所代表の感想發表があり、終つて磯子園で宴會があるといふ事だつたが、私は足部疾患の爲め、御免かうむつて歸京する。

二十一日　今年三月橫濱支店主催の優績代理店招待會が伊豆山で催された時、平塚事務所の諸君から上半期締切を期し、自祝清遊會を相模河上で催すから、其の時は是非來てくれとの招待を

うけたが、同事務所は赫々たる功績をあげ、愈々今日を迎へたのである。此の間の大雨で、鮎も流れた事と思ひ、又の日に延期してはと老婆心も出したが、内々探つて見て獲物は十分だといふ報告に接したから決行する。當日は子供も連れておいでなさいと本田所長から親切な案内をあためて受けた。清遊會とはいへ、會社の催事に家族を參加させるのは面白くないやうに思ふが、既に用意もして下さつたといふので、伜を引つれて行く事にした。九時十五分東京發。途中で野老さんが、これも子供づれで乘込んだ。平塚驛には本田所長が待つてゐて、先づ驛前の事務所に一休みし、馬入川で早くから待機してゐる舟に乘る。先着の勇士は早くも赤い顏を川風に吹かせ、氣焔萬丈、六ヶ月の聖戰に身に浴びた塵埃を洗ひ流さうといふのだ。舟は三艘で、一艘には吾々が乘り、一艘は料理方が乘り、これ等は紅白の幕を日覆とし、他の一艘は網打が乘込み、その舳には伊藤清十氏が腕を振はうと突立つてゐる。日光は強いが、風は涼しい。子供達は水着になつて、隙があつたら飛込まうと張切つてゐる。伊藤さんと本職と、並んで打つ網に鮎が光り、舟は川上にさかのぼる。お辨當と、獲物の魚が卓に並べられ、私は水虫の爲めに十分飲めないのを歎きながら、さかんに食ふ。伊藤さんの網にも驚いたが、笹尾彦三氏の庖丁にも感服した。酢の物、鹽燒、天ぷらと御馳走の山だ。遙かにさかのぼつた所で、ごろびき網をかけ、これには目の下一

尺二三寸といふ鯉が三尾入つた。舟の人々は、前以て入れて置いた鯉とは違ふから大したものだと口々に云ふ。さうして見ると、時々はさういふ小細工もするものと見える。鯉は昇魚だ。會社の飛躍の象徵だといふので、萬歳を叫び、拍手する。子供達は興奮して水に飛込んだ。その獲物を土産に貰ひ、歸宅したが、伜はおやぢよりも一層大喜びではしやぎつゞけ、伜が喜ぶものだから母親も喜び、一家揃つて感謝した。

——「社報」昭和十三年七月號

札幌——仙臺

八月六日　午後七時上野發。難疾の水虫は未だ全治しないので、今度も和服の旅をしなければならない。北海道は涼しいから、臺灣の時程は難澁しまいと思つた。例によつて乘車と同時に寢臺に横たはり、今日の締切の結果を胸算用しながら眠る。暫時して、給仕に起され、電報を受取つた。「概算二〇〇マン御愉快ナル御旅行ヲイノル坂本。」やつたなと思ふと眼が冴えて眠られなくなつた。又胸算用をやり直し、やり直し、坂本さんのにこにこ顔を想像し、同時に金澤に對抗戰を挑んだ福岡の諸君はどうしたらうと考へる。金澤の二百萬は全國第一位ではないだらうか、福岡は返討に逢つたのでは無いだらうか。喜ぶ人々、口惜しがる人々の顔が入り亂れて眼に浮ぶ。

七日　早朝、再び給仕の手から電報をうけとつた。「近縣二四六マン本年二回目、信越一四〇マンニテ三回目ノ最高記錄、兩部ソロツテ記錄トツパノ御約束ヲハタスコトガデキマシタ、八月

モ確信アリ大イニヤリマス稲田、所長一同。」

青森に着き、連絡船に乗ると、又電報を受取つた。「最後ノフントウ效ナクイカンナガラ二二〇マン二終ル申譯ナシ久保澤。」これは金澤以上だ。或は此の申譯無き成績が、最高位に違ひ無いのでは無いか。なほ此の上の優績店があらはれて來るのであらうか。私は、からりと晴れた海峽の波上に躍る海豚の群の勇壯な姿に我が感激を托し、全國外野第一線の人々の躍進の有樣を想望した。

函館には工藤小西松本の諸氏と、代理店渡邊氏令息競氏が出迎へてくれ、こゝでも亦電報を手渡しされた。「社員一同ゴアンチヤクヲ鶴首ス概算一八〇マン最高記錄ニテ御迎ヘマウス丸井。」これも素晴らしい成績だ。次は大阪で「ヤウヤク三〇二マンノ新記錄ヲ得タルニトドマリ四〇〇マンノ目標ニハルカニ遠カリシハ無念ニタヘズ、御旅行ノ平安ヲイノリ親愛ナル札幌ノ各位ヘヨロシクタノム上原」といふのだ。最後に開いたのは本店企畫課からの各店總計三千六百壹萬といふ報告だつた。もう一息といふところで四千萬を逸したのは殘念だが、五月に次ぐ大量獲得で、勿論七月の新記錄なのだから、滿足しなければならない。私を送つて歩廊に立つ人達にも之を示し、互に祝し合つた。

涼しい筈の北海道が少しも涼しくない。內地よりも粗悪な石炭をたく爲めか、あけ放した窓からは煤が降るやうに吹込み、滿員で身動も出來ない座席は狹く、六時間餘の車中は相當の苦みだつた。七時四十四分札幌着。グランド・ホテルには各所長が待つてゐて會食した。丸井支店長は久しく本店人事課に在つて、私の遣口を承知してゐるので、無益な出迎を廢し、各所長が先に會場にゐてくれたのは、些細な事といはゞいへ、私には氣樂で難有かつた。八月は南北兩軍にわかれ、南軍主將は小西函館所長、北軍主將は阿部旭川所長で鎬を削る事になつてゐるさうだが、今夜は兩軍卓を共にして、會社の飛躍を祝し、制覇の理想を語合つた。

八日　同じホテルに王子製紙の藤原銀次郎氏が宿泊してゐるときゝ、刺を通じると、意外の出現に驚き、自分は大阪名古屋兩地の實業家を此處に迎へて、道長官と共に各地を案內するつもりだが、いつしよに來ないかといふ。數年前王子製紙が生命火災兩保險人を北海道樺太へ招待した時も、藤原氏は私を名ざしで招いてくれたが、會社の御許しが得られないので、斷つた事がある。そんな話も出たが、私には切詰めた日程があるので、再び斷る外は無かつた。私が旭川帶廣へ行き、歸途東北方面へ行くといふと、それでは上國から下の國へ行くもので、賢い旅程でないといひ、北海道がいかにハイカラであるか、人間の氣性が闊達であるか、此の地を我物の如く愛する

氏は、暫くその禮讃をつゞけた。

支店へ行くと、本店企畫課から「仙臺全國第一位ニツキ祝賀金オワタシ願フ」といふ電報が來てゐた。矢張仙臺が第一位だつた。偉いものでは無いかと、實直に地味にしかも着々成果を收めてゆくねばりに一同感心する。支店長室の壁に貼つてある管内各事務所の成績を見ると、旭川の四十萬といふ偉勳と並んで、新しい名寄事務所が十六萬といふ好成績を擧げてゐる。名寄としては、他の大事務所の二十萬三十萬に勝る大手柄である。みかけは細いが南所長にはねばりがあり、鬪志がある。加之代理店西出清松氏の熱烈なる協力が、所長を感奮させるところ尠なくないといふ話である。

午後、今井記念會館に於て社員會が開かれ、村田副長の開會の辭、丸井支店長の上半期支店業績檢討並に今後の方針に就いての話があり、從來北海道で幅を利かせてゐた×××に對する追撃は今や正に其の目的を果さんとし、××、××は既に追隨を許さぬ狀況だといふ力強い言葉を聽いた。次に私は事變下に於る生命保險會社の使命とその奉公及び我社の覺悟に就いて述べ、所長代表社員代表の挨拶あり、優績者の表彰があつた。此の會館に於て黑鷲優勝旗獲得祝賀式の行はれたのは、既に數年前の事に屬するが、當時の支店長野老安治氏は、私に逢ふ度に、その日

の感激を昨日の事のやうに語るのである。私も雪の十二月、優勝旗を携へて來た時の事を思ひ出し、感無量であつた。

社員會終了後、各所長並に六七兩月の優績者三十餘名と共に定山溪に赴く。折悪く防空演習とかち合つた爲め、主賓たる代理店の方々に御差支が多かつたが、萬障繰合せて來會された十四店の方を中心に總勢七十餘人は先づ一堂に會し、支店長と私とが主人側として挨拶を述べ、琴似代理店和田久藏氏の答辭を頂き、直に宴會場に於て靜肅にしてしかも盛なる晩餐會が開かれた。席上餘興の厭巻は瀨戸牛代理店齋藤健二郎氏の踊であつた。

九日　定山溪は目下陸軍傷病兵の療養所となつてゐるので、丸井支店長は早朝衣服を改め、御見舞に出向き、慰問品を贈呈した。

散會後、多くは私共といつしよに札幌へ引上げたが、私と丸井支店長と阿部旭川所長は、その儘旭川へ向ひ、諸君とおわかれした。苗穗驛で汽車を待つてゐると、支店の内勤青木氏が數通の電報を持つて來てくれた。「イカンナガラ一七一マンニテシメキル、誓約達成セザルヲオワビス臺北。」先月私が出張した時、二百萬必成を宣言したので、御詫びすと心臟の弱さうなところを見せたのであらうが、同時に開いた本店の電文によれば「臺北達成率一・八六ゼンコク一位トナル」

とあつて、仙臺にとつてかはつた事を知らせて來た。恰も私の東京出立前、臺灣に水禍があり、締切を二日延ばす狀態だつたので、斯ういふ訂正電報が來る事になつたのであらう。何にしても、素晴らしい成績だが、これには基隆事務所の功績著しいものがある。同事務所は、私が愈々臺灣にお別れの前夜、全員と會食の席を設け、席上壁間に五拾萬必成の貼紙をしてその意氣を示し、私はこれを懷に收めて離臺したが、果して誓約を實現したのだ。「締切六五萬幸ヒニ御誓約ヲハタセリ永田」といふ電報に、あの向意氣の強い、計畫の確實な所長と、その所長と調子を合せ、努力を惜まない所員の流汗淋漓たる活動の姿が、映畫のやうに浮んで來る。即座に祝電を發した。

車中瀨戶牛代理店齋藤氏と落合ひ、北海道の御話を伺ふ。氏は木材と農事の大成功者で、生きた經驗談は大變面白い。

晝食には驛の步廊で賣る蕎麥を食べようと希望した。先年冬期出張の際、方々の驛で暖い蕎麥をすゝる人達の、いかにもうまさうな姿が羨しく、同行の飯村氏にねだつたが、停車時間が短く、こつちがスロオ・モオションと來てゐるので、下車して賣店へかけつけるうちに、早くも滿員になつたり、發車時間が來たりして、遂に目的を達しなかつた事がある。丸井さんは、うまくありませんよと否定したが、結局試みる事になつた。夏向では無いが、かけそばに葱と大辛唐がらし

をぶつかけて食つてゐるとなかなかうまい。まづいとけなした人も二杯食つた。乏しい時間で、急いで食ふところに味があるやうでもあり、雪の頃の旅にはなほ更うまいだらうとも想像する。

たゞさへ暑い車中、あつい蕎麥を食べたので一層汗が湧き、齋藤氏の下さつたアイスクリイムが甘露だつた。旭川地方は既に四十日以上も雨が降らず、照りつゞけてゐるので、水田は勢よく成育してゐるが、畑は砂漠のやうに乾き、野菜類は焦げたやうな色になり、葉はパアマネント・ウェーブのやうに縮れ、見るも無慙な有様だ。

旭川では一先北海ホテルにおちつき、此處で自動車を雇つて層雲峡に行き、一泊の事になつた。少しの時間を利用して自宅へ歸つた阿部所長は、私の好物唐もろこしを兩手に抱へて戻つて來た。臺灣へ行くと、昭和九年の初渡臺の時ライチイをむさぼり食つた事を覺えてゐて、各地でそれを山盛に出されたが、先年旭川で唐もろこしに對する食慾を披露したので、阿部所長は畑の新鮮なのを手に入れてくれたのである。自動車上しきりに唐もろこし禮讃をやつたが、若狹生れの丸井さんは、關西地方ではこんなものは食べないと輕蔑して、ひとり紳士面をしてゐた。

薄暮層雲峡に着く。層雲峡は大雪山國立公園の一部で、案内記には左の通り記してある。

蜿蜒百里を驅る石狩の清流を經とし、大雪山の秀峰を緯とし、變幻奇怪の妙をつくす大溪谷

美、大岩石美、大瀑布美を六里の長きに展列した仙境である。二千丈の断崖削壁直立し、雲田雪渓に發する渓流は此處に懸つて白蛇、流星、銀河、雲井、錦糸の瀧となり、雄大神祕の情景は金剛山を凌ぎ、變幻の妙はかの上高地の渓谷に優ること數等と稱せられてゐる云々。大の字盡しの最大級の自慢だが、加ふるに阿部所長の熱烈なる讃美があつて、吾等言葉をさしはさむ餘地がない。

食卓には唐もろこしがうづ高くあらはれた。昔風の醤油をつけて燒いたのと、洋風のゆでゝバタをつけたのと。私と阿部君は直ぐに噛りつき、何の興味もなくそれを眺めてゐる丸井さんにも強ゐて手に取らせた。ところが此の紳士、一口噛るとこれはうまいと唸り、忽ち雲助となり下つた。聞けば幼少の頃、何の味もつけないで燒いて食はされたといふのだ。昭和十三年八月九日、彼三十七歳にしてはじめて此の味を知る。

十日　早朝峽谷の流に沿つて少しくさかのぼる。勝景案內記の語るが如く涼風懷に入つてやうやく北海道の涼しさを知る。此の地にも陸軍療養所があるので、丸井阿部兩氏は慰問品を携へて見舞に行つた。場所が山の中腹なので、步行困難の私は不甲斐なく宿に殘つた。

朝食を濟ませ、旭川に戻ると、又もや蒸すやうな暑さだ。六時以後燈火管制を嚴重に行ふと云

ふ御布令であるから、代理店招待並に社員會を日のかんかん當る時刻に開催、此處でも瀨戸牛の齋藤氏の輕妙洒脫な踊が喝釆を捲起した。酒間社業について隔意なく語り、話はいつ迄も盡きないのであつたが、日は暮れても燈火はなく、緣の硝子戸には黑幕が下されたので、盃をさす人の顏も辨別せず、暗闇の中で萬歲を唱へて散會した。

ホテルの窓々も黑い厚紙で覆はれ、風の通る隙間もなく、おまけに戸外では敵機襲來々々と叫びつゞけてゐるので、安眠をむさぼる事は許されなかつた。

十一日　北海ホテルの支配人渡部氏は會社の有力なる代理店だから、自然阿部所長はホテルの人達と馴染が深く、年若い從業婦人は、阿部ちやんといふ愛稱を以て呼んでゐる。北海道の羆とうたはれる流石に猛きものゝふも、妙齡の麗人軍に斯う呼ばれては、あばれる事も、吠える事も出來ないであらう。

午前九時四十五分旭川發。午後三時五十八分帶廣着。原田所長に迎へられ、代理店招待並に社員會の會場養鯉場に赴く。座敷の前に大きな池があり、鯉を養ひ、これを料理して客にすゝめるのである。從つて膳にのぼるもの、鯉の洗ひ、鯉の煮つけ、鯉汁といふ次第である。今日も引つゞき防空演習なので、日中の酒宴だつた。然るに私の宿は十勝河溫泉にとつてくれたので、終宴

迄居ると途中自動車が動けなくなる。主人側の中座は甚だ申譯ない次第であるが、旅人の事と寛大に見て頂いて、丸井支店長原田所長と共に失禮する。十勝河溫泉は近年開けたものだといふが、平原の何の奇もない所に、宿屋らしいのはたつた一軒で、至つてつまらないものに思はれたが、宿に着いて室の障子をあけると、靜に流れる十勝河を越えて、對岸一體の平野の廣漠たる趣は、如何にも大陸的風景で、壯大の美感の胸に迫るものがあつた。箱庭式風景を好まない私には、意外な儲物だつた。旭川地方は照りつゞけてゐるのに、帶廣附近は約一箇月も烟霧がかゝつてゐるさうで、此の夜も平野と河の面に薄霧が漲り、その底に月光の漂ふのが、原始的な風景と相俟つて、自然の描く寂寞の詩であつた。

十二日　午前七時三十五分帶廣發。午後四時十七分札幌着。車中は暑く、汗は衣服を濡らし、からだは疲れる。東京出立に際し、本店の二三の外野人から、今度は避暑旅行ですかと皮肉を云はれたが、避暑氣分などは少しも無い。東京にゐた方が涼しい位だ。

帶廣事務所の坂井辰吉氏は、石狩十勝兩國にまたがる狩野峠の景勝を、天下に宣傳紹介する事に努力した人で、汽車の過る時必ず眺望を忘れるなと、狩野峠に關する詩歌を紙片に認めてくれた。山頂から大平野を望む風景は確かに自慢の價値があるが、殘念なのは烟霧の爲めなかば遮ら

れて、野の果の空に連なる遠望のきかなかつた事だ。詩歌の作者は、建部博士一木喜德郎福本日南嚴谷小波菊池幽芳の諸氏だが、いづれも不出來で、此の大自然の美をうたふ事は出來なかつた。

札幌では、三菱關係の人々を料亭いづみに招待した。銀行商事鑛業の方々が、小樽や大夕張からわざ〳〵來て下さつたのみならず、明治生命現在の必死の奮鬪に贊意を表し、大に援助してやらうといはれたのは心強かつた。

十三日　午前九時五十分丸井村田の兩氏と共に函館にむかつて出立。途中小樽驛で、三菱銀行支店長安居院氏は、私の疾患を憐れみ、水虫の妙藥を携へて來て惠與された。四時二十三分着。函館は事務所で渡邊熊四郎翁に御目にかゝり、附近の西洋料理屋の一室を借りて社員會を催す。函館は旭川と肩を並べる大事務所であるが、近來少しく停滯の模樣と見受け、小西所長の奮起を促して置いた所、大泊代理店森田商會主森田逵氏の大口申込をうけ、俄に活氣づいた有樣で、下半期は大にやつて見せると緊張してゐた。この事務所は一人々々の顏ぶれを見ると一騎當千の大物揃ひだから、目下の經濟情勢が惡いとしても、一致奮勵すれば面目を一新する事確實である。函館大火直後の悲壯なる努力を想起して貰ひ度い。社員會終了後湯の川溫泉で慰勞會を催し、代理店渡邊熊藏氏同競氏、恰も來函中の森田逵氏、上野耕作氏佐々木理禧磨氏を正座に、所員一同くつろ

いで歡談、時の移るを忘れた。

十四日　函館の同窓會に招かれ、丸井氏と共に出席、明治生命と慶應義塾の關係に就いて話をし、援助を求めた。更に渡邊氏兄弟と會談、午後五時代理店の方々、同窓會の諸氏、事務所の諸君に見送られて、北海道に別れる。別れるに際し、小西晴一郎氏から唐もろこし三本を貰つた。甲板の上でそれを噛る姿を想像するとをかしいと丸井さんは笑つたが、何の憚る所かあらんや、出帆後海風に吹かれながら、これを事變下の晩餐に代用して舌鼓を打つた。

九時半青森着。久保澤支店長岩崎所長に迎へられ、久保澤さんと私は淺虫に行つて泊る。

十五日　朝早く岩崎所長が青森から自動車を仕立てゝ來る。今日は仙臺支店上半期優績代理店招待會が秋田縣湯瀨温泉で催されるので、十和田を經て其處にかけつけようといふのだ。その昔雪中行軍の兵が吹雪に暮れて一部隊凍死した悲劇を生んだ八甲田山の山麓を進む。朝の烟霧は雨となり、間もなく沛然と車窓を打つ。あゝ此の雨を北海道に降らせ度いと、私は口に出してつぶやいた。

明治時代に、紀行文と時文で、主として地方の青少年に讀まれた大町桂月が好んで終焉の地とした蔦温泉では、雨中その碑を拜し、奧入瀨の溪流に平行して進む。十和田の碧水が落口を見附

けて流れ下るもので、激流奔湍瀑布の變化、自然の儘の岩石樹林、北海道の荒削の壯大美とは全く趣を異にした精緻極まりなきもので、天下の絶勝として推稱して間違ひ無い。

十和田湖は海拔一千三百尺青森秋田兩縣にまたがり、豪壯と華麗と併有する名勝であるが、私は湖水そのものよりも、奧入瀨の溪流を讃美する。不幸にして吾々が十和田に到着した時は、雨の最も激しい時で、紺碧の水の光や對岸の山々の姿を明瞭にあらはさず、多少の遺憾を殘した。小汽艇には案內孃がゐて、東北訛を出すまいと苦心しながら聲を張上げてゐる努力には同情したが、不幸にしてスンセキヘキ(新赤壁)といふが如き名所があらはれるのであつた。

船から上つて晝食をしたゝめたが、折詰の辨當の姫鱒が大變うまかつた。再び自動車に乘り、湯瀨に着いたのは三時少し過ぎた頃だつた。

湯瀨は昔からある溫泉ださうだが、交通不便の爲め汎く世間に知られてゐなかつたところ、近年大旅館が出來て、俄に繁昌を增したと聞く。山懷につゝまれ、ホテルは川の兩岸に建ち、廊下を橋としてゆきゝする。優績代理店の方々、事務所長並に支店の接待員を加へ總勢四十餘人、折柄降りかゝる小雨の中を川原に下りて撮影し、つゞいて廣間に集まり、久保澤支店長本年上半期支店の業績頗る優秀なる事を語り、年頭壹千八百萬圓の目標を揭げたが、今やその達成は疑ふ餘

地なきに至つたので、此際各位の御協力を仰いで、年内二千萬の新目標を樹立し度いとはかり、滿場の贊成を得、次に私が會社全體の形勢を報告し、代理店代表として福島の油井德藏氏挨拶を述べ、更に若杉所長宣言文を携へて登壇、朗讀した。

年頭ニ際シ我ガ仙臺支店ノ本年度目標ヲ壹千八百萬圓ト定メ之ガ完成ニ努力シ來レリ然ルニ我社ノ躍進日ニ日ニ顯著ナルモノアル今日我等先陣ヲ承ル者前記ノ目標ニ甘ンジ居ルヲ潔シトセズ支店募集計畫ニ順應シ敢然起テ玆ニ目標ヲ二千萬圓ニ引上ゲ代理店特約店各位ノ俠援ヲ得テ斷乎完成ヲ期シ東北勢ノ意氣ヲ高揚セン事ヲ誓フ

宴會の餘興には村の青年の、劍を手にして踊る鄉土固有のものがあつた。溪流に臨む廣間は涼しく、主客うちとけて盃を廻らした。

十六日　今日は仙臺で社員會があるので、お客さまよりも一足御先に出立する事にしたが、昨日此の地へ來る途中、ゆきあつた自動車の運轉手が、こちらの運轉手にむかひ好摩驛へ行く迄の間に道路工事の爲め自動車不通の箇所があると注意してくれたので、宿の人に問合せて貰ひ、果して不通ならば汽車で行く手筈にしたところ、道ぶしんは大した事ではなく、今日は大丈夫だといふので、久保澤竹內松川三氏と同乘出發した。ところが途中の小村落の小流に工事未完了の所が

て動かなくなつてしまつた。吾々は下車し、運轉手はしきりに強引に車を進めようと試みたが效無く、これではゆくもかへるもまゝならず、どうなる事かと心配してゐるのを、近所の娘や子供達は面白さうに、痛快さうに見物してゐる。此處で車を見捨ては、今日の社員會にも間に合はないし、第一不便な足を引擦つて幾里も歩くのは堪らないと悲觀してゐると、運轉手は近所の農家にかけつけて應援を求め、丸太棒や鍬を手にした屈強なのが土を掘下げたり石や木材を取除き、やうやく道路に引上る事が出來た。好摩驛に着くと、昨夜何處かに豪雨が降つて、汽車は上りも下りも延着だといふ。閑驛の廂の下に佇んで、又しても降る雨を眺めてゐた。

時間は遲れたが、兎に角無事に汽車に乘り、途中盛岡附近の出水の光景に驚き、二度ある事は三度といふが、幸ひに三度目の事故はなく仙臺に着いた。直に支店樓上の社員會にかけつけ、久保澤さんは再び目標二千萬の希望を述べ、私も會社今日の躍進狀況とそのよつて來る原因に就いて所感を述べ、末永淸吉氏の挨拶あり、最後に岩崎所長は支店長の提唱並に昨日の優績代理店會席上の宣言に同志の參加を求めて誓約文を朗讀した。引つゞき八百条新館で七十餘名の大宴會あり、各々所懷を述べ、努力を誓ひ、會社の萬歲を心から叫んだ。

十七日　午前八時三十五分、支店の人達に別れ、歸途につく。支店長も副長も、七月の成績第一位の積りが臺北支部に破れたのを殘念がり、八月こそはやつて見せると云つてゐたが、思ひもかけず宇都宮で受取つた電報は今朝別れた久保澤さんからのものであつた。「オカゲニテ制覇成ル」といふのだ。最初仙臺の一位を報じ、次に臺北の一位確實と訂正されたのが、三度ひるがへつて仙臺第一位決定とはどうした事か、或は臺北の契約に事故が多くつき、精算の結果斯くは變轉したのであらうか。臺北の無念おもひやられるが、仙臺の歡喜も亦想見される。

午後四時十五分上野着。北海道よりも東京の方が涼しいやうだ。

――「社報」昭和十三年八月號

京城――福岡

十月八日　曉の空に消え殘る星を見、今日の快晴に安心し、勇んで床を離れた。五時半迄に飛行館へ集まれといふ指令なので、まだ明け切らぬ往來を自動車で行く。飛行館の待合室には、四十がらみの婦人と三十位の男とがゐた。眉目の特徴が姉弟らしく思はせた。定刻、係員に案内されて自動車に同乘したのは、その二人の客と私だけであつた。氣輕く挨拶されたので、どちら迄御出ですかときくと、大連ですと答へた。旅馴れた樣子が、大連へ行くのではなく、あちらへ歸るものゝやうに見えた。夜の名殘は次第に晴れ、東海道の車馬の往來は忙しくなる。羽田の飛行場に着くと、先着の客がその見送人達といつしよに待つてゐた。無風快晴全くの飛行日和で、廣い草原の穗芒さへ、ゆらぎもしない。

六時半、機は激しい爆音を立てはじめ、吾々は促されて機上に席を占めた。十四人乘の座席は

滿員た。その他に、二人の飛行士と、妙齡の婦人の世話係が搭乘してゐる。爆音は一際高く、機は滑走し、忽ち碧空に浮び上つた。世話係は甲斐々々しく、朝の御辨當を配り、雜誌を貸してくれたり、通過地點の說明をしたりする。少しも動搖せず、汽車汽船自動車よりも乘心地が好い。横濱も江の島も、瞬く間に過ぎ、富士の中腹をかすめてゆく。

九月は支店支部對抗募集で非常に緊張し、四千二百萬の新記錄を樹立した。昨日の締切で、優勝確定した近縣信越兩營業部では、早速稻田部長を中心に、所長諸君の內祝の宴が催され、私もその席につらなつた。赫々たる功績をたてた人達の集りに似ず、あまり口をきく人も無い。連日の奮闘に疲勞し切つてゐるのだ。最初の乾盃をする時に、私はあやふく落淚しさうになつた。しかし盃の數を重ねるうちに、流石に一座は賑かになつたが、所長諸君は所屬社員の必死の活動を語つて感謝し、部長は所長の奮闘を物語り、幾多美談の花を咲かせた。その昨晚の小宴の光景は、非常に深い感動を殘し、空高く飛ぶ飛行機上で回想して、一層印銘は濃くなつた。

平安に空を横切る乘心地に、私は深い睡眠に落ち、覺めた時は既に瀨戶內海にかゝつてゐた。島々を俯瞰する眺は美しいが、平面圖と同じく立體感を伴はないので、こしらへ物の氣がして自然を感じない。それにしてもこの好晴で、遙の下の海の小波さへ、紋樣のやうに見えるのである。

羽田をたつて三時間半の後、私は博多雁の巣飛行場の草の綠を踏んだ。此處で約三十分休憩し、稍小型の機に乘替るのである。待合室でお茶を飲んでゐると、大坪さんが自動車でかけつけ、お目出度うといふ。新記錄樹立の祝辭である。福岡は札幌を向ふに廻して、惡戰苦鬪の末敗北したが、つい先頃迄夢にしか見なかつた二百萬線を越え、士氣は大に揚つたといふ。敗れて悔なく、會社全體の成績の飛躍を喜び、この次の方策について所見を交換した。

今度の飛行機は八人乘で、羽田から同乘の大連迄飛ぶといふ姉弟の外は、大概新顏だつた。【百三十字略】

晝の辨當はサンドウヰツチとバナナとカステラと果汁であつた。些か甘過ぎて、あと口はよくなかつたが、もとより贅澤をいふべき筋では無い。腹が出來た爲か、又睡つた。

蔚山か大邱か、朝鮮の空にかゝつて稍上下の動搖を感じたが、雁の巣を出て僅か二時間、機は京城に安着した。高月店長、安野角園兩所長の出迎をうけ、天眞樓に投宿する。お盆の爲め、朝鮮服の人達は、色とりどりの裝をし、殊に赤黃綠紫の絹を着た子供達が可愛らしい。

今日は所長諸君と座談をしながら會食しようといふので、料亭に案內され、くつろいで夜を更かした。あしたに東京を立ち、夕には京城で酒を飮む、感慨なきに非ず。

九日　東京出立前、きちがひ天氣に襲はれ、十月の聲を聞きながら、九十一度の暑氣に汗を流したが、京城も蒸暑く、少し歩くと汗ばむ程だ。冬服に外套を用意したのは失敗だつた。

支店へ行くと、先月優績を擧げた人達が各地から集つて來て、狹い建物は混雜してゐる。一昨年初訪問の時あつた顏と、初對面の人と半々位だ。金剛登山の案内をして貰つた林川井田兩君が、共に優秀の成績を擧げ、來年四月參拾萬倶樂部の際又東京で逢はうと云つてくれたのは嬉しかつた。お馴染の三人の金君(金學權君金瑢浩君金東洛君)が重責を帶び、之を果して居るのも嬉しかつた。その時、支店事務室で、顏色の冴えない、痩せた女の子の働くのを見て、ひそかに健康狀態を心配し、醫員の診査を乞ふやう注意したのが、今は妙齡の皮膚に艷を湛へ、見違へる程丈夫さうになつてゐたのも嬉しかつた。

午後から、支店の二階で社員大會が開かれ、事變が保險事業に及ぼす影響と、我社の現狀につき所信を述べた。夕方から、雅敍園といふ支那料理店で晩餐會があり、賑かで愉快だつた。

十日　天氣が變つて小雨となり、明日の飛行が心配になる。朝から夕方迄支店にゐて、夫々の任地へ歸る人達と別辭をかはす。夜は市內の有力な代理店を御招きして、酒間社業につき御意見を承り、又自分の考へを述べた。偶々清津代理店田中源右衛門氏が來城されたので、同席を願つ

たが、音曲の御たしなみが深く、いゝ咽喉を拜聽した。

十一日　心配した天氣は最上のものに變り、秋晴の爽かな空は八日のそれに勝る位だ。支店に立寄つて諸君に左樣ならし、高月安野兩氏に送られて飛行場に行く。既に飛行機は待機の姿で、客は待合室にいつぱいだ。往復とも無上の天候に惠まれる運の強さを語合つたが、やがて出立の十一時二十五分に一同搭乘しようと歩き出したところ、一寸待つて下さいと係員に引止められた。大邱蔚山方面の密雲が低く、おまけに福岡の方は雨なので、只今問合せ中だから暫時控へてゐてくれといふ。あまりに頭の上の空が青く澄んでゐるので、そんな心配は嘘としか思はれない。そのうちに、新京大連方面からの機がつゝがなく到着したが、これも內地へは直航せず、乘客は此處でおろされてしまつた。そのうちに福岡からこちらへの機も飛行を見合せてゐるといふ情報が入り、或は缺航となるかもしれないが、午後一時迄待たなくてはいづれとも確定しないといふ。氣の早い人はあきらめて、汽車にかけつけようと出かけてゆく。私は萬一缺航の場合は、明日の飛行機に乘り度いと申込んで見たが、明日のは既に滿員で駄目だといふ。結局一時迄待つたが、遂に缺航の宣告を受けた。急用の時は飛行機には乘れないといふ不思議な論理に苦笑した。狐につまゝれた形で、未練らしく青空を仰ぎ見てゐたが、此の上は汽車でゆく外に手は無いので、停

車場へ乘つけ、電報で福岡支店に明日の飛行劵の購入を依賴し、中途半端な晝食をして、四時の急行迄時間を消すのに惱んだ。若し豫定通り飛行してゐたら、羽田に着く頃、やうやく京城に別れた。

汽車の中には、先刻飛行場で見た顏があつちにもこつちにもゐる。自分丈が乘りそこなつたので無いのだと思ふと、稍なぐさむ。日が暮れて、大邱驛を過る頃、窓外の雨を見た。この雨の爲に飛行出來なかつたのかと思ふと忌々しかつた。何の爲か汽車は延着し、角園所長のお迎をうけ、大坪さんから飛行劵買へたといふ電報を受取り、連絡船に乘ると直ぐに出帆した。十二時に近かつた。

十二日　曉方の冷い風に目を覺まし、窓外を見てがつかりした。雲は低く霧雨が降つてゐる。これでは飛行機は飛ぶまいから、いつそ下關から汽車にしようかとも思つたが、こゝ迄來たからは大坪さんの顏を見て歸り度い氣も起り、少しばかりの雲の絕間に明るい空の一二片見えるのをたよりにして、門司へ渡る決心をした。船着場に永島所長がわざわざ來てゐて、世話になる。汽車の途中から三四の所長が加はり、私の爲に福岡へ集つてくれるのだとはじめて氣がついた。伊藤副長も乘込み、熊本事務所が素晴しい成績を擧げたので、その祝賀の會に行くのだといふ。今

日は飛行機は飛びませんよと釘をさゝれた。博多驛に出てゐた大坪さんも、飛行會社から缺航の通知があつたから、特急さくらの寢臺券を買つて置いた。その時間迄は、參集の所長諸君と河豚を喰べながら懇談しませうといふので、好物の河豚に釣られて斷然飛行はあきらめた。先づ支店に行き、在店の人達に逢ひ、更に所長諸君と車をつらねて料亭に赴き、貳百萬達成の祝盃をあげたところ、支店から電話で、急に模樣が變つて飛行機は出るといつて來た。十分心は殘つたが、諸君に別れを告げ、飛行場へ車を走らせた。

一時半、二十一人乘の大型機に、乘客僅に六人とは、もつたいない事である。幸ひに雲切れして、次第に靑空が廣くなり、日光も豐かになつて來たので、もう大丈夫と思つてゐたところ、世話係の婦人のいふのには、關東方面の天候が惡いので、果して羽田迄行けるかどうか、少なくとも延着は免れまいとの事だつた。此の世話係は自分で新米だと名告つてゐたが、大變親切で、通過地點につき行屆いた說明をして吳れた。瀨戶內海を通る頃は殆んど晴天といつてもよかつたが、淡路島へかゝる頃から雲塊にぶつかり、上下の動搖もはげしく、椅子にとりつけてある皮帶を腹にしめろと世話係が注意した。それでも大阪や奈良を上空から眺め、たいした事はあるまいと多寡をくゝつてゐたが、吾々よりも先に出發した一機は、瓦斯に妨げられて四日市に不時着陸し、

此の機も多分濱松へ着陸するだらうと申渡された。間もなく鈴鹿を越え、伊勢灣へ來ると、全く霧に包まれて、窓を打つ雨の外は何も見えなくなつた。濱松でおろされては困ると思つたが、爭ふ術は無いのだから、運を天に任せるばかりだ。觀念してると、世話係が來て、あれが濱松です、飛行士の申しますには、行くところ迄行つてみるさうですと報告した。その頃から又霧はうすらぎ、富士山こそ見えなかつたが、田子の浦や靜浦に浮ぶ小船もはつきり見えるやうになつた。箱根邊で、動搖は又ひどくなつたが、間もなく薄暮の海に掌に乘る程の江の島を見つけ、我家へ歸つた氣がした。今が夕餉の時刻とて、方々の家に灯が輝き、横濱のネオン・サインが花園を展開すると思ふと、機は突然下降しはじめ、忽ち羽田に着陸した。五時半。飛行機が珍しく、迎ひに來た子供達は、約一時間待つてゐたので、手も足もつめたかつた。

——「社報」昭和十三年十月號

伊香保——名古屋

一

十月十八日　取締役會を中途で退席し、午後四時十五分上野發の汽車に乘る。優勝旗を獲得した信越營業部の祝賀大會が、伊香保で催されるのに馳參じるのである。七時十六分澁川着、木暮別館と記した古風な提灯を高くかざしてゐる宿の番頭に迎へられ、自動車を急がせる。宴會は既にたけなはで、六十人の勇士が、日頃の勞苦を忘れて、仲よく盃をあげてゐる。ところが、襖一重隣の室では、殺氣だつた氣勢で、のべつ幕無しに騷々しく合唱してゐる一團がある。××××の連中だといふ事だつた。此の方は八時に切上る筈なのださうだが、その時間になつても騷ぎ止めない。あきらかに此方が明治生命だといふ事を意識して、面あてがましく騷いでゐるのらしい。廊下の障子にはめてある硝子の向ふに醉顏を並べて、こつちの座敷を覗いたり、最もはげしいの

は、肌脱ぎで、吾々の座敷についてゐる舞臺の樂屋に入り込み、喧嘩を賣らうとする者もある。どういふわけか、どの面もどの面も、鼻の頭や額や頬に白粉を濃くつけてゐる。後で聞くと、帳場で無理を云つてあばれた者もあつたさうだ。吾々の方の勇士達の、樂んで亂れない樣子と比べて、社風の相違のはげしさが觀取された。

隣がやうやく解散し、わめき怒鳴り、廊下を踏み鳴して立去つた頃から、こちらは次第に賑かになり、他人に氣兼なく、舞臺の上で、かくし藝競演となつた。

十九日　晴天の日の高原の遠望は、人の心を高く、爽かにする。昨夜の宴會場に參集、稻田部長の挨拶、私の祝辭、社員表彰式が行はれ、萬歳を唱へて散會した。榛名登山の連中に加はり、ケエブル・カアで頂上に達し、乘合自動車で榛名湖畔を一周した。芒の穗は白く、龍膽は紫に、蔦紅葉は眞紅に、山上の秋をいろどり、小鳥がしげく鳴きかはす。名勝案内の娘さんは、一生懸命で、抑揚をつけて美辭をつらねるが、あまりに抑揚をつけ過ぎて、聽取りにくゝ、私の經驗した各地の案内孃の中最も不出來のものであつた。

下山後、稻田西谷兩氏と自動車で高崎に至り、汽車に乘つた。紅葉には未だ早いが、赤城妙義の峰々は黄に色づき、山家の背戸の柿の實が、くつきりと赤い。長野に泊るよりも戸倉溫泉の方

がよいといふので、同地笹屋ホテルに宿が定めてあつた。長野の八十二銀行頭取黒澤利重氏は竹馬の友で、豫而對面し度いとの申入に接してゐたので、渡邊所長を通じ、長野市訪問の事を知らせて置いた處、先方から戸倉迄出て來てくれた。久振であひながら、社業の後援依頼を先づ第一に口にしなければならないのは辛かつた。

戸倉は別段の眺望を持たず、たゞ後に山を控へてゐるばかりで、風景の魅力は無いが、宿は經營者の志格のあらはれか、よく行屆き、座敷の受持の婦人は上品で行儀よく、おちついて眠る事が出來た。

二十日　今日は亦天氣よく、わざわざ自動車で迎ひに來てくれた渡邊さんの案内で、姨捨山に上る。三十餘年前學友と共に此の山裾の小村落の商人宿に泊り、夜中蚤に攻められて堪へられず、折柄の月夜を幸ひに、麥酒瓶をぶらさげて來た事があつた。その友人は數寄の運命を短く終へ、私はねばり強く老の坂を登つてゐる。

長野では事務所に立寄り、善光寺に參詣し、更に社員會の會場西洋軒に赴く。食前簡單に社業の現狀と將來の希望につき意見を述べ、短時間ながら食事中にも隔意なく話合つた。一時四十一分長野發、三時二十五分高田着。後藤所長に迎へられ、事務所に行き、次で縣社榊神社に參拜す

う。社員伊予數雄氏の肝入(きもいり)で、戰勝と社運繁榮の祈願を乞ひ、神饌を頂いた。

高田事務所三連勝祝賀會には、代理店の方々も出席され、盛會だつた。終宴後、後藤佐藤兩氏の先導で赤倉に行く。柏崎代理店の吉田さんも同行、二臺の自動車はいくつかの村落を過ぎて山路を登つて行つた。小雨が窓硝子に露を結び、木立の深い路は眞暗だ。突然私達の乘つてゐた車が止り、何か故障が起きたといつて、運轉手は狼狽して下車し、附近の農家から修繕用具を借て來た。やうやく修復して進行しはじめたが、完全で無いと見えて滑かには行かない。遂に此の車を見捨て、他の一臺が先に觀光ホテルに行き、引返して來る事になつた。私は先へ行く車に移され、先着し、薪を燃やす煖爐の前で、ホテルの人の話を聞いた。正月が一番忙しく、夏もかなりの客があるが、秋も深くなれば全く寂しく、しめ忘れた窓から小鳥や木菟(みゝづく)が飛込んで來る位だといふ。その話の後で風呂場に行つたところ、雀が舞込んでゐて、湯槽(ゆぶね)のふちにとまり、湯氣に醉つてゐるやうな姿だつた。

二十一日　目が覺めてみると嵐だ。和風家屋ならば夜中氣がついたであらうが、洋風家屋のおかげで何も知らなかつた。日本一の展望を誇る赤倉の朝景色を大に期待したのだが、煙雨にかくれて遠くを望む事は出來なかつた。眼前のホテルの庭は、白樺が倒れ、草原は荒海の浪のやうに

はげしく起伏してゐる。東京も大變な風速とき丶、又しても風水禍かと嘆息した。

吉田さん、後藤佐藤兩氏は高田方面へ、吾々は田口驛へ下り、零時四十三分發の汽車に乘る。雨は次第に止み、薄日が照り、青空が少しばかり見える。稻田さんは、年齢の加減か近來は食慾常人に異ならずと稱してゐるが、汽車辨當丈では不足で、西谷さんに餡パンを買はせ、その餡の分量が少ないと小言を云つたり、途中の驛で素早く蕎麥を喰つたり、未だ御さかんなものである。午後六時五十八分上野着。東京の町々ば風雨に洗はれて奇麗だ。驛から直ぐに亡父の法事にかけつける。

二

十月二十四日　午前八時新宿で野老さんと落合ひ、山梨明保會に招かれて行く。昨日迄のあやしい天氣と違つて、素晴しい快晴だ。武藏野の秋は黄に金色に輝いてゐるが、私は此間からの旅行と宴會に疲れて、暫時眠つた。大月驛乘換の際、此地の代理店古屋氏と猿橋代理店奈良氏、三橋渡邊兩君が待合はされ、以後三橋さんの說明で郡內の一隅を視察する。惠まれた天氣で、山の姿はくつきりと浮び上り、稻田に圍まれた農家の柿の木が、累々たる紅玉を結んでゐる。新雪を頂く富士も、青空に聳えて高かつた。十時四十三分吉田着。山梨吉田代理店渡邊氏小沼代理店小

山氏も參加され、先づ淺間神社に參拜し、途中第十銀行有信銀行各支店に刺を通じ、河口湖畔富士ビューホテルに着、晝食。河口湖は先年十數人の一行で通過した事があるが、その時は展望の位置が惡かつた爲か少しも感心せず、その後も人に訊ねられると、あんなつまらない所に行くのはおよしなさいと答へてゐたが、ホテルの邊から見た景色は非常によく、河口湖に對しまことに申譯の無い氣がした。食後湖畔で記念撮影をし、御坂峠を越えて甲府に出る。途中の山々の紅葉は未だ早目だが、それ丈若々しい光に輝いてゐた。

甲府の談露館は、先年來た時、庭の花櫚の實の香に醉つたところで、なつかしかつた。最近々所の溫泉場から湯を引いて、愈々繁昌は目出度いが、湯は少々ぬる過ぎる。

事務所へ出向き、所員諸君に社業上の意見を述べる。

明保會は八百竹で開かれた。細田さんが幹事を代表して挨拶され、青山所長私野老さんの順に夫々所懐を述べ、やがて宴會となつた。代理店の方々と、會社側と入亂れての歡談を十分に盡した。

二十五日　昨日に引かへて霧の深い、今にも雨になりさうな天氣だ。庭の花櫚は澤山實をつけてゐるけれど、まだ時期が早く、青くて匂はない。午前七時四十三分甲府發。心配した雨は時

々あるか無いかの程度で、やがて次第に晴れて薄日が照りはじめた。今日の富士は頂に白雲がかゝつた儘動かない。十時四十六分富士着、東京行に乘換へ沼津に下車、布施所長に迎へられて事務所に行き、所員諸君と同道近所の家で晝食をし、三十五銀行の杉山さんにも御出を乞ひ、歡談する。社員杉山金太郎氏は、がらがらした聲で冗談話をするのが得意で、今日も一人で座を持つて居たが、その話は外見は頗る無雜作だが、信念の裏うちがあつて保險人の覺悟がはつきりと組込んである。味はつて愈々感服し、此の人の成績の並々ならぬのも當然だと思つた。

午後一時四十一分沼津を發して再び西に向ひ、三時十分靜岡着。猪瀨所長に伴はれ、淺間神社に參拜、驛前の旅館で附近代理店の方々並に優績社員諸君と會談する。事務所にも一寸立寄つたが、これも驛が近く、便利な場所だつた。主客賑かに酒宴となつたが、私は明日又近縣浦和の祝賀會に出席の約束があるので、野老さんを殘して中座し、六時十八分の汽車に乘る。九時東京着。

三

十月二十六日　九月の支店對抗大募集で第一位の榮譽を獲得した近縣營業部の中でも、僚友千葉事務所と全國第一位を爭つた浦和事務所は、今年度累計成績に於ても第二位を占め、連勝に連勝を重ねたのは所員の努力ももとよりだが、協力後援を惜まれなかつた代理店の賜であるとし、

有力なる代理店を湯河原に招待して祝賀會を開き、私も席末を汚す事となつた。三時十五分、稻田さんといつしよに東京を立つ。快晴。

湯河原は、その昔學生時代、正月四月の休暇には屢々出かけたところで、今回の會場中西は、私の馴染であつた。私が文學作品の最初のものを書いたのも此の宿で、當時の主人龜吉君は、肥つた體格の持主で、自ら湯河原西鄕と稱する變物であつた。土地名物の赤ペン白ペンの類を、川向の靜岡縣で喰ひ止め、神奈川縣には侵入させ無いといふのが自慢だつた。私などが心ばかりの茶代を置くと、學生の分際でそんな事をする必要は無いと斷つたものだつた。大正五年外遊から歸つた時も、約一週間旅疲れを休めに行き、その際河原の岩に腰かけて共に寫した寫眞は今も篋底にある。その後龜さんは死去し、宿は他人の經營に移つたと聞いてゐたが、それは間違で、かすかに記憶にある龜さんの未亡人が帳場に坐つてゐた。昔は粹なおかみさんだつたが、今はしなびたお婆さんだ。

變つたのは人ばかりでなく、湯河原の町そのものが大變な變りやうだ。第一中西旅館の場所が變り、湯治場といふ感じが薄くなり、さかり場といふ感じが強くなつた。しかし山や森にはその儘の面影を見出し、感慨深いものがあつた。

主人役の金井所長、所員諸君、お客側の代理店の方々は既に先着されてゐるので、吾々も急いで入浴し、宴席につらなる。前所長佐久間さんも、夫人の病中にも拘らず參加し、金井さんの挨拶の後に、所感を述べた。この度の招宴は全く金井所長の催で、吾々も純然たるお客である。費用を惜まない盛宴で、代理店の方々も互に馴染の深い人が多いので、極めて親しみのある會だつた。

二十七日　稻田さんの鼾は高からず低からず、規則正しい韻律で續いてゐる。私はひそかに室を出て、入浴し、次の間の雨戸をあけて朝日を浴びた山の姿を見てゐた。やがて起きて來た稻田さんは、あなたの鼾は最初の五分間ばかり非常に猛烈で、どうなる事かと思つたが、その後靜まりましたよといふ。お互に自分自身の事は知らないのが面白い。

昨夜の宴會場に參集、再び金井さんの鄭重な挨拶あり、私が指名され祝辭を兼て會社の現狀と抱負を述べ、稻田さん之につゞき、最後に代理店代表川越(かはごえ)の山崎さんの御挨拶があつて、朝飯を共にし、お土產迄頂戴して散會となつた。

立際(たちぎは)に、玄關でおかみさんに名告(なのり)をあげたところ、先方もよく覺えてゐてくれて、亡夫といつしよの寫眞があると云つてゐた。

東京着、直に出社し、川原林山下兩先輩に、浦和事務所祝賀會の盛況を報告する。

四

十一月六日　午後九時上野發。

七日　午前八時十分金澤着。坂本さん赴任當時の宿みやぼホテルの世話になる。北陸の十一月は既に寒からうと想像して來たが、存外暖く、緣の硝子戸をあけ放してもこたへず、日ざしは豐かである。

午後、支店階上に於て、年度責任達成祝賀大會が催され、各地から優績者が參集し、誇の統計圖を壁面に貼出し、各店との比較を示し、王座奪還の喜びを端的にあらはしてゐる。金澤支店は今年一月二月連續して支店の第一位を占め、全國に刺戟を與へ、競争心を燃えたゝせたが、その後鹿兒島四國の擡頭に暫く二位三位に甘んじなければならなかつた。然るに此處に列席の諸君の底力は飽迄も根強く、全國無比と稱される顏揃ひの所長の一致協力は遂に全面的に進出して、目出度王座を奪還し、同時に年度責任額を完成し、各事務所擧つて年末迄には二割増必成を誓ふといふ拔群の功績をうちたてたのである。難事を成し遂げた者のみが知る滿足と歡喜が、會場に渦卷くやうに感じられた。巨軀を起した店長は、先づ優績者に對し感謝し、今年度支店の步んだ道

を回顧し、將來の理想と希望を述べ、次に私が祝辭と併せて我社の現狀並に事變下の覺悟を語り、所長代表大橋氏の挨拶、各事務所代表の演說があつて一先づ散會し、夕方から鍔甚で大宴會が開かれた。遠く雪を頂く連峰を仰ぎ、近く犀川の流を俯瞰する此の樓の眺望は、いつ見ても比ぶべきものなしと思はれる。八十人を收めてあまりある座敷には、國旗と社旗をかけつらね、その下に勇士の面々が肅然と居並んだ時は、豪壯華麗胸を打つものがあつた。祝勝氣分で盃は飛び、正面の舞臺は演藝競技會となつた。働く時は全力をつくせ、飲む時は大に飲めといふ坂本さんの指令通り、大に働いた人々は、さかんに飲む。乍然私の常に感嘆するのは金澤支店の人達は、飲む時は鯨となるが、決して虎にはならないのである。兎角大人數の宴會では、元氣あふれ過ぎて口論立廻をひき起す事もあり勝だが、金澤支店の會合は、引際の美事さに於て無比である。此の夜も萬歲を三唱すると、忽ち全員靜肅にかへつて、見る間に座敷には人影がなく、國旗と社旗のみが燭光に輝くのである。その節度の正しさは軍隊の如く、敬服の外無いのである。

　八日　昨日の快晴にひきかへて、今朝は北國らしく時雨が降り、又晴れては雲の間から青空を見た。晝は市內事務所の主催で、有力なる代理店の方々を招待し、私と坂本さんは會場から驛にかけつけ、福井へ向つて立つた。福井では、事務所主催の社員會がだるまや百貨店で行はれ、席

上事務所全員から、今年最終の二ヶ月に六拾萬圓必成の誓約を得、目録を頂戴した。當市は多年××× 生命の地盤と稱され、他社は頗る振はず、我社に於ても手の出ない土地となつてゐたが、上闕所長赴任以來面目一新、今年は××× と肩を並べる迄に至り、從來富山高岡金澤市内を支店の三大事務所と稱したが、今や福井を加へて四大事務所といはなければならないやうになつて來た。會半ばにして沛然たる雨を聽いたが、間もなく晴れ、吾々は上闕所長と同行芦原に赴き、開花亭に投宿、武生の赤土所長と落合ふ。芦原は平地の溫泉場で、特に風景のすぐれたものでは無いが、此の宿の大きさは驚くばかりで、うつかり廊下に出ると忽ち迷子になりさうだ。芦原がどんな所であるか、左記宣傳文を御覽になれば大體の想像はつくであらう。

つんと鼻にくる硫黄泉の地下から湧いた沸騰泉、それを程よく湛へた湯つぼの中で、あられもなく五體の隅々までが恰も人魚と見まちがふ、無色透明泉が芦原の出湯です。お肌に感じた出湯のさめやらぬ、淸々しき觸感をそのまゝに淺酌低唱云々

しかも、あられもなくといふところには強調點をつけてゐる。

吾々は湯に入り、お膳を並べて仕事の話をしてゐたが、はるか向ふの部屋では、淺酌低唱ではなく、さかんに彈き、さかんにうたつてゐる。それが芦原節ではなく、草津節で、繰返し繰返し、

いつ迄も止まないのである。雨後の空には月が出て、庭の池に泳ぐ鯉がはつきり見えた。

九日　芦原を發し、途中上關赤土兩所長と別れ、金澤經由和倉に赴くのであるが、連絡が惡く、金澤驛で待つのは馬鹿々々しいので、支店に引返し、時間を消して再び汽車に乘る。能登半島の汽車には等級がなく、それは少しも差支無いが、魚菜行商のをばさん達が大きな荷物を背負つて乘込み、なまぐさい臭が室内に滿ち、非衞生的に感じられる。行商のをばさんの數はかなり多いのだから、行商人專用車を設けてはどうかと思ふ。をばさん達の會談に耳を傾けたが、同じ日の本の國民ながら、少しも聽取る事は出來なかつた。

和倉溫泉和歌崎旅館には、七尾輪島兩事務所の共同主催で、有力なる代理店主を御招きし、又鹿島郡越路村二宮の囑託醫鍛治武一郎氏も多忙の中を參會された。此の地には昭和八年の夏水澤さんに伴はれて來た事があり、その時の宿はたしか銀水閣といふのであつた。當時よりも更に埋立地が多くなり、一層繁榮してゐるやうに見える。海岸の大巖の上で記念撮影をし、暫く薄暮の海と空を眺めて休息した。燈火がつくと宴會だ。沼田濱谷兩所長の挨拶、店長と私も感謝と祝賀の辭を述べ、來賓總代七尾代理店春木氏の答辭につゞいて鍛治氏は、囑託醫たる事十八年、當時明治生命代理店として努力された北村氏が、保險は宗教なりと喝破し、此の信念を以て勸誘され

た悟道の尊さは、深く感銘する所であると意義ある話を披露され、直に賑かな酒宴となつた。來賓のかくし藝も出、右と左に對峙する兩事務所からも舞臺へ選手を送出したが、此の競爭は確實に七尾勢の勝であつた。味方の不振に奮起した濱谷所長は終宴間際に發言を求め、藝事の競演では負けたが、今月の成績では負けないぞと宣言し、沼田所長も之に應じ、斷じて輪島の下位たる事を肯んじないと叫び、兩事務所員いづれも味方所長の聲援に飛び出し、場面頗る緊張したので、私が間に立つて兩所長の握手を求め、相互に乾杯し、來賓各位の拍手の中で萬歳を齊唱した。此の一文を讀まれる方々よ、どちらが勝つか、多分の關心を以て締切を御待ち下さい。

　十日　昨夜は俄に風が烈しく、雨も音高く硝子戸を打つたが、今朝は再び日光を浴び、吾々の旅の幸運を話合つた。皆さんに別れ、坂本さんと私は和倉を立つた。連日の疲勞で、汽車に乗るとどちらも先を爭ふやうに睡つてしまふ。殆んど口もきかない。本津幡で下車し、自動車を持つて迎ひに來てくれた毛理所長、荒井利吉氏と同乘、倶利伽羅峠を越えて富山縣に入る。石動代理店倉谷喜右衛門氏を訪問し、次に井波代理店井波商行に刺を通じ、庄川水電のダムを見物し、出町代理店神澤新右衞門氏を訪問し、小雨の中を高岡迄走つた。今迄汽車の窓から眺めてゐたこゝらあたりの農村を近々と見るに及んで、その趣の深さに感服した。杉木立の中にかくれて建つ家

々の風情は、手堅く富める姿を示し、我社の大地盤たる富山縣の力強さを感得させるのであつた。事變と、過激なる革新に、東京は今や暗い感じで包まれてゐる。偶々かゝる靜穩な風景に接して心の開ける思ひがした。

高岡事務所には所員研究會が開かれてゐて、十一月の五拾萬突破大募集に付討議最中だつたが、私も席に加はり、自分の所感を述べた。夕刻から料亭延對寺で宴會があり、代理店の方々を正座に、くつろいだ時を過した。宴果てゝ富山に到り、海電ビル・ホテルに泊る。

十一日　今日も亦晴れたり降つたりはつきりせず、寒氣は俄に加つた。午前中に富山代理店天谷氏を訪問し、次に奥田、東岩瀬兩代理店の御宅へ伺つたが、折惡く御不在だつたので、名刺を殘して引返し、晝食後入善にむかつて立つ。入善驛には代理店の方々、漆間忍吉氏が待つて居られ、店主と御縁の深い素封家米澤元貞氏邸に御案内を受け、椎と銀杏の大樹を中心とし、清流を引入れた豪壯閑寂な御庭に面した御座敷でお茶を頂いた。米澤家は今年新嘗祭に、おそれ多くも宮中に於て御用ひ遊ばされる粟の獻納を仰付けられ、既に滯無く獻上されたとの事で、私共も獻納粟を拜見した。

入善代理店古谷常三氏は昭和二年御引受以來頗る熱心に盡力され、今般壹百萬達成祝賀會を催

される事になり、私も御招待を受けたのである。店主は手廣く雜貨を商つて居られ、その御店は私共の伺つた時も忙しくお客を迎へてゐた。祝賀會に先だつて、店主は御店の保險係田中氏と、代理店御引受當時の受持社員横越貞吉氏と、現在受持社員漆間忍吉氏が、壹百萬を築き上げる爲の協力に對し表彰式を行はれ、吾々も共席につらなつた。三功績者は店主から表彰狀と共に記念品を贈られ、私共も加つて記念撮影をした。まことに心入れ深く、奥床しい事で、吾々も喜びを共にしたのである。

夕方から清八樓に於て盛宴が張られ、土地の有力者の顏が揃つた。先づ古谷氏の御挨拶の次に私も祝辭を述べ、併せて現下の保險事業と會社の狀況を語り、米澤町長の答辭があつて、盃が盛にゆきかふ。まことに手厚い御接待で、會社も面目を施した。

この夜大橋所長の先導で、吾々は宇奈月に泊る。

十二日　雨天ではあるが、紅葉の谷と溪流の眺望はよく、山頂には初雪が見えた。日電の厚意で黑部峽谷の秋色を探らんと、雨に頓着なく宿を出た。電車と稱してゐるが、トロッコに屋根を乘せたもので、左右はあけひろげであるから、吹けば寒く、降れば濡れるのである。紅葉にはもう遲いといふが、山々は紅に黄にいろどられ、トンネルをくゞる毎に色を增し、谷々の碧潭に映

つて愈々風情を加へた。登るに從て寒氣ははげしく、雨は霙となり、みぞれは霰となり、あられは遂に雪となつた。見る見る山々の樹々に降り積り、豫期しない景色にめぐりあつた。時間の都合で奥の奥迄行く事は斷念し、最初から小屋の平といふ所迄で引返す申合せだつたが、その少し手前で停電し、トロツコは雪中に立往生してしまつた。腹は減る、風は遠慮會釋なく雪を吹きつける、此の儘時を經ては今夜の富山事務所の會に間に合はないし、困つた事だと思つたが、さりとてどうする手段も無い。乘合ひの山の人達は氣短で、さつさと下車して雪を踏んで行つた。二十分、三十分——やうやく電流の通つて來た時はほつとした。豫定の通り小屋の平で引返し、宇奈月で遲い晝食をしたゝめ、富山へ戻つた。

富山事務所主催の會は奥田屋で開かれ、出席代理店十八、社員多勢、大橋流の豪華版だつた。再び海電ビル・ホテルに宿泊。

十三日　雨。富山中央代理店尾山三郎氏の御玄關先迄伺ひ、更に先月村元千代女史が二十萬を獲得した契約者の事務所へ廻つたが、日曜の事とて御目にかゝれなかつた。これで愈々金澤管内とは御別れだ。支店王座奪還の勢か、どこの事務所も緊張し、社員諸君も元氣いつぱいだ。毎日の汽車と宴會で疲れたが、愉快だつた。七日の支店の大會席上、輪島事務所の辦谷氏は、私は三

惣主義であります、一に仕事に惚れ、二に土地に惚れ、三に女房に惚れて勉強してゐますと云つたが、私は一に蟹に惚れ、二につぐみに惚れ、三にばい貝に惚れたと云ふ冗談をのこして、坂本さん大橋さんに別れ、一人富山線の汽車に乘つた。まことに北陸の秋の食味はすぐれてゐた。

富山を出て約一時間、笹津あたりで雪になつた、累々として柿赤く、次第に山は深くなる。此の線には高山迄行かなければ辨當は無いときいてゐたので、私は富山の驛で仕入れて來た。それを開いて、つめたくなつた飯のあぢきなさに、蟹、つぐみ、ばいの三惚をなつかしく思ひ出してゐると、突然女の聲で、あゝあたしも何か食べたいなあと嘆息するのが聞えた。たつた二人の乘合ひの男女で、男は私同樣の薄禿、女は四十がらみの粋な着つけで、どうも夫婦とは受取りにくいのであつたが、餘程空腹に堪へなかつたのであらう、見榮も外聞もないのであつた。私はびつくりして箸をやすめたが、眞實籠つた此の一聲に刺戟されて、俄に辨當がうまくなり、一粒も殘さず平げた。男は悲鳴に似た女の歎きに攻められて、高山迄行けば何か賣つてゐるから我慢してくれとなぐさめるが、女はなかなか承知せず、高山迄は未だ一時間半かゝるではないかと不平を鳴らしてゐた。

その高山には代理店川上辰彦氏と小磯所長が待つてゐて、五分間話をした。川上さんはいつも

私に、高山へ遊びに來いと誘つて下され、私も高山の特殊の文化はゆつくり探つて見たいと思つてゐるのだが、いつもゆとりの無い旅をしてゐて目的を果さない。今回も亦川上さんに御叱をうけてしまつた。

雪は四五寸積り、なほしきりに降つた。辨當にありついた男女は頗る御機嫌で、一つの林檎を二人で噛つてゐた。高山から小坂あたり迄紅葉が美しかつた。下呂で男女は下車し、あとは滿員になつた。醉拂つた數人が乘込んだので、私は眼をつぶり、いつの間にか睡つた。途中小池副長が乘り、岐阜では關支店長と南出所長と三谷代理店竹內氏に御目にかゝつた。今日此處で、代理店會があつたのださうだ。午後六時十九分名古屋着。

十四日　朝、觀光ホテルを出て支店の方へ歩いて行く途中、四日市の山中さんが後から肩を叩いた。今、ホテルへ行つたら、もう御歸になりましたといはれたが、きつと支店にゐるだらうと見當をつけて追かけて來たと云はれる。共に支店に赴き暫時會談、十時半から階上で社員大會が開かれ、私も思ふが儘の意見を吐いた。各事務所代表の演説があり、四百萬必成を期し、今月の相手方大阪を倒さうと大に氣勢をあげた。名古屋ホテルで晝餐を共にし、こゝでも引つゞき優績諸君の挨拶があつた。中で、笹岡所長が大聲朗讀した原稿は、頗る示唆に富むものであつた。乞

ひ求めて玆に掲げる。

私は東濃事務所長であります。

本日此處にお集りの方は一員殘らずこの仕事に熱心の方ばかりでありまして、この際に物を言はせて頂く機會を得た事は私の最も欣快とする所であります。

さて考へて見まするに、募集に對する氣持、心構へに就て事變前と今日とでは大に變つて來て居ることに氣付きます。

昨年頃迄は勸誘に用ひた文句に、或は募集督勵の詞に、生命保險に加入することは貴家將來の爲だとか、又は生命保險を募集することは加入者の爲になり、募集員の爲になり、而して其れが會社の爲になる極めて良いことでないか等と申したもので有りますが、今日に於ては先づ第一にお國の爲に、第二に銃後の護りに、或は又國民貯蓄の奬勵に現下の國策に順應した最も良い等と、大分話す事が大きく成つて來て居ることに御留意が願ひたいと思ふのであります。

今迄は愛社心を持つて本月はうんと努力して頂きたいと申しましたのを愛國心を持つて或はお國の爲に奮勵努力せよと申さなくてはならぬ様になつて來て居るのであります。

會社の爲とか、見込客の爲とか、或は社員お互の爲とか等の小さい事を土臺として勸誘したのは事變前の事で有りまして、只今ではお國の爲に、長期建設の爲に、經濟戰の爲に、愛國心を土臺に勸誘しなくては成らぬ時代に變つて來て居るのであります。

從來は有力なる代理店の後援を得て、相當の優績を擧げられた御經驗は皆さんお有りの事と思ひますが、今日に於ては大藏省と云ふ特別有力な代理店が出來た樣な氣が致しますのであります。

九月の募集戰に於て名古屋が近縣に惜敗したのは此の大藏省と云ふ特別代理店の有るのに氣付かなかつた關係であると思ひます。大藏省と云ふ代理店は特に東京のみの受持ではありませぬ、日本全國募集員の受持になつて居るのでありますから、今後は其の積りにて活動して頂いたならば相當大きな成績を擧げることが出來ることゝ思ひます。

本月當支店募集戰の相手方は大阪であります。地理的に見て名古屋支店の方が大藏省に近いのでありますから、心懸け一つで活動さへすれば必ず勝つと思ひます。

支店目標の四百萬では少々むづかしいかも存じませぬが五百萬位は作れる、必ず作らなくてはならぬと云ふ覺悟で、此處にお集りの方々が一致協力して邁進されたならば、必ず勝つこ

とが出來ると確信致します。
人間だもの出來ない事は無い
　やれば出來る　必ず出來る
何と云ふてもやらなくては損だ
　銃後の護りにお國の爲めに
只今申上げました事に贊成の方は力一杯の御拍手を願ひます。終り。
夜は所長諸君と懇談し、席上内勤彦坂君は、この月内勤團で十萬圓やつて見せるぞと宣言した。
十一時四十分名古屋發。
十五日　午前十時十分東京着。出社。

――「社報」昭和十三年十二月號

千葉

十二月十日　最近めきめき實力を發揮し、殊に十一月六百萬の驚異的數字を擧げ、特別責任額超過額、達成率共に全國第一位を占めたのは近縣營業部だ。その千葉事務所は、浦和兩毛新潟と共に事務所成績壹百萬達成の先陣を遂げた祝賀會を開くといふので、近縣營業部長稻田さん關林二宮三祕書役と同行する。寒い風の吹く日で、一年間の疲勞の堆積を今日明日の土日曜に回復し度いと思つてゐた私には、一寸堪へる出張だつた。しかし、八副事務所七十人の努力が壹百萬を積上げたのだと思ふと、自分に鞭を加へなければならない。電車の中では人工熱にぽかぽか蒸され、一行いづれも居睡をはじめた。皆つかれてゐるのだ。

會は、事務所の近くの牧野屋といふので催された。野田北條佐原木更津船橋流山鴨川の諸代理店主も出席され、社員二十數名はいづれも先月五百倍の優績を擧げた面々だ。全所員の三分の一

が五百倍以上といふのは、並々ならぬ事である。タンク或は馬車馬と稱される陸軍中尉池澤所長は暫く姿を見せなかつたが、やがてあらはれ、寸暇を惜んで新入社員の講習をやつて來たのだといふ。恐入つたる精力である。

直に開會、所長の挨拶の次に部長がたち、感謝の辭と共に十二月の計畫を述べ、どの支店と戰つても勝ち、もはや相手はなくなつたから、今度は內輪同志の對抗卽ち浦和の副事務所と千葉の副事務所の取組を行ふと宣言し、夫々の副事務所主任を呼出して對戰命令書を交附した。更に代理店の方々に對しては、乍失禮社員同樣に考へて月々の督勵を致しますと率直に申述べ、協力を御願ひした。私も引つゞき所感を述べ、代理店代表として佐原の津島さんが、響の聲に應ずるが如き力強い答辭を下さつた。

宴席に於て、野田の高梨さんは、稻田部長が連月督促に來て無理と思はれる程の要求をするが、商賣熱心は斯くの如くでなければいけないと大におほめになり、北條の松井さんも、もつともつと出せと出せと恰も會社に借があるやうに攻め立てられるが、これでなくてはいけないのだと話され、その他皆さんが所長主任社員の熱心と努力には感心すると異口同音であつたのは、何より嬉しかつた。かゝる強力な代理店主の後楯を持つてゐる近縣はしあはせであり、飛躍精神總動員の

昭和十三年度の王座を決定せんとしてゐるのも故なきにあらずと思つた。

席には今事變に應召出征し、負傷歸還した新參の醫員丸茂さんもゐたが、保險會社に入つてみると、局外者だつた時とは違つて、外野の仕事が男性的で、外野人の奮闘努力は意想外のものであり、その熱情の中で働くのは非常に愉快だと云ふ。流石に砲煙の洗禮を受けた人の言として之亦嬉しかつた。傍の稻田さん曰く、ほかの店の事は知らないが、近縣信越兩營業部の御醫者さん達には何にもいふ事はありません、あんまり忙しいので御氣の毒だと思ふばかりです。これでは近縣益々出來るぞと考へざるを得ないではないか。

賑かな宴會は時間のたつと共に愈々さかんだつたが、些かしのこしの仕事もあるので中座し、一足先に歸京した。

――「社報」昭和十三年十二月號

京都——大津

二月七日　一月の成績概算三千貳百萬圓、全店新記録の喜びで、社内は浮立つた。昨年五月はじめて三千萬突破の歡喜に醉つた時は、不覺にも涙を止め兼たが、今年は年頭から三千萬だ。何といふ素晴しい躍進だらう。此の勢では、恐らく今日以後、三千二百萬は最低の成績となつてしまふのであらう。此の日恰も近縣浦和出張所三連勝祝賀會を催したが、昭和十三年躍進第一年度の殊勳者達は、年頭の三千二百萬さへ未だ物足らずとする程の張切方だつた。

昨年度近縣三連勝旗爭奪戰に對し、私は優勝事務所員を招待して祝賀會を開く約束をした。正直に白狀すれば、一事務所が三月つゞけて優勝する例は極めて稀な事だから、たかだか年に一度位のもので、二度とはあるまい、或は一度もおごらずに濟むのではないかと思つてゐたのだが、案に相違して、浦和は一、二、三月連勝し、更に四、五、六月も無敵の強みを發揮した。約によ

り、その都度小宴を催して感謝と祝意を表したが、最後の十、十一、十二月も亦浦和の連勝となり、三度三連勝を重ねたので、所員諸君の希望を容れ、今回は代理店の方々にも御案内を差上げ、木挽町の萬安樓を會場にえらんだ。浦和の優績は勿論所員諸君の物凄い闘志と、不斷の努力が生んだ結果ではあるが、各員が百萬の味方と頼む代理店主の協力がなくては達成し得なかつたのであるから、皆が代理店の方々の出席を望むのは尤もな事である。しかし、いづれも忙しい方々なので、此の寒空にわざわざ東京迄出て來て下さる方は少なからうと推測してゐたところ、皆さん用事を繰合せて參加して下さつた。久しく僂痲質斯性關節炎で引籠つてゐる稻田部長も太いステツキを頼りに、ぴつこを引きながら出て來た。足は痛さうだが、浦和の可愛さに頗るにこやかだ。

金井出張所長を正面床の間に据ゑ、五十餘人居並んだ座敷に持込まれた三連勝旗は、部長の手から所長の手に渡された。爆發性滿點の近縣の事だから、主人役の私を後廻しにして、部長と所長が挨拶を述べるといふ勢だ。代理店代表越谷の中村さんの御鄭重な祝辭を頂き、盛宴となつた。こゝに盛宴といふのは御馳走の事ではなく、一座の威勢のよさである。飛びちがふ盃の肴は各人の語る抱負だ。去年の今頃とは肴の大さが違ひ、結局何處かの支店か支部と對等の勝負をして見度いといふところ迄發展した。

終宴と同時に東京驛に走り、十一時の汽車で立つ。

八日　朝、目が覺めると雪だ。大垣米原あたりは殊にはげしく、大きな雪片が窓にへばりついて、景色は見えない。京都の雪景色も惡くないぞと思つたが、守山邊から先は雪のかげもなく、次第に青空がひろがつて好晴の山野となつた。京都の町は京都らしく、薄日が射しながら、附近の山々から風に乘つて來る身輕な雪をちらちら落した。久々で都ホテルに投宿。

取敢ず支店に出向き、支店長と同道三菱銀行支店に三村支店長を訪問、平素の盡力を謝し、晝飯を濟ませてから支店階上の貳拾萬倶樂部大會に列席したが、京都流の氣の長い料亭の客扱ひの爲め、定刻に遲れたのは申譯無い事であつた。倶樂部大會開會前に、支店長と私が挨拶を述べ、扨て正式に松本會長の開會の辭にはじまり、會員諸君の所感演說、客員顧問の挨拶があり、いづれも昨年來の會社の大躍進に貢献する所大なりし人々の事とて、熱辯を競ひ、今年度一段の飛躍は疑無しと思はれた。又倶樂部全員十八名から、今年度部員成績壹千四萬圓の誓約書を私に贈られた。再び水澤さん登壇、今度は倶樂部總裁として賞品授與を行ひ、高橋副會長の閉會の辭を以て終了した。

夕刻から、都ホテルで支店新記錄祝賀會が催され、十二月の新記錄獲得者並に一月三百倍以上

の擧績者が加はり、各員の卓上演説があつて盛會だつた。此處でも亦各所長の二月必成額誓約書を頂戴した。その總計三百四拾貳萬五千圓。

更に四條橋事務所主催の代理店招待會の席末につらなり、有力なる御客側の御意見を面白く拜聽した。

九日　午前中、市內事務所を歷訪し、陣容整備の實狀を見、その足で大津に赴き、琵琶湖ホテルに開かれた大津事務所出張所へ昇格の祝賀會に列席する。今回京都支店の事務所中昇格の選に入つたのは此の事務所だけで、十河所長多年の努力は、此の榮譽を獲得した。そこで、所長はその披露を兼ね管內代理店主並に同僚所長及所員を招いて盛宴を張つたのである。ホテルは明治生命本店の建築設計者岡田氏の手で建てられたもので、獨創的なものゝやうである。湖に突出た好位置で、紺靑の水を距てゝ紫の山々を望む景色は美しく、夏はさこそと思はれた。大食堂で開宴となるや、十河所長の謙讓なる挨拶に對し、八幡代理店主梅原治郞兵衞氏の懇切なる祝辭、支店長と私と共々所感を述べ、更に大溝の馬場氏、八幡の江南氏の會社業務に關する意見も出で、佐藤林田兩所長も喜びの言葉を添へた。夜は圓山(まるやま)の左阿彌(さあみ)で貳拾萬倶樂部懇親會が開かれ、私も部員諸君に負けずに氣焰をあげたが、殘念ながら汽車の時間が迫つたので、うしろを見せて中座し

た。

倶樂部員松田芒趾宗匠から贈られた京みやげを御披露しよう。

明治生命京都支店第一回貳拾萬倶樂部大會に阿部總帥を迎へ感激に堪へず小員茲に拙き一句をものして聊かその心境の一端を記し總帥に贈る

春待つや　心構へも　とゝのふて

下萌えや　王城の地の　潑剌と

十日　午前七時四十五分東京着。

――「社報」昭和十四年二月號

福岡――鹿兒島

三月六日　午後三時東京發。沿道の春は未だ淺いが、先月の京都出張の頃に比べると、空の青さも地の綠も濃い。窓に額をつけて暮れてゆく景色を見送つた。これから明日の正午頃迄、たゞ汽車で搖られるばかりだが、今日の締切の外野第一線の戰況を想像すると、希望と心配で安閑とはしてゐられない。手帳の端に各店の豫想を記して胸を躍らせた。

京都驛で、支店長副長波多野所長にあふ。織物の價格統制の影響で、締切近くなつて入金出來ず、不況甚だしく面目ないといふ意外の報告に接し殘念に思ふ。又豫想のやり直しを手帳に記す。

乘客滿員の爲め寢臺券が手に入らなかつたので、座席で背骨を邪魔に感じながら、眠らうと努めたが、なかなか眠れない。平生電燈を消して寢る習慣なので、煌々たる電燈の刺戟が強くていけない。夜があけてから、少し眠つた。

七日　西へ向つて進む春の旅は、季節の變化をはつきり感得させる。東京では梅にも未だ早いのに、既に散り際の風情も見られ、麥の寸は尺となり、二尺となり、陽炎が野山に漲つてゐる。窓をあけても、風は生温く、冬は遠くに行つてしまつた。

十一時四十三分博多着。一月王座獲得の福岡支店は、二月も亦貳百拾貳萬の優績を以て、之を確保したらしい。わざわざ御出迎へ下さつた三潴、宅島兩店主並に內外編物會社支店長高橋氏を御誘ひして一方亭で晝食に河豚を食ふ。富安さんは自家釀造の銘酒花の露を一樽下さつた。早速口をつけ、色も香も申分の無いのを頂く。食事なかばに吾々は中座し、なるべく早く戾るから、それ迄御待願ひ度いといふ虫のいゝ御挨拶をして支店樓上に開かれる貳拾萬倶樂部大會にかけつけた。

本店の電報によると二月の締切成績三千六百六拾七萬前年度の六割增、福岡支店は確實に連續王座獲得の榮譽をつかんだ。又、木下原兩雄の參拾萬倶樂部會爭霸は、結局二百九拾七萬對貳百拾六萬で原一平氏の勝利と決定したさうだ。兩氏とも夫々感慨深い事であらう。

貳拾萬倶樂部大會は伊藤副長司會の下に行はれた。支店長と私の挨拶、小石原會長植山副會長、所長主任の所感、倶樂部有志の演說、萬歲を齊唱し、引つゞき第二會場一方亭の大宴會となつた。

私が恐縮したのは、思はず知らず時間が經過し、富安宅島高橋三氏を正午から燈火のつく迄御待たせしてしまつた事である。その間、平生杯を手にしない宅島さんが、泰然として富安さんと對峙して一歩も讓らなかつたといふのには驚いた。ついでに皆さんにも貳拾萬倶樂部の宴席へ出て頂かうといふ事になつて御案内したが、宅島高橋兩氏は他所に約束があつて辭去された。富安さんは最後迄つきあつて、一同の杯を豪快に引受けて居られた。明治生命式無禮講の酒宴も亦大いによしといふ讚辭を頂いた。

八日　福岡鹿兒島兩店の昨年度優績代理店招待會が熊本で開かれるので、店長副長所長達と同行する。途中の驛から乘込まれる代理店の方々も多く、車中は賑やかだつた。熊本驛には堀所長光永宮本諸氏が待受け、鹿兒島組の外に長崎の店長副長も參加し、本妙寺熊本城水前寺を見物し、宴會場繪津華壇におちつく。熊本城の宇土櫓に一行が登つてゐる間、私は崖端の共同椅子に腰かけて森の都の春の景色を眺めてゐたが、折柄二人のはなやかな外出着の令孃が、私の隣に席を占め、熊本ことばで面白さうに話合つてゐる。一人は最近東京へ行き、乘合バスで市內を遊覽した話をしてゐるのであるが、大體それだけ想像出來ただけで、あとの會話はいくら努力してもわからなかつた。水前寺はいつ來ても水美しく、願はくば此處の芝生に只一人、日光を浴びて終日寢

てゐたいと思ふ。華壇の庭も水に恵まれ、清らかにしかもさびて、たぐひ稀なるものである。
宴會には各地方の郷土色の濃いかくし藝も出、土地自慢の田原坂の勇しくまた艶めかしい踊は相變らず大受けだつた。

九日　今日は阿蘇登山の日程なので、天氣を氣にしてゐたが、幸ひ好晴で、庄島部隊長指揮の下に出發する。坊中驛で下り、二臺の遊覽バスに分乘、案內孃の說明を聞きながら登る。此處の說明はいやみな節をつけた別府流で、私の好みにはかなはなかつた。阿蘇は世界一の大噴火口と稱され、神祕の谷、傳說の丘に圍まれた雄大なる景觀である。近づくとかへつて煙は見えなくなるが、高原の廣い起伏、殊に外輪山の脉々と連るあたりは、國立公園たるに恥ぢない。バスの終點迄は草木を見るが、それから先は昔から吹上げた岩と砂と灰を踏んで約十丁、火口に立つて硫黃の匂ひに鼻をつかれる。「今日はお山はおとなしか」といふ人があつた。

時間が乏しいので急いで下山、再びバスに搖られ、坊中驛で多くの代理店の方々と御別れし、熊本驛で更に他の方々とも別辭をかはした。

福岡長崎鹿兒島三店聯合九州制覇大會は熊本事務所樓上で催された。鷹野長崎支店長開會の辭を述べ、大坪福岡支店長は左の如き三店聯合宣言を朗讀した。

春來りたり。

萬物冬眠を蹶つて萌え出ざるなし。見よ、九州の全山俄に潑剌として動き、我等の旗揚を待つが如し。將に打つて出べき絕好の機會たり。

恰も阿部外野總帥を迎へて九州の地、士氣頓に揚り、議決して茲に三店聯合九州制覇大會を靈峰阿蘇山麓に開く。馳せ參ずるもの福岡、長崎、鹿兒島の三店長、三副長二十有六の全所長。九州の主腦すぐつて此處に在り、壯觀正に全九州業界を壓倒すべし。然り、我等が勢威忽ち九州の王たるべきを茲に血盟連署して中外に宣す。いで一千の健兒、勇躍進發我等と共に制覇の峰を登れ。

この大會の目的は、九州業界制覇、三店聯合常時壹千萬確立、九州陣營三千名の整備にあり、先づさしあたつては當三月三店五百萬の必成を誓ひ、福岡貳百四拾萬、長崎百六拾萬、鹿兒島百萬を分擔し、三店二十六の出張所事務所は、互に名譽を競ふ意味の對抗戰を行ふといふのである。

次に私も挨拶を述べ、全所長交々所感を吐露し、更に小副川長崎、藤原鹿兒島、伊藤福岡の各參謀長對抗戰宣言を叫び、李尾鹿兒島支部長閉會の辭を述べ、最後に萬歲を齊唱した。

熊本事務所の明るい事務室には、長崎鹿兒島から來た人達も大いに感服し羨しがつてゐた。私

は此の前にも來てゐるので驚かない筈なのだが、今度は一層あかるくたつたやうな氣がした。何故かといふと、單身赴任して永い間不自由な生活をしてゐた堀所長も、今年の春と共に家族を迎へたので、白壁の事務所にも紅紫の色彩がこまやかになり、精悍無比な面魂の堀さんの眼尻や口もとに微笑がおのづから浮んでゐる。

第二會場は再び繪津華壇で、席上各店對抗所長は起立握手し、杯を飲み分けて互に必勝の決心を示した。

散會後、宿に歸つても、私の室に集つて又々氣焰をあげ、大坪さんは東京營業部より先に一千萬の記錄を作つて見せると豪語した。此の宿の若い美しいおかみさんを大坪さんも伊藤さんも奥さんと呼んでゐるが、全くおかみさんと呼ぶべき柄でなく、奥さんでなければ似合はない人柄である。その奥さんに、いくら大坪さんが酒をねだつても、ほかの御客樣の安眠を妨げるから、決して出して下さるなと賴んで、私は先に就床したが、夜半目が覺めると、階下に湧上る笑聲が聞え、曉近き酒宴なほ酣と覺えた。

十日　朝、堀さんの御招をうけ、大坪伊藤兩氏といつしよに參上すると、お茶席がしつらへてあつて一同ぎよつとする。私も伊藤さんも何の禮儀もわきまへないので、こいつは弱つたなあと

悲鳴をあげたが、大坪さんはちやんと作法を心得てゐると稱してゐた。奥さんと二人の御嬢さんの御手前で、荒大名どもは各自の流儀で頂戴したが、何事も心得てゐる筈の大坪さんも、結局大坪流に終始した様子だつた。

十一時六分、鷹野支店長高野上海所長俵屋島原所長川上天草所長並に伊藤副長と私の六人は、諸君に別れて長崎領へ向つて出發した。伊藤さんは三店聯合制覇大會の煽役として、長崎支店貳拾萬倶樂部に乗込み、單身敵地であばれて來いといふ支店長の命をうけて來たのである。三角港から船で島原へ渡る。海上は穏かだつたが、雲仙の峰には雲がかゝり、時々小雨が顔を打つた。

島原の南風樓で、代理店塚本氏を圍んで晝食を認めたが、事務所に所員諸君が待つてゐるといふので、私と俵屋さんは中座し、その方へ出かけた。たしか一昨年と思ふが、此の事務所の庭に湧く水の美しさに感服したが、その池に放してあつた鯉が大きくなつて、悠々と泳いでゐるのに驚いた。島原事務所も亦當時に比して陣容あらたまり、月々の數字も大きくなつてゐるのである。二十人ばかりの人達に會社の近狀と、事變下に於ける吾々の使命について感想を述べた。折角集つてくれた人達だから、一杯差上度いと思つたが、自分の方は時間が無いので、あとを俵屋さんに御願ひして諸君と別れた。

南風樓にもどり、塚本氏にもお別れして、鷹野、高野、伊藤三氏と、自動車で雲仙の宿へむかつて立つた。山路は折々霧がかゝつたが、無事に九州ホテルへついた。今は一年中で一番閑散な時で、吾々一行の外には一人の客も無い様子で、食堂へ行つても、たゞ一人の老給仕が、無氣力にサアヴイスするばかり、室に附屬の風呂は、いつ迄待つても水で、結局湯にはならなかつた。室の扉の鍵穴も狂つてゐて、あけ放し同樣だ。そのかはり誰に氣兼もなく、至極暢氣に、無遠慮に振舞ふ事が出來た。

十一日　夜半から大變な豪雨で、朝になつても勢は衰へない。こんな荒天に自動車が行つてくれるかどうか、心配だつたが、大丈夫だといふので、朝食後出立した。長崎に近づくに從ひ、天候は回復し、靑空を見るやうになつた。

長崎支店貳拾萬倶樂部大會は、支店樓上で開かれた。會長永田氏副會長三浦氏によつて司會され、鷹野支店長の挨拶の後に、私も所感を述べ、伊藤さんも飛入で一席述べた。會員諸君の演說あり、所長代表の挨拶もあつた。中で、佐賀事務所の松岡喜一郎氏の募集實驗談には一同感動した。氏は一月の締切で、參拾萬倶樂部成績の不足が五萬六千圓あつた。どうしても最後の一箇月に此の赤字を埋めなければならない。昨年三月の貳拾萬倶樂部大會當日、來年も必ず參拾萬倶樂

部に入つて見せると、阿部と握手した誓を忘れる事は出來ない。日頃信心する金光様(こんくわうさま)に願(ぐわん)をかけ、伺ひをたて、神様の御力を頼りに、崩れんとする心に鞭打ち、風雪を冒して勸誘し、遂に一千圓口五十件餘、大口とも稱すべき二千圓口二件を獲得して參拾萬倶樂部に加はる事を得た。これ偏に神様の御扶(おたすけ)であると語る時、松岡さんは聲涙共にくだり、感激にむせび泣いた。原君木下君三木君の優績も偉いが、松岡さんの努力の輝は、少しも劣らぬ美事(みごと)なものではないか。滿堂暫く聲を呑んで寂(せき)とし、暫くして俄に拍手が起つた。

記念撮影の後、迎陽亭で盛宴が張られた。伊藤福岡副長は、孤軍奮闘、三店聯合制覇の爲の對抗意識を以て終始挑戰的態度に出で、長崎支店の闘魂に火をつけた爲、最も奮激した支店内勤團は伊藤さんを胴上(どうあげ)し、又福岡支店に電報を發した。「濟まぬが此月の王座は長崎にて頂戴す」「我に勝算あり福岡の全滅を悲(かなし)む。」

十二日　午前七時長崎發。佐賀へ出張する鷹野さんと途中迄同車、別れて一人鹿兒島に向ふ。昨日の雨に洗はれた山野は、春の日光に輝き、暖國の三月中旬は既に櫻が開き菜の花が咲いてゐる。いつも感じる事だが、鹿兒島へ近づくと、異國情趣に強く打たれる。四時五十五分鹿兒島着、今日は休息してくれといふ杢尾さんの言葉の儘に、岩崎谷莊で手足を延ばした。受持の女中お靜

さんの口から「おとなしい久保澤さん」「大きな坂本さん」「よか男の下河邊さん」などの噂が出る。

十三日　素晴しい天氣だ。李尾さんに誘はれて、その御住所を拜見する。知事官邸、山形屋デパアトの岩尾氏の邸などのある第一等の住宅地で、凡四百坪もあらうといふ敷地に、凝つた別莊建の家、芝生に築山にあづまやのある庭、石崖の下は海で、海の向ふに櫻島が近々と迫つて居る。風景絶佳、又となき健康地である。先年岡山の鋒原佐七氏の住宅を我社中第一であらうと報道したが、李尾邸はそれ以上だ。

車を返して鹿兒島代理店湯地定敏氏を訪問し、同氏の主宰せらるゝ第百四十七銀行が明治生命の爲に建てゝくれた支部の新築家屋を見る。明るくて氣持のいゝ事務室だ。

正午。市内有力者を山形屋デパアトの社交室に御招きして粗飯を呈し、引つゞき支部樓上で三百倍倶樂部大會を行ふ。夜は鶴鳴館で宴會が催された。

十四日　零時五十分鹿兒島發。

十五日　二十八時間乘つゞけで、午後四時四十分東京着。

――「社報」昭和十四年三月號

藤枝——淸水

三月二十八日　昨年末催された躍進年度決算大募集抽籤の結果、幸運の籤を引當てた藤枝代理店鈴木新太郎氏は、恰も代理店開設十周年を迎へ、且又契約高二百萬突破を祝福する爲、契約者招待會を開催される事になつた。發送招待狀三百三十餘といふ大がかりの催で、横濱支店の諸君と共に私も列席の事になつた。午前十時東京發。此の頃の汽車の混雜は甚しく、席に掛ける事の出來ない人も居る。【百五十四字略】

靜岡で、野老店長と猪瀨所長が待合せ、普通列車に乘換へ、藤枝に着く。折惡く小雨となつた。今迄、藤枝の驛は藤枝町にあり、藤枝代理店も藤枝町にあるのだと思つてゐたところ、いづれも藤枝町にはなくて、隣の靑島町に在るのだつた。店主御夫婦、受持の鈴木主任夫妻、その他一族の方々と記念撮影をし、靑島町役場樓上の公會堂に赴く。出席者二百五十餘人の盛況で、店主

の信望も想像される。先づ店主の御挨拶には、十年前代理店引受の際、果して責務を盡し得るや否や、尠なからず不安を抱いてゐたが、努力の結果今や契約件數壹千件を越え、保險金額貳百參拾餘萬圓に達したのは、會社の基礎の強固、信用の絶大、保險種類の優良並に來賓各位の後援の賜てあると述べ、今日の招待會の成立ちを説明して降壇され、つゞいて鈴木主任は保險事業に對する信念、保險の效用、保險人の使命等について力強い所感を述べ、私もその次に我國の保險の誕生と現況並に事變下の業界の實狀を紹介報告し、野老店長猪瀨所長も夫々挨拶を申述べた。休憩時間中六人の少女の舞踊があり、開宴に先立つて再び店主の鄭重な挨拶と青島町長青島鋼太郎氏の祝辭があつたが、町長の生命保險に對する深き認識と我社に對する信頼は、力の籠つた言葉で表現され、まことに難有かつた。

今回の祝賀會は有意義の催で且一般に好印象を與へ、店主の志は十分に表明された。此の日囑託醫の方々に御目にかゝれたのも、私には願つてもない幸ひだつた。

終宴後、野老店長猪瀨所長と自動車で靜岡へ戻り、大東館に投宿する。雨中の夜道で本意なかつたが、默阿彌の芝居で有名な宇都谷峠を越えたのださうである。

二十九日　店長所長と共に自動車で久能山に行く。昨日にひきかへて申分の無い天氣だ。有名

な石垣苺の産地で、海にのぞむ山の傾斜面の苺畑には、早くも紅玉が累々と光り輝いて居る。急坂の石段千九百段を上れば、東照權現の社殿に達し、杉木立の中に藪鶯を聽く。崖端に立てば海上は煙波にかくれ、足下の山櫻は既に滿開である。山を下り、再び自動車で清水へ赴く途中、先年大毎東日の催で日本百景に選ばれた日本平に上り、暫く日向ぼつこをしながら休息し、更に龍華寺の高山樗牛の墓に參詣し、治郎長の墓所梅陰寺に立寄る。

清水代理店鈴與商店は、創業百三十六年と稱され、當主は六代目にあたり、回漕業の外に石油石炭の販賣、再製鹽、倉庫業、煉炭工場、自動車工場、船舶代理店、各種保險代理店を營み、全國主要地に支店出張所を設け、時代に伴ふ近代的經營は愈々多角的に行はれ、繁榮を重ねて居る。折惡く店主は御病氣で東京の病院に入院中だつたが、御子息や幹部の方々に御目に懸り、暫時御邪魔した。ゆつくりして行つてはどうかと御すゝめを受けたが、昨夜近縣營業部長から電報で「キンケン五〇〇マンシンキロクミコミアリ二九ヒゴゴ四ジホンシヤニテウチアハセシタシマツ」といつて來てゐるので、殘念ながら御いとましなければならなかつた。零時二十一分清水發。

東京につき、本店へ出向くと、近縣の部長所長諸氏が待つてゐて、當月新記錄樹立と同時に上

半期責任額突破の計畫をたて、五百參拾六萬必成の誓約をした。

――「社報」昭和十四年四月號

神戸——湯田

一

四月十七日　午前九時東京發。沿道の春はたけなはである。櫻はやゝ色褪せて、若い輝を失つたが、いろいろの季節の花と樹々の若芽に、まばゆい光が反映して、山も野も海も成長の歡喜に擴大されさうな力を漲らせてゐる。十日十一日十二日の三日間、卅萬倶樂部の接待に全力を盡し、風邪の氣味で元氣の無い自分に鞭うつてゐたが、大會終了後一息つくと發熱して二日間寢込んでしまつた。その疲勞がすつかり拔け切らず、居睡ばかりつゞけて、風景を樂む餘裕は無かつた。

五時三十三分三宮（さんのみや）着。六甲ハウスに催される友人の娘の結婚披露にかけつけ、その儘其處に宿泊する。ホテルの支配人角田氏は、元我社神戸支店に勤務した人で、大變好都合だつた。六甲山の裾にあるさゝやかなものだが、神戸港を見下し、夜景が美しかつた。

十八日　晝は慶應倶樂部に招かれ、夜は三菱關係諸會社の幹部を花外樓に招待し、會社の現狀を話し、一層の協力を求めた。三菱といつても各部門に分れてゐるので、お客側では互に初對面の挨拶をかはす人もあり、斯ういふ顏合せは時々やり度いものだといふ聲が高く、ゆつくり歡談の出來たのは嬉しかつた。

十九日　午前十時大阪支店に出社、社員大會に臨む。大阪は特別に難しい土地で、人員は殖えず、おだてに乘らず、精神運動などは何の效果も無いといはれて來たが、今年々頭三百三十八名の外野戰士は今は五百六十三名となり、十五の副事務所は五十八箇所となり、その多くが今月の山下常務在社五十年祝賀募集に懸命の努力をしてゐるのを見ると、感慨深きものがある。恐らく今年の下半期には、新陣容整備の威力を發揮しはじめるのであらう。增員の神樣と稱される高木店長は、開會の辭の最後を今に見ろの一言で結んだ。私も挨拶の中で、多年不振を唱へられた福岡支店が、今では全國支店の王座獲得といふ凄い飛躍を遂げたのに、京阪地方が躍進の步調稍速かならざるは遺憾に堪へない、今に見ろは一日も早きを望むと述べた。續いて、村田藤井渡邊三所長、副事務所主任代表井上富三郎氏、卅萬倶樂部大會出席者代表藤原正治氏、留守團代表江本源三氏、社員代表岸田義憲岡田欽治兩氏、夫々所感を述べ、中には私の言葉を捉へて、此の次來

阪の時迄には、不振京阪の阪は必ず取除いて御目にかけると叫んだ人もあつた。藤原副長の閉會の辭に次いで、萬歳を齊唱したが、どうやら大阪も高木景氣が出て來たやうに思はれた。一同北濱の野田屋階上で食事を共にし、今晩は自由に休息してくれといふ支店長の言葉を難有い土産にして、一昨日娘を嫁にやつた深江の友人の家に出かけた。

二十日　午前中は勝手に行動してよろしいといふ重松支店長の許可があつたが、何處に行くあてもなく、遲櫻の散りかゝるホテルの芝生の椅子にかけて、日光を浴びながら、氣力の囘復を期待した。

午後二時神戸支店に出向き、優績社員大會に出席する。こゝでも各所長主任及優績社員いづれも山下常務在社五十年祝賀募集には非常な熱誠を捧げ、やらなければ申譯が無いといふ心持の強いのを感じる。まことに山下さんは他社には無い。我社に於ても、唯一人であつて、前にも後にも決して二人とは見られない存在だ。明治二十三年十七歳月給四圓で入社され、刻苦勉勵今日に及ばれた半世紀の歴史を語れば、感激せざるものなく、殊に外野の指導に於ては特別の功績をたてられた。今日明治生命が行つてゐる外野の諸制度、事務所網の擴張、人員の增加、これらは皆二十年三十年以前に、早くも山下さんによつて唱道された事である。不幸にして山下さんの意見

の多くがその當時に於て用ひられなかつたのは、山下さんにとつても歯がゆい事であつたらうし、會社にとつても不幸であつた。そればかりでは無い。山下さんが今日も尚外野の父と仰がれ、なつかしがられ、慕はれるのは、山下さんが身を以て示された外野人に對する限りなき愛情の故である。個人的には、山下さんに迷惑をかけたり、救ひを受けたりした人は幾人あるかわからない。全體としては、待遇の改善、募集制度の確立、兎角内勤よりも劣るものゝ如く看做され勝だつた外野に、惜みなく同情と敬愛を捧げた。されば、昨日今日入社した新人も、此の先輩の身を以て行はれた事を傳へ聞いて、感奮止むる能はざる心情にある事は、少しも不思議は無いのである。今日は東京會館に於て同業者發起の祝賀會が開かれる筈だが、かゝる美しい光景は、業界はじめてといつていゝであらう。

社員大會終了後、日毛ビル階上で晩餐會があり、各事務所間に挑戰が行はれ、氣焔すさまじいものであつた。散會の頃大雨となり、ホテルへ歸りつく迄にづぶ濡となる。

二十一日　姫路事務所が出張所に昇格したので、岸本所長は所員を集めて祝賀の宴を張るといふ。それに招かれて重松村瀬兩氏と共に行く。折惡く今日も天氣は惡い。

岸本所長の住宅は、曾ては松井石根荒木貞夫といふやうなえら方の住んだもので、これを買取

り、事務所の爲めに洋間を建増した堂々たるものである。夫人令嬢のお茶の接待にあづかり、例によつて禮儀は御容赦を願つて頂戴する。直に洋室の方で、所員諸君を前に祝辭を述べ、併て會社の動向に及び、更に今月の祝賀募集には全力をあげて盡すべき所以を說いた。岸本所長は、大正十四年入社當時の事情から說き起し、忍苦努力今日に及んだ經過を詳細に物語る中、自ら感咽止め難く、聽者も亦深き感動に胸迫り、私もあやふく落涙に及ばんとした。終つて靄樂園の宴席に移り、一同所長を祝福して盃をあげた。此の出張所の所員諸君はいづれも所長を德とし、和樂の氣席にあふるゝおもひがした。私共は今夜神戶の三菱幹部を招待してゐるので中座の止むなきを惜みながら、驛にかけつけた。

午後六時、音羽華壇にて開宴。こゝでも三菱諸會社の人達は、距てなく盃をかはし、又吾々が一層の援助を求めたところ、自分達も明治生命の今の躍進振を非常に愉快に思つてゐて、あく迄も協力を惜まないつもりだが、扨てどういふ風にすればいゝのか、たゞ外交の人が來て宜敷御賴み申しますといはれるばかりでは手の下しやうが無い。何とか支店の幹部の人から方法を示して貰ひ度いといふ注文が出た。まことに尤もな事で、吾々の方も此點について一考しなければならない。

午後九時五十五分三宮發。

二十二日　歸京。

二

四月二十三日　信越營業部松本事務所三連勝祝賀會に出席の爲め午前八時新宿發の汽車に乘る。雨天にも拘らず、行樂の人で滿員だ。笹子峠を越すと空が青くなり、山國の春が美しく窓外に展開される。東京では既に葉になつた櫻が今や眞盛で、四方を圍む山々の樹々の淺綠の中に際立つて白く光り、沿道の岡には、野生の山吹と木瓜が目につき、野の草もそれぞれちひさい花をほころばせて居る。其處此處の驛で、寫眞機を肩にした人達が下車した。

甲府を過ぎ、次第に山が嶮しくなつて、やがて信州に入ると、景色は又一變する。甲州の山々は人里を取圍み、椀を伏せた形で親しみのある姿だが、信濃の山々は嚴として人類と對立し、人力に屈服しない頑固さを示してゐる。何時降つた雪か、山々の頂には未だ白々と殘り、風景も寒く寂しい。私のうしろの席の夫婦ものは、生れ故鄕と察せられる岡山地方と比較して、土地瘦せ、家構貧しきさまに驚いてゐた。一時五十八分松本着。佐古口所長、先着の稻田部長並に祕書の面

々に迎へられ、直に事務所に行き、少時休息の後、淺間溫泉西石川旅館に行く。淺間溫泉は松本市から三十丁、約一千年以前に發見せられたものと記されてゐるが、私共はレコード歌手市丸が商賣してゐた土地だといふ理由で、その存在を知つたのである。遠く雲表に聳ゆる日本アルプス連峰を望み云々と案內記は語るのであるが、此の日は雲がかゝつて之を望む事は出來なかつた。宿は溫泉場のとつつきで往來をはさんで東石川西石川といづれは本家分家であらう、古びたのが向合ひ、それから先へ進むと、近頃出來た團體向のが軒を連ねてゐる。吾々の宿は昔からの家柄で、全く現代とは緣遠い美點を備へてゐた。純朴で行儀のいゝ女中が風呂場へ案內し、近代式の奇麗なのが御好ならばタイル張の風呂場も御座います、けれども昔からの風呂場も亦特別の趣が御座いますと、極めて要領のいゝ紹介をしてくれた。私は昔からの風呂場を希望した。檜造りの湯船から溫泉はあふれ、硝子戸の外に紙障子がはまつてゐるのは、これこそ昔の名殘であらう、おちついたいゝ湯殿であつた。

祝賀會は富貴の湯といふ別の宿で行はれた。吾々の宿には廣い室が無いのださうだ。この宿は大きなもので、幾組かの宴會があつた。

管內の有力な代理店の方々の顏も揃ひ、譽の三連勝旗を部長から所長に授け、所員一同賑かに

盃をあげた。

二十四日　朝の食膳についたわらびのひたし物は、山の香を含んで結構だつた。僅に一夜の宿であつたが、西石川旅館は品格のある、行儀正しい古風尊ぶべき立派な宿で、大變居心地がよかつた。淺間溫泉場そのものは、左程のものとも思はなかつたが、此の宿は現代に於ては珍らしく古格を殘したもので、悉く感服した。

八時半、松本を發し長野に向ふ。十時十分着。

昨年秋此の地へ來た時に、久々で戸倉の宿で逢ひ、仕事の後援を賴んだ舊友、八十二銀行頭取黑澤利重氏は、今年二月死去したので、渡邊所長の案內で遺族弔問に赴き、佛前に燒香し、それから事務所の集會に參加した。山下常務在社五十年祝賀の爲めに全員一致懸命の努力を盡さんとの意氣は、松本も長野も同じだ。簡單な食事をし、私は一人別れて歸京の途につき、稻田部長は殘つて各員と打合はせを行ふ事になつた。六時五十八分上野着。

三

五月六日　午後十時東京發。

七日　山下常務在社五十年祝賀募集の結果が心配で、いつもは迷惑に思ふ中間驛の送迎なのに、今日は窓から首を出してこちらから探し求めた。われながら勝手氣儘なものだと思ふ。京都驛で水澤さんにあひ、支店の結果をきくと、殘念ながら甚だ不振、お隣の大阪も二百萬はむづかしいとの噂だといふ。一年中で一番條件の悪い四月に、此の催の行はれた事を遺憾に思ひ、山下さんに對して申譯なく、心平かならず、旅行の張合ひがなくなつた。

零時二十八分岡山に着くと、こゝは百二十六萬の好成績だ。今年から尾道福山兩所を廣島に割讓した支店として、之を失はなかつた以前の數字と比べて少しも見劣しない。それでも小林さんは申譯無い申譯無いと繰返していふ。宿についても電報が來ないので食慾もなく、晝飯は拔きにした。

午後二時半、支店で優績社員大會が開かれるので、出向くと、本店からの電報が來た。シメキリ四七三七マン、ガイサンナガラソウリツイライノシンキロクナリ。忽ち支店内には活氣が漲り、大會は歡呼の聲の中に開かれた。目標五千萬を逸したのは殘念だが、所謂お祭月に、しかも祝賀募集の提案せられたのは月なかばで、卅萬倶樂部の精鋭は二十日頃迄歸店して居なかつたにも拘らず、短時日に精根を盡し、會社創立以來の新記錄を樹立したのは偉とするに足り、又新參の人

々幾千人は未だ山下さんの謦咳に接する機會も無いのに、此の大先輩の輝かしい經歴と、特に外野に對する深き同情、滅私愛社の精神、卽ち山下さんの全人格を人傳ながら感得し、敬愛の心を以て協和したのは、我社史に永く傳ふ可き美事であつた。五センマンフタツセイマウシワケナシと打電したが、之は單なる辭令に過ぎず、恐らく山下さんは、全外野の捧げたる祝意の籠つた數字を、大滿悦を以て御受になつた事と想像した。

支店長の開會の辭、私の挨拶、高原住治氏の代表挨拶、副長の閉會の辭があり、擧績壹萬圓に一本の福引抽籤が行はれ、私も特別に一本の籤を引かせて貰つた。此の福引の催に對し、私から特籤拾本を寄贈して副賞とした。

夕刻、第二會場茶寮に參集、七十餘人支店開設以來といふ大宴會が開かれた。宴なかばに福引の披露があり、その趣向の奇抜と景品の上等には一同感服した。私の引當てた籤は「四月の岡山支店」といふので、その擧績に因み壹百二十六の紅白の饅頭が山盛に運ばれた。一人で食ふに食はれず、土産にも持歸れぬ大量だから、列席の人々に分與した。岡山支店の第一人者本岡義夫氏は不相變の優績で、十本の抽籤權を獲得し、しかも第一等の籤を引當てた。幸運の神様も、勉勵努力の人に福を授ける方針と見受けられた。

八日　午前十時七分岡山發。蒸暑く、雨になりさうな天氣だつたが、宇野高松間連絡船に乘る頃は薄日がさし、やがて晴天を見た。零時十分高松着。晝食後久保田支部長と共に出立、午後五時三十五分高知着。旅館城西館で、代理店中山猿膽氏を圍み、森田所長鍵山八田兩氏及原一衞氏等と歡談する。しゆんには少し早いのださうだが、鰹のたゝきは頗る美味で、おかはりをして食べた。

九日　高知には度々來るのだが、いつも時間の餘裕がなく、名勝を探る暇を十分に持たなかつたところ、今日は午前中は旅疲れをやすめる爲めに宿で寢てゐてもよし、或は名所を見物して來てもいゝといふので、自動車を頼み、桂濱と五臺山を廻る事にした。市外に出ると、運轉手は、これより漫談式に説明させて頂きますと、説明者らしく嗄れた聲で、先づ土佐の高知の播磨屋橋で坊さん簪買ふを見たの由來からはじめ、浦戸灣の風光、史上人物と由緣深き土地の紹介、地名詠み込みのヨサコイ節など、親切に語つてくれる。御疊瀬(みませ)見せましよ浦戸をあけて月の名所は桂濱の御疊瀬を過ぎ、來るか來るかと浦戸をあけて癪の種崎まつばかりと來たので、それらの唄はいづれも昔から傳はるものかと質問したところ、後の唄は私が作つたのですから古いとは申せませんと答へた。作者の氏名はと重ねてたづねたが、一介のガイドですと逃げてしまつた。

宿に歸つてからの噂によると、此の運轉手は好學の士で、休日には圖書館に通つて土佐の歴史を調べ、案内者としての智識を蓄へてゐるのださうだ。

桂濱には坂本龍馬の銅像、大町桂月の句碑があり、強い日光に新綠の色も濃く、亂礁に激する怒濤の壯觀はいかにも南國特有のものであつた。松林の中では、早くも蟬が鳴きかはす。東京のみんみん蟬に似て稍聲が濁つてゐる。高知の人は發音の正しさを自慢するが、私共の耳には鼻にかゝり過るやうに聞える。此の蟬の聲もたしかに鼻にかゝつたみんみんだつた。

自動車もろとも渡船に乘り、浦戸灣を横切つて五臺山に行く。途中興味深く眺めたのは、手甲脚絆背中に金剛杖をしよひ、自轉車に乘つた老弱の婦人が、一團となつて神社佛閣廻をする姿だつた。遍路の近代化された風情であらう。

五臺山は聖武帝夢に大唐の五臺山に至り、文珠菩薩を拜し叡感斜ならず、行基菩薩に詔して本朝に於て五臺山に似たる靈地あらば其處に伽藍を建立すべしと宣ひ、行基は五峰高く聳え、三池深く湛ふる土州長岡郡の靈島こそ之に相當するものなりと奏上し、此の處に竹林寺を建立したといふ。庭は天然記念物となり、國寶の佛像には美術的にもすぐれたものが多い。此の山上から見下した浦戸灣の風景は、正に明媚で、土佐人の御自慢げにもつともと思はれた。

宿に歸ると山下さんの電報が來てゐた。シンキロクヲエ、メンボクヲホドコシタルハヒトヘニゴハイリヨノタマモノニホカナラズ、アツクオレイヲマウシアグ。
本店からの報告で、各店成績も詳しくわかつた。不振ときいて落膽した大阪も二百七十萬で新記錄だ。東京は遂に壹千萬の大記錄をのこし、福岡仙臺橫濱廣島も開設以來の記錄で、早くも上半期の責任を果したものには、近縣福岡仙臺四國がある。牧野課長の電報に曰く、シンキロクオメデタウ、ヤマシタサンオヨロコビデス。
午後、板垣會館で四國支部開設六周年祝賀會が催された。四國四縣の英雄一堂に會し熱烈なる所感を聽いて喜びを新しくする。終つて公園內板垣退助氏銅像前で記念撮影をし、引つゞき得月樓に於て大宴會が開かれた。
十日　午前九時三十五分高知發。午後二時八分高松着。岡田家に投宿。同窓會に招かれて行つたが、同業×××××の副長格の人、×××の醫務主任に對面、參考になる話をきいた。我社は四國でも立遲れてゐたが、今や他を拔いて、×××に迫らんとしてゐる。上記二社の人達は共の進出に驚き、完全にやられましたと云つてゐた。愛馬行進曲の作詞者久保井信夫氏にも逢つた。
十一日　午前九時四十五分高松發。高木大阪支店長の令弟××××支部長高戶竹三氏も棧橋迄

來てくれたが、此の兄弟が時を同じくして四國で鎬を削つたら、さぞ壯觀であつたらう。高戸氏は久しく逢はないうちに立派な肉附になり、頭もうすくなつて、此の點ではたしかに兄まさりと見受けた。

尾道で下河邊支店長山下所長その他が乘込んだ。事務所の研究會があつたのださうだ。午後三時四十九分廣島着。支店に顏を出し、副長醫員の人達、所長諸君と同行宮島に赴き、紅葉谷の新綠に包まれて、氣の置けない酒を汲みかはす。天氣運の強さを誇つてゐたが、今日は雨になつた。

十二日　夜中降續いた雨はまだはれない。山口縣湯田溫泉で開かれる優績社員大會に列席の爲め、店長副長所長揃つて同行。西へ進むに從つて日が照つて來た。小郡で下車、先年の失業救濟事業として出來上つたといふ坦々たる鋪裝大道路を自動車で走る。湯田は小郡と山口の中間にある溫泉場で風景の特にすぐれたものは無いが、泉質極めて柔かで、癖のない湯だつた。

會する者四十餘人、支店長の挨拶の中に、支店近年の進步と他社との比較があり、多年不振をつゞけた支店として未だに他社を壓倒的に破る事は出來ないが、次第に追擊奏功の實績を認める事を得た。誰が行つてもてあました店を、下河邊氏赴任以來確乎たる信念を以て整理し、大陣容をとゝのへ、此の一二年躍進をつゞけはじめたのは敬服に値する。全國第一の大兵を集めた此

の支店の、今後の活躍は期して待つべきものがある。ダットサン園部所長が自信たつぷりで引受けた演藝係は、これ以上の適役はなく、續出の餘興に宴會は賑かだつた。

安眠を欲して就床したが、隣室の客が藝者を呼んで騒いでゐて眠れない。よくも斯う迄調子のはづれた唄を臆面もなくうたへるものだと思つたが、追かけ追かけ調子を合せようと努めてゐる藝者の勞苦を察して我慢した。東京生と稱する老婢にきくと、土木關係の人が役人を招待してゐるのださうで、屡々出あはす風景である。お役人の宴會つていふときつと長いんですよ、午前二時なんてのが珍しくないんで御座いますからと、不平を云つてゐた。

十三日　一同記念撮影。急用の人は夫々出立したが、大多數は自動車をつらねて秋芳洞見物に行く。

秋芳洞は我國第一の大石灰洞窟で、昔は瀧穴と稱したのが、今上陛下未だ東宮に在せし時洞內深く御探檢遊ばされ、それを機會に今日の稱呼となつたといふ。洞內は廣濶で、瀧あり淵あり渡船場もある。普通の見物人がゆく終點は約九丁で、それから先は何處迄つゞくか之をきはめた者無しときく。上から下る鐘乳石は、二百年に一寸伸びるといはれてゐる。

見物を終り、諸君に別れ、午後二時六分小郡發。

夕方食堂で食事なかばに窓を叩かれ、氣がつくと福山驛で、今朝早立ちで歸つた齋藤所長が、夫人令孃と共に出てゐてくれたのだ。齋藤さんは朗々たる美聲の持主で、宴席中「指に足りない一寸法師」の歌をうたひながらの振事は、愛すべくも勇しき餘興で、私は宮島でも所望し、湯田でも所望したが、夫人の許可がなくてはやらない主義になつたと稱して、齋藤さんは約束を果さない。男らしくない、齋藤さんらしくないではないかと云つても、何といはれても許を得なければやらないと強情を張通してしまつた。その夫人にはじめて御目にかゝる光榮に浴したのだ。齋藤さん萬歳。齋藤夫人萬々歳。

十四日　午前九時半東京着。

――「社報」昭和十四年五月號

滿鮮支――其他

一

六月七日　午後一時半東京發。今朝受取つた各店の電報によれば、五月の成績概算四千八百二十八萬五千圓、再び五千萬を逸したのは殘念だが、我社躍進の一つの目標たる××××は遂に完成したらしい。

八日　折々小雨に逢つたが、直に晴れた。十時十八分博多着。貳百拾貳萬の新記錄に氣をよくしてゐる福岡支店の所長主任會に出席、午後はその人々に有力なる代理店の方々の參加を乞ひ、福間海岸で鯛網を曳いた。眞鯛、黑鯛、縞鯛、烏賊その他いろいろの魚が、網をあふれるばかりの大漁だつた。近頃こんなに捕れた事はないと、船頭も驚いてゐた。一同これを支店の成績に結びつけ、今後の發展將に斯の如くならんと悅喜した。その獲物を肴にして祝盃を擧げ、萬歲を齊

唱した。

酒宴なかばではあるが、時間にしばられてゐるので中座し、福間驛から乘車、十時半の關釜連絡船に乘る。事變の爲めに稅關の檢査がやかましく、荷物を差止められて困つてゐる人が多かつた。海上平穩、安眠。

九日　六時釜山着。代理店武末一夫氏同保險部渡邊比氏もわざわざ驛迄來て下さつて少時立話を交し、角園所長と同行急行に乘る。午後一時三十五分京城着。支店樓上に於て所長主任會開催、引つゞいて雅敍園の晩餐會に臨む。此の店も貳百拾七萬開設以來の新記錄で、各員の元氣は素晴らしい。

十日　午後所長懇談會開催、食事を共にし、十一時十分高月氏と同行、安東縣に向つて出立。

十一日　午後零時四十五分安東着。大連支部長樋口氏と落合ふ。驛前のホテルで社員諸君と會食、代理店藤平泰一氏、藤平商會松尾道之助氏、安東疏圃公會顧問舟竹榮次郎氏と會談、舟竹氏の御案内で、大東溝附近の築港並に工場地帶設計の現場を見物する。これは不凍港で、計畫は非常に大きなものだ。完成の曉には、安東の繁榮は著しく躍進するであらう。

舟竹氏は約三十年前、亡父が押原参吉氏を伴ひ、此の地方視察に來た時も案内役を引受られた

さうで、當時の事をつぶさに聞いた。

途中小雨が來て自動車の窓を打ち、日照つゞきで弱つてゐる滿鮮一帶を濡らすならば、人々の喜びはいかばかりであらうと話合つたが、期待に反して直に止んでしまつた。一般に農家は植つけが出來ずに難澁し、大連の如きは一日三時間水道を使用し得るだけで、殆んど閉口してゐる有様ださうだ。

歸路、鴨綠江製紙會社を訪ひ、工場長黑川末喜氏の案內で作業を見學した。夜は藤平松尾舟竹三氏に新義州代理店橫江知通氏を加へ、主人側として高月氏と田中所長、樋口氏と私が並び、歡談に時を過した。二十年三十年と此の地に住み、安東の生みの親育ての親とも云ふべき方々だから、今日の發展、明日の期待は、我が子の成長のやうに思はれるやうだつた。

十二日　午前零時半、高月氏と別れ、樋口氏と共に安東を立つ。七時奉天着。高洲所長泉子安兩氏の外に、代理店栗田氏迄御出迎下さつた。ヤマト・ホテルで食事をし、少憩の筈だつたが、恰も高貴の方の御宿泊所となつて警戒嚴重を極めてゐるので、驛前の宿に一室を求め、朝飯にありついた。食後新しく發展した工場地帶を見物したが、こゝも亦規模の雄大な事、到底內地には比ぶ可きものが無い。昭和九年はじめて此の地へ來た時とは、市街の景況一變し、暫時佇立して

ゐる眼前で、轟々伸びてゆくのが觀取されるやうな氣がする。

事務所では、高洲夫人心づくしの御茶の接待をうけ、來合せた所員二三氏を誘ひ、近所の料亭で晝食を認め、一時四十五分の汽車で新京に向ふ。滿洲國々務總理が同車するので高官の見送が多かつたが、その人込の中で大審院部長三宅正太郎氏を發見した。三宅氏は五月二十日頃東京を發し、上海に赴き、更に北京天津各地を巡視、これから新京へ行くところだといふ。

久しぶりで見る滿洲の廣漠たる風景、楊柳アカシヤポプラのやうな直線的な枝ぶりの木の外には、遮切るものもない野と山の無限の連續、單調ながら大らかに、力強い線で描かれてゐて、神經質で、陰影の多い日本の景色とは全然別趣の美しさだ。

五時二十分新京着。三宅氏と別れ、新京神社に參拜、その向側にある事務所で所員諸君と會談、新京事務所の三羽鴉とうたはれる津山岐津松原三氏をはじめ、腕利きが揃つてゐるので、威勢のいゝ話が續出した。一同揃つてヤマト・ホテルの食堂で、會食した。

ホテルは滿員で、樋口氏と二人一室に入れられた。弱つたのは奉天驛前の宿屋で朝飯を食ひ、鞄は汽車の出る時持つて來てくれと賴んで置いたところ、宿屋の怠慢かその鞄が間に合はず、次の列車で送つて貰ふ手筈にしたが、それでも屆かない。汗だらけのシヤツを替へ度いと思つても

詮方ない。いつも悠々たる樋口氏も流石に心配して、さかんに奉天の宿屋や事務所や驛に電話をかけたが、埒があかない。小荷物で送つたといふかと思ふと、人に托したといひ、宿屋の回答は滅茶苦茶だ。何かの間違で新京を素通りして、ハルピンにでも運ばれては、これから先の旅が不便で困ると思ひ、閉口した。それでも、七日に東京を立つてから宿屋に泊つたのは、京城丈で、あとは汽車と船で寢て來たので、明日の事は明日の事と肚をきめ、熟睡した。

十三日　日照つゞきの滿洲は殊に暑く、特有の輕塵が舞上るので、汗で濡れたシャツは茶色になり、他人様の前に出られるさまでは無いが、何分鞄が到着しないので、御免かうむる外なく、樋口角田兩氏に案内されて、發展都市の概觀を眺め、官廳諸會社を訪問した。通稱電々會社事滿洲電信電話株式會社では倉田主事の中學友達山田理事、上原取締役の舊友西田理事に刺を通じ、短時間ながら高說を拜聽し、軍人上りの廣瀨總裁にはカアキイ服のお客來中だつたので、扉口で敬意を表した。三菱の建設した康德會館では、三菱商事井上支店長に面會、東京海上ビルでは、明治火災取締役景山泉造氏が滿洲火災海上保險の取締役として采配を振つて居られ、その幹部の方々にも御目にかゝつた。滿洲國の首都を長春と定め、その名を新京と改めたのは昭和七年春の事で、私は同九年十月はじめて此の地を踏んだのであるが、足かけ五年目の今日は全く面目を一

新し、清新潑剌たる所、その標語となつてゐる「伸び行く大新京」そのものである。從つてその建設に參畫したと自任する人々の鼻息の荒さは想像するに難くない。滿洲こそは若い軍人役人の天下であり、樂土である。議會などゝいふうるさいものも存在しないから、憚る所なく新計畫を實行する事が出來る。元よりその半面には、血氣にはやつて事を行ひ、又忽ちに之を改め、朝令暮改のそしりを受ける場合もあるであらうが、それで困るのは被指導者側であつて、指導的立場にある者は涼しい顔で濟ませるのであらう。今度の旅行で逢つた人々の異口同音の噂話に、さる高貴の御方の御巡視の際、役人達が滿洲國建設指導の成功を得々と述べ立てた所、默して御聽になられた後で、指導せられてゐる者共も滿足して居るかとの御下問に接し、御返事申上る言葉を失つて狼狽したといふのがあつた。又ぎきだから眞僞の程は知らないが、生れながらにして高きに位せらるゝ御方の御慈愛深き御心は、常に下々の者の上に迄及んで眞にありがたき極みである。

吾々の商賣にしても、一時は全部的に滿洲國から追拂はれさうな噂もあつた。それが、滿人の契約禁止、保險金額二千圓以下不許可といふ條件附で今日に及んだが、その間には、昨年某月某日迄に新しく營業認可申請をさせ、天災の爲僅に一日申請書の提出の遲れた某社の如きは、爾後新契約を停止されたり、斯る氣勢に脅えて將來を見越し、進んで營業を放棄した某社の如きもあ

り、不安は相當に濃厚である。現場の人々の話によれば、××生命側ではこれに加入せずして內地の保険會社と契約する者は國賊だといふやうな、亂暴極まる宣傳をするものもあつて閉口だといふが、高い保険料の會社に強て契約させるのは、多數同胞の利益ではない。何卒、日本と滿洲とどつちが大切であるかを忘れないやうにして貰ひ度い。

いろいろの人にあひ、いろいろの話をきいた中で、私が一番大きい衝動を受けたのは、農耕地國有策で、これは實行殆んど確定といふ話だつた。滿洲移民は今も盛に勸說され、或地方では所謂分村を行つて一村の大半が移住さへした。それは一方に十丁步(最初は二十丁步)の土地が與へられ、後にはその土地を所有し得るといふ事が魅力で、本國に於ては地主となる見込の無い者が、勇を振つて移住の志をたてたのだ。若も、開拓しても自分達の所有にはならないのなら、移住者は半減するに違ひ無い。尤も、指導者側の說明では、小作權を相續させるから結果に於ては所有權を與へるのと同じだといふのださうだが、それはあまりに獨善的解釋だ。若も農耕者の戶主が死に、あとには老幼婦女のみ殘つた場合はどうするか。相續人が農業勞働に適せず、軍人になり度いとか役人になり度いとか志望する場合はどうなるのか。恐らく權利の賣買は許されないのであらう。ありあまる土地を開拓しようといふ現狀に於て、それと逆の結果を招來する政策をとら

んとするのは何の故か。例によつてイデオロジイの問題なのだらうが、甚だ〇〇主義的色彩を帯びてゐるところに、看過し難いものが潜んでゐる。

待に待つた荷物もやうやく屆いた。荷物の中には、北京の病院に收容されてゐる中村哲夫中尉の夫人から托された品物もあつた。中尉は一昨年夏我社の第一番の應召者として出征後各地に轉戰武勳をたてたが、今年の春かりそめの風邪がもとで肺尖の疑があり、入院既に三月に及ぶので、母堂と夫人の心配は一方ならず、私の出立の際いろいろ言傳と、中尉の好物の梅びしほその他の品々を枕頭に屆けるやうに賴まれて來た。さういふ種類の食味は、北京に於ても手に入るに違ひ無いとは思つたが、夫人の切なる心づくしは、藥餌にまさるものであるから、大切に持つて來た。これが紛失しては申譯ないと思つてゐたが、つゝがなく戻つて來たので安心した。

此の夜は新京を中心として、有力なる代理店の方々を御招待し、囑託醫の方々、事務所の諸君も參加、共に盃を擧げて社業の隆昌を祝した。吉林開原四平街等から、わざわざ出席された代理店の方々の熱意は深く感謝する處である。午後十一時五分新京發。

十四日　午前六時奉天着。高洲所長と泉氏が待つてゐてくれた。約一時間、驛の食堂の開扉を待つて食事をし、飛行場へ行く。快晴無風、絶好の飛行日和だ。福昌公司の小松氏夫妻が見送に

來て下さつた。待合室で立話をしてゐると、ヤマト・ホテル止宿の宮田製作所取締役大場惣太郎氏から電話がかゝり、今新聞社の人から君の消息を聞いた。自分も明日北京へ行く、宿はグランド・ホテルだといふ。それでは北京で逢はうと約束し、正九時樋口氏といつしよに機上の客となる。定員七名といふ小型機だ。途中錦州に立寄つた頃は、一時曇り、雨といふ程でも無い雨が落ちたが、又晴れて蒸暑くなつた。萬里の長城も、山岳も平野に等しく、忽ち視界に來て、又忽ちにして去つた。天津郊外に着陸、再び飛んで北京に着いたのが零時五十分だつた。××××××の公平氏、天津事務所の八木所長と百井氏、つい先頃當地横濱正金銀行支店に赴任して來た弟舜吾達にまじつて、中村中尉の姿が見えた。中尉は鼻下に濃い髭を蓄へ、正服に戰鬪帽、大刀を手にした凛々しい姿だが、病氣の爲に少し痩せてゐた。今日は特に軍醫の許可を得て、夜十時迄外出してよいのだといふ事だつた。

旅館翠明莊には目下高貴の御方が御滯在中なので、門前から玄關迄衞兵がつけ劍で守つてゐる。吾々一行は、中村中尉のおかげで、捧銃の最敬禮を浴びて通つた。私が一番先に中村中尉に傳へたのは、勿論母堂と夫人の傳言であり、預物も直に渡したが、その次には御詫を申述べた。中村さんをはじめとし、會社から應召した人は既に三百人を數へる。その人々は、砲煙彈雨の下、寸

暇をさいて消息を寄越されるが、私は一度もそれに答へた事もなく、御見舞もせず、今日迄打過ぎて來た。その間常に心にとがめ、又幾度も全出征社員に對し激勵感謝の辭を送らうとして筆を執つたが、文字は澁滯して文を成さない。何故か。戰地に在つて人力の堪へ得られる極度の勞苦を盡してゐる人々に對し、あまりに安樂な日常を送つてゐる自分を顧ると、御見舞の言葉が空々しくて恥しくなり、どうしても書きつゞける勇氣がなくなるのである。すまないすまないと思ひながら、空しく時日を經過してしまつた。まことに申譯ありませんと、三百人の代表として中村中尉に謝まつた。

北京は非常に暑い。宿の女中の話では、百二十度だといふ。果してそれ程かどうか、場所にもよるだらうが、兎に角凄い暑氣だ。窓をあけて風を入れようとしたら、叱られてしまつた。戸外の熱氣が入ると一層暑くなるからいけないといふのだ。しかも、しめ切つた窓の隙間から、滿支特有の細かい砂埃が、いつの間にか忍び込んで室内をざらざらにする。先年來た時に公平氏の御馳走になつたので、今度はこちらが主人役で御招きし度いと申出て置いたが、何分北京に通じる事公平氏の右に出る者はないので、そのお客さまに場所の選定も頼み、玉華臺といふ家に連れて行つて貰つた。公平氏の註文された食饌がよく、曾てこれ程うまい支那料理を食べた事が無い。

日本の支那料理の如きは、全然別種のものゝやうに思はれた。

十五日　昭和九年の旅に見落した二三の名所を見物する。景山と北海公園の白塔は、共に高所から北京の全貌を俯瞰するのに最適の場所である。緑の多い大都は、紫禁城の黄玻璃の瓦や、聳え立つ城壁を包み圍んで、楊柳やポプラやアカシヤが微風に搖ぎ、これが長期抗戰を宣してたゝかつてゐる國とは思はれない。平和に美しい景觀である。山を下つて、紫禁城の一部を利用した博物館を見、更に孔子廟、喇嘛寺を廻り、病院に中村中尉をたづねた。將校病室といつてもバラツク建の粗末なもので、一室に四人ベツドを並べ、附添の御婆さんがゐた。病棟の前で樋口氏が寫眞機を向けたが、たまたま傍を通りかゝつた白衣の天使に頭をさげて、中尉のそばに立つてもらつた。中尉の附添はかくの如き若年婦人でない事を後日の爲に御斷して置く。

グランド・ホテルに大場氏を訪問したが留守だつた。今晩弟が主人役で、吾々を招いてゐる厚德福で逢ひ度いと書殘し、正金銀行、三菱公司を訪問、幹部の人々に面會した。それから、××××に公平氏を訪ひ、同氏の案內で蘆溝橋迄自動車を走らせた。今事變の口火となつた史跡は、折柄吹出した風塵の中に默々として橫たはつてゐる。我軍の據つた砂丘に立てば、忽ち砂塵に包まれて面をあぐべくもない。當時の將卒の苦勞を察するにはもつて來いの風だと語合つたが、口

の中迄も砂になつた。
此の前私の來た時は、北京の日本人の數は壹千五百といふ事だつたが、今日では五萬といひ或は七萬といふ。街頭でものべつに日本人と行きちがふ。しかし目抜の大通に日本店舗を見出す事は多少の時間がかゝる。そのかはり、狹い横町などに、蕎麥屋、すし屋、おでん屋、珈琲店を發見するのには努力を要さない。小資本を懷に、やまを張つて來る連中だから、人氣は荒く、行儀は惡い。北京の街頭で大聲を發して喧嘩を賣り、鐵拳を振つて車夫苦力をなぐり飛ばすのは日本人に限られてゐるさうである。不幸にして大和撫子も、異國に移植するとしとやかさを失ふものと見え、女の身で、車夫をなぐつて得意になつてゐるのもあると聞く。此の女達の車上の姿勢も極めて醜態だ。永い間我國の婦人は、極めて原始的な腰布を纏ふだけで腰間甚だ無防備だつたが、それ丈行儀はよかつた。ところが近來洋式の下穿を着用するやうになつてから、もう安心と思ふ爲か、洋裝婦人の兩脚の行儀など非常に惡い。北京の人力車の梶棒は長く、之を高く持上げて走るので、客はなかば背後に重心をとられてゐる。あやしげな洋裝で、短袴の足を大きく開いて、ひつくりかへつたやうな形の客は日本婦人と見て間違ひ無しだ。些細な事だが、決して異邦人の尊敬を購ふ姿態では無い。支那人を輕蔑し、ぶんなぐる連中も日支親善の妨害だが、一面から見

ると、その連中は支那人を客とせず、日本人同志共食ひのやうな商賣をしてゐるので、自然に支那人を大切にする氣にならないらしい。

恰も私の到着した日に、近頃北京を騷がしたピストル強盜のつかまつた記事が新聞に出た。日本人經營のカフヱに押入り、ピストルをつきつけて金品を奪ひ、豪遊を極めたのが、東京新宿附近を繩張とした與太者で、年齡二十二歲の若者だつた。巡査二人を傷つけて逃走するのを、憲兵の手で捕へられたのだ。その他滿洲方面で食ひつめたのが、續々入込んで來るので、官憲はこれらに旅費を與へて送還するが、途中から又戾つて來たりして始末がつかないといふ。

今晩の料亭厚德福は昨晚の玉華臺に比して下手物だつた。しかし珍しい物が多く、之亦東京などでは味へないものだつた。公平氏も大場氏も中村中尉も參加した。その席で、弟の家族の者が夏期休暇を利用して來る筈だから、中村夫人も其の一行に加はり、看護に來られてはどうかと進言した處、中尉も勿論異議なく、是非さういふ事にして貰ひ度いといふのだつた。それではこれで御別れですと、挨拶して散會した。

十六日　午前六時二十五分北京發。早朝の出發だから見送は御斷したのだが、公平氏と中村中尉が驛迄來てくれた。八時四十五分天津着。代理店富成一二氏池田靜雄氏に迎へられ、芙蓉館に

一室とつて置いて下さつて、手厚い御馳走を受けた。天津租界問題の切迫した空氣は、此の二三日愈々濃くなつた。試みに市中をドライブして見ると、租界の入口には丸太と板切で關所を設け、つけ劍の兵が佇立し、傍には査問所があり、群集は長い列を作つて順番を待つてゐる。又廣く租界を取卷いて杭を打込み、鐵條を張り、無斷出入者を脅す爲に電流を通じるしかけになつてゐる。英人もこれには弱つてゐるだらうと思はれた。

午後四時三十五分天津發。車中稅關の檢査があつたが、偶々英人夫婦、幼女二人、婢女らしいのが一人、吾々の座席の近くに乘合せた。それに對し二人の若い官吏が旅券と荷物の檢査を行ふのだが、稅關吏の破格な英語が先方に通じ難く、英人の英語が稅關吏に解し兼ねる有樣だつた。職業は何かとの問に、インシュアランス・アンダアライタアだと答へてゐたが、それが一方には聞取れない。これは同業だぞと思ふと、甚だ氣の毒になつた。餘計な御世話だが、稅關吏に御手傳ひ致しませうと申出た。此の英人の一行は廣東にゐるのだが、北京見物に赴き、三日間滯在して歸る途中であつた。婢は和蘭人で、旅券には國籍ホランドと書いてあり、英人がダッチだと答へたので、稅關吏の疑を受けた。ホランドとダッチでは違ふではないかと、二人の稅關吏はひどく不審がつた。荷物の檢査も元より嚴重だつたが、私は此の語學の不備が如何に惡意なき旅人を

苦めるかを目前に見て、何とかならないものかと思つた。

十七日　午前六時五十五分奉天着。此處で高洲所長も同車し、午後一時半大連着。ヤマト・ホテルで入浴しようと思つたが、引續き降雨がなく、斷水の爲め、浴室には水も出ない。

こゝで驚いたのは、昨朝北京驛頭で別れた中村中尉から「一七ヒナイチニカヘルコトトナリマシタイロイロゴシンパイカンシヤノホカアリマセン」といふ電報を受けた事だ。多分全快の上は、再び第一線に赴くだらうと覺悟してゐたが、私を見送つて歸ると間もなく、內地歸還の命に接したものと思はれる。軍人として、病氣の爲めに後送されるのは殘念であらうが、母堂や夫人の心中を察して、私も安心した。

支部には所長優績社員が集まり、これが今度の旅行の最後だと思つて、私も長時間喋つた。引つゞき星が浦で晩餐會が催され、席上各所長の意見を綜合すると、大連支部管內は保險は出來る、見込客は內地の私達よりも大ざつぱで面倒な事を云はず、手間取らずに契約がとれ、一件當の金額も大きい、たゞ人手不足の爲め、全國支店の下積成績に甘んじてゐるので、若し內地支部所屬の人達の中から、勇氣ある人が轉任して來てくれるなら、忽ち中堅支店級の數字を擧げて見せるといふのである。

十八日　藤崎高洲角田三氏の案内で金州へ行く。途中先づ大連市外の栗屋果樹園に立寄る。栗屋氏は二十餘年間亞米利加で農業に從事された其道の先輩で、夫人は角田所長の令妹である。廣い果樹園は今櫻桃の盛である。いくらでも枝からちぎつて食べてくれといふ事で、遠慮なく頂戴し、冷い飲物迄供された。金州では南山三崎山に上り、響水寺に行く。響水寺は水の清きを以て知られ、夏は杖をひく者踵を接すと稱されるのであるが、それも亦水涸れの爲めに平素の趣を缺くと聞かされた。

半日の清遊に心氣爽かになり、大連に引返し、老虎灘で休息、夜は內勤の人と會食した。

十九日　支部の諸君に見送られ、十一時出帆。ノモンハン事件で戰死した將卒の遺骨と同船だ。遺族の人達もゐて、船中はしめつぽい。十七日天津發の船に乘つた中村中尉は、私より先に內地へ着いた筈だ。

船中で青島代理店吉田辰秋氏にあふ。廣い知識を有し、思索觀察の百般に行き亙る氏の話をきき、學ぶ所不尠。

長い旅で、しかも多くは汽車で寢、暑氣にも閉口した爲め、船に乘つてから全く無氣力になり、ぼんやり海を見て暮らす。

二十日　終日海と空を見て暮らす。人と話をするのも大儀だ。

二十一日　早朝門司着。大坪氏と下關の山田所長に迎へられ、下關山陽ホテルで休息、零時五十分急行に乘る。

二十二日　午前九時半東京着。出社。中村中尉は大阪の陸軍病院に收容されたさうだ。

二

六月二十六日　横濱支店は近頃頓に活況を呈し、四月五月と連續して新記錄を樹立した。その祝賀と、優績社員の慰勞を兼ねた大會開催に付、私と卅萬倶樂部會長原一平氏が招かれて行つた。東京驛で落合ふ約束で、一足先に行つて待つてゐると、大きな鰐皮の鞄を抱へた原會長は、洋裝ながら素足に下駄ばきの形であらはれた。水虫で靴がはけないのだ。去年の夏同病で苦んだ私は、今年は幸に無事だ。短軀肥大、いが栗頭、洋裝下駄ばきの會長は、正に右翼を名告る脅喝常習犯の姿である。

省線電車に席を占めると直に、會長は懷から紙片を取出して私に示した。外野特報の卅萬倶樂部入部發表の原稿だ。印刷所からたつた今戻つて來たのを貰つて來たといふ。先月は木下氏が會

長候補だつたが、五月には僅少ながら原氏の方が上になつた。それを見ろといふのだ。原會長のいゝ所はこゝにある。木下氏は今年は決して負けませんと、はつきり誓つてゐるが、原氏は木下さんにはかなひませんよと卑下しながら、肚の中では必勝を期してゐる。倶樂部期間の最初から兩雄共に全力を出し、最後迄ねばらうといふ必死の覺悟は感得されるのである。

いゝ機會だから、私は募集に關するいろいろの質問を發したが、原會長はどんな問に對しても明確適切な回答を與へてくれた。あの優績は決してまぐれ當りではなく、鍛へあげた經驗の結果であり、又天才の所産である。

支店には所長主任優績社員約八十名集合、野老支店長の訓示、私の挨拶の後で、原會長の講演があつた。自分は話は下手だといふが、その話には磨かざる玉の如き味があつた。實績を以て裏書してゐる經驗談だから、聽者の耳から入つた聲は、肚に響く。會長の談話の要點を記すと左の通である。

一、募集にはくだくだしい説明は不要である。例之、利益配當については利益配當なんかはあてにすべきものでない、保險は保險だといふだけで足りる。

一、最初に保險金額の引上などにかゝはつてはいけない。申込む意向を認めたら直に診査をし

なければいけない。だから自分の募集の努力は集金の時に盡される。

一、既契約者を大切にしなければいけない。自分は既契約者と親しくつきあふ事を第一に心がけてゐるので、先方も自分を可愛がつてくれる。此の鰐皮の鞄も、自分が卅萬倶樂部會長になつたのを喜んで、契約者が祝つてくれた品物だ。又自分は、晝飯は既契約者の家で御馳走になる事にきめてゐる。まあ御飯でも食べて行つて下さいといはれるから、遠慮なく頂戴する。斯うならなくてはいけないのだ。

その說明として列擧する實例は豐富で、非常に面白く、又實益のあるものだつた。講演が終つてから數多の質問に答へ、結局自分は人さまに可愛がられる性分だといふ原會長の全身は、まことに愛嬌の結晶であつた。

聞けば今月々始には、木下氏を招いて講演を聽いたさうだが、かゝる催は本當にいゝ事で、會社としても今後御願してみたいと思つた。

各事務所代表の挨拶があり、高柳副長の閉會の辭を以て終り、慰勞宴は磯子海岸で張られた。宴席に於ても原會長の人氣は大したもので、一杯も飲めない氏の前に盃はひつきりなしに集つて來た。

三

七月八日　午後一時東京發。今度は牧野企畫課長もいつしよだ。牧野氏のやうな新人を、時々支店支部に出張させ、地方の狀況の視察と併而外野第一線の人々に知識を注入する事は望ましいことなので、先年來しきりに同行を勸誘するのだが、なんだかんだといつて肯かない。武市前々會長と藤田前專務時代に隨行した事もあるではないかといふと、あなたといつしよは嫌だといふ。不德のいたす所とはいへ、それでは會社の爲めにならないから、機會ある每に口說き、數年かゝつてやうやく納得させた。これが今度の名古屋支店への貴重なるお土產だ。

車中は滿員、蒸暑く、夏の旅は樂で無い。六時二十八分着。今夜は所長諸君が吾々を御馳走してくれるといふので、翠芳園に伴はれ、手厚い接待を受ける。五月は最高記錄を作つたが、六月は稍劣り、相手方の仙臺が新記錄參百萬といふ大收穫を擧げたので、對抗戰は敗北となつた。しかし一座の所長の顏を眺めると、人品骨柄並々ならぬ強者ばかりで、まだまだ餘力は十分に藏してゐるやうに思はれる。その內燃する力の爆發も、遠からず來るに違ひ無い。

九日　暑い一夜だつたが、今日は一層暑くなりさうだ。午前十時半千早浩養園に集合、總勢三

百人といふ。此處は麥酒會社の經營で、園遊會式の設備がしてある。舞臺の前に大天幕を張り、これが臨時會場となつた。伊藤所長進行係をつとめ、先づ支店長の開會の辭、私の挨拶につゞいて牧野氏の話があつた。會社の記念日にちなみ、創立當時の話から五十八年間の變遷を說き、明治生命の使命と他社と異る志格を高揚し、最近の會社の躍進精神總動員とその成果を說明し、熱情言辭と共にほとばしり聽者の胸奥に觸れるものであつた。

各種賞品授與が行はれ、小川加藤山本谷口所長、磯部主任櫻井社員新井醫員の挨拶があつたが、谷口氏は國策刈か時局刈か、いが栗頭に國防服を一着してあらはれ、一同に起立を求め、自ら號令して東方に向つて皇居遙拜靖國神社遙拜、西方に向つて第一線將兵に感謝の最敬禮を行ひ、自分の話は此の三方の感拜を核心とするものであるが、時間が無いから原稿を社報か特報に出して貰ひ度いと云つて、それを私に手交した。左に之を掲ぐ。

非常時と云ふ言葉が申されますが、吾々の仕事にこれ以上の非常時はありません。昔の保險外交員は、頭髮にチックをつけ、ネクタイを結んでお客さんの前で、頭を百度も下げて加入してもらつたのですに、今はどうでせう、興亞の坊主頭にノータイで、戰時色の服裝さへ致して居れば、先方で國策第一線の戰士として、進んで契約してくれます。吾々三十萬倶樂部

會長の原一平氏も興亞の坊主頭です。私も同様です。本當に有難い事です。靖國神社の護國の英靈、遠く國防第一線の兵隊さんに感謝せずには居られません。尙又服裝問題は第二としても、從來保險屋さんとして一般人から特殊扱されたものが、現下の狀勢は如何でせう。百億貯蓄は保險からの標語のもとに、大藏省商工省の後援があつて、保險に加入せんものは國策違反者と稱してもよろしいと云ふ千載一遇の時、非常時といはずして何といひませうか。私は百億貯蓄は保險からと云はず、百億貯蓄は保險に限る、眞の貯蓄は保險に限ると改正し度いのであります。そして現下國策第一線戰士として、諸君の活動を期して止まない次第であります。十分に働いて下さい。

次に働くといふ事は、自分の爲になるばかりでなく、語音の示す如く、ハタがラクになるといふ意味で、諸君が成績を計上して收入を增加せらるれば、先づ御兩親のある方は親が樂になり、細君が樂になり、子供が樂になり、諸君の事務所の所長が樂になり、支店長が樂になり、阿部總帥が喜ぶと同時に國家が樂になるといふ事を忘れてはいけません。人を喜ばす事は人生最大の善事であります。まして國家が樂になるといふ事は此の上もない名譽であります。どうぞ此の意味で明日といはず今日此の席の歸途、自分が募集に働くといふ事は、只

今申した理由で、國家が樂になるといふ事だと忘れずに働きませう。

大會は小池副長の閉會の辭で終り、あとは園遊會で模擬店を開き、すし、うどん、おでん、豚カツその他品々、麥酒は呑放題といふ豪華版で、金魚のやうなのや七面鳥のやうなのや、龍の落子のやうなのや千紫萬紅の女給達がサアヴィスして氣勢を添へた。

夕刻、店長副長と共に蒲郡に赴き、常磐館に一泊、意見を交換した。

十日　昨晩の暑さはきびしく、私は汗に堪へ兼て疊の上に寢たが、牧野氏は一睡も出來なかつたといふ。それでも早曉、關小池兩氏と共に釣に出て行つた。平生慢性寢坊の惡疾に惱んでゐるのだが、釣に行く日丈は早起だと自身で云つてゐた。約三時間の間に十五六尾の鱚を釣上げ、不漁だ不漁だといつて戻つて來た。

九時半蒲郡を發し、午後三時二十五分東京着。

四

七月十二日　最近めきめき成績を擧げ、三月連續新記録を出した横濱支店の中でも、就中優績の平塚出張所が、代理店を招待して優績社員會を催し、私も招かれて參加した。野老支店長は、

先頃失つた長子の新盆なので不參、高柳副長が同行した。總勢三十人、馬入川に船を浮べ、曳網と投網で獲つた川魚を肴に祝杯をあげた。投網は、出張所にその人ありと知られ、今度沼津事務所長に榮轉する伊藤清一氏が手練を見せ、料理船には笹尾彦三氏が乘込んで庖丁の冴をきかせた。昨夜の雨で川水は濁り、海手から吹上る風は強く水面を騷がせたが、鯉鯰鮎おぼこ手長蝦の大漁で、食卓は賑はつた。本田所長は御機嫌で、船と船とを廻り、挨拶を述べ、お酌をし、日頃募集に示す熱誠を、接待の上にも流露させた。夕刻歸京。

五

七月十三日　信越營業部長野出張所三連勝祝賀の爲めに、午前八時半稻田部長鷲尾祕書神津佳治郎氏と共に上野を立つ。輕井澤方面に避暑する外人が多く、一種特別の車內風景だ。驛々に巡査が佇立し、物々しい空氣が漂ふので注意すると、隣邦の高貴の方が御微行で同車して居られた。一時三十六分長野に着き、いちはやく步廊に下りると、高貴の方を御出迎の爲めに集つたと見える役人風の一團に忽ち取卷かれ、中にはうやうやしく肩書附の名刺を差出す者もある。間違へられたと氣づいたので、違ふ違ふと答へながら、同行を促して圍みを脫した。驛前の休息所には、

北信明保會の方々と、所員諸君が集合して居られ、直に電車で上林溫泉へ立たれたが、私は私用の爲めに一電車遲れて驅つける事にした。長野から約一時間、終點湯田中にて下車、更に自動車で上林に行く。ホテルは長野電鐵の經營で、志賀高原を仰ぎ、妙高黒姫戸隱の秀峰を一眸の中に收める景勝の地であるが、此の日は雲霧が多く、遠望はきかなかつた。つい此の間の朝鮮滿洲支那の旅行の暑さ、名古屋出張の日の酷暑に比べ、流石に涼しく、庭前の杉檜に早くも蜩を聞く。ホテルの直ぐ上の眺望のいゝ場所に、故寺崎廣業の畫室があり、今は廣業寺と稱してゐる。それと向合つた遙に向ふの山裾には、橫山大觀の別墅がある。さういへば、山峽に漂ふ白雲にぼかされた景色は、大觀好みに違ひ無い。

入浴休息の後、廣間で三連勝旗授與式が行はれ、稻田部長の挨拶、渡邊所長の答辭、私の挨拶、北信明保會代表長野代理店藤井氏の御挨拶があり、又新しく代理店を引受けられた方々の紹介、新入社員の紹介が終つて宴會となつた。

十四日　今日も雲が多く、雨になるのでは無いかと思はれた。朝食後記念撮影をし、二臺のバスに分乘して、志賀高原に行く。志賀高原は赤倉程の大展望を持たず、吾々の持つ高原の概念とは違つて、寧ろ山懷に居るやうな氣がする。溫泉ホテルに休憩、ホテルの煖爐を圍んで語る程

涼しい。明保會の諸氏並に出張所の諸君は、再び上林ホテルに歸つて晝食するといふ事だつたが、私と稻田部長は歸りの汽車の時間が迫つて來るので、その儘御別れして長野へ行き、豫而(かねて)きく信州の蕎麥で腹を作つた。やぶそばといふ一寸入り兼るやうな大きな家で、結婚披露なども行はれ、酌人も出入するといふ。座敷の樣子から見ても料理屋に轉向したものらしく察しられたが、吾々はざるそばを三枚づゝ食べた。色の黒い、ぽきぽきした手打を想像してゐたのだが、殘念ながら東京流の見た目のきれいなやつだつた。一時四十五分長野發。

長野出張所員木内敬篤氏は、佐久間象山詩賦國風譯「象詩風影」の著者で、私にも之をくれたので車中默誦する。國漢文の造詣深く、よくこなれた譯詩である。その卷頭のひとつを紹介する。

偶 然 喫二物 累一　　ゆくりかに世の塵を出で
薄 言 罷二驅 馳一　　こゝに吾しばし憩はむ
歲 月 隨二流 水一　　年月は水と流れて
鬢 毛 將レ化レ絲　　髮筋はやゝに白しも
文 章 竟 無レ用　　わが文はつひに用なし
藝 事 亦 何 爲　　わがたくみまた何せむに

欲下賣二書一與上レ劍　　劍ふみみながら賣りて
就レ僻結中茅茨上　　この山に盧結ばむ

今朝の雲は消え、車窓に西日がさし、下界は暑いとこぼしたが、輕井澤附近では俄に大雨となり、山を下つて又晴れ、暫時にして再び雨となり、更に又止んで蒸した。六時五十八分上野着。

――「社報」昭和十四年七月號

臺灣

八月三日　午後九時四十分東京發。

四日　午前九時二十七分三宮着。高木重松藤原村瀨藤枝諸氏の出迎をうけ、直に高千穗丸に乘船、大阪神戸兩店の募況をきいてゐるところへ、京都の水澤さんが見えた。正十二時出帆。

低氣壓の襲來が豫想されて居たが、天氣晴朗、無風、海上頗る穩かだ。乘客中には軍人が多く、又數名の婦人の國防服に馬乘袴のやうなスカートをつけ、軍帽型のものをかぶり、望遠鏡だか水筒だかを肩から斜につるし、その癖白粉を濃く塗つた皇軍慰問もゐた。その婦人達は人みしりをせず、活潑に甲板を步き廻つてゐるが、どれもこれも足の運びが內輪だ。服裝に似ない步き方だとあやしんだが、大阪新町の妓女達が廣東方面へ行くのだと聞いて成程と思つた。

氣がゆるみ、平生の疲勞が出て來て、ぼんやり空と海を見るばかり、夕燒が美しく、やがて大

きな月が登つた。

五日　早朝門司着。上陸する人も多かつたが、自分は動くのもいやで、その儘寢椅子に引くりかへつてゐた。つい此間、或新聞に、私の唯一の趣味は旅行だと書いてあつたが、私は旅行好では無い。思ふに任せるものならば、氣樂に自宅の疊の上に伸びて、本を讀んでゐる方が樂しい。身分不相應に贅澤で、口に税金のかゝらないのに安んじてゐる本店の若年寄の中には、私を自己虐待症だといふ者もある。これも當らない。私と雖も好んで此の炎暑の中を、臺灣へ行き度いとは思はない。しかし、それが私に命ぜられてゐる仕事である。私のつとめなのだ。そればかりでは無く、壹萬人の外野人が、汗を流し、氣力に鞭うち、懸命に募集してゐる姿は、常に私の眼前に浮んで來る。それを想ふと自分の安逸を希ふ心は消え、どんな忍耐も苦にならない。まだまだ自分は贅澤だ。樂をしてゐると思ふ。

正午再び拔錨。今日の一日も平安であつた。但し風がなく、夜は寢苦しかつた。

六日　附近に颱風が待機してゐるさうで、時々曇り、小雨も降つた。無線電信か、ラヂオか、東京が風雨に襲はれたといふ噂が傳はる。

今日も終日甲板の寢椅子で、何もしずに暮らした。陸軍の閣下のデツキ・ゴルフの御相手をし

ないかと勸められたが、どうも動く氣にならないのでことわる。鯨が遠くの方で潮を吹く。何の魚か二尺ばかりのが、波頭に躍る。何の鳥か、ちひさいのが群つて船を追ふ。晝の間は風が強く、波も稍高くなりさうだつたが、靜な夕方になつた。臺北支部各出張所事務所から、次々に電報が來る。

七日　午後二時基隆着。阿部支部長はじめ會社の人達、業界新聞社の人に迎へられ、總勢同車三時二十五分臺北着。ホテルでひと休みしたところへ電報が來る。どうしても五千萬はやり度かつたか、殘念ながら四千六百四拾九萬で締切つた。臺北は二百七萬で達成率第一位を占めた。長く臺灣で覇を唱へた××は完全に追越し、近年無敵と稱される×××と比肩するところ迄漕ぎつけた。明日の勝利は今や確實である。

かねて出征中だつた醫員重松氏が臺北勤務となつて歸つて居られ、元氣な姿をあらはす。勇しい戰地の話を聽いたが、御氣の毒なのは、氏の出征中夫人が死去された事だ。何ともなぐさめる言葉さへ無い。

八月の臺北はさぞかし暑いだらうと想像してゐたが、風は涼しく、夕立があつて樂だつた。

八日　午前十時、支部集會室で社員大會が催される。安食內務主任の開會の辭、支部長の挨拶

の次に私は一年間の會社業績の報告、保險業界の近狀等につき所感を述べたが、一年一度しか顏を合せないので、話が澤山たまつてゐて、つい長々しいお喋となり、定刻を過ぎてしまつた。所長主任の挨拶、外務主任の閉會の辭を以て終り、カフエ・モンパリで一同食卓を共にし、此處には有力なる代理店、囑託醫の方達も列席された。散會の頃俄に雷雨となり、出るに出られず又杯を取上げて歡談した。

引つゞき基隆出張所の優績社員會が高山樓に催され、氣勢大にあがつた。

九日　朝九時半臺北發、新竹に向ふ。內地、朝鮮、滿洲いづれも旱魃に惱まされ、農村に一抹の不安の影を與へたが、臺灣は豪雨の爲めに被害をうけ、第一期の收穫を臺無しにし、第二期の植つけを妨げられた地方が多い。汽車の窓から眺めても、その損害は察せられた。

十一時新竹着。出迎の所員諸君と列を作つて事務所に行き、正午カフエ・ミドリで優績代理店主と優績社員の集會を催す。例によつてお喋が長過ぎ、皆さんを空腹にした。

席上代理店代表として新竹黑金代理店彭繼茂氏の述べられた御挨拶は、まことに同感、難有いものであつた。之を要約すれば、代理店の中には附近に新代理店の設置されるのを嫌ふ人もあるが、それは間違ひで、同じ會社の代理店が殖えるのは味方の殖えたのと同じで、非常に力強く、

各自の成績は低下せず、寧ろ向上する結果を見る。自分は此の信念にもとづき、既に四五の友人を會社に紹介して代理店とし、共に手を握り合つて保險報國に努力してゐる云々。恰も我社の爲めに指針を與へられたやうなもので、これ程意義深い御意見に接したのは、此度の出張の大收穫であつた。宴會は粗末な定食に過ぎなかつたが、忘れ難い感銘を受けた。その上に、代理店の方々から二次會の御誘ひを頂き、杏花天といふ料理屋で、うまい臺灣料理の卓を圍んだ。旅館塚廼屋に宿泊。

十日　昨夜も夕立のおかげで涼しかつた。八時十八分發、十時五十五分臺中着。旅宿千代の家の主人古澤平八中尉が恰も今日凱旋する事になつてゐて、おかみさんは脂粉を避けた奥床しさの中にも、かくし切れない嬉しさを見せ、偶然投宿した吾々も晴々とした心持で、嬉しかつた。

こゝでも亦優績代理店主の出席を求め、社員會を開く。臺灣料理は一般支那料理に比し味が淡白で私の舌に適ふのであるが、今日の醉月樓のものは、殊にうまかつた。阿部支部長も臺中の臺灣料理が一等だといふ。又酌人も、こゝが一番揃つてゐて、之亦支部長平素の鑑定正にその通りだといふ。川上所長が熱血男子である爲めか、宴會は素晴しく賑かで、散會するのが惜まれた。

十一日　午前七時四十分發。川上所長は途中彰化迄同車。十時十三分嘉義着。嘉義ホテルに投

宿。義宸閣で優績代理店優績社員會を催す。阿部支部長は、酒の飲めない人ときめてゐたところ、何處へ行つても自ら號令して杯をあげるので、私は乾杯病と名づけた。宴會の氣勢があがらないとみると、皆さん元氣が無いですぞと叫び、第何回目の乾杯を命令する。勇ましき限りで、自分は元來飲めるので、あなたの認識不足ですぞと叱られた。兎に角非常に威勢がいゝ。七月の大募集で、全國第一位の優績を占めたゞけの事はある。

散會、歸宿すると又夕立が來た。この地方は先頃二十二日間降つゞけ、その雨量は昨年一年中のそれに匹敵するといふ。恰も我社の躍進率の如きものであらう。夜食後、今晩は休息しようと思つてゐると竹中所長があらはれ、嘉義に來て嘉義美人を見ないでは、結構といへないといふ。島内第一の美人揃の市だから、是非一時間つきあへといふ。井上吉武高見三勇士を從へての號令で、僕は美人よりも休息の方が好きだと頑張つたが、何分勸誘のうまい連中ばかり揃つてゐるので、遂に引張出され、福喜といふ料亭に伴はれる。しかし美人はあらはれず、後から後から婆さんがあらはれるので、早期解約にしてホテルに戻つた。

十二日　朝の汽車で臺南へ行く豫定だつたが、臺北のホテルに泊つてゐた時、虎尾(こび)の大日本製糖工場長兼務の同社取締役永井清次氏から一度來ないかといふ誘ひの電話を受けてゐたので、皆

に相談したところ、我社は同社の大株主でもあり、又虎尾工場は代理店を引受けてくれてゐるのだから、是非顏を出せといふ意見なので、俄に日程を變更し、竹中吉武高見の三氏を案内役にして推參する事にした。砂糖工場ときくと、殺風景なものと想像するのが常識だが、少くとも虎尾工場は此の想像を完全に裏切つた。大河を前に樹木と芝生の整然とした一區劃で、幾何學的の美しさを持ち、しかもその廣さ十六萬坪といふのだから、公園の中に會社が存在するやうな景觀である。折惡く重要會議のある日だつたが、永井氏をはじめ、德島庶務課長、手島會計課長の御接待で晝餐を頂き、無遠慮な御願をして來た。

吉武高見兩氏に別れ、臺南へ行き、全保險會社中臺南州第一位の大代理店角谷力男氏を訪問した。藥品を賣捌く店頭常に客を絕たず、御主人は臺灣發展に多大の貢獻をした有力者で、保險の認識の極めて高い方である。御多忙の有樣は目の前に見えてゐるのだが、私も遙々來たのだから、特に無理を願つて晩餐を共にし、實際經驗に裏打ちされた有益な話を承つた。折よく、先般應召の幸地醫員も少尉に任官當地の軍病院に勤務中なので同席して貰つた。

竹中氏と別れ、高雄へ行く。七月優績をあげた岩崎所長は非常な元氣で、今月は今迄に百五十件の診査申出があるといつてゐた。春田館別館に泊る。濤聲枕に近く豪雨緣側に吹込む。

十三日　夜來の豪雨やまず、今日の大會は不參者が多いだらうと心配したが、遠方の人も落伍せず、溪州代理店余德和氏、萬巒(ばんらん)代理店李景盛氏をはじめ、優績社員三十餘名の顏が揃つた。昨年七月來た頃は、此の事務所の沈滯期で、所員僅に十七名、增員の見込も乏しいといふ事だつたが、岩崎所長の發奮は、一年の間に陣容を改め、今や八十名の所員しかも元氣のいゝ若手を殖やし、無敵を誇る基隆と相拮抗して譲らざる勢を示して來た。殊に七月は溪州代理店主の弟余德憐君の十八萬といふ臺灣未曾有の巨績もあつて、萬丈の氣を吐いた。此の元氣は宴會にもあらはれ、支部長の乾杯病は愈々熱度を高めた。萬巒代理店の弟萬巒副事務所長李景嶽君は、よく唄ひよく論じ且又よき成績を擧げる青年だが、溪州軍に挑戰する歌を作つて合唱した。「上海だより」の節、

あいつがやれば僕もやる
見てゐろ今度の激戰に
三拾萬圓ぶんどつて
外野特報に見せ度いな
待つてゝ下さい重役さん。

かういふ雰圍氣を眺めて、最も嬉しさうな顏をしてゐるのは、高雄事務所の元老櫻井胞治郎氏

である。岩崎所長の相談役として、後見役として、悲喜を共に分つて來た氏にとつて、今日の隆盛は我身の事のやうに思はれるのであらう。來年は結婚二十五年になるから、銀婚式の喜びを携へ、陽春四月參拾萬倶樂部の際夫婦で上京すると宣言すると、李景嶽君は、僕はその時新妻を伴ひ新婚旅行を兼て倶樂部大會に列席するといふ。

これで各出張所事務所全部の大會を終つたが、各所の誓約額を記すと左の通である。

基隆　七拾萬圓　市內　參拾萬圓　新竹　參拾七萬五千圓

臺中　五拾萬圓　嘉義　五拾萬圓　高雄　七拾五萬圓

合計參百拾貳萬五千圓、阿部支部長は本年度下半期常時貳百萬と大書した貼紙を携帶してゐたが、所長や社員にそんなけちな事では駄目だと激勵されて、いつの間にか常時參百萬と書改めた。

二代理店と主任諸君とで、二次會にカフヱへ連れて行かれた。臺北支部の人は皆酒が強く、酒も強いが仕事も強いといひながら、いくらでも飮む。日の暮迄つゞいた。さて歸らうといふ時に、一番年嵩で、そばかすだらけの島產の女給が、私の肩を叩いて、旦那さんは煙突だねえといふ。何の事かわからないので反問したところ、若い時はいゝ男だつたかといつて、いかにもをかしさうに笑ふ。何をからかつてゐるのかわからないまゝにおもてに出て、扨て自動車に乘つてから、

はゝあ煤けてゐるといふ隱語だなと思つた。これは此の地方に限られた老人客に對するひやかし言葉か、全島に行はれてゐるのか、或は又內地のカフヱから傳染して來たものか、兎に角完全にやられた。試みに本店の銀座ボーイに訊いて見ようと思ふ。

支部長は溪州萬巒兩店主に自由を與へず、更に又海岸の料理屋へ同行し、遂には吾々の宿へ御連れして同宿を求め、兩店主もこゝろよく應諾して泊つて下さつた。御二人とも若く、保險の事にも理解深く、熱心に協力して下さるので、支部長は別れるのがいやなのだ。風雨なほやまず、濤聲愈々高し。

十四日　兩代理店主とは來年再會の約束をして、八時十八分高雄發。途中の驛で新竹の陳所長乘車し、募況を聞いたが、同氏の末の兒二歲になるのが、つい二三日前肺炎で死去したと知つて驚いた。陳氏は子福者で、目下小學校に二人、幼稚園に二人通學してゐるが、四人とも全甲の優等生だといふ。恐らく亡くなつた子供もすぐれた資質だつたらうに、惜い事であつた。心ばかりの香花を捧げた。他の驛で新竹の元老木村政敏氏が乘車した。氏は先日の大會の時、折惡く親友の死に際會し、臺北へ急行して逢へず、殘念に思つたが、わざわざ斯うして來てくれたのだ。新竹迄同行四方山の話をする。三時五十六分臺北着。

十五日　午前九時五十六分臺北發。途中迄長尾村上兩氏同車、夫々診査地で別れたが、此の炎熱の中を、急激に増加した件數に對し醫員の數は逆に減つてゐるので、その勞苦は同情される。帽子を振つて遠ざかる姿は、悲壯でさへあつた。

一時十五分前宜蘭着。代理店廖燦堂氏、永田出張所長、蘇明火所長に迎へられ、廖氏の御宅で接待を受け、その隣家の事務所で辨當を食べ、河向ふの羅東街の羅東會館樓上で宜蘭、蘭陽兩事務所の社員會を開く。酒豪揃ひ、藝人揃ひで、宴席の賑かさは第一だつた。席上、此の八月を期して決戰しようと宜蘭軍が挑戰すれば、楊錦發氏を將とする羅東軍も應戰し、兩軍の援軍として各代理店主の聲援演說があり、かくし藝迄對抗的に競演し、氣勢大にあがれば、代理店主蔡老萬氏起つて先づ此の對抗戰の實果を收むる爲めには、列席の各店主自身率先して契約をしようではないかと提議され、阿部支部長の乾杯病は萬々歲症を併發し、頗る重態と見受けられた。此處には參拾萬倶樂部の名花李郭氏美川女史の外に數名の婦人鬪士がゐて、いづれも明年四月の上京を宣言して活躍してゐる。

散會辭退しようとすると、代理店有志の方々から二次會の御案內をうけたが是れ亦宜蘭羅東雙方からの別々の御誘ひなので、一身を以ては受切れず、結局兩軍合流して宜蘭街名物ときく綠燈

の家につれて行かれた。宜蘭の室羅東の室と別れ、あちらへ行き、又こちらへ行き、二座敷かけ持ちだ。更に第三次會はどうかとの勸誘にも接したが、これは御斷して吾々は礁溪の宿に引あげた。

代理店主林本泉氏は文學の素養深き方ときくが、宴會席上一詩を賦して下さつた。過褒當らず、まことに汗顔の至だが、面皮を厚くして左に之を錄す。

歡迎阿部總帥遊蘭陽席上賦呈並希斧正

品學兼優世所稀　飄然咳唾盡珠璣
襟懷瀟灑人爭仰　雅態雍和衆競依
萬里奔波監保險　一生勞碌竟忘機
蘭陽聚首欣今席　惆悵明朝又唱歸

十六日　礁溪の西山旅館は、昭和九年初渡臺の際故梅田眞太郎氏と全島巡廻の最後の宿だつた。既にその時マラリヤは體内に潛伏してゐたのであらうが、梅田さんは大變御機嫌で、溫泉で汗を流し、久しぶりで靜かな晩餐をとつて、夜遲く迄對談した。今度の旅中到る所で故人を偲ぶの情に堪へなかつたが、庭前の虫聲もその時の思ひ出を誘ふのであつた。ほんとにいゝ方で御座いま

したと、宿の若いおかみさんも共に嘆いた。

十一時二十八分礁溪發。臺北に歸る。

支部有志の人々に招かれ、紀州庵で御馳走になる。席上、高雄のカフェで煙突だとからかはれたと話すと、陳金英氏が、それは煙突ではない、艶頭であらうと訂正した。果して艶頭とすれば美男の意ださうで、まことにいゝやうだが、それにしても冷かしには違ひ無い。畜生やつたなといふ感じは消せない。

十七日　臺北市内代理店中村敬市郎氏から、留守中土産として紅茶を頂戴したので、御禮に伺つたが旅行中との事で遺憾だつた。

夜は蓬萊閣で、內勤の人達を主とする會を催し、別辭を述べた。この度の臺灣旅行も大變愉快だつた。時々は寢苦しい夜もあつたが、大體に涼しかつた。何處の出張所も事務所も希望に燃え、臺灣の制覇は目前に迫つてゐるし、代理店の強力なる支援は社員を鞭撻して拍車をかけ、その意氣は私を鼓舞して疲勞を感じさせなかつた。常夏の國蓬萊の島に、花果の樹木に覆はれ、五穀豐穰、珍奇なる鳥獸虫魚は群れ遊ぶ。若しこれらを一幅に描かば、人は極樂の圖と思ふであらう。阿部支部長の如きも、再び行李を纏めて海を渡る事は希望しないといつてゐる。

十八日　午前九時十二分臺北發。業界紙の鹿野高山二氏も基隆迄見送つてくれ、大和丸に乘船した。先年渡臺の際冗談に、南部地方に產するキョン(豆鹿)を手に入れ、內地へ連れ歸り、これを引つれて銀ぶらをしたいと云つたところ、市內の所長村上氏が探し出して買つて置いてくれた。いざとなつて見ると、船中車中の世話や手續が面倒さうで心配したが、これも無事に乘船した。港外に出ると風が強く吹つけたが、波は高からず、涼しかつた。

十九日　終日籐椅子に寢て動かず。夜、月光の波に碎けるのを見て仰げば、東京出立の頃は圓に近かつた月が、何時か花王石鹼になつてゐるのに驚く。

永田村上兩所長連名の電報を受取る。チヤウトノゴリヨカウニオツカレナキヤウイノル。カンゲキノセイヤクハキツトヤリマス。ゴアンシンネガヒマス。

二十日　海上愈々平穩。

二十一日　午前九時半神戶港着。重松村瀨辻三氏に迎へられ、支店に赴く。恰も來店中の各所長に逢ふ。

零時二十分特急に乘る。高貴の御方が御乘車になるので警戒嚴重を極め、ものものしい有樣だつた。最近本店の中老連の間に、阿部も年をとつたから少しいたはつてやらうといふ申合せがあ

り、汽車の座席も時々一等を豫約してくれる。會社の旅費規則には一等乘用と定めてあるが、先年諸事節約を敢行した際、先づ日當を削減し、又汽車は二等にしようといふ申合せをした。それにも拘らず中老連は支店に差出口をしたと見えて、今度も白切符が買つてあつた。神戸乘車の客で、高貴の御方の一行は別とし、展望車には私の外に一人もなかつた。

汽車が動き出すと、歩廊に在る者すべて、高貴の御方に最敬禮をしたが、最後の展望車にたつた一人腰かけてゐる私を何と見たのか、一齊にうやうやしく頭を下げたのには恐縮した。恐縮のとたんに高貴の御方は御室を御出ましになり、學習院の制服を着た御學友と見受られるのを從へ、展望車に御出になつた。倉皇たつて他へ移らうとすると、若い軍裝の御方は、どうぞどうぞと極めて御鄭重な御言葉で、私に腰を下せと仰せになり、御自身も私の前の席に御着きになつて、どちらへ御出ですかと御たづねになつた。私は恐懼し、臺灣の歸（かへり）である旨を御答申上ると、臺灣は暑かつたでせうと御いたはりの御言葉を賜つた。其處へ二人の隨員が來て、何者かといぶかる樣子だつたから、私はそれを機會に、食事をして參りますから失禮致しますと申上げて退いた。

食事は濟ませたが、再び一等車へ戻るのは差控へ度いと思ひ、列車給仕に二等車へかへてくれと頼んだが、既に豫約濟で駄目だといふ。高貴の御方は御室へ御入りになつた筈だから、展望車

にゐて差支へないといふので、戻ると、成程その通りなので安心した。何しろ私のみなりといふのが、十年着てゐる服で、しかも此の旅行中汗と塵埃にまみれ、自分でも氣味の惡いやうなものだし、平民育で言語動作頗る粗野であるから、萬一失禮があつては申譯無いと思つたのだ。ほつと一息したと思ふと、高貴の御方は又展望車へ御出ましになられ、特に私の隣へ御着座になり、先刻のつゞきで臺灣について種々御下問があつた。私は愈々恐懼し、しかし自分の知る限りの事を御返事申上げた。新高山（にひたかやま）には登る事が出來ますかとも御たづね遊ばされたので、私共の如き老骨では無理で御座いますが、殿下のやうな御年若の方は是非とも御登になり、又臺灣全島御巡視遊ばされ、更に滿洲方面も御視察遊ばされ御見聞を御ひろめになるのが邦家の御爲で御座いませうと申上ると、わたくしは未だ任官してゐませんから各地を見る機會がありませんと仰せられた。私の言葉から各地を歩き廻る者と御推測遊ばされ、飛行機に乘つた事はあるか、その乘心地は如何、天津北京へも行つたか、此の度の事變が臺灣へ及ばした影響如何といふ風に、次々と御下問に接した。尙、あなたは大和丸にお乘でしたかとおたづね下さつたので、然る旨御答申上ると、それならば今朝舞子の濱で沖を通るのを見ましたと仰せられた。御微恙のため舞子に在らせられた趣を承つた。

大阪京都名古屋と次第に客も殖え、中には高貴の御方と心づかず、上着を脱ぎ、靴を脱いで胡座するものもあり、甚だ亂脈を呈したが、少しも御心にかけさせられず、夕食の際の如きも一般の者を遠ざけず、食堂へ御出向になり、粗末な定食を召させられた。

私はもつたいなさに全身汗となり、只管恐縮し、不知不識の間に不敬の事のありはしないかを心配した。まことに身にあまる光榮であるが、卑賤のものゝ悲しさは、取かへしのつかぬ失態を起す事を懼れるばかりであつた。一等乘用勸說者に此の恐懼の心を知つて貰ひ度い。

午後九時東京着。

——「社報」昭和十四年八月號

岡山

二月十日　午後九時東京發。昨年九月鼻出血以來はじめての出張だ。多少の懸念なくもなし。しかし、當時二百近かつた血壓も、年末には百五十程度に下り、正月支店長會議の頃一寸逆戻りの態だつたが、その後は百四十臺となり、出立前二日には百三十八といふ好成績で、レントゲン治療も暫時（しばらく）休んだ方がよからうといふ處迄來た。再三繰返した身體檢査の結果、何處も惡くないので、結局一時的過勞によるものと診斷されたが、いつたん惡い癖がつくと、なかなか舊態には復さないものらしいので、私は長期抗戰の覺悟を定めてゐる。酒も飲まず、獸肉を口にせず、食物の量を減じ、深夜の讀書執筆を廢し、過激の運動を避け、——いはゞ、まづい物を食つて怠けてゐるのだ。今度の出張も、出來る丈怠ける事を專一にしなければならないと思ふ。

十一日　皇紀二千六百年の紀元節、關西は雨だつた。十一時一分岡山着。午後二時より支店で

社員大會があり、私は會社の近狀と、本年度の改革その他につき、原稿迄用意して臨んだが、登壇挨拶の最中氣分が惡くなり、かすかながら身體の中心を失ひさうな豫感がしはじめたので、無理をしずに中絶の止むなき旨を申述べて謝つた。或は室內の極端に高い人工熱度の爲めに不快を覺えたのかもしれないが、去年鼻出血直後、會社の往復に、時々眩暈を感じ、たつた一度ではあるが、會社の廊下で眼がくらんで何も見えなくなつた事もあるので、我慢をしずに引下つてしまつた。緊張した大會の空氣をみだし、甚だ醜態だつた。

出張所長事務所長優績社員の挨拶の後、各所長は二月を期して大努力を傾け、二千六百年を記念しようと申合せ、左の如き數字を誓約した。市內八拾萬、中央五拾萬、倉敷五拾萬、鳥取參拾萬、津山貳拾萬、米子貳拾萬合計貳百五拾萬圓也。この中、鳥取と米子は今日の會合に招かれてゐなかつたが、電報で右の申出に及んだのである。

夕刻、料亭新松の江に行く。岡山縣下の有力なる代理店特約店の方々に社員會の人數を加へて百數十名の大一座だ。支店長と私が挨拶を述べたのに對し、來賓代表として岡村壽氏の答辭があり、賑かな酒宴となつた。醫師の命令で、盃を手にしない事になつたので、手持ぶさたで困り、德利を持つてお酌に廻つた。

十二日　午前十時五分岡山發。今日も亦小雨だ。昨日の社員會席上の眩暈は、矢張温氣の爲めだつたらしく、其後何の不快感も起らない。此の線はいつも混雜するのだが、珍しく客が少なく、宇野高松の連絡船も、雨天の爲めか、時節の爲めか、話聲さへしない寂しさだつた。

四國支部は昭和九年の開設で、當時は月四五拾萬の數字しか出なかつたが、初代支部長高木金次氏の果斷は、舊來の明治生命イデオロギイに頓着なく、積極的に人を集めて細密なる募集網を張り、次の支部長久保田市太郎氏も、最初から高木氏と協力して事に當つた人だから、同一方針で今日に及び、數年の中に壹百萬級の支部となり、今や正に常時二百萬の目標を完遂し得る程度迄近づいた。從つて從來の手狹な借家では、日常の執務にさへ差支へるので、偶々中國筋の銀行の建てた家屋が今は持主も變り、賣物になつてゐるので、之を買收修理し、紀元節をえらんで移轉したのである。その披露の爲め、今日は管内の有力なる代理店を御招きし、各地から優績の所長が集つて來てゐるのだ。

私は昨年此の建築物を下檢分に來たが、修理が濟んで見ると新築と變らぬ美しさで、あかるい、氣持のいゝ店になつた。その階上の一室で、所長諸君と會談、更に公會堂に於て開かれる記念會に臨んだ。岡山支店の社員會は、人工熱がきゝ過ぎて閉口したが、此處は節約の爲め電氣もなく、

煖房設備もなく、代理店の方々には申譯の無いおさむい事であつた。久保田氏の挨拶は、中途仙臺支店副長として二年間留守にしたばかりで、支部を生み育てた當人だから、言々實感に富み、支部が成したる功績の中、特に大兵主義の實行と、昇龍旗獲得の追懷を擧げて其の意義を說く時など、感慨に堪へないものゝやうに見えた。次に私は祝辭として、會社は新社屋を進んで購入したのでなく、四國支部の發展が、購入せざるを得ない迄大きかつたのだと述べた。來賓總代高知代理店中山猿膽氏の力強い祝辭があり、所長諸氏の所感が交々述べられたが、最後に有光所長の緊急動議として年度二千萬圓必成が決議され、萬歲を齊唱して第二會場の宴席に移つた。新常磐の大廣間では、德島代理店天野與平氏の御挨拶があり、舞臺では最初から終迄餘興がつゞく賑かさだつた。今度の移轉披露には、世間並の名士招待といふやうな事を避け、費用を節して陸海軍に獻金し、眞實會社と協力して斯業に從事せらるゝ代理店主と、支部の推進力たる社員のみが一堂に集つたのは、賢明なる取計ひであつた。

席上さる代理店主から、昨年東京本店を參觀した時、二階から下の事務室を見るところで、あれが山下常務ですと案內の人に敎へられ、豫て聞く斯界の長老に親しく對面したいと思つたところ、案內の人は山下さんは大變忙しいので誰にも面會はしませんと、斷られたといふ御話を承つ

た。これはまことに遺憾な事で、さういふ御返事をしたとすれば、それは案内者の思ひ違ひで、山下さんの精神に反するものである。恐らく新参の人だつたのであらう。吾々は、執務の都合上、來訪の方に御目にかゝれない場合もあるが、然らざる限り、殊に遠方から御出になつた方には、進んで御目にかゝり度いのですと御答へしたが、本店の人々も此の邊の事にはもつと留意しなければならないと思ふ。

十三日　雨。午前七時四十五分高松發、午後一時十七分大阪着。高木さんが出迎へてくれたけれど、今日は大阪毎日新聞社の方に用事があり、會社の方には一日休暇を貰つたに等しいので、直に別れて新聞社へ行く。

十四日　晴。午前九時大阪發。午後五時二十分東京着。

――「社報」昭和十五年二月號

山中——金澤【遺稿】

三月八日　午後九時上野發。昨日から引つゞき暖かゝつたが、暖か過ぎたのか小雨になつた。隣の寢臺に二十歳ばかりのお孃さんが乘つてゐたが、眞靑な顏をし、咽喉に繃帶を卷いた病態で、別の車室にゐる兩親らしい人がかはるがはる見舞に來てゐた。それが夜中に、病苦の爲めか夢にうなされてゐるのか、のべつにうなつてゐて、私の安眠を妨げた。

九日　目の覺めた時は富山だつた。病人の御孃さんは人手に扶けられて下車した。快晴の空に連峰がくつきりと聳えて立つ。野も畑も雪だ。高岡から毛利所長が乘り、金澤では支店長副長内勤の人も同車し、第六回二十萬倶樂部會場山中溫泉に直行する。春とはいへ北陸地方は餘程寒いだらうと想像して來たが、今日は特別なのか暖かく、冬の外套は重かつた。

吉野屋には意外にも京都の水澤支店長がゐた。四五の案件を持つて來られたので、意見を述べ、

暫時社業の發展について語るうちに、倶樂部の面々が各方面から集つて來た。

午後二時戶外で記念撮影をし、直に大廣間で大會が開かれる。支店長と私の挨拶の後、賞品授與式が行はれ、會長吉島甚三郎氏（倶樂部成績八拾四萬四千五百圓）副會長山本政一氏（七拾八萬九千圓）五秀山岸常太郎氏（五拾八萬六千三百圓）濱田恒松氏（四十七萬九千五百圓）山田猛氏（四拾參萬五千壹百圓）吉田伊八郎氏（四拾萬五百圓）久保金太郎氏（參拾七萬參千 五百圓）の所感、最後に最も多くの倶樂部員を出した出張所として富山の大橋所長が激勵の言葉を送つた。倶樂部は年と共に人員を增し、數字を增し、今年は部員三十二名その擧績總計壹千七萬六千四百圓は金澤支店の推進力たるに恥ぢない。

會長吉島氏は人も知る出征の勇士で、名譽の彈痕を肉體に刻んで以來一層の發奮努力を盡し、今日の榮譽をかち得たのであるが、今年は壹百萬級をねらつて連續會長席を占めようと宣言し、之に對して必ず自分が吉島氏に代つてその椅子を占めて見せると斷言する人續出して氣勢大にあがつた。會なかばに雷鳴はげしく、忽ち今朝の快晴が風雨に變じ、はからずも晴雨の山中（やまなか）を一日にして見る機會に接した。

夜の宴會も盛んだつた。酒を禁じられてゐる身ではあるが、大會氣分には陶醉する事が出來た。

十日　今日は又晴れて暖かい。雨と雪解で溪流の水かさは增したが、雪の連峰の姿は少しも變らない。二十萬倶樂部員は朝食後散會し、私は支店長副長醫長所長諸氏と共に金澤支店で催される五百倍擧績社員の會に赴く。これは二十萬倶樂部を除き、先月五百倍に達した人の集りで新人の顏が多かつた。支店長と私と交々話をし、大橋所長の挨拶を以て終了、直に仙寶閣の宴會場に行く。食事の中途で、支店は今三月私の爲めに祝賀募集を行ふ筈になつてゐるが、此の席に列したものはもう一度五百倍の成績を擧げようといふ動議が出で、それに對し私から記念品を贈る約束をさせられた。

午後八時五分金澤發。

十一日　午前七時三十六分東京着。

——「社報」昭和十五年三月號

東京市内事務所廻り

一月二十日　澁谷事務所

今年から外野擔當を命ぜられたので、先づ御膝元の東京市内事務所を巡廻見學しようと思ひ立ち、第一番に澁谷事務所を訪問した。こゝは昭和七年一月の設置で、滿六年を經過し、その間左の通りの優績をつゞけて來た。

昭和	七年	二、〇七〇、五〇〇圓
	八年	二、五九二、一五〇
	九年	三、四八一、八六〇
	十年	三、一九三、六四〇
	十一年	三、三八〇、四六八

昭和十二年　　三、一〇六、八〇四圓

合計一千七百八十二萬五千四百二十二圓であるが、昭和十三年々頭に於て所長山岸左武郎氏は三十七人の所員と共に、六月締切を以て二千萬達成を期する誓約をなし、明治生命飛躍の年となすべき今年上半期の目標を定めた。此の目的を達する爲には、毎月三十六萬圓餘の成績を擧げなければならない。月三十六萬の成績を擧げる爲には、一人一萬圓を缺かしてはならない。非常なる努力を盡さなければ、至難といはねばならぬ。

この日私は、山名飯村兩氏と共に光輝ある歴史を有する事務所に赴き、全所員の方々に對し、會社今年度の計畫として、各事務所前年度成績の二割增、各人前年度成績の二割增達成に贊成を求め、贊成の拍手を頂き、果して六月締切に於て目的貫徹の場合には、全員と共に盛宴を張る事を約束した。

山岸氏は信念の人だ。必ずやつて見せますと繰返して誓つた。この事務所には參拾萬俱樂部の花形加藤たま子さんが居る爲か婦人鬪士がすくなくない。

數日後山岸氏から、立派な帙入の美本に仕立てた誓約書を頂いた。

昭和十三年一月二十日新ニ外野總帥トナラレタル阿部常務取締役ヲ逸早ク當所ニ迎ヘソノ訓

辭ニ基イテ當所開設以來累計新契約高二千萬達成ヲ本年度上半期中ニ成就セン事ヲ誓約セリ

就テハ右事務所誓約完成ノ爲メ各自左記個人誓約額ヲ定メ斷ジテ之ヲ成就セントスルモノナリ

右我等ガ最モ敬愛スル外野總帥阿部常務取締役ニ對シ謹ンデ誓約ス

昭和十三年一月吉日

明治生命保險株式會社
澁谷事務所　山岸左武郎

【金額人名表略】

一月二十五日　神田事務所

神田事務所は神田鍛治町大洋ビル四階にある。所員三十五名の中三人の出征者を出してゐるが、古豪新鋭粒揃ひで、之亦市内屈指の事務所だ。澁谷と同じく婦人闘士が多い。室内いつぱいに全員の顔が並び、山名氏と私を迎へてくれた。壁面に所長の哲學と飛躍計畫が貼つけてある。

藻から人類までの生物進化の各段階には「より良く活きん」とする生命の努力が窺はれます。

この努力こそ發展の要因であり進化の內容です。跳躍と驀進とが生命の本然の姿であります。茲に我々が年度六百萬圓の目標を設定したのも「飛躍神田」の名に對して當然のことでありま す。本年は「現在をより良く活きませう」とのスロオガンの下に、身體一ぱいの努力を致し宿望の最優事務所を誓つて實現致しませう。本年の目標を次に置きます。各人の努力の集積が、この數字となつて現はれるのです。一層の奮起と努力を望みます。

第一期責任額（自一月至三月）	百二十萬圓
第二期責任額（自四月至六月）	百六十五萬圓
第三期責任額（自七月至九月）	百五十萬圓
第四期責任額（自十月至十二月）	百六十五萬圓

當事務所に次の會を置きます。全員の入會を希望致します。

拾貳萬會

入會者に入會の都度金一封を贈呈し、爾後五萬圓を加ふる毎に更に表彰致します。

昭和十三年一月

神田事務所

所長長沼直司氏は永く內勤をして居た人で、溫厚の君子である。従而神田事務所には狂ひが無く、一歩々々確實に踏みしめて今日に及んだ。試に昭和七年三月創設以來の年度成績を掲げると、

昭和　七年	七八七、五〇〇圓
八年	一、二六七、二五〇
九年	二、〇九九、九〇〇
十年	二、二五一、一七〇
十一年	二、四七八、五七〇
十二年	二、九六五、三六〇

合計一千百八十四萬圓餘で、生物進化の理法の如く、次第に發展して來て些かも無理が無い。然るに、今年は一躍六百萬圓といふ大目標をたてたのは、長沼氏が進化論に加へて生命の飛躍を感得し、明治生命にとつて昭和十三年度が、如何に大切な年であるかを正しく認識した結果であると思ふ。我々は各事務所各個人に前年度成績の二割增といふ希望を述べてゐるのだが、此の事務所では先手を打たれ、たゞたゞ其の勇氣と計畫の遠大なる事に驚く外は無かつた。英雄は言葉少なしと聞く。長沼氏も平生大言壯語をしない人である。その人が久しい沈默を破つたのだ。所

員諸君の御苦勞も並々ならぬ事であるが、此の大目標を達成する時の喜びをおもつて、大に努力して頂き度い。

――「社報」昭和十三年一月號

四月一日　日本橋事務所

二月の最優績事務所日本橋、六十七萬の大記錄を作つた日本橋に、私の寫眞額を贈呈する爲、山名飯村兩氏と同行する。事務所は東京驛裏手八重洲口槇町ビルの二階にある。全國に轟く大事務所だが、立派なのは內容であつて、外觀は極めて汚ない。恐らく全國の事務所の中で、最も狹く、最も汚ないものゝ一つであらう。こゝは昭和六年の開設、初代所長は柳本養三氏で、現水島所長は昭和九年繼承、忽ち成績を倍加し、模範事務所とうたはれるに至つた。昨年は所長大病に臥し、獨得の熱烈なる督勵應援を缺く事久しかつた爲か、鬪士原一平氏が愛兒を失つて暫く氣分沈滯の悲境に陷つた爲か、期待した程の成績を擧げなかつたが、今年はいづれも奮起して、年初以來未曾有の記錄を示し、二十五人の所員は、會社今年度の飛躍精神を表徵するが如き勢である。

三月上旬、私は九州出張の出先で、山名氏からの電報を受取つた。「日本橋福島忠次氏二八萬、

原一平氏二七萬、事務所總計六七萬」云々の電文は、私の旅の疲れを吹飛ばしてしまつた。今月は品川事務所と對抗募集で、壹百萬必成の貼紙が、壁面を飾つてゐる。

山名氏の挨拶あり、私も一言述べ、お羞しい寫眞と賞狀を差出した。私は柄にない羞しがりで、自分の寫眞が永く此の室に掲げられるのかと思ふと、甚だてれてしまつて、十分の事は云へなかつた。

外觀頗る貧弱にして、內容甚だ充實せる事務所は、愈々力を發揮するであらう。たゞ私の望むのは、此の際人員を增加して益々大事務所の體制を取つて貰ひ度い事である。所長には勿論主義があり、方針があるのであらうが、數年來殆んど人數は殖えてゐない。精銳の士を以て事に當るのは、統制の上から見てもいゝ事に違ひないが、更に會社の大を成さしめる爲に、先づ多數を集めて其の中から精銳をえらび取る積極策が、何より望ましいのである。殊に水島所長のやうな、熱情を以て仕事をする人にこそ、會社は之を期待するのである。

四月五日　麴町事務所

麴町事務所は昨年五月の開設で、未だ滿一年にもならない新店である。昨年中は僅かに十二三

名の所員しかゐない微々たる存在であつたが、所長伊藤雄藏氏の努力で現在員二十二名、二月成績三十萬六千圓と云ふ中堅事務所にせり上つた。三月三十一日神田の治作で優績祝賀の宴が催され、私も招かれて御馳走になつた。開宴に先だち、私の寫眞額と賞狀を贈呈し、その寫眞が床の間に飾られて、私を見てゐるので、どうも氣が樂でない。しかし、伊藤所長の謠曲、その他事務所優績の諸君の咽喉を聞かされ、次第にいゝ氣持に頂いてしまつた。

さて御馳走にはなつたが、いつたいどんな事務所なのだらうといふ好奇心も湧き、寸閑を盜んで訪問する。場所は芝區田村町の十字路の角から二三軒目、テキストビルといふ不思議な名前の建物の三階にある。テキストとは、放送局の指定出版物を取扱ふ店が家主なので、つけた名前らしい。和用英語の適例である。突然の訪問なので、伊藤所長は留守だつたが、事務所の最古參三村禊助氏と、大澤うめ子さんがゐた。大澤さんは舊姓關和、元內勤として數年間勤務し、その後良緣あつて嫁がれたが、昨年一子を殘して良人が死去されたので、發奮して外野で活動してゐるのである。なかなか成績よく、地盤が出來るに從つて向上は約束されてゐる。三村さんの話は飄逸で、いつ聞いても面白い。世間話や身の上話が出て、神職の家に生れたのだと云ふ。だうりで禊(みそぎ)助さんなのだなと思ふ。會社にゐるよりは、かうやつて出て歩く方が氣樂でいゝでせ

うなどと、痛い事を云ふ。

暫くして伊藤所長が歸つて來た。つい此の頃こゝに引越して來たので、これから室を整へるのだといつてゐたが、さういへば伊藤さんの手にしてゐるのは、たつた今求めて來た能役者（かういふ古い呼方をすると伊藤さんに叱られるかもしれない）の寫眞額で、机の下には木瓜の花をつけたのが、まだ鉢に移されず、根を曝してゐる。

一、不調に腐らず強くあれ

一、好調に傲らず正しくあれ

一、統制に從ひ明るくあれ

と事務所の信條が貼出してある。

日本橋のうす暗いのと違つて、南向の窓が明るく、日光浴をしてゐるやうで氣持がいゝ。うつかり長話をしてしまつたが、會社にゐるよりも氣樂でいゝでせうといふ三村さんの言葉を思ひ出し、かうしてゐては申譯無いと考へて、あわてゝ辭去して會社へ戻る。

――「社報」昭和十三年四月號

八月二十四日　京橋事務所

京橋事務所が七月の優績自祝の會を催すといふので、山名さんといつしよに祝辭を述べに行く。此の事務所は、目下戰地に於て奮戰中の森安孝氏が創設育成したもので、現所長兒島義彥氏は昨年十二月就任した新人であるが、參拾萬倶樂部の勇士橋本喜太郎氏を次長に、その外上松滋小山新次味田村正次古賀友一福田嘉一郎渡邊富次郎齋木鶴雄の諸氏が中心となつて、年始以來八ケ月間に壹百七拾參萬餘圓、責任額を易々と超過した堅陣である。場所は銀座の西河岸に近い實業之日本社の階上で、土一升金一升の土地柄故、決して立派なものではなく、十八名の現在員を一時に集めるには狹過るのである。しかし會社飛躍の現在として、人員過少の憾なしとせず、出來る事ならば、愈々事務所の狹きに苦しみ、他へ移轉する位の發展を期し度いものである。兒島所長の挨拶につゞき、山名さんと私も夫々祝辭と希望とを述べ、更に橋本喜太郎氏の代表挨拶があつて、一同麥酒を以て乾盃した。

九月十四日　八重洲事務所

東京市内に於て最も古い本所事務所が、丸の内へ移轉し、八重洲事務所と改稱した。蠣崎本間柳本神山山手五氏を經て、現在の尾城淺五郎氏は六代目である。新事務所は三菱二十一號館の一階で、足場もよく、ていさいもいゝ。今こそ會社の本店の所在地名は、丸の内二丁目といふ散文的な、便利一方のものに改められたが、元は八重洲町といふ粋な町名だつた。その由緒ある町の名を頂く事になつたのだから、心の緊張も加はるであらう。居は心を移すといふ。引越にも意義あらしめよ。

恰も此の日は會社に重要會議があり、海老原顧問の出社を乞ひ、朝から協議をしてゐたので、山名さんと二人が同時に退席するわけには行かないので、先づ私が會議室を拔出して事務所にかけつけると、既に所長の挨拶ははじまつてゐた。一月から八月迄に壹百九拾五萬餘圓責任達成率十二割八分といふ優績を擧げた面々が肩と膝を接して圓陣を作つてゐる。鈴木仁三郎久村淺次郎高木良秋山龜吉の諸氏の如き戰場往來のものゝふの外に曾根新語氏のやうな新人も居て、之亦堅固な事務所である。殊に會社現在の方針に副ひ、年始人員十八名が、今や二十九名となつたのだから一段と威容を加へ、將來の希望は大きいのである。私の挨拶の後に鈴木仁三郎氏の答辭があり、晝食をいつしよにし度いといふ申入に接したが、事情が許さないので、そこそこに辭し、本

店會議室にかけ戻り、山名さんと交代した。

――「社報」昭和十三年九月號

約款の說明

約款の說明

保險約款といふのは、會社で定めた契約條項の事で、其全文は保險證券の裏面にも、營業案內にも明白に揭げてあります。法律の規定は、一般共通の大體の事を定めてある丈ですから、細かい事、殊に各會社特有の事柄などは、契約締結の際會社と契約人とが相談して定む可き事となつて居ります。併し、澤山の契約人と一々相談して居ては時間と手數が大變ですし、又保險の性質上個々の契約を千態萬樣の約束の下に置くのは面白くありませんから、便宜上會社が前以て之を定め、契約をする時に契約人に各條項を見せて、其上でほんとに契約を取結ぶ事としてあるのです。卽ち約款といふのは、會社が前以て定めて置く契約條項の事です。

ところが多くの契約人の中には、約款がどんなものであるかを知らないで契約し、後になつて途方も無い見當違ひの苦情を申出る方もあります。又契約の際は必ず約款を契約人に知らせなく

てはならないのに、これを見せないで契約を締結してしまふやうな不注意な社員も往々ありました。更に、會社の社員で居ながら、約款にどういふ事が定めてあるかを熟知して居ない者も稀にはありました。只今では、まさかにそんな事はあるまいとは思ひますけれど、約款は社員一般がよく承知し、又代理店も同じくよく承知して居なければならない事ですから、以下我社の約款(利益分配附養老保險普通保險約款)の條項を平易に説明する事に致します。

第一條　會社ノ保險契約上ノ責任ハ保險契約人ガ會社ノ通知ニヨリ第一回保險料ヲ拂込ミタル時ニ始マル

生命保險契約は諾成契約で、契約の申込に對し、會社が承諾を與へれば直に契約は成立して、保險料の拂込が無くても、會社は危險負擔の責任に任じなくてはなりません、併し此原則を實際にあてはめて考へて見ると、契約人は保險料の拂込なんか遲れても構は無いと思つて、なか／＼拂込まないでせう、ひどいのになると死んでから拂込んでも遲くないと考へる者も無いとはいへますまい。それでは會社は立ゆきませんから、卽ち會社の通知に基き契約人が第一回保險料を拂込んだ時に始めて契約上の責任を負ふ事を定めて、通則に制限を設けたのです。言葉を換へていへば、第一回保險料の拂込が無ければ、たとへ被保人が死んでも、會社は保險金を支拂はないと

いふのです。

けれども會社の通知により第一回保險料を拂込むといふ順序は、事實上屢々逆になつて居ます。例之外務員が勸誘の爲に出張し、苦心の末に漸く申込を取ると同時に、第一回保險料に相當する金額を受取る實例は、各位の御承知の通りです。併し此の場合外務員が受取つた金額は保險料ではありません。不日會社に報告し、會社が申込を承諾した場合に保險料に充當される金額です。從而保險料に充當される筈の金額を外務員に渡しても、會社が承諾する前に死亡するやうな場合には、保險金の支拂を受ける事は出來ないのです。約款第一條に、「會社ノ通知ニヨリ」と特に規定した理由は此處にあるのです。

我社に於ても、便宜上出張外務員が、保險料に充當される筈の金額を假に領收する事を認める場合もありますが、其際の受取證には左の通り明記してあります。

本社ニ於テ此御申込ヲ承諾シ契約成立シタル節ハ第一回保險料ニ相充テ可申裏面記載ノ條件ニテ正ニ領收仕候也

裏面記載の條件といふのは左の三項です。

(一)會社が申込ヲ承諾シタルトキハ此證書日附ヲ以テ契約日トシ保險證券ヲ作製スベシ

(二)本領收書ノ日附ヨリ起算シテ六十日以内ニ會社ヨリ申込承諾ノ通知ヲ受取ラザルトキハ契約人ハ本領收書ヲ會社ニ提出シテ之レト引替ニ表記ノ金額ノ返還ヲ請求セラルベシ

(三)本領收證ニ加筆變更又ハ抹殺アルモノハ無效タルベシ

(一)に示す通り、會社が承諾すれば、證書日附の日即ち申込をした日に溯つて契約をした事となる點は、特に御記憶願ひます。

第二條　保險料ハ保險期間中若シ特ニ保險料拂込期間ヲ定メタルトキハ其期間中第一回保險料拂込ノ時ヨリ起算シ一箇年度分ヲ各年度ノ始マリニ拂込ムベシ但被保人ガ死亡シタルトキハ次年度以後ハ之ヲ拂込ムコトヲ要セズ一箇年度分ノ保險料ヲ分割シテ拂込ム場合ニハ其分割期間ノ保險料ヲ各期間ノ始マデニ拂込ムベシ但被保人ガ死亡シタル場合ニ於テ其保險年度ノ保險料ニ未拂込分アルトキハ一時ニ之ヲ拂込ムベシ

玆に保險期間といふのは、會社が危險の負擔をする期間即ち終身保險ならば被保人の死去する迄、養老保險ならば其の滿期日又は被保人死去する迄の意味です。特に保險料拂込期間を定めたる時といふのは有限拂込の保險種類の場合で、例之十五年有限掛金終身保險とか十年掛金三十年滿期養老といふやうな契約です。此の最後の例によると、三十年が保險期間で、十年が保險拂込

期間です。

約款第二條の最初に規定するところは、右の保險期間中は、第一回保險料を拂込んだ日を起算點として、爾後毎年一箇年分の保險料を前拂せよといふのです。卽ち保險料は前拂を原則とする事を明かにしたのです。

又、本來一箇年分を支拂ふのが原則ではありますが、特に加入者の便宜をはかつて半年拂の方法もあります。此の場合にも矢張り第一回保險料を拂込んだ日を起算點として一箇年を二分し、その分割期間の前拂せよといふのが約款第二條後段の規定です、例之十二月廿日に第一回保險料を拂込めば、次には翌年の六月廿日に拂込む事になります。而して、萬一分割拂の前半期分丈拂つて被保人が死去すれば、後半期も拂込まなければならないといふのです。卽ち保險料は不可分を原則とし、分割拂は單に拂込の便宜の爲めに認めて居るに過ぎない事を明かにしたのです。

但し實際に於ては分割拂の被保人が前半期分丈拂込んで死んだ場合に、後半期分を現金で徴收する事は行はれて居りません。その代りに保險金支拂の際未濟保險料といふ名目で保險金から差引く事にして居ります。此の未濟保險料に於ては、了解の無い人が多くて困りますから、支拂通知の際說明書をつけて居りますが、それでも未だ飮込んで吳れない方が少なくありません。何卒

保険料は不可分で且一箇年前拂を原則とするものだといふ事を篤と御承知の上御説明を願ひます。

第三條　保險料ハ會社ノ本店、支店又ハ會社ノ指定スル場所ニ於テ拂込ムベシ

商法第二百七十八條の規定によれば、保險料は會社の營業所即ち本店若くは支店に持參して拂込まなければならないのですが、それでは契約人にとつて甚しく不便なので、特に約款に於て右の通り定めたのです。玆に會社の指定する場所といふのは、出張所又は代理店を指すのです。右の如く、拂込の期日が來れば當然契約人の方から保險料を屆けて來るのが原則ですが、營業の實際に於ては、そんな事を申しては居られません。其處で全國各地の有力な方に代理店を御委囑して、集金に遺漏の無いやうにし、契約への便宜を計ると同時に、延滯を防ぐ必要が起ります。もう少し詳しく言へば、契約人は會社から集金人が來ないから、何時迄も拂込まないでもよいのだと主張する事は出來ないのです。萬一何かの事情で集金人が來ない時には、進んで自分の方から持參するか送金するか、何れにしても拂込まなければなりません。若し之を怠れば、延滯利子を取られたり、或は折角の契約の效力を無いものにしてしまはなければならないのです。乍併世間一般に集金人の來るのを待つて拂込む習慣が行きわたつて居ますから、會社側では理窟を別にして、集金人を差出さなければ商賣はなり立ちません。

尤も近頃は振替貯金を利用する方が雙方の便利ですから、次第に此の便法が廣く行はれる事になりませう。最近東京本店で、市内居住の契約人全體に、振替と集金とどちらを希望なさるかと照會しましたところ、振替の方がよろしいといふのが三分の二で、集金希望者は僅に三分の一しかありませんでした。都會地と、郵便局の遠い山間の地方などとは事情が違ひませうけれど、追々全國一般に振替の便法をよろこぶ傾向が著しくなる事は、疑ふ餘地がないと思ひます。序ながら記しました。

第四條　保險料拂込期日後六十日ヲ猶豫期間トス此期間內ニ保險料ヲ拂込ムトキハ期日後三十日迄ハ百分ノ一、三十日ヲ超ユレバ百分ノ二ノ利子ヲ附加スベシ

保險料ヲ拂込マズシテ前項ノ期間ヲ經過シタルトキハ保險契約ハ其效力ヲ失フ

保險料の拂込期は、第一回保險料拂込の時卽ち契約日から起算して滿一年目毎に行ふのを原則とし、便宜の方法としては特に半年目毎に拂込む事となつて居る事は既に說明しました。それ故本來ならば、總ての契約人は此の正當の拂込期日迄には保險料を拂込む筈なのですが、扨て實際に於てはいろいろの事情があつてなかなか思ふやうに拂込んで吳れません。其處で、若し正當の拂込期日に必ず拂込まなければ、すべて契約は失效となるものとすると折角契約した人に甚だ御

氣の毒なので、特に一定の時日の間猶豫する事にしたのです。我社の猶豫期間は、十一月の社報所載「代理店月報々告に就て」の中に記した通り明治三十四年二月二十日以前の契約ならば四箇月間ですが、その後の契約は上記約款第四條の通り六十日間です。

右の通り、正當拂込期日に遲れても、猶豫期間六十日間に保險料を拂込めば契約は失效にはなりません。然し會社は拂込を受けた保險料を最も有利な方法で利殖し、豫定利率以上の利益を收めるやうに努力しなければならないので、拂込の一日遲れてもそれ丈利息を損する事になります。此損害に對して延滯利子を徵するのは當然でせう。而して其率は、正當拂込期日後三十日迄は百分の一、三十日を超えれば百分の二と定めたのです。

我社の本支店出張所では、どうかして正當拂込期日に徵收し度いと不斷の努力をなし、近頃は大層改善の實を擧げて居ります。若し全國壹千貳百餘箇所の代理店特約店集金所が一致して、必ず正當拂込期日に全部の集金を濟ませ得るやうに努力したら、其利益は非常なものであります。何とかして、さういふ方向に進み度いものです。

第四條第二項は、折角六十日の猶豫期間を定めても、尙且拂込を怠り、此期間を經過した場合には、保險契約の效力を失ふ事を規定したので、別段說明の必要はありますまい。

第五條　第一回保險料拂込ノ時ヨリ一年間ニ被保人ガ危險ノ著シク增加スル職業ニ轉ジ又ハ外國ニ赴クトキハ保險契約人ハ遲滯ナク之ヲ會社ニ通知スベシ前項ノ場合ニ於テハ會社ハ將來ニ向テ保險契約ヲ解除シ又ハ特別保險料ヲ請求スルコトヲ得

保險契約人又ハ被保人ガ第一項ノ通知ヲナサズ又ハ會社ガ特別保險料ヲ請求シタル場合ニ於テ二週間內ニ之ヲ拂込マザルトキハ保險契約ハ其效力ヲ失フ

生命保險契約を締結するには、先づ被保人の身體檢査を爲し、健康體でなければならない事は既に御承知の通りです。若し不健康の人と契約し、其結果死亡率が高くなれば會社は利得を失ひ、或は營業を續けて行かれないやうな場合に陷らないとも限らず、結局多數の契約者に迄迷惑を及ぼす憂があります。それと同じく、本人は如何丈夫でも、平生從事して居る職業が危險なものであるとか、又は氣候風土のよくない地方或は野蠻人が危害を加へる惧のある地方などに赴くものなども、當然契約を避く可きです。我社では、娼妓、藝妓、酌婦、航空者、潛航艇乘組員、潛水業者、寒帶、亞弗利加內地へ旅行する者、外國移住の勞働團體等は、保險の申込があつても之を謝絕する事にして居ります。

けれども、既に契約して居る人の生命に危險の增加する場合には如何したらよいでせうか。こ

れが約款第五條の問題です。
先づ第一項には、第一回保險料拂込の時から起算して、一年以內に被保人が危險の著しく增加する職業に轉じ、又は外國に赴く時は、遲滯無く其趣を會社に通知しなければならないと規定しました。而して、若し會社が被保人の生命の危險を保險する事が出來ないと認めれば直に契約を解除する事が出來、或は相當の割增さへ拂へば保險しても差支無いと考へれば、特別保險料を徵收して契約を繼續する事も出來ます。それが第二項の定めです。
茲に危險增加の通知義務を第一回保險料拂込後一箇年以內に限つたのは、一年以上も前から故意に計畫して會社に損害をかけようとする者は無いと認めた爲めです。
第三項は本條を設けた趣旨より當然生じたもので、卽ち第一項の危險增加の通知を怠つたり、或は第二項の特別保險料の拂込をしない時は、惡意のものと認めて差支ありませんから、契約の效力を失ふものと定めたのです。
實際上我社の取扱方としては、契約後一年以內に危險なる職業に轉じたり、危險地に旅行したりする人は、契約を解除するか、然らざれば保險金千圓に付金貳拾五圓乃至五十圓の割合で、一回丈割增保險料を徵收する事になつて居ります。

第六條　第一回保險料拂込ノ時ヨリ三年內ニ被保人ガ戰爭其他變亂地ニ赴クトキハ保險契約人又ハ被保人ハ遲滯ナク之ヲ會社ニ通知スベシ

前項ノ場合ニ於テハ會社ハ特別保險料ヲ請求スルコトヲ得

此規定も前條と同じく、危險增加の場合之を契約人又は被保人から會社へ通知する義務のある事を明かにしたもので、卽ち契約後三年內に戰爭其他の變亂地に赴く時は必ず速かに屆出でなければならないとし、此場合會社は特別保險料を請求する事が出來るといふのです。

これ以上說明をつける必要は御座いますまい。

第七條　保險金ハ被保人ガ死亡シタルトキ又ハ保險期間滿了ノ日マデ生存シタルトキ之ヲ支拂フベシ

本條は會社が保險金の支拂を爲す原因事由を明示したもので、玆に引いてあるのは養老保險の約款ですから、被保人が死亡した時と、目出度く滿期日迄壽を保たれた時と兩方擧げてありますが、終身保險の約款では「保險金ハ被保人が死亡シタルトキ之ヲ支拂フベシ」と記してあります。

第八條　被保人ガ死亡シタルコトヲ知リタルトキハ保險金受取人ハ遲滯ナク之ヲ會社ノ本店ニ通知シ且被保人ノ死亡ヲ知リタル後三箇月內ニ左ノ書類ヲ提出シテ保險金ヲ請求スベシ但

正當ノ事由アルトキハ此限ニ在ラズ

一　醫師ノ診斷書又ハ檢案書

二　被保人ノ戸籍謄本

前項第一項書類ニハ會社ノ定メタル事項ヲ記載スベシ但之ヲ記載スルコト能ハザル正當ノ理由アル場合ハ此限ニアラズ

會社ハ第一項ノ書類ノ外特ニ必要アリト認メタル書類ヲ請求スルコトヲ得

これは被保人が死亡した場合の保險金請求手續を規定したのです。先づ被保人が死んだら、保險金受取人は第一にその事を遲滯無く會社に通知しなければなりません。第二に被保人死後三箇月内に、病死ならば主治醫の死亡診斷書、變死ならば檢屍醫の死體檢案書と、區役所又は市町村役場の戸籍吏の作成した死亡者除籍の戸籍謄本を添へて、保險金請求書を提出しなければなりません。會社は診斷書によつて被保人の死因又は病歴を明かにし、之を基礎として告知義務に違反して居ないかどうかを確めます。又除籍謄本によつて實際年齡と保險申込當時の告知によつて記入した臺帳面の年齡が相違して居ないかどうかを調べます。但特別の理由があつて、之等の書類を提出する事が出來ない場合には止むを得ないと第一項の終に申添へてあります。

右の書類の外に會社が必要と認めたる書類を請求す云々といふのは、例之保險金受取人の印鑑證明書、最終の保險料受取證などです。印鑑證明書は、正當なる受取人に間違無く支拂ふ爲めに必要なので、故人の信頼を受けた會社としては當然の事でせう。又最終保險料受取證を必要とするのは、其の契約が有效のものである事を、最も速かに知り得る爲めです。

此の外保證書の提出を求める場合もあり、又死亡前後の模樣書を求める場合もあります。

第九條　保險期間ガ滿了シタルトキハ保險金受取人ハ被保人ノ戶籍抄本ヲ提出シテ保險金ヲ請求スベシ

これは養老滿期になつた時の保險金請求手續ですから、終身保險の約款には全然無い條項です。此の場合は被保險者が死亡した時とは違つて、會社では別段深く調査する事柄が少なく、單に被保人が事實生存して居るかどうか、又其年齡が申込書記載の通りであるかどうかを確めればよいので、戶籍抄本で充分なのです。

第十條　保險金ハ前二條ノ書類ガ會社ノ本店ニ到達シタル後一箇月內ニ支拂フベシ但會社ニ於テ調査ノ爲メ特ニ時日ヲ要スル場合ハ此限ニアラズ

玆には保險金支拂の最長期間を書類が本店に到達して後一箇月と定めましたが、實際に於ては、

會社は一日も早く支拂ひ度いと思つて居ますから、書類が完備し且別段調査すべき事柄が無ければ直に支拂ふ事にして居ります。書類を持參した受取人を待たせて置いて、素早く書類の調査を濟ませ、即時に支拂ふ事も實行して居ります。但し特に調査すべき事柄のある場合には、第十條但書の通り一箇月以上に亙る事は止むを得ません。

往々世間には、保險會社は故意に支拂を遲らせるものと思ひ違へて居る方もあるやうですが、それは書類が不備か、或は特に調査すべき事柄のある場合以外には絕對にありません。會社としては正當なる受取人に、最も迅速に支拂ひ度いと常に心懸けて居ります。

第十一條　會社ニ於テ保險金ヲ支拂フベキモノト認メタルトキハ第八條又ハ第九條ノ規定ニ拘ハラズ之ヲ支拂フベシ

前に揭げた第八條又は第九條に保險金請求手續を定めたのは、之に由つて會社が保險金を支拂ふ義務があるかどうかを確める爲めですから、或場合には之を略しても差支へ無いといふ趣意で、特に本條を設けたのです。乍然會社の事務の整理上及將來の硏究材料として、書類は出來る丈完備させて置き度いと思ひます。

第十二條　保險契約ニ關シ保險契約人又ハ被保人ニ詐欺ノ行爲アリタルトキハ保險契約ハ無

效トシ既ニ拂込ミタル保險料ヲ返還セズ

生命保險は最善意の契約であると云はれて居るのですが、不幸にして保險金を詐取する目的で加入する者が絶無とは申されません。その樣な惡意の申込による契約を、有效に繼續せしめるのは、公の秩序をみだす虞(おそれ)がありますから、此の契約を無效とし且既に拂込んだ保險料を沒收する事にして、許す可らざる惡德行爲の發生を未然に防がうといふのが本條の趣旨です。どういふ事が詐欺であるかは一々の場合に事情を調査した上でなければ決し兼ねますが、例へば身體診査の際に替玉を使つたり、他人の尿を自分の尿だと噓をついて病氣を隱匿するやうな怪しからぬ事も、往々經驗するところです。

第十三條　保險契約ノ當時保險契約人又ハ被保人ガ惡意又ハ重大ナル過失ニ因リ重要ナル事實ヲ告ゲズ又ハ重要ナル事項ニ付キ不實ノ事ヲ告ゲタルトキハ會社ガ其事實ヲ知リ又ハ過失ニヨリ之ヲ知ラザリシトキノ外會社ハ契約ノ解除ヲナスコトヲ得但契約ノ時ヨリ五年又ハ會社ガ解除ノ原因ヲ知リタル時ヨリ一箇月ヲ經過シタルトキハ此限ニ在ラズ

保險申込ノ後第一回保險料拂込以前ニ被保險人ノ身體ニ異常ヲ生ジ其他重要ナル事項ニ付キ異常ヲ生ジタルモ之ニ關シ會社ノ承諾ヲ得ズシテ第一回保險料ヲ拂込ミタルトキ亦前項ニ同

ジ

前二項ニ規定シタル解除ノ意思表示ハ保險契約人ニ對シテ之ヲ爲スベシ但保險契約人又ハ其住所及居所ガ不明ナル場合ニ限リ保險金受取人ニ對シテ之ヲ爲スコトヲ得

此の條項は所謂告知義務に關する規定で、商法第四百二十九條と文言迄殆ど同一です。

告知義務といふのは保險契約特有のもので、元來保險の契約には雙方共に最上の善意を必要とすと法律學上にも說かれて居る事柄でありまして、契約の始めに當り契約の當事者御互の間に不信用の事が少しでもあつてはなりません、即ち契約に影響を及ぼす重な事實を、正直に會社に告げ知らせる事が必要で法律は之を契約人及び被保人雙方に命じて居るのであります。これ無くしては、會社は正確に危險を測定する事が出來ない爲め、事業の安全を期する事が不可能となります。往々保險金について起る裁判沙汰は、大概此の告知義務違反が原因です。

告知義務を負擔するものは契約人と被保人です。若し契約人と被保人が同一人ならば、告知義務の負擔者は一人ですが、契約人と被保人が別人ならば、二人共に告知義務の負擔者となります。

惡意といふのは知つて居る事を隱したり、嘘僞の事を告知する事で、重過失(ちゆうくわしつ)といふのは、甚だしい不注意や怠慢の爲めに、當然知つて居なければならない事を知らなかつたり、或は知つて居

ながら告知するのを忘れたりする事です。

重要なる事實又は重要なる事項といふのは、個々の場合に決定する外ありませんが、例へば以前患つた重病を隱蔽したり、危險な職業をかくしたりするのは、明かに重要なる事實を告知しなかつたと申して差支ありません。

右の通り、契約人或は被保人の惡意又は重過失により、重要なる事實を告知しなかつたり、又は噓を告知した時は、會社は其契約を解除する事が出來るのです。然し會社が右の重要なる事項を契約當時知つて居た場合とか、會社の方の手落で氣のつかなかつた場合には、後になつて解除權を行ふ事は出來ません。

又此の解除權を行ふ事に對しては一定年月の制限が設けてあります。卽ち會社が解除の原因を知つた時から一箇月間、或は契約の時から五箇年間解除を行はなければ、此の權利は消滅してしまひます。その理由は、萬一永遠に解除を行ふ事が出來るとすると、契約人及び被保人は絕えず不安の念に馳られ、保險契約を厭惡する傾向を生ずる事ともなりませうし、又萬一會社が解除の原因を知りながら默つて居るのは、これを保險しても差支ないと認めたものと解釋してもよいから、契約後五年以內或は解除の原因を知つた時から一箇月以內と、兩方面から制限を設けたので

す。

以上は契約當時惡意又は重過失によつて重要なる事項の告知をしなかつた場合の規定ですが、更にこれを補足して、申込の當時には無事だつたものが、第一回保險料を拂込む前に病氣になつたり、或は何か外の重要事項に異動を生じた場合に、會社にその事を告げないで契約を締結してしまつた時も、亦解除する事が出來ると定めました。第二項の規定が卽ちこれです。

第三項には、前二項の解除權を何人に對して行使するかを明白に定めてあります。卽ち會社は解除する旨を保險契約人に通知する事とし、萬一其の住所及び居所がわからない時には、保險金受取人にむかつて通知するのです。若し契約人が死亡した後ならば、其相續人に對して解除の意思を表示し、相續人が未成年者ならば、其法定代理人に對して行ふ事になります。又死亡した契約人が非戸主で、且遺産相續人が數人ある場合には、其數人に對して夫々解除の意思表示をしなければなりません。

扨て保險契約を解除した場合に保險金はどうなるかといひますと、既に被保人が死んだ後でも、會社は之を支拂ふには及びません。若し保險金を支拂つてしまつた後で、告知義務違反の事實を發見して解除權を行使した場合には、保險金の返還を請求する事が出來ます。但し當該告知義務

違反の内容卽ち無告知又は不正告知の事實と、危險發生との間に因果關係が無い事を、契約人が證明すれば、此の場合には保險金を支拂ふ外致方ありません。

契約解除については、世間往々誤て、會社が勝手ないひがかりをつけて保險金の支拂を拒むもののやうに考へて居るやうですが、會社は斯る不詳事は成る可く避け度いのです。萬止むを得ない場合の外、決して解除を望むやうな事はありません。これを未然に防ぐには契約當時代理店外務員及診査醫の深き注意を必要とします。

第十四條　左ノ場合ニ於テハ會社ハ保險金ヲ支拂フ責ニ任ゼズ

一　被保人ガ自殺シタルトキ但第一回保險料拂込ノ時又ハ保險契約復活ノ時ヨリ三年ヲ經過シタルトキハ此限ニ在ラズ

二　被保人ガ失踪ノ宣告ヲ受ケタルトキ但會社ニ於テ保險金ヲ支拂フベキモノト認メタルトキハ此限ニ在ラズ

三　被保人ガ決鬪其他ノ犯罪若クハ死刑ノ執行ニ因リ又ハ一年以上ノ禁錮若クハ懲役ニ處セラレ其刑ノ執行中ニ死亡シタルトキ

四　保險金受取人ガ故意ニテ被保人ヲ死ニ致シタルトキ但其者ガ保險金額ノ一部ヲ受取ル

べキ場合ニハ會社ハ其殘額ヲ支拂フベシ

五　保險契約人ガ故意ニテ被保人ヲ死ニ致シタルトキ

六　被保人ガ戰爭其他ノ變亂ニヨリ死亡シタルトキ但豫メ特別保險料ヲ拂込ミタルトキ又ハ第一回保險料拂込ノ時ヨリ三年ヲ經過シタルトキハ此限ニ在ラズ

會社は、一旦契約した以上は、保險金を支拂ふのが當然ですが、特別の場合に限り其責任を負は無い事があるのです。本條はその責任を負はない場合を列記したので、商法第三百九十五條及び第四百三十一條の規定と同一です。

(一)自殺とは意思能力のある者が自分の生命を斷つ事ですが、何故之を保險金支拂の免責事由としたかといふと、自殺をして自分の相續人其他の者に保險金を受取らせる事を最初からもくろむで、保險契約を申込む者が無いとも云へないからです。商法第四百三十一條では「被保險者が自殺、決闘其他の犯罪又は死刑の執行に因りて死亡したるとき」とあるばかりで、何等の但書(たゞしがき)がありませんが、我社の約款は此點に於て寛大で、契約後又は契約復活後三年を經過すれば、自殺の場合にも保險金を支拂ふ事を約束して居ります。此の寛大なる但書を加へた理由は、三年も前から自殺を覺悟して、保險契約をする者は先づ絕無であらうと考へたからです。會社によつては五

年を經過したる時と定めたのもあり、中には商法の規定と同じく、自殺の時期を問はず總て支拂はないと定めたのもあります。

茲に注意す可きは、精神に異狀呈して自殺した場合であります。此の場合には會社は契約後の經過年數如何に拘らず保險金を支拂ひます。その理由は第四百三十一條の立法の精神が自殺によつて或人に保險金を得させようと思つて契約を締結する不法手段の禁止にあるので、意思能力を失つてゐる精神異狀者が自分で生命を斷つのは、恰も不時の災害によつて生命を失ふのと同樣、自殺とはいひ難いといふ點にあるのです。判例に於ても、精神に異狀を呈して自ら生命を斷つのは自殺にあらずとして、會社に保險金を支拂はせて居ります。

(二)失踪の宣告を受けたる時といふのは、民法第三十條に「不在者ノ生死ガ七年間分明ナラザルトキハ裁判所ハ利害關係人ノ請求ニ因リ失踪ノ宣告ヲ爲スコトヲ得」云々とある通り、人の生死が不明なのに、何時迄も其儘にして置くと公益上有害なので、七年間たつと失踪の宣告を與へ、民法第三十一條に「失踪ノ宣告ヲ受ケタル者ハ前條ノ期間滿了ノ時ニ死亡シタルモノト看做ス」と規定して、いろいろの法律關係を死亡の場合と同一にしてしまふ事です。

果して失踪の宣告があれば、死亡と同一と看做されるものとすれば、被保人が失踪の宣告を受

けた時は、會社は當然保險金を支拂はなければならない筈ですが、しかも失踪の宣告を受けたる時は保險金を支拂ふ責に任ぜずと約款に規定したのは何故でせうか。これには下の如き理由があります。

保險會社の計算の基礎は死亡の統計によつて居るのみならず、失踪の宣告は失踪者が實際生存して居る事が證明されれば取消す事が出來るので、これに對して死亡同樣保險金を支拂ふものとすると、假に失踪の宣告を受けて保險金を詐取する樣な不心得な者が出る虞もあり、又惡意で無いとしても、一度支拂つた保險金の返還を求める手續は極めて面倒ですから、これを免責の事由の一としたのです。

けれども、會社は失踪宣告のあつた時、全然保險金を支拂はないといふ主意ではありません。失踪者が死亡したものと認められる場合には、進んで保險金を支拂ふので、此の事は特に但書を設けて明かにしてあります。

(三)被保人が決鬪其他の犯罪行爲に因つて死亡した時、又死刑に處せられた時、或は一年以上の禁錮若くは懲役の刑の執行中に死亡した時は、保險金を支拂はないといふのは、公の秩序を紊る虞があり、又體刑を受けた者は死期を早める虞もあるからです。

(四)保險金受取人が被保人を故意に殺した場合には、會社は保險金を支拂ひません。これは公益上當然の事です。乍併受取人が一人で無く、二人若くは二人以上ある場合には、被保人を殺した受取人は保險金を受取る事は出來ませんけれど、他の受取人は權利があります。そこで會社は約款に但書を設けて、其殘額を支拂ふ可しと規定したのです。

(五)契約人が被保人を故意に殺した場合には、會社は保險金を支拂ひません。此の場合に一寸不思議に思はれるのは、契約人と受取人が同一人であるか、又は共謀して殺した時は支拂はないのが當然だが、全く何の罪も無い受取人の請求權迄なくなしては酷過るでは無いかといふ事です。けれども尚一歩進んで考へると、元來誰を受取人にするか定めるのは契約人の意思にある事なので、萬一此の場合に保險金を支拂ふとすると、矢張り公の秩序を紊る結果になるでありませう。卽ち之を支拂はずと定めた所以であります。

尤も約款に明白に記してある通り、故意に殺した場合に支拂は無いといふので、過失又は精神喪失の狀態で殺した場合には、(四)の場合にも(五)の場合にも、會社は保險金を支拂ひます。

(六)被保人が戰爭其他の變亂で死亡した場合にも、會社は保險金を支拂はないのを原則として居ります。その理由は、之等の變亂の場合の死亡數は全然豫測出來ないので、平生徵收する保險料

は、かかる危險を參酌して定めたものではありませんから、會社はその危險を保證致さないのです。けれども前以て特別保險料を拂込めば、例令戰地で死んでも會社は保險金を支拂ひます。又我社の約款は極めて寛大ですから、契約後三年經過すれば特別保險料を拂込まないでも保險金を支拂ふ事として居ります。

第十五條　保險金申込書ニ記載シタル被保人ノ年齢ニ錯誤アリタル場合ニハ左ノ方法ニヨリ處分ス

一　實際ノ年齢ガ保險契約ノ當時會社ノ保險料表ニ掲ゲタル年齢ノ範圍外ナリシトキハ保險契約ハ無效トシ既ニ拂込ミタル保險料ヲ保險契約人ニ拂戻スベシ

二　錯誤ノ年齢ガ實際ノ年齢ヨリ多カリシトキハ保險料ノ差額ヲ保險契約人ニ拂戻シ且將來ノ保險料ヲ更正スベシ錯誤ガ保險契約消滅ノ事由發生後發見セラレタル場合ニ於テモ保險料ノ差額ヲ保險契約人ニ拂戻スベシ

三　錯誤ノ年齢が實際年齢ヨリ少カリシ時ハ保險料ノ不足額ニ一箇年百分ノ六ノ複利ヲ附加シテ領收シ且將來ノ保險料ヲ更正スベシ保險金支拂ノ事由發生以前ニ此手續ヲナサザリシトキハ保險料不足額ノ割合ヲ以テ保險金額ヲ削減スベシ

被保人の年齢に間違があると保險料金額も違ひますし、又年齢は危險測定の際の重要なる參酌事項でもありますから、一旦契約した後で、被保人の年齢に間違のある事を發見した場合には左の如き處分方法を取る事を定めたのです。

第一の場合は、たとへば明治生命の現在の保險料表によると、尋常終身保險ならば十五歳から六十歳迄が契約の出來る年齢で、それ以下又はそれ以上の年齢では、契約出來ません。それ故實際に十三才の者を十五才と信じ、或は實は六十一才なのに六十才と信じて契約したやうな時は、それ等の契約は無效で、會社は既に領收した保險料全部を契約人に拂戻します。或會社では此の場合に、費用の賠償として幾分の差引をして拂戻すと規定して居ますが、當會社では全額を返戻して居ります。

第二の場合は、たとへば實際は二十五歳なのに誤つて二十八歳の年齢で契約した事が後日發見されたとすれば、契約人は必要以上の掛金をした事になりますから、其餘分の金額だけは拂戻し、其後は正當年齢の保險料を徵收する事となります。保險契約消滅の事由發生後云々といふのは、被保人が死んで保險金を支拂ふ時になつて始めて年齢に間違のあつた事を發見したやうな場合の事で、此の場合にも過去の保險料の過拂分は契約人に拂戻すのです。

第三の場合は、前例とは反對に、たとへば實際は二十八歳なのに誤て二十五歳の年齢で契約した事が發見されたとすれば、本來正當の保險料よりも少額の拂込を受け、會社はそれだけ利殖を妨げられた勘定になりますから、此の不足金額に年六分の複利を加算して徵收し、其後は正當年齢の保險料に改めるのです。若し年齢の間違が被保人死亡後に發見されたとか、又は養老滿期日になつて發見された時は、支拂ふ可き保險金から差引くのです。

今更申述る必要もありますまいが、被保人の年齢の計算は、出生日から起算して滿年齢を算出し端數六箇月以上は一年とし、六箇月未滿は切捨てるのです。爲念に申添て置きます。

第十六條　第四條第二項ニヨリ保險契約ガ效力ヲ失ヒタル後一年內ハ被保人ノ身體ニ異常ナキコトヲ證明スル書類ヲ提出シテ契約ノ復活ヲ請求スルトキハ會社ハ延滯保險料ヲ領收シテ之ヲ承諾スベシ

第十二條及ビ第十三條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

これは一旦契約の效力を失つたものの復活を認める事を規定したのです。第四條第二項には「保險料ヲ拂込マズシテ前項ノ期間ヲ經過シタルトキハ保險契約ハ其效力ヲ失フ」と規定してありまして、前項の期間とは前に說明した六十日の拂込猶豫期間を指すのです。卽ち拂込猶豫期間を

經過して失效となつた契約でも、一年以内ならば被保人の身體に異常の無い限りは、契約を復活させる事が出來るのです。保險料不拂の爲めに失效となるのは、勿論契約人自身の怠慢の結果ではありませうが、生命保險の様な長年月に亙る契約を、たつた一回の不拂で直に無效としてしまふのは酷に失する事ですから、一年以内といふ時間の制限を設け、且身體に異常が無ければといふ條件をつけて、復活を認める事にしてあります。此際延滯保險料を領收するのは當然ですが、なほ外に延滯利子も徵收します。これは規定には明示してありませんけれども、猶豫期間中でさへ延滯利子を徵收するのですから、復活に際して之を必要とするのは申す迄も無い事です。

被保人の身體に異常の無い事を證明する方法は、醫師の健康診斷書の提出を求めるのが普通で、若し被保人自身が會社の本支店出張所に出頭してくれれば一番都合がよく、さうでない場合には、成る可く會社の囑託醫の診査を受けて貰ふ事にして居ります。

第二項の規定は、詐欺或は告知義務違反の事があれば第十二條及び第十三條に規定した通り處置するといふのです。右二條の說明は既に申述べましたから、玆には繰返しません。

第十七條　保險契約人ハ何時ニテモ將來ニ向テ保險契約ヲ解除シ保險金受取人ヲ指定若クハ變更シ又ハ第十八條ニ定ムル貸金ヲ受クル權利ヲ有ス

此の條文は(一)解約(二)受取人指定及變更(三)保險證劵擔保貸金の三つに關するものです。生命保險契約は長期に亙るものですから、其の間に契約人の身邊の狀況に變化を生じて保險金を掛け續ける事が出來なくなつたり、又は契約人と受取人との關係が變つて保險を打切つてしまひ度いといふ場合が屢々生じます。例之商業に失敗したとか、或は最初受取人に指定した妻に別れたとか、其他實例は數々ありませう。之等の事情を參酌して、解約權を認むる事は當然の事と思ひます。又受取人を指定し、或は變更する事も、契約人の權利として認められてゐます。受取人の後日の爲めに保險契約をするのは最も自然の事ですから、その受取人を誰人にするかは契約人の意思にある事で、これは說明を必要と致しますまい。但し舊商法に據れば、受取人は必ず被保人の親族たる事を必要としたので、明治三十四年二月二十一日以後同四十四年十二月三十一日以前の契約では、赤の他人を受取人とする事は出來ません。保險證劵擔保貸金に就ては次條に說明する事にします。

第十八條　保險契約人ノ請求アルトキハ會社ハ保險契約ニ對シ第十九條ニ定ムル拂戻金額ノ十分ノ九ノ範圍內ニ於テ貸金ヲナスベシ但一口壹百圓に滿タザルモノハ此限ニ在ラズ

前項ノ貸金アル場合ニ於テ保險契約消滅ノ事由發生シタルトキハ會社ハ支拂フベキ金額ノ內

ヲ以テ貸金及利息ノ辨濟ニ充當シ其殘額ヲ支拂フベシ

所謂保險證劵擔保貸金で、保險契約人の便宜を計る爲めに設けた條項です。

會社は保險金支拂の事由が發生すれば保險金を支拂ふ責任があり、又中途解約の場合にも第十九條に定めてある戻金を拂はなければならないので、言葉を換へていへば、契約消滅の場合には、少なくとも解約價格以上の金額を支拂ふ責を負ふ事になります。卽ち相當の利息さへ領收する事が出來るなら、解約價格の範圍內で貸附をして差支へ無い筈です。其處で貸附金額の標準を解約價格にとり、その十分の九が壹百圓以上に達した時は何時でも用達る事にしたのです。何故壹百圓以上としたかといふと、餘り少額のものは取扱上手數が多くて堪へられないからです。

若し貸金をしてある契約が被保人の死亡により保險金を支拂ふとか、又は解約の請求に接して拂戻をするが如き場合には支拂ふ可き全額の內から貸金と利息を差引いて拂渡します。

近頃一般に保險證劵擔保貸金を利用する人が激增し、只今我社で取扱つて居る金額は三百萬圓を遙かに超過して居ります。利息は六箇月分前拂で、貸金五百圓未滿は貳錢貳厘、千圓未滿は貳錢壹厘、千圓以上は貳錢と定めて居ります。解約防止の爲めに、之を利用する事は會社の最も望んで居る處であります。

第十九條　保險契約ノ解除失效又ハ會社ガ保險金ヲ支拂フ責ニ任ゼザル場合ニハ責任準備金ヨリ費用ノ賠償トシテ保險金額ノ百分ノ五ヲ超過セザル金額ヲ控除シ其殘額ヲ保險契約人ニ拂戾スベシ

第十四條第五號ノ場合ハ此限ニ在ラズ

解約については毎度社報にも記しましたが、約款第十九條は解約拂戾金に關して右の通り定めたのです。生命保險會社は多數の契約を取扱ひ、將來多額の保險金を支拂ふ責任を負擔し、且又其の多數の契約は長期に亙る關係上、會社は相當の金額を積立て、後日の用意をしなければなりません。保險業法第九十五條に「保險會社ハ保險契約ノ種類ニ從ヒ各事業年度ノ終ニ於テ存スル契約ニ付キ責任準備金ヲ計算シ且之ヲ特ニ設ケタル帳簿ニ記載スルコトヲ要ス」と規定した所以です。

責任準備金とは何であるかといふと、保險料積立金と未經過保險料を加算したものです。凡そ人の死亡率は、老年者に高く若年者に低いのを普通とします。換言すれば、人は年を積むに從つて死亡率を增加するものです。それ故、若し各年の死亡率相當の保險料を拂込ませる仕組とすると、最初は安い保險料で加入して、年を經るに從ひ漸次引上げ、老年になればなる程高い保險料

を拂込まなければなりません。活動力の衰退する老年になつて、却て多額の保險料を拂込む事になると、保險の繼續は困難となりますから、實際に應用する事殆んど不可能であります。其の爲めに、現在行はれて居る方法は、平均保險料と稱し第一回から最終の拂込み迄一定した保險料を徵收するものです。之によりますと、若年の時には必要以上の保險料を拂込む事になりますが、その代りに老年に到つては、その死亡率に比して安い保險料を拂ふ結果となります。卽ち若年の時に拂込む餘分の保險料を積立て置き、後日老年に及んで死亡率高くなる時に備へる事になります。此の死亡率比較的に低い時代に拂込む保險料の過剩分を積立てゝ置くのを、保險料積立金といひます。

又、未經過保險料といふのは、保險契約は一年中絕えず締結せられるので、保險期間卽ち第一回保險料拂込日から一箇年及順次次の一箇年と會社の各營業年度とは一致しません。例之會社の決算日が十二月三十一日なる時は、正月一日に締結した契約の保險期間は會社の營業決算と一致しますけれども、若し七月一日に契約したとすると、十二月三十一日の決算時には半分しか經過せず、あとの半年分の保險料は將來の分を假に領收したもので、之は未經過保險料と稱し、上記保險料積立金と共に積立てゝ置かなければならないものです。生命保險會社の責任準備金といふ

のは、即ち保險料積立金と未經過保險料の合算せられたものであります。

解約戻金は此の責任準備金を基礎とし、その中から費用の賠償として保險金額の百分の五を超過しない金額を差引いて支拂ふのです。何故斯の如く差引くかといふと、會社は解約によつて損害を蒙るからです。其の損害の重なるものは、(一)解約者の多くは強健體の者で、此の人々に脱退されると、殘留被保人の平均死亡率が高くなる事(二)保險會社の費用の大部分は新契約費でありますが、之は年々少しづゝ償還されるものですから、中途で解約するものは此新契約費の償還を終らず、從而(したがつて)會社に損失を及ぼす事等であります。

第十四條第五號の場合は此限(このかぎり)にあらずといふのは、前に記した通り保險契約人が故意に被保人を殺した場合で、此の場合には一切返戻金をやらない事を明記したのです。

第二十條　保險金又ハ拂戻金ハ會社ノ本店又ハ支店ニ於テ保險證券引替ニテ之ヲ支拂フベシ

但シ正當ノ理由アルトキハ保險證券ヲ提出スルコトヲ要セズ

生命保險契約は、彼保人萬一の場合に、其身內(みうち)の者の不幸を救はうとするやうな愛他的の考慮に出るものが多く、從而保險金又は拂戻金の支拂の責に任ずる會社は、契約人の定めたる正當の受取人又は正當の契約人に間違無く支拂はなければなりません。それ故總ての調査機關の整つて

居る本店又は支店で、正當の受取人である事を明かにするひとつの證據ともいふ可き保險證劵の提出を求めて支拂ふ事としたのです。その外に印鑑證明書の提出を求めるのも同一の理由で、若し粗忽にも正當でない人に支拂ひますと、後日正當の受取人から請求のあつた時、會社は更に支拂はなければならない事になるので、注意の上に注意を重ねる次第です。但し正當の理由があれば、必ずしも保險證劵の提出を強要するものではありません。事實上斯の如き場合には、保險證劵紛失屆などに調印を求めて支拂つて居ります。又支拂の決定は本店で致しますが、支拂の場所は、各受取人の便利を量り、支店出張所代理店何處ででも取扱つて居ります。

第二十一條　保險料拂込猶豫期間内ニ被保人ガ死亡シタルトキハ延滯保險料及び遲延利子ヲ保險金ヨリ控除シ其殘額ヲ支拂フベシ保險料分割拂ノ場合ニ於テ其年度ノ未拂保險料ニ付テ亦同ジ

保險料拂込日に保險料を拂はなくても、六十日の猶豫期間があつて其間は契約は有效に存續する事は既に申述べた通りです。それで、萬一其猶豫期間内に被保人が死去した場合には、延滯保險料と利子を差引いて保險金を支拂ひ、又半年拂の如き分割拂の保險料の未拂分がある場合にも、之と同樣に保險金から差引いて支拂ひます。前にも申述べた通り、保險料は一年分前拂を原則と

し、分割拂は單に契約人の便宜の爲めに認めて居るのですから、假令被保人が死去しても其年度の未拂込保險料があれば、契約人は當然拂込まなければならないので、今更斷る迄も無い事ですが、念の爲めに明記したのであります。

第二十二條　保險契約ニヨル權利ノ讓渡保險金受取人ノ指定又ハ變更ハ被保人ノ同意書ヲ添ヘテ之ヲ會社ニ通知シ保險證券ニ承認ノ裏書ヲ受クルコトヲ要ス

保險契約に因る權利が何人に在るかは會社が常に承知してゐなければならないので、權利の讓渡及び保險金受取人の指定又は變更の如きは、契約人一人で勝手に行ふばかりでは效力が無く、被保人の同意書を添へて必ず會社に通知しなければならぬと定め、且之を一層明確にする爲めに、保險證券に承認の裏書を爲す事を要すとしたのです。商法第四百二十八條ノ四に「保險契約者が契約後保險金額ヲ受取ルベキ者ヲ指定又ハ變更シタルトキハ保險者ニ其指定又ハ變更ヲ通知スルニ非サレバ之ヲ以テ保險者ニ對抗スルコトヲ得ズ」云々とあるのに、更に念を入れて保險證券の裏書を必要としたのです。

第二十三條　保險證券ノ書換又ハ再交付ハ金參拾錢裏書ハ金拾錢ノ手數料ヲ領收スベシ

保險證券を紛失したとか、毀損したとかいふ場合に再交付をなす時は、手數料として金參拾錢

を徴收し、契約人又は受取人の變更等の場合に裏書をする時は、拾錢を徴收すると定めたのです。

第二十四條　會社ハ各營業年度末ニ於テ大正十年一月一日以後ノ契約ニ係ル利附死亡保險契約ニ對スル損益ヲ特別ニ計算シ利益アルトキハ其十分ノ七ヲ下ラザル金額ヲ利益分配準備金トシテ積立テ契約後滿五年以上ヲ經過シタル契約ニ對シ本約款及事業方法書ノ規定ニ從ヒ保險料拂込期間內ノ契約ニ就テハ年々保險料ト差引ノ方法ニヨリ又保險料拂濟ノ契約ニ就テハ拂濟ノ時ヨリ五年每ニ保險金增額ノ方法ニヨリ利益分配ヲ行フベシ但保險金額支拂ノ事由發生シタル場合ニハ利益分配金ハ保險金受取人ニ支拂フベシ

各契約ニ對スル利益分配金額ハ其契約ノ保險料積立金ヲ標準トシ之ニ保險料拂濟ノ契約及保險料拂込期間內ノ契約ニシテ翌年度ニ於テ利益分配ニ與ルベキ契約ノ保險料積立金ノ合計ト利益分配準備金ヨリ次項ノ積立金ヲ控除シタル金額トノ割合ヲ乘ジ之ヲ定ム但計算ノ都合ニヨリ利益分配準備金トシテ其一部又ハ全部ヲ留保スルコトヲ得

保險料拂濟ノ契約ニ對シテハ右ノ如ク割付セラレタル利益分配金ヲ利益分配準備金中ニ積立テ置キ五年每ニ保險金ヲ增額スルモノトス

第二十四條に就ては今年一月の社報第八十號に詳しい說明が出て居りますから、既に御承知の

事と思ひ、玆には至極簡單に申述べます。我社の大正十年度に新設した保險は、確實に契約を履行し、保險金を支拂ふ爲めに必要なる最少限度の保險料で、其以上には前取りをせず、又利益分配を豫定して計算したものではありません。つまり、後日利益分配をするかはりに最初から安い保險料で契約するので、一般の高い保險料との差額並にそれに對する利息は、いはゞ利益分配と同樣ですから、萬一後々利益分配が無いとしても、加入者に損はありません。しかも此低廉なる保險料でも、幾分の利益が生ずれば其大部分を加入者に分配しようといふのです。

先づ會社は、大正十年新設の保險に對する損益を計算し、その利益の十分の七以上を分配準備金とし、滿五年を經過したる契約に對し保險料積立金に比例して分配を行ひ、爾後の保險料拂込の時に差引きます。又既に保險料拂込濟となつた時は、五年每に保險金增額の方法で利益を分配しようといふのです。(完)

——「社報」大正十三年十二月、大正十四年一、二、三、四、五、六、七月號

外交一家言

——ウヰリアム・アレキサンダア氏の著書に基く——

第一章

外交は技術なり、藝術なり

生命保險外交は一の科學であると說く人もありますが、それは間違です。生命保險組織は正に科學的原則を基礎として打立てられて居りますけれども、保險外交はそれとは違ひ、外務員は寧ろ畫家彫刻家音樂家の如き藝術家であり、又技師工人の如き技術家であります。

ウェブスタア大辭典によれば、技術とは

熟練、巧緻、經驗、研究、觀察によりて統一されたる或種の行爲を實行する能力

と定義してあります。又他の先人の言によれば

科學は吾々の知る可き事を敎へ、技術は爲す可き事を敎ふとしてあります。

生命保險外交が一の專門的職業なる事は疑も無く、代理店や外務員の仕事は辯護士、醫師或は技師の仕事の如く重要な事も否定出來ません。けれども其の仕事の特質を言ひ現はすには、外交は技術なり、藝術なりと言ふのが最も便利且つ至當であります。

技術家、藝術家の熱情

藝術家は、常に熱情を美神に捧げなければ良き製作を生む事は出來ません。外務員も亦自分の取扱ふ生命保險に對して熱情を持つて居なければ、充分の成績を擧る事は出來ません。

生命保險の性質が完全に了解されると、誰しも無限の興趣を覺える筈です。それには、先づ第一に代理店や外務員卽ち賣手の側が事業に對する熱情を持たなければ、契約人卽ち買手にも熱情を起させ、興味を覺えさせる事は不可能です。熱心、熱心、これにまさる力はありません。

技術家、藝術家は仕事を愛す

外務員は自分の仕事を愛さなければなりません。愛すればこそ成績は擧るのです。成績が悪いと、毎日の仕事は面白くなく、愈々不成績を重ねる事になります。若しも仕事を愛するなら、すべての事が愉快になります。音樂家が毎日長時間の練習を積むのも、畫家、彫刻家、作曲家、詩人戲曲家の活動を刺戟するのも、何れも仕事に對する愛情に外なりません。

其處で外交の祕訣を次の式で示す事が出來ます。

愛 ＋ 熟練 ＋ 決心

更に外交は技術なりと言ふ事を力說する爲めに、釣の話を記しませう。

釣の技術

釣は熟練を要する技術であります。

外務に従事する者よ　行きて釣する人を見よ
げにもさかしき其のたくみ　なれもひとしくかしこかれ

熟練の外に、上手な釣人にとつての第一義は勤勉です。外務員にとつても、熟練と勤勉は缺く事が出來ません。これなくしては光輝ある優績は希望出來ません。

釣人の運

釣する人を心なく見て居ると、釣れるか釣れないかは全く不確で、よく釣れた時は運がよいのだらうと思はれます。けれども、上手な釣人といふものは、運で釣るのではありません。一尾の魚を釣上げる迄の注意と苦心は並々ならぬものです。先づ天候を念頭に置かなければなりません。釣場所を熟知して居なければなりません。いろいろの魚の特性習慣を研究しなければなりません。釣道具に狂ひの無い事も確めなければなりません。その他種々の苦心考慮の結果、釣れる可能性を多くし、同時に運に左右される事を少なくします。

生命保險の外交も之と同じです。運にばかり賴つて居ては必ず失敗します。苦心研究を積まなければ、困難な仕事に打勝つ事は出來ません。

忍耐

最も上手な釣人は最も忍耐強い人です。寒い舟の中で幾時間も辛抱し、何時迄も根氣よく希望を捨てない人でなければ駄目です。

外交も、忍耐に忍耐を重ね、常に人の注意と興味を湧かさせる爲めに新工風をしなければ駄目です。萬一外務員が契約勸誘の方法をたつた一つしか知らないとすると、成功の見込は先づありません。

人を釣る人

耶蘇の使徒の或る者は貧しい漁夫でありましたが、後には人を釣る人卽ち信仰の道を說いて多くの信者を獲る人となりました。外務員も此の意味に於て人を釣る人で無ければなりません。但し玆に人を釣るといふのは、だまかして釣るのではありません。蝦で鯛を釣るのではありません、魚を釣るのは殺生ですが、外務員は人を救ふ爲めに人を釣るのであります。

下手な釣人

無智無能な外務員は存在するもせざるも同じであると言ふ人もありますが、さうではありません。そんな外務員の存在するのは、生命保険事業の爲めにも、會社の爲めにも量る可らざる損害です。如何にして契約を獲得すべきかを知らない外務員などは、根絶してしまはなければなりません。

時としては、上手な釣人も不運に見舞はれる事があります。例へば、何時もは魚の群つて居る川へ行くとします。多年の練習の結果なる巧妙な手振で糸を垂れても、一尾も針にかゝらない事もあります。場所を取替ても矢張いけません。どうした事かと考へたあげく、漸く思ひ當るのは、多分自分よりも先に下手な釣人が來て、釣れないまゝにやけを起し、釣竿で水面を引掻廻したり、石を投込んだりして魚を怖れさせてしまつたものらしい。下手な釣人は、自分自身が不漁だつたばかりで無く、上手な釣人の邪魔をする結果を招いたのです。

無能なる外務員は存在するもせざるも同じではありません。巧妙なる外務員の邪魔になり、生命保険事業の發達を妨げ、會社に迷惑を及ぼします。外交の成績は、外務員の數によるよりも質によるのです。

第二章

運動競技

外務員の仕事は藝術であり、技術であると申しましたが、又之を一種の運動競技に比べても差支ありません。若しも眞の運動家の特性を研究して見るならば、得る處頗る多い事でせう。

釣と募集

釣に關する或本を讀んで大層學ぶ處を發見しました。

魚は捕へられる事を望んでゐません。人も最初は保險される事を欲しない方が多いのです。漁夫は家に引込んで居て魚を捕へる事は出來ません。又川のふちへ行き汀の草の上に坐つて居ても魚は魚籠に飛込んでは來ません。それと同じく家に引込んで居る外務員には、一件の契約も出來ません。

釣人は魚の習性を研究しなければなりません。魚の群る場所を知つて居なければ駄目です。何時何處で釣ればよいか、どんな方法で釣る可きかを經驗によつて知らなければなりません。早く

引上げるのがよい魚もあり、ゆるゆると疲れさせてから引上げるのがよい魚もあります。外務員は各々異る性質境遇の人に對して、一々異なる方法を用ひて勸誘しなければならないのです。

深海で魚を捕るには、先づ船の上から澤山の餌を撒いて魚を寄集めなければなりません。但しいくら餌を澤山撒いても、撒く丈では魚はつかまりません。愈々魚を釣上げるには針につけた餌で釣らなければならないのです。外交も之と同じで、手紙や宣傳ビラや新聞廣告は深海の撒餌と同様、人の注意を引く爲めに必要ですが、それ丈で直ぐに契約を締結する事は出來ません。實際に契約する爲めには、一人々々に面接して勸說しなければ効果はありません。

下手な釣人は、場所が悪いとか、天氣がよくないとか、釣道具がいけないとか、中には魚の奴怪しからぬなどゝ苦情をつけるものですが、上手な釣人は決してそんな無理な小言はいひません。成績の擧らない外務員は、受持場所が悪いとか、土地の人情がよくないとか、或は本社や支店の方針を非難したり、上役の責任にしてしまはうとする傾向を持つて居ます。之に反し優績の外務員はどんな場所でも如何なる時でも、他人の援助があらうと無からうと、何とか工風して成績を擧げます。

魚釣でも保險募集でも、失敗の最大原因は不注意、不決斷、怠惰にあるものと承知して下さい。

野球

各種の運動に秀でる者の特性を研究すると、更に多くの教訓を發見します。例之野球競技で、飛球か直球が襲來したにも拘らず走つて行つて捕らうとしない野手があつたとすれば、それは凡球を逸したのと同一か、否それ以上の大失策と見做さなければなりません。生命保険の外交でも、あの人は勸誘したつて駄目だと最初からきめてかゝるが如き怠け根性は、ぶつかつて斷られたよりも遙かによくないのです。

又野球には味方同志の團體訓練が必要で、之をテイーム・ワアクといひますが、之は外務員にも必要です。一人々々別々に活動するよりも、共同して働く方が效果の多い事は、團體募集の成績が立證する所です。

ゴルフ

ゴルフの好きな人で、平生自分よりも技倆の劣る人に度々負かされても平氣で居る人がありますが、斯ういふ人は愈々晴れの競技會に出ても餘り勝たないものです。之に反し技術は多少相手より下でも、試合になると不思議に勝續ける人があります。斯ういふ人の心の底には、勝負は技術ばかりでは行くものかといふ勝氣が旺んなのです。卽ち勝つためには、全精神を打込んで、最

初から終迄勝たんとする熱情を持つゞけなければならないのです。

保険外交でも同じ事で、少し位は熟練が足りなくても、熱心な外務員は優績を得る事が出來ます。

決心

何事によらず、成功は精神力の如何によります。或種の運動選手は、他の種類の運動競技に參加してもよく勝つものです。それは呼吸を飲込む事が早いといふ理由もありますが、それよりも旺盛なる精神力に負ふ所が多いのです。

勝利

生命保險募集は高尙なる競技の一種だと申して差支ありますまい。契約を締結しようとする外務員の熱心な努力は、一意勝利を祈つて體力と智力を用ひ盡す蹴球選手の心狀と同一です。熱心なる努力の賜は即ち勝利です。

第三章

常識と心理學

或る有名な外務員が曾て放言して

心理學に關する話なんか退屈です。自分は心理學者とはどんな人間だか知りませんし、又知り度いとも思ひません。自分は保險外務員です。それで充分です。今日迄の自分の成功は常識の活用と努力の結晶です。

と言ふのを聞きました。一應もつともな言葉で、どんな人間でも常識と努力とを併有すれば相當の成功は疑ありませんが、乍然人間性を知る事は極めて必要です。外務員としても實用心理學者である事が肝要です。

心理學とは、何か

心理學とは、平たくいへば人の心の研究です。だから外務員にとつて必要なのです。外務員は第一に自分自身の心狀を知り、第二には相手の心持を知らなければなりません。一種の讀心術が必要なのです。

先づ自分自身の心狀を研究せよ

出來る丈自分自身の心狀を知らなくてはいけません。內省が必要です。そして、自分の長所と

短所を知り、長所は益々之を助長し、短所は努めて補ひ改めなければなりません。

他人に比べて自分の努力の足りない事を發見したら覺醒しなければなりません。怒り易い性質の者は忍耐力を養はなければなりません。性急ならば、自制心を養はなければなりません。他人を怒らせるやうな缺點があるならば、如才なさを學ぶ必要があります。怠け根性が頭を持上げたら、氣を引立て、冷淡無關心の者は同情心を養ふ事が肝要です。

他人の心

他人の心を知るには先づ第一に常識を働かさなければなりません。賣卜者は手相によつて人の性質を知ると言ひますが、實は其の人と一問一答して居る間に常識を働かせて判斷するのです。言葉を換へて言へば、賣卜者のいふ位の事は自分自身の常識でもわかる筈です。

骨相學者でも同じ事で、何か顏面にあらはれて居る特徴から人の性質をいひ當てるには違ひありませんが、その場合にも一問一答の間に目つきや口つきの微妙な表情を捉へて判斷する事が多いのです。

素人でも、人の顏や手を見た丈で多少の事はわかります。船頭や百姓の手と、音樂家や詩人の手は違ひます。拳鬪家は鐵のやうな額を持ち、學者の額は廣く豐かなのを通例とします。その上

に談話をまじへ、一擧一動に伴ふ顔面表情を注視すれば、その人について何かの判斷をする事が出來る筈です。

保險募集に於ける心理學

保險募集の際の學ぶ可き心理は何でせうか。それは勸誘しようとする相手方の心持を理解する事です。

心理的瞬間

一つの仕事を成就させるには心理的瞬間に打切る事が必要です。心理的瞬間とは適時といふ事です。角力の所謂呵吽の呼吸の合ふ瞬間の事です。卽ち外務員は、相手の心に心理的瞬間の來ない中に話を切上げたり、又はその瞬間の過去るのを見逃すやうでは駄目なのです。

林檎の例

新鮮な林檎を喰べようと思つて果樹園に出かける人は、第一に手の屆く林檎を取るか、よく熟して居る林檎を取るでせうか？　誰でも一番よく熟し、且熟し過ぎない林檎卽ち心理的瞬間にある林檎を取るに違ひありません。

銃獵に出かけて鳥獸を打つのも心理的瞬間でなければ駄目です。魚を釣りに行き、折角魚が餌

に喰ひついても、あまり急いで糸を引上げると逃げられてしまひます。又あんまりゆつくりし過ぎてもいけません。矢張心理的瞬間に引上げなければならないのです。

外務員は相手の心を推知する事が出來なければ成功は至難です。曾て或る父親がその子に向つて、若しも成年に達する迄烟草を飲まなかつたら壹千圓やらうと約束しました。息子は此の言葉を忘れないで喫烟の慾望を禁壓し、やがて大人になりました。ところが父親は壹千圓與へるのが惜くなつて之を拒んだので、事件は法廷迄持出されたと言ふ話が亞米利加にあります。斯う言ふ心の持主に對して保險を勸めるには、其の強い金錢萬能心を動かす外に方法はありません。家族の爲めに保險をおつけなさいなどゝ言つても無駄です。

實例

著者（ウヰリアム・アレキサンダア氏）が昔自轉車の稽古をしてゐた時、往來で一人の男に衝突した事があります。相手は非常に怒つて、今にも毆りさうな樣子でした。此處で弱味を見せたが最後だと思つたので、こつちも向ふの顏を見詰て、些かも怖れてゐない風を見せました。相手は心中どうしようかと迷つて居た樣でしたが、數分間の後忌々しさうに舌打しながら立去らうとしました。こちらは直に相手の心持の柔らいだのを見てとつて後から呼止め、自分はやうやく自轉

車に乗始めたばかりで、往來に出たのは今日が始めてゞす。それ程未熟なのでついぶつかつた譯だから許して下さいとあやまると、その男も既に力がぬけて居るので微笑を殘して立去りました。之は先方が毆らうとする心理的瞬間を巧みに避けた實例です。

想像

外務員が相手の心を讀む事が出來れば、其の人の心を迎へる事が出來るばかりで無く、自分の思ふまゝに人を動かす事さへ出來ます。例之名優が帝王となり、農夫となり、百萬長者となり、勞働者となり、勇士となり、惡漢となつてあらゆる人の喝采を博すのと同じ樣に、如何なる階級如何なる性質の人をも納得させる事が出來ます。

又外務員自己の利益のために保險の勸誘をするので無く、相手方の利益の爲めにするのだと言ふ印象を與へる事も容易です。

心理學者の賜

現在に於ては、吾々が川を渡り、山を越るには、土木を研究し、橋梁をかけ、トンネルをうがつ爲めに汗を流す必要はありません。難有い今日の世の中では、その道の專門家が立派にやつてくれるのです。藥を手に入れるのも、自分では藥學を研究しなくても差支ありません。醫者の認

める處方箋を持つて薬屋に行けばよいのです。

それと同じで、保險の外務員は、忙しい中で心理學說の發見創設に苦む必要はありません。多くの學者の著書を讀めば、一々それが勸誘の實際にあてはまるでせう。それによつて能率が高まる事疑ありません。

約說

自分自身を知れ。他人の心持を研究せよ。外務員としての能率は激增するに違ひありません。

第四章

馬と車

自分が寒がつて震へて居るのを見て、友達がそんなにぶる／＼震へて居ないでもつと暖かくして居なければよくないぞと忠告してくれるのは難有いが、一步進めて火の側に連れて行つてくれゝば一層嬉しいでせう。醫者が、疱瘡は危險だから注意なさい、萬一罹つたら一刻も早く免れる工風をしなければいけないと警告してくれるのも難有いが、一步進めてさあ種痘をしてあげませ

う、さうすれば大丈夫ですと言つてくれたらもつと嬉しいでせう。

幸福は如何にして得可きか

重荷をしよつても我慢すれば暫時は耐へる事が出來ます。しかし我慢は何時迄も續きません。寧ろ最初から荷馬車に積む方が悧巧です。歯の痛まない者が、歯痛で苦しんで居る者に向ひ、そんなに苦しさうな顔をしないで笑つて見ろと言ふのは無理です。いくら笑つても苦笑となるばかりです。それよりも直に歯醫者の所へ行く方が悧巧です。苦痛さへ止まれば、笑ふまいと思つても自然と笑へるでせう。

煩悶

「人は何故に煩悶するか」と題する一書を見た事があります。或醫師の著書で、近代人がいろいろの煩悶の爲めに自殺する者さへある事を説いたものです。けれども書中何等の救濟策がありません。讀者はかへつて暗鬱な心持になるばかりです。

ベンヂヤミン・フランクリンの書いたものゝ中に、下の如き言葉があります。

昔の哲人は、人は滿ち足らへる心を持たねばならぬと敎へる。正に然り。然りながら、如何にすれば滿ち足らへる心を持つ事が出來るかは敎へてくれない。

煩悶は必ずしも惡き事にあらず

煩悶は寧ろよい事であるかもしれません。たとへば、何かうまく行かない事がある時、平氣で居ては何時迄もそのつまづきを脫却する事が出來ません。あゝでも無い、斯うでも無いと頭を惱まして見るのも一の努力です。

齒痛の苦しさを知らない者は、時には齒の痛みに惱まされた事のある者よりも不幸です。適時に手當をしないで打過ぎ、突然之を失ふ場合があるからです。火の熱さを知らない者がやけどをするやうなものです。

若しも保險の勸誘に失敗したら、手を拱いて運の惡さを歎いて居てはいけません。先づ原因を考へ、或は先輩に訊いて御覽なさい。靜かに內省して御覽なさい。方法をかへてもう一度ぶつかつて御覽なさい。迷へる道から引返して、正しい道に進むのです。車に馬を曳かせるやうな間違をせずに、馬に車を曳かせる工夫をするのです。

人をうるさがらせるのは保險募集失敗の最大原因です。うるさがられる原因はいろいろありますけれど、相手が聽く意志の無い耳の側で長々と喋つたり、自分には興味があつても他人には興味の無い事を喋つたりするのも其の一例です。無經驗の外務員には此の種の失敗が多いものです。

新米の外務員は、自分自身が俄かに仕入れた保険の知識が珍しいので、相手選ばず細大もらさず聞かせようとします。その熱心は結構ですけれども、聴かされる方はうるさがつて、結局長時間の御談義も何の效果も擧げますまい。

興味

多くの人は、生命保険を無味乾燥なものと思つて居ます。だから外務員は先づ相手の注意を喚起する爲めに、どうしても耳を傾けないでは居られないやうな新奇の話を緒口として、段々と本題に入らなければ駄目です。但し相手の退屈するやうな冗長な話は避けなければなりません。

邪魔

目的を邪魔する者があつたら、それを無視してはいけません。どんな些細な邪魔でも、之を取のぞき、之に打勝たなければいけません。

忠告

忙しい人に休息の必要を說き、心に煩ひのある人に快活なれと說き、失業者に勤勉なれと說き、飢ゑて食なき者に滋養を攝取せよと說くのは無駄です。みんな聞き倦きた御說教です。これは車に馬を曳かせると同樣です。

無益の努力

生命保險の外務員も、屢々車に馬を曳かせる樣な無益な努力をして居ます。或者は相手が必要とするかどうかを考へずに、無闇に契約を勸めます。若しも醫者がこんな遣口をしたとしたらどうでせう。山師醫者として排斥されるに違ひありません。

例之、醫者が病家に招かれて行き、私は驚く可き治療法を發見しまして、其の效能は素晴らしいものですから、直ぐに療治にかゝりませうと吹聽したとします。すると病人は、それは一體何病にきゝめがあるのですかと質問します。醫者は答へて、僂痲質斯の治療法だと言ひます。病人は忽ち不機嫌になつて、私は僂痲質斯で苦しんで居るのでは無い、マラリヤ熱に罹つて居るのだと言ふので、流石の醫者も頭を掻く外は無くなりました。斯ういふ樣に、治療法を先にして病氣を後にするのは、車に馬を曳かせるのと同じ事です。先づ醫者としては、何病かを確めた上で治療にかゝらなければ賴母しくありません。

外交員も、人を訪問して直ぐに、玆に財政上の萬能藥があります。生命保險と言ふ藥です。私共の會社のは一番安くて一番きゝめがあります。さあ此の機會に申込んで下さいとせっついては駄目です。

此の遣口は、恰も天に向つて發砲するやうなもので、火藥彈丸の無駄使ひです。そんなら如何すればよいかと言ふと、第一には相手の地位境遇を見拔き、各々の特質に最も適合する種類の保險を勸め、その説明をしながら漸次に契約締結迄運んで行かなくてはいけません。斯くしてこそ契約を獲得する事も出來、又其の契約は永續するでせう。

第五章

怖れと強情

外務員が出會する種々の妨害の中に、怖れと強情を數へます。その何れもが、夫々因つて來る源があります。

怖れ

南極探險者の談によると、氷の上に遊ぶペンギン鳥は、行手の邪魔になる位よく馴れて居るさうです。

公園の木鼠は乳母車の中の赤坊と遊んで居ます。

禁獵地の鴨は舟が近づいても飛立ちません。鹿も朝夕姿を見せ時には附近のゴルフ場に迄現はれて遊戯の邪魔になる事もあります。

森林に住む獸類は、幾百年間弓矢鐵砲獵犬に追ひ立てられ、狩立てられた爲めに狂暴なのです。人間も之と同じです。多くの人は生命保險の外交員を怖れて居ます。これは主として以前横行した惡募集員に脅かされた結果です。その爲めに今日優良なる外務員がどの位迷惑して居るかしれないのです。

扨て、人々は何をそれ程怖れるのでせうか。毆られるのでも殺されるのでも無い事はわかつて居ます。人々はうるさがらされ、しつつこくされるのを厭がり、無理強ひされて思はぬ多額の負擔をする事を怖れて居るのです。又、自分は保險の事は何も知らず、その道の玄人の外務員の爲めに、うまい具合にだまされはしないかと怖れて居るのです。

此の疑念を吹拂ふにはどうすればよいでせうか。

聖書に「愛は恐怖を打消す」とありますが、生命保險では「信頼は怖れを打消す」のです。若しも外務員が相手方の信頼を得る事が出來れば占めたものです。

野獸もものの柔かに扱へば馴れるものです。外務員は相手の爲めに奉仕する誠實を示せば、先方

の理由無き怖れは消え、往來で逢つても知らないふりをされず、家を訪問しても奥にかくれられる事は無くなります。

最も優秀なる外務員は、いやがる人を無理に契約させるやうな事はしません。自然と、保険をつけて見ようかと言ふ心持を起させるのです。

第一回の會見がうまく先方を誘引する事が出來たら、直ぐに契約を取結ぶに限りますが、しかしあんまり極端に熱心で功をあせると却て相手の心は變つてしまひますから、時には自重して第二回第三回の會見迄延ばす心掛が必要です。

評判

外務員は、保険の事は何でも知つて居て且興味深く説明する事の出來る人でなければなりません。話の面白いといふ事は第一の條件です。最初から露骨に商賣の話ばかりするのは下手です。

加入者を滿足させ、永久の後援者とする事が肝要です。實力以上の契約を強ひて、その結果後日解約となるやうな遣口は愼(つゝし)まなければなりません。理想的に言へば、加入者の多少の餘力を殘して置いて、保険の愛護者たらしめる事が第一です。

すべての外務員が此の心懸(こゝろがけ)で勸誘すれば、遠からずして世人一般に保険の價値を認めさせ、勸

誘を待たずに進んで契約を申込む時代が出現するでせう。現在の如く、保險勸誘に怖れを抱くやうな間違つた事はなくなり、信賴して申込む時代が來るでせう。

強情

人は誰しも幾分の強情を持つて居ます。他人が反對するとこつちも抵抗し、壓迫されると一層強情になる傾向を持つてゐます。だから巧妙なる外務員は相手に反感を起させない事に心を用ひます。

驢馬は強情な獸ですが、鞭打てば愈々進まなくなります。はり切つて居る馬に乘る者が、きつく手綱を引締めると振落されてしまひます。

結論

外務員が急激に契約を締結しようとすると、先方は忽ち防禦の陣を張り、之を打破るのは困難です。それですから徐々に敵城を陷す策戰に出なければいけません。正面攻擊を避け、後方部隊を攻める事も必要です。けれども、あまりかげから手を廻す事ばかり考へてもいけません。何故ならば、保險は誰人にも必要のもので、契約して決して損はしないのですから、正々堂々たる態度を失はない事も心懸けなければならないのです。相手の強情な意志を打破るよりも、相手のい

だいて居る疑念を打拂ふ位の態度が必要なのです。先づ注意を喚起し、次に相手の意志で契約を申込むやうにしむけるのが最善の手段です。

名譽囘復の使命

口でいふのはやさしいが、實行になると複雜な困難にぶつかるのでうまく行くものでは無いとこぼす人もあります。

勿論定石通りに行くものではありません。異なる場合に異なる手を用ゐる必要があります。考へ深く、注意に注意を加へ、辛抱してかゝらなければ駄目です。結局外務員の成功不成功は、各人の判斷と處置の適否によるのです。

過去の不良外務員の所業が邪魔になる事は今更いふ迄もありませんが、今日の進歩した外務員の親切な遣口で、やがて保險に對する理由の無い怖れは次第に世人の心から消失せるでせう。

第六章　自分獨特の勸誘法と他人の勸誘法

原則として、外務員は各自獨特の勸誘法を持つてゐて、それが他人の眞似をするよりも成功します。自分で發明した方法だといふ確信が、一層熱心にその策を遂行させるのです。けれども、他人の考案になる方法も躊躇せずに採用しなければいけません。又、曾て成功した方法と共に、常に新工夫を加へなければいけません。但しどのやうな方法でも、自分自身に體得し個性のスタンプを押したものでなければ無效です。不消化な食物は滋養にならないばかりで無く、かへつて體の害になります。それと同じく、他人の說や他人の勸誘法は、充分飮込まないと有害です。

又、いかに善い方法でも、之を試るにあたつては、相手の人柄によつて夫々適不適のある事を承知して居なければいけません。それ故、成功する外務員は各種の方法を知つて居て且各人に最も適する方法を行ふ人です。

旋風式勸誘法

勸誘法の一として、力を込めて相手を說き、熱辯を振ひ、考へる時間を與へずに契約させてしまふ方法があります。相手は反對しようとしても其の隙が無くて第一回保險料を拂つてしまふのです。けれども、此の方法は危險です。これでは契約後加入者の心に充分の滿足が殘りません。

恐らくは後日反動が來て、解約するか、又は知人知己の間に保險會社や當の外務員の惡口を觸れ廻るでせう。

萬一此の方法で成功したら、外務員は契約後一層の注意をもつて加入者を訪問し、契約當時は疾風の如く行動したのとは反對に、ゆる〳〵と信任を得るやうに心懸なければなりません。

意志

或外務員は、挺でも動かないといふ意志の力で成功を收めます。しかし、之も亦眞に最善の方法では無く、幾分相手を壓迫してかゝるのですから、後で厭氣を起させる惧れがあります。從而契約後に相手の心を柔らげる必要があります。

催眠術

世の中には、誰にでも好かれる人があるものです。恰も催眠術をかけたやうに人氣を一身に集めます。斯う言ふ人は極めて幸運で、外務員として申分がありません。けれども、さういふ幸運の人は澤山はありませんから、先づ多くの外務員は、相手に充分の同情親切を示し、相手の利益の爲めに働くと言ふ誠意を示す事が必要で、これによつて上記の如き幸運の人と同じ効果を擧げる事が出來ます。

豫定行動

一般的にいへば、或人を勸誘に行く時、豫め如何なる方法で勸めるかを心にきめて置く事が必要ですが、時には例外の場合もあります。例之全く未知の人で且その人の性格境遇等も全然不明の時は、前以て策を決定してかゝるのはいけません。先づ世間話でもしながら、徐ろに敵情を視察し、それから謀をめぐらすのがよいのです。

しかし之は例外で、大體は作戰計畫を定めてから敵陣へ乘込むをよしとします。

豫定なき行動

非常に熟練した外務員は、自分の經驗力量に信賴して、豫定作戰を立てずに勸誘に出かけて行く事を敢てします。斯かる熟練家は、保險に關するあらゆる議論を承知し盡し、又あらゆる保險拒否の言葉を知悉し、且又各人に適する保險種類を直に擇んで勸める智能を持つて居るので、それで差支ないのです。

誰しも斯くあり度いのですが、それは熟練家に限る事で新米の者には乍遺憾望めない事です。

受身の構へ

時には相手に思ふまゝの事を言はせ、保險嫌の理由をすつかり聽いてゐるうちに相手の性格と

身邊の事情を了解し、扨て徐ろに說破して契約させる手段もあります。

此の方法は時間と熟練とを要しますが、或場合には最良の方法と言はれて居ます。恰も拳鬪の選手が相手の疲勞するのを待つて最後の一擊を加へるのと同樣です。

けれども、不熟練の外務員だと、相手の疲れる前に自分の方が疲れてしまふ惧れがあります。

戰術

外務員が知り度いと思ふ事、例へば資產收入額などは、先方は口にし度くないのが通例です。さういふ場合に、外務員は假說を立て、相手の心持を引いてみる必要があります。あなたの收入を假に壹萬圓として、每年一千圓宛貯蓄なさると其中からいくらの掛金をする事が出來ると言ふやうに話を進めるのです。けれども此の想像がひどく實際と違つて居ると、却て惡い結果を招きます。例之年俸貳萬五千圓の給料を取る人にむかつて、あなたの年收を貳千五百圓と假定しなどゝ言つたり、月給五拾圓の人にむかつて、あなたの月給を五百圓と假定しなどゝ言ふと忽ち機嫌を惡くしてしまふに違ひありません。

相手と親密な態度を取る事は何よりも必要です。何か訊くにしても好奇心で訊くといふ態度で無く、相談相手になつて御役に立ち度いと言ふ樣子を見せなければ駄目です。

祕密主義の人で、門戸を開く事を怖れてゐたら、それとなく他人の爲めに盡力した例などを話すのです。間接に信頼を得る事が出來るでせう。

第七章

三種の方法

保險契約を勸める場合、相手方に、大體三種類ある事を承知してゐる事が肝要です。第一は感情に訴へると動き易い人、第二は理智的の説明を要求する人、第三は單に商賣として勸めると領く人です。それに從て夫々勸誘の方法が違はなければなりません。

第一の方法

多くの人は、家族の將來の事を考へて居ますから、その家族に對する同情を示せば心を動かす事が容易です。

眼に訴へる方法

これは少々古い手段ですが、先づ二枚の繪を見せます。ひとつは嵐の中で寡婦が幼兒を胸に抱

き、外の子供は左右から取縋りながら、寒氣と飢に泣いて居る圖。他のひとつは温い家庭で母を取巻いて兒童の嬉戯する圖。卽ち印刷物の宣傳の役に立つ場合です。しかし、普通一般には悲慘な繪は效果が薄いやうですから、二枚の印刷物を作る必要は無いかも知れません。寧ろ保險の效果によつて、樂しく暮す一家の繪丈の方が好結果を見るかもしれません。

制限

常識のある人は大概家族の將來を懸念して居るものです。さういふ人にむかつて、家族に對する一家の主人の義務だとか、責任だとか言ふ事を説くのは無用で且先方の感情を害する惧れがあります。

たが既にその人の持つて居る感情に適度の油をそゝぐのです。又世間の噂話として、或無情な人の事などを話題にするのも間接の效果はあるかもしれませんが、これとても餘程注意しないと相手を厭がらせる事になります。卽ち、どんな方法でも、之を實行するには充分の思慮と機轉が必要です。

興味あらしめよ

今は昔の話になりましたが、生命保險の效能を述べる人々は、弟子にのぞむ牧師の如き態度を

示したものです。若しも契約を拒む者があると、極力非難したものです。

皆さんの死後、妻子が如何なるかを考へずに天國に行けると思ふのは虫がよすぎます。妻子が救貧院に收容されて居るのに、あなた方丈が天國に居るといふのは卑む可き利己主義です。夫の臨終の日迄優しく盡した妻が、饑餓に泣く子を背に負つて食を求めにさまよふよりも悲慘な事がありませうか。

皆さんは永生されるかもしれませんが、又明日にも死ぬかもわかりません。皆さんの死後、家族がどうなるかを御考へなさい、子供達の可愛らしい顏を御覽なさい、あなた方は彼等を愛して居るでせう。それならば彼等を貧困の苦みの中に殘して逝つてはいけません。何處かに貧しき寡婦の居ない町村がありますか。否々、何處に行つても哀れな人の姿を見るに違ひありません。或者は戸毎に食を乞ひ、或者は押賣をして居ます。それはみんな心懸のよくない夫、心懸のよくない父親の罪です。

右は或牧師の書いた本の中の一節ですが、生命保險の勸誘にも之と同じやうな苛烈な言葉を用ゐる人もありました。

ふたつの怖ろしい話

次に揭げるのは數年前或新聞に出た記事です。

某日某所で或る男が死んだ。妻と三人の子供を後に殘したばかりで無く、家は抵當に入つて居た。寡婦は負債を返さうと一生懸命に働いた。財產らしいものは總て借金を返す爲めに賣拂はれた。三人の子供を抱へた寡婦は街頭に立たなくてはならなくなつた。此の悲慘な境涯が彼女の頭を狂はせ、不思議な考をいだかせるに至つた。それは、たつた一晚でも昔の我家に三人の子供と共に眠る事が出來れば、昔の財產の三分の一は我手に戾つて來ると言ふ夢想である。或晚狂女は三兒と共に元の我家の屋根裏の部屋に忍び込んで眠つたが、翌朝發見されて警察へ突出された。結局母親は救貧院に送られ、泣悲む三人の子供は孤兒院に送られた。

此の記事を書いた記者が、生命保險の事を考へてゐなかつた事は申す迄もありませんが、吾々の連想には直に浮んで來ます。若しも夫が、少なくとも借金額位の保險を契約して居たら、斯程みじめな目を見せずに濟んだでせう。

又、折角保險契約をしても、之を延滯にしたり、解約したりした爲めに、死後妻子を悲慘な狀態に陷れる例も少なくありません。

拜啓陳者亡夫死後わたくしの健康も兎角勝れず自身參上致す事困難に候まゝ手紙にて御願申

上度は夫生前に契約致候生命保險金一日も早く御拂渡被下度御恥しき次第ながら醫藥葬儀の費用も未だ支拂相濟まざる窮狀に御座候何卒々々保險金至急御屆被下度願上候

斯ういふやうな手紙は保險會社や代理店では屢々受附るので、しかも其の契約が延滯失效となつて居る場合などは、氣の毒とも何とも申せません。

心に訴へるのが最も肝要

前に申した通り、その人を非難する事無く、しかもその心を動す事が肝要です。誰しも妻子を愛するのが當然で、その將來の爲め心配して居るのが通例です。其處で、如何にすれば妻子の一生を保護することが出來るかを教へ、心配を除く爲めに親切な說明をしなければならないのです。

第二の方法

第二の方法は理論的說明です。之は學者其他の知識階級に對して有力です。

第三の方法

第三は單刀直入の營業方法とか稱す可きもので、主として事業家や商人に向きます。保險證劵は子供の爲めに最もよき遺產であるとか、或は不動產や公債類に投資するのが有利であると同じく生命保險も有利だとか、すべて現實の利益と結びつけて說明するのです。

此の方法を用ゐる時は、生命の不確實性などを論じたり、感傷的な場面などを說明に取入れる必要はありません。

殊に各方面の投資が不確實で、且投資物の價格の變動の激しい時などは、最も確實なる投資として生命保險を推稱する事が出來ます。

相當の資產を作つた人が、各方面に投資をする中の一項目として生命保險を勸む可きです。例令大富豪で、死後も遺族は困らない程の財產を持つて居る者も、相續稅其他の現金支拂を要する事は明白です。又主人死去の混雜に際し、財產の形を變る事は屢々不測の損害を引起すものですから、彼是考慮して、相當額の保險契約をする事は思慮ある人の當然爲す可き事と言はねばなりません。

又無資產の人に對しても、商業取引的に保險契約を勸める事は心に訴へるのと同樣效果あるものと信じます。

適用

上記の三方法の適用に際しては、餘程融通を利かさなければなりません。三方法にあてはめる爲めに、無數の人間を三種に區別して、各々異なるものと考へるやうではいけません。自由な頭

腦を働かせて、機に應じて態度を決する事が必要です。例之感情に訴へる方法に理論的説明をまぜれば一層有效ですし、理論的説明に感情的の話を加へれば效果は一段と增すに違ひありません。要之三方法の最も巧妙なる結合が最良の募集方法だと言はねばなりません。

第八章

暗示の力

前章には感情に訴へる方法、理智に訴へる方法、商業取引的方法の三つについて記しましたが、これで大概は盡して居るやうに考へられます。けれども心理學者は更に吾々に新規にして興味ある事を示して吳れました。

人は理性を有す。この特質の爲めに、人間は他の動物と著しく違ひます。昔の哲人は此の事を強く主張して、總ての人間の行爲は理性に基くと說きました。しかし近代の研究によると必ずしもさうでは無く、多くの人は理性によつて行爲するよりも、暗示によつて動き、或は感情によつて動く事が明かになりました。

何故保險をつけなければならないかと說明するのは、相手の理性に訴へるのですが、論理的の說明をしないでも、暗示を與へて誘引する事も不可能ではありません。

右の二方法卽ち理性に訴へるか、暗示によつて心を動かすか、何れがよいかと言ふと、若し成功するならば第二の方法の方が勝つて居ます。何故ならば、第一の方法は時間を要しますが、第二の方法はもつと端的に相手の決定的の返事を得る事が出來るからです。第一には時間の節約となり、第二には暫く考へるから待つてくれといふ逃口上を言はせない點がすぐれて居るのです。

けれども、第二の方法と雖も萬能とは申されません。何故ならば、相手方の性質が何でも彼でも理窟でなければ承知しない場合には、暗示の力は弱いのです。斯ういふ時には理性に訴へる外はありません。然しながら廣い世の中では、理窟よりも感情に動く人の方が多いやうです。生命保險によつて家族の將來に關する心配を除く事が出來ると言ふ事を暗示し得るなれば、保險論を學術的に說明するよりも遙かに有效です。數百圓の保險料で幾千圓かの金を積む事が出來るといふ事實を暗示し得るならば、直に申込書に署名捺印を求める事が出來るでせう。

若しも小店の主人を勸誘しようとするなら、同商賣の大店の主人が保險をつけた話をすると、そんなら自分も契約してみようといふ氣持を起させるものであります。

保險をつけて置いたゝめに、子供の多い或家が貧困に陥る事から救はれた話をすると、多くの父親の心が動かされるに違ひありません。

如何に多くの人が暗示によつて動かされるかは驚く可きものです。例之烟草の如きは、老人がにこにこ笑ひながらパイプをくはへて居る廣告繪の力で澤山賣れるさうです。之は理窟以外の力です。烟草をふかして居る老人はたゞふかして居る丈で御買ひなさいと勸めて居るのでなく、又別段そんな文句も書いては無いのですが、畫面には愉快な心持があふれ、香氣さへ漂つて居るやうに見えるのです。その爲めに、理窟で勸めるよりも力強く人の嗜好をそゝる結果となり、之を見た人は烟草を買ふ氣になるのです。

或菓子の廣告に、「どの箱にも幸福がはひつてゐます」といふ文言を見た事があります。生命保險の廣告に「我社は滿足を賣る」と書いたのがありました。かういふ短語は理窟ぬきで人の感情に訴へるのです。

生命保險は永久に姿を變へない山の如しと言ふ言葉を耳にしますが、これは保險が科學的の基礎を有し事業が手堅いといふ意味と思はれます。又或特定の一會社が山の如く堅固であるといふ場合は、その會社の資産狀態、營業方針の堅實、愼重なる投資等を意味する宣傳と思へば間違ひ

ありません。

有力なる某生命保險會社の廣告に、ヂブラルタル海峽の岩石の繪を描いて、會社も斯の如く強固なりといふ意を示したものがありました。これは理性に訴へるので無く、會社の堅い事を暗示してゐるばかりで、何等の說明も證據も加へてありません。乍然此の廣告は廣告として合理的で、會社の財政と經營の間違ない事を有效に宣傳して居るのです。

信任

一獲千金的詐欺は無智な人間の慾心を容易に捉へてしまふ。何の效能もない賣薬を、人は何の證明も無しに買求めます。

これ等の詐欺的のしろ物を賣る人間を俗に「信任される人」と稱するのは、犧牲者の信任を得て無價値の物を賣る事を意味する反語です。しかし吾々は玆に一つの敎訓を發見します。卽ち無價値な物さへ賣る事が出來るのですから、生命保險の如き有用なものは、買手の信任さへ得れば、いくらでも賣れる筈だと言ふ事です。

警告

此の場合に心理學者は、各外務員が心にとめて置かなければならぬ警告を與へます。旋風式勸

誘法で契約を取つたならば、その後で契約した事の有利なる事をゆつくりと説明して、成功にうらうちして置かなければならないと言ふ事です。それで無いと先方が考へ直して契約を破棄する惧れがあるのです。暗示的勸誘法に成功した場合も亦同様です。加入者は進んで契約したかもしれませんが、叉思ひ返してよせばよかつたと考へないとも言はれません。其處で外務員は、契約者の決意を祝し且それによつて如何に幸福がもたらされるかを巧みにつけ加へて説明する必要があります。それによつて第一には先方の疑念を除き、契約してよかつたと思はせ、第二には先方の妻や友人から、保險なんかよせばよいのにと言はれるやうな場合に、充分説明の出來る材料を與へて置く事が出來ます。

卽ち、若し理性に訴へずに契約を取つた場合には、ふとした事で失効となる惧れがありますから、後で理論的説明を加へ、相手方の信念を強める事が肝要なのです。

第九章

舊式の外務員と新式の外務員

會社が無經驗で主義方針が一定してゐないと、外務員の選擇に意を用ひず、甚だ面白からぬ人物を採用して害毒を流す事があります。その爲めに世間一般に、外務員といふ者は無作法で嘘つきで無責任なものだといふ間違つた印象を與へる事になります。不幸にして斯ういふ人間は現今でも跡を絕たず、おかげで世間では保險外務員を毛嫌する傾向があるのは歎かはしい事です。けれども、かゝる誤解も近き將來には一掃され、次の如き事實が明白となるでせう。

一　無作法な外務員は必ず失敗す

二　無能なる外務員は無益の饒舌によつて無智をあらはす

三　優良なる外務員は寡言にして寧ろ聽上手なり

四　優良なる外務員はあらゆる點に於て紳士なり

五　優良なる外務員と雖も必ずしも博學とは言ひ難し。乍然生命保險の眞意を最もよく理解する人なり

舊式の外務員は何の計畫も無く、保險料表を懷中し、申込書用紙を持つて會社を出で、無鐵砲に四方を馳廻り、萬一失敗すると意氣地なく悲觀落膽するのです。それでも相當の成績が擧がる

なら、それは其の人の手腕といふよりも、寧ろ生命保險そのものゝ力で出來るのです。舊式の連中は、保險の原理を知らず、不正確な説明をしたり、相手に不向な種類を勸めたりして失敗するのです。若し幸運にも契約させる事が出來たとしても、やがて解約となるのが免れ難い運命です。

愼む可き事

亞米利加の雜誌に、一人の男がいれかはり立替り押かける保險外務員に惱まされて、遂に發狂して腦病院に入るといふ漫畫が出てゐました。その漫畫に添へてある文句を紹介すると左の通りです。

第一の外務員曰　貴方は何時死ぬかわかりません。そして家族は何の貯蓄も無く後に殘されるでせう。

第二の外務員曰　まあ考へて御覽なさい。貴方は此の危險な往來を歩いて居るのですよ。

第三の外務員曰　うちの會社では自殺者にも保險金を支拂ひます。

第四の外務員曰　人生僅か五十年。その半ば位で大概の人は死ぬのです。

此の漫畫の最後の繪は、自分は死んで墓の下にゐるのだと信じて居る狂人が、腦病院の一室の木製の寢臺にちひさくなつて震へてゐるところが描いてあります。

これは漫畫に過ぎませんが、斯ういふ亂暴な口をきく外務員も絶無とは言へないのです。

外務員の訓練

外交の熟練は實地の勉強で得られる事は確かですが、教育もゆるがせになりません。生命保險の根本原理を學ぶ事、保險の目的使命を知悉する事、內勤事務の一般を知る事が必要です。けれども此の知識は外務員自身の資格として必要なので、勸誘する相手に押賣す可きものではありません。專門的の細い事を並べ立てゝ相手を惱ますやうでは却て有害です。

外務員の地位は正に辯護士、醫師、技師のそれと同じです。

訴訟を依賴する人は法律の講釋を聽かうとは思ひません。たゞ充分法律を學んだ專門家を信賴せんとする丈です。

病人は生理學や醫學の講義を承らうとは期待してゐません。たゞ病氣を直して貰はうと願ふ丈です。

家を欲しいと思ふ人は建築學上の原理などは聞かないでもよいのです。

何故外務員に教育が必要かと言ふと、保險契約者の爲めに有利に働く事を可能ならしめる事が第一の理由です。卽ち外務員は、契約者自身が細かい理論を學ぶ面倒なしに、容易に說明を聽取

して理解出來るやうに教育されてゐなければならないのです。

教育は外務員の自信を強む

もう一つ、何故教育が必要かといふ理由があります。それは、保險の原理を知り、その眞價を熟知してゐれば、熱心の度は増し、確信は強くなり、相手を勸誘する時の力量が増大する事です。

結論

一　新式の外務員は契約者の爲め又會社の代表者として成功する爲めに、自分の仕事を熟知してゐなければいけません。

二　學研的の理論丈では不充分です。實戰によつて訓練されなければ駄目です。

三　若しも保險の原理と實際を學び、又仕事の邪魔にならない限り講演を聽き、或は經驗ある先輩の指導を仰ぐ事が出來れば此の上もない事です。但し惡い先輩の教を受けぬ様に注意する事も必要です。

第十章

天職

あなた方は自分の仕事に滿足してゐますか。それとも他の職業に轉じ度いと思ひますか。
此の質問に對して答へ迷ふやうでは駄目です。自分の仕事を愛し、熱心勤勉ならば、必ず成功します。生命保險募集を天職と心得なくてはいけません。

質問

保險募集よりも、もつといゝ仕事は何ですか。
保險よりももつと國民の利益となる仕事が外にありますか。
保險以上に自分の利益と公益との合致する仕事が外にありますか。
無資本で此の仕事以上に有利な仕事が外にありますか。
若しも右の如き質問に對して之を否定する人があるなら、その人は先づ仕事そのものが惡いか、自分自身が惡いか反省して御覽なさい。

外務員活動の成果

外務員の仕事は他人の家政にも影響します。人が貯蓄したものを失はせないばかりで無く、死後に貯蓄同樣或はそれ以上の金額を殘させます。

外務員は一家の主人並にその家族に安心と慰安を與へ、家庭を保護し、營業を守ります。
これ等は總て外務員が授ける功德(くどく)です。

保險は貯蓄心を養ふ

生命保險は貯蓄心を養ふ利益を伴ひます。

貯蓄

エドワアド・ボックといふ和蘭の一少年が六歲の時亞米利加に渡りました。父は貧しく母は病氣勝だつたので、此の少年は學校から歸つても他の子供と遊ぶ事も出來ず、夜食の手傳をしたり、皿を洗つたり、床(ゆか)の拭き掃除などをしなければなりませんでした。
小學時代から內職もし、多少でも收入になる事なら何でもやりました。辛苦のあげくに、次第に地位をきづき、遂に婦人家庭雜誌の出版者となつて月二百萬册の發行部數を得るやうになりました。巨額の資產を積み、六十五歲で事業から引退しました。
此の成功者が自傳の中で貯蓄に就いて下の如く書いてゐます。
私が六歲で亞米利加に來た時、私にとつて一番必要な事は貯蓄でした。故鄕に居る時に、人世に於ける成功の要訣は貯蓄であると教へられてゐましたが、亞米利加に來てみるとこれは

浪費國だと思ひました。學校では金をためる者は吝嗇だといふやうに聞かされました。又、亞米利加人は經濟を好まない事を知りました。その實生活を見て、吾々は貯蓄心を起す事は出來ません。萬事が浪費です。此の四圍の狀況の中で私は貯蓄を實行したのです。

此の言葉は眞實で、昔と違つて當今の米人は勤儉貯蓄の氣性が乏しく、今にして改めざれば國民的危機の到來は免れまいと思はれます。

そんなら回復挽回の望が無いかといふと、著者は卽座に否と答へます。生命保險を有效に活用すれば容易に救濟する事が出來ます。その理由は二つあります。(一)生命保險丈が有效で(二)他の企ては無效だと言ふ事です。

多くの人は後日の事を考へずに暮らし、少數の人が貯蓄に心を傾けてゐるのが現在の有様です。又、貯蓄する人も、蓄へた金を遊ばせて置く傾があつて、少し月日がたつと、つい費してしまふ惧があります。或は貯金を銀行に預ける人もありますが、何時でも引出せる性質のものですから、餘程意思が強くないと費消する危險がありますし、澤山の額になる迄に本人が死去する事も考へて置かなければなりません。

生命保險會社に掛金をするのは其の人の義務となります。勿論止めようと思へば中止する事も出來ますけれども、其の場合には損をしなければなりません。又、保險契約をすると、その掛金の爲めに貯蓄の習慣がつきます。例之、商賣で儲けた金を貯蓄しても之を失はないやうにしなければなりませんが、生命保險は之を守る爲めの最良法です。保險の力は儲けた金を保護するばかりで無く、間接にはその人の家族迄も保護します。卽ち保險は貯蓄心を養ふばかりでなく、既に蓄積した財産を守るのです。

しかし生命保險にも種類があり、又契約する人の境遇にもいろ〳〵相違があつて、どういふ人にはどういふ種類の保險が向くかは、經驗ある外務員の忠言に俟たなければなりません。

無形の利益

生命保險契約をすると、保險以外の目に見えない利益があります。獨立自尊の精神、勇氣、心のおちつき、安心、滿足、幸福その他數へ切れません。言葉を強めて一例を申せば、病人にさへ安心を與へて病氣を癒す功德があると言つても差支ありません。

延びる仕事

外務員の仕事は年と共に繁昌します。

生命保險に對する世間の理解は次第に增加し、外務員の仕事も昔に比べると樂になりました。未だ保險をつけてゐない人は無數にあります。田畑は豐作なのに收穫する百姓の手が足りないやうなもので、優良な外務員ならば幾人殖えても差支ないのです。

有利なる仕事

生命保險契約の募集程無資本で有利に行へる仕事はありません。どんな仕事でも之程もとでいらずで多額の報酬の卽時に懷に入るものはありません。

不景氣知らず

どんな商賣でも一年を通じて賣行の鈍い月といふものがあります。商人は將來來る可き不景氣を想像して年中心配してゐます。しかし生命保險外務員にはそんな心配はありません。一年を通じてひどく賣行の惡いといふ事はありません。又將來の心配もありません。何故ならば、生命保險は何時でも人々にとつて必要缺く可らざるものだからです。

需要不絕

好景氣時代には誰しも金を出す事を惜みませんから、勸誘は容易です。不景氣時代には保險の必要は一層多く、且その必要を說くと印象が深いでせう。

好況時代には、成功者は忽ち資本を積む事が出來ますが、不況時代には之が難しくなります。しかし生命保險は平生大した負擔無しに貯蓄させ、知らず知らずのうちに巨額の資本を蓄積させます。

生命保險の通用範圍は廣汎なり

財政困難の時に負債で苦しんで居る人も、生命保險契約があれば、萬一の場合に之を以て負債を償却し、家族に難儀をかけないで濟むといふ一縷の安心が得られます。かういふ人にとつては、保險はふたつの利益をもたらします。一は家族の保護で、二は債權者にも安心を與へ、苛酷の催促をされる事無く、その間に辨濟の途を講ずる事が出來ます。

或る業に投資した人が、若し長命ならば必ず成功すると假定しても、萬一短命だと事業の成功は望み難いでせう。此の場合にも保險は有力なる後陣の備へとなります。

事業家の保險

負債のある人の數は負債の無い人の數よりも多いと稱されてゐます。かういふ人は何とかして負債の苦勞を少なくし度いと念じてゐるのですから、外務員が上記の如き保險の利益を説明すれば容易に承諾するに違ひありません。それ故外務員は、營業を保護する必要を感じてゐる人を探

す事が肝要です。例之家屋を抵當にして借金してゐる人があつて、その保險は主人自身を直接に保護しはしませんが、主人の死後妻子の住む家を確保する事になります。又共同事業をしてゐる人か、その事業保護の目的でつけた保險は、結局家族保護の目的を達します。何故ならば、その保險金は、家族の手に入らないでも、事業から生ずる分前は將來も引つゞいて遺族の手に入るでせう。

結論

勤勉なる外務員は常に成功します。好況時代には仕事が容易ですし、不況時代には多少困難とするも、勇氣と決心さへあれば、成績は決して落ちないでせう。保險は不景氣知らずです。

第十一章

勸誘要領

外務員に對する注意として、特にその必要を述べ度いのは、加入する相手の心を引くために、又會話のきつかけをつくる爲めに、更に又會見の最後を全くする爲めに寸鐵的の言辭を集め、之

をカアド式にして整理して置く事です。

それが如何なる場合に有效であるかは經驗によつて直にわかります。

最も有力なのは自分自身で考へ出した標語警句等ですが、他人のものも、遠慮無く借りて來て活用しなければ駄目です。

所得保險の利益要領

終身所得保險の價値は無能の遺言執行者、後見人、辯護士、或は親戚などに利益を害されない點にあり。

小資產の人が家族の定收入を保證する唯一の途は所得保險なり。

借家をしてゐる人は所得保險のおかげで死後も妻子に家賃の心配させずに濟む。

女子は經驗豐富なる浪費者にして貯蓄は不得手なり。故に所得保險を必要とす。

一家の主人たるものは妻子に金錢上の面倒を知らせざるをほこりとす。死後に於ても亦同じ。所得保險契約を締結すべし。

所得保險の缺點は主人死去當時に支拂はれざるにありと說く人あれど、所得保險否定の言としては成立せざる感あり。寧ろ所得保險の他に、更に死亡卽時拂の種類の保險をも併せ契約する事の必要を暗示する言葉と見る可きなり。

御令閨は貴殿よりも手腕勝れたる事業家なりや。然らざれば保險加入の要あらん。

例之、一時に大金を與へて試みよ。夫人は數年にして之を消費し盡さん。一年の生活費を一月一日に全部與へて試みよ。數ケ月にして夫人は不足を訴ふるならん。每月少しづつ與ふるを以て賢しとす。所得保險は此の道理なり。

投機は數百萬金を失ふ。所得保險は家族の生涯を守護す。

所得保險は愛孃の一生を保護す、萬々一その夫が事業に失敗するも所得保險は保護の手を止めず、常に愛孃の身邊を守る。

投資は常に危險を伴ふ。子女將來の爲めに所得保險をつけよ。

家族保護

次に掲げるのは死去卽時拂の種類にも、或は上掲の如き所得保險にも、どちらにも通用する家族保護の目的の保險契約勸誘要領です、

人は死後に三つの事を殘す。家族、事業、名聲。生命保險契約をせずして死する人は此三者を最も惡き狀態に置くものなり。

生命保險は安心を與ふ。臨終に至りても家族の將來は引續き自己の力にて保護する事を得るといふ滿足を伴ふ。

あまりに俗事多忙にして家族を顧る暇なき人は直に生命保険を申込みて家族の心配を去れ。

主人死後收入の途を探し求むるは寡婦の悲壯なる運命なり。保險はかゝる悲劇を生まざるべし。

愛國心は慈善心と同じく先づ家庭に於て養はる。

外敵に對して國家を守らんとするものはその家族を守る事にも勇敢なる人なり。

資産家に對して

保險勸誘に際し、富める者と然らざる者に對してはそれぞれ異なる方法を考へなければなりません。茲には資産家に對する勸めの言葉を掲げます。

富める者も保險契約をなさゞる可らず。富者は他人を賴らず自ら萬事を行はざる可らず。事業の危險、土地管理には現金を要す。生命保險は最も安全なる投資なり。他の投資の願ひてもなし能はざる效能を有す。

事業に投資されたる金錢の價値は投資者の智能手腕を示す。資本の一部を保險に投資する事

も亦投資者の智能手腕を示すものなり。

富める婦人に對して

富める男に保險が必要ならば、富める婦人にも必要であります。否々男よりも女にとつては一層必要です。何故ならば、女は貯蓄投資等に就て男よりも經驗の無いのを通例とし、その爲めに惡い人間にだまされて投機に手を出して失敗する實例が少なくないからです。

富める婦人に對して保險の必要なる事は男子の場合よりも遙かに大なり。

保險は財産を保護し、相續稅を支拂ひ、子女を安樂に教育す。

多くの婦人は生活上止むを得ず勞働す。婦人の一生は大概他人に據る。緣家先の不幸にて如何なる境遇に陥るやもはかり難し。保險は愛孃の一生を保護すべし。

各種の婦人に

生命保險は人妻に必要なるのみならず、獨身者にも寡婦にも必要です。

保險會社は婦人の良人に等しく、家族保護の任に當る。又主人の家族に對する愛を保護す。

或は主人の死後、心ならずも再縁する外に生活の途無き未亡人を悲境より救ふ。妻や子が夫や父に對する敬愛を深くす。

主人の年收三千圓にして、その半分を一家の扶養に支出するとすれば、假に主人の生命の價値を金錢に見積りて三萬圓なりといふ事を得べし。何故といふに、三萬圓の金を投資すれば五分の利息として千五百圓の收入となる。此の年收入を將來引續いて妻子の手に渡す法如何? 生命保險を以て最上とす。

主人の死によりて妻子に支拂はるゝ保險金は極めて合理的の性質を有す、之を拒む理由更に無し。

獨立生計を立る婦人の將來の爲めには養老保險をよしとす。その婦人自身を守り、又その婦人のみよりのものを守る。

一般勸誘

一般向の勸誘の言葉は無數です。その少しを記します。
生命保險は個人の微力を救ひ之を強大にする力あり。
保險料を無駄づかひと思ふ者あるは何たる間違ひぞや。保險料は支出にあらずして貯蓄なり。
保險は死んで儲ける結果となる故好まずといふ者あり、愚も亦甚しといふ可し。人誰か死なざらん。しかも死して儲ける人は一人もある事なし。
生命保險は死の來ると同時に、その人が生前負擔せる義務を代つて行ふものなり。
保險をつけるよりも他に有利の投資ありとか、保險會社を賴みにせずとも自分自身保險すべしと廣言を吐く人も、生命保險の支拂はるゝ時に遭遇するや直にその功德を認め、自身契約せざりし事を悔むを常とす。

衣食住の費用は近年殊に增大せり。しかも金錢の購買力は舊の如くならず。生命保險契約を增加せよ。

此の重大なる件を來月に廻すといはるゝや。火災保險契約の期限切れたる時、その繼續を翌月へ廻すものありや。誰人の手にも開かるゝ机の引出に公債を入れ置き、之を金庫にしまふ事は翌月に至りて爲すか。子供の病氣に際し、來月になりて醫者を招くものありや。

一軒の家にて數十年間火災保險を繼續し、一度も燒けたる事なきは珍しからず。しかしその家の數十年間死者を出さゞる事ありや。しかも生命保險をつけずして火災保險をつけるは何故なりや。兩保險とも倂せて契約すべきなり。

株式公債不動產等に投資する方利廻よしといふ人あれど、多くの實例に徵するに、その家族の爲めには生命保險の方遙かに有利なり。

生命保險は富める者にも必要なり。貧しき者にも必要なり。

第十二章

接近

自分は生命保險の外務員では無いと嘘をついて會見を求める不心得者も往々あるやうですが、それは不得策で、いざ會見してから相手はかへつて不機嫌になるに違ひありません。表面にはあらはさないでも、心中必ず不快に思ふでせう。又外務員としての仕事を羞るやうな人間もあるやうですが、これは不成功の第一原因で、世間はそんな人物を信用致しません。

けれども、殘念な事には既往に澤山横行した惡外務員の惡い所業の爲めに、今日の外務員に對しても世間は往々好感を示さない事があります。それ故、人に接近するには何か新奇獨創的の方法、即ち相手の好奇心を唆る方法を案出する事が必要なのです。

先づ人に接近する方法は大體二つに分つ事が出來ます。直接法と間接法です。

直接法でも間接法でも、先づ質問を以て始めるのが有效です。但し此の場合に常に忘れてならないのは、相手に「應」――イエス――といふ返事をさせるやうな質問ばかりする事で、決して「否」――ノオ――といふ返事をするやうな質問をしてはいけません。少なくとも、よい返事を引出す事を忘れてはならないのです。

人にあふや否や、突然生命保險をおつけになりませんかと言つて御覽なさい。返事は必ず「否」です。

しかし、人の性質として、心中「否」と答へ度いと思ひながら「應」と言つてしまふ事が多くあります。相手の話のもちかけやうが上手だと、心にも無く「應」と答へるものです。話の切出がたくみだと、百圓貸してくれといふやうな用件でも、友達は心の中では「否」と答へ度いと考へながら、つい「應」といふものです。慈善の爲めに寄附してくれといふと、心の中では「否」と答へ度いと考へながらつい「應」といふのです。大變な投資物があると勸めると、心の中では「否」と、答へ度いと考へながら、つい「應」といふ場合が多くあるでせう。

生命保險も同じ事です。相手の心を捉へる事が出來れば「應」といふ返事を引出す事が容易です。

巧妙な質問をもつて行けば、よい返事を受ける事は左程困難でありません。

左に記すのは、よい返事を引出す爲めの質問の例です。

御子様方の學業を中途でやめたり、衣食の爲めに幼い者が働かなければならないやうな不幸も世間には多くありますが、さういふ不時の不幸に對して家族を保護する最良の方法を御存じですか。

あなたの資産收入に大した影響を及ぼさないで、御子さんの大學教育を保證する計畫を御知らせ致しませうか。

月百圓の收入を、奥さんの爲めに一生涯保證する事が出來ますが如何でせう。

たつたひとつの事で、あなたが萬事に行届いた實業家であるといふ評判を傷つける事があると思ひます。それを免れる道を御話致しませうか。

萬一あなたが債務を負つてゐらつしやるなら、その支拂を保證する必要がありますが、方法を御教へ致しませうか。

銀行の信用を増す方法を御教へ致しませうか。

あなたは貯金が出來ないで困るとおつしやるが、最も便利簡單に貯金の出來る方法を教へま

せうか。

のつぴきならぬ質問

經驗に富む外務員は、それからそれと巧妙な質問を重ねて、次第に相手を最後の目的迄引つけ、遂に申込書に捺印させる手腕を持つてゐます。斯うなると天衣無縫といふ可きで、議論めいた勸誘などの及ぶ所でありません。

接見の重要なる事

保險勸誘の成否は最初の五分間にあるとは經驗家の言葉です。果して然りとすれば、その出發點なる接見の重要なる事は明白です。

然し、保險を勸める言葉を用意する丈では充分とは申されません。先づ第一には相手の注意を引く質問から始めなければならないのです。但しその質問が本筋に這入る邪魔になつてはいけません。全く本筋と沒交渉な會話で切出すと、中途で二進も三進も出來なくなります。又、最初に出鱈目をいふと、最後に自滅する結果になります。だから、第一に肝心なのは、有效なる第一の楔を打つ事です。

くさび

楔は最後の目的に達する手段です。大工は手に斧を持ち、楔が打たれるや木材を割ります。外務員の用ゐる楔は質問です。それが本論に導く性質の質問でなくては駄目です。

無力の楔

あなたの資本を即座に二倍にする方法がありますが敎へてあげませうかといふ質問を、全然無資本の人にむかつて言つても無效です。又百萬長者のところへ行つて、五千圓の保險を勸め、資本を二倍にしてあげませうと言つても無駄です。

獨身者を訪問して敎育費の話をしても無駄です。

有力なる楔

先づ國家の財政問題などを平易に話し出すのは有效です。何故ならば、直に話頭を個人經濟に振向ける事が出來るからです。

相手が理性の勝つた人なら、遺言狀が出來てゐるかどうかをきくのも惡くありますまい、それから生命保險の話に移るのは極めて自然だからです。

目に訴へるもの卽ち繪畫、統計圖、新聞切拔等も話を切出すよすがとなります。

興味を持續する必要

どのやうなきつかけから話を進めるにしても、相手が興味を感じたと見てとつたら、直に之を捉へて放さないやうにしなければなりません。

萬一生命保險の話迄進んでも、相手がちつとも氣乘して來ない時は、寧ろ相手の喜ぶ話題に移る方がよいのです。商賣、社會問題、公共事業、宗教、科學、文學、運動何でもよいでせう。何か相手の興味を持つ會話をしてゐるうちに、再び生命保險の話に引戻す機會をつかむ事が出來ます。

專門語禁物

生命保險の話をしてゐる時に外務員が注意す可きは、相手は大概專門的の言葉を理解しないと言ふ事です。相手の知つてゐる言葉を用ゐなければいけません。說明をするにも例を引くにも、相手に親みのある事を選び、親みのある言葉を用ゐなければなりません。養鷄家にむかつては幾箇の玉子が保險料に相當するかを說明して御覽なさい。園藝家にむかつては草木の例をとるのがよろしいでせう。農業家ならば豚や野菜の例がよいでせう。

記憶すべき四箇條

(一) 一般世人は外務員に對し、無作法でうるさいといふ間違つた印象を持つてゐます。

（二）優良外務員は決して無作法ではありません。無作法でうるさがられるやうでは仕事の成績は擧がりません。

（三）うるさがられる無作法者といふのは、相手が少しも興味を持つてゐない事を無暗に喋る人間の事です。

（四）優良外務員は常に明快親切で誰人にも好かれる人です。

第十三章

間接々近

間接法は、相手方の身邊の人が皆熟知の場合には實施されません。又此の方法を執る時は、相手を苛々(いらいら)させない様に愼重に且如才なくやらなくてはいけません。特に最初の會話が大切で、それから引續いてすら〳〵と本論に入る事を心懸(こころがけ)なければならないのです。さうでないと、目的の本筋に入る前に立往生してしまふでせう。言葉を換へていへば、最初の一言が最後の目的迄つなぐ第一の鎖となるのです。

不注意な會話

あなたの體の何處かに惡いところがあるとして、私がそれを直して上る事が出來たら、あなたは勿論私のいふ通になるでせう。如何です？ あなたが財政上の危險に襲はれてゐるとして、私がそれを救濟する事が出來たら、あなたは勿論私のいふ事を御きゝになるでせう。斯ういふやうな言葉は、ほんとに相手の病因を知つてゐるか、又は財政上の危險をほんとに救濟する方法を提供出來なければ無益の會話となります。

あなたは商賣上いろ／＼の危險に面接してゐらつしやるが、私はそれを救濟する事が出來ますといふ様な言葉も、相手が商賣をしてゐない人間だと何等の效果もないばかりでなく、却て害となります。

無關係の會話

あなたが死んだ後でも、奥さんや御子さん達を扶養する良法を知らうと御思ひになりませんか、といふ言葉も、若し相手が獨身者ならば無效です。寧ろその人の老後の爲めに用意する事を勸める方が適當です。

會話打出の上手下手

或大會社に甲といふ外務員がありました。未だ經驗は乏しかつたのですが、某銀行の副頭取をしてゐる知人の契約をとる事に成功し、更にその銀行と取引のある數人に宛た紹介狀を書いて貰ひました。その數人の中に仲買人乙といふ人がありました。

恰もよし、甲は或公開の席上で、一人の美しい婦人に逢ひ、紹介されて互に名をなのると、それは偶然にも仲買人乙の妻女でした。甲は自分の幸運に胸を轟かして、その日から乙に關する種々の調査をし、乙は金をためてゐながら未だ保險契約をしてゐない事、又會社の契約する最高金額の保險を勸めても、保險料の支拂にはびくともしない事がわかりました。

其處で甲は銀行家から貰つた紹介狀を持つて乙を訪問すると、先方は極めて叮重に應接してくれました。甲は先づ、私は先日奧樣に御目にかゝる光榮を有しました。そしてその奧樣の爲めにあなたが我社最高の保險契約をなさるやうに御勸めに參りました。といふ言葉で會話を始めました。次いで會社の優良な事、生命保險の效果、人生の儚ない事などを滔々と述べ立てました。彼は勝利感で胸がいつぱいでした。乙は默つて聽いてゐましたが、突然口を切つて、私は自分の命を保險する氣はあません。御親切は感謝するが考慮の餘地がありません。今日は殊に多忙ですから御免かうむります、といひ捨てゝ立去つてしまひました。

數箇月後、甲は同僚丙に下のやうな話をきかされました。丙は或新聞で金持の仲買人乙が、三人の娘のある妻を離別した記事を讀みました。丙はその仲買人とは面識もないのですが、直に事務所へ飛込み募集に出かけました。給仕に名刺を渡すと、祕書役が出て來て何の用件かと訊きました。丙は重要な用件で且御本人に直接御話すべき事柄であると答へました。祕書役は主人のところへその旨を傳へに行き、間も無く丙は乙の部屋へ通されました。乙は疑深く、何の用事で來たかと無愛想に訊ねました。丙はそんな事には頓著なく、先づおちついて椅子に腰かけ、第一に祕書役にむかつて、詳細の用件を申述べなかつたのは失禮だつたが、それは事柄が主人身上に關する事だからだと釋明しました。それから、公債や株式の賣買の用件でもないといひました。ただその價値を御認めになるなら、喜んで御買入になる筈の三つの記名式證劵を賣りに來ましたと告げました。

さういふ風に切出して、丙は乙に三口の保險契約をさせました。それは將來三人の娘に、月々四百圓宛の收入を與へるものでした。

上手(じやうず)と下手(へた)は玆に至つて歷然としてゐます。外務員甲が極上々の紹介狀を持ちながら失敗したのは(一)最初の接見の下手だつた事と、(二)仲買人の欲しない保險を勸めた事に原因します。外

務員丙は紹介狀を持つてゐない丈甲よりも條件は惡かつたのですが、仲買人の求むるものを推知して巧妙に切出し、最適の保險種類を勸めて成功したのです。

第十四章

診斷

曾て、世界的に有名でありながら、殆ど治療には關係しない醫者がありました。此の人の仕事は、他の醫者の取扱ふ患者の病源を發見する事で、病因がわかると適當の處置を教へるばかりで、患者は元の醫者の手で治療を受るのです。此の有名な醫者は診斷に特別の天分を有してゐたのですが、又研究と經驗によつてその天分を一層深くしたのです。

外務員は診斷家なる事を要す

優良なる外務員は、優良なる診斷家たる事を要します。保險をつけさうな人の財政狀態其他を診斷し、それに對する適當の處置として保險を勸める事が必要です。

活動の範圍

外務員は自分の職責と範圍をきめてかゝる事が肝要です。患者の法律上の面倒などは醫者の關知する處で無いのと同じく、人の病氣を直す事は外務員の職分以外です。但し、外務員は人の財政上の事にも關與する如く、時には肉體にも無關係とは言へない事もあります。例之(たとへば)相手の人の健康が、心配恐怖等によつて害されてゐる事を發見した場合に、醫藥よりももつと有效なる救治法を適用する事が出來るのです。

然し、外務員の直接關與する仕事は、人の財政上の病氣に對して保護し、或は回復させる事です。かゝる救濟は外務員の獨占權であると思つて感謝してよいのです。何故ならば、生命保險より以上に斯る力を持つものは無いからです。

效能

總じて思慮ある人は、現在の事と同じく將來の事を考へるものです。子供の教育の事も考へ、又自分の老後の用意もしなければなりません。之等の目的を達する爲めに、生命保險を擇べば最も賢明ですが、其處に氣がつかないと、宵越(よひこし)の錢を持たない人間が不慮の災難にあふやうな結果に陥るでせう。

深き慮り(おもんぱかり)ある人は、家族の爲めの稼人(かせぎにん)なる自分も、何時かは元氣衰へ、活動意の如くならぬ日

の來る事を知つてゐます。かゝる場合に疾病癈疾保險が御役に立ちます。健康の人と雖も、如何なる出來事の爲めに命を落すか、はかり知る事は出來ません。斯ういふ人に傷害保險が役に立ちます。しかし、それにも増して生命保險は更に大なる效能をあらはす事は今更申す迄もありますまい。

外務員は專門家たれ

外務員は診斷家たる事を要します。卽ち申込人の要求するところが何であるかを知り、それに適合する保險種類を勸めなければならないのです。かくしてこそ保險の眞價は發揮されます。それと反對に、何等特別に頭を働かせず、漫然と保險契約を勸めるならば、その眞價は半分もあらはれません。その上後日解約となり或は契約者を味方とする事が出來ず、かへつて敵にしてしまふでせう。

一生の計

外務員は契約者の一生の計畫に參與する位でなければいけません。そして生命保險が其計畫に役立つ事を說明しなければならないのです。保險の各種類は何れも特質を備へてゐて、一人の人で各種類を契約するのが一番理想的ですが、それ丈の資力が無いとすれば、その人の一生の計畫

にとつて先づ第一に必要なる種類を選擇してやらなければなりません。而して後日餘裕が出來たら、順次他の種類に及ぼすのです。

完全なる保護

契約人は、實は未だ充分で無いにも拘らず、自分はすつかり保護の手段を講じ盡してゐると信じてゐるものです。例之遺産を貰ふ事があるとして、その相續税の準備が無いといふやうなものです。又自分自身は保險されてゐても、妻子の爲めに所得保險をつけ、母や姉妹或は多年勤續の奴婢の爲めに年金を買つてやるに至て始めて完全なる保護といふ可きです。

第十五章

驅逐と誘引

自動車を賣る人が、客にむかつて次の如き口をきいたと想像して御覧なさい。

自動車の眞實

此の車を御買ひになるなら、車の代價を支拂ふ丈で濟むと思ふと大間違です。どうしてどうし

て、此の車を持つてゐらつしやる限は銀行から御金を引出す事は止む時がありません。遠方迄走らせれば走らせる程ガソリンが澤山入ります。ガソリンの値段も近年めつきり高くなりました。護謨輪が駄目になると、取替るのに莫大の費用を要します。修繕費は年中かゝるし、車體の塗替も必要です。腰かけの敷物も取替なければなりません。車庫が無ければ借賃がかゝるし、運轉手を雇ふと法外な給料を拂はなければなりません。又あの連中と來たら、コムミツションをとる爲めに無駄な修繕をやつたり、何の足しにもならない改良を加へたりします。そればかりならいゝのですが、友達を乘せて驅廻つたり、果ては醉拂つて操縱し、車を滅茶々々にしてしまひます。そんな運轉手を雇はないで自分でやるといふ御考でせうが、先づ運轉の稽古をする間に車を壞してしまふでせう。さもなければ往來の人を轢いて賠償金をとられるに違ひありません。時には亂暴者に車を傷つけられる事もありますし、盗まれる事もあります。だから萬一此の車を御買ひになるなら、自動車保險と傷害保險をつける必要があります。

右の言葉は總て眞實です。けれども、斯ういふ事を言つて果して自動車を賣る事が出來るでせうか。そんな不吉な事を口にしないで、もつと客の心を引く言葉を並べる方がよいでせう。車のスタイル、馬力、乘心地のいゝ事、滑走の具合、器械の新様式などを吹聽するか又は一家の人の

健康上よろしいとか、時間と勞力の節約になるとか、さういふ方面の事を話すのです。

萬一、客の方から自動車事故に言及したならば、下の如く答へては如何でせう。

何を仰るのです。人間にとつて一番危險なのは寢床です。何故ならば、多くの人の命を落す場所は寢床です。これは冗談ですが自動車の事故は、自動車に乘つてゐる人よりも乘つてゐない人に多いのです。乘つてゐる方は安全大丈夫と思つて下さい。

生命保險の場合も同じです。

生命保險の眞實

あなたは御長命に違ひありませんから保險料は永年かけ續けなければなりますまい。その爲めには贅澤は控へ、必要な品の購入も見合せなければならないかも知れません。つまり、遠い將來に起る事の爲めに、現在必要な金の中から保險料を拂はなければならないのです。

契約人は此の言葉の眞實である事を知つてゐます。こんな事を言つては契約は出來ません。それよりも更に大なる眞實卽ち生命保險の價値を說明し、契約する事によつて多少の犧牲を拂ふかもしれないが、保險の效果は些少の犧牲とは比較にならない程壓倒的に大きい事を說かなければいけません。

效果を說け、罰を以て脅かすな

むかし、牧師は人々に敎を說くのに、神の怒の怖ろしさを持出して脅かしたものですが、今日では善事をなして喜びを感ずる事を強く主張します。宗敎に於てさうであるやうに、人事百般の事も罰を以て脅かすよりも、よき事をすればよきむくいのある事を說く方が遙かに有效です。生命保險にしても、契約者を取扱ふ事慈母小兒に對する如くでなければいけません。苦い藥を飮ませるお醫者でなく、お土產を持つて來るサンタ・クロオスのやうでなければならないのです。外務員は、貧しき者に資本を與へ、寡婦や孤兒に慰安幸福を與へ、子供に敎育を與へ、若者に商賣を與へ、事業を永續させ、共同の利益を強固にする使命を帶びてゐるのです。此の偉大なる功德のある生命保險の興味を起させるには、死ぬ事なんか口にせずに說明する事が出來る筈です。

第十六章

機智、諧謔

機智諧謔の中にも鋭どいのと柔かいのがあります。外務員の用ふ可きは勿論後者です。人の意

表に出るもので且人を傷つけない事を條件とします。

世の中には色盲もあります。音痴もあります。それと同様に滑稽諧謔の味を解さない人もあります。か丶る人は不幸ですが、さりとてその人を咎める事は出來ません。彼等と雖も、熱心に精進すればその缺陥は補はれます。機智諧謔は大なる武器です。しかし之を缺く者も熱心にやれば敢て劣りません。

但し、何といつても契約人に樂しい機智諧謔を以て興味を起させるのは、頭からむづかしい理窟をいひ出すよりも有利です。蠅をつかまへるには酢よりも蜜の方が有力です。人は涙よりも笑を喜び、理窟よりも諧謔を好みます。

警句

すぐれたる外務員の著書から左の警句を拔出しました。

婦人は保險を好むか? 寡婦は好む。

生命は不確實なり。生命保險は確實なり。

人の死はあらゆる事を失ふ。その時保險の眞價輝く。

何故そんなに保險の外務員は多勢ゐるのですか? 吾々は死と競爭してゐるからです。死と

いふ奴は無數の外務員を驅使し且その連中は不眠不休なのです。

可愛らしい子供の衣服や動作は家庭の注意不注意の尺度です。

哀れな孤兒は親が保險契約をしなかつた事を示すものです。

死に對して生命保險は大競爭をやつてゐる。死と人間のかけくらべ。

罪なき詭計

相手の人が何處にも契約してゐないのを知りながら、何處の會社と契約して居るか、どの位の金額の契約してゐるかと質問するのは、罪なき詭計の一つであります。熟練した外務員は、斯ういふきつかけを作つて結局物にしてしまふのです。

或外務員が商人甲を訪問し、その人と商賣敵の乙が火災保險をつけて置かずに店も品物も燒いてしまつた話をしました。しばらくして甲はつぶやきました。乙といふ奴は馬鹿だと。これは外務員の待つてゐたきつかけです。一體あなたは生命保險はどの位契約してゐますかと聞きました。甲は保險は嫌ひだと答へました。外務員は別段保險契約を勸めず、先約があるからと稱して立上りながら、實に乙は馬鹿でしたとたつた一言いひ殘して辭去しました。その一言は甲の心に深く殘りました。その次に訪問した時、甲は進んで契約を申込みました。

確實性

生命保險の有する確實性は何よりも尊いのです。それなのに多くの人は、不確實とは知りながら單に掛金が安いといふ丈の理由で保險類似の共濟組合に加入します。最も安い保險が最もよい事はいふ迄もありません。その上に確實ならば申分は無いのです。

募集補助カアド

募集補助カアドを作つて置く必要があります。機智諧謔の類句集のやうなものもいゝでせう。それを巧妙に利用すれば契約勸誘の役に立ちます。

適當なる說明

人にむかつて、あなたは奥さんや御子さん達を何時迄保護なさる御積りですかと聞いて、その返事が自身の生きてゐる限りといふのであつたら、直に下の如く斬込むのです。あなたの命のある限りですつて？　さうではないでせう。奥さんや御子さん達の命のある限りでせう。

又人が、契約をするとどの位の出費になるかと質問したら、わかりません、會社は第一回の保險料を頂く事は確實ですがそれから先はわかりませんと答へる可きです。或は、それは出費ではありません、貯蓄ですと答へる可きです。又は、それは貴方にとつては少々の出費になるかもわ

かりませんが、奥さんや御子さん達にとつては一錢も無駄にはなりませんと答へる可きです。

樂しき冗談

若しも相手が、保險をつける事は家内と相談の上にするといつたら、奥さんと御相談なさるよりも保險の値打を知つてゐる寡婦さんと御相談なさる方がよくはありませんかとふざけても差支ありません。

若しも相手が、保險契約には妻が不贊成だといつたら、保險金を受取るのは人の妻では無く、寡婦であるといつても差支ありません。

若しも相手が、保險は不必要だといつたら、救貧院を御覽なさい、あそこにゐる人達はみんなそんな事をいひました、しかし今では後悔してゐます、病院に行つて御覽なさい、病人はみんな保險をつけて置けばよかつたと言つてゐます、と答へるのです。

保險嫌だといふ人にはその日の新聞を見せて御やりなさい。病人、不慮の災難、金持が失敗して自殺した記事、事業の手違等あらゆる事が出てゐるでせう。卽ち保險の必要が記事となつてあらはれてゐるのです。

生命保險證劵は牛乳よりも葡萄酒に似てゐます。古ければ古い程よいのです。それ故、舊契約

を解約して新契約を勸める者があつたら警戒する必要があります。或人が植木屋に並木の老樹を切つて新樹と植替る方がよいといはれました。その人は熟考の末、老樹はそのまゝにして新樹を植ゑました。しかも注意を與へた植木屋には頼まずに、他の植木屋にさせました。

繪畫の力

眼に訴へるのは耳に訴へるよりも效果があります。

奉仕

百人の訪問者の中の九十九人は何かを求める人です。しかし、外務員は百人中のたゞ一人です。求めるよりも利益を與へる事に奉仕するものです。

信條

終りなき働き。これが外務員の信條であります。

第十七章

人の性質

自分の境遇に滿足し切つて居る人に家族や事業を完全に保護する保險を勸めるのは容易であります。その人は完全の道に導いてくれと進んで希望するでせう。

けれども、其の場合に外務員は、あまり自慢をしたり、自分の會社は他の會社に絕對に勝ると威張つたり、無遠慮に他社の惡口をいつたりすると、人はかへつて迷を起し、疑惑をいだき、外務員の言葉を信用しなくなる傾があります。

へまな方法を避けよ

勸誘上統計を利用するのも一方法には違ひありませんが、乍殘念多くの人は之を好まない風があります。

高尙な理論で人を說くと、聽く人はいかにも傾聽してゐるやうに見えますが、實は單に耳を傾けてゐる丈で、話の本筋を聽取つてはゐない事が多いのです。

無味乾燥にして複雜な專門的說明よりも寧ろ人の感情に訴へる方法の勝れる事は屢々實際經驗によつて示されます。

佛蘭西の大小說家デュマが或人に就て斯う書いてゐます。

彼の思想は無意識に活動してゐる。頭腦よりも先に思想が動く。その思想は頭よりも心から

ほとばしり出るのだ。

外務員は此の心からほとばしり出る思想に暗示を與へる事が肝要です。

素人に學ぶ可し

紐育の新聞に出た下の一文は智識階級の素人の意見として面白いものです。

若しも私が生命保險の外務員ならば誰にでもわかる言葉で勸誘し、わかりにくい言葉などは一切使はない。世間の外務員は、死亡表だとか生殘表だとか、生存保險だとか、いろいろわかりにくい言葉を使ひ、その結果相手方は疑を起す。人として自分に納得出來無い事に對し何となく不安危險を感じるのは當前である。だから先方の知らない事は話さない方がよい。そんなら生命保險をどういふ風に說明すればよいかといふに、私ならば說明なぞはしない。人が保險契約をするのは說明の爲めではない、理由なんか考へずに契約するのだ。不確實な生命を少しでも確實にする爲めに契約する丈の話だ。人の命は最も貴重な所有物であると同時に事業に對する資產に等しく、しかも何時なくなるかわからないものだ。だから此の生命力の一部を大切に蓄へて置く事は人間の義務である。人は命の貨幣價値を認める。私が外務員ならたゞ此の點丈を力說する。

例を示せ

相手が、妻と相談するから待つてくれと言つたら、其の場に議論をしてはいけません。そんな事をすると相手の反對意志を強くしてしまひます。それよりも人生に於ける豐富なる實話を例として話す方がよいのです。

愼重なる良人

妻が反對するから保險契約をしないと主張する人の注意を引く爲めには次のやうな話をしてもよいと思ひます。

甲なる人がありまして、妻さへ承知すれば契約するといひました。ところが其の妻なるものが頗る頑強です。主人は一度も病氣をした事が無いとか、主人の死によつて金を受取るのはいやだとか、娘にピアノを買つてやる方がよいとかいつて反對するのです。不幸にして甲は急病で死にました。保險嫌の妻と子供は家具の外には財產も無く、働く術は勿論知らず、結局他人の厄介になる外爲方のない狀態に陷りました。

偶然外務員はその家を訪れました。すると、つい此間はけんもほろゝの挨拶をした妻も悲歎の涙にくれながら、何故亡夫が保險に入るといつた時に反對したか、自分のやうな馬鹿な女

は無いとかき口說くのです。そこで外務員がいふには、奧さん、あなたの旦那樣は乍失禮あなたよりも賢明でした。先日あなたは反對なさいましたが、御主人はこつそり壹萬圓の契約をなさいました。會社は明日にも保險金を御屆け致します。

命の親

或外務員が或人に勸めて多額の保險契約をさせました。その後契約人から次のやうな手紙を貰ひました。

拜啓陳者先般商用にて巴里に參り候處腸窒扶斯に罹り入院の餘儀無き不運に遭遇致候一時は殆ど絕望の狀態に陷りし程に候ひしが其の間小生の心に一脈の安心有之候は貴下の御勸誘にて生命保險に加入し居れば妻子將來の衣食住の心配無しといふ一事に候此の安心は小生に勇氣と希望を與へ最も危險狀態にありし時と雖も心自ら安らかなるもの有之候ひき其の後不思議にも次第に元氣回復し只今は每日快方に向ひ居り語を強めて申さば小生の命をとりとめしものは貴下の御勸誘にて契約したる生命保險の力かと愚考感謝此事に御座候

農場の救濟

或る農夫が三週間も躊躇した後でやうやく壹萬圓の契約をしました。彼は田地を抵當にして金

を借りてゐたので、それに備へる爲めに契約せよと勸誘されたのです。第一回の保險料を拂つたばかりで彼は死にました。壹萬圓の保險金によつて借金は整理され、妻子は農場を失はずに濟みました。

半分のパン

或る外務員がその取扱つた被保人の死んだ時に、下のやうな話をしました。

あの人が解約するといふのを無理に思ひ止らせたのは今年の春の事でしたが、結局半分減額してしまひました。その當時あの人は自分は長命に違ひないから保險は損だと言つてゐました。ところが數ケ月しかたゝない今日、あの人は死んでしまひました。しかし、私が極力解約防止に努めたおかげで半分丈でも契約の殘つてゐたのはまだしもの事でした。パンは半分でも無いよりはましです。

一斤のパンは半斤のパンに勝る

或人が保險契約をした後で、金額が多過(すぎ)て掛金が苦しいから半分に減額するといふのを、關係外務員は極力勸說してやうやく思ひ止まらせました。約半年後に被保人は死にました。一斤のパンは半斤のパンよりも價値があります。

現金と保険

或人が死んで、未亡人は現金二十萬圓と保険金十萬圓を遺産として受取る事になりました。此の保険は死亡卽時拂の種類では無く、その後年々一定額を支拂ふものでした。但し受取人の希望次第で一時受取に變更する事も出來るのでした。

親類の人達は一時受取に變更して、有利に運用した方がよいと勸めましたが、未亡人は賢明な人で承知しませんでした。折角亡夫が種々考慮の結果定めた保険種類を變更する事は夫に對して濟まないといふのです。

それで、毎年一定の保険金を受取つてゐましたが、間も無く貳拾萬圓の現金の方は運用を誤つて元も子もなくなしてしまひました。たゞ殘るものは年々受取る保険金丈になりました。

此の話は保険は現金に勝るといふよき實例です。

保険は何よりも勝る

或有名な實業家が極めて興味深い保険契約推薦狀を書きました。長文ですから全部を揭げる事は見合せますが、概略は次の通りです。

友人某氏には夫人の外に二人の令息と一人の令嬢有之候、その各々に夫々相當の資產を殘し

度しと願ひ居られ候が先づ財産を四分し之を信託する考を起され候、乍然此の方法は家族の人々をして自分達を信頼せざる爲めの方法ならんと邪推せしむる惧ありて實行を躊躇せられ候、その結果生命保險四口の契約をなし各々を一口宛の受取人とし永らく迷ひ居られし問題に最後の解決を與へられ候。

ヂョンスタウンの洪水

千八百八十九年ヂョンスタウンに大洪水がありました。下に掲げるのは此の悲劇の中の出來事です。

ハムと呼ぶ若い健康な保險外務員が自分の債務辨濟の爲めに至急金子が入用なので、不心得にも多年繼續してゐた保險を解約しました。又近いうちに新規の契約をするからよいと考へてゐました。

恰も彼が取扱つた契約の保險證劵が出來上つたので、これをポケットに入れてヂョンスタウンへ出かけました。ヂョンスタウンは岡の間の狹い谷に在る町です。町の上の方に大きな貯水池がありました。

ハムが其處へ行つた時、此の貯水池の堤が切れて町は水びたしとなり、住民は押流されまし

た。

若しハムが其地へ行く事一日早いか一日遲かつたならば間違は無かつたのですが、彼は全く不運でした。他人の爲めにわざ／＼屆けに行つた保險證券を胸に抱いたまゝ溺死體となつて發見されました。

ハムの妻は夫を失ひ、あまつさへ契約は解約されてゐたので無一文となりました。

此の話は解約の不利を物語るものです。

人類

感情を持たない人間がゐるなどゝ考へてはいけません。恐る可き犯罪人でも人たる以上は感情を持つてゐます。

或男が子供を誘拐しました。子供は幸ひに救はれましたが犯人は逃げてしまひました。探偵は長い間犯人の情婦の家の附近に張込んでゐました。しかしなか／＼つかまらないので遂にはあきらめようと思ひ始めましたが、恰度その時犯人の情婦が赤坊をうみました。或嵐の夜、犯人は一目なりとも赤坊の顔を見度いと思つて忍んで來て、たうとう捕縛されました。

人は誰でも感情を持つてゐます。その感情に訴へて契約を勸誘す可きです。

第十八章

金言

金言は議論ではありません。眞理を力強く言ひ現はすひとつの形式です。説明の一様式です。

金言の眞實は絶對のものではありません。だから餘り深く信じるのは危險です。その適用には制限が必要です。例之(たとへば)「正直は最良の政策なり」といふ言葉は、生命保險の外務員にはあてはまりますが詐欺師にはあてはまりません。「改むるは遲からず」といふ言葉は多くの場合眞實ですが保險の場合には如何でせうか。保險をつけて置かなければ、病氣や死といふ取返しのつかないものが邪魔をして、後日心がけを改めても旣に及ばない事が多いのです。

廉價なる忠告

「忠告は廉價なり」といふ金言があります。忠告は價格無き價値を有するものです。それなのに何故廉價なりといはれるのでせうか。その理由の一は費用が入らないから廉(やす)いといふ觀念が伴つてゐるのです。又、無智な人間は惡い忠告をします。これも忠告は廉いと稱される一原因です。

良き忠告も時には拒否されます。その爲めに何の效果も現はさないので廉いと見做される事もあります。又、良き忠告と雖も屡々誤解され、その結果却つて害となる事もあります。

よき忠告と惡い忠告

生命保險の外務員は、經驗觀察及び他人の忠告によつて自己を練磨します。此の場合、よき忠告と惡い忠告とをはつきり區別しなければなりません。

例之或外務員が、よき勸誘方法を考へて成功し、これこそ唯一の方法であると思ひ込んだと假定して下さい。その人は後進者にも其の方法でなければ駄目だと教へるでせう。しかし、斯かる忠告は安物です。

保險勸誘には無數の方法があります。その總てが獨特の效力を持つてゐて、一が他よりも絕對に勝るとはいひ難いのです。又或人には適當でも、それが必しも萬人に通用するとはいへません。だから、若しも先輩の忠告がよさゝうに思はれたら、兎に角一度は試して見る事にして、果して成功したらそれを自分の方法の中の一に加へるがよいのです。多くの武器の中の一つとするのです。

無資格の忠告者

一寸成功を收めると、直ぐに保險の事なら一切わかつた積りで、保險勸誘に關する册子や、保險論保險數理などを生嚙り(なまかじ)し、又保險會社の財政方面に關して迄も手を擴げて鵜呑みにする人があります。かういふ人は專門の學者でも無く、眞の數理家でも無く、又實際方面にも左程の知識も無いので、忠告者としては無資格です。此の種の人の忠告は寧ろ危險です。

或人が、無資格なる教師は寧ろ無い方がよいといふ意味の諷刺詩を書きました。第一行には、如何にすれば金儲が出來るかを得々と語る人間を描き、その最終句には下の如き皮肉を浴(あび)せかけました。

一週の後、その人に逢ふと、

彼は私の袖を捉へ、何か喰べさせてくれと言つた。

次には、自動車の運轉を自慢する人を描き、次の如く嘲笑してゐます。

彼の自動車は盜まれた、

何故盜まれたか、彼は知らない。

最後の章には「成功の七つの道」が說いてあるが、それも次のやうに結んであります。

その天才者も心疲れ

救貧院の冷めたき床に死んだ。

そんなら眞理を求める者は如何したらよいのでせうか。先づ常識を涵養し、眞に權威ある人の忠告を聽くのが肝要です。さうすれば、よき事と惡き事をたちどころに區別する事が出來るやうになります。

愚かしき助言

曾て或古參の外務員が後輩にむかつて、彼の敎へる言葉を暗記させ、之を實際に用ゐよと勸めてゐるのを見た事がありますが、かういふ敎へ方はいけません。獨創、自由、熱情を奪つてしまふ惧があります。鸚鵡ならばそれでもいゝが、人間には不向です。それよりも先づ自分の言はんとする事を熟慮し、或は紙に認めて草稿を作る事もよいでせう。これを心の中にたゝみ込み、扨て募集に出かけたら、自由な心持で話すのです。前以て整へてある思想は言葉となつて流露するでせう。

著者は學生時代に論理學が大好きで夢中になり、年中三段論法式の口をきいてゐました。しかし實業界に身を投じてから此の癖を捨てました。論理學は物事を考へる時の助けとはなつても、實行界に於てはそれが三段論法にあてはまるかどうかを考へる暇がありません。それよりも當面

の事に熱心になれば、事は自ら解決されるのです。

或人が熱辯を振つてゐる時に、ふと思想の連絡を失ひ、言葉が途絶えて一座寂とした事がありました。なか〳〵後が續かないので、そのまゝ降壇するのではないかとあやぶまれました。しかし、その人は沈着に考へ、脉絡がつくと、あとは千里を行くが如く雄辯に終り迄つゞけました。その後此の辯者の講演を度々聽きましたが、つまづく事は二度とありませんでした。若しも演壇で立往生をしかけた時に、沈着な態度で思想を纏める度胸が無かつたなら、演說家としての名聲は傷つけられたでせう。けれども、その人は此の危機を脫して成功しました。その危機に陷つた原因は、記憶の度を失つたのでは無く、思想の方向が思はぬ方へ外れたのでした。

援用

上記のやうな話が保險外交に如何なる關係があるでせうか。無經驗の外務員は多くの人ふらいろ〳〵の助言を受けます。衣服の事から訪問の態度、會話の切出し方、保險の勸め方、申込書に署名捺印させる方法、話の切上げ方、退出の時機等。

之等の先輩の言を用ゐるのは結構です。しかし、それは募集の手段で、目的ではありません。建築物では無く、建築の爲めの足場に過ぎません。或場合には邪魔物です。若しも外務員がネク

タイの結び方を氣にし、會話の音調を氣にし、態度は重々しくするか親しげにするか、頭を下げようか握手しようかなどゝいふ事ばかり考へてゐると、注意は橫道に外れて、肝心の相手の上に集中されなくなります。そんな事を氣にするよりも、よき助言を咀嚼して自家藥籠中のものとし、末節に拘泥せず、自分自身を立派に築き上る事が必要です。さうすると、思想は統一され、論理學を學んだ人の如く正しく判斷し、又成功せる雄辯家の如く、言はんとする事を適確に把持して困惑する事が無くなります。

反對の助言

曾て著者がゴルフを始めた時、權威ある敎師をとつてその技を學びました。しかし、一人前になる前に別の敎師に習ふ事になりました。新規の先生も上手な選手でしたが、敎師としては敎へ方が下手でした。おまけに最初の敎師と後の敎師とは、それ〴〵違ふ事を敎へてくれました。その結果上達の機を失ひました。又、實際には人に勝れてゐても、それを說明する能力を缺く人もあります。偉い學者も、敎師としては不適任な事もあります。それ故外務員は、うけ入れる可き助言と、然らざるものとを見分けなければいけないのです。

第十九章

富者

富める者には貧しき者よりも一層保險の必要があるといふと詭辯のやうに思ふ人もあるでせうが、一應說明致しませう。

貧しい者に生命保險の必要を說くのは容易です。富める者はなかなか說得出來ません。あなたは理財の能力が無いから保險をおつけなさいとは言へませんし、あまり正直な事をいふと怒らせてしまふでせう。

あてにならぬ運

金を守るよりもつくる方がやさしい。富は翼を持つて居て飛んで行つてしまふものです。若くして金を儲けた人が、晩年貧しく死んでゆくいたましい例は世間にざらにあります。長生すれば恥多しといふ諺のやうに、多くの長壽者が、晩年人の厄介になつて暮らす實例は到るところにあります。あの人は金持だといはれてゐる人が、存外生命保險の外には何も遺族に殘さなかつたと

いふ實例も頗る澤山あります。それにも拘らず成功者は自信が強く、どんな事にも自分は負けないと過信して居るものです。かういふ人に對しては、運命は變り易く、富者も一度恐慌時代にあへば不測の變に打のめされる事を說き聞かさなければなりません。

效能

富者にむかつては、生命保險は絕對に必要だから是非とも加入しろと勸めるよりも、加入して置く方がよいでせう位の調子で當らなければいけません。生命保險は安全な投資です。殊に有價證券不動產等の價格が安定を缺く時代には、遙かに之にまさる投資物です。ひとつの籠に澤山の卵を詰めるのは危險です。分けなければいけないのです。

富者に適する所得保險

萬一、尋常終身保險がいけなかつたら、所得保險を勸めて御覽なさい。家族の各々に一定不變の收入を與へる事が出來ます。

保險證劵は現金に等しい

生命保險が相續稅や借入金の決濟に役立つ一事でも、富者の心を動かすに充分です。富める者にとつて現金の値うちが偉大なる事は經驗上わかつて居る筈ですから、之を論じるのは興味を起

させる一方法です。

現金とは何であるか

現金とは使はうと思ふ時に即座に役に立つ資財です。

故人マアセラス・ハアトレイ氏は大きな土地を死後に殘しました。彼は投資物をよく擇んだ人でした。しかも投資を安全にする爲めに、常に現金を所持する事を忘れませんでした。これが彼の成功の根本義です。一見甚だ當前のやうな事で、實は富者と雖もなかなか實行し能はざる事です。富者には富者の誘惑があつて、いろいろの投資に手をひろげ、現金は存外乏しいものです。借金をしても利を生まうとするのが人情です。

保險の利用

いくら金持でも何時かは死にます。死んだ時に、十萬圓の保險がつけてあれば、未亡人や子供は現金の缺乏に困る事はありません。

養老保險ならば生前滿期日にまとまつた現金が入ります。

不時に現金の入用な時は、證券を擔保にして一時借入の手段もあります。

保險をつけて置けば後顧の憂が無くなりますから、多少冒險的の事も敢行する事が出來ます。

保護

金融市場逼迫の場合には、富者と雖も即時に融通のつかない事があります。その場合に保険が役に立ちます。

種々の方面に投資する人は、家や事務所を抵當にして金を借入れます。その抵當物を失はないやうに保護するのも生命保險の役目です。

信用は商賣の靈魂です。事業家は大概借入金を有してゐます。それは金が無いからでは無く、低利で借りて有利に廻す爲めです。これを保護する爲めに保險をつけて置く必要があります。それでなければ危險です。

安全守護

どんな人でも將來の成功を確保する事は出來ません。だから、富者と雖も後日の備をする事が必要です。富者にとつては保險料などは輕い負擔です。それなのに保險をつけないとは、何といふ愚かな事でせう。

大資本家も大企業家も保險の必要を認め、多額の契約を結んでゐます。亞米利加では數百萬圓の契約をしてゐる人もあります。かゝる人こそは、眞の實際家、眞の經驗家で、正確なる判斷を

持つ人といふ可きです。他の人々も之等の例に倣ふならば賢しといはれるでせう。

土地に投資してゐる人の如きは、急に現金の入用にあつても、不動産の處分が思ふに任せず、遂には損失を蒙る事が多いやうです。有價證券も種類によつては、同一の結果を見る事があります。

砂漠の中では金よりも水が尊い。出火の際には一杯の水が數千萬圓の財産をも救ふ事があります。現金の効能も之に等しく、危急の際に大資産を保護する役目をつとめます。保險證券は卽ちそれに相當するのです。

第二十章

婦人の爲めの保險

若しも富める男子に保險が必要ならば、富める婦人にも同様に必要です。否、男子よりも婦人には一層必要です。何故ならば、婦人は兎角危險な誘引に陥り易く、だまされて下らない事業に財産を蕩盡し易いから、何よりも安全な投資物卽ち保險に信頼するのが、一番間違ひのない事です。

婦人は有能なれど無關心

婦人も男子と同等の能力を持つ事は疑もありませんが、現在の狀態では、通例財政上の事には興味を持たず又貯蓄投資の如き仕事には無經驗です。それ故危い事業などには手を出さず、生命保險を利用するのが賢明です。

加之（のみならず）、子供の爲めに月々の所得を保證する保險契約も必要です。或は又親戚や召使にも惠を及ぼす意味で保險契約をする事も必要です。又教會其他の慈善事業に寄附する目的で保險契約をする事も極めて結構です。

婦人の義務

富めるも貧しきも、すべての婦人は此の問題に興味を持つ事が肝心です。夫（をつと）が資產を持たず、殊に子供の多い婦人は、主人が保險契約をしてゐるかどうかに留意する義務があります。夫に保險をつけさせるのを躊躇する婦人もありますが、知識階級の婦人はそれが婦人の權利であると同時に義務だと自覺しました。左記の手紙はアウストラリアにゐる人から紐育の保險會社に寄越したものです。

小生が今回生命保險の增額をなさんとする特別の理由は妻の熱心なる勸說の故に御座候妻は

永き別居の寂しさに生命の不確實なる事を一層深く感じ自分並に子供等の爲めに適當なる用意なくしては不安に不堪と申出で小生も尤の事と存候

身内の者の爲めにも必要なり

獨立生計を立てる婦人にしても、子供があるか又は他に扶養しなければならぬ人があるなら、生命保險が必要です。此の場合には養老保險がいゝでせう。死ねば保險金は身内の者に渡り、長生すれば、老を養ふ事が出來ます。又養老保險滿期の場合に之を終身年金とする事も出來ます。獨身の婦人で一切係累の無い人も、餘裕があるならば友達や知己の爲めに保險をつけて御置きなさい。

婦人の職業としての保險

婦人外務員は家庭の主婦を通して主人を說得させる事が出來ます。若しも熱心にやる氣があり且相當の訓練を經るならば、男子に劣らぬ成績を擧げる事が出來ます。その實例を示した婦人も澤山あります。

婦人も男子と同樣な職業の自由が認められて來た今日、生命保險界に於てもその活動の舞臺を提供しました。

或會社では婦人部を設立しましたが、理論上からも實際上からも、そんな差別を設ける必要はありません。大きい會社では各地に代理店を有し、又駐在外務員を置いてゐます。婦人も男子と同じく活動する事が出來るのです。

生命保險募集に從事する婦人は、自重心に富み大なる希望を持つてゐます。責任感強く、高尙なる理想を抱いてゐます。勤勉で、加入者に奉仕する事を目的とします。斯くて生命保險外務員の名聲を高める事に少なからず貢獻してゐます。

第二十一章

妻と寡婦と

昔は、人妻は生命保險を嫌ひました。今は之に贊成します。外務員諸氏の中で、今日なほ保險に對して偏見を持つ婦人に出會したら、之を說破する爲に次の手紙を材料として御覧なさい。

意氣消沈せる外務員宛の手紙

拜啓陳者貴下御取扱契約人の妻女にて契約締結に反對の方有之之を說破する事困難なりし實例

有之候はゞ拜承致度候
小生の見解を以てすれば、斯る事は左程困難とは不被存候
萬一保險申込に反對する妻女有之候はゞその良人に左の如く御申聞相成ては如何に候や
御令閨の御考如何は別として貴下の御意志にて御とりきめ被遊ては如何に候や貴下は總ての御關係事業を御令閨に御相談の上で御決定相成候や
それにてもなほ拒み候はゞ許しを得て妻女と御面談可然候生命保險を正しく說明する事を得ば誰人と雖も容易に理解贊成する事と存候
妻女の反對は主として死に關する聯想の爲めと被存候果して然りとすれば生命保險の性質を詳說して納得せしむる事肝要に御座候
萬一妻女が迷信家にて良人が保險をつけると早死をすると考へ居る如き場合には勸說は困難に候斯る迷信は正當の理由を有せざる爲め說得一層難儀に御座候乍然眞理は更に力強きものなれば遂には說破する事を得可き筈に候ましてや生命保險は醫藥の如く壽命を延長するものに御座候
又時に單なる誤解に基づく反對の出る事も有之候斯る場合は數分時にして正當なる理解を得せ

しむる事容易と存候
生命保險の恩惠に浴する妻女等が之を嫌ふは一奇に御座候
保險會社は每年巨萬の契約保險金を支拂居り候が曾てその支拂を拒絕したる妻女ある事を傳聞したる事無之候反對に良人が保險契約をせざりし事を恨む未亡人は數ふるに遑なき程に候
又多くの貧しき女等が良人の生前に保險契約を爲す事を妨げたる我身の愚かさを思ひ知り自責に惱めるは數多く有之候同時に又妻の反對にも拘らず契約したる亡夫に對し感涙にむせぶ幾多の寡婦を世に見受け候
家族の將來の爲めに備ふるは各人の義務に候それ故妻が良人の保險申込に反對妨害するは一種の罪惡に御座候生命保險金を受取りてその額あまりに多しとつぶやく寡婦は世に無之候又良人の死後書類整理をなし保險契約の解約となれるを發見して喜ぶ未亡人も世に無之事に候
生命保險に妻女が反對するは感傷的の心持に出るもの多く又斯る心持を起すは外務員の勸說巧妙ならざるに因る事多く候それ故外務員はこれ等の事を熟知し妻女等の反對にあはゞ卽座に誤解を氷解せしむる用意無かる可らざる次第に候正しく物事を考ふる婦人は生命保險を贊する筈に候若し良人が保險申込を拒むが如き事あらば妻は之を咎む可き筈にて良人が保險契約をなさ

ば感謝する事疑も無之候萬一良人が此の義務を怠り家族の將來の爲めの用意を爲さずして死するならば社會人として又家庭の人としての名聲にかゝはる事は妻も亦知れる筈に御座候若しも妻女の保險嫌が動かし難きものならば良人が家族將來の扶養の爲めに投資する事も妨ぐるに相違無之候

乍然今や保險に反對する妻女は至極稀と相成り候その反對に生命保險の庇護を受けつゝありとの自覺に慰安を受くる妻女は夥しき數に上れるのみならず女と雖も母として子等の爲めに自ら保險を申込み獨立婦人は親兄弟姉妹の爲めに保險し又は老後の安心の爲めに養老保險契約をなしつゝある實状に御座候

約說

一、十人の中九人迄は妻女の尻に敷かるゝ事無く申込書に署名捺印せしむる事可能なり

二、妻女が反對するならばあく迄も之を說破すべし

三、妻女が頑迷ならばひそかに良人と契約す可し、後日妻女に恨まるゝ事決して無し

第二十二章

最後迄行屆く保險

ゴルフの勝者は遠距離打の出來る人です。所得保險は家族の遠き將來迄保護する保險ですから、最もよいといふ事が出來ませう。此の保險は久しきにわたり、且最も保護を必要とする時に效力を發揮します。

一例を擧げて見ると、或人が二萬五千圓の普通の生命保險をつけたとして、その人が死ねば妻の手には二萬五千圓の金が一時に入ります。此の二萬五千圓を六分の利息で投資すれば、年一千五百圓の收入となります。しかし經驗の淺い女手で、果して安全なる投資を爲し得るかどうかは疑問です。つまらない事に費消してしまはないとも限りません。それ故夫としては、生前保險會社と契約し、死後は會社をして家族保護の任に當らせるのが一番安心です。卽ち受取人の一生涯、月々一定額の支拂をする所得保險が此の役目を果し、總ての危險を防いでくれます。

何故所得保險はもつと流行らぬか

それならば、何故外務員はもつと所得保險を勸めないかといふと、未だ研究不足の爲めか、或は自分自身之に對してしつかりした考を持つてゐないので他人を說得する事が出來ないからでせう。

所得保險勸誘の利益

若も外務員が此種の保險を研究し、その效能を確信するならば、あらゆる機會に勸誘に努めるに違ひありません。それによつて外務員は二重の利益を得ます。一は精神的報酬で卽ち他人の爲めに善事を行ふ事、二は物質的利益で卽ち金錢收入です。

實際、所得保險は他の各種の保險に劣らぬ需要があるばかりで無く、寧ろ他の保險よりも勸誘が容易です。先づ第一に新奇で、第二には人の心に訴へる事強く、第三には他のものよりも最初の楔の打込み安い事です。

例之、或人に所得保險を勸め、受取人たる妻女に月々五十圓の收入のある丈契約せよといふならば、その人は五十圓では不足だから百圓でなければ駄目だといふに違ひありません。其處で外務員は、百圓の收入を生む丈多額の契約を勸める事が出來るのです。恐らく契約人にとつて可能なる丈多く契約させる事が出來るでせう。

普通の一時にまとまつた金額を支拂ふ保險と比較すると特徵がはつきりします。例之五萬圓の保險が必要だと思つても、まあ五千圓にして置かうと思ひ返すのが世間の普通です。それに對して、もつと多く契約させには餘程に努力が必要です。

所得保險だと、契約人は直にその金高の眞價を知り、もつと多くなければ駄目だといふ事に氣がつき易く、別段の議論や說明をしないでも、保險金高を釣上る事が容易です。

保險の一大改革

所得保險の契約者は、普通の保險よりも多額の契約をする傾がある事上述の通りですが、それでも所得保險の件數は他の保險に比して未だ少ないのです。然し近き將來には保險史上に一の革命が來るに違ひありません。而して、現在では信託會社に委ねてゐる仕事を、保險會社丈で完全に行ふ事が出來るでせう。尤も、その場合にも保險會社と信託會社と衝突する事はありません。兩者は互に提携して行くでせう。家族の爲めに貯蓄した人は、それを失はない爲めに信託するに違ひありません。同時に保險會社は、一時的に人を保護する丈で、あとは他の施設に任せて置けばよいといふ理由はありません。最初から最後迄任務を果さなければなりません。

著者の私見

私見を以てすれば、著者が外務に從事するなら、所得保險を勸める事で成功を收めるでせう。萬一、所得保險の手數料は半分だと、いはれても、矢張此の保險を勸める役を引受けます。此の種類の優越を確信してゐるからです。

所得保險に對する誤解

(一)所得保險は他の種類よりも勸め惡い。

右のやうな意見がありますが、實は之と反對です。所得保險の目的は家族保護にあるので、之を勸めるのは容易です。此の保險程人の興味を引くものはありますまい。家族保護の爲めに最もよき種類は、一番強く人心に訴へるものです。

今迄他の保險種類ばかりあつかつてゐた外務員には、暫時勝手が違つて勸め惡いかも知れませんが、少しなれゝばそんな事はありません。

(二)所得保險の保險料は高い。

所得保險の保險料は一時受取のものと種類金額が同じならば同一です。否寧ろ此の種類の方が保險金額が多くなります。何故ならば支拂毎に利息が組入れられるからです。

(三)所得保險は高額保險でなければ效が無い。

いかに月々の支拂保險が少なくても、之を忌避した受取人はありません。他の收入に加へて、少許でも保險金が入るといふのは願はしい事です。

最初に少額の所得保險を契約すれば、それが緣になつて保險好になります。そして次第に重契約をさせる事が出來ます。

(四)所得保險は貧乏人には不向である。

少しの收入しかない人でも、種々の負債を償却する爲めに、普通の保險に加入し、一部は所得保險を擇ぶのが一番悧巧です。

小商人、小農、職工、勞働者も一家の主人として死亡卽時拂の保險に加入する事が必要ですが、遺族は主人の死後も生活を繼續しなければならないのですから、所得保險が何よりも必要です。費消され易い相當の金高よりも定收入となる小額の方がまさつてゐます。

(五)所得保險の出來高報酬は少ない。

これは一番よくない噓妄の說です。所得保險は外務員にも利益です。所得保險は他のものよりも樂に勸誘する事が出來ます。その結果時間と費用が節約され、その上に所得保險の金額は一般に他の種類よりも多いのです。統計が之を證明してゐます。それ故外務員の所得も多い筈です。

（六）どんな種類の保險でも所得保險に變更する事が出來るから、強ひて所得保險を勸める必要は無い。

これは理窟としては正しいけれども、實際上然うではありません。先づ第一に所得保險を勸める事によつて、加入者が考へてゐるよりもつと澤山保險に入らなければならないといふ考を起させます。

第二十三章

如何に多く

或人に保險を勸め、その人の負擔能力の極限迄契約させたと自信して、ひそかに誇つてゐると、他の會社の者が出かけて行つて更に多額の契約をさせるといふやうな事は、屢々經驗するところです。そこで外務に從事する者は、何でもかんでも極限迄契約させる事に努力する傾向があります。此の遣り口は金持相手ならば結構ですが、あまり收入の多くない人の場合には面白くありません。徒らに負擔の過大に苦しませ、希望を挫く結果を招くばかりです。ですから、一番悧巧な

やり方は、契約人の懐都合に適合する丈の契約をさせる事です。過大の契約をさせるよりは過少の方がまだしもましです。何故ならば、過少の場合には後に増額させる事が出來るからです。過大だと減額したり、放棄したりする事になります。

例

例之、或人の財政狀態では、收入の中から極く少しづゝ貯蓄する事が出來るとして、その人にむかつて死後充分に妻子を養ふ丈の契約をさせるのは無理です。却て勇氣を沮喪させる事になります。その人には多額の保險料を支拂ふ能力は無いのです。

或人の妻の生活費が一ヶ年壹千貳百圓かゝるとすれば、その金額を生むには六步に利殖するとしても貳萬圓の保險をつけなければなりません。此の場合には、無理に貳萬圓の契約を勸めるよりも、寧ろ二千五百圓か五千圓位の保險を勸め、それで相續稅や負債を支拂ひ、且未亡人が何か生計の途を見出す迄の一助とさせる方がよろしいのです。

反對に、相手が充分の資力を持つてゐるくせに、二千五百圓か五千圓で充分だといふならば、その人の妻の一ヶ年の生計費は二千四百圓を要するものとして、少なくとも四萬圓の保險契約をさせるやうに、極力說得しなければいけません。四萬圓の保險金を受取り六步に廻せば年收二千

四百圓となつて妻女の生活は保證されるのです。

半斤のパンを輕蔑する勿れ

契約人をつかまへたら、どんな事があつても放さないやうにしなければいけません。少額の保險でも、それが機緣となつて、後日增額を勸める事が出來ます。人は重態の宣告をされると醫者の診察をいやがらなくなります。貯蓄の味をしめると保險にも興味を持つやうになります。ひとつの保險契約をすると、その後は更に他の契約をする氣になり易いものです。

金持も生命保險をつけなくてはいけません。遺產の多寡に拘らず、妻子は現金を必要とします。妻を受取人とする保險は、夫に別れた女の半生を慰め、滿足を與へるでせう。

要求を知つてその計畫を援助せよ

保險の效能の一つは財政上の需用を充足する事です。多くの人は種々樣々の要求を持つてゐます。而して、その要求が何であるか、その要求充足の計畫が何であるかがわかると、之に對して如何なる方法をとる可きかは自ら明かになります。

一例

死亡と同時に給料收入の無くなる人があつて、しかも男女の子供を敎育しなければならないと

假定します。彼の家は抵當に入つてゐます。その外にも種々負債があります。此の人にとつては、妻に月々收入を與へる爲めの保險契約、子供に教育を與へる爲めの保險契約、抵當に入つてゐる不動產を取戻す爲めの保險契約、その外の負債を償却する爲めの保險契約が必要です。乍然、多分全部の要求に應じる事はむづかしいでせう。そんなら此の計畫を思ひ切る外ないでせうか、否。少なくとも此の要求の中最も緊切なもの丈でも契約しなければいけません。そして順々に他のものに及ぶやうにするのです。

七箇條

（一）保險料の支拂へる限りは、いくらでも保險契約をして差支ありません。多過ると いふ事はありません。

（二）保險料の支拂へない程多額の契約をするのは超過保險でよろしくありません。

（三）適當の金額の保險をつけて置けば、收入の途を失つた後も、家族を保護する事が出來ます。一例を示せば、家族が五千圓の收入を必要とする場合に、主人經營の商賣は死後も一千圓の利益を生み、且今迄の投資による利益が三千圓あるとすれば、此の人は二萬圓の保險を必要とします。何故ならば、此の二萬圓の利息を假に五步として年に一千圓の收入を生みますから、商賣の利益

一千圓と投資の利益三千圓と合せて五千圓となり、家族が必要とする生活費と同額になります。若し又收入を生む商賣も無く、利益の擧る投資もしてなかつたならば、此の人は十萬圓の保險契約をしなければなりません。何故ならば、十萬圓の五歩として五千圓の收入を生むからです。けれども、實際に於ては人はそれ丈の保險をつけようとしませんし、又つける事もむづかしいのです。それ故外務員は超過保險をとる危險は少ないともいへます。

(四)これは實際問題で理論ではありません。二人の人があつて財政狀態は同一であるが、一人は他よりも多くの保險を要する事もあり、又或人は必要以上に契約する事もあります。更に又必要である額の幾分の一しか契約しない人もあります。

(五)小口契約をいやしんではいけません。その人とても出來る事なら大口契約をするでせう。寧ろさういふ人に適當なる種類の保險を教へるのが最善の道です。

(六)金持が大口契約を拒む場合には之を逃さず先づ小口の契約をさせ後日重加契約をさせるのが道です。

(七)大口契約を望み且支拂能力のある人ならば、何の躊躇無くその人の爲めに取運ばなければなりません。

第二十四章

休養

身心の休息を得るには、たゞ寝るよりも何か變化を求める方が勝(まさ)つてゐます。絶えず活動する外務員は、爐邊に讀書するのが一番よい休養です。

それならば、どんな本が休養と元氣とを與へるでせうか。

完全なる休養を欲するならば暫く生命保險に關する本とは別れる方がいゝのです。著者は自分の經驗から、休養と共に思想の糧を與へる本を記しませう。生命保險に直接の關係はありませんが、保險從事員にとつて有用なものであります。

ポオル・ヂョオンス

アウガスタス・ビュエル氏著「ポオル・ヂョオンス傳」は面白い本です。

若しも全巻を讀む時間が無いならば、第十四章丈で結構ですから是非讀んで下さい。ポオル・ヂョオンスがセラピスに打勝つた物語です。

ポオル・ヂヨオンスの艦リチヤアド號は砲彈を浴びて蜂の巣のやうになりながら、敵艦セラピスの舷側に寄せて之を占領し、水兵は乘移つてしまひました。その時リチヤアド號は火を發して水底に沈みました。此の劇的光景は左の如く記述されてあります。

リチヤアド號の負傷者を、セラピス號に移すには隨分時間がかゝつた。何故ならば、負傷者は靜かに運搬しなければならなかつたし、端艇は三艘しか殘つて居なかつたからである。幸にも海は靜かにさゞなみも立たなかつた。萬一風か浪があつたならばリチヤアド號は直に沈沒してしまつたに違ひ無い。

沈みゆく船に就てヂヨオンスは後日下の如く書きました。

船にはたゞ死せる者のみが殘つた。彼等の棺としては我が艦を與へた。莊嚴なる墓よ、艦は波のうねりに漂ひ、靜かに海底に沈んだ。帆柱の上の旗はなほ飜つてゐた。先づ船首を逆さまにし、船尾は瞬時空中に高く見えた。リチヤアド號の名殘は遂に征服されず、打破られざりし旗である。

此の種の物語が生命保險の外務員に何を敎へるでせうか。豫期しない機會をつかむ能力です。反對が強ければ強い程成功確實だといふ事です。クロムウエルの如く、決して絕對の反對には遭

過しないといふ事です。

ヂョオンスの船が、どうしてリチヤアドといふ名を得たかついでに記しませう。

ヂョオンスは長い間船を所有してゐませんでした。何とかして一艘手に入れ度いと、常に佛王に願つて居ました。佛海軍根據地ブレストに空しく機會を待つうちに、不圖ベンヂヤミン・フランクリンの著「リチヤアドの暦」を讀みました。その中に斯ういふ句がありました。

汝が仕事をなさんとならば進め

ヂョオンスは直にヴヱルサイユ王宮に赴き、謁見を求めて船を與へん事を王に嘆願しました。フランクリンに感謝の意を表する爲めリチヤアドと名づけたのです。

誰しも此のフランクリンの言葉を心に留め、手紙や印刷物ばかりで保險が出來ると思つてはいけません。自ら進め、自ら行け。

ネルソン提督

メハン氏著ネルソン傳も面白い本です。一讀して、ヂョオンスとネルソンに共通の點を認めます。彼等は機會を迅速につかむ事に於て他の人々を拔ん出てゐます。いかなる危機にも活路を見出しました。二人とも砲火の下に計畫を進展させる機略を持つて居ました。生命保險外務員の生

涯は不斷の戰鬪ですが、此の兩雄の有する如き特性は殊に必要です。

面白い自傳

保險外務員にとつて一番價値のある敎訓は、成功せる實業家の自傳です。玆に列記するものは何れも寶玉の價値あるものです。卽ちアントニイ・トロロオプ、アンドリユウ・カアネギイ、エドワアド・ボツクの自傳です。ボツクに就ては旣に記しました。カアネギイの生涯も深き興味があり、トロロオプの一生は小說よりも面白いのです。本は極めて小册で、少時間で讀了出來ます。トロロオプの父は貧しい農夫でした。母は文學の才能があつて、それによつて家計を助けてゐました。トロロオプは幼時から小說家として世に立たうと志してゐました。貧しき農夫の子は、英國で最も貴族的な學校ハアロオに於て、貴族の子弟に嘲笑虐待を受けました。永年の艱苦、貧困、失意の後で、ロンドン郵便局の吏員となりました。

その間に彼はしきりに書きました。最初は誰も讀んでくれませんでした。一二册出版されましたが、賣れませんでした。やがて時が來ました。彼は名聲と富を合せ得ました。

誰も、トロロオプ程自分の事を正直に書いたものはありますまい。玆に摘出するのは勤勉を示す記述です。

私は自分の仕事を組織立てた。私には義務として書かなければならない日は無かつた。怠けてゐようと思へば怠けてゐられた。しかし私は自制の規律をつくつた。新しい著述にかゝる時は、日記を用意した。毎日自分の書上げた枚數を記入した。萬一怠ける日があると、その怠慢を示す記録が私を非難した。不充分なる勉強の結果が一週間の記録に殘れば、それは我眼をいたましめ、一ヶ月の怠慢の記録は我心を悲しませる。

毎日の仕事はヘラクレスの仕事にも勝る。龜は兎と競走して勝つた。私は、生活に苦しむ多くの作家を知つて居る。彼等の苦しみは約束の時に仕事が出來上らないからである。彼等は新入學の兒童の如く常に苦んで居るのである。

又、中には規律正しい仕事をするのを恥とし、藝術家は神輿に動かされる時ばかり働くものだと考へてゐる人もある。かゝる事を耳にする時、私には何等の響も無かつた。神輿を待つて仕事をする靴屋があるか。それに等しい愚かしさだ。若しも著作家が過食し、暴飲し、無闇に喫煙するならば、それは仕事に毒である。同じ事は靴屋にもあてはまる。暴飲暴食は仕事に毒である。

探檢家と發明家

成功せる探検家や發明家の話も一讀の價値があります。如何にして障害に打勝ち、逆境を切抜けたかを知る事が出來ます。

或人が探檢家ピアリイに、北極に到達する時の感想を訊きました。彼曰く。

私の感動は、何事をか爲さんとして之を成就した人の感ずると同じものであつた。多年の努力の結果得たる成功は、何事にても決心固き努力を妨げる事は不可能であるといふ事を證明しました。

エデイソンも同じやうに不撓の精神の力を說く。

成功の主因は一事に執着する事である。私が達成した總ての事は、他人が失望した時にも希望を捨てなかつたといふ事である。

他の休養

或人にとつては讀書はたいくつです。叉外務員は讀書の時間を多く持つてゐません。けれども、競技にのぞむ運動家の如く、常に用意をして置かなければなりません。讀書を好むと好まざるとに論なく、或時間の暇があつたら、健全なる休養をとらなければなりません。

「働くばかりで遊戯が無いと、子供は怠けものになる」。けれども遊戯と仕事とを混同してはいけません。遊びを仕事の糧としなければいけません。精神を爽快に、身體を健全にすれば仕事は迅速に運ばれ、報酬は多くなります。反對に、怠けて時間を費し、或は不健全な遊びに耽ると、とりかへしのつかない損失を招きます。

第二十五章

成功の要素

上來屢々外務員成功の心的要素が何であるかを記しましたが、玆にはその中で最も重要なものを特記します。忠實と奉仕の念。

又特に加ふ可きは熟練です。

熟練

先年著者が保險外務員の集會に列席した時、鐵道會社の役員と同席しました。多數の外務員が各自の成功に就て物語つた後で、鐵道の人は質問しました。その外務員達の成功の祕訣は何であ

るかと。第一の答は「勤勉努力」でした。一座の總てが之に贊成しました。鐵道の人は質問に對する回答として、それでは不滿足だつたと見えて、一寸當惑した樣子で著者に訊ねました。著者の答は下の通りです。

只今諸君が「勤勉努力」であると答へたのは原因と結果とを混同されたやうに思ひます。「勤勉努力」の必要な事は勿論ですが、しかし、貴下の御質問に對する答としては外務員を仕事に驅るところの動機と、その仕事が如何に爲さる可きかを決する所のものを示さなければ不充分だと思ひます。

外務員活動の原動力は、生命保險に對する信念、活動の欲求及生活上の必要であります。だが之丈では未だ不充分です。之等のものは外務員の活動を刺戟しますが、如何に働く可きかは敎へません。

不良なる勞働者は有害無益です。繁忙過る人は却つて何事をも成就しません。

成功する勞働者は、よく訓練された人です。加ふるに機械の取扱のうまい人です。

上手な大工も道具が無ければ仕事は出來ません。道具が破損してゐては仕事は出來ません。又大工の仕事を習得した事の無い者が、いかによい道具を持つたとて仕事は出來るものではありま

せん。

辯護士、醫者、建築家、鐵道技士等は各自の仕事の專門知識を學ばなければ一人前にはなりません。外務員も同じです。先づ生命保險の教育を受けなければならないのです。經驗を積まなければならないのです。優績を示すには、此の方面の練達者とならなければ駄目です。

又外務員の練達は、堅い決心をもつて裏書されなければなりません。然らざれば精力は浪費され、何の得る所も無くなるでせう。若しも、仕事に對する堅い決心があれば、勤勉は成果を收めます。且勤勞の賜が喜びをもたらします。それが更に熱情を煽ります。その結果、自分の手腕に限り無き感激を湧きたゝせ、仕事は容易に且生産的となります。

繪の大家、名聲高き音樂家は、自分の天分を頼んで仕事を輕視するやうな事は致しません。自己の仕事を愛する人です。畫家は傑作を出す前に永年勉強しなければなりません。音樂家は毎日數時間の練習をしなければなりません。外務員は、たゞ勤勉に働くばかりで無く、巧妙に働かなければならないのです。

外務員を刺戟する他の動機は、自分の仕事は同朋の爲めに働いてゐるのだといふ自覺であります。これこそは、最も良心ある外務員を刺戟するものです。生命保險の仕事を擇んだ事を感謝す

る心です。

外務員の活動が無ければ、世の多くの人々は保險の保護を失ふでせう。何故ならば、不幸にして知識階級の人さへ、外務員の勸誘が無いと保險をつけないのが事實だからです。

熟慮

外務員は熟慮しなければいけません。思考する時間の無い程忙しいと、成功は覺束ないでせう。思想は活動の邪魔をするのではありません。否活動を促進するものです。

思慮深き人は高き理想を持ち、之を成育させて實際に適用します。

名聲

誠實は成功の基です。けれども、それが認められなければ有效ではありません。それ故模範外務員となるには、信頼すべき人で且保險の事はよく知つてゐるといふ名聲を得なければなりません。

信任

一般世人は生命保險の事をよく知りません。又その無智なる事に敏感です。人々は外務員を斯界の練達者で且隙さへあれば自分達を馬鹿にするものだと考へてゐます。それ故最初には多少の

疑惑を受け勝で信任を得る事は困難です。しかし信任を得る事が出來なければ、何事をも爲す事は出來ません。又人は禮讓を保つ事を欲し、他人の感情を害する事を嫌ひますから、外務員を疑はしいと思つても之を色に現はさず、不圖頭に浮んだ言譯を口にして追拂はうとするものです。例之、多忙だとか、今はその時機で無いとか、財政狀態のよくなる迄持つてくれとか。ところが、多くの外務員は、自分が信任を得てゐないといふ事に氣づかず、何故勸誘が成功しないのだらうと徒らに不思議がつてゐます。

結論

斯樣に問題は複雜です。成功は勤勉努力のみにはよりません。それ故、誰でも誠實勤勉であれば相當のところ迄は行きますが、上述の如き動機によつて活動し、又如何にして不斷の妨害に打勝つかを學ぶ迄は、充分技能を發輝する事は出來ません。

第二十六章

忠實と奉仕の念

優績外務員の特質として更に加ふ可きは忠實と奉仕の精神です。

忠實

生命保險の制度並に自分の屬する會社に忠實で無い外務員は永久的成功を收めません。それ程感情によつて成否は分れます。熱情を持つといふ事が大切です。若しも仕事が性に合は無いか又は會社の幹部と氣が合は無いならば、それは非常なるハンデイキヤツプです。反對に、會社に對して忠實ならば、非常な強味で、次第に繁榮し、勤勞の價値は廣く深く行きわたります。此の精神程有力なものゝ無い事は恰も愛國心の國家に對する力と同樣です。

奉仕の精神

生命保險會社は單に危險を保險する丈ではありません。公共奉仕の機關です。

如何に會社は奉仕するか

生命保險會社は、委託された金錢を死藏しはしません。始終、死亡保險金、滿期保險金、利益分配金等の形式で支拂つて居ます。

そればかりで無く、保險會社は各地に投資して居ます。アウトルツク誌のロオレンス・アボツト氏は下の如く記しました。

生命保險會社が人々に貯蓄を教へ、その貯金を有用に利用させ、個人の繁榮のみならず國富の發達を助長した事を世人は未だよく知つてゐない。何といふ大きな資産であらう。鐵道、電氣工業、土地農場の開拓、その他さまざまの事業の遂了を可能ならしめ、米國民をして世界の一大國民たらしめたものは生命保險會社である。

生命保險は勤儉貯蓄を勸め、個人の資產狀態を強固にし、その個人が寄集つて組成する國家を強固にします。

外にも保險會社が公共に奉仕する事は澤山あります。例之(たとへば)被保人の健康診斷をしたり、生活改善衞生設備の改良にも活躍します。又下の如き效益を與へます。

近代社會の要求に應じて團體保險、相續税保險、營業保險等の新形式を提供しました。

廢疾約款を設けて全的永久の廢疾者に保險料拂込を免除し、又保險金額を削る事なく生涯之を保護します。

不測の出來事による死亡の場合保險金を倍にして支拂ふ事も行はれます。

あまり收入の多く無い者にも家を購ふ事を可能にし、加之(くはふるに)生命の危險を保證します。

その他枚擧に遑あらずです。

外務員の奉仕

斯の如き生命保險會社の精神は外務員にも影響します。現代の外務員は眞面目と奉仕の精神を表明するものです。彼等の第一の目的は公共に對する奉仕です。自分自身の利益は第二の問題です。不思議にも、利己的な外務員よりも氣高い精神をもつて働く人の方が長年月にはより多く利得するやうです。

此の點に關して或有名な外務員の語つた言葉を記憶して下さい。

人は自己を見る爲めには自己を滅却しなければならぬ。價値ある仕事を爲し、他人以上の地位を占むる力を與ふるものは奉仕の感激である。

人は誰しも他人に求むるものである。それが何であらうとも、吾々の出來る事をするやうに要求するものである。自分自身を忘れて他人に奉仕する事が、人と人とを結びつけ、又人の信任を得る唯一の道である。

これは容易の事に見えて、實は極めて難しい問題である。

僞であつてはならぬ。眞實純粹の事であらねばならぬ。人々は心の奥底を汝の目の色によつて見透す。聲と態度で知つてしまふ。遠く距たる電話でさへも氣振をさとる。手紙でも心は

わかる。

生命保険界に働く吾々は、人々に對してうつかりした取扱をする事は出來ない。常に密接な關係を保たなければならぬ。

之は保險會社の役員の言葉では無く、生命保險によつて衣食する外務員の確信です。

利益をよそにしたる奉仕

著者は幼時、聖書中の金言は單に宗教上の意義あるものとばかり思つて居ました。例之「汝等命を救はんとするものは失ふ可し」「汝等命を失ふものは之を保つ可し」といふのは、此の世の生命を犧牲にすれば天に行くといふ意味と思ひました。水の上に投げられたパンは結局戻つて來るといふ事を聞くと、戻るといふ事は精神的の意味であると思ひました。けれども、今日になつて見ると之は眞實です。何れも生命保險外務員の仕事に適用する事が出來ます。

勿論、奉仕の念無くとも、素晴しい熟練で成功する外務員も往々ありませう。それは不思議ではありません。何故ならば、生命保險といふ絕大の價値あるものを提供するのですから。しかし、かゝる人は例外で、原則としては利害を外にして奉仕を心がければ心がける程、かへつて金錢的報酬も多くなります。

外務員自身、自己の仕事に就てかゝる高き理想を持つのですから、近代の保險の發展の著しいのは當然です。一方に於ては會社、他方に於ては公衆がこれによつて祝福されます。

戰鬪的奉仕

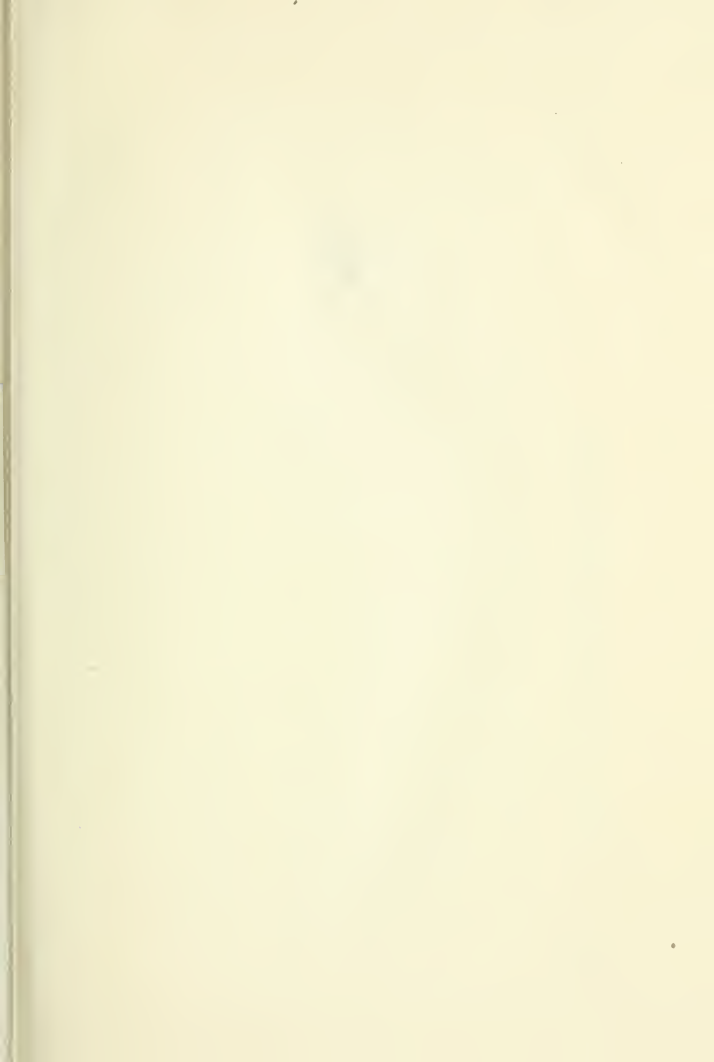
生命保險の外交に從事する者が一番不愉快に思ふのは保險嫌の人から保險反對論を聞かされる事です。

ところが、よく考へて要ると、反對論は契約させる一の機緣となります。反對論に出あつて直に參つてしまふやうでは生命保險會社員の資格はありません。契約の締結とは反對論征服の事だと考へて下さい。反對は打勝ち難き事では無く、寧ろ天の與ふる好機會です。反對は機會なりと悟ると、生命保險勸誘の眞意義がはつきりして來ます。勸誘はひとつの戰鬪です。友愛の精神あふるゝ戰鬪です。反對に出あつたら、之を打負かす爲めに說明し、熱誠を以て相手を壓倒しなければならないのです。それが出來なければ有能の士とは申されません。

生命保險そのものゝ價値は今更說くを要さない程偉大です。だから、幾多の反對論があるにも拘らず事業は日進月歩してゐるのです。(完結)

――「社報」大正十五年三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二

昭和二年一、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二月號

其他

福澤先生と生命保險

我國に初めて生命保險會社の創立されたのは明治十四年で、只今丸の内宮城前、馬場先門角に在る明治生命が卽ちそれです。此の事業を始めたのは慶應義塾の同窓者で、福澤先生も直接相談に加はり非常に援助されました。創立當時の狀況に就て發起人の一人は左の通り記述して居ます。
明治維新の變革は百般の事物に大變動を起し、數百年連續したる封建制度廢せられて士族は世祿を失ひ、外國貿易盛に開けて生產狀態亦舊態を墨守する能はず、農工商亦時勢の推移に應じて其業を經營せざる可らず、故に家計の中心たる主人死去すれば家族の困難に陷るは自然の數なり。當時學問を修むる者は多くは士族にして、福澤諭吉先生の創立したる慶應義塾に來學する者も十中八九は士族なり。是等學生中業成りたる者は、或は敎師となり、或は著述飜譯に從事し其所得を以て一家の生計を立てたれども、一朝不幸にして死去すれば、遺族

は俄かに衣食に窮し、甚しきは病中及び死後葬祭の費用も、親戚朋友の厚志に待たざるべからざるが如きことあり。是等の場合に處する方法として西洋諸國に行はるる生命保險を我國に於ても採用しては如何との議は屢々話頭に上りたれども、其實行容易ならざるを以て荏苒歳月を經過せり。

明治十二年の末、莊田平五郎小泉信吉の二氏談話の次生命保險の事に及ぶ。後幾も無く莊田氏、小幡篤次郎氏と相謀りて、先づ生命保險會社創起見込書を作り、之を其朋友に示したりしに、生命保險會社の設立を賛成する者多く、十四年二月二十一日始めて東京々橋區南鍋町交詢社の一室を借りて創立事務所と爲し、阿部泰藏物集女淸久の二氏生命保險の方法を調査して規則及び定款を作り、六月十三日發起人小幡篤次郎朝吹英二阿部泰藏杉本正德莊田平五郎肥田昭作西脇悌二郎早矢仕有的奥平昌邁中村道太渥美契緣の諸氏より會社設立願書を差出し、六月二十九日願濟む。依て七月八日京橋區木挽町二丁目十四番地に於て第一次の總會を開き、翌九日より營業せり。

茲に明記してある通り、我國の生命保險は三田の山から生れたと云つても差支へないのです。發起人は殆ど總て福澤先生の教を受けた連中で、此の人達が友達同志相互救濟を行はうといふ目

的に端を發したので、單に營利の爲めでは無かつたのです。

上記の莊田平五郎氏起草に係る生命保險會社創起見込書は、會社の目的、組織、方法の大體から、微細なる保險料割合表、營業損益豫算に至る迄、親切叮嚀に記述して餘す所がありません。當時生命保險に關する書籍は、日本國中僅かに三菱商業學校に五六冊、井上馨氏の藏書中に四五冊の英書があつたのみなのに、精密周到なる見込書の發表ありたるは、起草者の頭腦の明晰と理解力の博大なる事を示すもので、眞に驚嘆の外ありません。

創起見込書には小幡篤次郎氏の筆になる左の如き緒言が添へてありました。

小を積で大と爲し、易に慮て險に阻まれず、是れ古に在ては知者の獨り能し、獨り專にする處なりしも、人文開明の今世に至ては、之を其獨專に任ずるを爲さず、今や統計の學既に與り、推理の術既に明なれば、平庸の人と雖も知者の成法に據り、學術の功積に籍り、能く深謀遠慮の事を行て自ら其難きを覺えざるあり、人命保險會社の設置の如き其一例なり。男兒生れて十四五年、入學の資を要し、女子生れて十六七年出嫁の資を要す。老て殘年を養ふの資を要し、死して遺族を扶持するの資を要す。能く之を消埃の微に積み、能く之を無事の日に備ふる時は入學難からずして、出嫁亦易く、殘年樂しむ可く、遺族安かる可し。事の最も

見易きものなれども、人間多情又多事動もすれば目前の急に逐はれて後日の備を忘るゝを如何せん。或は偶ま慮の玆に及ぶ者あるも、不虞の災變に遮られ、意外の失誤に遇て、其目的を達し得る者千人中果して幾人歟ある。輓近歐米諸國に行はるゝ所の生命保險會社なるものは、統計推理の學術に基き、人を導て平常無事の日の節儉を以て急要の資金を積ましめ、能く庸人をして知者の事を行はしむるの一方策なり。今余輩が企つる所の東京生命保險會社も、其方式を彼の良法に取り、下文の規約を設けて以て知者の轍に傚はんとするものなり。然りと雖も彼邦に在ては、積年之を實行し、計算悉く其當を得、良法佳策盡く擧らざる無きに易へて、本邦に在ては死亡表の如きも未だ確實信據すべきものを得ざるの今日なれば、會社其算を立るに當り後來被保者に向て其約を實踐し能はざらんより、無乃ろ其約を鞏固ならしめんが爲め、彼の國の通例に比して保險割合を少しく高ふするが如きは、是れ今日に免れざる所なり。且つ教育費嫁裝費養老費等の如き便利の積金も漸次の事に附し、創造の際に在ては、先づ死後遺族を扶持するの保險より著手せんとす。世の士君子若し此會社設立の鴻益あるを諒知せば幸に之を賛成せよ。

此の見込書を配布された慶應義塾同窓者には賛成者が多かつたので、愈々實行に取りかゝる事

になり、先づ適當の當局者を定める必要が起りました。其處で衆議の末阿部泰藏氏を推薦して一切の事を任せ、阿部氏は物集女清久氏と共に保險の理論と實際を研究することになりました。當時氏は文部省の役人でしたが、生命保險が社會公共の爲めに有益なる事業だといふ事を信じて官を辭し、一生の事業として之に盡さん事を決意し、又物集女氏は太政官統計局に勤めてゐたのですが、之亦同じ理由で辭して阿部氏と事を共にする事になつたのです。

明治十四年六月十三日、上記の發起人は東京府知事に設立願書を提出しました。

私共儀今般別紙定款に依り資本金拾萬圓を以て府下京橋區木挽町二丁目十四番地に於て明治生命保險會社を設立し人命保險の營業仕度候に付速に御許可相成度此段奉願上候也

之に對し時の府知事松田道之氏から、同月二十九日附を以て左の指令がありました。

書面の趣は追て一般會社條令發行迄人民の相對に任候條此旨可相心得候事

此の旨令の趣旨は、政府には會社に關する法令は未だ無いから、保險の營業も人民相互の勝手に任せるといふのです。

そこで會社は七月八日株主總會を開き、翌九日から保險の申込を受て營業を開始しましたが、當日第一の申込者は福澤先生の御親類に當る化學者宇都宮三郎氏でした。氏は大に生命保險事業

に賛成し、開業の時には第一號保險證券を得ん事を望んで居られ、果して其言を履行して日本最初の保險證券を受領されました。

當時明治生命の本店は、京橋區木挽町二丁目十四番地の一小家屋の二階を賃借したもので、一ヶ月の家賃二十圓に過ぎず、頭取支配人の外に二名の書記を雇入れたばかりで、他の取締役監査役は何れも無報酬と定め、爾後十數年間實際に之を受けず、偶々株主中より報酬交附の事を提案する者あると固辭して受けませんでした。阿部氏の給料も僅かに官途に在つた時の三分の二に過ぎない有様で、名は營業會社でしたが宛然一個の慈善會の如き感があつたさうです。

其間福澤先生は自身株主となり創立の相談に應じ、內外共に多大の援助を惜まれず、殊に保險申込の勸說にも盡力なさいました。

左に掲げるのは、會社創立の翌年頭取阿部泰藏氏が保險思想普及新契約締結の爲め北陸地方へ出張の際、曾て大阪の緒方塾で先生の次に塾頭だつた田中信吾氏へ宛て、福澤先生の認められた依賴狀です。

其後は久々御無音仕候時下殘暑尚強益御淸寧拜賀候陳ば友人阿部泰藏其外數名の發起にて去年七月より生命保險會社創立の處百事都合能く行はれ目今被保人の數千七百餘名保險金高八

十萬圓にも相成候由各地へ巡廻入社募集の事は創立以來の慣行にて既に九州より中國四國奥州の方へも參り尙此度は北國筋へ出張の積り然處加賀の地方に知人少なく當惑と申す處より又候御面倒相願候は今度阿部泰藏御地出張の節萬端御指圖を煩はし度殊に生命保險は醫治に關し候儀にして其邊に就ても別段の御相談得度との次第委細は阿部氏より可申上候得共一應小生より右の事情申上御依賴申候樣との事に付態と一書を呈し候何れ阿部は近々出發の儀に付不日拜顏を願ひ萬々可申上候得共前以て此段申上置候　早々頓首

明治十五年八月三十日

福澤諭吉

加州金澤下新町二十八番地

田中信五【原】樣

右の手紙は先年鎌田榮吉先生が文部大臣として九州を巡廻せられた時、田中大分縣知事から贈られたもので、自ら左の如く附記されました。

過日九州巡廻中大分縣に於て本書は田中大分縣知事より小生に贈られしものなり同知事の嚴父信吾氏は緒方洪菴先生の門人にて福澤先生に次で塾頭たりし人にて故先生と懇親の間柄な

りし様子なり明治生命保険會社創立の際は各地方の友人に向って故先生の紹介せられしもの

斯の如し同會社の盛運は其賜と云ふも誣言ならざるべし

大正十二年五月十四日

鎌田榮吉

――「慶應義塾商業學校校友會報」大正十三年八月號

我國最初の生命保險會社「明治生命保險株式會社」に就て

大正十三年六月三十日發行の生命保險會社協會々報第十三巻第二號に池田龍一氏の寄稿せられた「我國最初の生命保險會社日本保生會社に就て」と題するものは甚だ面白く拜見致しましたが、若山儀一氏の「日本保生會社創立願書草稿」を以て我國最初の生命保險會社とせらるゝは御間違ではないかと思ひます。明治生命の創立は明治十四年七月で、日本保生の創立願書草稿の印刷日附は明治十三年三月であると比較して、後者の方が古いとされたのでありませうが、日本保生は池田氏も記さるゝ通り實際には成立しなかつたのです。殊に明治生命の開業したのは明治十四年七月ですが、同會社の創起見込書の發表されたのはそれより二年前即ち明治十二年の事ですから、此の點から云つても明治生命の方が日本保生より先に計畫を發表した事は明白です。明治生命の發起人は日本保生の創立願書草稿を配布されて一見したさうですが、既に自分達の方の計畫は實行

期に入つて居たので殆ど問題にしなかつたさうです。池田氏が目論見計りで成立しなかつた「會社創立願書草稿」をさして「我國最初の生命保險會社」と云はれたのは、單に讀者の注意を引く意圖を以てせられた機智であらうとは想像しますが、後日誤り傳へられる事が無いとも云へませんから、明治十二年に發表された明治生命の創起見込書を參考として本紙に掲載する事にしました。

大正十三年七月二十二日

阿部章藏記

【以下明治生命保險會社創起見込書略】

——「生命保險會社協會々報」大正十三年九月二十八日號

岡山巖夫君を憶ふ

前の名古屋支店副長岡山巖夫君は長い間病床にあつたが、五月六日遂に死んだ。同君は大正八年十一月二十八日の入社で、當時同君の入社に私が反對意見を述べた事を記憶してゐる。私は大正六年から八年迄大阪支店詰だつたが、その十月に本店へ戻り、十一月二十六日岡山君の入社二日前に總務主事助役を命ぜられ、人事に關する事務を執る事になつた。私は、會社の盛衰は何よりも人間の力量によつて決せられるといふ信念から、社員の採用を輕々に取扱はず、最も有力なる主義方針を確立し度いといふ一本調子の熱情を抱いてゐた。あの歐洲大戰のもたらしたきちがひ景氣の最中には、保險會社のやうな地味なところには人間がゐつかず、どしどし他の仕事に轉じ、又學校に頼んでも、保險會社ではといつて二の足を踏む有様で、現に明治生命でも大正三年頃から九年頃迄の大學出身社員の數は極めて少ない。そんな狀態だつたから、私は密かに將來の

心配をして、社員採用に關する根本原則を定むる必要につき、しつつこく進言した。先づ初任給を高くして秀才を迎へる事、縁故者の紹介を第二とし學校に責任を持たせて優等生を推薦させる事、他の仕事に從事した中年者を雇はず學校卒業即時入社の若い人を教育して守立てる事を本則としようとした。私も未だ若く、血の氣が多かつたから、少し位憎まれても、自分が正しいと信ずる事を行ふのがやがて會社の爲になるのだと考へ、中年者の岡山君を採用するよりも翌年の春迄待つて、學校から出て來る人間をとつた方がよいと思つた。しかし其の時は既に同君の入社は內定してゐたので、私が同君の美事な筆跡の履歷書を前にして反對意見を開陳してゐるところへ、給仕の案內にしたがつて入つて來たいが栗頭の大入道が當の本人だつた。これは後日岡山君に話しともどもに笑つた事であつた。

岡山君の入社に對しては、私の理想から反對したが、いざ入社した同君とは甚だうまが合つた。大兵肥滿の大入道は幼童のやうな愛嬌があり、明朗な氣性なので忽ち社內の人氣男となつてしまつた。三十四銀行、七十四銀行で叩き込んで來た腕で、見かけは花和尙魯智深に類するにも拘らず、事務は人一倍緻密で冴えたところを見せた。半歳ならずして岡山君は社內きつての事務家と認められ、間も無く代理店月報係の首席を占めた。

その頃社内に運動熱が勃興し、庭球部と野球部が設立され、岡山君は野球部の主將として三壘を守り、活躍した。當時會社には運動場も無く、技術も下手だつたが、代々木の原や洲崎の埋立地でさかんにたゝかつた。小人數ながら部員と應援團が一致して頗る熱心で、私も彌次馬として常に聲援に出かけた。その後會社の野球部は段違ひに強くなつたが、あの頃程の熱と團結心の無いのをみると、岡山君には餘程統率力があつたのであらう。

岡山君が原つぱをかけ廻る姿は偉觀であつた。何しろ二十貫前後の體格で且長年運動には遠ざかつたのだから、守備は殆んどなつてゐず、來る球も來る球も處理しかねるのであつたが、打擊になると馬力があるので、屢々大物をかつとばして殊勳をたてた。しかし、かけだすと息が切れて眞靑になり、本來本壘打となるべきものも三壘迄で中止するといふやうな喜劇的風景も見せた。試合の時には奧さんや子供さん達をつれて來る事もあつた。

岡山君は素敵な酒のみだつた。よく皆で野球試合の祝勝會をやつたが、したゝか飲んで往來に出ると、更に鮨屋に行き、蕎麥屋に行き、おでん屋にゆくといふ風で、一寸手のつけられないはしごだつた。かういふ場合、私も決してつきあひの惡い方では無いが、もういゝ加減によせと勸告すると、もう一本飲ませてくれ、あと一軒だけつきあつてくれといつてきかない。大兵肥滿の

酔拂ひといふものは取扱上極めて難澁なものであつた。最後には振切つて別れるのだが、それから先もまたつぎばしごをかけて飲み廻つたものらしい。ぐでぐでに酔つて、疲れて人力車に乗つたと思つたら、五六間さきが自宅だつたなどゝいふ逸話は山程あつた。

この酒については藤田専務も大變心配して居られ、殊に大正十三年一月福岡支店副長として赴任する事になつた時は、本店と違つて地方では酒席へ列する事が多いから、あまり大酒をして縮尻つてはいけない、からだをこはしてはいけないと親切な御注意を受け、感激のあまりうつかり禁酒を誓つてしまつた。何事にも行届く専務はその事を當時の福岡支店長安東徳男氏にも申送られ、又私にも口づから話された。ところが出立の前夜、岡山君は拙宅へ來て、しばらく雑談をしてゐるうちに、いつぱい飲ませろといひ出した。だつて君は禁酒を誓つたさうぢやあないかといふと、禁酒は誓つた、しかしそれは任地へ行つてからの事で、今晩は最後だから飲ませてくれといふのでいつぽんつけると、ひどく元氣になつて、例の如くもう一本、もう一本と止度がなくなりかけたが、私も専務の心配を知つてゐるので、いゝ加減にしろと云つて拒んだ。結局ウヰスキイで乾杯して納めた。

扨て福岡に行つて誓を守つたかといふと、あにはからんや、安東氏が、君は禁酒の筈ではない

かといふと、いゝや出立前に阿部の諒解を得て來たと云つて承知せず、さかんに浴びてしまつたらしい。同君が健康を害したのは、酒の爲ばかりでもあるまいが、少なくともむしばんだ體を酒が一層ひどくさせた事は疑無いやうである。時々社命で上京した時、あんまり飲むとひどいめにあふぞといふと、此の頃は氣をつけてゐるから大丈夫だと答へるのが常だつたが、實はちつとも氣をつけてはゐなかつたさうである。

昭和五年一月名古屋に轉じて間も無く病氣になり、容體容易ならずと聞いたが、それから引つゞいて醫療の手を放れず、遂に永眠した。尤も、先年本社の庭球部の連中が津の川喜田監査役と其の一黨に挑戰した時、私も彌次馬でついて行つたが、途中名古屋の驛で、待構へてゐてくれた同君に逢つた。亂暴な事には、それが病院を退院した日ださうで、夫人がついて居られたが、夜風に當つてはいけないではないかと云ふと、なあにもう全快したから大丈夫だと一笑に附した。しかし、以前と比べて肉は落ち、血色(けつしよく)が惡く、聲に力が無く、つけ元氣としか思はれなかつた。

昨年一月別掲の角力年寄のやうな寫眞を全快記念と稱して送つてくれたが、今ははかない形見となつた。(昭和七年五月十八日)

——「社報」昭和七年五月號

明治生命館人事

三年半の日子を費した明治生命館も出來上り、落成披露も濟み、愈々五月十二、十三兩日には移轉する事になり、一同安堵の胸を撫でた。この大工事に關しては、武市會長も非常に心配し「斯ういふ大物になると、普請好などゝいはれた過去の經驗も何の役にも立たない」と嘆息された。普請好で、世間智の豐かな會長でも、圖面や文書の上で事を決するのは困難なのだから、私如きは皆目見當がつかず、何の御役にも立たなかつたばかりでなく、未熟な素人意見を、固執して會社の決定を鈍らせ、工期の遲延を招いた。顧みてたゞ冷汗である。

營繕係には萬事丁寧綿密な櫻木良馬氏といふ適任者がゐるので安心はしてゐたものゝ、自分が關與して何の力を貸す事が出來るか、考へれば考へる程弱氣になつた。私見としては、かゝる大工事を行ふについては社内をすぐつて建築委員會を組織し、衆智を集める事こそ肝要であると思

つた。これは一時その形を成さんとしたが、うやむやのうちに解消してしまつた。若しも、私の擔任の仕事を他の人に讓つて、この事專門にやらせて貰へるならば、自ら現場に立つて責を果し度いとも思つた。要之忙しい人間の片手間仕事に任ずべくあまりに大仕事だと考へ、設計圖や模型に直面して脅え切つてしまつたのである。然るに實際は社內で最も多忙な藤田專務が、絕間なき出張旅行と、日々山積する事務を放擲する事もなく、しかも完全に、何の手落もなく、樂々とこの大仕事を片づけてしまつた。盲目判は一切捺さず、些事と雖もひとまかせにせず、必ず自分で行ふといふ、平素の主義を貫かれたのである。その精力は、驚嘆の外ない。

建築顧問の曾禰先生は、今年八十三歲の御高齡であるが、雨の日も風の日も現場に御出向になり、設計施工兩方面の指揮監督にあたられた。世間一般に、老大家を顧問とか監督とかに頂く例は少くないが、多くは名目だけか又は特別の事についての相談相手に過ぎないのに、今度の工事に於ては、そんな生溫い事でなく、先生御自身の設計のものゝ監督と同じ或はそれ以上に心を籠めて盡くされた。先生が我國建築界の大先達である事は誰も知るところだが、私には特になつかしい思ひ出がある。それは未だ三田の學窓に在つた頃、恩師鎌田榮吉先生が吾々を一堂に集め、この度先輩の厚意によつて立派な圖書館を建てる事になつたが、その設計は人格最も高く一世の

師表と仰がれる人をえらび、曾禰達藏先生に御願ひする事に決したと報告した後で、ひとり建築と限らず、人間の仕事はその行ふものゝ精神をおのづから表現するものであるから、先づ第一に修養に心がけよといふ訓話をされた。二十有餘年の後、その先生に接し、並びなき人格に直接學ぶ事の多かつたのは、この工事が私に與へた大なる賜であつた。

新館設計者岡田信一郎氏は天才と稱されたかくれなき大家であつたが、たつた一つの大なる缺點は、健康に惠まれない事であつた。六十萬人の人間を使用しながら、一人の死者も出さなかつたのは稀有の事だといはれてゐるが、不幸にして工事半途に岡田氏を失つたのは、かへすがへすも殘念である。氏は明治生命館の建築を一生の記念塔として、將來にのこさんとこゝろざし、文字通り全生命を打込んでしまつた。新館披露の日、御遺族はその竣工を喜ばれると同時に、故人追慕の感慨に堪へず、しばし涙にくれたといふ事である。ひそかに想へば明治生命館が氏の壽命を奪つたとも言ふべく、立並ぶ大圓柱は尊き犧牲の人柱の上に築かれたものとも考へられるのである。

不幸中の幸は、令弟捷五郎氏が最初から協力して居られたので、工事には何の支障もなかつた。しかし捷五郎氏も蒲柳の筈だから、萬一無理をして健康を損ふ事があつては大變と思ひ、頑健を

ほこる私は、うるさく御注意申上げた。ところが私の方が昨年末から三ヶ月間風邪を引通し、その間一週間も缺勤してしまつたが、捷五郎氏は何のつゝがもなく、元氣いつぱいで工事の大任を果された。令兄の遺志をうけつぐ強い責任感から身心共に緊張し、風邪の神などは寄せつけなかつたのであらう。「どうです、私の方が無事でしたね」と、屡々私を揶揄された。

曾禰先生には及ばないが、會社の建築技師大熊金治郎氏も七十餘歳の高齢である。しかも頑健壯者に劣らず、主として石材方面の監督に任じたので、四國北木島の石山へ度々往復し、嚴選峻烈を極め石屋石工には恨まれたらしいが、そのかはりに新館の石材程粒撰のものは二つとなく、石の大熊の神髓を發揮した。

この工事に携はつた現場監督の勞苦は大變なものであつた。三年半の間殆ど寢食を忘れ、骨身を削つた。主任の吉田肇氏の如きは、年齡も未だ若いのに著しく白髮を增し、全く贅肉をあまさない程面やつれした。又竹中工務店側の人々の規律正しく一絲亂れざる統制にも感服した。會社が同店に對する感謝狀に、左の如く記したのも、決して一片の辭令ではないのである。

コノ年三月明治生命館成ル

顧レバ昭和五年九月工ヲ起シテヨリ日子ヲ費スコト三年六箇月、事ニ從フモノ六十萬人、構

造ノ堅牢ハ社礎ノ確固ヲ、外容ノ壯麗ハ事業ノ繁榮ヲ、內部設備ノ新様ハ常ニ斯業ノ先驅者タルヲ期スル社意ヲ表象スルモノニシテ恰モ我社ガ本邦生命保險業ノ開祖トシテ光輝アル歷史ヲ有スルガ如ク建築史上永遠ニ喧傳セラル丶モノタルコトヲ確信ス

館ガ設計監督ノ任ニ當ラレシ諸先生ノ學識經驗ノ結晶タルコトハ元ヨリ言ヲ俟タザルトコロナレドモ亦起工ノ當初ヨリ落成ノ今日ニ至ル迄直接現場ノ事ニ當リタル竹中工務店ノ勉勵努力ニ負フトコロ尠ナカラズ殊ニ店主ノ意思ハ店員諸氏ノ一擧手一投足ニモアラハレ規律正シク統制普ク行ハレ工作ノ迅速ト併セテ愼重丁寧ヲ心トシ長時日ノ工期中一度モ不祥ノ事ノ起ラザリシハ偏ニ君ガ平素ノ志格ニ因ルモノト思考シ深ク感謝ノ意ヲ表ス

——「社報」昭和九年四月新築落成記念號

明治生命號獻納式

昭和九年四月十四日は我社にとつて忘れ難き日となりました。この日、東洋第一を誇る新社屋の竣工披露が行はれると同時に、此の新社屋落成記念として、五拾萬人の契約者に對する挨拶に替へ、我海軍に獻納する飛行機報國第六十一號の命名式が、羽田の遞信省東京飛行場で行はれました。新館の修祓式を濟ませ、武市會長の代理として、下河邊助役と同道、式場へかけつけました。昨日一日降暮らした春雨は名殘なく晴れたが、海邊の風は烈しく、まだ枯色の儘の荒茫たる埋立地を吹きまくり、水鳥は糸目の切れた凧のやうに、翼の自由を缺いて行き惱む。

我社の獻納機と共に、命名せらるゝものは、海軍部內有志者の海軍號、南洋廳サイパン支廳管內住民の第一南洋號、日本鋼管株式會社の第一日本鋼管號及第二日本鋼管號、戶畑鑄物株式會社の戶畑鑄物號の五機で、我明治生命號と併せて六機、銀翼を張り、待機の姿で並んでゐます。

日本鋼管と戸畑鑄物の三機は艦上戰鬪機で一人乘、南洋廳のものは偵察機で二人乘ですが、我社の明治生命號と海軍號は最新式の攻撃機で複葉三人乘、翼の全幅一三・五米、機體の全長九・五米、全高三・九米、全備重量三噸、發動機五〇〇馬力といふ巨大なものでありますから、一際立派に見えました。式場は野天の吹さらしですが、正面に祭壇を設け、向つて右側に海軍側、左に獻納者側が着席し、それを取巻いて各關係者、一般來觀者が強風をものともせず、靜粛に控へてゐました。午後一時半、海軍大臣代理臨場せられ、式は開かれました。各獻納者側の經過報告があり、我社からは下河邊氏が場の眞中に進み出て、音吐朗々と讀上げました。

我ガ明治生命保險株式會社ハ明治十四年七月本邦最初ノ生命保險會社トシテ事業開始以來、年ヲ閲スルコト茲ニ五十有三年、業績日ニ月ニ極メテ順調ニ進ミ現在保險契約高十一億圓加入者總數五十有餘萬人ニ達スルノ盛況ニアリマス。斯ク進展シテ止マルコトナキ社業ノ將來ニ應ズル爲メ昭和五年四月本社新社屋ノ新築ニ着手シ、本年三月之ガ完成ヲ見ルニ至リマシタ。

此時ニ當リ我社ニ於テハ新社屋落成ノ披露ニ要スベキ費用ヲ節シ之ヲ海陸軍ニ獻ジ國防ノ一端ニ資スルハ最モ時宜ニ適シ且ツ最モ有意義ナル記念ト認メ會社關係者ノ總意ニ基キ之ガ獻

納ヲ申出タノデアリマス。

此ノ申出ハ海陸軍兩當局ノ喜ンデ受納セラル丶トコロトナリ、海軍ニ於テハ最新式ニシテ且ツ最モ精鋭ナル性能ヲ有スル攻撃機ヲ建造セラレ茲ニ本日海軍大臣閣下御臨場ノ下ニ本機ノ光輝アル壯途ヲ祝スル命名式が擧行セラル丶ニ至ツタ次第デアリマス。

國際情勢日ニ多事ナラントスル今日、本機克ク國防ノ第一線ニ活躍以テ使命ヲ完ウスルコトヲ得バ獨リ我ガ海軍ノ榮譽タルニ止マラズ又以テ吾々獻納者ノ至大ノ誇トナルノデアリマス。

茲ニ經過ノ概要ヲ述ベ報告ト致シマス。

續いて靖國神社の神官によつて修祓式が行はれ、齋主の祝詞の後を承けて獻納者總代が獻納の辭を朗讀しました。我社では、武市會長不參の爲め私が代讀致しました。

明治生命保險株式會社ニ於テハ昭和九年三月豫テ工事中ナリシ本社新社屋ノ落成ヲ見マシタノデ之ガ最モ意義アル記念トシテ我ガ海陸軍ニ航空機各一基ノ獻納ヲ申出マシタトコロ幸ニモ嘉納セラル丶所トナリ、海軍ニ於テハ新鋭誇ルベキ攻撃機ヲ建造セラレ國防ノ第一線ニ加ヘラル丶コト丶ナリマシタ。吾々ノ光榮且ツ欣快トスルトコロデアリマス。

本日茲ニ海軍大臣閣下御臨場ノ下ニ本機ノ壯途ヲ祝福スル命名式ヲ擧ゲラル丶コト丶ナリ吾

々關係者一同亦此ノ光輝アル式典ニ列席スルノ榮ヲ與ヘラレマシタコトハ感謝ニ堪ヘナイ次第デアリマス。幸ニシテ本機克ク我ガ海軍ノ活躍ニ貢獻スルヲ得バ吾々獻納者ノ本懐之ニ過ルモノハアリマセン。

之ヲ以テ獻納ノ辭ト致シマス。

右に對し海軍大臣の謝辭があり、多數の祝辭祝電が讀上げられ、一同玉串を奉奠し、各飛行機に搭乘の勇士は神符を頂いて機上に奉安しました。又、各機に對し花束が贈られ、明治生命號には藤田專務の愛孫鶴見良行君(九歳)同順子さん(六歳)の兄妹が手を携へてあらはれ、美しい春の花を、機に結びつけました。忽ち起る軍樂隊の國歌奏樂につれて、臨場者一同君が代を合唱し、横須賀鎭守府司令長官永野修身大將の發聲で陛下の萬歲を奉唱し、こゝに式は終りました。

直に飛行準備が始まり、先づ三戰鬪機が猛烈な爆音をたてゝ滑走離陸し、見る見るうちに遙か彼方に小鳥よりもちひさく遠ざかると、次には偵察機を露拂ひにして、明治生命號と海軍號が、大鵬の羽打つが如く悠然と上空に浮び上りました。觀衆は一齊に萬歲を唱へ、感極まつて涙を流す人もありました。

先に飛去つた三機は又引返し、銀翼を日に輝かしながら、高等飛行の妙技を競ひ、後の三機は

更に高く、大なる圓を描いて去來しましたが、やがて六機は翼を揃へ、東京をめざして飛んで行きました。數分の後、この勇ましい六機は、新裝成つた明治生命館の上空を訪問し、機上から竣工開館を祝福する手筈になつてゐました。

——「社報」昭和九年四月新館落成記念號

梅田眞太郎氏を悼む

多年同じ會社に在りながら、私は梅田さんを知る事極めて淺いものである。しかし、その長からぬ生涯の最後の幾日かを、共に臺灣一周の旅に費し、同じ宿に起居し、將來を語合つた因縁を持つ。明治四十一年入社以來梅田さんは多年京都支店に勤務し、外勤として內勤として副長として、京都市在住の契約者に親しみ親しまれ、明治生命京都支店は「梅田さんの會社」で通つた。昭和七年一月臺北出張所長として赴任し、今日に及んだのであるが、今回初渡臺の私といつしよに全島巡回中、何處かでマラリヤに罹り、それを知らずに旅をつゞけ、私の歸京後發病し、急速に容態革つて死去せられたものと思はれる。

旅行中、梅田さんが度々繰返した念願は、出張所の建築である。白蟻の巣となつた現在の狹隘な店では、思ふやうに仕事も出來ないから、豫て手に入れてある敷地に新築し、心持よく働き度

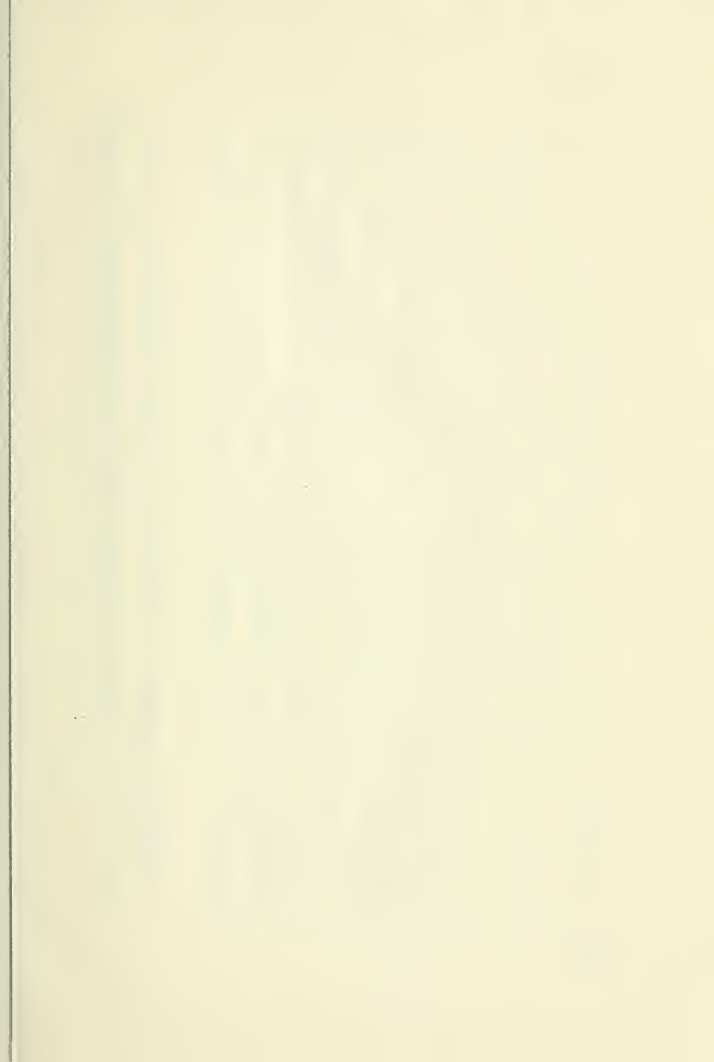
いといふのである。その建築問題は、七月十日の重役會で決定し、十一日には早くも設計見積を命ずる運びとなつた。私は梅田さんを喜ばせる爲に電報を打つたが、後でわかつてみると梅田さんは既に入院し、この喜びを知ることも出來ないやうな容態になつて居たのである。十二日の晩、或會合に出席し、八時過に歸宅すると、机の上に電報がのつて居る。梅田さんが病氣で入院し容態がよくないといふ意味のものだつた。私は吃驚して數度讀直した。つい此間いつしよに旅行し、離臺の日には基隆の岸壁で勢よく帽子を振つて居た人に、さういふ事があらうとは思はれなかつた。若もあの旅行が強行に過ぎ、何處かに疾患を引起したのか、さうとすれば申譯無い事である。自分の頑健にまかせて、他人の苦痛を慮らなかつた慚愧に堪へない。私はその晩安眠出來なかつた。曉方、何時頃か、はげしく門扉を叩き、第二の電報が配達された。昨夜九時半死去とある。私は呆然として二の電報を手に持つてゐた。二通とも病名が記して無いので、さつぱり解らないが、何か自分に責任の全部があるやうな氣がして、心が晴れない。會社に出てみると、同じ知らせを受けた人はあるが、矢張事態は明かでない。或人の如きは、梅田氏死去殘念といふ電文を受取つて、蕃人にでも殺されたのではないかと想像したさうである。正午近く會社宛の電報で、はじめて惡性マラリヤの爲に命を奪はれた事がわかつた。マラリヤは今や臺灣から一掃されたとさ

へいはれ、たとへ擢つても命を失ふ程の事は稀にしかないと聞いてゐたのに、その稀な事に出逢ふとは、何といふ不運であらう。私は各地で、襟首や手足を蚊に刺された事を思ひ出した。自分も保菌者で無いとは云はれない。會社の人達も、大丈夫かと心配してくれたが、その時の私の感情は、自分も同じ蚊に刺されてゐた方が、寧ろ氣が樂だとさへ思つたのである。

出張所からの詳報によると、七日氣分すぐれず、腹具合惡き事を告げたが常の如く執務し、夜は基隆事務所三十萬突破祝賀會に列席、宴半にして苦痛を感じたれど、翌八日の日曜にも出社した程で、至極輕いものと思つて居たらしい。九日に至り發熱の爲缺勤し、十日は社醫重松英雄氏診査の結果、常聘醫に血液檢査を勸め、十一日に至りはじめてマラリヤと決定したが、それでも尙重大事にならうとは考へず、常聘醫も亦日ならず全快するものと認めてゐた。しかし刻々苦痛が增すばかりなので、醫師の再診を求めたところ、黃疸を併發してゐるので、俄に臺北醫院に入院の事となり、十二日には早くも手の施しやうもない容態に陷つて、あわたゞしく永眠されたのである。

梅田さんは二十六年勤續され、齡五十にして五人の子女をのこして死なれた。溫厚篤實、殊に人情にあつく、臺北出張所員は密かに人情所長と呼んでゐた。私の渡臺が、かゝる大なる犧牲を

もたらしたのは、何とも申しやうのない事で、心苦しい次第である。

——「社報」昭和九年七月號

後記

本卷所收の諸篇は、作者が筆名に據つて草した文藝作品ではない。大正五年入社以來、昭和十五年文字通りにその社屋で生を終へるまで、明治生命保險株式會社の事業に獻身しつつある間に、社員乃至重役として起稿せるものの輯錄に屬する。いはば「會社もの」であり「阿部章藏もの」である。

その大半を占める「出張日記」は、所謂外野第一線の視察と督勵のために、各地を巡歷した旅行の日錄であるが、もともと單なる紀行として書かれたものでなく、社員を鼓舞鞭撻する意圖の下に筆にされたこと疑ひない。しかも人間阿部章藏の行實を端的に傳へると共に、その社會批評に自然描寫にまた詩情の豐さに、文中、水上瀧太郎の存在は儼として蔽ふべくもないのである。

由來作者の執筆態度は愼重を極め、まづ下書きを書いて之を淨書するのがつねだつたが、この「出張日記」にあつては歸社怱々の事務室で、メモを賴りに三十字詰十四行の會社用原稿紙に、すべて忙しく走り書きして、「社報」に寄せたものである。かかる例外的な倉卒の落筆が、簡明にして流露感の深い旅日記の堆積を成し、ひろく內地外地の風物生活を描いてゐる點でも、本全集中異色ある收穫となつてゐる。

「出張日記」なる題名は、昭和八年取締役として伊東、京都に出張旅行をした時に始まる。爾後常務となり外野總帥となつて旅行の度多きを加へたが、遂に歿後遺稿として發表された事務としての北陸の旅に到るまで、すべてこの題名を用ひられ、一々の旅行先を表記することをしなかつた。本巻では讀者の便宜のために、毎篇假りに小題名を附することにし、「伊東―京都」の如き卽ち之に依るものだが、原則として最初と最後の宿泊地を示してゐる。

巻頭の「長岡行」は總務主事時代にこの原題で書かれたものだが、後年の「東京市內事務所廻り」と共に、性質を同じくする故を以て「出張日記」の一部と認め、この題名下に收めたわけである。

幸ひにして殆んど全部の原稿が保存されてゐるので、就いて校訂を果すことが出來たが、約十年に亙つての執筆とて、强ひて全般的に措字假名遣ひの統一を策せず、一篇を一作品と見做して事に當り、地名の讀み方は「帝國市町村總覽」に質した。――別に、昭和九年最初の渡臺日記は、作者の些少な削除を經て、大阪商船發行の「海」同年十月號に轉載された。

明治生命の「社報」は、もと社內告示の通達機關たるに過ぎない刷物だつたが、大正十三年度から全國代理店へも配布する必要から、內容の改善を計つて讀物や保險教育を盛ることになつたので、總務主事助役だつた作者は「約款の說明」「外交一家言」を執筆提供した。共に無署名ながら、それぞれ七回二十一回の連續讀物で、前者は平易な說話の裡に保險契約の眞諦を知らしめようとしたものである。――但しそれらの條項は當

時のものであり、現行約款が之と異るところあるは一言附記する必要があらう。

後者は亞米利加のウキリアム・アレキサンダア William Alexander (1849—1937)著 "Fables for Life Underwriters" の全譯であるが、「基く」と斷つたやうに自由な敍述に終始してゐる。作者の飜譯は珍らしい上に、全卷飜譯はこれだけである。原著者は紐育エクイタブル生命の總務部長で、保險關係の著書も多數ある由だが、本書は外務員のための指導書とはいへ、技術的とよりは處世修養上の教本とも目し得よう。

右二篇は「社報」に依つて校訂した。

「福澤先生と保險」は、母校の後進のために寄せた一文だが、原稿には署名の上に自ら「明治生命保險株式會社員」と冠してゐる。初頭「發起人の一人は左の通り記述」とあるは、同社創立者たる父君阿部泰藏氏の手記を指すものである。

「我國最初の生命保險會社『明治生命保險株式會社』に就て」——所載誌には明治生命保險株式會社創起見込書の全文が揭げられてゐるが、長文且作者の筆ならぬ理由で省略を敢てした。

以上の外に、社命に依り起草されたものとして、無署名の單行小册子「明治生命四十年史」を數へ得るが、これは作者の草稿に多くの訂正加筆が施され、文體をも變へて上梓されたことが判明したので之が收錄を見合せた。また「社報」には從來數四の講演要旨が揭載されてゐるが、それらは速記に依らざる覺書きであり、作者の本意と口吻を十全に傳へ得ないものと認め、これまた一切採らなかつたのである。

最後に本卷の編纂に當つては、資料の貸與に有力な助言に、明治生命の當事者各位の好意に負ふところ頗る多い。特に記して茲に謝意を表するものである。

卷中のルビは全部編者の附したものであり、校正は荻野忠治郎君の協力を得た。（水木京太）

東京府規格外許可　已資紙規第一五四號

昭和十六年十月二十六日印刷
昭和十六年十月三十一日發行

水上瀧太郎全集十二卷

會費參圓

著者　阿部章藏

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所　岩波書店
電話九段(33)一八七番
振替口座東京七四四一六番
會員番號一〇二〇三七番

配給元　東京市神田區淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

精興社印刷　長澤製本

落丁・亂丁等不完全な品がありましたら直接御申出願ひます。お取替致します。